

大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書
(2008)

2010. 3

大阪市教育委員会
(財)大阪市文化財協会

例 言

1. 本報告書は平成20年度の大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたものである
2. これらの調査は大阪市教育委員会の指導のもと、(財)大阪市文化財協会が、各原因者より委託を受けて実施したものである。
3. 本報告書の執筆は(財)大阪市文化財協会 南 秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会文化財保護担当において行った。

目次

I 北区

茶屋町遺跡発掘調査 (CH08-1) 報告書	3
天神橋遺跡発掘調査 (TJ08-1) 報告書	11
天満1丁目所在遺跡発掘調査 (TW08-1) 報告書	21

II 中央区

難波宮跡・大坂城跡発掘調査 (NW08-2) 報告書	33
大坂城下町跡発掘調査 (OJ07-11) 報告書	57
大坂城下町跡発掘調査 (OJ08-1) 報告書	85
大坂城下町跡B地点発掘調査 (OJ08-2) 報告書	95
大坂城下町跡発掘調査 (OJ08-3) 報告書	105
大坂城下町跡発掘調査 (OJ08-4) 報告書	115
大坂城下町跡発掘調査 (OJ08-5) 報告書	133
大坂城下町跡発掘調査 (OJ08-6) 報告書	141
大坂城跡発掘調査 (OS08-1) 報告書	153
大坂城跡発掘調査 (OS08-3) 報告書	173
大坂城跡発掘調査 (OS08-5) 報告書	183
大坂城跡発掘調査 (OS08-6) 報告書	199
大坂城跡発掘調査 (OS08-8) 報告書	211
大坂城跡発掘調査 (OS08-10) 報告書	219
大坂城跡発掘調査 (OS08-11) 報告書	227
大坂城跡発掘調査 (OS08-12) 報告書	235
大坂城跡発掘調査 (OS08-13) 報告書	249
大坂城跡発掘調査 (OS08-14) 報告書	257
西心齋橋1丁目所在遺跡発掘調査 (WS08-1) 報告書	269

III 西区

西本町1丁目所在遺跡B地点発掘調査 (UT08-1) 報告書	279
--------------------------------------	-----

IV 天王寺区

北河堀町所在遺跡発掘調査 (KC08-1) 報告書	293
大坂城跡発掘調査 (OS08-2) 報告書	299
細工谷遺跡発掘調査 (SD08-1) 報告書	309
細工谷遺跡発掘調査 (SD08-2) 報告書	321
細工谷遺跡発掘調査 (SD08-3) 報告書	331
上本町遺跡発掘調査 (UH08-4) 報告書	343
上本町遺跡発掘調査 (UH08-7) 報告書	357
上本町遺跡発掘調査 (UH08-8) 報告書	365
上本町遺跡発掘調査 (UH08-10) 報告書	371
上本町遺跡発掘調査 (UH08-11) 報告書	379

V 浪速区

下寺遺跡発掘調査 (RJ08-3) 報告書	391
下寺遺跡発掘調査 (RJ08-4) 報告書	415
下寺遺跡発掘調査 (RJ08-5) 報告書	429
敷津遺跡発掘調査 (SX08-1) 報告書	449
敷津遺跡発掘調査 (SX08-2) 報告書	455

VI 東淀川区

三宝寺跡伝承地発掘調査 (SP08-2) 報告書	463
--------------------------	-----

VII 阿倍野区

阿倍寺跡発掘調査 (AB08-1) 報告書	473
阿倍野筋北遺跡発掘調査 (AS08-2) 報告書	481
阿倍野筋南遺跡発掘調査 (AS08-3) 報告書	487
美章園遺跡発掘調査 (BI08-1) 報告書	493
桃ヶ池遺跡発掘調査 (MG08-1) 報告書	501
昭和町遺跡発掘調査 (SW08-1) 報告書	507

VIII 住之江区

西住之江遺跡発掘調査 (WE08-1) 報告書	519
-------------------------	-----

IX 住吉区

我孫子城跡伝承地発掘調査 (AJ08-1) 報告書	529
山之内遺跡発掘調査 (YM08-1) 報告書	537
山之内遺跡発掘調査 (YM08-5) 報告書	545

X 東住吉区

今林遺跡発掘調査 (IM08-1) 報告書	553
-----------------------	-----

XI 平野区

長原遺跡発掘調査 (NG08-5) 報告書	561
-----------------------	-----

I 北 区

北区茶屋町における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(CH08-1)報告書

調査個所 大阪市北区茶屋町200の一部・203・204
調査面積 224㎡
調査期間 平成20年12月15日～平成21年1月7日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、岡村勝行

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は淀川によって形成された三角州上に位置し、半径1 km以内には安曇寺推定地や豊崎遺跡、本庄東遺跡が存在する(図1)。特に安曇寺推定地で行った発掘調査では中世の遺構・遺物が多数見つかかり、重要な成果が得られた[大阪市文化財協会2005]。

当地で大阪市教育委員会が平成20年11月14日に実施した試掘調査で、現地地表下約0.6~1.0mで中世と考えられる遺物包含層が検出された。このため、地層の状況や遺構・遺物の年代および分布を明らかにし、地域の歴史の変遷を復元する基礎資料を得るために本調査を実施することとなった。調査は平成20年12月15日から開始した。東に工事用車両の通路を確保するため、調査区は幅12mと20m、長さ14mの台形に設定した(図2)。重機により、地表下約0.7mまでを全面的に掘削し、以下を基本的に人力によって掘進め、随時、図面・写真による記録に努めた。平成21年1月5日、下位層の状況を調べるために、調査区南部に1.6m×3.8mのトレンチを設定し、重機によってTP-2.8mまで掘削した。厚い砂層の堆積状況の記録後、再度、重機により、TP-3.2mまで掘削したところ、多数の貝化石を含む海成泥層が検出された。トレンチ壁面の崩壊が著しかったために、トレンチ内で調査をせず、この泥層の一部を重機ですくい、貝化石の収集に努めた。1月7日に埋戻し作業、資材撤収を含むすべての現地作業を終了した。後日、貝化石ならびに同時に出土した植物葉化石の年代測定、泥層の花粉・珪藻分析を株式会社パレオ・ラボに依頼し、分析結果を得た。

以下、本報告に掲載した図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、 $TP \pm \text{〇}m$ と表記した。本文で用いた示北記号は図1・2が座標北、その他は磁北である。



図1 調査地の位置



図2 調査区配置図

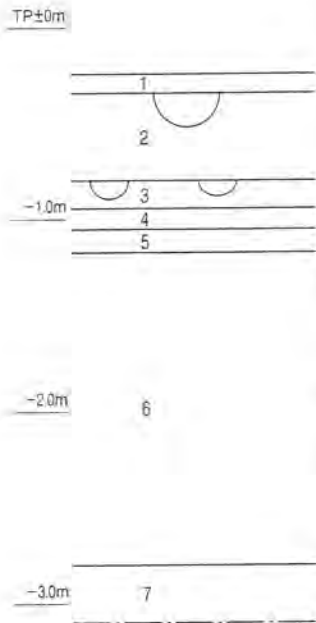


図3 地層と遺構の関係図

2) 調査の結果

i) 層序(図3・5)

現地表以下、TP-3.2mまでの地層を第1～7層に区分した。

第1層：現代の碎石層で、層厚は10cmである。

第2層：近代の盛土層である。層厚は50～70cmである。上面で近代の土壌、小河川が検出された。

第3層：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルトからなる作土層である。層厚は約15cmで、古墳～中世の遺物を含み、上面で近世・近代の遺構が検出された。

第4層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂質シルトの作土層である。層厚は約10cmで、古墳～中世の遺物を含む。

第5層：にぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒砂質シルトで、ラミナが明瞭な水成層である。層厚5～20cmで、遺物は出土していない。

第6層：調査区西部では灰オリーブ色(5Y4/2)シルトで、東方に向って、にぶい黄褐色(10YR4/3)礫質極粗粒砂へと移行する、ラミナが明瞭な水成層である。層厚160cmであり、遺物は出土していない。この地層と第7層の観察については、後に詳述する。

第7層：黒オリーブ色(7.5Y3/2)シルト質粗粒砂の海成泥層で、ハマグリ、シオフキの貝化石を含む。人工遺物は出土していない。層厚40cm以上である。

ii) 遺構と遺物

調査区南部トレンチの第6・7層の調査、第3・4層(中世)の遺構・遺物、第3層上面(近世)の遺構と遺物、の3つに分けて報告する。

a. 第6・7層の調査(図4)

先述したように、TP-3.2～-2.8mでシルト質粗粒砂(第7層)、-2.8mより上位で礫質砂層(第6層)が見られた。前者は水平層理をなす泥質砂で、ハマグリ(*Meretrix lusoria*)、シオフキ(*Macrta veneriformis*)を多産する。これらは合殻直立姿勢(両殻が合わさった状態)で産出する原地性の貝化石であり、本層は海成層と判断される。本層産出の貝化石、植物葉化石の年代測定結果(表1)のうち、植物葉化石が示す39calBC-73calAD(95.4%)が最も正確な数値を表し、おおむね本層の年代は紀元前後の時期と考えられる。また、珪藻化石の分析によれば、検出された珪藻には海水種・汽水種・淡水種が認められ、当該地は湖沼あるいは内湾から干潟にかけての環境と推定される。花粉分析では草本植物が貧弱である一方、ガマ属やミズアオイ属など水生植物が確認されており、湿地環境の景観が復元される。

泥質砂を覆う礫質粗粒砂層(第6層)は、下部がブラナー型斜交層理をなす粗粒～細粒砂で、その上部は、トラフ型斜交層理をなす細礫質極粗粒～中粒砂が覆い、上方粗粒化を示す流路堆積物である。トラフ型斜交層理の層理面の最大傾斜方向から推測される古流向は東南方向である。この流路は流路内に堆積していた砂層を侵食するような幾度かの大きな流れに見舞われつつも、徐々に東のほうへ移

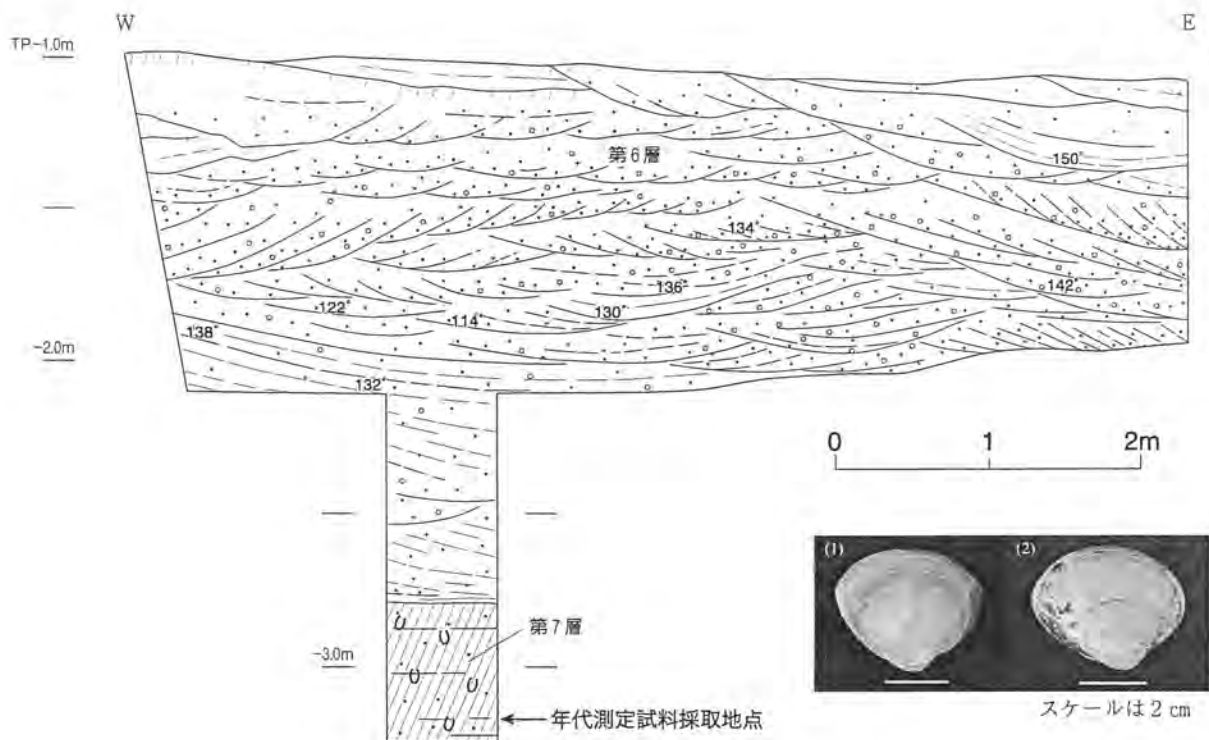


図4 第6・7層堆積状況(北壁地層断面)と出土した貝化石

動している。

以上の堆積層や貝化石の産状、年代値、珪藻・花粉分析から、海成泥層(シルト質粗粒砂)は淀川河口付近の干潟前縁の潮下帯で形成されたものと判断される。その後、洪水によって淀川河口付近には多量の土砂が運ばれ、調査地周辺に淀川の流れ路が形成されたと推測される。調査地の西側には江戸時代に脇街道として整備された中国街道が通じるが、本調査地点で見つかった分流路によってできた高まり(自然堤防)が、後世に街道として整備されたものだろう。当該地の陸化後の最も古い遺物は古墳時代中期(5世紀中頃)の資料であり、この時期以降、人間の本格的な活動が開始されたと推定される。

b. 第3・4層(中世)の遺構と遺物(図6)

第4層、第5層上面では遺構を確認することができなかったが、第3、4層からは古墳時代～中世の遺物が出土している。その中でもっとも新しい遺物は、14～15世紀の瓦質土器羽釜8である。その

表1 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

資料	測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
貝化石 1	PLD-13036 試料 No. : # 1	-0.57 ± 0.12	2356 ± 22	2355 ± 20	Marine04: <u>66BC (68.2%) 20AD</u>	Marine04: <u>116BC (95.4%) 61AD</u>
貝化石 2	PLD-13037 試料 No. : # 2	-0.42 ± 0.20	2340 ± 22	2340 ± 20	Marine04: <u>45BC (68.2%) 39AD</u>	Marine04: <u>92BC (95.4%) 75AD</u>
植物葉	PLD-13038 試料 No. : # 3	-29.07 ± 0.15	1974 ± 22	1975 ± 20	<u>4AD (68.2%) 57AD</u>	<u>39BC (95.4%) 73AD</u>

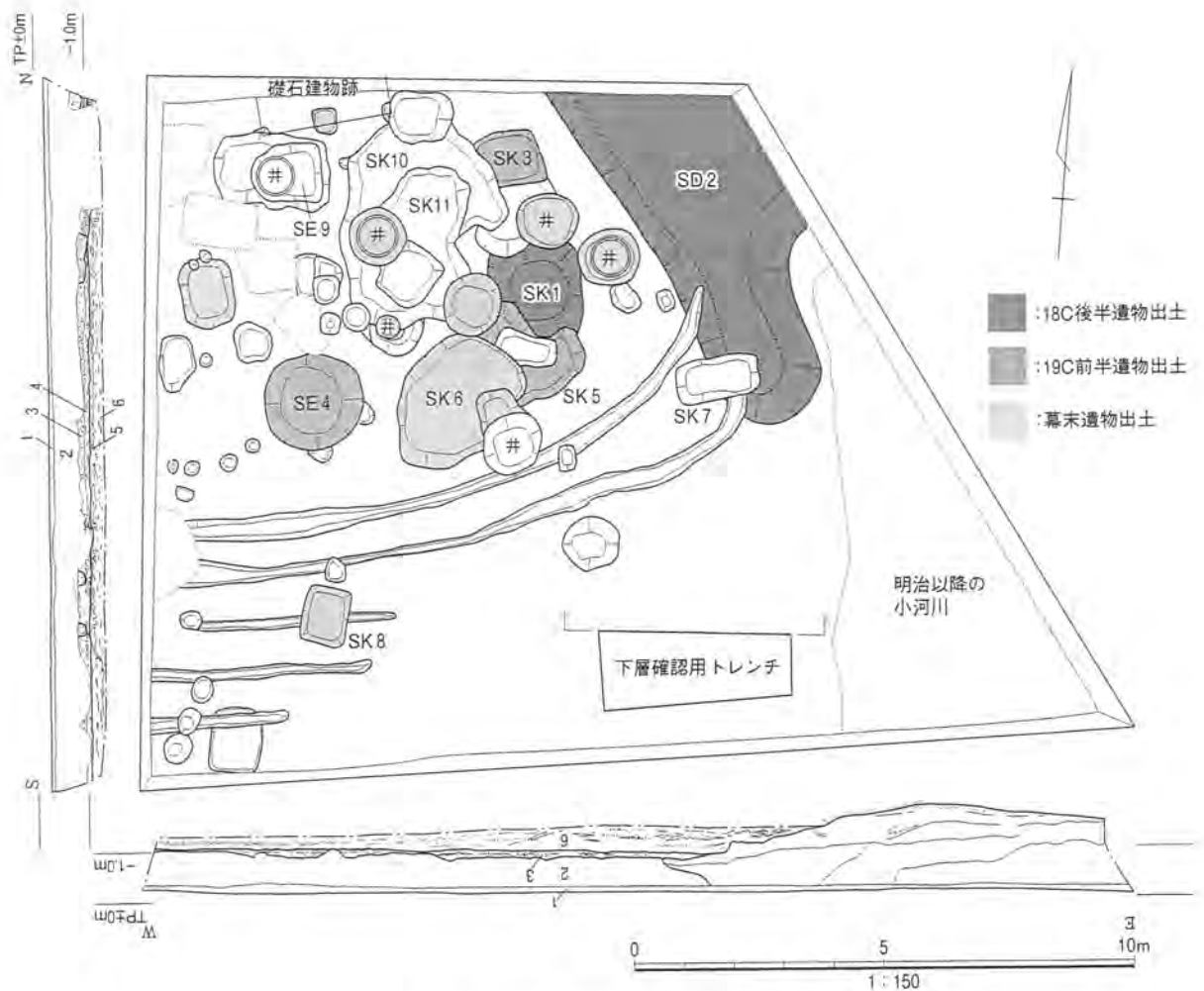


図5 近世遺構平面図・調査区断面図

ほか12世紀代の瓦器も見られ、この期間、当該地は耕作地として利用されたものと考えられる。また、古墳時代中期の須恵器が数点出土しており、近隣にこの時期の集落の存在が想定される。

第3・4層から出土した遺物総数は約100点である。このうち、おもな遺物を解説する。1は須恵器杯蓋、2は杯身である。ともに体部中位まで丁寧な回転ヘラケズリを施し、全体にシャープな作りである。TK23型式に属し、5世紀中頃に位置づけられる。3～6は瓦器碗である。いずれも摩滅が著しく、細部の調整を観察できない。3・4は高台部で、前者は内面底部にヘラミガキ、後者は格子状見込みが確認できる。およそ12世紀後半～13世紀初頭に属する。5・6は和泉型の口縁部である。前者は内面に粗いヘラミガキが施され、後者は器壁が薄い。ともに浅い器形であるが、5は13世紀前半、6は13世紀後半頃のものだろう。7は東播系片口鉢の口縁部である。8は瓦質土器羽釜である。摩滅のため、調整は不明であるが、形態から14～15世紀のものと思われる。

c. 第3層上面(近世)の遺構と遺物(図5・6)

江戸時代の遺構が約50基検出された。遺構には、柱穴・井戸・土壇・溝・小穴などがあり、出土遺物総数はコンテナ箱約20箱に及ぶ。もっとも古い遺物は18世紀後半頃の肥前磁器であるが、出土量では幕末頃の資料がもっとも多い。遺構の分布は調査区北半分に集中しており、中央部を東西に緩やかな弧を描く溝を境に南側では疎らとなる。礎石建物跡が調査区北端で検出されていることや、井戸や



図6 出土遺物実測図

第4層(1~8)、SK1(9・10)、SK3(11)、SE4(12)、SK5(13)、SK6(14)、SK7(15)、SK8(16)、SE9(17)

SK10・11など生活雑器を中心とした不用物の廃棄土壌が集中することなどから、当時の居住空間は北側に広がっているものと推定される。

おもな遺物を解説する。9~12は肥前磁器である。9は青磁染付で、口縁内面に四方禰文を巡らし、底部に五弁花を描く。10はそば猪口である。ともに18世紀後半に属する。11は蓋で、幅広のつまみを有し、外面を唐草文で飾る。18世紀末~19世紀に属する。12は御神酒徳利で、外面に竹文様を配する。13は瀬戸美濃磁器碗で、口縁端部外面に一条、体部下端に三条の圈線を巡らす。12、13は19世紀前半

に属する。14～16は関西系陶器である。14は急須の蓋である。外面は灰釉で、白泥による格子と雲の文様を施す。15は注口の付いた片手鍋で、ほぼ完形品である。露胎である体部下半を除き、透明釉を施す。体部下半に煤が付着する。16は台付灯明受皿である。体部外面は灰釉を施し、そのほかは露胎である。以上は幕末期に属する。17は急須のミニチュア土製品である。外面は型押しで凹凸を表現する。底部は糸切り痕が明瞭である

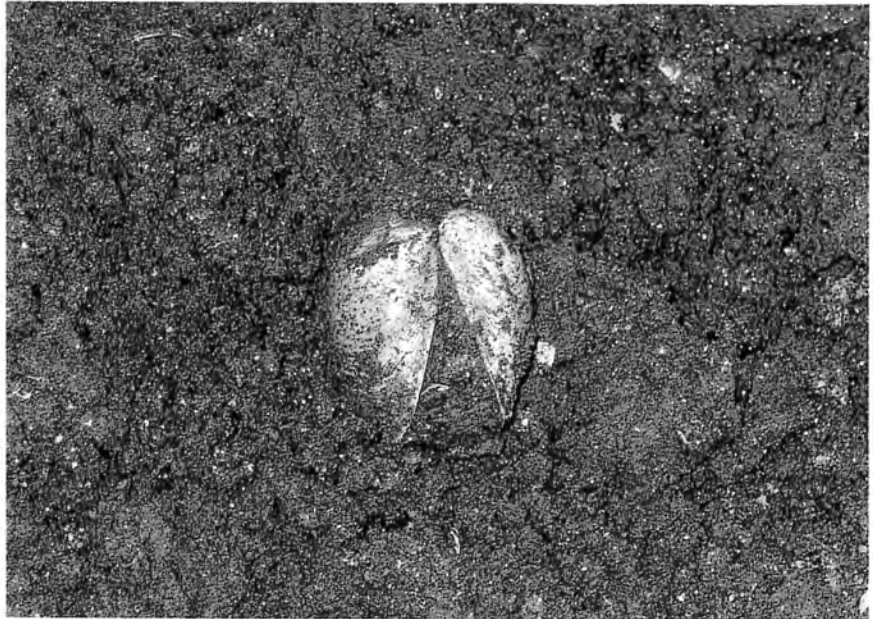
3)まとめ

茶屋町での発掘調査は今回が初めてであり、これまでこの地の考古学情報はほとんど皆無であった。今回の調査により、この地域の土地形成・景観の変遷、古墳時代に遡る人間活動、中世の耕作活動、そして街の形成・発展の概要が明らかになった。発掘データと文献資料の照合や、古墳時代・中世の集落の位置、実態など、まだまだ解明すべき課題も少なくないが、この地の歴史の解明とともに、広く大阪平野の形成に関わる貴重な情報を得た。

引用文献

大阪市文化財協会2005、『太融寺による建設工事に伴う安雲寺跡推定地発掘調査(AZ05-1)報告書』

第7層貝化石出土状況



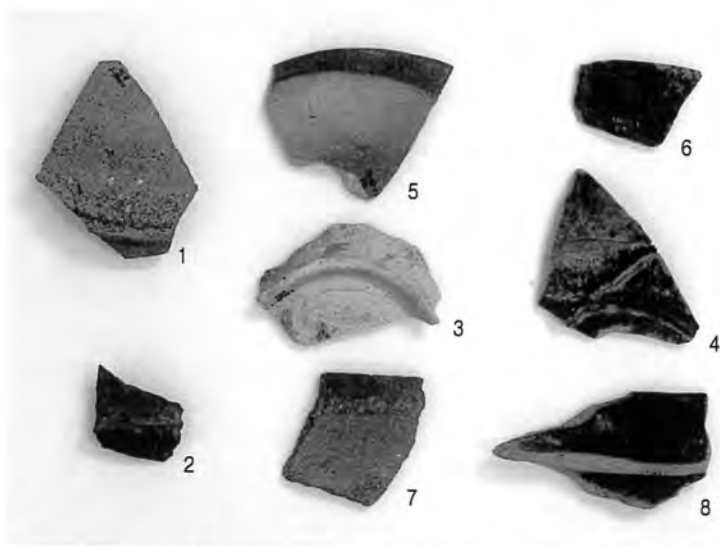
第6層堆積状況
(南東から)



第5層上面の状況
(南から)



古墳時代・中世の
出土遺物(南から)



SK 1 断面(北西から)



第3層上面(近世)
遺構検出状況
(南から)



天神橋遺跡発掘調査(TJ08-1)報告書

調査個所 大阪市北区天神西町13-1・9-3
調査面積 50㎡
調査期間 平成20年7月24日～7月31日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、市川 創

1) 調査に至る経緯と経過

本調査地は天神橋遺跡の西部に位置し、南には天神橋、東には南北のメインストリートのひとつである天神橋筋-松屋町筋が通る(図1)。天神橋筋遺跡は、古代には東大寺新羅江荘あるいは安曇江荘、中世では渡辺津といった文献史学からその存在が想定される拠点施設の推定地、あるいは近隣地域である。豊臣期には城下町として整備され、また近世には大阪天満宮の門前町として発展した。こうした賑わいは、例年行われる天神祭などによってその一端を窺うことができる。また各時代における当遺跡の重要性については、これまで文献史学の成果から評価されることが多かったが、発掘調査成果の蓄積、中でも今回の調査地の南側で行われたTJ00-2次調査[大阪市文化財協会2002]を経て、考古学的手法によってもある程度の評価が可能となっている。

今回の調査地では、事前に大阪市教育委員会によって敷地内の試掘調査が行われた。その結果、現地表下約1.8mにおいて中世以前と考えられる遺物包含層・遺構の存在を確認したため、発掘調査を実施することになった(図2)。

調査着手前に事業者側で擁壁工事および現地表面から1.8mまで重機による掘削が行われたのち、2008年7月24日から調査を開始した。掘削はすべて人力によって行い、その間、遺構検出・掘下げ・記録などの作業を適宜行い、調査を進めた。現場での作業については、7月31日に機材類の撤収を含むすべての工程を完了した。

以下、本報告で使用する標高はTP値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中では「TP+○m」と示す。示北記号は図1が座標北、それ以外は磁北である。



図1 調査地位置図

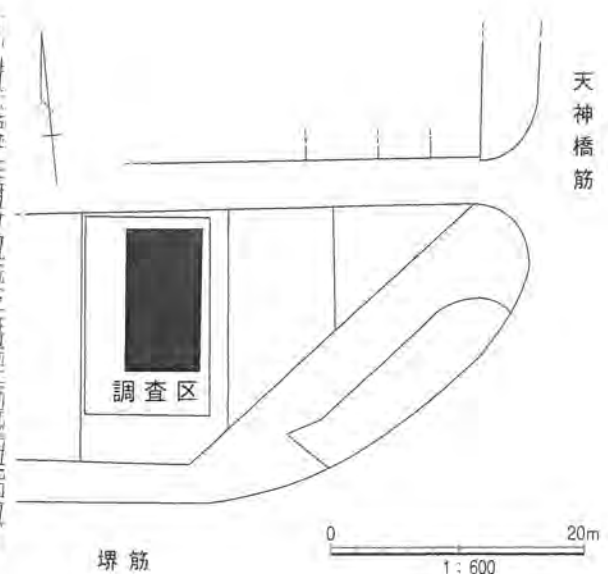


図2 調査区配置図

2) 調査の結果

i) 層序

先述のように、調査着手時にはすでに現地地表下約1.8mまでの地層が除去されていた。そのため以下では、この深度以下で観察可能であった各層の特徴について述べる(図3~6)。



図3 地層と遺構の関係

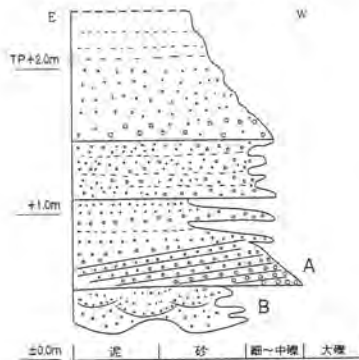


図4 第2B層模式柱状図

第0層：現代の整地層である。調査開始時には部分的に残存し、一部は後述する第2B層をも大きく削平していた。

第1層：近世の整地層である。調査区東北部および南部に厚く分布しており、層厚は最大で100cmあった。東北部では上部(第1A層)と下部(第1B層)に二分でき、このうち第1A層を除去した段階でSE11を検出した。

第2層：自然堆積層(第2B層)およびその上部が土壌化した第2A層に二分できる。

第2A層は層厚20cm以上であり、黒褐色シルト質細粒~中粒砂からなる。本層を除去した段階で井戸SE201・203、土壌SK202などを検出した。ただし本来は本層中より掘込まれた遺構群である。第2A層からは、土師器皿1~4・脚付皿8・杯9、緑釉陶器5・6、東播系須恵器鉢7など7~12世紀の遺物が出土した(図6)。このうち1は内面に粘土紐の接合痕を残し、4はいわゆるコースター形を

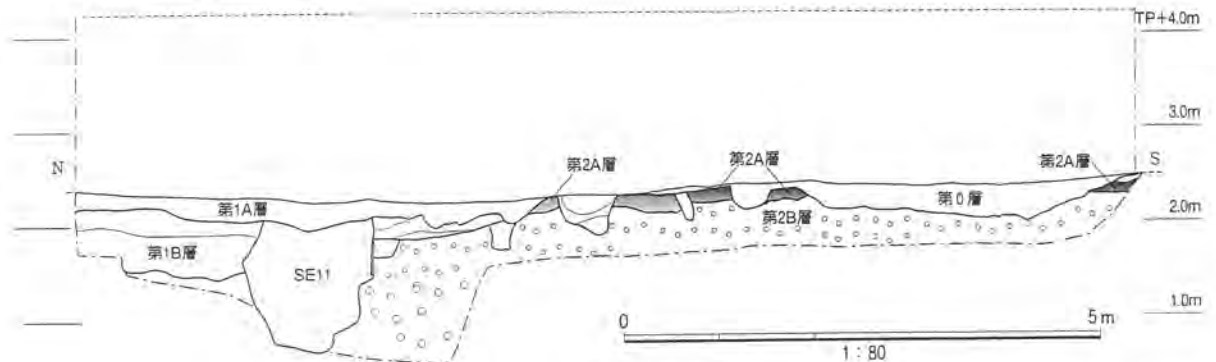


図5 調査区東壁断面

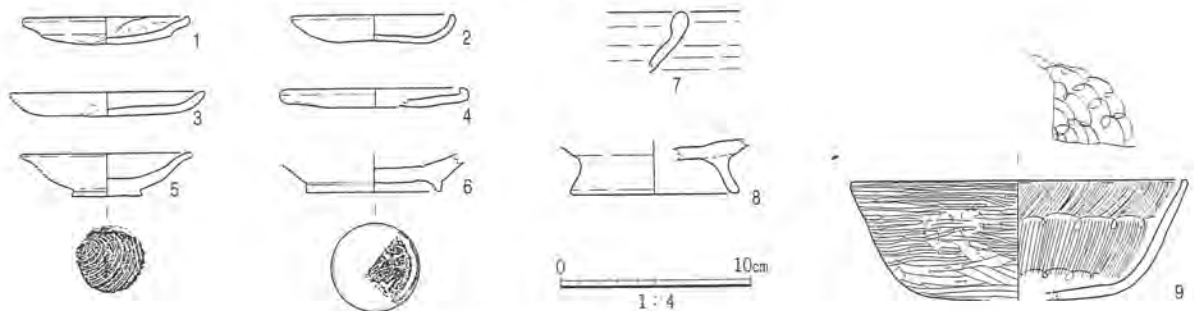


図6 第2A層出土遺物

呈する。緑釉陶器5・6はいずれも外面底部に糸切痕があり、軟質に焼成されている。5は表面が劣化し釉薬がすべて剥落するが、あるいは施釉されない素地の状態で搬入・使用された可能性もある。土師器杯A9は内外面とも非常にいいにミガキ調整を行い、内面には二段の放射状暗文とラセン状暗文を執拗なまでに加える。難波IV期古段階、暦年代では7世紀後葉～末葉に位置づけられる資料である[佐藤隆2000]。

第2B層は層厚240cm以上ある自然堆積層である。上部は擾乱を受け淘汰が悪いが、おおむね上方細粒化する。TP+1.0m以下の水成層は、フォアセットラミナの観察によってほぼ西から東(図4-A)、あるいはトラフ型斜交ラミナの観察によって南東から北西(同B)への流向によって堆積していたことがわかる。

ii) 遺構と遺物

a. 第2B層上面の遺構と遺物(図7～12)

古土壌である第2A層を除去した段階で検出した遺構群である。井戸SE201・203のほか、土壙SK202、溝SD204～206、柱穴あるいは柱穴状遺構SP207～211がある。

このうちSE201は、直径約4.40m、検出面からの深さ1.84mを測る大型の遺構である。また遺構周囲の第2B層は、TP+1.0mまでが細粒～粗粒砂(図8-A)、それ以下は極粗粒砂～中礫(同B)であった。

湧水のため詳細には観察できなかったが、最下部には井筒状の痕跡が認められ、また第2B層が粗粒化する深度まで掘削されていたため、井戸と解釈した。

当遺構からは、土師器皿10～16・甕26、緑釉陶器17～19、須恵器蓋20・甕27・脚付壺28、土錘21、黒色土器22・23、瓦器24・25、平瓦29、金属製品30が

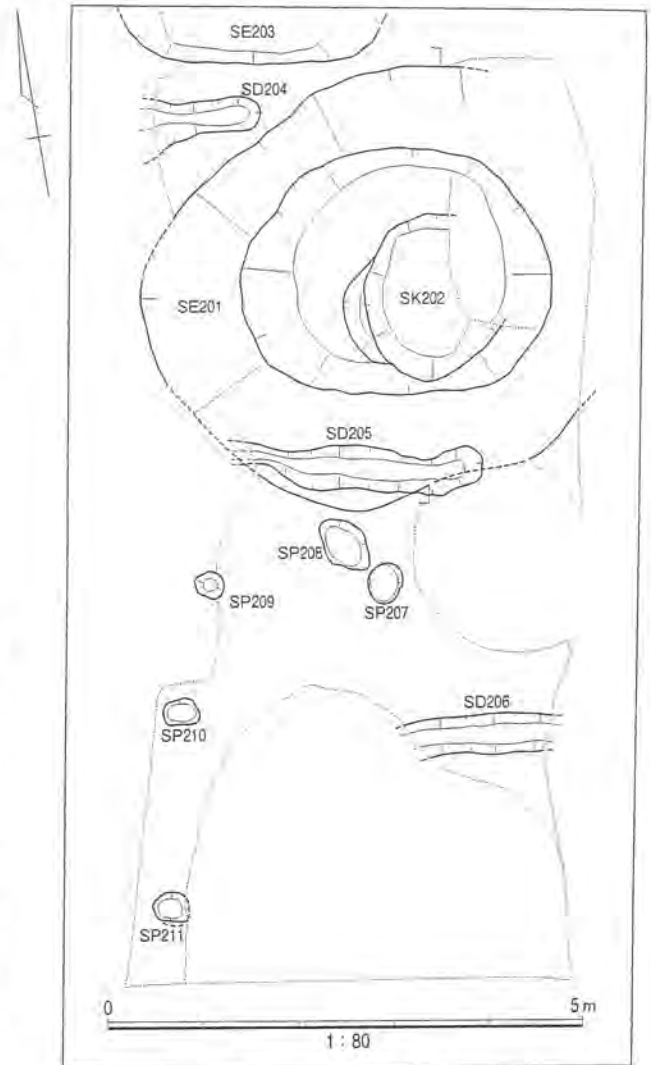
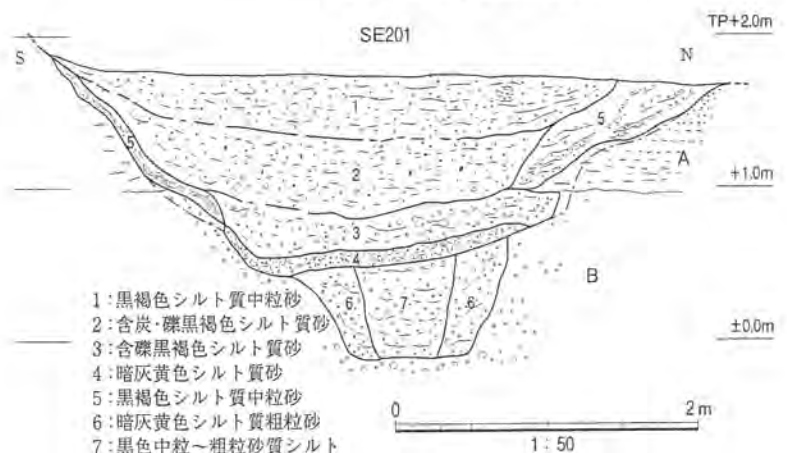


図7 第3層上面の遺構



- 1: 黒褐色シルト質中粒砂
- 2: 含炭・礫黒褐色シルト質砂
- 3: 含礫黒褐色シルト質砂
- 4: 暗灰黄色シルト質砂
- 5: 黒褐色シルト質中粒砂
- 6: 暗灰黄色シルト質粗粒砂
- 7: 黒色中粒～粗粒砂質シルト

図8 SE201断面

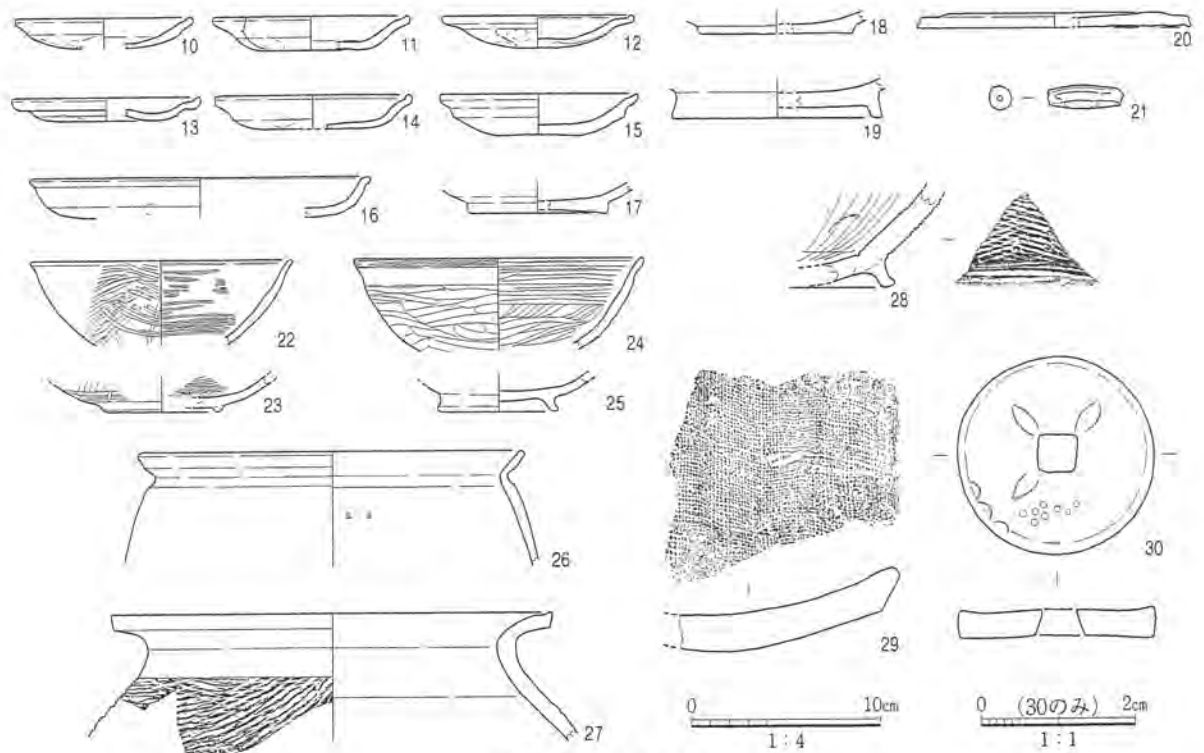
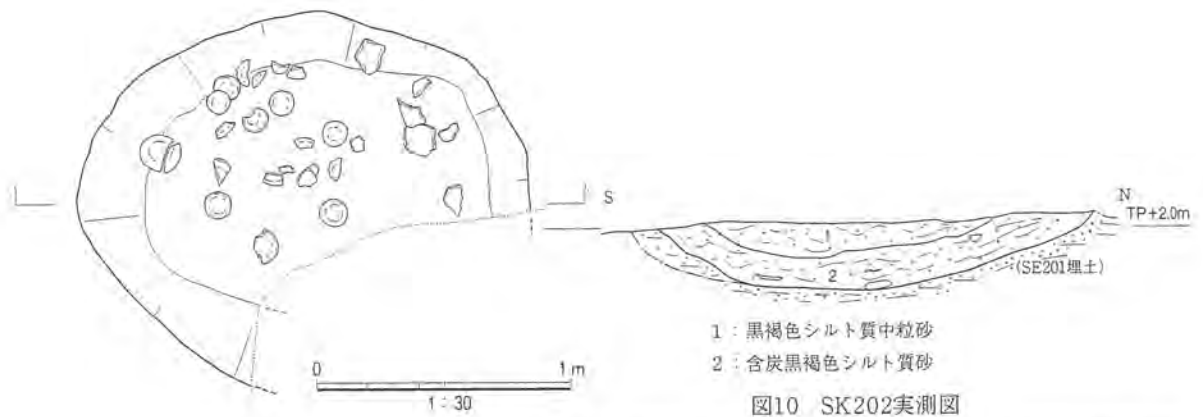


図9 SE201出土遺物

下部(10・11・13・14・16・22・28・29)、上部(12・15・17~21・23~27・30)

出土した(図9)。このうち10・11・13・14・16・22・28・29は下部(図8-6・7層)から出土した資料である。このうち土師器皿10~15は口径10.0cm前後であるが、図化できなかった資料の中には大型のものも含まれている。成形技法を見ると、11・12のように外面に粘土板の接合痕を留めるものが認められた。口縁端部はわずかにつまみ上げ、内面はていねいにナデ調整を行うものの、外面は指頭圧痕があるものが多い。口縁端部にわずかに面をもつ土師器皿16は奈良時代末、あるいは平安時代初頭に位置付けられる。須恵器蓋20もほぼ同じ時期の資料であろう。平底で軟質焼成された緑釉陶器底部17は9世紀前半の資料である。黒色土器22・23、瓦器24・25はいずれもていねいなミガキ調整を施している。ただし24の外面ミガキ調整に明確な分割性は観察できない。28の外面はタタキ整形であり、底部にもタタキ跡を留める。内面には板状の工具による調整痕が認められる。土師器甕26は器壁の劣化が激しいが、内面にはわずかにハケメを認める。内面にはオコゲ、外面にはススが付着している。円形を呈し中央に方孔を穿つ金属製品30は、直径25.8cm、厚さ0.4cm、重さ11.92gを測る。片面には四方に花卉状の線刻、縁部分に波状の線刻を施し、また刺突によって文様を表現している。方孔は断面形状が台形を呈している。これらの遺物は、上部と下部で大きな型式差は認められなかった。16など奈良時代末~平安時代初頭に遡る資料も含みはするが、土師器皿や瓦器の形態からみて11世紀後半に位置づけられる資料である。

SK202は、SE201が埋没した後に掘削された土壌である。長径1.78m、短径1.52mの楕円状を呈し、検出面からの深さは0.28mあった。埋土は大きく二分でき、このうち下層の上面において完形の土師器皿をはじめとする遺物が出土した(図10・写真図版下段)。また、下層からは炭化米などの炭化種子が出土している。



- 1 : 黒褐色シルト質中粒砂
- 2 : 含炭黒褐色シルト質砂

図10 SK202実測図

本遺構からは土師器皿31~43・甕49、瓦器44、いわゆる山茶碗45、中国産白磁46・47、土鍾48が出土した。このうち土師器皿は、口縁部のつまみ上げが行われず、ほとんどの個体が端部を丸くおさめている。口径9.6cmを中心とする小型のもの31~40と、口径15.2cmを中心とする大型もの41~43に二分できる。いずれもナデ調整によって仕上げるが、大型品では外面に顕著な指頭圧痕がある。また、小型品31~34に粘土板の接合痕が認められる一方、大型品42では粘土紐の接合痕が観察できた。瓦器44は非常に緻密なヘラミガキを施し、外面では分割性が認められる。山茶碗45の底部外面は調整が行われずに糸切痕を留め、また判読不能であるが墨書が残存する。土師器甕49はあまり体部が張らず、やや平底である。8mm程度の石英・長石・チャートを含む粗い胎土を使用している。外面ハケ調整、内面は板ナデで調整し、外面にはススが付着している。これらの資料は、土師器皿の形態からみて12世紀前半に位置づけられる。

SE203は、調査区北端で検出した土壇状の遺構である。東西3.60m以上、検出面からの深さは1.22m以上ある。埋土は黒褐

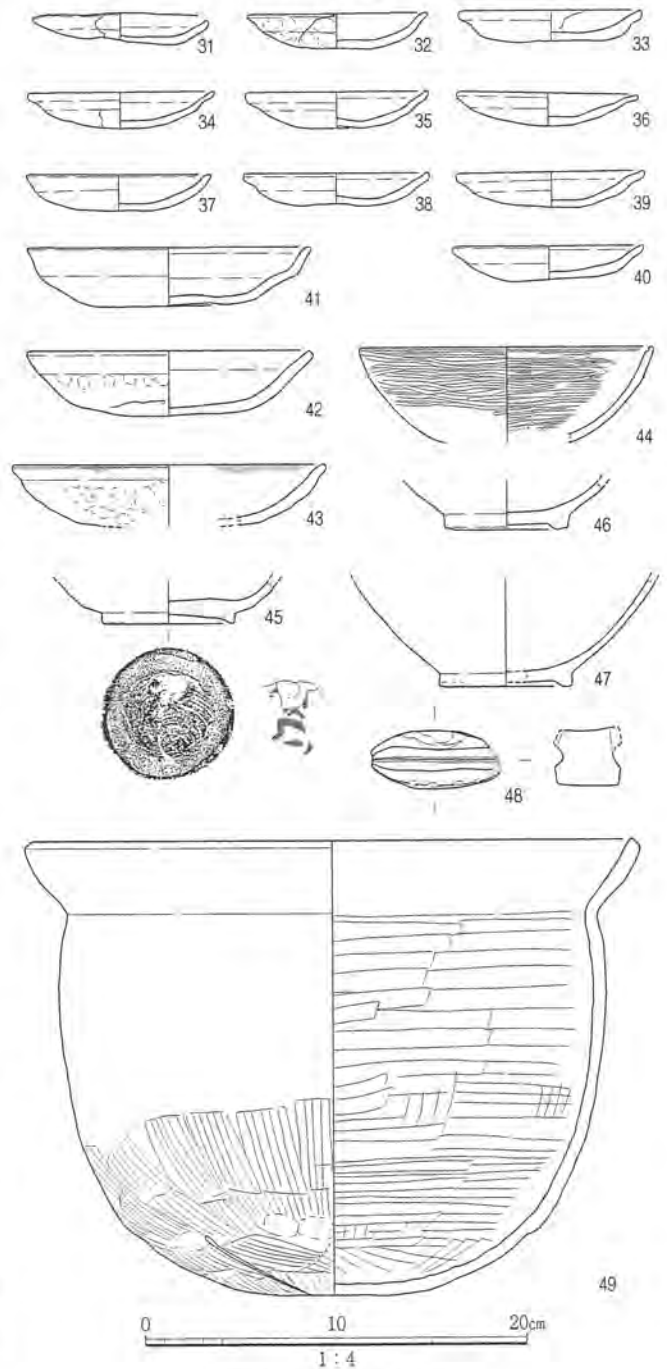


図11 SK202出土遺物

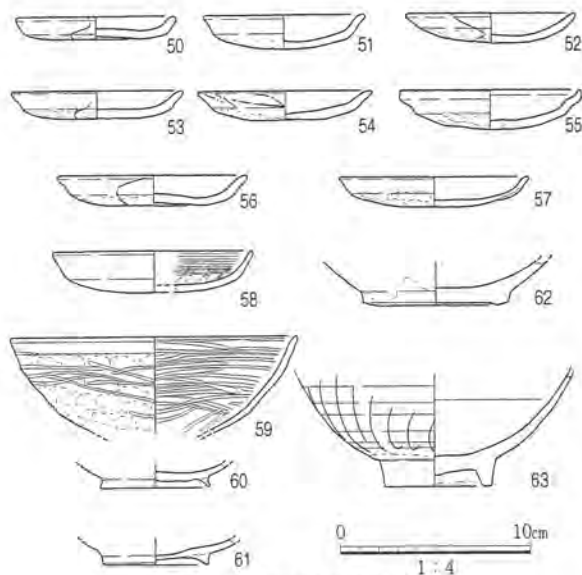


図12 SE203出土遺物

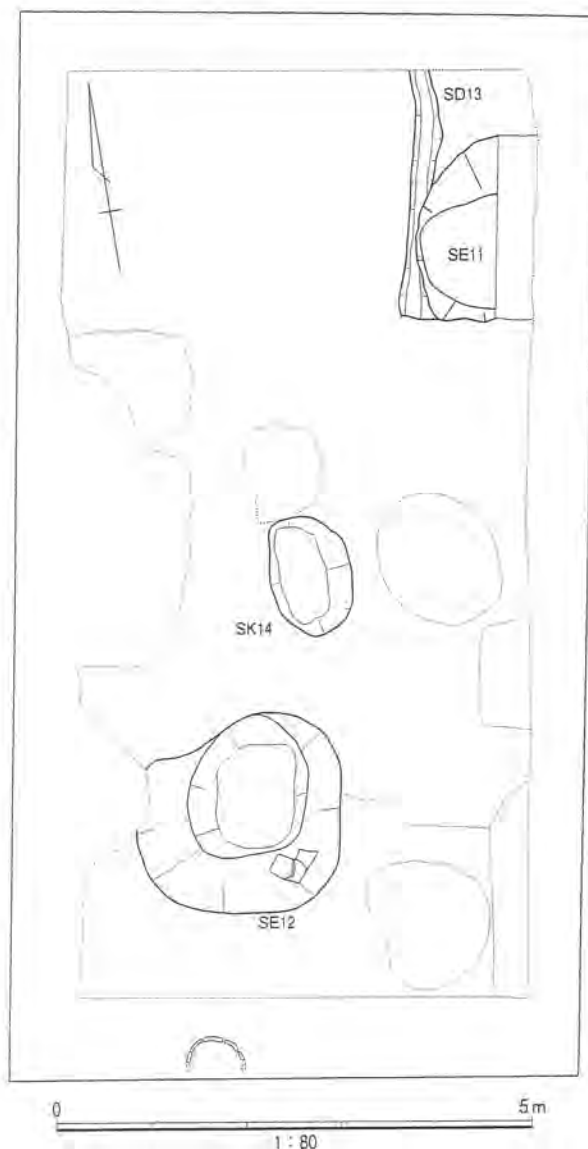


図13 第1層遺構平面図

色シルト質砂であり、SE201上部と類似する。規模の大きさ、また埋土の類似性から、SE201と同様に井戸である可能性が高い。当遺構からは、土師器皿50～57、瓦器皿58・碗59～61、中国産白磁62・63が出土した(図12)。このうち土師器皿は小型品のみで占められ、口径8.0～9.8cmとややばらつきがある。成形技法については、50・52～54・56で板作りの痕跡が認められた。調整はいずれもナデによっている。瓦器皿58は外面にはヘラミガキがほとんど認められない一方、内面には比較的密に施している。瓦器碗59は、内面のヘラミガキは比較的密だが、外面のヘラミガキはまばらとなり、多くの部分で指頭圧痕が残存する。低い高台の中国産白磁62はおそらく玉縁状の口縁部を有するタイプであろう。高台の高い63の外面には針金状の工具で線刻を施している。これらの資料群は土師器皿などの形態からみて12世紀後半頃に位置づけられる。

これらSE201・SK202・SE203の年代は、それぞれ11世紀後半、12世紀前半、12世紀後半に位置づけられるものであった。SK202がSE201井筒部分のほぼ直上に掘削され、また完形の土師器皿が多く投棄されていたことを積極的に評価すれば、SE201の埋没後に井戸鎮めなどのためにSK202が掘削され、その後近接した位置にSE203が掘削された可能性がある。

なお、柱穴および柱穴状遺構SP202～207は建物などの上部構造を復元することはできなかった。埋土からは土師器・須恵器・瓦器の細片が出土している。

b. 第1層の遺構と遺物(図13・14)

重機掘削後に検出した遺構群である。井戸SE11・12のほか、溝SD13、土壌SK14がある。

このうちSE11は調査区北東部で検出した。先述のようにこの部分では第1層を二分するこ

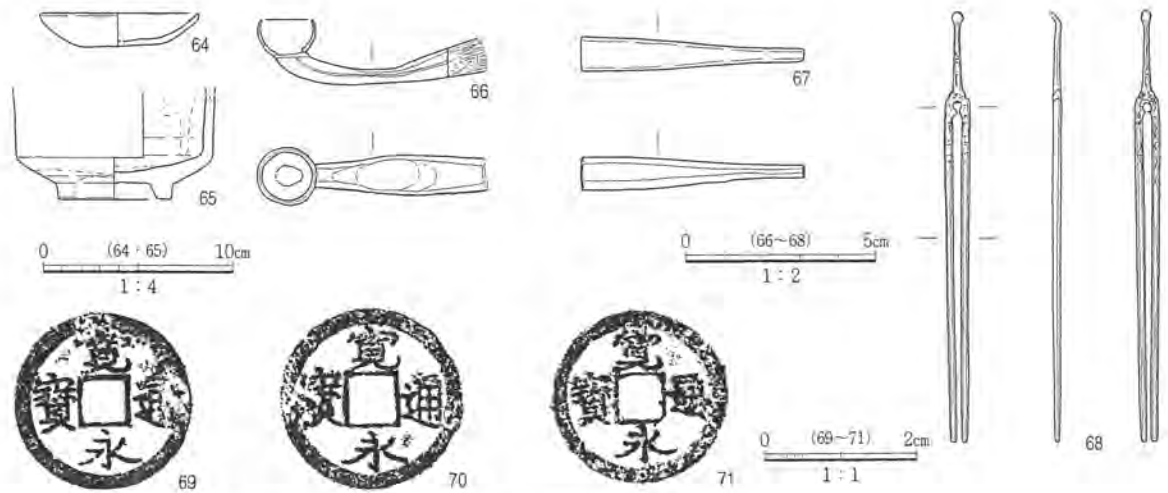


図14 SE11出土遺物

とができ、SE11はこのうち上部の第1A層を除去した段階で検出した遺構である。遺構の平面形はいびつな円形を呈し、直径1.90m、検出面からの深さは1.42mであった。

当遺構からは、土師器皿64、肥前陶胎染付の火入れ65、金属製のキセル66・67、同じく金属製の簪68、寛永通寶69～71などが出土した。また、井戸の埋土には動物遺体も含まれており、その中にはネコと同定できる個体が含まれていた(註1)。土師器皿64は底部に糸切痕を残し、口縁部にはススが付着している。灯明皿として使用されたものであろう。火入れ65は内面を露胎とし、ススが付着している。キセル66の根元部分には木質が残存していた。簪68は先端部が耳かき状の形状で、表面に線刻を施している。火入れ65や共伴している肥前磁器細片の特徴から、18世紀代の遺構であることがわかる。他の遺構についても、おおむね18世紀遺構の年代観が与えられる。

3)まとめ

今回の調査では、これまでに周辺の調査で得られた成果に一定度の知見を加えることができた。

まず古代末から中世にかけては、SE201・SK202・SE203から連続的に型式論的变化を追うことのできる、良好な土器一括資料を得た。今回の調査区の南側に位置するTJ00-2次調査地[大阪市文化財協会2002]、また安曇寺跡推定地AZ05-1次調査[大阪市文化財協会2006]など、大川以北においても近年の調査で該期の良好な資料が増加している。今後も周辺における資料の増加と整理が進むことで、編年の確立が可能となり、より精度の高い調査成果の把握が期待できよう。また京都など該期の他都市の動向と比較することで、「渡辺」というキーワードで語られる当地の姿をより具体的に評価することも可能となろう。

一方で古墳～奈良時代については、今回の調査地ではわずかに遺物が出土したものの、該期の遺構は存在しなかった。周辺での遺構・遺物の粗密を追うことによって、時代ごとに開発が及ぶ範囲、また中心地を推定することが可能となろう。

冒頭にも記述したように、天神橋遺跡は各時代ごとに特色を有する、大阪市内においても重要な遺跡のひとつである。今後とも周辺調査における成果を積み重ねてゆくことが重要であろう。

註

(1)当資料については、京都大学大学院人間・環境学研究科の丸山真史氏にご教示を賜った。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2002、「TJ00-2次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』-1999・2000年度-、pp.181-190

大阪市文化財協会2006、『太融寺による建設工事に伴う安曇寺跡推定地発掘調査(AZ05-1)報告書』

佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：大阪市文化財協会『難波宮址の研究』第十一、pp.253-265

調査区全景
(東北から)



井戸SE201断面
(東南から)



SK202遺物出土状況
(東南から)



桜宮地区埋蔵文化財調査

(天満1丁目所在遺跡発掘調査 TW08-1)報告書

調査個所	大阪市北区天満一丁目地先
調査面積	72㎡
調査期間	平成20年11月10日～11月21日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	文化財研究部次長 南秀雄

1) 調査にいたる経緯と経過

調査地は重要文化財「泉布観」と大川の間で、国道1号線の北にある(図1・2)。現在、近畿地方整備局大阪国道事務所により国道1号線の拡幅工事が進められており、発掘調査は、桜宮橋西詰に計画された河川敷に至る歩道の建設に先立って実施した。

泉布観は、1871(明治4)年に造幣局の応接所として建てられた洋風建築で、正面は東の大川を向き、出入りには船着き場が利用された。泉布観周辺ではこれまで発掘調査はないが、南の造幣局では1994年以来、9次の調査が行なわれている。造幣局や泉布観周辺は、豊臣秀吉が

1585(天正13)年に泉州貝塚から移した本願寺の有力な推定地である。その広さは東西7町、南北5町といわれ、城下町天満建設の核となった。これまでの調査では、本願寺に直接、関係する遺構は発見されていないが、造幣局南の大川縁では、豊臣前期に遡る、石垣を伴う大型の屋敷地3区画の存在がわかっている[大阪市文化財協会1995・1997・2008]。一方、造幣局の北では豊臣期の明確な遺構はまだ見つからない。

調査は東区(東西10m・南北5m)と西区(東西9m・南北2m)に分けて行ない、大阪市教育委員会の試掘調査を基に地表下約30cmの泉布観初期の遺構面より開始した。その後、西区では堤防跡SX901の盛土下部(TP+1.2m)まで全面的に調査し、その下はTP+0.4mまでトレンチにより調査した。東区は掘削深度と安全の関係から、泉布観初期までの調査を行い、当時の遺構面を残して埋戻した。西区で出土した泉布観の塀SA501基礎の煉瓦は、泉布観の管理者であるゆとりとみどり振興局と相談し、現地で131点を計測した後、刻印のある15点を資料として持ち帰り、残りは泉布観北側にシートで覆って保管した。

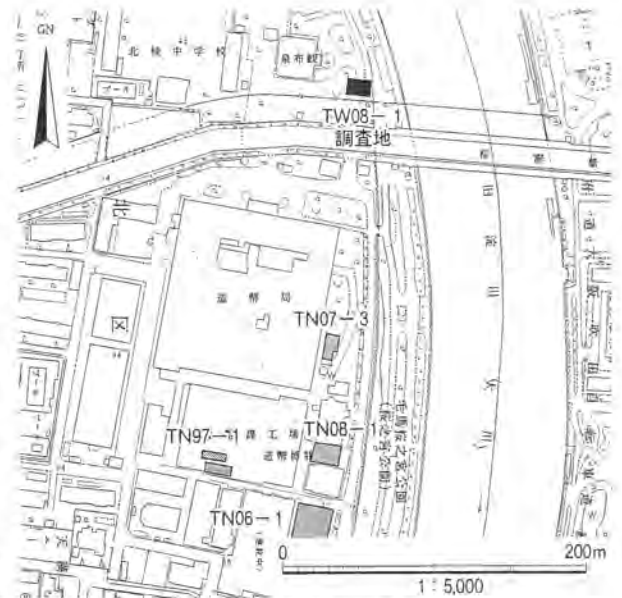


図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

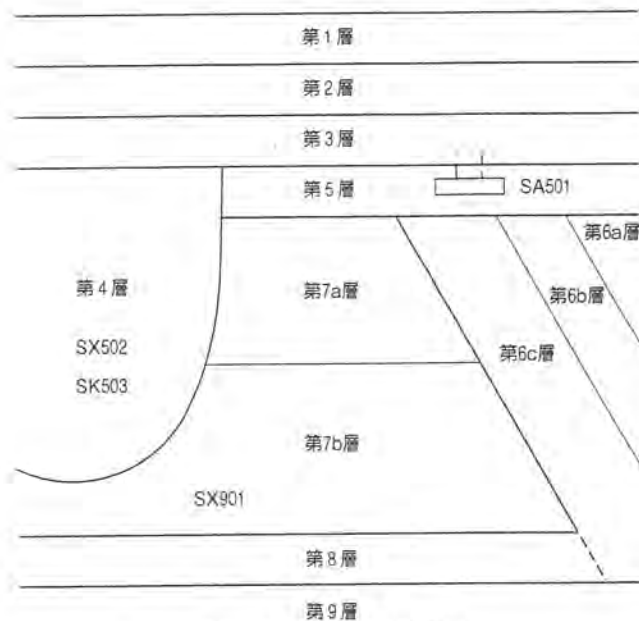


図3 地層と遺構の関係図

報告の座標と方位は世界測地系に基づき、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±〇mと記している。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第1層：いわゆる表土層で層厚は10～25cmである。

第2層：泉布観築造当初の地面を覆って、きれいな砂層である第3層がある。それと表土の間を第2層とした。オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質中粒～粗粒砂層などで層厚は10～35cmである。

第3層：にぶい黄色(2.5Y6/4)粗粒～極粗粒砂層で層厚は10～23cmである。

第4層：東区のSX502・SK503の埋土である。一気に埋められており、浅黄色(2.5Y7/3)中粒砂層で層厚は200cm以上に達するところがある。

第5層：泉布観築造時と推定される整地層である。SA501を境に、東は固いオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト層で最大層厚12cm、西は褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルト層で最大層厚55cmである。この違いは、SA501の東が通路、西が庭であったことに由来する。

以下、堤防跡SX901の西に盛土された徳川期と推定される地層を一括して第6層と呼ぶ。

第6a層：第6a層は西区の南西部のみに分布する。にぶい黄褐色(10YR5/3)粗粒砂質シルト層で最大層厚は80cmである。19世紀代の多量の陶磁器を含む。

第6b層：褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト層で最大層厚は50cmである。図5の6・7の陶磁器が出土した。主に18世紀代の盛土と推定される。

第6c層：褐色(10YR4/5)シルト～極細粒砂層で最大層厚は150cmである。図5の3～5の陶磁器が出土した。主に17世紀代の盛土と推定される。

以下、西区全域と東区西端に分布する、SX901の主体を成す盛土を第7層とした。第7a層と第7b層の層界は非常に明瞭である。第7層からは豊臣後期以降の遺物は出土しておらず、図5の1・2が最新のものである。

第7a層：にぶい黄色(10YR5/4)粘土～シルトの偽礫からなる地層で、極粗粒砂が混る。最大層厚は240cmである。西へ下がる盛土の単位が見える。

第7b層：にぶい黄色(2.5Y4/4)シルト～極細粒砂の偽礫からなる地層で、最大層厚は260cmである。盛土の単位が明瞭である。

第8層：本層以下は西区のトレンチでのみ観察した。褐色(10YR4/4)シルト質極細粒砂層で層厚は15～35cmである。第7層と異なり、水平な堆積である。時期は不明だが、SX901基底部の盛土の可

能性がある。

第9層：褐色(10YR4/4)粘土～シルト層で層厚は45cm以上である。自然堆積に近いが、そのままの状態ではない。上面が大川側へ低くなっていく。時期はわからない。

ii) 遺構と遺物

a. 堤防跡SX901関係の遺構と遺物(図4・5)

第7層は屋敷地の造成などで見られる盛土と異なっている。西区北壁では、第7b層上面が流された薄い水成層が観察できるところがあるが、ごく限られており、第7b層と第7a層の形成にほとんど時間差はないと考えられる。南壁の観察から作業過程を復元すると、まず、第7b層を5つの作業単位に分けて盛っていく。第7b層の盛土は高くなるに従って少しずつ傾斜がきつくなっている。第7b層と第7a層の層界が非常にシャープなことから、第7b層を盛った後、西側斜面を整えたと考えられる。その後、

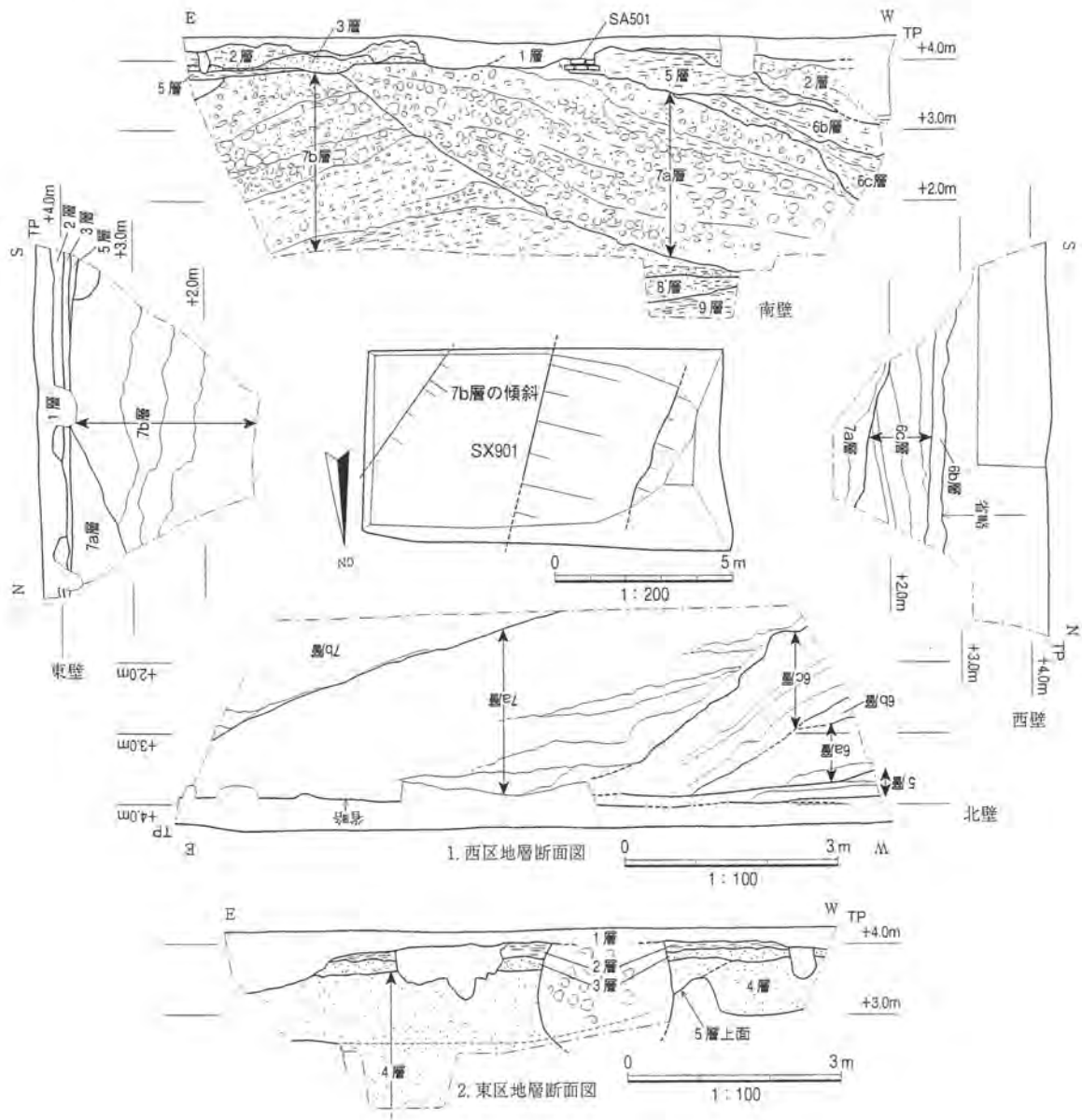


図4 西区・東区地層断面図とSX901平面図

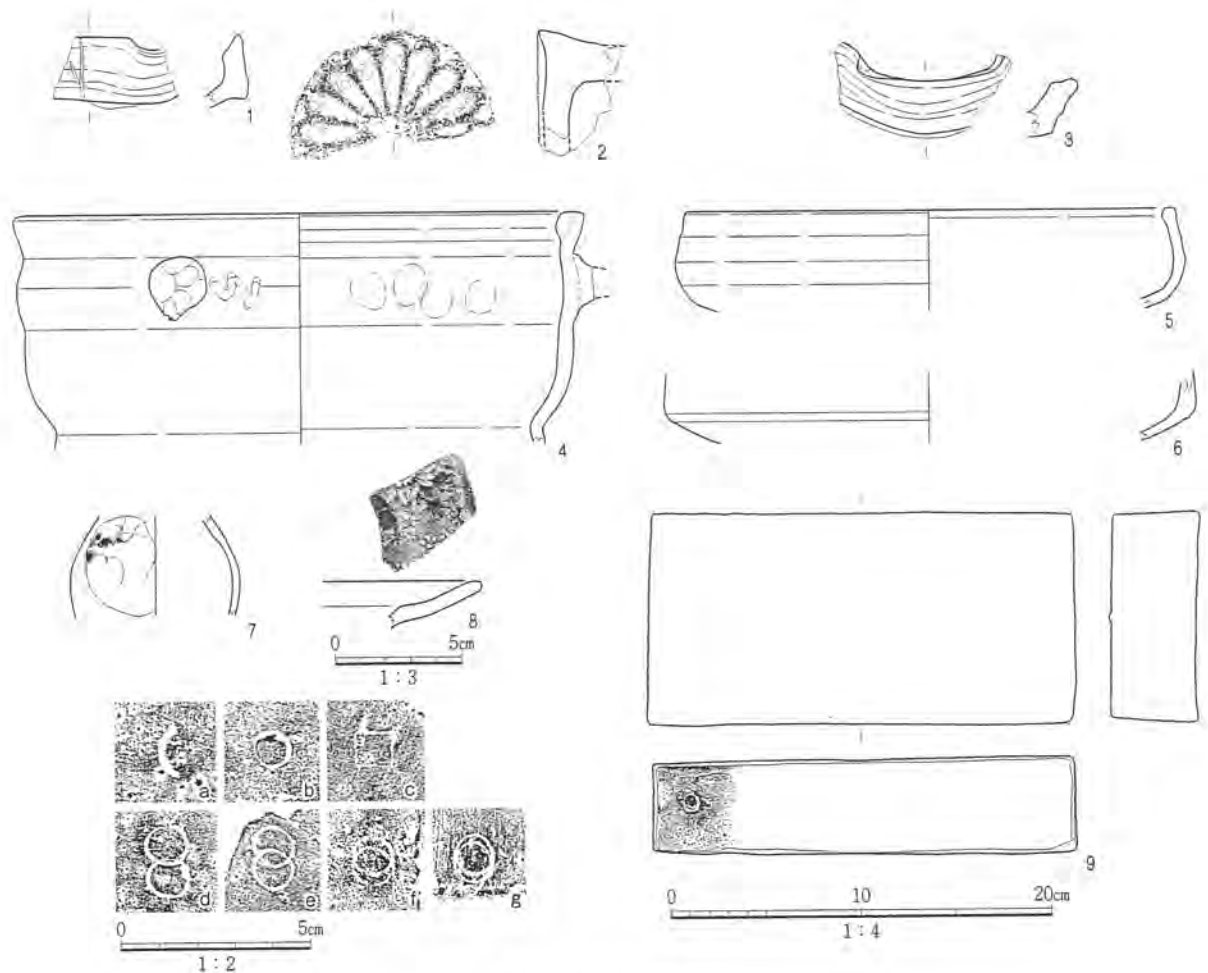


図5 出土遺物実測図

第7層(1・2)、第6c層(3～5)、第6b層(6・7)、第6a～5層(8)、SA501(9)

西に第7a層を持たせかけるように盛っていく。

第7層を大川岸に築かれた堤防跡の盛土と推定した理由は以下による。

調査地を1655(明暦元)年の「大坂三郷町絵図」に落とすと図6のようになり、大川西岸の堤付近となる。今回の調査では泉布観の堀SA501の基礎が検出されたが、この堀は、1890(明治23)年刊行2,500分の1地図「造幣局」などに記載されており、1890年地図→大坂三郷町絵図とたどることで、調査地のより確かな位置が推定できる。また、かつての造幣局での発掘調査により、大坂三郷町絵図の堤は造幣局南の官舎と市街地の境界付近との推定があった[大阪市文化財協会1995]。それを北に延ばしたところに調査地はあり、川との関係も堤の場所に相応しいと考えられる[南秀雄2009]。

第9層上面を本来の大川側への傾斜とすると、SX901の高さは西区で3.4m以上となる。築造当初の幅はよくわからないが、東区北西隅において西区と同じ高さで第7層が検出されていること、川との関係、盛土の傾斜角度などから、上ばで7m前後、下ばで20～25mと推測される。SX901の方向は、西区における西側上ばの推定ラインによれば、北で東に約15度振る。絵図との対比や川との位置関係からすると、東区付近で北へ方向を変えると推定される。

SX901の西側は、徳川期になると漸次、第6c層→第6b層→第6a層と盛土される。SX901の補強と

同時に、市街の高上げの目的もあったと考えられる。

以下、出土遺物について記す。

第7層からは備前焼播鉢1と軒込瓦2が出土した。1は片口の左にへら描きの線がある。2は16弁の菊花である。第6c層からは備前焼播鉢3、産地未詳の陶器水差4、土師器焙烙5が出土した。4は横方向に取手が付き、外面上部に粗く波形の文様が刻まれている。内外面とも藁灰釉に似た釉が掛かるが、二次的に火を受けている。通常の肥前陶器に比べると胎土が緻密である。第6b層からは土師器焙烙6と肥前磁器瓶7が出土した。

b. SX901の築造時期

SX901は1655年からいつまで遡るのであろうか。第7層の出土遺物は少ないが、確実に豊臣後期以降と言えるものはない。

天満における豊臣期の堤といえば、1586(天正14)年4月15日より豊臣秀吉の命によって堤の普請が行なわれた記事がある。『言経卿記』では「北の堤」、『宇野主水記』では「河縁ノ堤」と表現され、天満東端の川岸に築かれたと推定された[豆谷浩之1995]。豆谷浩之によれば、城下町建設に着手した1585(天正13)年、翌年と、2方を川に面した天満は度々洪水に見舞われ、町作りの緊急課題として秀吉による堤普請に至ったという。場所と出土遺物から、SX901は天正14年に秀吉が命じて築造させた堤に当る可能性が高いと考えられる。

c. 泉布観関係の遺構と遺物(図5・7)

西区で検出されたSA501は煉瓦を組んだ塀の基礎で、基底部の幅0.47m、検出長3.10mで、北側は壊されている。SA501は、各種の地図や図面に描かれている泉布観の東の塀で、西区の北で正面門に繋がっていた。基礎の煉瓦は3段に積まれている。断面で見ると(図版2枚目中段)、下より1段目は長手に2枚、2段目は長手1枚を小口2枚で挟み、3段目は長手1枚と小口1枚を組合せ、上にいくに従って幅を減じている。目地材は石灰に石粉などを混ぜたものを用いている。

煉瓦は現在のそれに比べて、薄手で軟質である点が最大の特徴である。計測可能な131点によれば、平均値は長さ224.9mm(最大値232mm、最小値218mm、資料数117)、幅111.1mm(最大値115mm、最小値106mm、資料数129)、厚さ48.1mm(最大値56mm、最小値40mm、資料数131)であった。赤色のシャモットを多量に含み、成形時の粘土の縞模様が断面に見える。131点中15点には刻印があり、場所は図5の9のように長手(側面)の端にあるものが14点、小口(端面)の端にあるものが1点(b(円))である。刻印の種類は、図5のa(三日月形)が2点、b(円)が7点、c(四角)が2点、d~g(輪違)が各々1点である。平(表裏面)に刻印のあるものはない。泉布観築造に当っては、煉瓦は堺と広島、また市

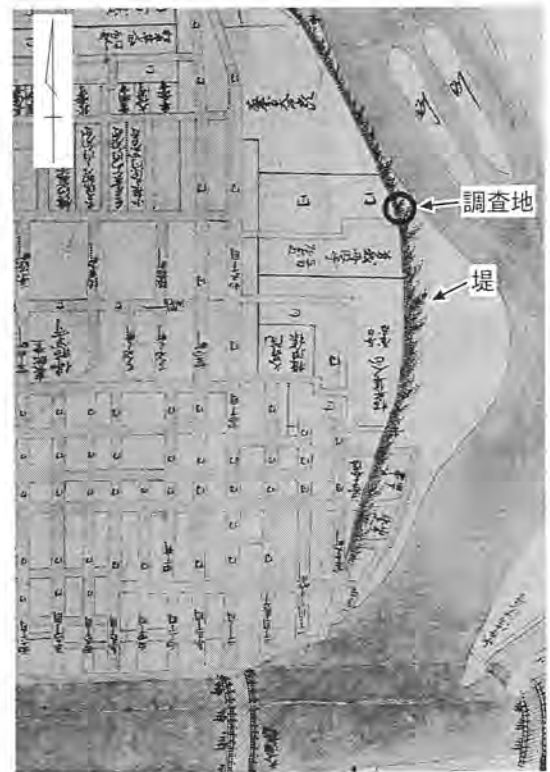


図6 明暦元年大坂三郷町絵図
(部分 大阪歴史博物館蔵)

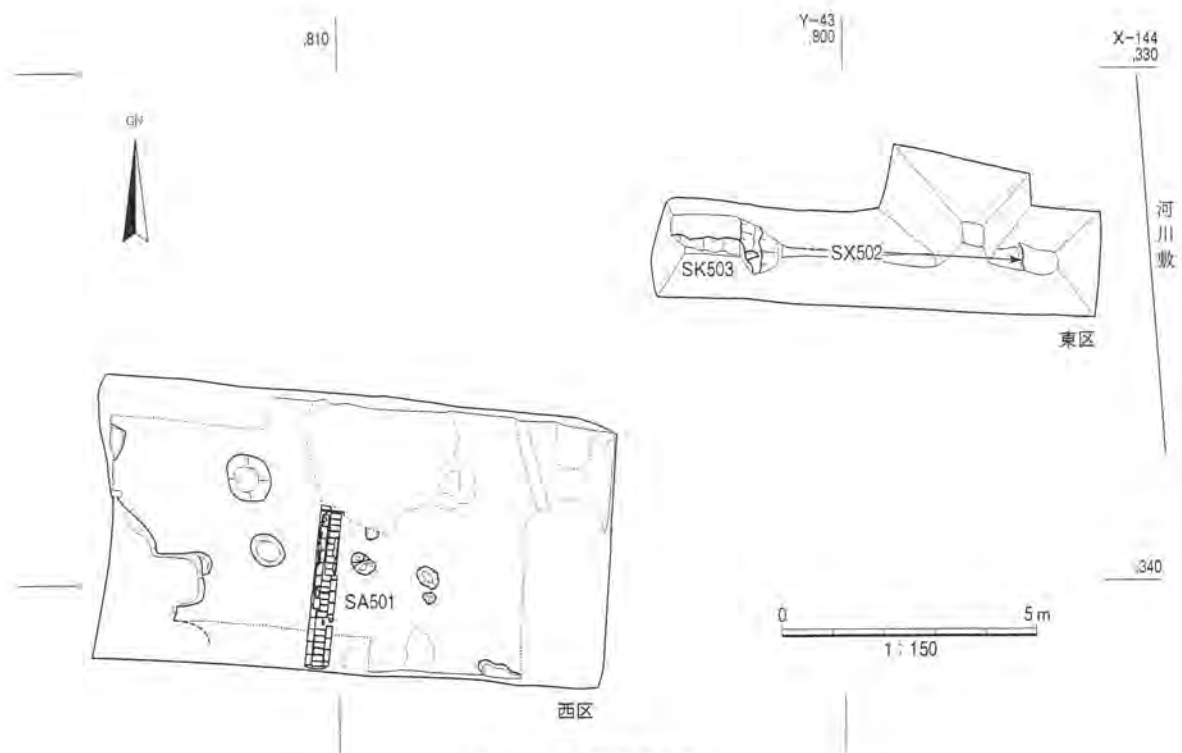


図7 第5層遺構平面図

内の鴨野などのものが用いられた。初期の国産煉瓦の貴重な資料である。

泉布観当初の地表面は、東区のSK503東端付近から低くなり、東区東端で約1.2m下がる。SK503東端付近の傾斜面には石が散在し、表面が石で補強されていた可能性がある。この落ちの東に第4層で埋められるSX502がある。SX502は東西4m前後で、底は東区東端から少なくとも1.9m以下にある(下部はピンポールによる)。性格はよくわからないが、水路や船着き場との関係が考えられるかもしれない。

SK503は深さ0.97mである。壁に掘削道具の刃先の痕跡が明瞭に残る。現代のスコップなどと異なり、幅が15cmと狭く、先が平らである。

図5の8のヨーロッパ陶器皿は西区のトレンチからの出土で、幕末から泉布観初期のものである。内面に緑色の文様がプリントされている。

なお、東区のすぐ東にある河川敷の石垣は、層位ではもっとも新しい時期のもので、裏込の煉瓦などからすると昭和まで下ると推定される。

3)まとめ

今回の調査における第1の成果は、豊臣前期まで遡ると推定される堤防跡SX901の発見である。この堤防は桜宮橋西詰の調査地点から天満橋の東側までの間、何らかの痕跡を残して埋もれている可能性が高く、今後の調査では十分に注意しなければならない。また、豊臣期にこの堤防の存在を考慮すると、天満本願寺の範囲や、既往の発掘で見つかった川縁に並ぶ大型の屋敷地など、周辺の遺跡や遺構の理解が変わってくる可能性がある。

第2の成果は、SA501をはじめとする泉布観の遺構の検出である。これと図面等を対比すれば、今

は失われている泉布観の関連施設の場所や深さを正確に特定できる。今後、重要文化財の周辺の整備や工事に役立つと考えられる。

参考文献

大阪市文化財協会1995、『天満本願寺跡発掘調査報告』I

豆谷浩之1995、「文献史料からみた天満本願寺」：『天満本願寺跡発掘調査報告』I、pp.61-67

大阪市文化財協会1997、『天満本願寺跡発掘調査報告』II

大阪市文化財協会2008、『天満本願寺跡発掘調査報告』VI

南秀雄2009、「天満の町に埋もれている秀吉の堤」：『葦火』138号、pp.4-5

西区全景
(西より)



SX901断面
西区南壁
(北より)



SX901盛土のようす
(東より)



SA501と泉布観
(南東より)



SA501断面
(北より)



東区全景
(東より)



II 中 央 区

平成20年度難波宮環境整備事業に伴う
難波宮跡発掘調査(NW08-2)報告書

- ・調査個所 大阪市中央区法円坂1丁目
- ・調査面積 200㎡
- ・調査期間 平成20年10月20日～12月26日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 大阪市文化財協会 文化財研究部次長 南 秀雄、市川 創

〈調査に至る経緯と経過〉

難波宮跡では、1954年から始まった発掘調査によって前・後2時期の宮殿跡が見つかっており、前期難波宮は難波長柄豊碓宮に比定され、また後期難波宮は聖武天皇によって再建されたものと考えられている。

今回の調査は史跡難波宮跡の西南部、大手前整肢学園の跡地において実施した(図1)。後期難波宮の中では、朝堂院西外郭築地の西側に位置する。

周辺における既往の調査成果を概観すると、まずNW27・28次調査において、東辺を揃えて南北2組の掘立柱列が検出された[大阪市教育委員会

1967]。このうち北側の柱列については、その後に実施されたNW84-30次(1区)・85-22次(1～3区)・86-28次(2区)の各調査を経て、東面に2棟の五間門をもつ「五間門区画」を画する1本柱塀の一部であることが明らかとなった[大阪市文化財協会2005]。また、上町筋を挟んで西側に位置する独立行政法人国立病院機構大阪医療センター(旧・国立大阪病院)敷地内においては、この五間門区画の南を画する塀の延長と考えられる柱穴を検出している[大阪市文化財協会2004a]。

一方、南側の柱列については、昨年度実施したNW07-2次調査においてその構造の把握を目指し、東西に延びる2条の柱列を確認したものの、2列の平行する塀なのか、もしくは掘立柱建物なのかを解決するには至らなかった[大阪市文化財協会2008]。

こうした周辺での調査状況を勘案し、①五間門区画の南を画する塀を再確認すること、②性格不明の2条の柱列の性格を追及すること、の2点を主目的として今回の調査を実施した(図2)。

調査では東西6.2m、南北31.0mの調査区を設定し、南北に基準杭を打設した。現代盛土層から近代の整地層である第3層までを重機で掘削し、それ以下を人力で掘削した。調査区内は大手前整肢学園

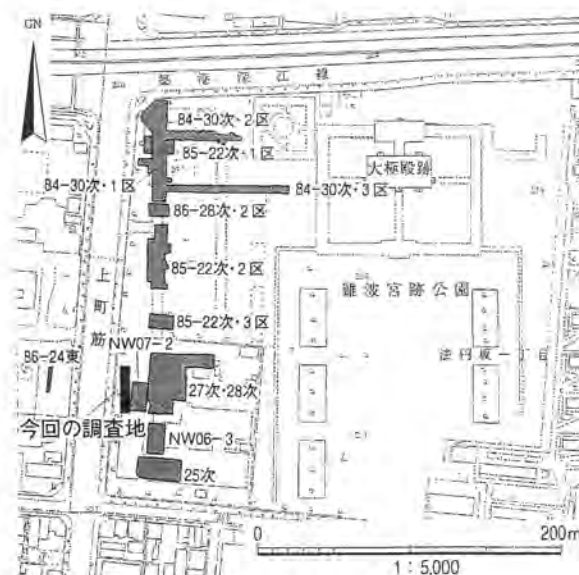


図1 調査地位置図

や旧陸軍第八連隊の建物などにより攪乱を受けていたが、18世紀代を中心とする遺構群を検出したのち、第5層上面では豊臣前期を中心とする遺構群を、また第7層上面では後期難波宮の柱穴、前期難波宮造営前のものとみられる柱穴などを検出した。このうち、後期難波宮の柱穴が建物を構成することが判明したことから、当該部分を東側へ拡張し、昨年度検出した柱穴2基の位置を再確認した。

こうした成果を受け、12月23日には現地説明会を開催し、200名を越える市民の参加を得た。その後、砂による遺構面の保護を行い、12月26日には埋戻しを含むすべての作業を終了した。

なお、調査および本報告の作成に当っては、大阪歴史博物館学芸員 寺井誠・加藤俊吾の参画があった。また難波宮跡における既往の調査成果との関係上、本報告では旧来の日本測地系(国土平面直角座標第VI系)を用いた。図中の示北記号はすべて座標北である。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中では「TP+〇m」と示す。

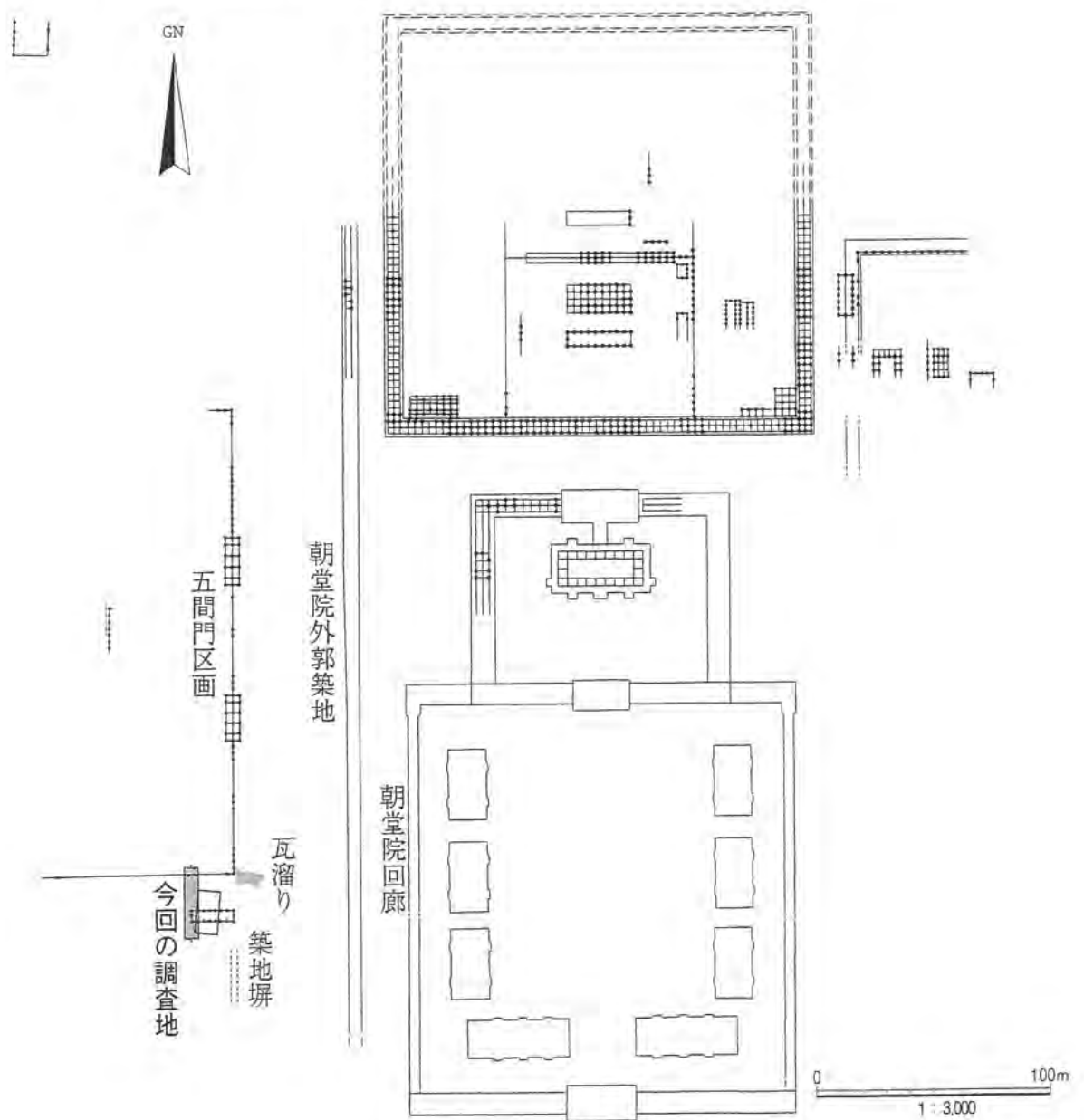


図2 後期難波宮の配置と調査区の位置図

〈調査の結果〉

1. 層序

層厚0.6~2.0mの現代盛土層(第0層)の下位にある現地表下2.5mまでの地層を、第1~7層に区分した(図3・4)。

第1層：黄褐色(2.5Y5/3)を呈する盛土層で、層厚は35cmである。大手前整肢学園の建設に伴うものである。

第2層：黒褐色(2.5Y3/1)を呈する焼土層で、層厚は最大で20cmである。第二次世界大戦時の空襲に伴うものである。

第3層：幕末~近代の盛土層である。上層(第3A層)と下層(第3B層)に二分した。第3A層は暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈する砂層で、焼土の偽礫を含む。層厚は最大で28cmであった。近代の盛土層であり、本層上面では旧第八連隊に係わる煉瓦建物などを確認した。第3B層は、オリーブ褐色(2.5Y4/3)を呈する砂層で、炭・焼土を多く含んでいる。層厚は最大で30cmであった。本層に伴う遺構として、1863(文久3)年の火事跡整理のために掘削された可能性がある大規模な土塋SK301や、塋列遺構SX302などを検出した。SX302は建築物の基礎と考えられ、東西方向に並べられた塋9枚が残存していた。塋の下部には黄色の漆喰を敷き、漆喰の下部および塋の北側には粘土を敷いていた。塋は厚さが5cmほどで、上面の高さは揃えられていた。

第4層：徳川氏大坂城期の盛土層である。上層(第4A層)と下層(第4B層)に二分した。第4A層は灰黄褐色(5Y5/2)を呈するシルト質砂礫層で、層厚は最大で50cmであった。本層上面では敷地境の溝SD401や石垣SX402、井戸SE403、土塋SK404などを検出した。上面で検出した遺構の時期および層中出土遺物から、18世紀の盛土層である。第4B層は灰オリーブ色(5Y5/2)を呈する砂層で、シルト質砂の偽礫を多く含んでいた。層厚は最大で40cmであった。本層に伴う明確な遺構は検出できなかったが、出土遺物および上・下層の年代観から17世紀の盛土層である。

第5層：豊臣前期の盛土層である。第5A層と第5B層に二分し、第5B層はさらにi・iiに細分した。第5A層はにぶい黄褐色(10YR4/3)を呈するシルト質砂層である。炭や砂質シルトの偽礫、部分によっては第7・6層の偽礫を多く含んでいた。第5層上面の遺構を埋立てた整地層であり、SD501・

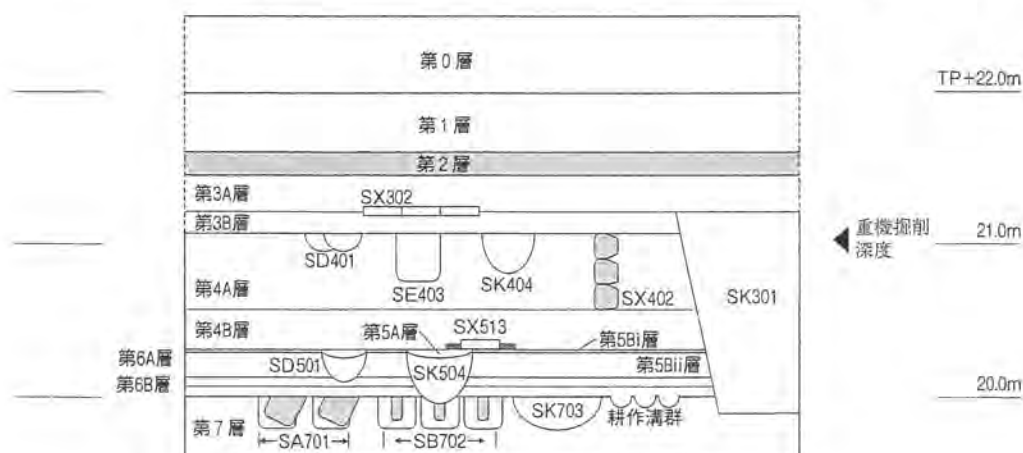


図3 地層と遺構の関係図

SK504などの最上部にのみ残存し、焼土が分布する箇所があった。第5Bi層はオリーブ黒色(5Y3/1)を呈する砂質シルト層で、層厚は5 cmであった。第5Bii層は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)を呈する砂質シルト層で、層厚は18cmであった。第5B層上面の遺構としてSD501・506、土壙SK502~505・507~510などがあり、豊臣前期の遺物が出土した。また特徴的な遺物として、これら豊臣前期の陶磁器類と共伴して金属加工関連遺物(図11)が出土した。なお第5A層の上面では、焼土に被覆される礎石SX513、土壙SK514を検出した。

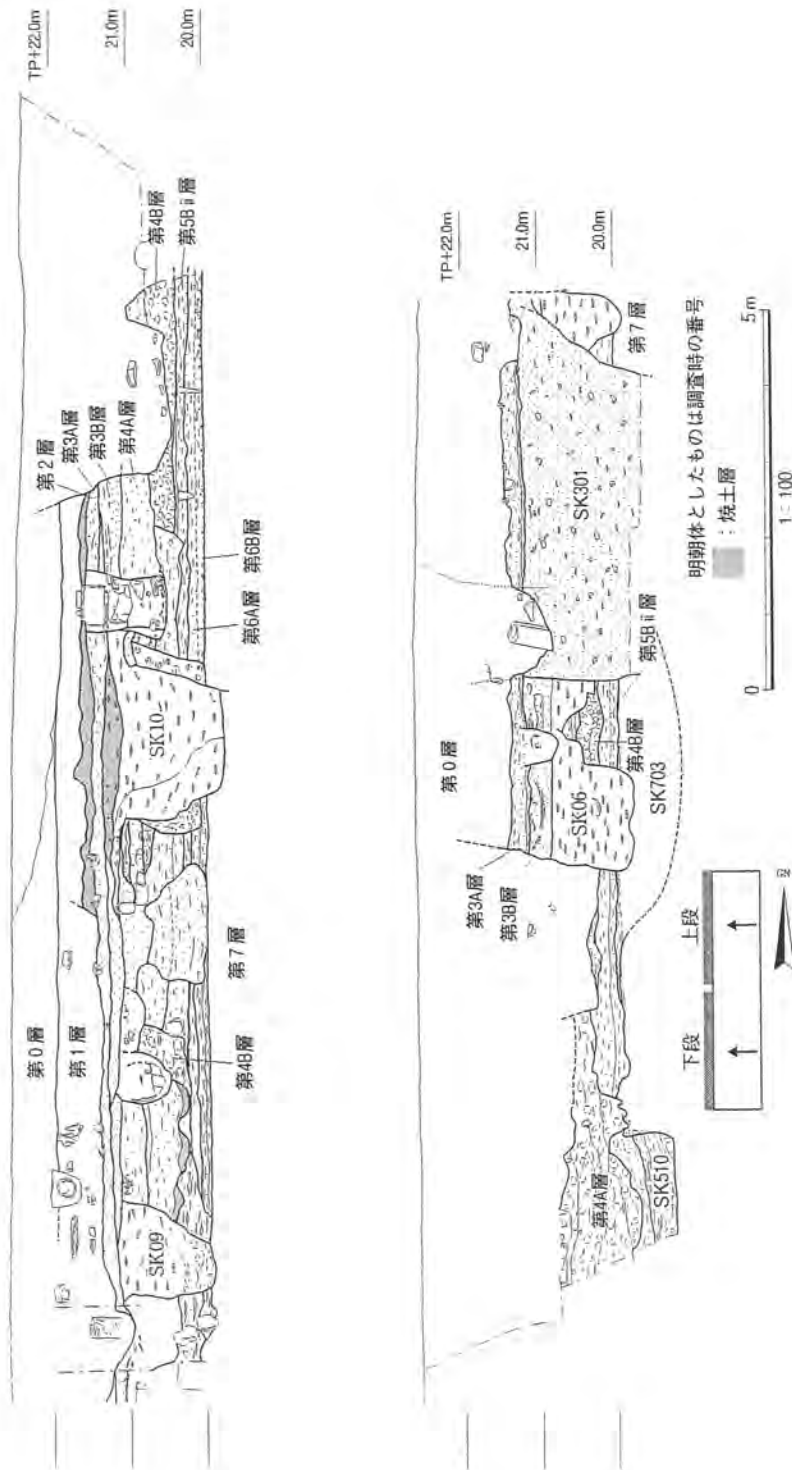


図4 西壁地層断面図

第6層：古代末～中世後期の作土層である。調査区北部に厚く分布し、南部では本層が存在しない部分もあった。層界は不明瞭であるが、上層(第6A層)と下層(第6B層)に2分した。第6A層は暗灰黄色(2.5Y5/2)を呈する砂質シルト層で、鉄分が沈着している。層厚は10cmであった。第6B層は黄褐色(2.5Y5/3)を呈する砂質シルトで、鉄分が沈着する。第6A層よりも砂を多く含んでいた。また、下部には直径10cm以下の礫が多く含まれており、本層下面では耕作に伴う小溝群を検出した。

第7層：淡黄色(5Y7/3)を呈する砂質シルトで、段丘構成層である。TP+19.3m以下は灰白色を呈するシルト質砂へと遷移していた。本層上面では、後期難波宮の時期の遺構SA701・SB702のほか、SB702を構成する柱穴を切る土壌SK703、また難波宮造営以前と考えられる柱穴群SP704～716を検出した。

2. 遺構と遺物

a. 第7層上面および第6層下面の遺構

第7層上面では後期難波宮に伴う遺構SA701・SB702や、SB702を構成する柱穴を切る土壌SK703、難波宮造営に先行する時期のものと思われる柱穴群SP704～716を検出した(図5)。また、第6層の最下部には直径10cm以下の礫が多く含まれる部分があった。元位置を失ってはいるが、難波宮の時期に当地周辺が礫敷であった可能性を示す。これらの遺構は第6層などによって削剥されており、周辺調査で検出されている整地層は確認できなかった。なお、SA701・SB702を構成する各柱穴の計測値などは表1に掲載した。

SA701 調査区の北部で検出した、東西に延びる柱列である(図6)。NW27・28次調査において検出された柱穴との位置関係から、五間門区画の南を画する掘立柱塼を構成すると考えられる。柱穴2基を検出し、柱はいずれも南から抜取られていた。柱穴の掘形中央に柱が据えられていたとすると、柱間寸法は3.0mで10尺に相当する(註1)。なお、SP701Aの掘形からは須恵器1、抜取穴からは石材5が出土した(図6)。須恵器杯H身1は受部径が10.0cmと小さく、底部はヘラ切りののちわずかにナデ調整を行う。また、底面にはヘラ記号「×」がある。難波Ⅲ(7世紀代)に位置づけられる資料である。

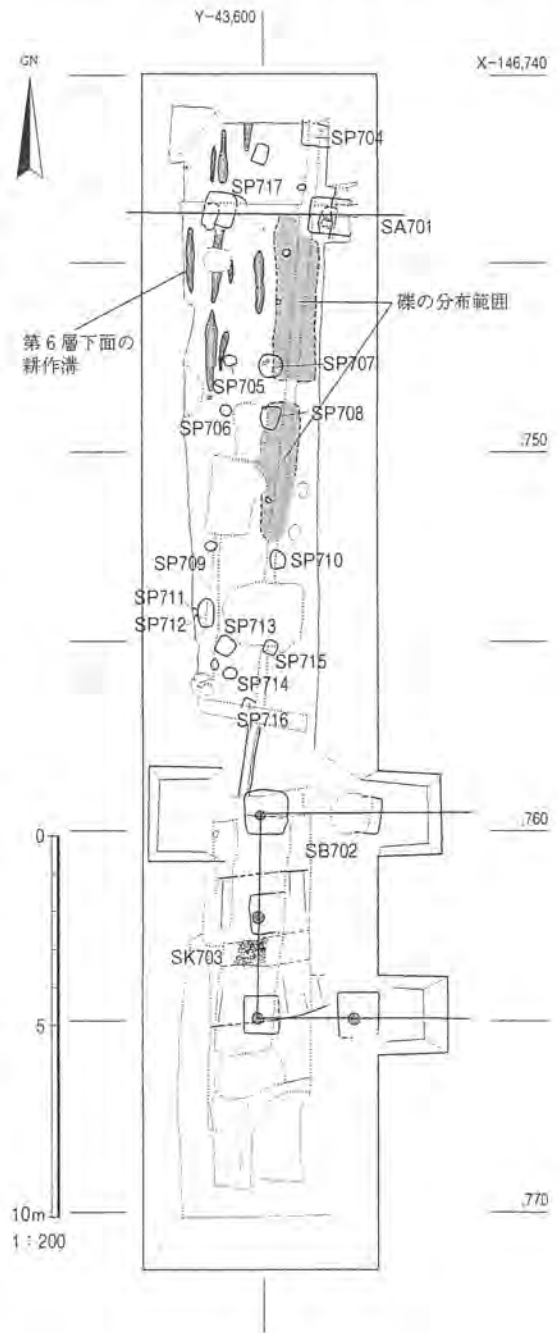


図5 第7層上面と第6層下面の遺構平面図

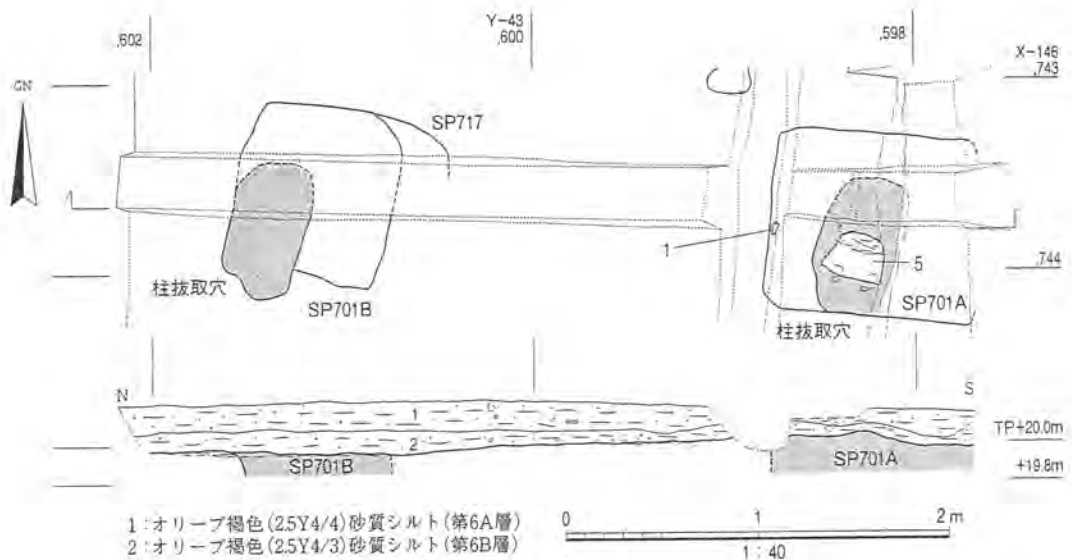


図6 SA701平面・断面図

り[佐藤隆2000]、柱穴の年代よりも遡る。石材5は花崗岩製で、最大長31.4×27.0cm、最大厚14.0cmを測る。人工的な成形が加えられており、大きさ・形状から礎石であった可能性がある。

SB702 調査区の南半で検出した。今回の調査においてSP702Cを検出したことによって、既往の調査において性格不明であった柱穴群が東西棟の側柱建物を構成することが明らかとなった(図7)。柱間寸法は、桁行で2.54m(約8.5尺)、梁行で2.64m(9尺)である。柱穴はSK703・504などによって一部が破壊されていた。また、塀に取り付く建物である可能性を考慮して柱1基分西側に調査区を拡張したが、柱穴は検出されなかった(註2)。

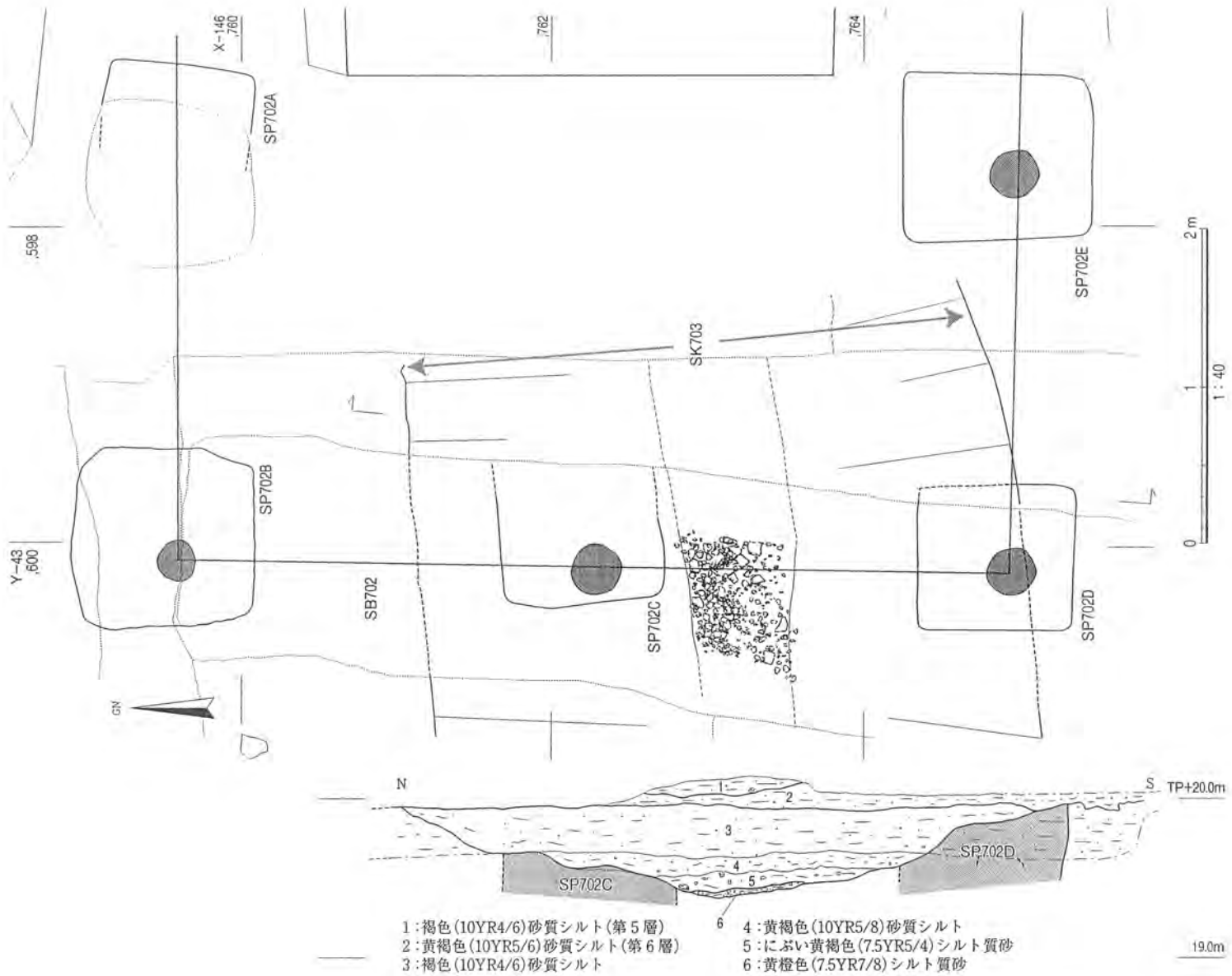
SK703 SP702C・Dを切る土壌である(図7)。東側はNW07-2次調査区の東端まで延び、西側は調査区外へ延びる。東西3.0m以上、南北4.2mの規模があり、検出面からの深さは0.6mであった。最下部に第7層の偽磔を含む埋土があり、直径5cm程度の磔、後期難波宮の瓦のほか、土師器・須恵器の破片が面的に出土した(図7)。その上部はシルト質砂・砂質シルトによって埋り、埋没後は第6層によって覆われていた。遺構の時期を明確に示す遺物は出土しなかったが、須恵器杯Gの口縁部2を図化した。内外面ともヨコナデで仕上げられる。

SP704~716 第7層の残存状況が良好であった調査区北半で検出した。隅丸方形、あるいは円形を呈する柱穴であり、大きさや形状から難波宮造営に先行する時期のものであろう。いずれも建物と

表1 今回の調査で検出した後期難波宮の遺構計測表

建物名	柱穴名	法量(単位:m)			水準値 (単位:m、いずれもTP+)			柱抜取穴の 方向	備考
		南北長	東西長	柱痕跡 直径	検出水準	底面水準	検出面からの 深さ		
SA701	SP701A	0.96	(1.10)	-	20.06	-	-	南へ	抜取穴から石材5出土
	SP701B	0.92	0.81	-	19.98	-	-	南へ	-
SB702	SP702A	0.96	(0.44)	-	19.99	19.33	0.66	-	昨年度調査分を再検出
	SP702B	1.18	1.14	0.26	19.96	(19.57)	(0.39)	-	-
	SP702C	1.10	0.95	0.30	19.96	(19.63)	(0.33)	-	-
	SP702D	1.18	(0.68)	0.24	19.64	-	-	-	-
	SP702E	1.18	1.10	0.30	19.94	-	-	-	昨年度調査分を再検出

※()を付した数値は残存長など、未確定のもの。
 ※水準値については、検出水準は最高値、底面水準は最低値である。



- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1: 褐色(10YR4/6)砂質シルト(第5層) | 4: 黄褐色(10YR5/8)砂質シルト |
| 2: 黄褐色(10YR5/6)砂質シルト(第6層) | 5: におい黄褐色(7.5YR5/4)シルト質砂 |
| 3: 褐色(10YR4/6)砂質シルト | 6: 黄橙色(7.5YR7/8)シルト質砂 |

図7 SB702・SK703平面・断面図

しては復元できなかった。

このほか、遊離資料ではあるが、後期難波宮の時期の遺物として、軒丸瓦6、軒丸瓦7、鴟尾片8、埴9を図化した(図8)。このうち重圏文軒丸瓦6、重圏文軒平瓦7、鴟尾片8はいずれも焼成が甘く、表面の劣化が著しい。6は軒瓦裏面に溝を切って丸瓦を挿入し、その後、裏側に補強用の粘土を充填している。成形技法や計測値から、6015A型式、あるいは6016型式に属するものだろう[大阪市文化財協会1995]。7は弧線の頂部を押しつぶすようにナデを加えている。計測値から、6572D型式に属

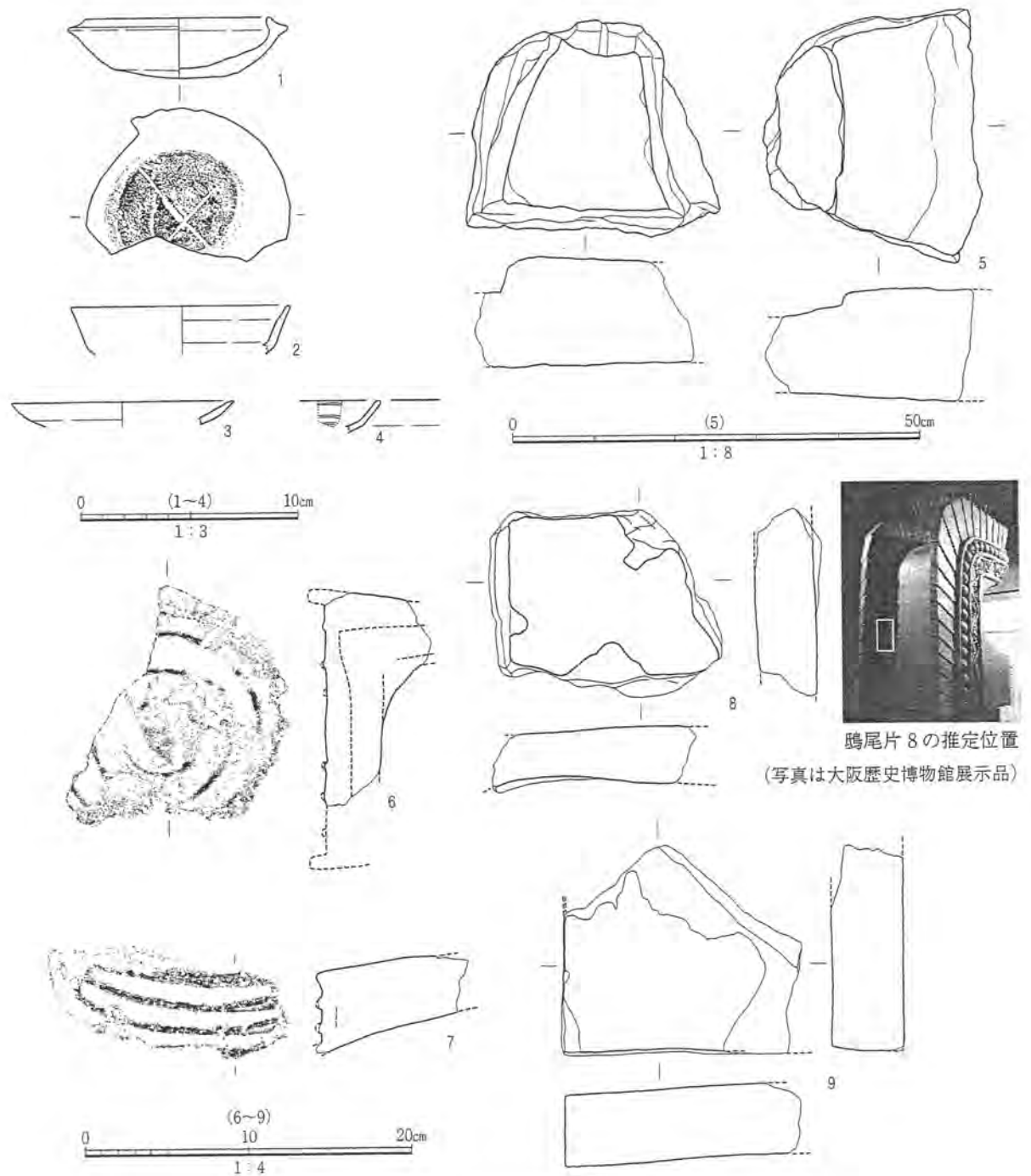


図8 古代の遺物実測図

SP701A (1・5)、SK703(2)、第6層(3・4・9)、攪乱中(6)、第4層(7)、SX505(8)

する可能性がある。8は最大で3.6cmと分厚く、直径5mm以下の石英・長石・チャートを多く含む特徴的な胎土を使用している。外面は灰白色、内面は暗灰色を呈する。埴9は厚さ4.4cmで、やや反っている。また1側面に二次的な被熱の痕跡を有する。

第6層下面の遺構としては、南北方向に延びる溝群を検出した(図5)。これらの溝は長短があるものの、幅0.2m程度、検出面からの深さが0.1m以下であり、第6B層で埋っている。同層に伴う耕作痕跡であろう。第6層からは土師器皿3、瓦器皿4が出土した。明確な年代は決定しがたいが、瓦器皿4のヘラミガキがまばらであることなどから、第6層の時期は少なくとも13世紀以降である。

b. 第5B層上面の遺構と遺物

第5B層上面では溝SD501・506のほか、土壌SK502～512を検出した(図9)。

SD501 北で東に約5度振る方向に延びる素掘りの溝で、幅は0.4m、深さは最大1.0mである。断面観察から掘直しが1度あることが確認され、溝の肩には杭が打たれていた。埋土は一部に水成のシルトの薄層が最下部に堆積しているものの、ほとんどが褐灰色シルトの偽礫で埋められている。北側ではさらにその上に褐灰色極細粒砂質シルトの水成層が堆積し、最終的ににぶい黄褐色砂質シルトの偽礫(第5A層)で残った窪みを埋めていることが観察された。なお、南側は豊臣前期のSK503に切られている。出土遺物には中国製白磁や瓦があり、時期を限定できるものはないが、検出面から豊臣前期の遺構と考える。

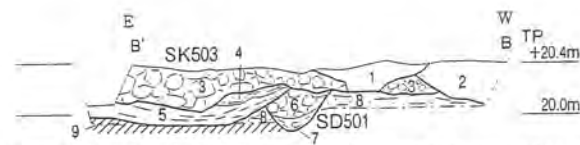
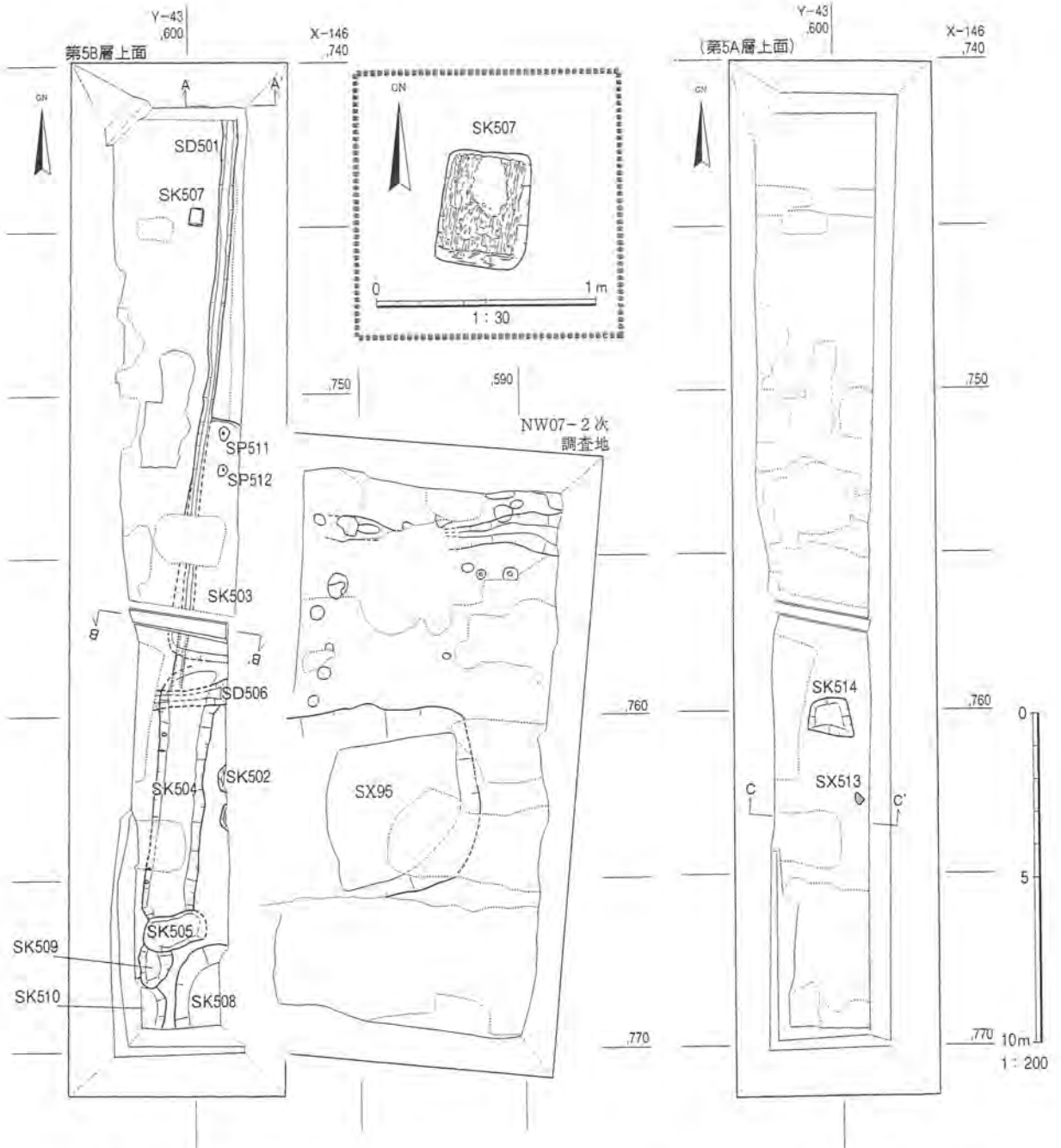
SD506 調査地中央部で検出した、東西方向に延びる溝である。褐灰色シルトで埋まっていた。SK504に切られる。土師器片が出土した。

SK507 調査地の北部で検出した南北0.55m、東西0.40m、深さ0.20mの土壌である。壁に薄い板を貼付けていた。出土遺物はなかった。

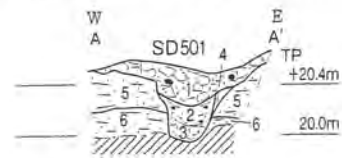
SK502 東壁の南寄りで検出した土壌で、大半は調査区外に拡がる。東隣のNW07-2次調査地で検出した落込みSX95の西端に当る可能性がある。出土遺物には土師器皿10がある。口径12.6cmで、底部外面にユビオサエが残り、口縁部のヨコナデに切られる。

SK503 南北7.2m、東西2.0m以上、深さは0.5mの細長い土壌である。埋土の最下部は水成の褐灰色シルト層で、一部で炭や灰が集中して出土した。遺構の西側の肩のほとんどが上部の遺構によって壊されていたため、正確な方向や大きさはわからない。

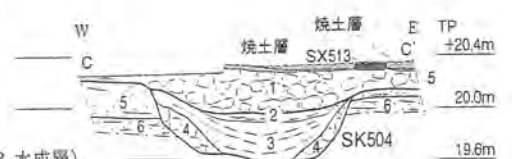
SK503の出土遺物には土師器皿11、中国製白磁皿12・13、瀬戸美濃焼に加え、埴塙31・32がある。11は口径9.8cm、器高2.3cmあり、外面はユビオサエで、口縁部内面はヨコナデで仕上げられる。12は端反りの口縁部をもつ皿で、口径は11.2cm、器高は2.9cmである。13は高台の直径が5.6cmで、体部に丸みがある。埴塙31は口縁部の内外面に赤色の金属質付着物が見られ、外面には亀裂が多く入る。粗めの胎土でスサらしき混入物が認められるが、外面調整は丁寧に表面観察だけならば緻密に見える。この赤色の部分を非破壊分析したところ、銅(Cu)が検出された(註3)。32は内面から口縁部外面にかけて橙色の付着物があるが、金属の質感は乏しい。銅・鉛(Pb)・亜鉛(Zn)が検出されている。先述のように周囲からは炭や灰が見つかっているものの、それらを加工作業の痕跡と積極的に評価することは難しい。後述するSK504出土の資料と併せ、これらの金属加工関連遺物は廃棄品、あるいは流入品



- 1: 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト (石・瓦・炭を含む/第4層の遺構)
- 2: 浅黄 (2.5Y7/4)~灰褐色 (10YR4/2) シルト質砂と黄色砂の互層
- 3: 黒褐色 (2.5Y3/2) シルトの偽磔による整地層 (第4B層)
- 4: 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト (SK503)
- 5: 明黄褐色 (2.5Y7/6) シルト (SK503, 水成層)
- 6: 明黄褐色 (2.5Y7/6) 細~中粒砂質シルトの偽磔による埋戻土 (SD501)
- 7: 褐灰色 (10YR5/1) シルト (SD501, 水成層)
- 8: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質細粒砂 (第5層)
- 9: 明黄褐色 (2.5YR7/2) シルト質砂 (第7層)



- 1: におい黄褐色 (10YR4/3) のシルト偽磔による整地層 (第5A層)
- 2: 暗褐色 (10YR3/3) シルト
- 3: におい黄褐色 (10YR5/4) シルト偽磔による埋戻土
- 4: 褐色 (10YR4/4) シルト (SD501の挿直し前の埋土)
- 5: におい黄褐色 (10YR4/6) 砂質シルト (第5層)
- 6: におい黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルト (第6層)



- 1: 第7・6層の偽磔による整地層 (第5A層)
- 2: 炭を多く含む褐灰色 (10YR6/1) シルト
- 3: 褐灰色 (10YR6/1) シルト
- 4: 灰黄褐色 (2.5Y7/2) の偽磔を多く含むシルト質砂
- 5: 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト質砂 (第5層)
- 6: におい黄褐色 (7.5YR6/4) 極細粒砂質シルト (SK703埋土)

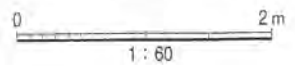


図9 第5層上面の遺構平面・断面図

である可能性が高い。

SP511・512 いずれも長辺0.4m、短辺0.3mの方形の柱穴で、直径0.1mの柱痕跡を確認した。両者の心心間の距離は1.2mで、一連のものかもしれないが、周辺ではほかには柱穴は見つからなかった。埋土がSK504と同じ褐灰色シルトの偽礫で構成されていたことから、SK503が埋没した後に掘られたものであろう。

SK504 南北6.0m以上、東西1.5m、深さは0.6mの細長い土壇で、西側の肩には杭の跡が残っていた。埋土は水成の褐灰色シルトが堆積した後、炭が溜まり、最終的に第5A層によって埋められていた。長軸方向は北で東に5度振る方向で、上町筋と等しい。陶磁器の組成から豊臣前期の遺構である。

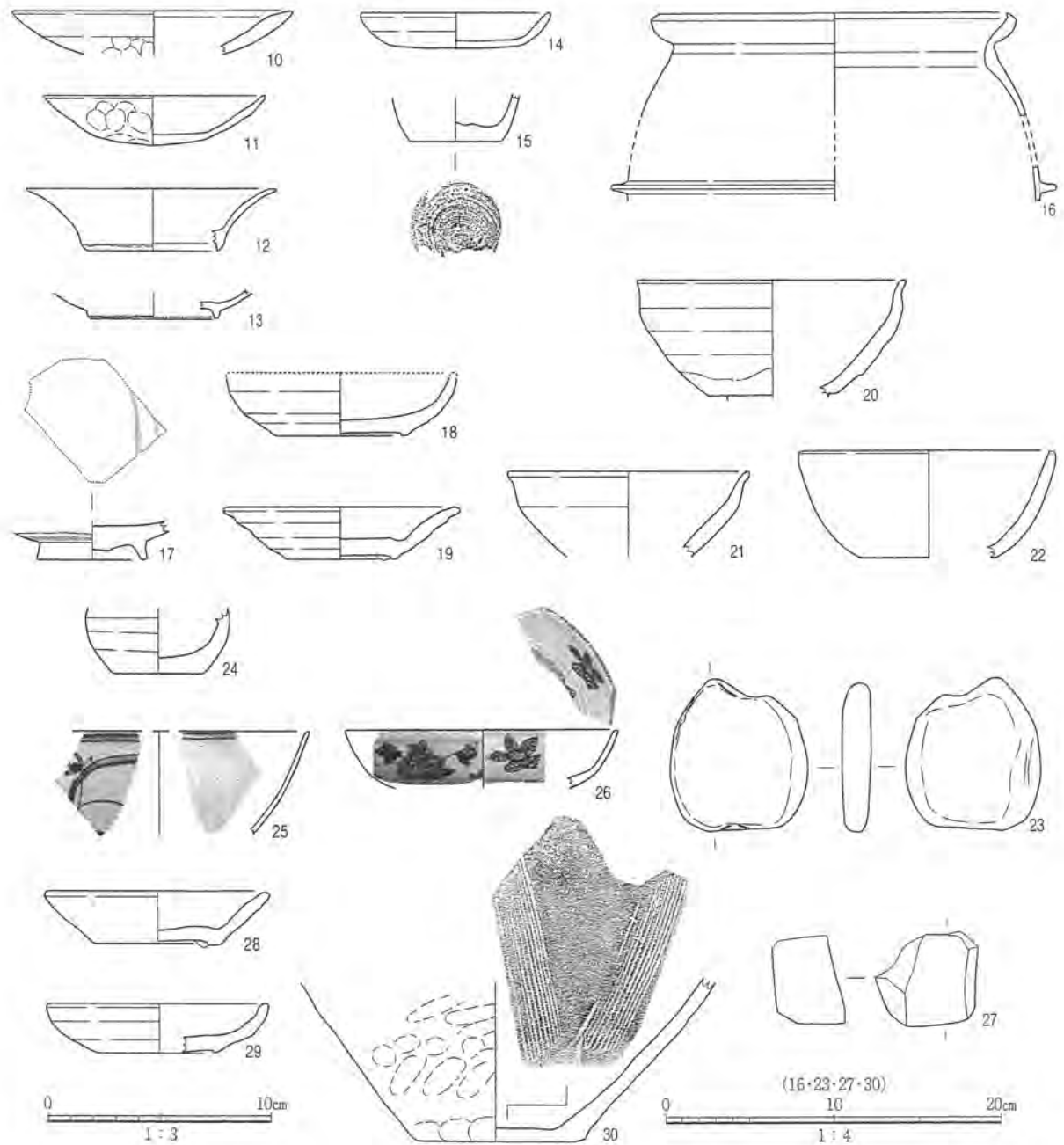


図10 豊臣期の遺物実測図(1)

SK502(10)、SK503(14~23)、SK504(14~23)、SK505(24~27)、SK508(28)、第5A層(29)、SK514(30)

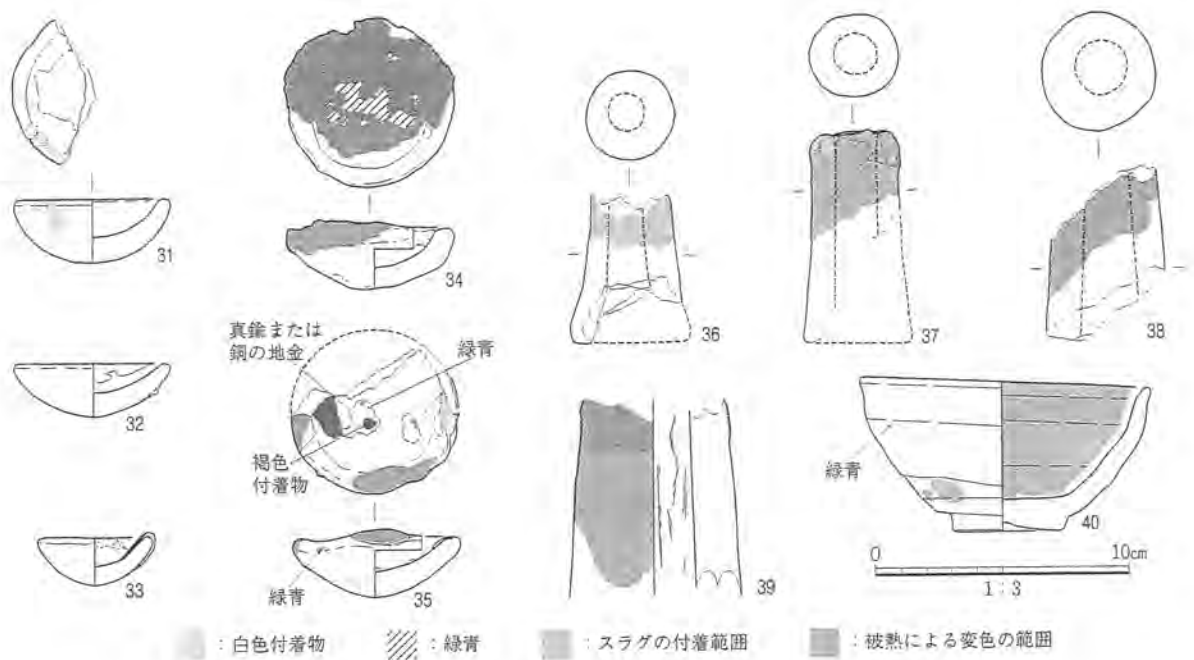


図11 豊臣期の遺物実測図(2)

SK503(31・32)、SK504(33・36・37)、SK514(39)、第4層遺構(34)、第5層(35・38・40)

出土遺物には、土師器皿14・羽釜16、中国製磁器碗もしくは皿17、瀬戸美濃焼小壺15・皿18・19・碗20~22、に加え、坩堝33、鞆羽口36・37やシカやイノシシの骨、石錘23がある。

14は口径8.4cm、器高1.6cmで、口縁部内外面はヨコナデで仕上げられる。16は口縁部~頸部と鐏が巡る部分に接点はないものの、胎土から同一個体と判断して図上復元した。口径は23.2cmあり、鐏は貼付けである。鐏の下方向の面にはススが付着する。17は高台径が5.0cmあり、高台の内側や見込みに粗いケズリが施されている。外面のごく一部にしか施釉された部分が残っておらず、内外面に呉須で圏線が描かれているものの、釉薬がかかっていないために、褐色に発色している。漳州窯産である。15は鉄釉の小壺と思われ、底部には回転糸切り痕がある。18は灰釉の丸皿で、口縁端部を欠く。高台の内側は釉が薄く、トチンの痕跡がある。19は灰釉の稜皿で、口径10.6cm、器高2.9cmである。内外面に輪ドチの一部が融着する。20・21は鉄釉の天目碗で、口径はそれぞれ12.0cm、11.0cmである。22は鉄釉の丸碗で、口径は11.6cmである。

坩堝33は復原口径が4.2cmと非常に小型であるが、外面の調整や胎土はSK503出土の31・32とよく似る。内面には鉍滓が付着し、口唇部が膨張する。外面に付着物はないが、口縁部の胎土は青灰色化している。口縁部内面を非破壊で成分分析した結果、銅と銀(Ag)・鉛(Pb)が検出された。羽口36・37のうち、36は口部先端から基部端まで辛うじて残り、全長8.3cm、先端外径は3.4cm、同内径は1.6cmを測る。胎土は最大1mmほどの長石をはじめ、多くの砂が混入するが、外面観察では緻密にみえ丁寧な調整がされている。スサや粉殻などは確認できない。口部周辺には灰色の付着物が認められ、そこから体部中央までは青灰色化する。灰色部分について非破壊で成分分析を行った結果、銅・錫(Sn)・鉛が検出された。37は口部先端が欠損しているが、36と同様の白色付着物が見られることから、口部先端近位であることがわかる。また基部端が残存しているため、全長は最大でも10cm程度に復原され

る。外径は残存部中央で3.5cm、同内径が1.4cm×1.5cm、基部附近での外径は4.7cmであった。残存内径(最大)で1.6cmとなり、孔も基部に向かって広がっていることがわかる。外面の調整は丁寧で緻密な胎土に見えるものの、断面観察では多くの砂(最大で1cmほどの粗砂)が認められる。スサや粉殻は確認できなかった。白色部分の成分分析(非破壊)を行ったところ、銅・亜鉛・鉛が検出された。

動物骨には、写真1のようにシカ・イノシシがある。いずれも幼獣と成獣が観察されたことから、少なくとも4個体の哺乳類の骨が当遺構に廃棄されていたということになる(註4)。

以上、SK504の時期については、陶磁器の組成から判断して、豊臣前期に位置付けられる。なお、23は扁平で両端に抉れた部分があることから、石錘と判断した。緑色片岩製で、重量は235gある。抉れた部分は打ち欠きによるものと思われるが、他の部分に比べ摩耗が進行し、滑らかな面をもつ。このような両端を打ち欠いた石錘は近隣では森の宮遺跡の縄文時代晩期中頃(滋賀里Ⅲb式)の地層から出土しているが、石材は頁岩と砂岩である[大阪市文化財協会1996]。23が緑色片岩という石包丁によく使われる石材であるということを勘案すると、弥生時代の可能性も残る。

SK505 東西1.6m、南北1.0mの長楕円形を呈する土壌で、深さは0.7mあり、SK504の南側を切っている。出土遺物には備前焼小壺24、中国製青花碗25、皿26、凝灰岩製砥石27がある。24は体部下半にヘラケズリが施される。25は精製の碗で、景德鎮窯産である。27は4方向に磨り面が残っているが、表面の剥離が激しい。

SK508 調査地南東隅で検出された土壌で、東西1.5m以上、南北2.5m以上、深さは0.5mある。埋土は最下部に灰褐色シルトの水成層が堆積し、それより上は埋戻し土であった。出土遺物には、最下部のシルトから出土した瀬戸美濃焼の灰釉稜皿28がある。口径10.1cm、器高2.4cmで、底部には輪ドチの一部が付着して残っている。出土時には内面全体に赤漆が付着していたことから、パレットとして用いられたと考えられる。

SK509 南北1.3m以上、東西1.0m、深さ0.5mの土壌である。SK505に切られ、SK510を切る。

SK510 調査地の南西隅で検出された土壌で、南北1.5m以上、東西0.9m以上、深さは0.8mある。最下層に第7層に由来する偽礫が堆積した後、暗オリーブ褐色シルトの水成層が堆積し、最終的に褐色シルト質砂の偽礫で埋められていた。



写真1 SX504出土の動物骨

- A: シカもしくはイノシシの脛骨
- B: シカの頭蓋骨
- C: シカ(成獣)の左中足骨
- D: シカの基節骨
- E: シカ(幼獣)の左大腿骨
- F: イノシシ(幼獣)の左脛骨近位骨端内傾顆
- G: イノシシ(幼獣)の左脛骨(Fと一連)
- H: イノシシ(成獣)の左脛骨

c. 第5A層上面の遺構と遺物

部分的に存在した第5A層の上面では、礎石 SX513と土壙 SK514を検出した(図9)。

SX513 大きさは長軸30~40cm、短軸20cm程度であり、大坂夏の陣に比定される焼土に覆われていた。石材の形状および平坦な面を上面としていたことから礎石と考えたが、組合う礎石は検出できなかった。なお、SX513の第5A層からは瀬戸美濃焼の灰釉丸皿29が出土した。底部内面や高台の内側に輪ドチがある。

SK514 不整形な土壙で、南北1.2m、東西1.5m、深さ0.2mある。出土遺物には瓦質播鉢30や鞆羽口39のほか、瀬戸美濃焼があり、遺物の時期は豊臣前期である。

30は底部径10.6cmで、残存高は9.5cmである。内面には櫛状の原体による9条1単位の播目が7方向に施されている。外面はユビオサエで仕上げられている。播目は向かって左側がよく摩耗している。また、胴部外面がほとんど摩耗していない一方で、底部外面の摩耗が著しい。このような状況は使用方法を反映するものと思われる。羽口39は外面にスラグが付着し、さらに付近が暗灰色化している。外面の調整は丁寧で緻密な胎土に見えるものの、断面観察では多くの長石を含む。また肉眼での観察のためはっきりしたことは言えないが、粉殻ないしスサが混入していた可能性がある。スラグ部分の成分分析(非破壊)では鉛・銅・砒素(As)が検出されている。

なお、遺構に伴う資料ではないが第5層に伴うと考えられる遺物として、坩堝34・35、羽口38、転用坩堝40が出土している。

34は小型の坩堝で、ほぼ完形である。内面の3分の2ほどが気泡が目立つスラグで覆われている。底部内面には緑青色の付着物がある。外面は暗灰色で調整は比較的丁寧であり、一部に指頭圧痕がある。35も小型坩堝だが、3分の1ほどを欠損する。口縁部が熱によって変形し、亀裂が入っている。内面は全面に黒色のスラグが付着し、そのなかに銅色の地金や緑青色の付着物が残存している。口縁部に付着したスラグには気泡が目立つ。付着は外面にまでは及んでいない。外面底部は橙褐色を呈するが、口縁部に近くなると灰色になる。胎土は34と近似し、砂が混入している。

40は瀬戸美濃焼天目碗を転用したのものとして注目される。内面は半分ほどが灰白色に変色し、外面にも同様の変色箇所が認められる。それ以外の部分では、釉薬は剥がれているがスラグの融着や器壁の膨張などは認められない。底部内面および外面には緑色の付着物が数点確認できる。外面下半の露胎部分が赤化しており、二次的に被熱したことがわかる。ほぼ完形で口径11.4cm、器高は最大6.1cmを測り、豊臣期の遺物と考えられる。本調査の南西約200mに位置するNW90-7次調査地でも金属加工に使用された天目碗が見つかっており[大阪市文化財協会2004b]、共通した技術的背景に基づくものなのか否か検討が必要である。

38は羽口片で、先端部と基部を欠損しているが、片側に変色部分が認められることから、口部近位であることがわかる。内径は基部に向ってやや斜行して拡がると推測できる。外面は丁寧なナデ調整、内面の調整は不明である。胎土は砂粒を多く含み、大きなものでは直径5mmほどのものも混入している。外径は残存部中央で4.6cm、同じ位置での内径は2.2cmであった。

d. 第4層上面の遺構

北半の遺構が良好に残存していたのに対し、中央以南は後世の廃棄土壌などによって大きく攪乱を受けていた。先述のように第4層は上下2層に分けられたが、このうち上部(第4A層)上面では、溝SD401や石垣SX402、井戸SE403のほか、SK404をはじめとする多数の土壌を検出した(図12)。

SD401 調査区北端で検出した、東西方向に延びる溝である。最大幅1.2m、長さは4.8m以上、検出面からの深さは0.1mほどであった。少なくとも1度掘直されており、掘直された後の溝底には角礫が並べられていた。

SX402 調査区中央で検出した石垣である(図13)。東西方向に約2mにわたって遺存しており、東端は北側に屈曲する。石材は北に面を向け、第5層上面に2~3段に積まれており、裏込めなどはない。石垣西端は攪乱を受けているが、調査区外に延びるとみてよいだろう。高さは最大で0.8mである。石材は北に面を向けて積まれていることから考えて、この石垣を境として北側が低くなっていた可能性が高い。

SE403 直径1.2m、検出面からの深さ1.0m以上を測る素掘りの井戸である。肥前磁器、関西系陶器、軟質施釉陶器、土師器、中国産磁器などが出土した(図14)。

このうち、肥前磁器では蓋41・42・碗43~47・鉢48・猪口49を図化した。蓋41と碗43は、内面にコンニャク印判の五弁花、外面に渦「福」の銘款、内面口縁部に四方禰文と、共通した意匠によって装飾している。組物として生産・使用されたものだろう。蓋42は天井部に銘「富貴長春」を有する。鉢48は、口縁部を輪花としている。猪口49は内面口縁部に四方禰文を施し、外面は上半に草花文、下半に蛸唐草文を描く。

関西系陶器の平碗50は、内面にわずかに絵付の痕跡がある。腰折碗51は、外面を白色の貼花で飾る。土師器皿52は底部に糸切痕がある。同遺構からはこのほかにも大量の土師器皿が出土したが、その中には糸切不調整のものと、ヘラケズリを加えるものが混在していた。透明釉を掛ける軟質施釉陶器灯明受皿53は、胎土の色調を映して柿色を呈する。口縁端部にはススが付着している。土師質に焼成された火消壺の蓋54は、内面天井部にススが付着する。同じく土師質土器焙烙

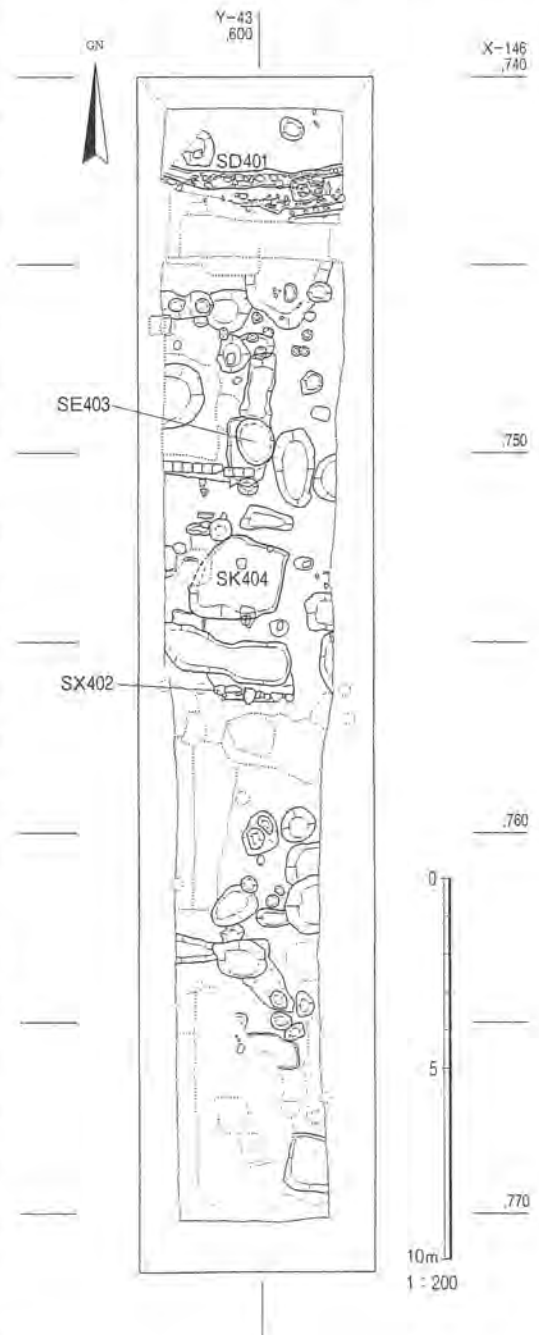


図12 第4層の遺構平面図

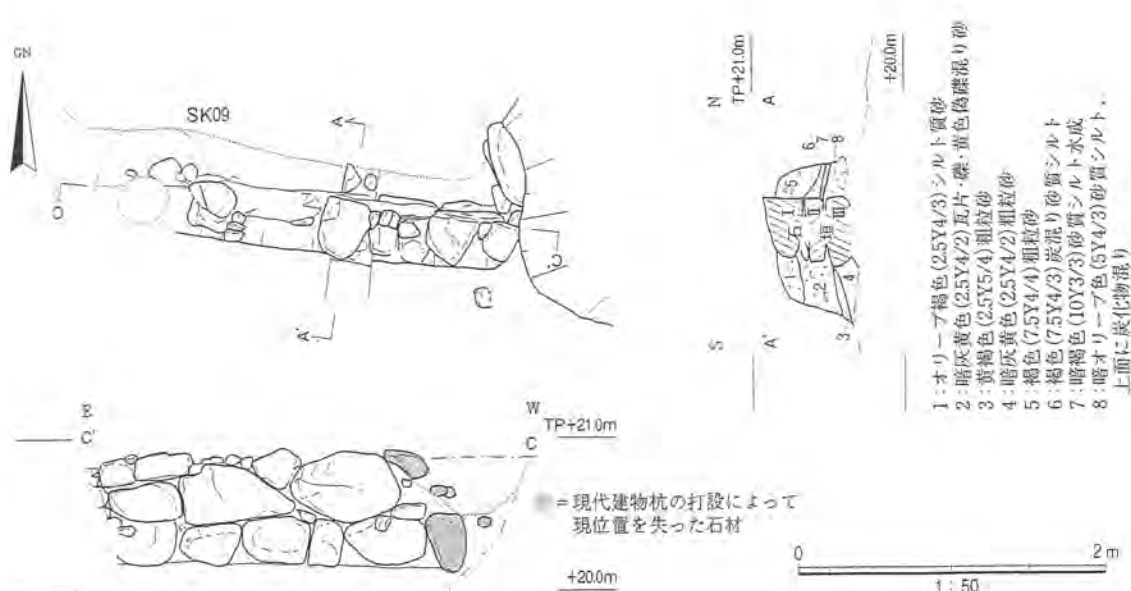


図13 SX402平面・断面図

55は、奈良産と目されるF類の資料である[難波洋三1992]。内面にはコゲ、外面の凸帯以下にはススが付着する。

SK404 最大で1辺1.2mの不整形な土壌で、検出面からの深さは1.1mであった。肥前磁器、肥前陶器、焼締陶器、京焼系陶器、軟質施釉陶器、土師器、中国産磁器などが多量に出土した(図15・16)。

このうち、肥前磁器では色絵の蓋56・染付の碗57・59・青磁皿60を図化した。56は外面に草花文などを描き、内面の天井部にも花文を施す。57は内面底部を蛇目釉剥とし、高台端部には砂が付着している。蛇目凹形高台の鉢60は、内面底部も蛇目釉剥とし、その周囲にヘラ状の工具で髹を表現している。口縁端部をわずかに欠損するが、この部分にはススが付着している。

肥前陶器の刷毛目碗58は、底部の削込みが比較的深い形態である。三島手の大皿66は、火ぶくれがあるものの、内面は鉄釉・黄釉・白泥・緑釉・灰釉を掛分けるなど丁寧に製作された優品である。高台部は露胎とし、高台端面および内面底部には5箇所の目跡がある。

銅緑釉を施す基筒底の皿あるいは鉢61は、底部に型押しで花文を施し、体部も輪花としている。二次的な被熱のため釉薬が剥がれ、胎土も脆くなっている。中国南部からの輸入品である可能性が高い。

京焼系陶器には土瓶62、土鍋64がある。六角形に成形された63は、暗褐色を呈する胎土を使用し、外面の上半にのみ鉄釉を施している。口縁部上面の鉄釉を拭き取っていることから、本来は蓋などとセットで使用されたものであろう。また、外面には貝・青海波・葉などを幾何学的に意匠化して線刻している。香炉と考えられるが、生産地などは不明である。65は備前焼壺で、内面には火摺が残る。外面肩部および外面底部に窯印「▽」を施している。

中国製白磁は比較的まとまった量が出土し、鉢・皿・小碗の3器形があった(図16)。いずれも高台端部に砂が付着する粗製品であり、底面はカンナケズリで仕上げている。このうち鉢はすべて高台内が無釉で、型押しで口縁部を輪花とし文様を内面に施すもの68と、装飾を施さず口縁部が端反りのもの

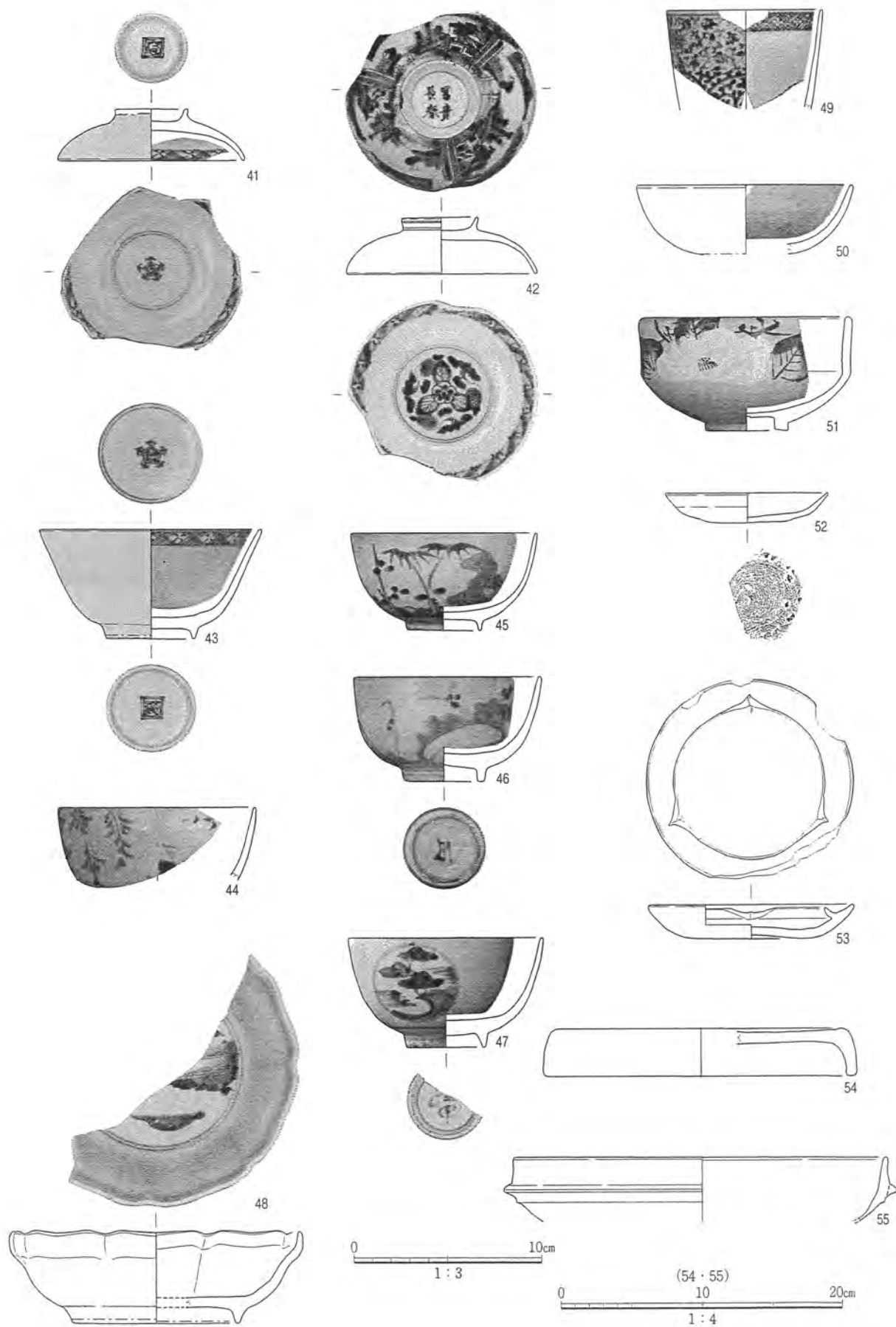


图14 SE403出土遺物実測図



图15 SK404出土遺物実測図

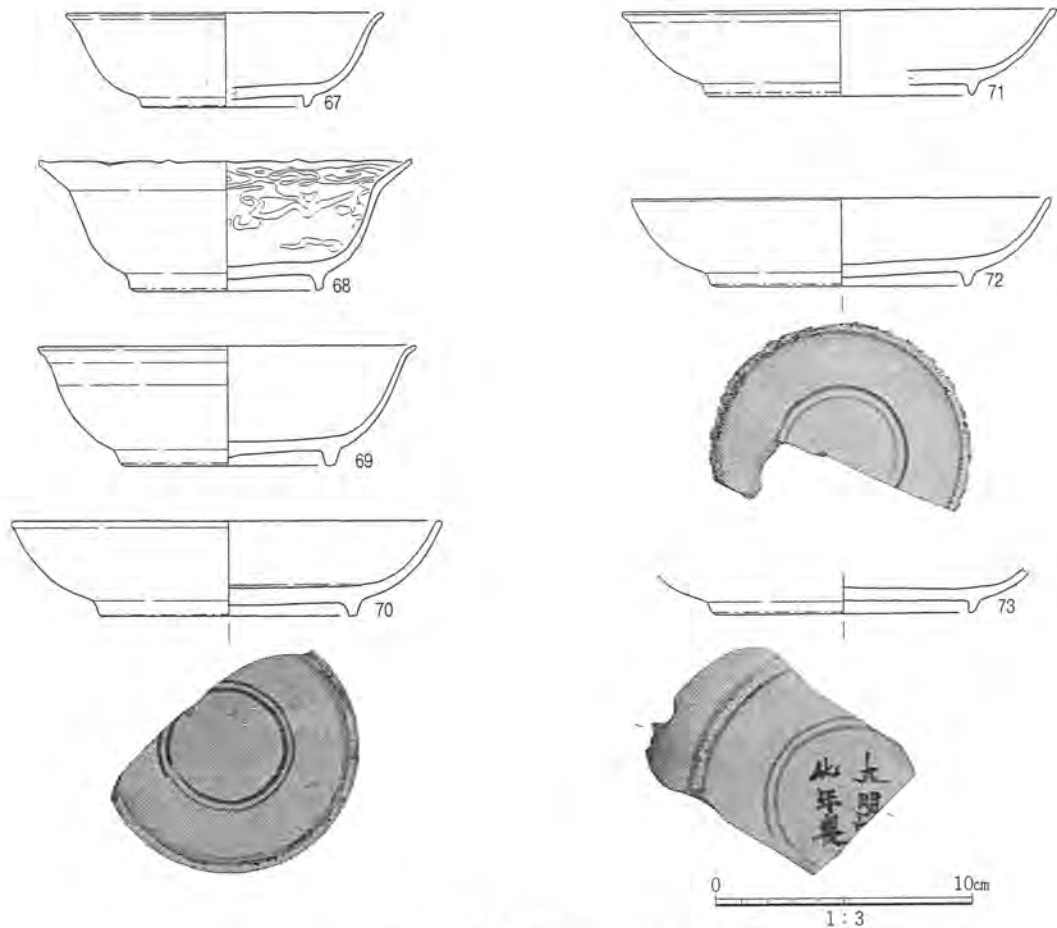


図16 近世遺構出土の中国産白磁実測図
SK404(67・69・70・73)、第4層(68・71・72)

の69とがある。皿は高台内にも施釉しており、無文のもの71、呉須で2重圈線を描き銘款のないもの70・72、呉須で2重圈線を描き「大明成化年製」などの銘款を有するもの73があった。小碗67は高台内にも施釉されていた。



写真2 第4A層出土の小柄

以上、SE403・SK404をはじめとして、第4層上面で検出した遺構の年代は18世紀中頃に求めることができる。このほかに、第4A層から小柄1点が出土している(写真2)。残存長は11.3cmで、身の部分は欠損している。鞘に接する側の表面は錆により観察が困難だが、反対側の面には二重になった長方形文が5単位確認できる。なお、図化した以外に鑄羽口や鋳滓など金属加工に関する遺物が出土している。東接するNW07-2次調査でも18~19世紀の遺構から埴塙・羽口が出土しており、近辺で金属加工を行っていた可能性がある。

〈調査結果の検討〉

1. 後期難波宮期の遺構と遺物について

今回の調査によって、後期難波宮朝堂院西側の地域における建物の配置などについて、一定の知見を得ることができた。以下では、これらについて判明したことと、今後の課題をまとめておく。

a. 五間門区画について

今回の調査によって、NW27・28次およびNW86-24次調査で検出されていた柱穴の中間に柱穴2基を検出し、この位置に五間門区画の南を画する1本柱塀が存在することを再確認した。しかしながら、①五間門区画東面では1本柱塀から築地塀への造替えが確認できるのに対し[李 陽浩2005]、南面ではそうした造替えの痕跡が確認できていない、②南面の1本柱列はその柱間が一定していない、など問題も残すこととなった。このうち②については、NW27・28次調査で検出された南東角部分の2基間が2.85m(約9.5尺)、今回検出された2基間で3.0m(約10尺)、NW86-24次調査で検出された2基間で1.86m(6尺強)である。いずれの柱穴も抜取りなどによって柱痕跡が検出できておらず、厳密な数値ではないが、この中に南に開く門が含まれている可能性などを考えておく必要があるだろう。

b. 側柱建物SB702について

今回の調査によって、NW27・28次、NW07-2次調査で検出していた柱穴が側柱建物として復元できることが明らかとなった。その規模は桁行7間(18.4m)、梁行2間(5.28m)で、柱間寸法は桁行8.5尺、梁行9尺である。この建物は、東の柱筋が五間門区画東面の掘立柱塀と揃っており、また両者の柱間寸法(9尺)が等しいため、同時に建設された可能性が高い。ただし、①何らかの区画施設を持つことが一般的な宮殿内にある、現状では区画施設が検出されていない、②五間門区画と同時に建設された可能性が高いが、SB702には建替えの痕跡がなく、五間門区画が造替えられた時、どのような姿で存在していたのか(あるいは廃絶したのか)を検討する必要がある、③SB702が単独で存在したことは考えにくく、周辺における建物の存否を確認する必要がある、など今後解決してゆくべき課題は多い。

c. 第6層下面の耕作溝について

後期難波宮に直接係わる遺構ではないが、第6層下面で検出した溝群についてもふれておきたい。

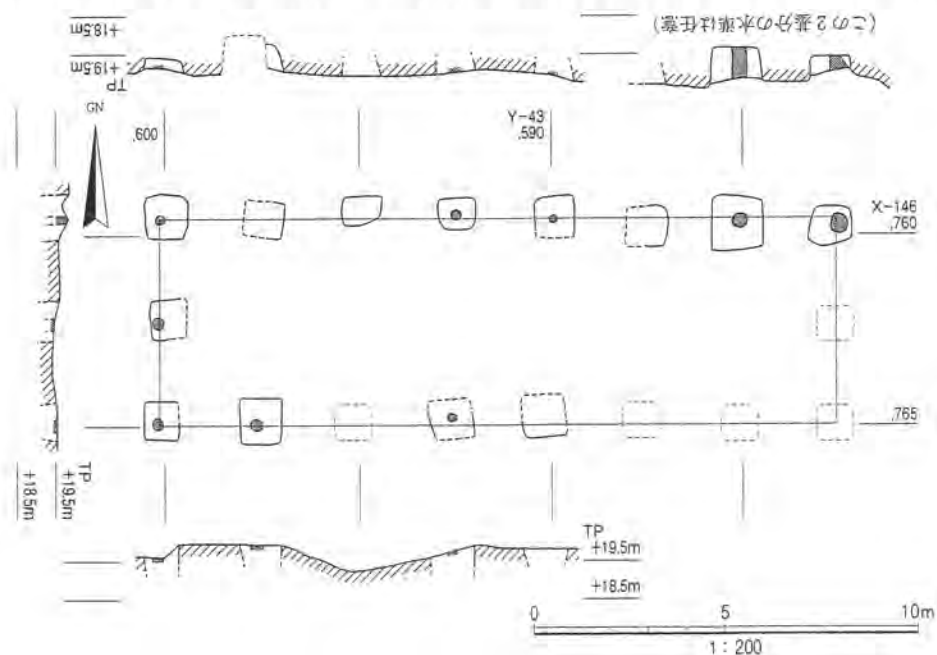


図17 SB702平面・断面図

先述のとおり、同溝群はほぼ正南北に延びていた。一方で、豊臣期の遺構は地形に規制され、北で東に5度振る方向を採っている。このことは、第6層が形成された時期(13世紀以降)にまで、正方位を採る地形、具体的には難波宮造営に伴って整形された地形が残存していた可能性を示唆しており、難波宮廃絶後の土地利用を考える上で興味深い知見となった。

2. 豊臣期の遺構と遺物について

これまでの難波宮整備調査では、豊臣期の遺構はよく残っていないことが多かったが、今回の調査では特に豊臣前期の遺構面(第5B層上面)が良好に残っていた。この面では最初にSD501・506が、そ

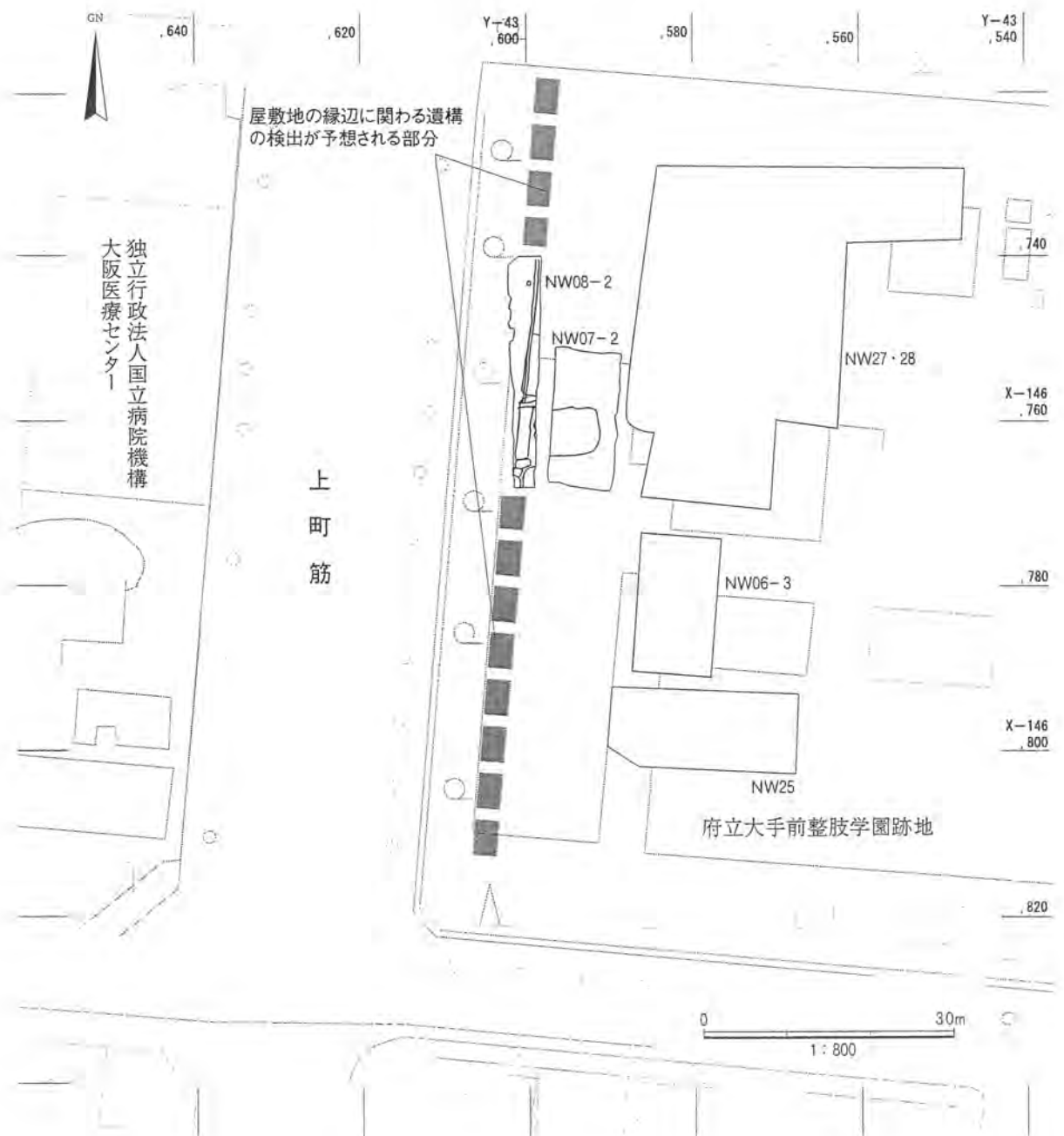


図18 豊臣期の遺構と周辺の状況図

れらが廃絶した後にSK503・504が掘削され、SK504が埋没した後にSK505が掘られるという変遷を把握することができた。これらの豊臣前期の遺構群は最終的には窪みを埋めて整地され、その上に礎石建物が建てられていた。整地の時期については、整地層(第5A層)およびその上面から掘られたSK514出土遺物がいずれも豊臣前期の組成であることから、豊臣前期の間に整地が行われた可能性も考えられる。なお、礎石建物は大阪夏の陣で被災しており、同様な状況は国立病院機構大阪医療センター内でも確認されている。

遺物について興味深いのは、第5層上面の遺構で出土した金属加工関係の遺物や、赤漆のパレットとして用いられた皿である。金属加工関係の遺物には埴塙や鞆羽口があり、これらに対して蛍光X線による成分分析を行ったところ、銀や銅・鉛・亜鉛が検出された。これは銀や銅合金の溶解・加工や鑄造が行っていたことを示すものであり、近隣に工房があったことが推定される。

また、第5層上面の遺構群のなかでSD501やSK504は北で東に5度振った方向であり、上町筋と同じである。東隣のNW07-2次調査地で豊臣期と想定される遺構がSX95以外になかったという点が、豊臣前期の状況をそのまま反映しているのであれば、当調査地辺りでは遺構が上町筋と平行して線状に並ぶことになる(図18)。

同様な状況は谷町筋東側で指摘されている[松尾信裕2008a]。ここでは武家地の広い街区が豊臣前期から存在したことが推定されていて、銅合金などの鑄造関連遺物が出土する廃棄土壌が敷地の縁辺部で直線上に並んで検出されている。また、これら鑄造関連遺物が出土する遺構は、豊臣前期段階の整地によって埋められており、それ以後は金属加工が行われた痕跡は検出されなくなり、土地利用が変わったことを示している。これは豊臣氏大坂城築城とともに進行する屋敷の建設に伴って、屋敷単位で金属加工が行われていたが、豊臣前期の途中で金属加工が谷町筋西側に集約されたためと考えられている。

上町筋は豊臣前期に法円坂一带に設定された街区と方向を同じくし、その西側には武家地の広い街区が復元されている。一方、東側は豊臣前期の遺構がこれまでほとんど見つかっていなかったことから、この段階では開発が進んでおらず、武家地が東に広がっていなかった可能性も想定されていた[松尾信裕2000・2008b]。しかし、今回の第5B層上面の遺構群は、その状況から屋敷地の縁辺部であることを示し、これまではっきりしなかった豊臣前期の上町筋の東側に武家地が広がる可能性が強くなった。

なお、この時期の遺構群が非常に良好な状況で検出されたのは、今回の調査地が史跡難波宮跡の敷地の縁辺部に位置し、近代以降の建築による破壊を免れたという点が大きい。当敷地上町筋側の縁辺部は未調査部分が多く残り、今後の調査でも豊臣前期の遺構が検出される可能性が高い。

3. 近世の遺構について

第4層では、溝SD401、石垣SX402のほか、多数の土壌を検出した。それらの年代の多くは、18世紀中頃に求められる。

この付近の屋敷割を描いた同時代史料として、1745(延享2)年頃の『大坂御家中屋敷割図』[大阪大

学総合学術博物館・大阪歴史博物館2008]や、1806(文化3)年の『増修改正摂州大阪地図』がある。これらを見ると、街区中央は武家屋敷として表記されるとともに、街区の西側と南側の周辺部はいずれも町屋にあてられていたことがわかる。おそらく今回の調査地もこの町屋区域に含まれていたとみてよい。その町屋域内部の地割は残念ながら記されていないものの、1886(明治19)年に作られた『大阪実測図』では、当調査地南側街区の縁辺に町屋があり、かつその間口方位は東西方向であったことが見て取れる。近世の絵図では2つの街区はいずれも縁辺を町屋と表記しており、『大阪実測図』の内容を加味すると、調査地が含まれる街区においても近世には同様の町屋地割すなわち東西方向に間口を持つ敷地が展開していた可能性が極めて高い。

よって、今回の調査で検出した溝SD401および石垣SX402が町屋区域を画するための地境であると考えたい。なお両遺構の間隔は約13m(約7間)であるが、均しくこの間口間隔で南北が区画されていたのかどうかは今後の課題である。

〈まとめ〉

今回の調査で得られた成果を時代別に要約すると、以下の通りである。

【難波宮造営以前】

- ・柱穴を検出したが、建物などとして復元することができなかった。

【後期難波宮】

- ・五間門区画の南を画する掘立柱列を確認した。ただし、五間門区画東面で確認された造替の痕跡はなく、この区画の変遷は今後解決すべき課題である。
- ・後期難波宮の朝堂院西側に側柱建物が存在することを確認した。この建物は五間門区画と同時に造営された可能性が高いが、建替の痕跡はなく、廃絶時期や性格などが不明である。また、区画施設が検出されていないことも、宮殿の遺構としては異例である。周辺における建物の存否と合わせ、今後明らかにしていく必要がある。

【豊臣期】

- ・周辺調査では知見の少なかった豊臣期の遺構を、良好な状態で検出することができた。
- ・該期の遺構は上町筋と方向を揃えるなど、豊臣前期における一連の開発の中で形成されたと考えることができ、上町筋の東側にも屋敷地が広がる可能性が高くなった。
- ・該期の遺構から、赤漆塗布時にパレットとして使用されたと考えられる瀬戸美濃焼皿や、羽口・垢場といった金属加工関連遺物などが出土した。今後、該期の手工業生産について考える上で大きな手掛かりとなる資料である。
- ・敷地の縁辺部に金属加工関連遺物が集中し、豊臣前期の中でそれらが投棄され、整地が行われる。こうした動向は谷町筋沿いでのあり方と共通し、該期における武家屋敷の変遷過程をある程度一般化できる可能性がある。

【徳川氏大坂城期】

- ・敷地境と考えられる遺構SD401・SX402を検出した。該期の調査区周辺における土地利用のあ

り方は必ずしも明確ではなく、今後、この地域の町割を復元する上で重要な資料となる。

- ・18世紀代の遺構を中心に、中国産白磁が多く出土した。該期の陶磁器組成としては異例であり、今後の分析を通じて使用層の分析などに資することが期待できる。

註)

- (1)本報告では1尺=0.296mとして計算した。
- (2)該当部分はTP+19.4mまでSK301による攪乱が及んでいたが、SB702を構成する他の柱穴の底面レベルを考えれば(図17)、この部分に柱穴が存在しなかった可能性が高い。
- (3)分析にあたっては大阪歴史博物館設置のエネルギー分散型蛍光X線分析装置(EDAX DX95改良型)を用い、大阪市文化財協会文化財研究部 伊藤幸司・藤田浩明が実施した。なお本文中に記述される分析作業はすべて同条件下で行っている。
- (4)動物骨の同定については、大阪市立大学大学院医学研究科の安部みき子氏にご教示を賜った。また、写真1については安部氏のご教示に基づいて寺井が作成した。

引用・参考文献

大阪市教育委員会1967、「第27・28次発掘調査概報」：『昭和42年度(第26次～第29次)難波宮跡調査報告書』、pp.3

- 4

大阪市文化財協会1995、「瓦埴類」：『難波宮址の研究』第十、pp.97-124

1996、「森の宮遺跡」Ⅱ

2004a、「NW93-4・12次およびその周辺の調査」：『難波宮址の研究』第十二、pp.95-118

2004b、「NW90-7次および85-39次調査」：『難波宮址の研究』第十二、pp.119-149

2005、「後期難波宮五間門区画の調査」：『難波宮址の研究』第十三、pp.71-96

2008、「平成19年度難波宮環境整備事業に伴う難波宮跡発掘調査(NW07-2)報告書」

大阪大学総合学術博物館・大阪歴史博物館2008、「城下町大坂-絵図・地図からみた武士の姿-」大阪大学総合学術博物館叢書3、大阪大学出版会

佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：大阪市文化財協会『難波宮址の研究』第十一、pp.253-265

難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の焙烙」：大阪市文化財協会『難波宮址の研究』第九、pp.373-400

松尾信裕2000、「大坂城内の大溝」：『大坂城と城下町』、pp.61-89

2008a、「豊臣期大坂城惣構内の景観」：『大坂城天守閣紀要』第36号、pp.4-15

2008b、「大坂城下町」：仁木宏・松尾信裕編『信長の城下町』高志書院、pp.201-224

李 陽浩2005、「後期難波宮における建物造替について」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十三、pp.97-105

第7層上面の遺構
(南から)



SA701検出状況
(西南西から)



SB702検出状況
(南西から)



第5層上面の遺構
(南から)



石垣SX202検出状況
(北東から)



調査区西壁断面
(南東から)



中央区北久宝寺町三丁目における建設工事に伴う
大坂城下町跡発掘調査(OJ07-11)報告書

調査箇所 大阪市中央区北久宝寺町3丁目18-10~12・18-14~25
調査面積 220㎡
調査期間 平成20年3月25日～5月8日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、高橋 工、市川 創、櫻井久之、
池田 研

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城下町跡の西南端に位置する(図1)。西側には大阪市を南北に貫くメインストリートのひとつである御堂筋が走り、御堂筋の西側には「南御堂」と東本願寺難波別院が立地する。中央大通南側の調査はこれまで比較的件数が少なかったが、近年ではOJ05-9次調査[大阪市文化財協会2006]・OJ07-8次調査[大阪市文化財協会2008]が近隣で行われている。このうち今回の調査地の北東約150mで行われたOJ05-9次調査では、豊臣期から18世紀後半までの遺構を確認している。また南西約200mで行われたOJ07-8次調査では、17~18世紀の遺構が検出された。こうした既往の成果を受け、慶長3(1598)年に現在の位置に建立された南御堂(当初は大谷本願寺)との関係を含め、今回の調査では城下町南西端の開発の様相について、知見が深まることが期待される場所であった。

今回の調査地では、事前に大阪市教育委員会によって敷地内で試掘調査が行われた。その結果、現地表面下約1.6m以下に近世の整地層が良好に残存することがわかったため、発掘調査を実施することになった(図2)。

発掘調査に当っては、残土置き場を確保するために調査区を東西に分け、東調査区を先行して調査し、埋戻した後に西調査区の調査を行った。東調査区については2008年3月25日に調査を開始し、4月11日には調査を終了、翌4月12日に埋戻しを完了した。続いて西調査区の調査を4月14日より開始し、5月7日に調査を終了、翌15日に埋戻しおよび現場からの撤収を完了した。

調査に際しては、両調査区とも現地表面から約1.7mまで重機による掘削を行ったのち、人力によって遺構の検出・掘下げ・記録など

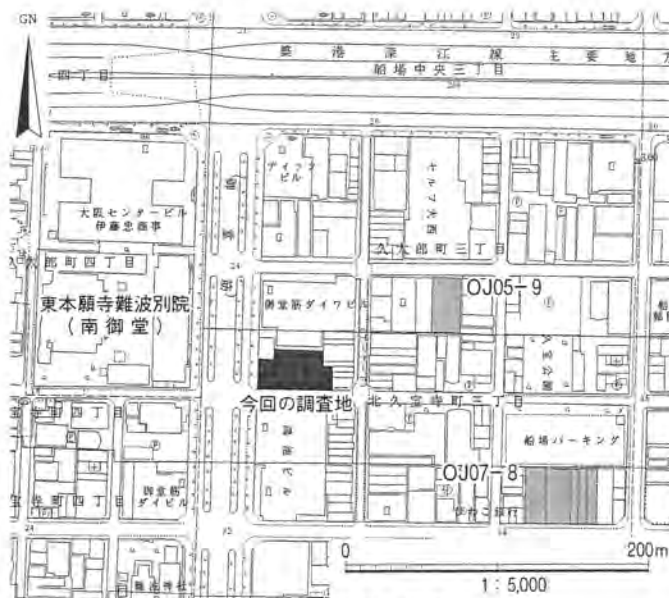


図1 調査地の位置

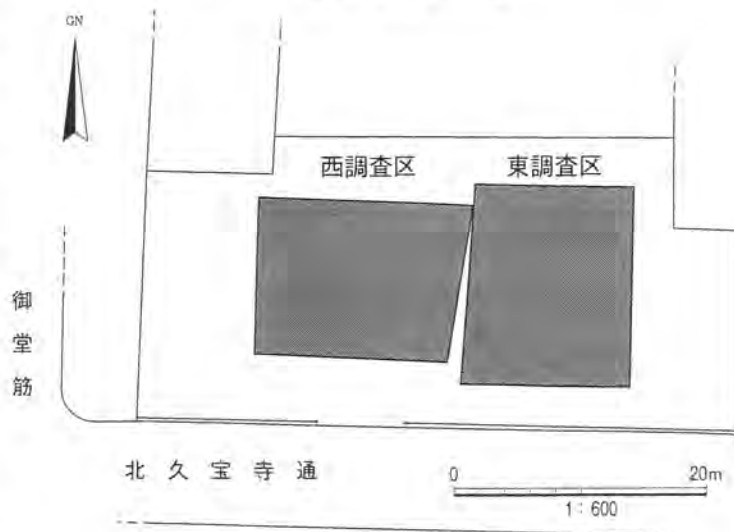


図2 調査区配置図

の作業を適宜行った。

以下、本報告で使用する標高はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中では「TP+○m」と示す。示北記号は座標北である。

2) 調査の結果

i) 層序

今回の調査地では、現地表から100~160cm前後が近・現代の整地層によって失われていたが、それ以下では比較的良好に近世の整地層が残存していた。また、今回の調査以前では東調査区で二筆、西調査区で二筆の、最大で四筆の敷地を確認した。これらを東から敷地A~Dとし、以下では必要に応じ敷地ごとに各層の特徴について述べる(図3~5)。

第0層：近・現代の整地層で、層厚は100~162cmある。

第1層：重機によって掘削したため詳細は不明であるが、18世紀後半以降の整地層である。層厚は最大で72cmある。本層から漳州窯産と考えられる粗製の白磁皿1のほか、軽石に穿孔を施した石製品2が出土している。

第2層：妙知焼(1724年)後の整地層である。層厚は最大で15cmであり、調査区のほぼ全面に分布していた。暗オリーブ褐色を呈し、炭・焼土を多く含むシルト質砂からなる。

第3層：17世紀末葉の整地層であり、灰黄色を呈するシルト質砂からなる。層厚は敷地A・B・Dでは32cm、敷地Cでは厚く60cmであった。この時期以降、第1層の段階に至るまで石垣SX301・302およびこれを踏襲・増設した石垣によって敷地が分けられ、各敷地に高低差が生じている。東調査区の敷地Aでは、礎石列SB303などを検出した。4つの敷地中で最高所となる敷地Cでは、妙知焼後の整理に係る土壌SK304~307が掘削されていた。敷地Dでは南半部に礎石がまばらに分布し、北半部ではゴミ穴が掘削されていた。

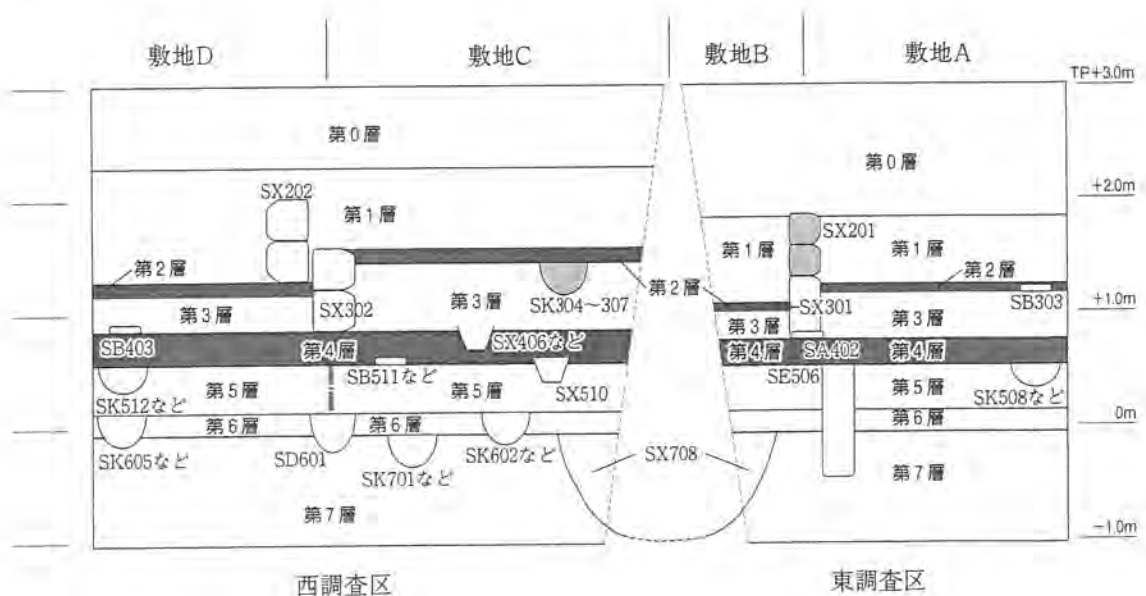


図3 地層と遺構の関係模式図

第4層：17世紀後葉の整地層である。層厚は30cm前後であり、炭・焼土を含むシルト質砂からなり調査区の全面に分布していた。本層の時期には東調査区で柵SA402が造られ、敷地A・Bを区画している。西調査区では北端まで礎石が分布している。このうちSB403とした礎石立建物が第5層までの敷地境界をまたいでいることから、この時期には西調査区全域がひとつの敷地として機能していた可能性がある。そのほか、井戸SE404・405、埋甕遺構SX406・407などを検出した。

第5層：17世紀中～後葉の整地層である。調査区全面に分布し、層厚は最大で72cmであった。岩相はにぶい黄褐～黒褐色を呈するシルト質砂である。東調査区では北久宝寺通側の調査区南半は居住域であったとみられる一方、敷地北半ではSK502～505・507～509など多数のゴミ穴のほか、井戸SE506も検出された。西調査区では、境界施設は明確ではないが第6層の段階で存在した敷地境の位置が踏襲されている。敷地Cでは礎石立建物SB511のほか、埋甕遺構

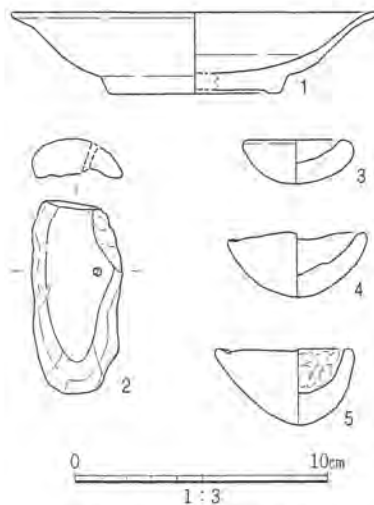


図5 第1・7層出土遺物
第1層：(1・2)、第7層(3～5)

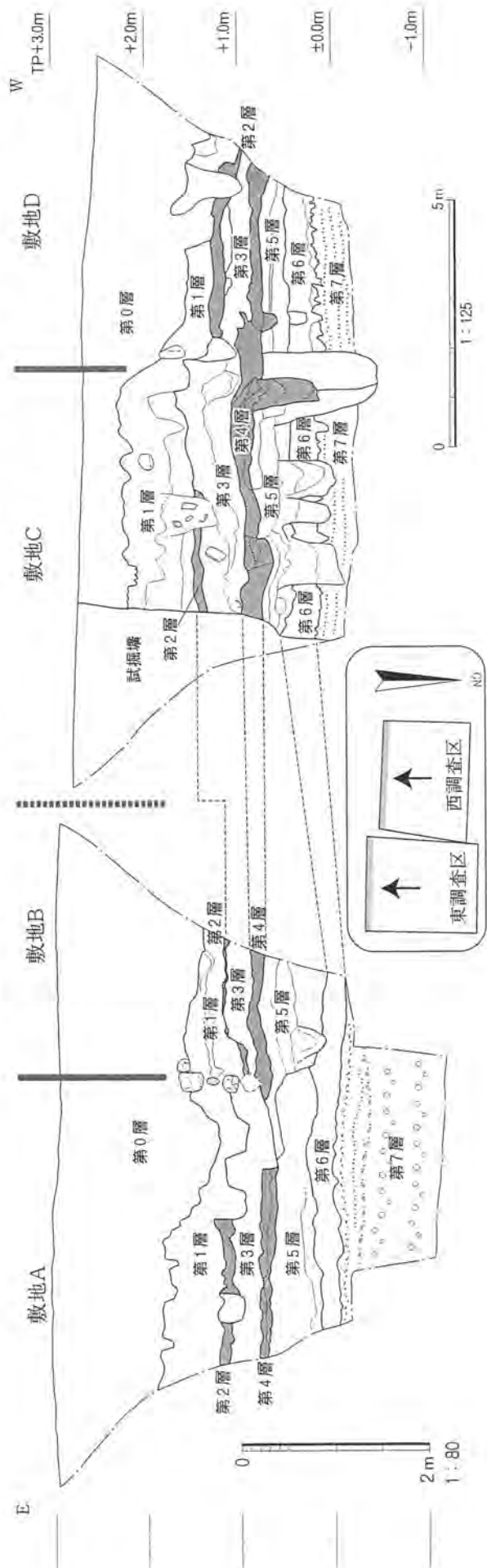


図4 調査区南壁断面

SX510を検出した。敷地Dでは礎石などの分布がまばらで、SK512などのゴミ穴が掘られていた。

第6層：17世紀前葉の整地層である。調査区の全面に分布し、上面・下面ともやや東へ低くなっている。層厚は最大で24cmであり、灰黄褐～褐色を呈するシルト質砂からなる。本層上面では、西調査区にのみ遺構が存在した。敷地境の溝SD601のほか、敷地Cでは土壌SK602・603など、敷地DではSK605～610などを検出した。

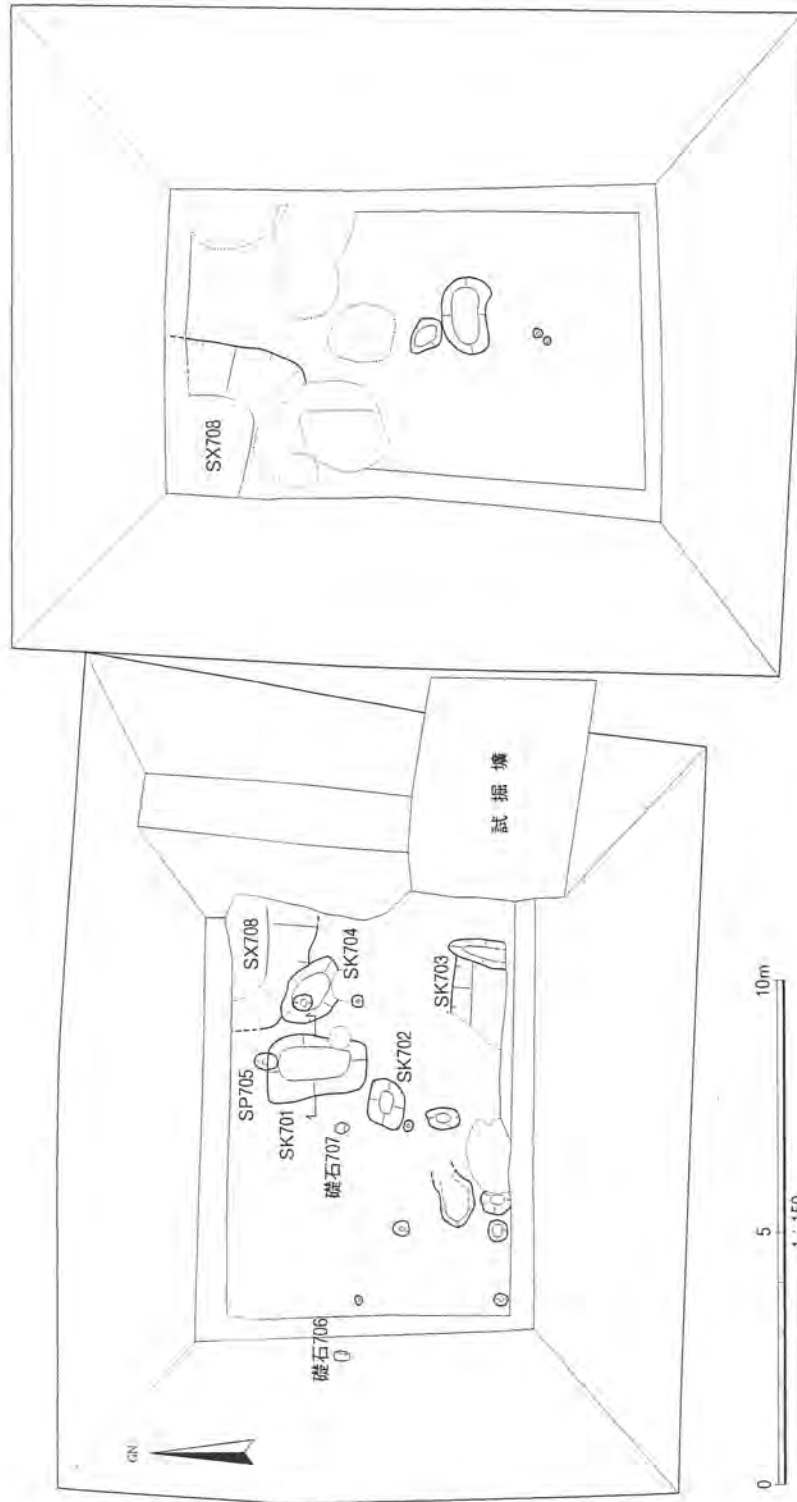


図6 第7層上面の遺構

第7層：上方細粒化する砂礫を主体とする海浜成層である。調査区の一部を掘下げて確認したところ、おおよそ南から北へ向う水流によって形成されていた。東調査区の深掘り箇所から、手づくねの土製品3～5が出土している。本層上面では、土壌SK701～705、礎石706・707、窪地状の遺構SX708などを検出した。

ii) 遺構と遺物

a. 第7層上面の遺構と遺物(図6・7)

自然堆積層である第7層上面で検出した遺構群である。土壌SK701～705、礎石706・707、窪地状の遺構SX708などがある。この時期にはまだ敷地境は形成されていない。また以降の時期に比べて遺構の分布はまばらである。

このうちSK701は、西調査区で検出した土壌である。長方形のプランで、南北2.78m、東西1.20mを測り、検出面からの深さは0.25mあった。当遺構からは須恵器・瓦器・瓦質土器・瀬戸美濃焼・肥前陶器のほか貝が出土し、このうち瓦質土器火入れ6を図示した(図7)。

礎石706・707は約5m離れて東西に並ぶが、建物としては復元できなかった。

窪地状の遺構SX708は、東調査区の西北部および西調査区の東北部で検出した。検出面からの深さは0.96mある。埋土(暗灰～黄褐色砂)の類似性から、一連の遺構と考える。当遺構からは、いずれも細片であるが土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦器など中世以前の遺物のみが出土した。

これら第7層上面で検出した遺構群からは肥前磁器は出土しておらず、より古い遺物のみが出土したSX108を除けば、豊臣期の遺物相を示している。

b. 第6層の遺物(図8)

第6層からは西調査区を中心として遺物が出土した。7は瀬戸美濃焼の平皿である。灰白色の長石釉を施す、いわゆる志野焼である。内面・外面ともに3箇所目跡を残す。瀬戸美濃焼ではこの他に、全面に鉄釉を施す鉢14が出土した。外面には双渦文を貼付けている。肥前陶器では、碗8・9・皿10・鉢11が出土している。灰釉を施す碗8・9は、外面底部に「工」字の墨書を有する。内・外面ともに3箇所の胎土目を残す。肥前陶器皿10も、同じく灰釉を施し胎土目を残す。肥前磁器では碗12・皿13を図示した。碗12は腰の張る形態であり、2点とも底部には砂が付着している。焙烙15は外面下部にタタキ痕が残り、また外面の全面にススが付着している。16はイタヤガイ製の貝杓子、17は小型の

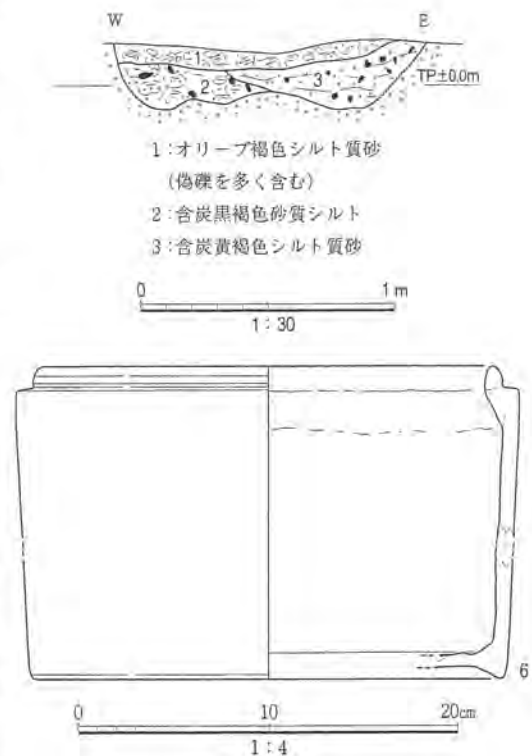


図7 SK701断面図と出土遺物

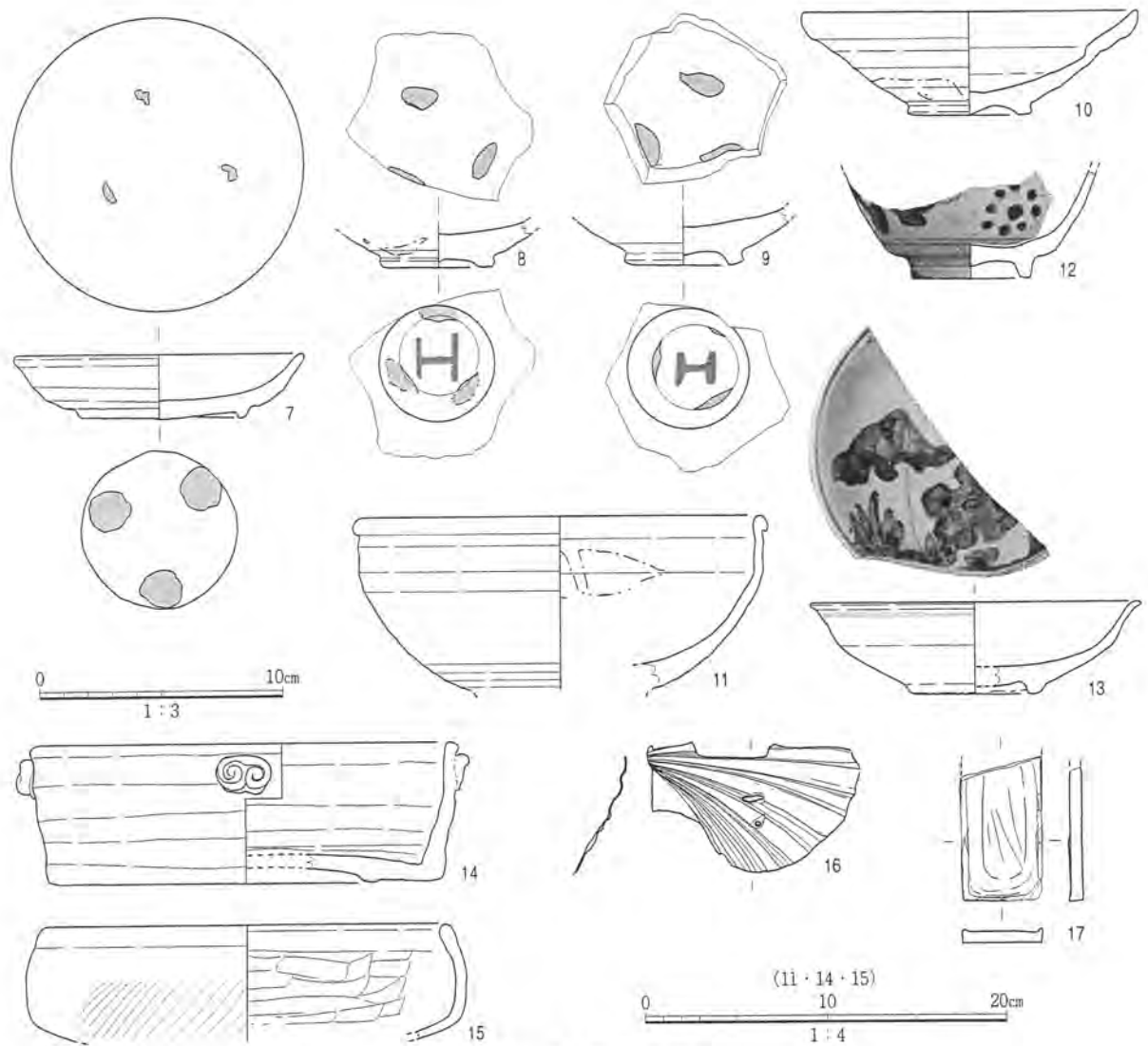


図8 第6層出土遺物

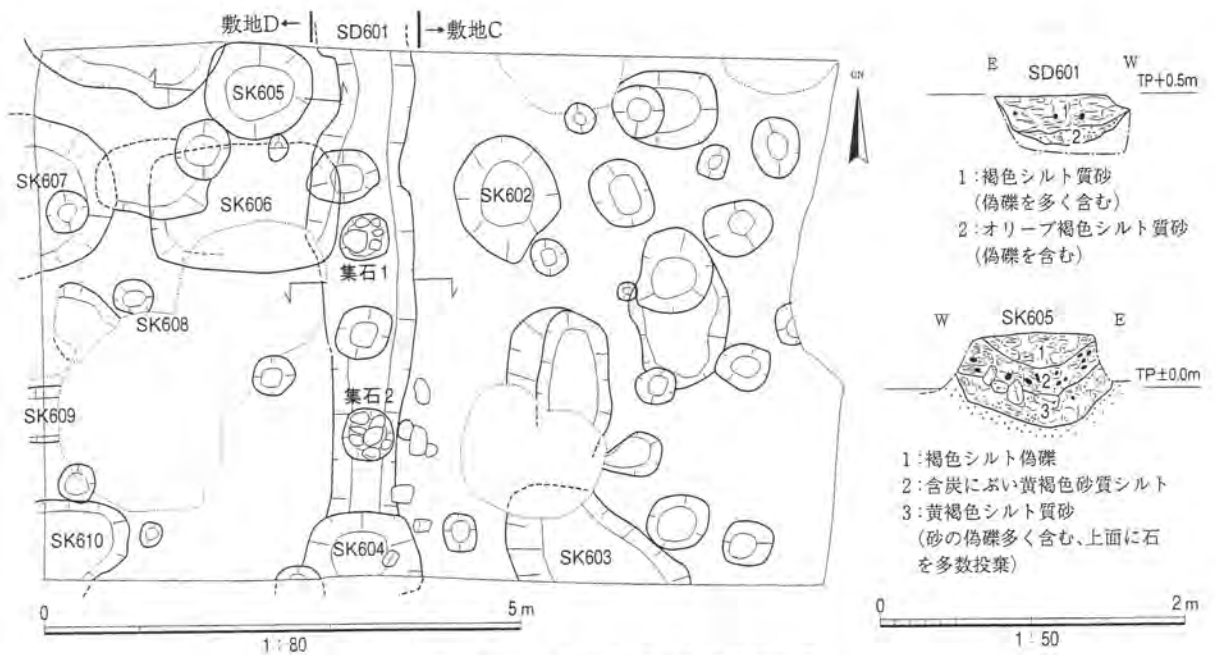


図9 第6層上面の遺構と各遺構断面図

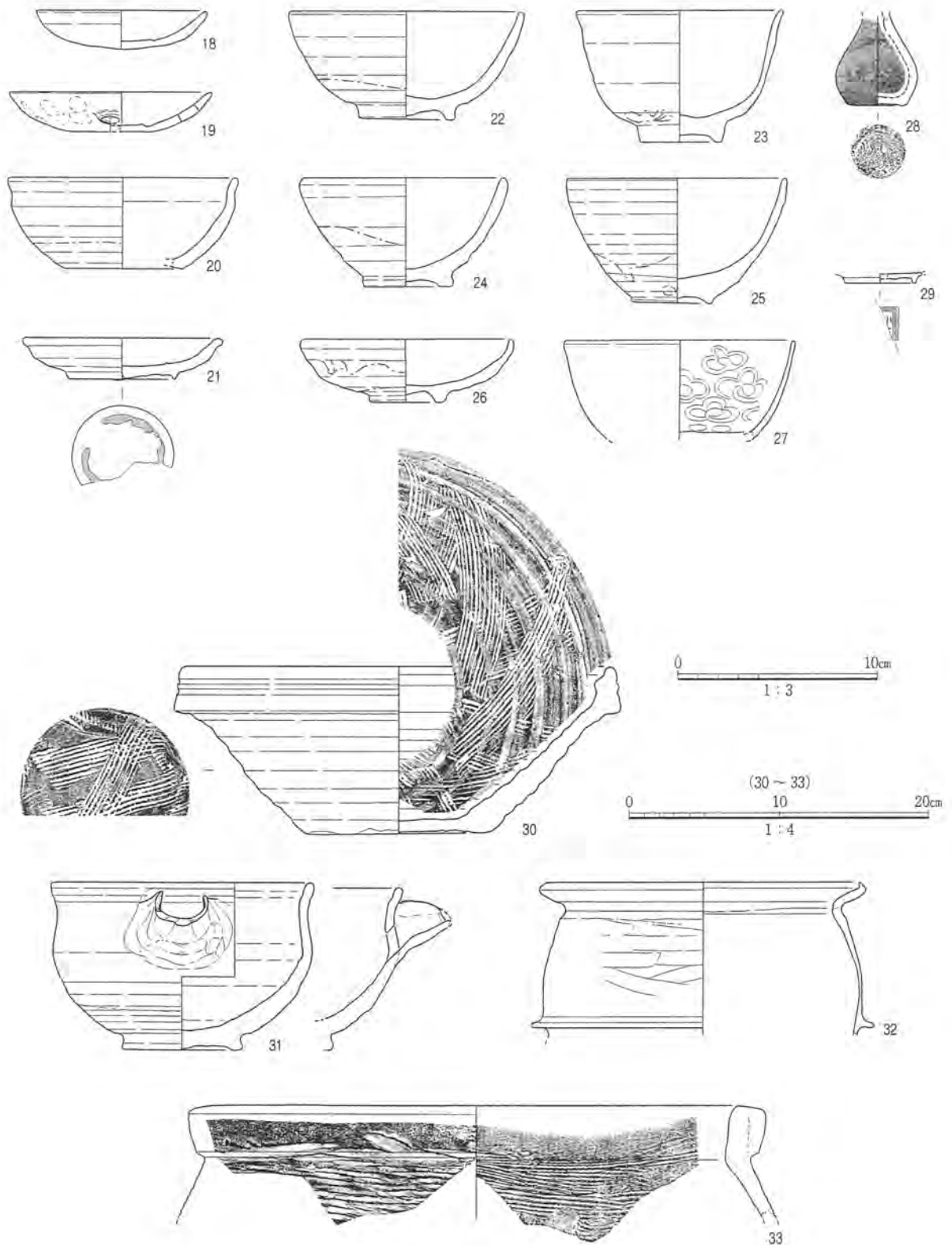


図10 第6層上面検出遺構からの出土遺物

SD601(25・29)、SK602(23)、SK603(19・20・22・26・28・32)、
SK604(21)、SK605(24・27・30・33)、SK609(31)、SK610(18)

石製硯である。これら第6層から出土した遺物は、17世紀前葉の遺物相を示している。

c. 第6層上面の遺構と遺物(図9・10)

第6層上面では、西調査区でのみ遺構を検出した。該期には溝SD601が掘削され、敷地CとDの境となっている。このうち敷地Cでは土壌SK602・603をはじめとする多数の土壌を、敷地DでもSK605～610など多数の土壌を検出した。またSD601上には土壌SK604が掘削されていた。

このうち敷地境の溝SD601は、ほぼ方位に則って南北に掘削されている。長さ5.60m以上、最大幅0.96m、検出面からの深さは0.35mであった。明確な機能時堆積層は確認できなかったが、溝底の高さは北に向って0.1mほど低くなっており、敷地の境界となるとともに背割下水への排水溝として機能していたことがわかる。また溝の埋没後に掘削された土壌中に、根固め状の集石が認められた(集石1・2)。溝廃絶後の一時期、柵・堀などが敷地C・D間の境界施設として機能していた可能性がある。本遺構からは25・29などが出土した。

土壌SK605の埋土は3分できたが(図9断面図)、第7層に由来すると思われる偽礫を多く含む加工時形成層(同3層)の上面には拳大の石が多く捨てられていた。本遺構からは24・27・30・33など多くの遺物が出土している。

これら第6層上面で検出した遺構からは、土師器皿18・19、瀬戸美濃焼天目碗20・平皿21、肥前陶器碗22～25・皿26・片口鉢31、白磁27、ミニチュア品28、磁器29、備前焼播鉢30、土師器羽釜32・大甕33などがある。このうち土師器皿18・19はともに手づくねで、19は焼成前に内側から穿孔している。瀬戸美濃焼の天目碗20は厚い鉄釉を施し、外面下半は露胎とする。灰釉平皿21は、高台内に輪状の目跡を残す。肥前陶器碗のうち、22・25は灰釉、23は藁灰釉、24は透明釉を施す。皿26は灰釉、片口鉢31は外面下半を除き透明釉である。花文を型押しする磁器碗27は、中国産と考えられる資料である。内底面にわずかに圏線状の染付が観察できる。同じく中国産と思われる磁器29の底部は、厚さ2mmと極めて薄い。判読できないが、外面底部には陽刻で字款を表している。また釉薬は鉛釉であろうが、二次的な被熱によって表面が発泡し判然としない。ミニチュアの壺28も二次的な被熱により表面が劣化している。おそらくは鉛釉による緑釉を施し、呈色材の含有量が異なる緑釉で文様を表現したものであろう。底部には糸切痕を留める。備前焼播鉢30は、櫛状の工具によって斜め上方へ播目を刻む。口縁部下には重焼き時の融着痕がある。土師器羽釜32は口縁端部を上方へ鋭くつまみ上げ、外面の鏝部分以下にはススが付着している。大甕33は外面がタタキ整形、内面にはハケメが残る。

これらの遺物群は、細片のため図化できなかったが肥前磁器を含んでおり、17世紀前葉の遺物相を示している。

d. 第5層の遺物(図11)

第5層からも多くの資料が出土したが、このうち特徴的なものを図示した。なお、西調査区から出土した資料については上半と下半で時期差が認められるため、分けて報告することとする。

西調査区の第5層上半からは、土師器皿34、肥前磁器碗35・皿36・大皿37、瀬戸美濃焼天目碗38、肥前陶器瓶39、瓦質土器火鉢40、土人形41、土製品42などが出土した。このうち土師器皿34は外面に指頭圧痕を残し、口縁端部にススが付着する。灯明皿として使用されたものであろう。網目文を染付

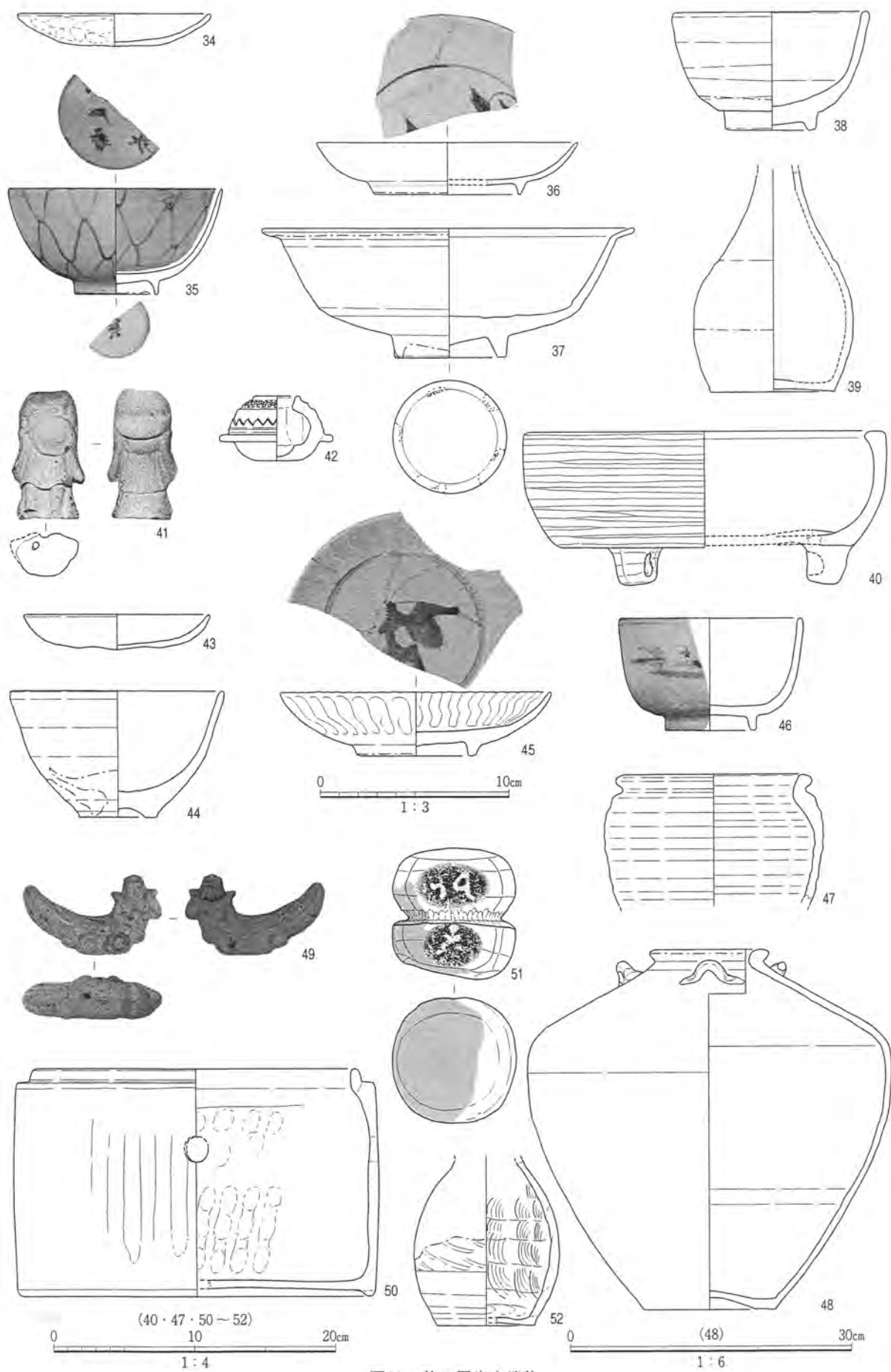


图11 第5層出土遺物

西調査区第5層上半(34~42)、西調査区第5層下半(43~49)、東調査区第5層(50~52)

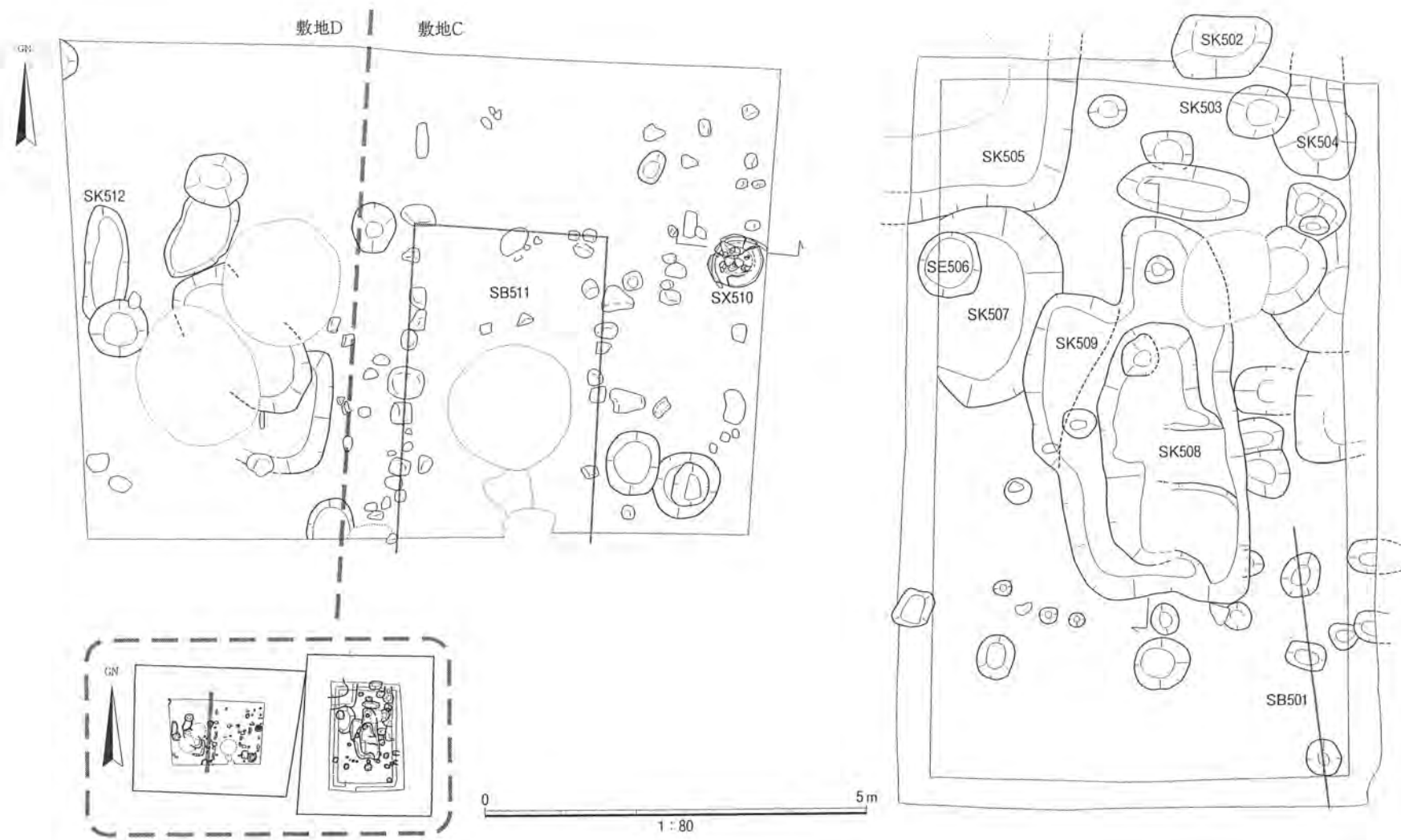


図12 第5層上面の遺構

する肥前磁器碗35は器壁が薄く、内底面および外面底部に字款を有する。皿36も器壁が薄い。折縁の大皿37は内面に銅緑釉、外面に透明釉を掛ける。内底面は蛇の目釉剥ぎであり、高台畳付には目跡が5箇所確認できる。ほぼ完形の瀬戸美濃焼天目碗38は、天目形のメリハリが少なく丸碗に近い形態である。黒色の鉄釉を厚くかける。外面下半は露胎である。肥前陶器瓶39は全面に鉄泥を塗り、その後上半部に藁灰釉を施している。瓦質土器火鉢40は外面に横方向のていねいなヘラミガキを施す。中実の脚部は内側に切込みを入れ、焼損を防いでいる。顕著な使用痕は認められない。風呂敷を背負い笠を持つ土人形41は頭部を欠損するが、西行法師を模したものであろう。型を合わせて製作されており、表面には雲母が付着する。また接着部分はいねいに調整され、底部は穿孔されている。穿孔具の直径は3.5mm程度であり、後出する資料と比較して直径が小さい(註1)。42は釜形の土製品である。底部には布目痕があり、外面は鋸歯文および列点文で飾る。

西調査区の第5層下半からは、土師器皿43、肥前陶器碗44、肥前磁器皿45・碗46、備前焼壺47、施釉陶器壺48、土人形49などが出土した。このうち肥前陶器碗44には灰釉が施されている。肥前磁器皿45は型打ち成形で、凹部にはわずかに布目が残る。肥前磁器碗46は丸みを帯びた形態である。また45・46とも高台端部には砂が付着している。備前焼47は全面に塗土を施す。施釉陶器壺48は口縁部直下に4つの耳が付き、肩の張る特徴的な器形である。灰白色を呈する胎土は比較的精良で、直径1mm以上の鈎物を含めない。口縁端部と底面を除く全面に鉄釉を施しており、それぞれに融着の痕跡がある。底部は窯道具、口縁端部は蓋と接して焼成された可能性がある。堺環濠都市遺跡で類品が出土している[土岐市美濃陶磁歴史館1996]。土人形49は飛天を模したのか。淡褐色を呈する精良な胎土を使用し、型離れのための雲母が表面に付着している。底面には斜め方向に穿孔が施されるが、その直径は3.5mmとやはり小さい。

東調査区の第5層からは、瓦質土器火入れ50、石製品51、肥前陶器瓶52が出土した。被熱痕を留める石製品51は、梵字「**𑖀**」・「**𑖄**」の一部と思われる線刻が判読できる。形状と併せ、一石五輪塔の一部であろう。ただし上・下面が著しく摩耗していることから、磨潰具などとして転用されたことが推測できる。鉄釉を施す52は、外面上半にタタキ痕、内面に当て具痕がある。いわゆる「叩き唐津」の瓶である。

以上、西調査区第5層下半から出土した遺物は17世紀中葉まで、同じく上半から出土した遺物は17世紀中葉を中心として後葉までにおさまる時期のものである。なお東調査区第5層から出土した遺物も、下限は西調査区上半と同様に17世紀後葉である。

e. 第5層上面の遺構と遺物(図12~14)

第5層上面の段階に至り、東調査区でも多くの遺構が形成される。北久宝寺通側の調査区南半は居住域であったとみられ、ゴミ穴などは希薄であった。柱痕跡を残す柱穴3基をSB501としたが、上部構造は明確にできない。一方、敷地北半にはSK502~505・507~509など多数のゴミ穴が掘削され、井戸SE506も検出された。

このうちSK508は、東調査区の中央部で検出した大規模な土壇である。南北5.00m、東西2.32m、検出面からの深さは1.00mを測る。埋土の観察から、隣接する土壇SK509と合わせ少なくとも2回の

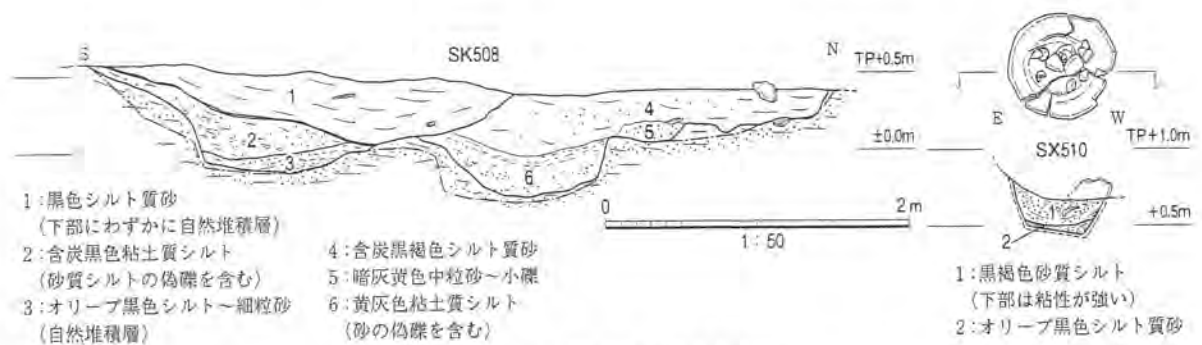


図13 第5層上面の遺構実測図

掘直しが行われており、この場所が継続的にゴミ捨て場として機能していたことがわかる(図13)。また自然堆積による薄層が認められることから、掘削後短時間ながら放置される期間が存在したようである。当遺構からは、53・57・62などが出土している。

西調査区では、東半部は礎石が多く存在し居住域として利用されていた。方位が北でやや東に振るSB511のほか、埋甕遺構SX510がある。一方、西半部は礎石などの分布がまばらであった。明確な区画施設は存在しなかったが、第6層の溝SD601をほぼ踏襲した位置を境として土地利用のあり方が明らかに異なるため、この時期にも敷地境が存在したものと考えられる。

第5層上面で検出した遺構から出土した遺物は、土師器皿53・54、肥前磁器碗55～58・皿59～61・壺63、青磁碗62、備前焼播鉢64・大甕69、丹波焼壺65、土師質土器焙烙66・十能68、瓦質土器火鉢67を図化した(図14)。土師器皿53・54はともに口縁端部にススが附着し、灯明皿としての使用が推定できる。肥前磁器碗のうち、58は天目釉を施し、55・56は高台端部に砂が附着している。同文の皿59・60、および四方皿61は、高台端部に砂が附着している。青磁碗のうち、57は肥前産、62は中国産と考えられる。62は胎土の一部が完全に磁化していない粗製品である。畳付きを露胎とするほか、一部は釉薬が薄いため胎土の淡橙色が透けて見えている。肥前磁器壺63は、口縁端部を露胎とし、内・外面とも底部付近以外に施釉する。小型の備前焼播鉢64は、二次的に被熱し表面が白色を呈している。大型の十能68は分厚い作りで、内面にはススが附着している。備前焼大甕の底部69は便所甕としての使用も考えうるが、便所甕として使用された場合に内面に附着することの多い白色物質は認められない。これらの資料は、17世紀中葉から後葉にかけての遺物相を示している。

f. 第4層の遺物(図15)

西調査区からは、肥前磁器小杯70・碗71、肥前陶御器手碗72、瀬戸美濃焼水注73、丹波焼播鉢74、土人形75～77、金属製の釣針78、一石五輪塔79が出土した。このうち、やや陶胎の肥前磁器小杯70は内面に赤色の付着物があり、紅皿に転用されている。青磁碗71の高台以下は露胎である。瀬戸美濃焼の水注73は体部下半に鉄化粧をし、その後に鉄釉を掛けている。肩部には菊文を押印し、底部は糸切痕を留める。丹波焼播鉢74は全面に土泥を塗るが、使用により内面は素地が露出している。土人形には鬼面を模した75、仏像を模した76、盃台77がある。75は全面に軟質釉を施し、つまむためであろうか、裏面には仕切り状に粘土を貼付けている。76は型作りによるが、底面には穿孔が施されていない。淡赤褐色の胎土を使用し、表面にはわずかに雲母が附着している。77は上面に鉤状の文様を陽刻する。表面に雲母が顕著に附着している。

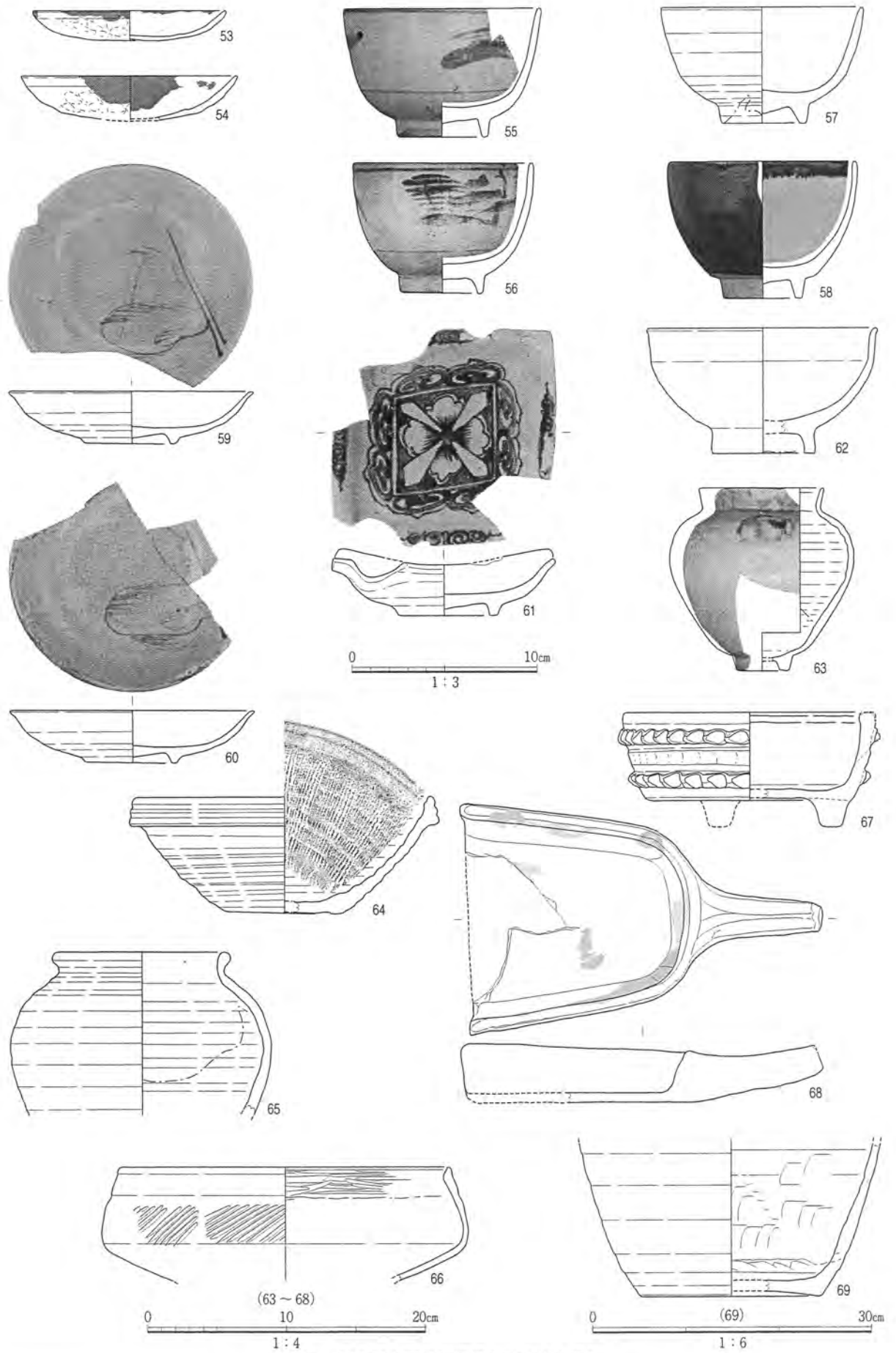


图14 第5層上面検出遺構からの出土遺物

SK502(59~61)、SK503(64・65・68)、SK507(58・66)、SK508(53・57・62)、SK509(54・55)、SX510(69)、SK512(56・67)

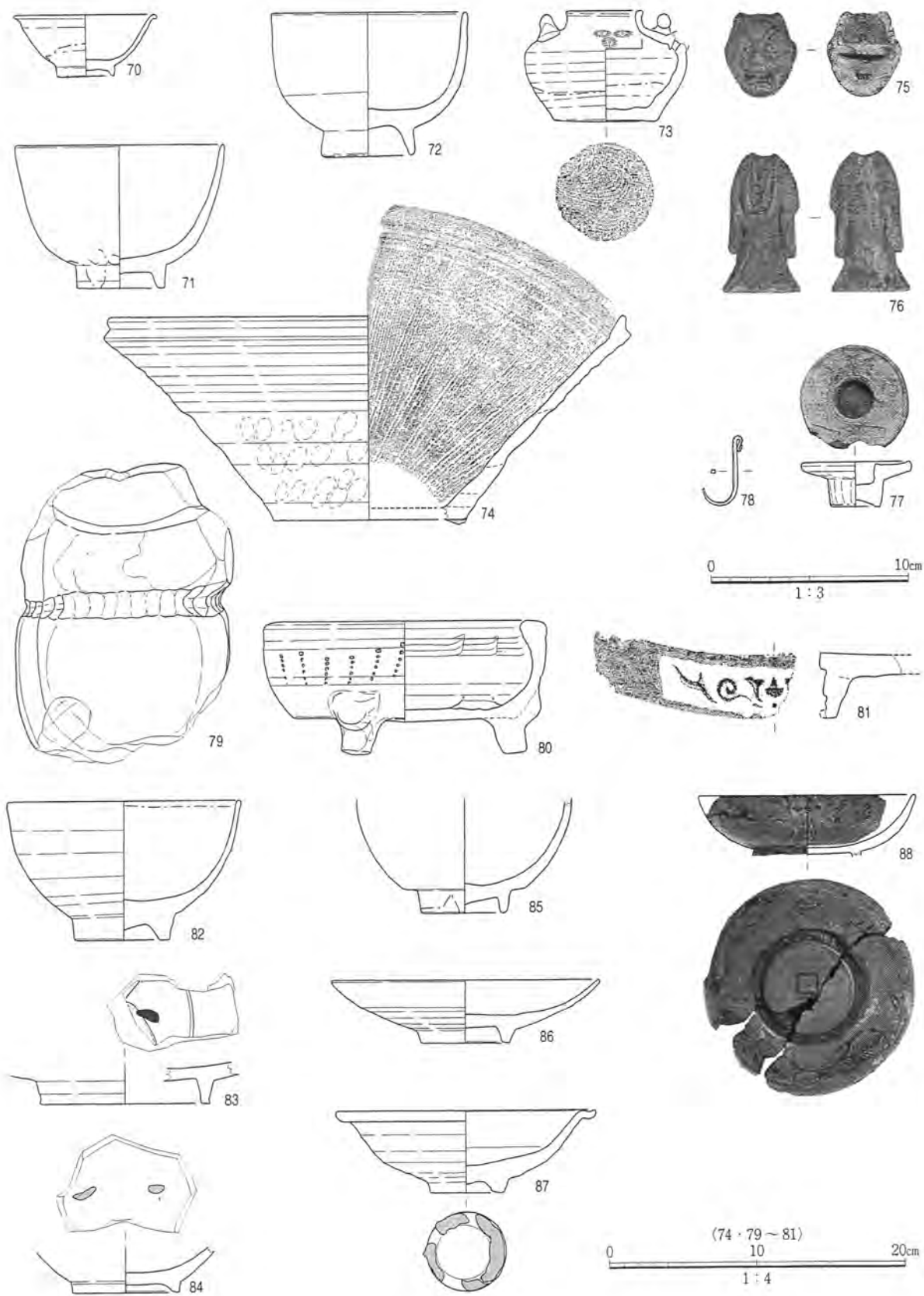


图15 第4層出土遺物
西調査区(70~79)、東調査区(80~88)

東調査区からは、瓦質土器火鉢80、軒平瓦81、肥前陶器82～87、肥前磁器碗84・皿85、李朝白磁87、漆器皿88を図示した。このうち三脚を有する瓦質土器火鉢80は内面底部に突起を有し、外面は列点文で飾る。肥前陶器では碗82・84は灰釉、皿83は透明釉、溝縁皿87は藁灰釉である。83は内底面に砂目跡を残し、ヘラ彫りで文様を刻んでいる。灰白色を呈する胎土は極めて精良で、いわゆる卵手と思われるが、ヘラ彫りの文様については類例が少ない。84は畳付きのみを露胎とし、内面には2箇所の目跡を残す。87の畳付にも砂目が残る。肥前磁器碗85は高台際に天目のような段があり、内面が青磁、外面が白磁の特殊なものである。白磁の皿86は内面に緑釉を施し、内底面を蛇の目釉剥ぎとする。また内底面は底切れを起こしている。漆器皿88はあまり残存状況が良好ではないが、黒色の下地の上に朱漆を施しているようである。外面は朱漆上に黒色で鶴・亀・松などを描き、底部には記号を入れている。内面はおそらく使用により劣化し、所々で下地の黒色が覗いている。

これらの資料は、83・87など17世紀前半に遡る遺物も含まれるが、おおよそ17世紀後葉に下限を求めることができる。

g. 第4層上面の遺構と遺物(図16～18)

東調査区では引き続き南半部が居住域となっているが、第5層の段階とは異なり北半部の遺構は希薄である。この時期に柵SA402が造られ、敷地A・Bを画している。東西方向に並ぶ礎石4基をSB401としたが、上部構造は明確でない。

西調査区では北端まで礎石が分布し、全面に建物が建てられるようになっている。SB403として復元した礎石立の建物が第5層までの敷地境をまたいでいることから、この時期には西調査区全域がひとつの敷地として機能していた可能性がある。なおSB403は北でやや東に振る方位を採っている。

東調査区の南部で8基ほどのゴミ穴が掘削されているほか、東北部では井戸SE404・405、東部では埋甕遺構SX406・407を検出した。

このうちSE404は、直径1.68mを測り、検出面からの深さは1.55mであった。遺構の基盤層である第7層が粗粒化するTP+0.7mよりも深く掘削されている(図17)。当遺構からは、89・90などが出土した(図18)。端反りの口縁部をもつ中国産青花90は器壁2mmと極めて薄く作られている。高台部分の作りはシャープであり、畳付きを露胎とする。

埋甕遺構SX406・407は、土壌を掘削しその中に信楽焼の大甕91・92が据置かれていた。両資料とも遺構廃絶時に破壊され、上半部は甕の中に落込んでいた。このうち91の外面体部には、判読できないが墨書が施されている。

これら89～92をはじめとして、本層上面で検出した遺構からは17世紀後葉の遺物相を示す資料が出土している。

h. 第3層上面の遺構と遺物(図19～22)

本層に伴う段階で、石垣SX301・302が形成され、敷地A～Dが高低差をもつようになる。このうち東調査区の敷地Aでは、礎石列をSB303として復元した。そのほか、敷地南半部では礎石がまばらに分布しており、居住域としての利用が継続していると思われる。敷地BはSX301の構造を追及するためにトレンチを掘削したため、遺構の分布が明確ではない。4つの敷地の中で最高所となる敷地Cで

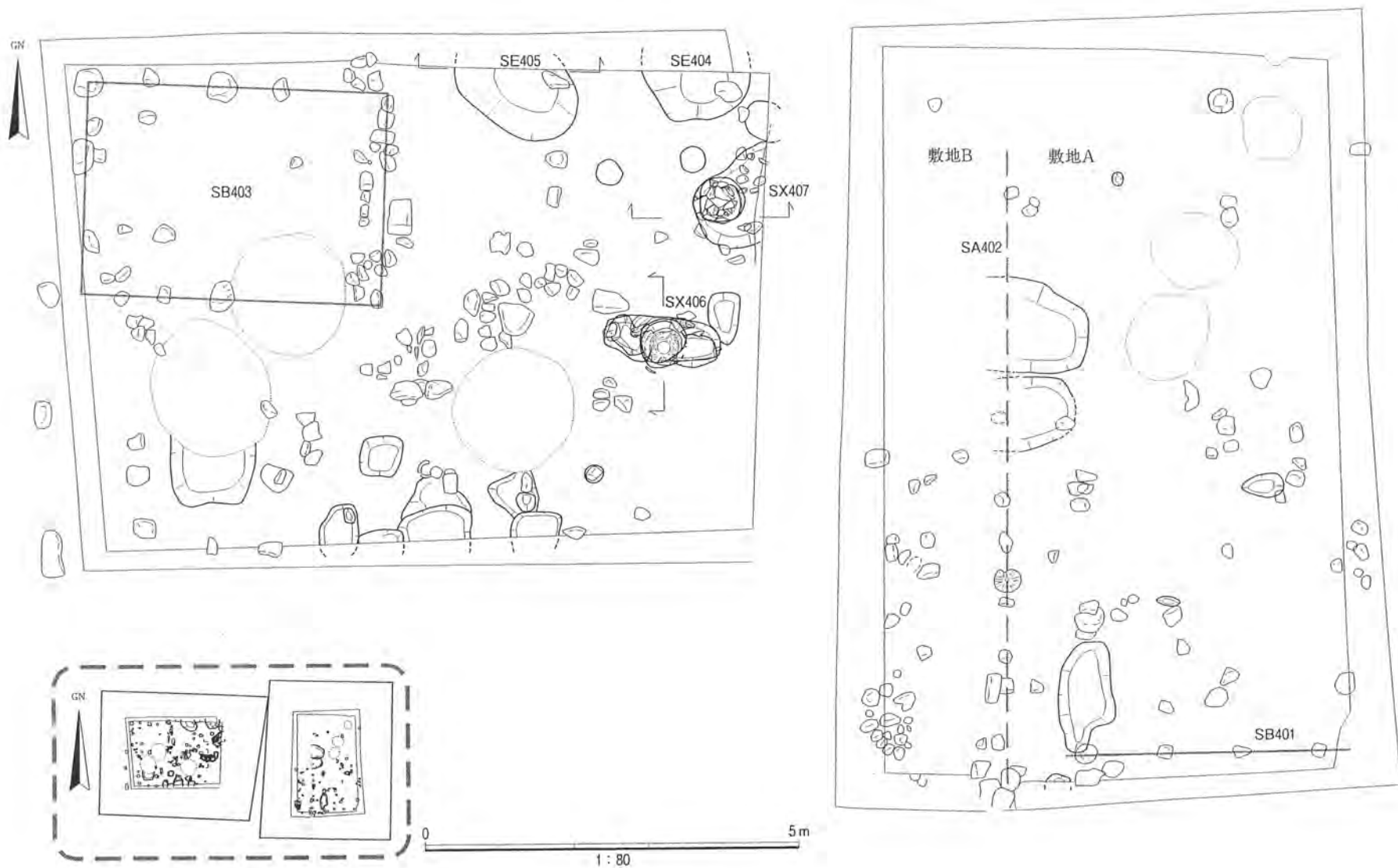


図16 第4層上面の遺構

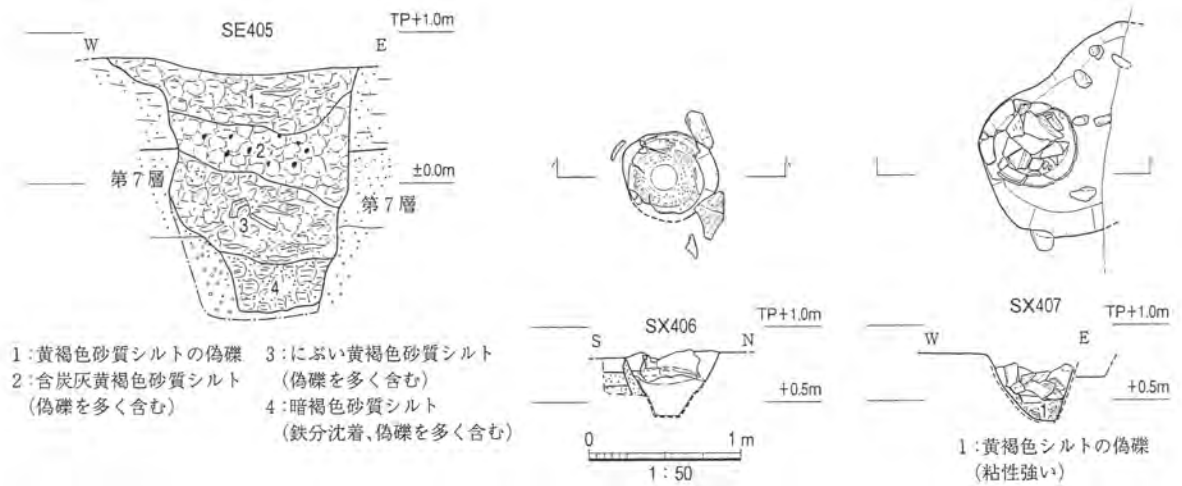


図17 第4層遺構実測図

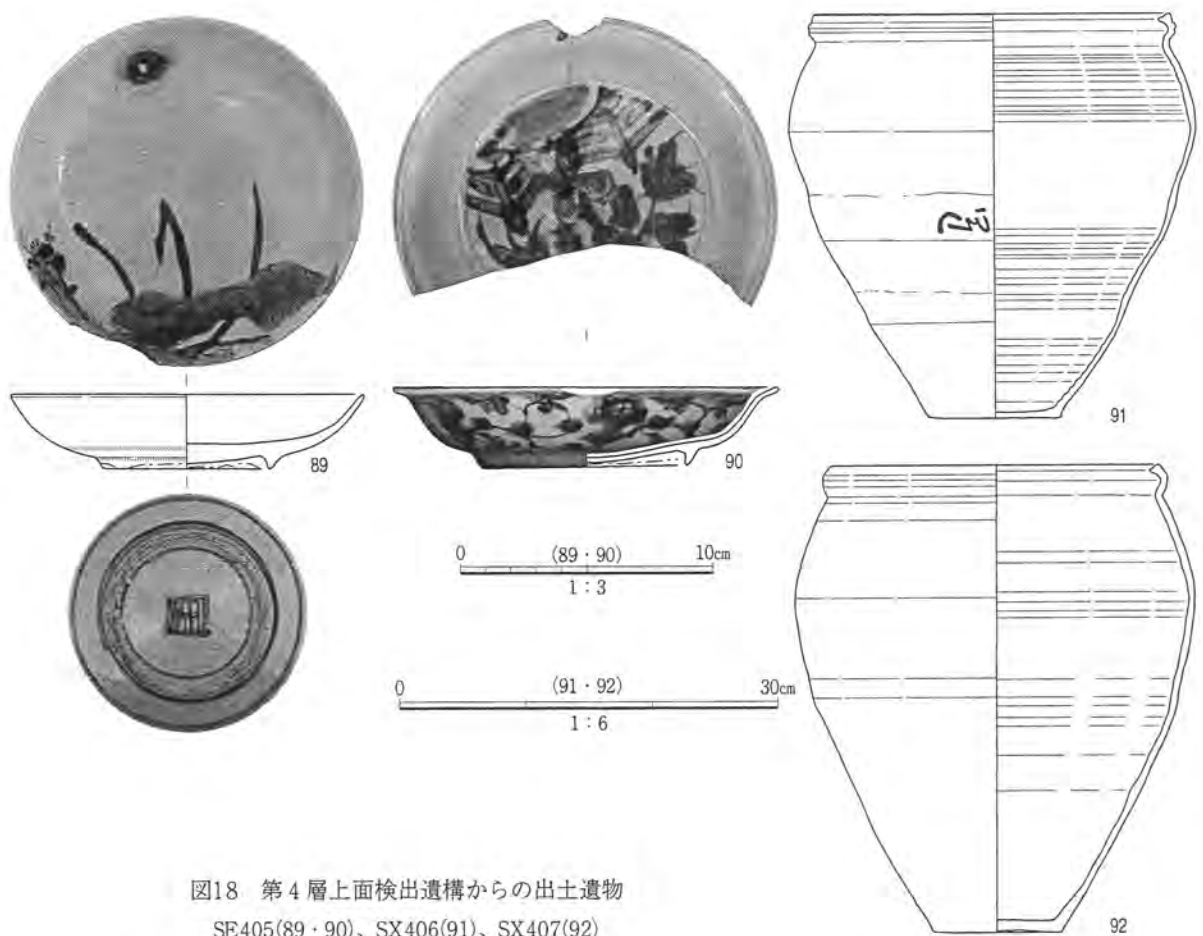


図18 第4層上面検出遺構からの出土遺物
SE405(89・90)、SX406(91)、SX407(92)

は、妙知焼後の整理に係ると考えられる土壌SK304～307が掘削されていた。これらの土壌中には、焼土・炭とともに、図21・22に図示した陶磁器類および極めて多量の瓦が投棄されていた。また、竈の残欠と考えられる焼土面SX308を検出している。敷地Dでは南半部に礎石がまばらに分布し、建物としては復元できなかったが居住域として利用されたものとする。北半部ではゴミ穴が掘削されている。

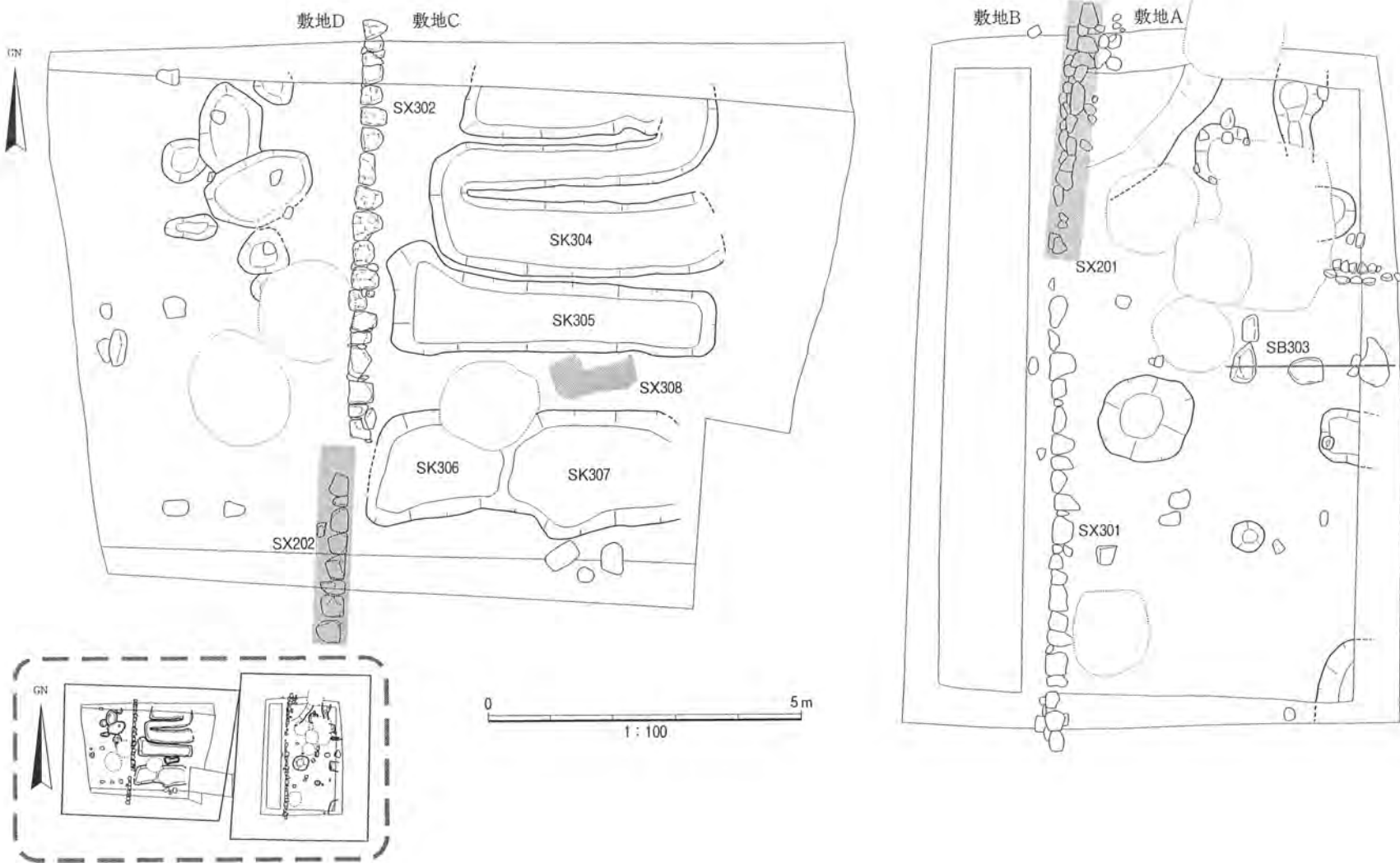


図19 第3層上面の遺構

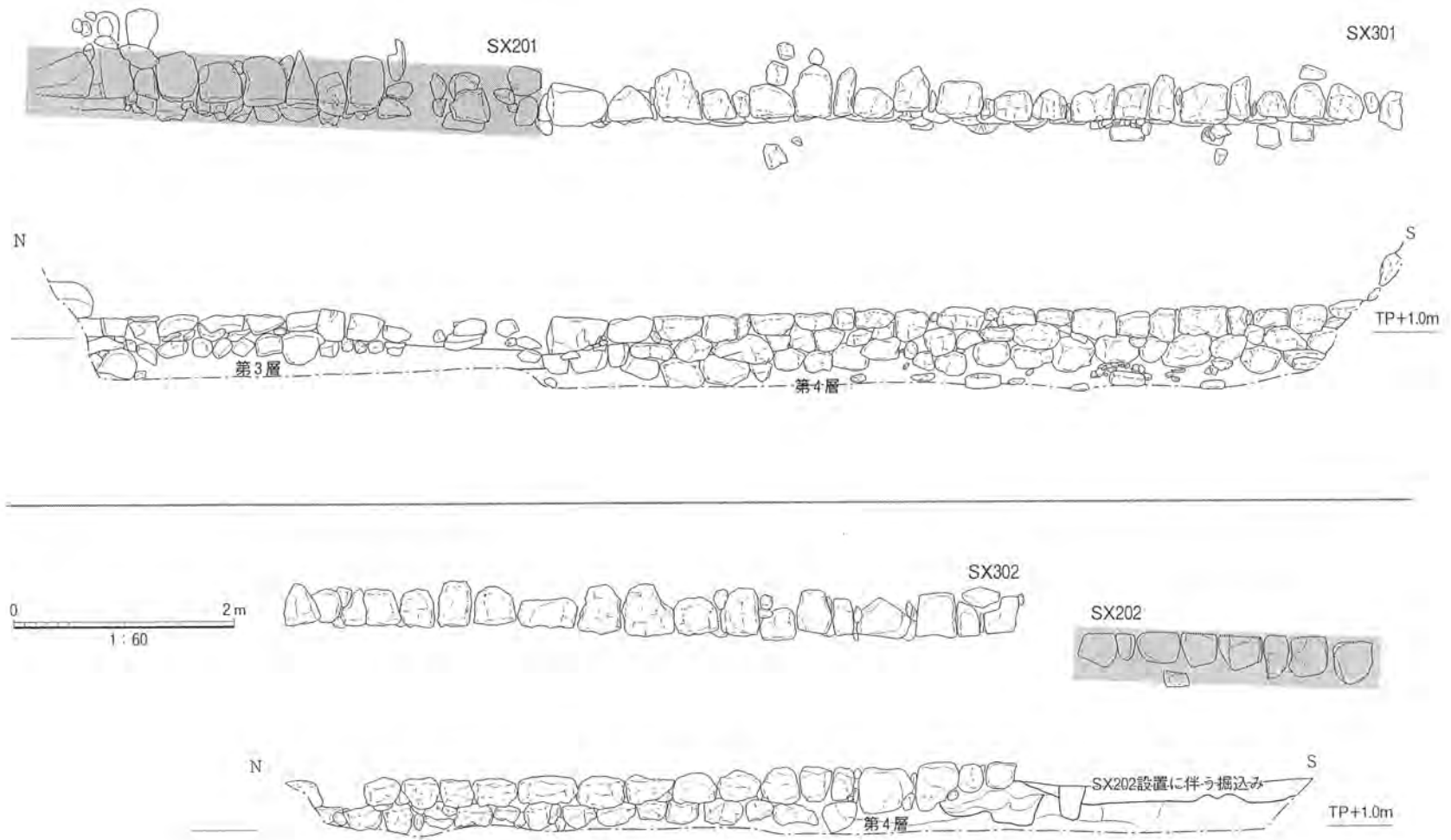


図20 石垣SX301・302・201・202実測図

これらの遺構のうち、敷地を画する石垣SX301・302について見る(図20)。ほぼ正南北に延びて敷地A・Bを隔てるSX301は、長さ7.86m以上を測り西側に面をもつ。造成方法は、第4層直上に長辺40cm前後の石材を置き、2～3段に石材を積んでいる。SX301の北側では、第2層の段階で造成された石垣SX201を検出している。SX301を延長したものと思われるが、方位はやや北で東に振っている。

敷地C・Dを隔てるSX302も、第4層の直上に石材が置かれている。6.68m分を検出したが、方位は北でわずかに東へ振る。また南半分は第2層に伴う石垣SX202の造成時に破壊されており、本来は調査区南端まで延びていたと考えられる。なおSX302は西側に面をもつが、SX202は東側に面をもっており、第2層の段階で敷地C・Dの高低が逆転したことがわかる。

SK304～307から出土した遺物のうち、肥前産陶磁器には陶胎染付の碗93・火入れ95、肥前陶器碗94、肥前磁器碗96～99・蓋100・皿101～104・鉢105・壺106などがある(図21)。これらの多くは同文あるいは同器形の資料が複数個体出土しているが、そのうちもっとも残存率の良いものを図化した。そのほか、土師器皿107、京焼108～111、瀬戸美濃焼112、焙烙113、骨製櫛払い114、軒丸瓦115などが出土している。これらの遺物はそのほとんどが二次的に被熱し、表面の釉薬が発泡したり、器形が歪んだりしている。

このうち陶胎染付の碗93は、畳付きに砂が付着している。内・外面とも刷毛目で飾る肥前陶器碗94は、底部の削込みが深く、口縁部はわずかに外反する。外面に二重網目文を染付する肥前磁器碗97は、被熱による表面の劣化が著しい。98は内底面を蛇の目釉剥ぎとし、畳付きには砂が付着する。口縁部が外反する大碗99は、内底面にコンニャク印判を施す。完形の蓋100は、上面に3単位の花文を染付している。皿101～103のうち、101は内底面を蛇の目釉剥ぎとしたのち砂を塗っている。102は器壁が薄く、外面底部にも染付を施している。103は見込に本資料と同径の融着痕を留めており、被災時に似通った大きさの資料と重ねられていたことが推測できる。変形皿104は内面に型紙摺りで文様を施す。高台には接合痕が観察でき、糸切り細工によって製作されたことがわかる。口縁部を輪花とする青磁染付の鉢105は底部にチャツの痕跡がある。内面底部および畳付き以外に施釉する壺106は、被熱による歪みが著しい。外面体部の釉薬が円形状に剥落しており、被災時に他の磁器などと融着したことが推定できる。

被熱により全体が黒化する土師器皿107は、底部に糸切り痕がある。口縁を六角とする京焼の向付108は内面に松を描き、外面には銘「乾山」を有する。四方皿109は草文、輪花皿110は菊をそれぞれ内面に描く。向付111は数色を塗分けて花文を表すが、被熱により判然としない。瀬戸美濃焼112は皿として図化した。外面には蓮花と思われる文様をヘラ彫りしている。櫛払い114は下端部がヘラ状になっており、18世紀以降に出現する形態である[久保和士1993]。

以上の資料中には17世紀に遡る陶磁器も多く含まれるが、94・96・97・101など18世紀前半の資料を一定量含んでいる。したがって、出土状況とも併せ妙知焼後の整理に伴う土壌群から出土した一括資料であると評価できる。なお、それぞれの器を揃いで所有しており、また18世紀前半の段階ではいまだ出土例が少ない京焼も一定量受容していることから[赤松和佳2006]、敷地Cの所有者が経済的に恵まれていたことが推測できる。

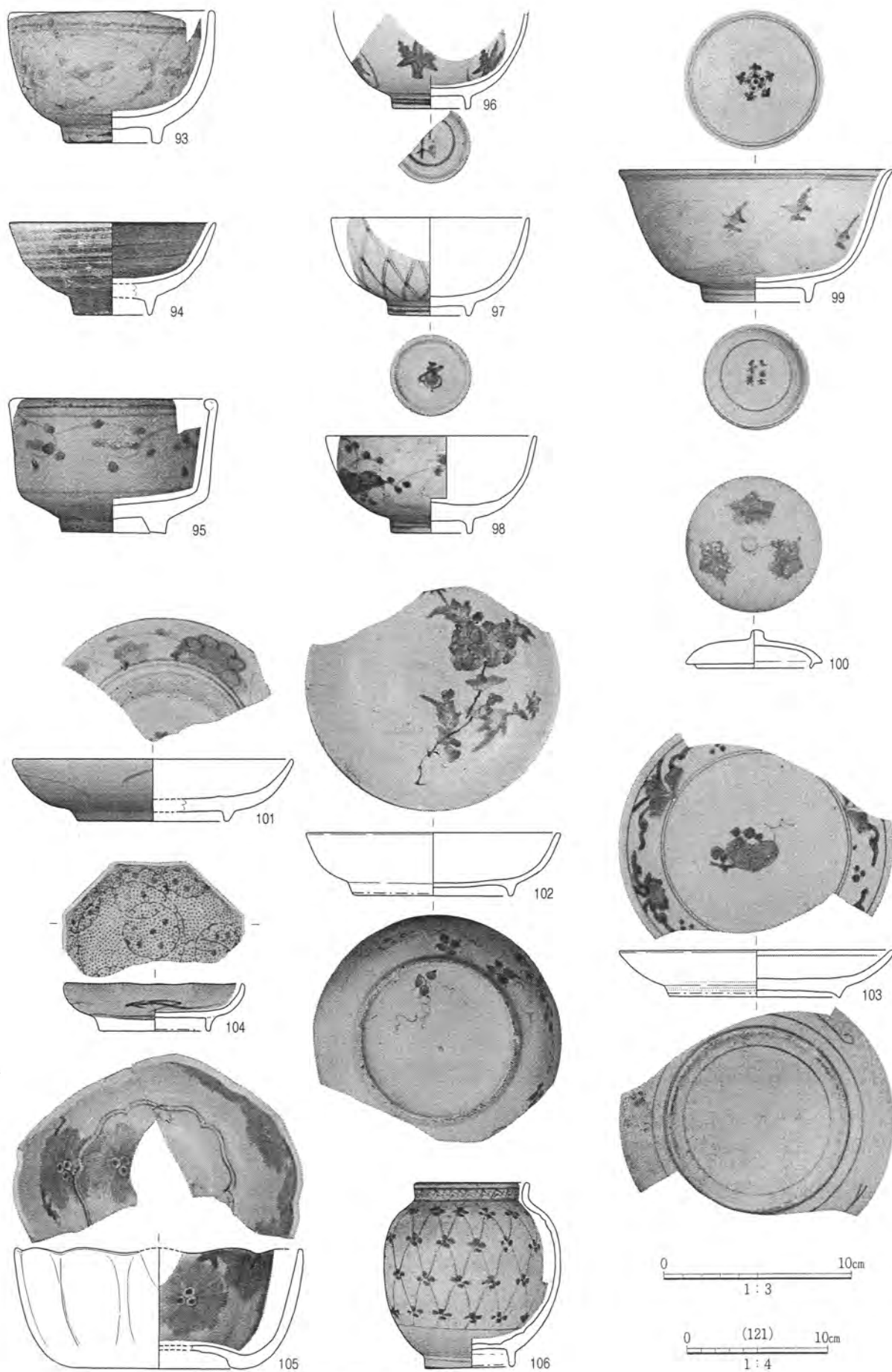


图21 SK304~307出土遺物(1)

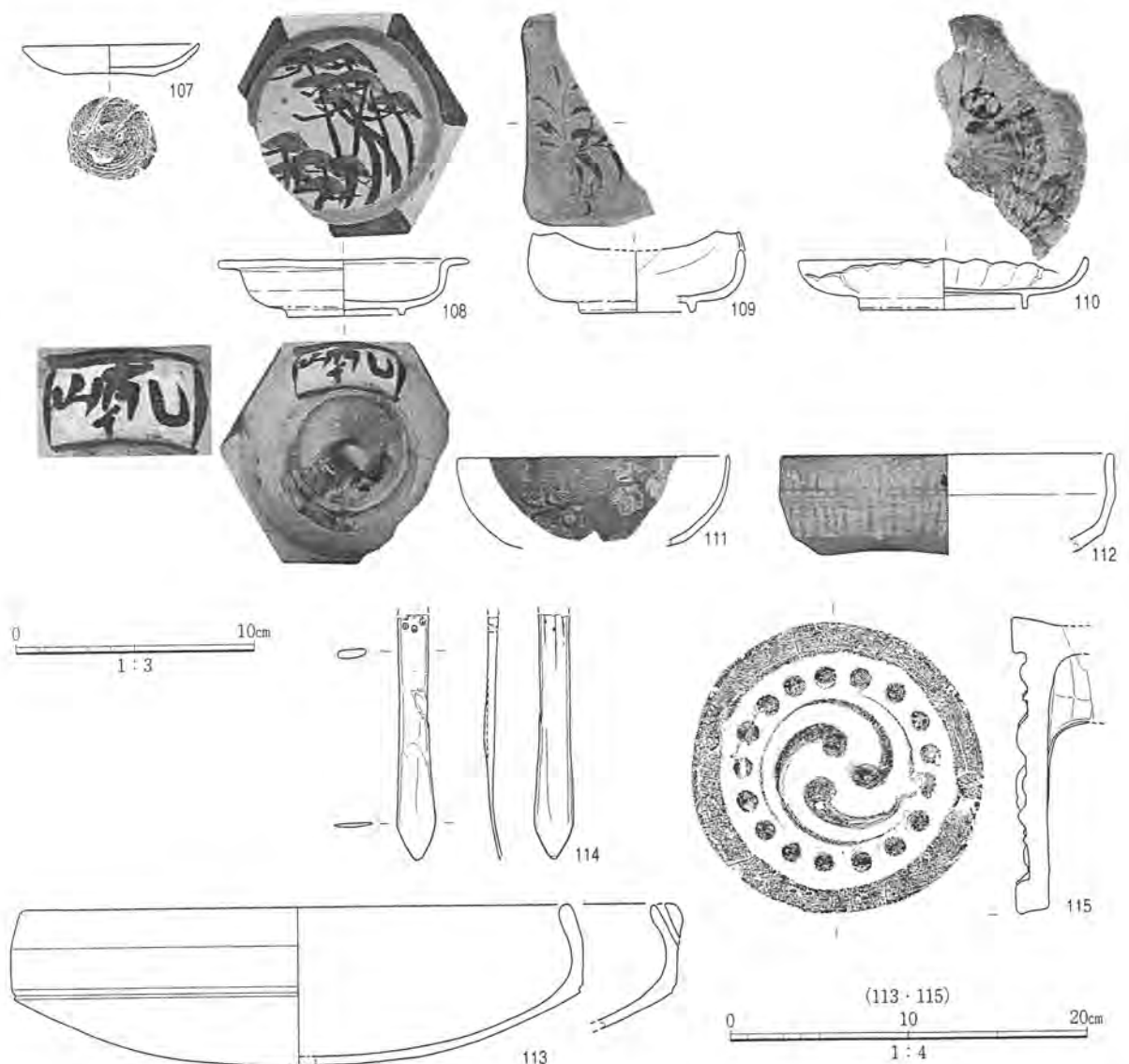


図22 SK304~307出土遺物(2)

なお、本層に伴うほかの遺構から出土した遺物についても、おおむね18世紀前半の年代観が与えられる。

3)大坂城下町跡(OJ07-11次調査)出土の動物遺存体

丸山真史(京都大学大学院人間・環境学研究科)

出土した動物遺存体は、総計12点を数え、魚類、鳥類、哺乳類を同定した。魚類は、マダイの方骨が1点のみ出土しており、現生骨格標本との比較では体長40cm以上の個体と推定される。鳥類は、ニワトリの大腿骨(左1右1)2点、脛足根骨(右)1点、計3点が出土しており、大腿骨の近位端最大幅(Bp)は、左が16.3mm、右が21.5mmを測る。哺乳類は、イヌ、ウシ、ウシ/ウマが、計8点出土している。イヌは大腿骨(左)1点、脛骨(右)1点、計2点が出土しており、両者とも骨端部が癒合していない若齢の個体である。ウシは、脛骨(左2右1)3点、中足骨(左)1点、計4点が出土しており、いず

れも鋸による切断痕が見られる。脛骨の左2点は骨幹部を残して、両端が鋸で切断され、さらに長軸方向に鋸で切断されている。脛骨の右1点は近位端を残して、骨幹部とは鋸で切断されている。中足骨は近位端を残して、骨幹部とは鋸で切断されている。ウシとウマの区別ができなかったものが2点出土しており、1点は四肢骨の小片、もう1点は橈骨または脛骨の骨幹部である。この橈骨または脛骨は、骨幹部を残して両端が鋸で切断されており、外面に刃物で削った痕跡が見られる。

特筆されるのは、鋸で切断されたウシの脛骨や中足骨、ウシまたはウマの四肢骨の出土である。このような鋸による切断は、骨細工の素材として牛馬骨を利用したことを示す(写真1)。住友銅吹所跡[大阪市文化財協会1998]や大坂城下町跡(OJ92-24次、OJ06-6次調査など)では、ひとつの遺構からまとまって加工された牛馬骨が出土しており[大阪市文化財協会2004・

	表1 種名表
脊椎動物門	Vertebrata
硬骨魚綱	Osteichthyes
スズキ目	Percidae
タイ科	Sparidae
マダイ	<i>Pagrus major</i>
鳥綱	Aves
キジ目	Galliformes
キジ科	Phasianidae
ニワトリ	<i>Gallus domesticus</i>
哺乳綱	
食肉目	Carnivora
イヌ科	Canidae
イヌ	<i>canis familiaris</i>
奇蹄目	Perissodactyla
ウマ科	Equidae
ウマ	<i>Equus caballus</i>
偶蹄目	Artiodactyla
ウシ科	Bovidae
ウシ	<i>Bos Taurus</i>

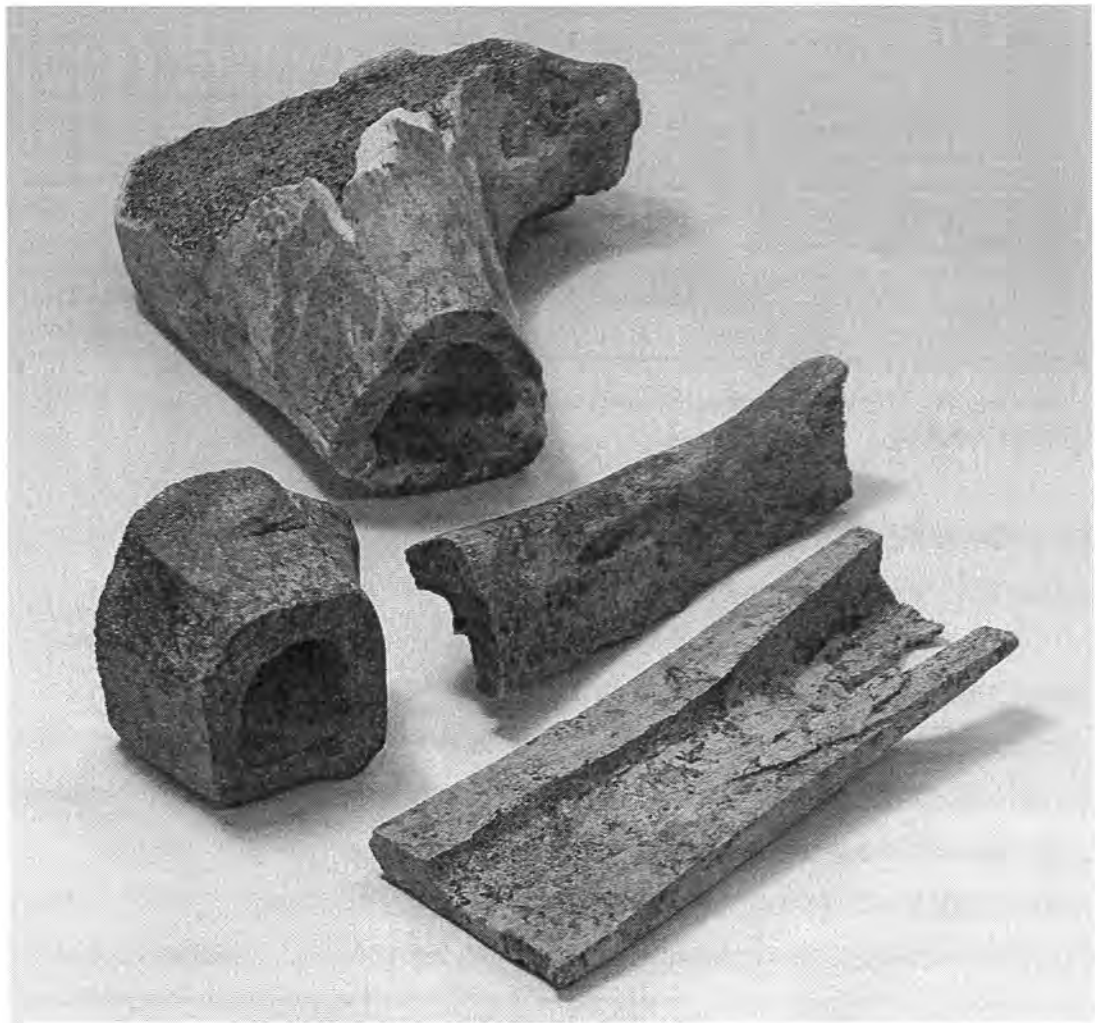


写真1 鋸で切断された牛馬骨

表2 動物遺存体集計表

種類	部位	左右	17c以前	17c後半		17c前半	17c後葉	17世紀初頭		計
			第4層以下	第4層下半	SX407	第5層以下	第3層	SD601	SK607	
マダイ	方骨	左						1		1
ニワトリ	大腿骨	右		1						1
		左						1		1
イヌ	脛足根骨	右							1	1
		左					1			1
ウシ	脛骨	左					1			1
		右			1					1
ウシ/ウマ	四肢骨	左	1	1						2
		右								1
ウシ/ウマ	腕骨/脛骨	左				1				1
		右								1
計										12

表3 OJ07-11次調査出土貝類一覧

地層・遺構名	時期	ハイガイ	アカガイ	ハマグリ	ハマグリ	チョウセン	ウチムラサキ	シオフキ	カワニナ	オオタニシ	メカイアワビ	アワビ類	サザエ	アカニシ	バイ
SK10				1											
SK305			2									●	1		
SE405														1	1
SK512														1	
SE506														1	
SK513										71*					
SD601		1													1
壁際SE												1			
SK605												1			
SK606		2		1											
SK608														1	
SK609														1	
SK701				1									蓋1		
包含層ほか		1	2	85	7	2?	1	1	1	1	●	1	3		

【凡例】

●：殻頂・殻口が出土しておらず個体数は不明であるが、破片から存在が確認されたもの

*：他に幼貝多数

2007]、集中的に骨細工が行われたことが明らかである。本例は、ひとつの遺構から一括した出土をみることができず、当地周辺での小規模な骨細工が予想される。

4) 大坂城下町跡(OJ07-11次調査)出土の貝類について

ここでは本調査で出土した動物遺体のうち、貝類について報告する。同定作業には現生標本と図鑑[吉良哲明1954、波部忠重・奥谷喬司1983]を利用しており、個体数に関して腹足綱は殻口数を、二枚貝綱は左右殻数の多数の方を原則として採用している。

本調査では遺構や包含層から計12種、195個体の貝類が識別できた(表3)。このうち、注目される資料としては、東調査区のSK513から出土したオオタニシが挙げられる。当遺構から出土した貝類はオオタニシのみで、71個体にのぼる。当地域でこれまでに出土した豊臣期から徳川期にかけての資料を見ると、例えば[池田研2005]で報告した12の調査の資料では22,342個体の貝類のうち、オオタニ

シなどタニシ科はわずか16個体(0.07%)を占めるにすぎず、本資料の特異性が浮かび上がる。また、オオタニシは卵胎性で6～8月頃に幼貝を産むことが知られているが、本資料の一部には殻内に多数の幼貝が含まれていた。17世紀末に成立した『本朝食鑑』によれば、「田螺は春初に水田で採った後、一兩月ほど家庭の池に放しておく、泥味が無くなり佳い味になる」とあり、本資料もそうした習慣に従って晩春から夏にかけて食されたものである可能性がある。

そのほか、包含層から出土したハマグリは59個体が第4層から出土したもので、殻高計測値の平均(計測数28個体)が27.1mmと、小型の個体が主体である。

5)まとめ

今回の調査は、『摂津名所図会』にも描かれ近世大坂の中心のひとつであった南御堂の直近で行われた。その結果として、豊臣期から18世紀前半に至るまでの土地利用の変遷を把握することができた。今回得られた成果を周辺調査と比較すれば、OJ05-6次調査で豊臣期にすでに活発な開発が行われていたのに対し、当地ではとくに東調査区で開発が遅れていることが注目できる。こうした遺跡内での開発の時期的、あるいは質的な差異を追うことで、近世都市・大坂の研究に考古学という方法論でより一層積極的にアプローチすることが可能となろう。

また、出土した動物遺体や貝類から近世の動物利用についても一定の知見を加えることができたほか、妙知焼に伴う土壌からは陶磁器類の良好な一括資料を得ることができた。

こうした成果を今後得られる周辺の調査と併せることで、より精度の高い歴史像を構築することが可能となるだろう。

註

(1)土人形の観察にあたっては、文化財研究部学芸員 川村紀子の教示があった。

引用・参考文献

- 赤松和佳2006、「畿内出土の17～18世紀の京焼について」：関西陶磁史研究会「京焼の成立と展開－押小路、粟田口、御室－」、pp.24-48
- 池田研2005、「中・近世における大坂城下町出土の貝類について」：大阪大学考古学研究室編『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』、pp.859-886
- 大阪市文化財協会1998、『住友銅吹所跡発掘調査報告』
- 大阪市文化財協会2004、「OS88-82次およびOJ92-24・92-36次・94-16次の調査」：『大坂城下町跡』II、pp.281-314
- 大阪市文化財協会2006、『オリックス・リアルエステート株式会社による建設工事に伴う大坂城下町跡(OJ05-9次)発掘調査』
- 大阪市文化財協会2007、『倶蘭堂ビル株式会社による建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ06-6)報告書』
- 大阪市文化財協会2008、『エムジーリース株式会社による建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ07-8)報告書』
- 吉良哲明1954、『原色日本貝類図鑑』保育社

久保和士1993、「櫛払」：大阪市文化財協会編『葦火』46号、pp.6 - 7

久保和士1999、『動物と人間の考古学』真陽社

土岐市美濃陶磁歴史館1996、『堺衆のやきもの－堺環濠都市遺跡出土の桃山陶磁－』

波部忠重・奥谷喬司1983、『学研生物図鑑 貝Ⅱ』学習研究社

東から調査地・御堂筋・東本願寺難波別院を望む
(東北東から)



東調査区石垣SX301・201
(北西から)



西調査区石垣SX302・202
(南西南から)



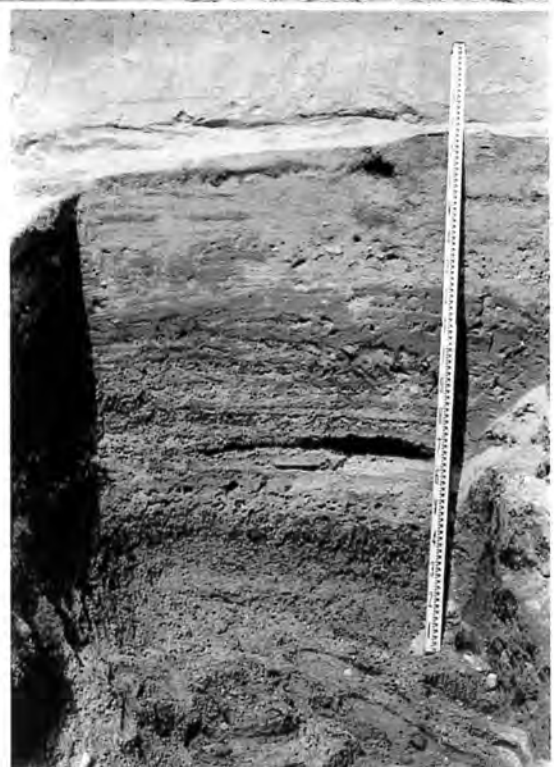
西調査区第4層の遺構
(北から)



西調査区南壁断面
(東北東から)



西調査区深掘り地層断面
(東から)



大坂城下町跡発掘調査(OJ08-1)報告書

調査個所 大阪市中央区久太郎町1丁目14-5～11・15・16・77-3
調査面積 125㎡
調査期間 平成20年4月2日～4月15日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、平田洋司

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城下町跡の西南部に位置する(図1)。これまでの周辺の調査としては、北北東約200mでOJ92-17次調査が、同約300mでOJ97-7次調査が、南東約100mの位置でOJ91-24次調査がそれぞれ行われているが、遺跡北部に比して調査数の少ない地域であるといえる。OJ92-17次調査では、豊臣期～江戸時代の遺構・遺物が検出されたほか、古墳～平安時代にかけての遺物が多く確認されている。OJ97-7次調査では低湿な地層中から人面墨画土器や曲物など多くの奈良時代の遺物が出土した。OJ91-24次調査では豊臣期以前の調査については行えなかったが、江戸期の複数の焼土層などが確認されている。

今回調査地では、2007年度に大阪市教育委員会によって東西2箇所を試掘調査が行われた結果、東側の調査区より地表下約3.0mの砂層上において中世の可能性のある遺構群が確認された。この結果を受け、建設工事に先立って、敷地東部について発掘調査を実施することになった(図2)。

工事側であらかじめ擁壁工事を行ない、全域を現地地表下3mまで掘削したのちに、2007年4月2日から調査を開始した。掘削はすべて人力により、遺構検出・掘削・記録などの作業を適宜行い、調査を進めた。また、遺構検出のベースとなる砂層については、遺物の有無および遺構の見落としを防ぐために全体に20cmほど掘下げるとともに、下位の地層を確認するために東壁沿いにて深掘を行った。なお、ユニットハウスの下に当たっていた南端部についてもこれを撤去後、補足調査を行い、4月18日に現地におけるすべての作業を完了した。

以下、報告で使用した標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文および図中では「TP+〇m」と記す。示北記号は図1・2が座標北、それ以外は磁北である。

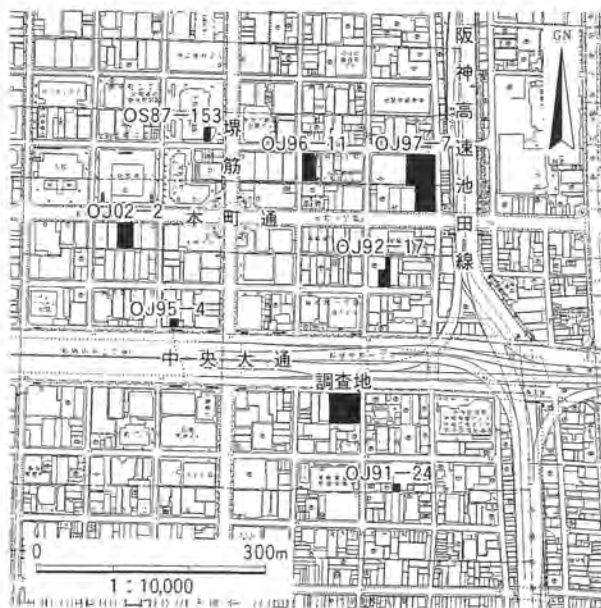


図1 調査地位置図

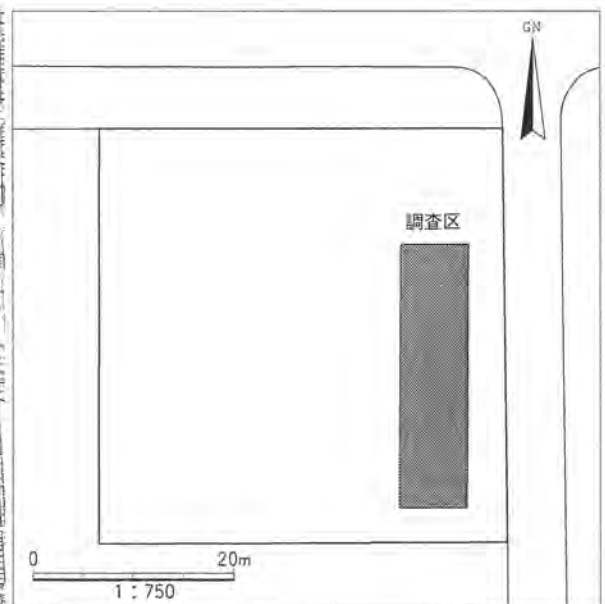


図2 調査区配置図

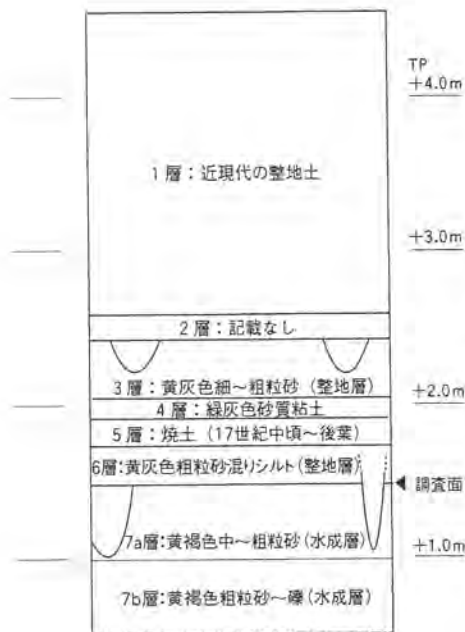


図3 層序模式図

2) 調査の結果

i) 層序

調査着手時にはすでに現地表下約3mまでの地層は除去され、後述の7層上に掘削時の残土がわずかに見られるのみであった。上位層の観察がまったく不能であったため、上位層の記載については敷地東部での試掘調査時の所見をもとにして進めることとする。層序模式図(図3)は試掘調査時のデータと今回の調査結果を合成したものであるが、標高については、7層が上位層除去時にそれほど削平されていないと仮定したものであり、誤差を伴うことをことわっておく。また、7層については部分的に掘削した結果を図4に記す。

1層：近現代の整地層で、層厚は190cmある。

2層：層厚10cm程度の地層であるが、土質などの記載がなく詳細は不明である。

3層：黄灰色細～粗粒砂層で、層厚は40cm程度ある。17世紀後半以降の整地層である。上面には遺構が認められる。

4層：緑灰色砂質粘土層で、層厚は10cmある。17世紀後半以降の地層である。

5層：焼土層で層厚は17cmある。17世紀中頃～後葉の遺物が出土したが、主となる時期は17世紀後葉のものである。

6層：黄灰色粗粒砂混りシルト層で、層厚27cmの整地層である。時期は不明である。

7層：黄褐色中粒砂～礫層で、層厚は120cm以上ある。ラミナが顕著に認められ、河川的作用によって堆積したものである。流れの方向および粒径から7a層・7b層に細分した。

7a層は中～粗粒砂層が主体で、層厚10cm程度の薄層に細分される。各層とも上面は平坦に近く、洪水によって堆積したものである。流れの方向は概ね南東から北西にかけてである。

7b層は粗粒砂～礫層が主体で、7a層に比べて粒径が粗い。各薄層の上面は凹凸が著しく、ラミナの傾斜が急であることから、比較的短期間のうちに強い水流によって堆積したものであろう。平面的に観察していないため確実ではないが、流れは概ね東から西方向あるいは西でやや北に振れる方向で

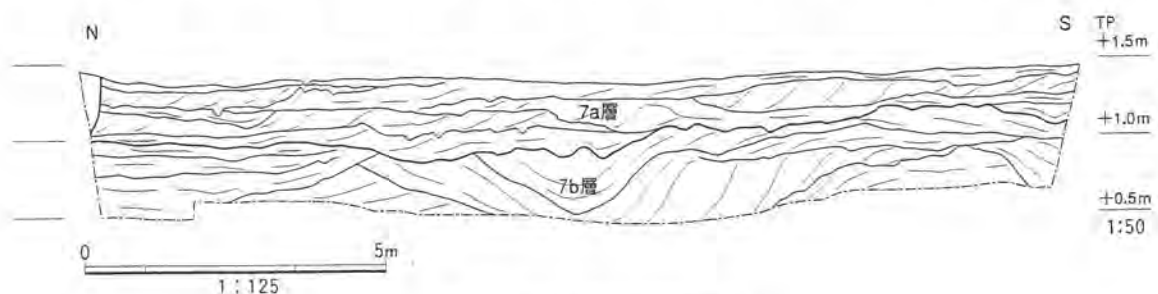


図4 調査区東壁断面模式図

(断面図の位置は図5を参照)

ある。

7層については上部20cmほどを調査区全域で掘削し、遺物の採集を目指したが、出土しなかった。そのため時期は不明であるが、調査地北側に位置するOJ92-17次調査およびOJ97-7次調査において水域と見られる層準から古墳～奈良時代の遺物が出土していることから、本層の形成時期も古代以前に遡ると推定される。

ii) 遺構と遺物

遺構検出作業は7層上面にて行った。土壌・井戸などの多くの遺構を検出した(図5)が、上位の地層が遺存していないため、本来の形状や遺構面については不明である。ここでは、出土遺物や先後関係、埋土の状況から、豊臣期以前と考えられるもの(100番台)、江戸期と考えられるもの(200番台)、不明なもの(300番台)の3種に大別して記すこととする。なお、10の位以下の番号は現場で調査時につけた遺構番号である。

a. 豊臣期以前の遺構と遺物

井戸・土壌・溝などがある。以下におもなものを記す。

SE107 調査区北西端で検出した井戸である。検出面からの深さは1m以上ある。井戸枠の径は0.4~0.5mあり、木質が遺存していた。土師器皿・鉢・甕、瓦質土器、備前焼播鉢、丹波焼播鉢、唐津焼皿・碗、志野焼、青花のほか瓦片が多く出土した。また、鳥骨・サザエなどの動物遺体のほか鹿角を3cm程度に切断した加工品が出土している。豊臣後期に位置づけられる。

SE137 調査地北部で検出した井戸である。深さは0.9m以上ある。井戸枠の径は0.5mで、周囲に木質が遺存していた。埋土は掘形・井戸枠内ともに7層に類似した砂層で混りが少ないことから、今回検出した遺構群のなかでは比較的初期の段階に掘られた遺構と考えられる。出土遺物は瓦片のみであるが、他の豊臣期の遺構から出土した瓦とは胎土・焼成ともに異なっており、豊臣期を遡る時期の可能性はある。

SK109~114 SE137埋没後、近接した位置で見つかった土壌群である。形状は平面楕円形あるいは円形で、深さは0.3~0.6mとさまざまであるが、埋土が7層と類似した砂層で、SE137出土のものと同様な瓦片を出土するという共通点をもつ。土壌には不明瞭なものもあり、これら土壌のいくつかは、SE137の埋土が陥没してできたものかもしれない。出土遺物は瓦片のみであり、時期は不明であるがSE137同様、豊臣期よりも古い可能性がある。

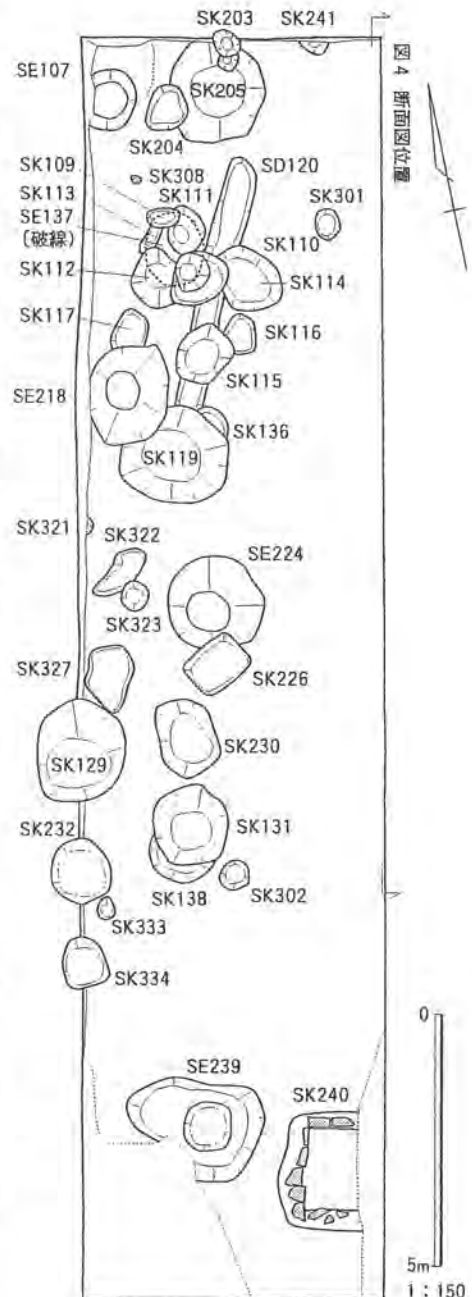


図5 検出遺構平面図

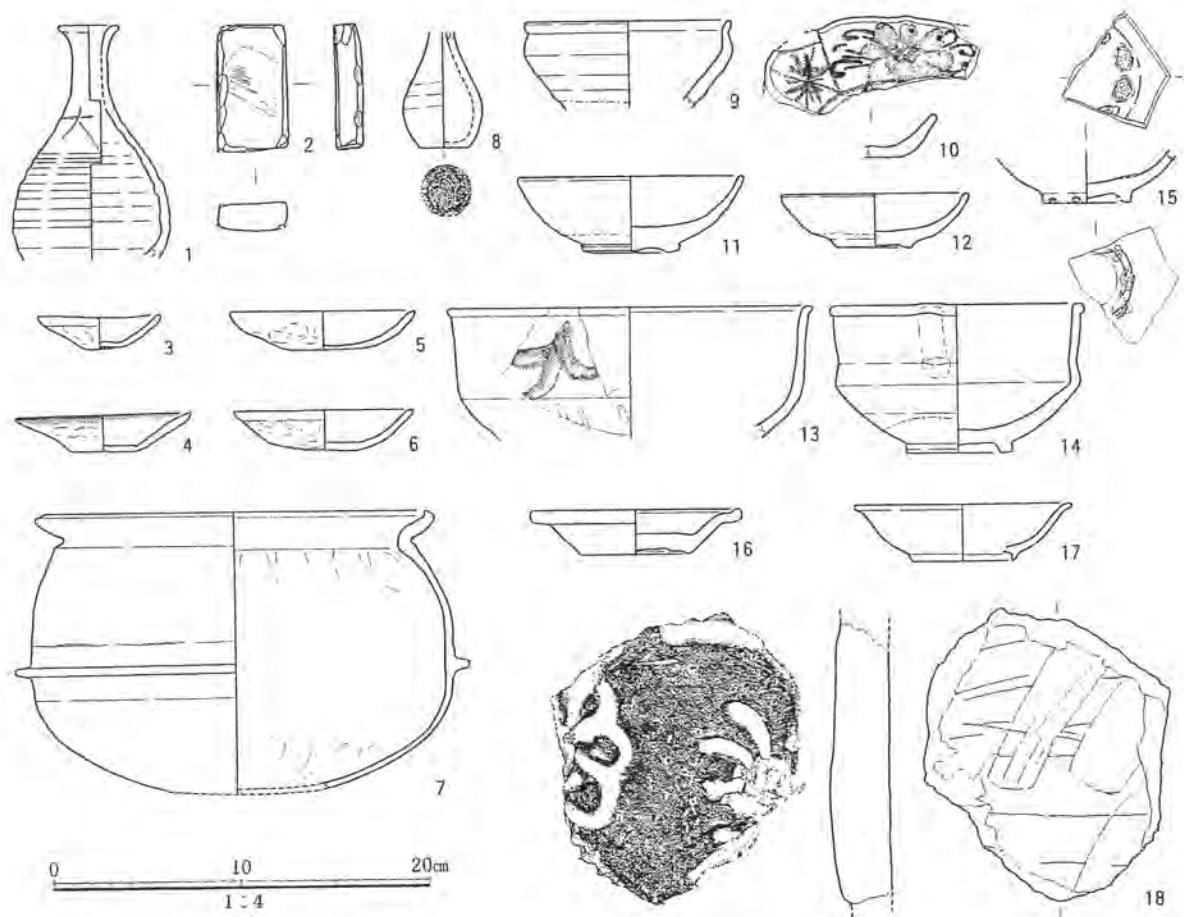


図6 出土遺物実測図(1)

[1・2 : SK115、3~15 : SK129、16~18 : SK131]

SK115 深さ0.5mの土壌である。埋土の下部は7層を主体とする加工時形成層で、上部は炭を多く含む機能時堆積層である。土師器皿、備前焼徳利、丹波焼鉢、瀬戸美濃焼皿、砥石などのほか瓦片が多数出土した(図6)。1は備前焼徳利で肩部に「大」のヘラ記号がある。砥石2は砂岩製で、一部を欠損するほかはほぼ完形である。被熱して赤変している。遺構の時期は、出土遺物から豊臣後期に位置づけられよう。

SD120 調査地北部で検出した溝状の遺構で、北で東に振る方位である。深さ0.15mで埋土には水流の痕跡は認められない。また、北端が明瞭に途切れることから、溝とするよりも土壌とすべきかもしれない。上記の土壌群に先行し、切合い関係では最も古い。出土遺物は土壌群と同様の瓦片のほか土師器細片が出土したのみであり、時期は不明である。

SK119 調査地北部で検出した平面円形で、深さ1.0mの土壌である。埋土の下部は加工時の形成層で、中部には炭を含む機能時の堆積層がある。土師器皿・甕・羽釜、瓦質土器、備前焼播鉢、丹波焼、唐津焼、青花、青磁、焼塩壺、鉄釘、砥石のほか瓦片、サザエなどの動物遺体が出土した。豊臣後期に位置づけられる。

SK129 調査地西部で検出した土壌である。平面円形で深さ0.7mある。埋土は炭を多く含み、遺物も多く出土したことからゴミ穴としての機能が考えられる。土師器皿・羽釜・鉢・播鉢、唐津焼碗・

皿・沓茶碗、瀬戸美濃焼、志野焼、織部焼、白磁、青磁、李朝白磁皿などの陶磁器類のほか多くの瓦片が出土した(図6)。3～7は土師器、8は施釉陶器、9は瀬戸美濃焼、10は志野焼、11～14は唐津焼、15は李朝白磁である。土師器皿は口縁部が直線的に広がるもの3・4と丸みをもって立ち上がるもの5・6がある。8は施釉陶器で水滴と考えられる。10は志野焼向付である。14は鉄釉を施した唐津焼碗で、口縁部を歪ませて沓茶碗としている。15は李朝白磁皿で、内底面および高台底には砂目跡が認められる。

このほか、鳥骨・魚骨などの動物遺体も出土している。出土遺物から遺構の時期は豊臣後期に位置づけられる。

SK131 調査地南部で検出した深さ0.6mの土壌である。埋土には炭を多く含む。土師器皿、丹波焼播鉢、瀬戸美濃焼皿・碗、唐津焼碗、青花、白磁皿、砥石、鉄釘などの遺物のほか多くの瓦片が出土した(図6)。16は瀬戸美濃焼折縁皿で、17は端反りの白磁皿である。18は金箔押瓦で、花および草のような意匠が型押しされている。文様面は平滑でていねいな仕上げであるが、裏面は粗いナデ仕上げである。金箔の遺存状況はよくないが、地面のほか文様内にも認められる。飾り瓦とみられるが、四周がすべて欠損しており、種類は明らかでない。

土壌の時期はこれらの出土遺物から豊臣後期に位置づけられる。

b. 江戸期の遺構と遺物

SK203 調査地北部で検出した深さ1.0mの土壌である。埋土の上部には炭を含む。土師器皿、備前焼播鉢、肥前系磁器片のほか瓦片が出土した。

SE218 調査地北西部で検出した井戸である。深さ0.8m以上ある。井戸枠は径0.7mあるが、木質などの痕跡は認められなかった。土師器皿・鉢・羽釜、瓦質土器、備前焼壺、丹波焼、瀬戸美濃焼碗、唐津焼皿、肥前系磁器、鉄釘のほか多量の瓦片が出土した。17世紀後半に位置づけられる。

SE224 深さ1.3mの井戸である。井戸枠の径は0.7mで桶状の木質の痕跡が認められた。埋土上部は炭を多く含み多量の遺物が出土したことから、最終的にはゴミ穴として機能したと考えられる。土師器皿・焙烙・甕、瓦質土器、備前焼德利、丹波焼播鉢、信楽焼播鉢、瀬戸美濃焼、唐津焼碗・皿、肥前系磁器皿・碗、青花碗のほか多くの瓦片が出土した(図7)。

19は瓦質土器鉢、20は信楽焼播鉢、21は丹波焼播鉢、22・23は肥前系染付磁器皿、24は同碗、25は青花碗である。これらの出土遺物は17世紀中～後葉と考えられる。

また、魚骨・鳥骨などのほか貝などの動物遺体も多く出土している。

SK230 深さ0.5mの土壌で、埋土には炭を多く含む。土師器皿・鉢、備前焼播鉢、瀬戸美濃焼、唐津焼碗・皿、肥前系磁器、白磁、鉄釘のほか瓦片が出土した(図7)。

26～29は土師器皿、30～32は唐津焼碗、33は土師器ミニチュア羽釜、34は白磁合子、35は土師器火消壺、36は羽口である。土師器皿27～29には口縁端部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたことがわかる。土師器ミニチュア羽釜33は合わせ型を用いた型押しによる成形で、表面には離れ砂の付着が認められる。

SK232 調査地西部で検出した土壌である。深さ0.7m以上ある。土師器鉢、備前焼鉢、施釉陶器、

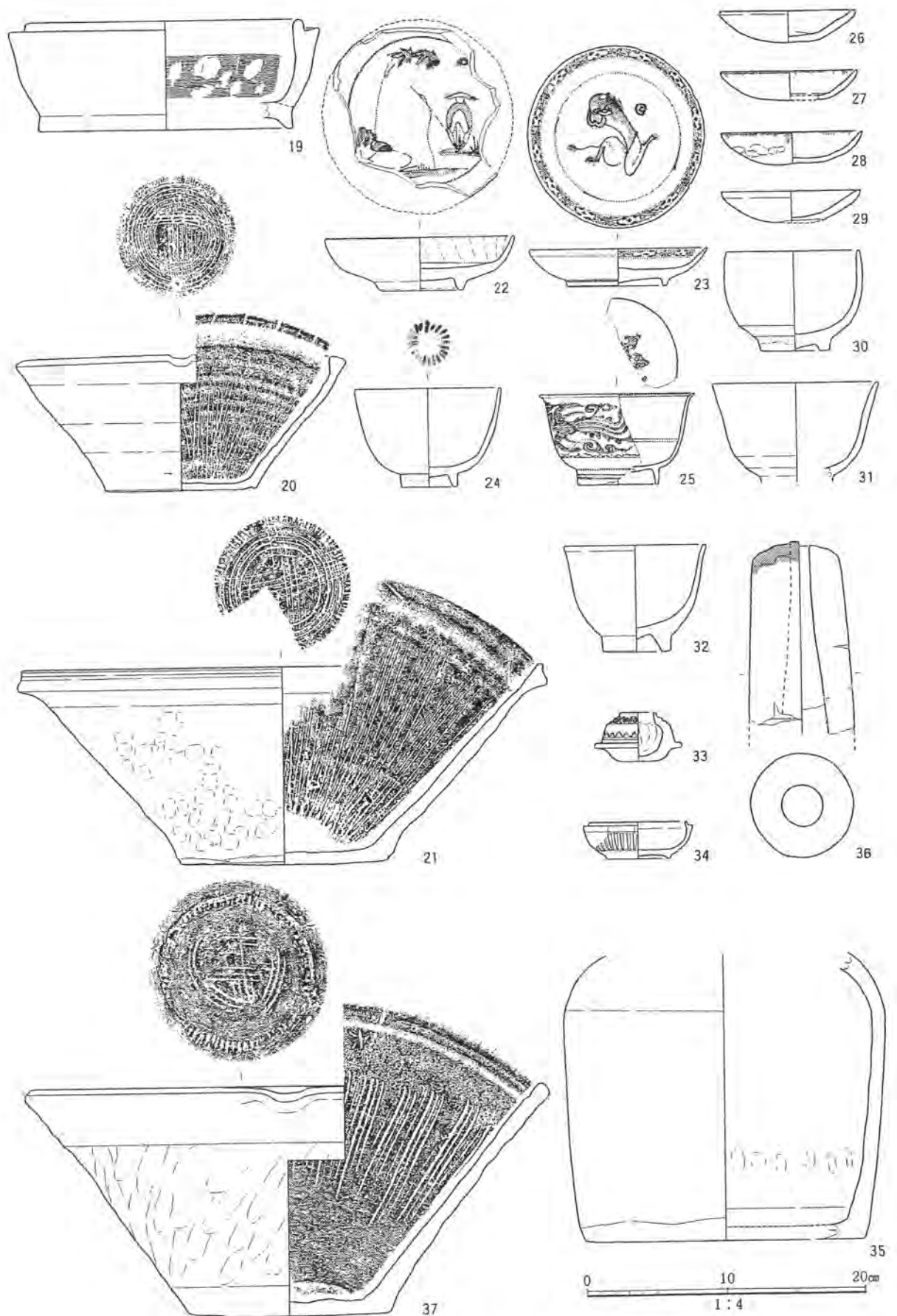


图7 出土遺物実測図(2)

[19~25 : SK224, 26~36 : SK230, 37 : SK239]

肥前系磁器のほか多数の瓦片が出土した。瓦には棧瓦が含まれていることから、18世紀代に位置づけられる。

SK239 調査地南部で検出した井戸である。深さは1.0m以上ある。途中から径0.6mで垂直に近く落ち込むが、井戸枠などの痕跡は確認できなかった。上部は抜取りのため大きく拡がっておりこの部分の埋土には、炭を多く含んでいた。遺物も多く出土したことから最終的にはゴミ穴として利用されたようである。埋土上部から土師器皿・焙烙・羽釜、備前焼播鉢、丹波焼播鉢、瀬戸美濃焼碗、唐津焼皿・碗・壺・徳利、青花などの陶磁器類のほか瓦片が多く出土した(図7)。このうち丹波焼播鉢37を図化した。口縁端部内面に「六」のヘラ描きが認められる。また、サザエ・ハマグリなどの動物遺体も出土している。出土遺物の多くは豊臣期の様相を示すが、肥前系磁器片を含むことから17世紀後半以降と考えられる。

SK240 調査地南東部に位置する穴蔵である。石積みで、漆喰で塗り固めて壁を構築している。埋土を掘削していないため時期は不明であるが、江戸期でも新しいと考えられる。

c. 時期不明の遺構と遺物

比較的小規模で、出土遺物が少なく、埋土に混りがないものが該当する。

SK301・302 直径0.5m程度、深さ0.05～0.10mと浅く、埋土が7層に類似するという特徴をもつ。形状や位置から礎石の抜取穴の可能性はあるが、下位の地層には明瞭な荷重痕跡を認めることはできなかった。遺物は出土しなかった。

SK334 調査地南西部に位置する深さ0.1mの浅い土壇である。土師器細片が出土したのみで時期は不明である。

以上、今回の調査で検出した遺構群について概略したが、本来の掘込み面が失われ、複数の時期の遺構群を同一面で検出せざるをえなかったこともあり、遺構相互の関係については明らかにすることができなかった。しかしながら遺構群の分布を見ると、調査区の西半に土壇・井戸などの規模が大きな遺構が集中する一方で、東半は遺構が希薄であるという特徴を見出せる。このことから東側は穴を掘ることができなかった場所、つまり建物が位置していた場所であったと考えられる。遺構群の東端付近に礎石の抜取穴の可能性のあるSK301・302が位置していることもこうした想定を裏付けるものかもしれない。また、西に遺構が集中し、東が希薄となるこの分布は豊臣期・江戸期を通じて共通していることから、屋敷割および空間の利用方法が豊臣期と江戸期で変化がなかったことを示していると推測される。

3)まとめ

今回の調査地は小面積であることに加え、層序関係がまったく失われていたため、遺構の本来の形状や相互の関係については不明な点が多く残ることとなった。しかしながら、いくつかの重要な成果をあげることができた。

ひとつは、豊臣期と考えられる遺構が多く確認され、城下町北部だけでなくこの地までも豊臣後期には開発の対象であったことを明らかにしえたことである。遺物には志野焼・織部焼・李朝など概し

て富裕層の持ち物が認められることは、居住者の性格を考えるうえでの参考となろう。1点のみの出土であり、原位置性については疑問も残るが、金箔押瓦の存在は、付近に武家屋敷があった可能性をも示唆する。

また、豊臣期・江戸期を通じて屋敷割・土地利用が共通していた可能性を指摘することができた。間口の向きについては明らかでないが、東側に建物があったとすれば、調査地東側にある南北道路を強く意識したものであったと考えられよう。

大坂城下町北部に比べると周辺の調査例は少なく、開発時期など不明な点が多く残されている。当地域の変遷を考えるにあたっては、より一層の調査の積み重ねが必要であろう。

検出遺構全景
(北から)



調査地南端部全景
(南から)



東壁断面
(北西から)



SK129
(東から)



SK131
(南から)



SK131出土
金箔押瓦



中央区道修町四丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(OJ08-2)報告書

調査個所 大阪市天王寺区道修町四丁目20-1他19筆
調査面積 150m²
調査期間 平成20年7月4日～7月17日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、大庭重信

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、御堂筋より約150m西側の、道修町通に面している(図1)。豊臣期大坂城下町の船場西限は現在の心斎橋筋辺りと推定されており、それ以西での発掘調査例は少ない。これまで土佐堀1丁目の萩藩蔵屋敷跡のほか、本調査地北東側約250mで行われた今橋4丁目所在遺跡(IB05-1)で調査が行われている。IB05-1次調査では豊臣後期の遺構・遺物や大坂冬の陣の焼土層が確認されており、豊臣期の開発がこの付近にまで及んでいたことが明らかになっている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006]。また、付近には、御霊神社・津村御堂・難波御堂などの社寺が存在しており、慶長5(1600)年頃と推定される西横堀の開削により、船場から西横堀までの間に寺町を造成しようとしたことも推測されている[新修大阪市史編纂委員会2001]。

今回、当該地で計画された建設工事に先立って、大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、徳川期以前と考えられる整地層が確認された。そこで、豊臣期における開発やその前後の土地利用の状況など、当地域の歴史の変遷を復元する基礎資料を得るために、発掘調査を実施した。

調査は、事業主側が地下2.5mまで重機で掘削したのちに開始した。敷地内の南東部に南北10m、東西15mの調査区を設け、地下約3mまでの地層を平面的に掘下げ、遺構・遺物の検出作業を行った(図2)。調査に着手した時点で、調査区周辺に大坂冬の陣に伴うとみられる焼土層とそれに覆われた礎石群が露出しており、これらは調査区外にも及んでいた。調査区外の礎石については事業主の了解を得て、平面的な分布を可能な範囲で記録した。

以下、本報告に掲載した図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、 $TP \pm 0m$ と表記した。指北記号は図1が座標北で、それ以外が磁北である。



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

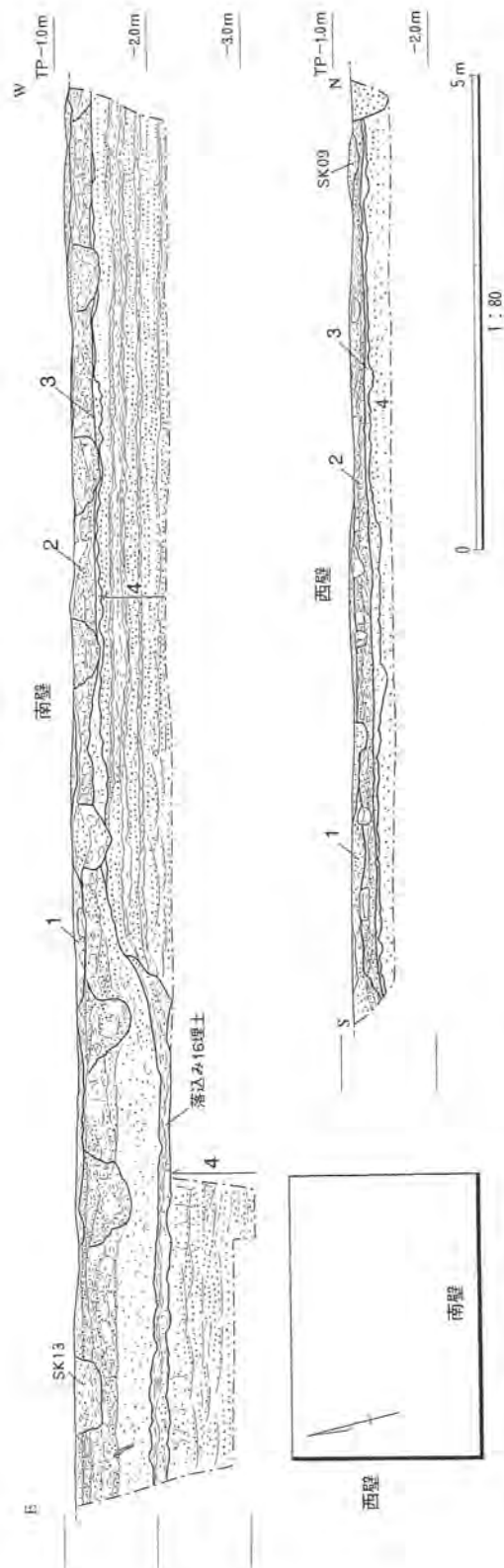


図3 地層断面図

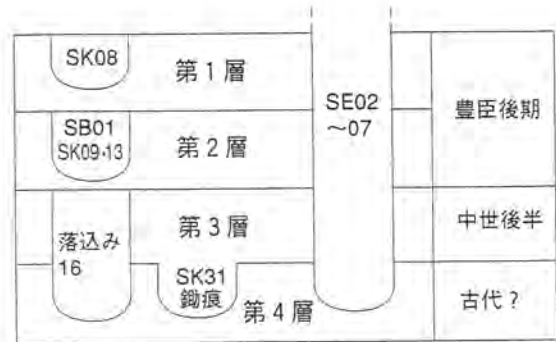


図4 地層と遺構の関係

2) 調査の結果

i) 層序

TP-0.9m~-3.0mまでの地層を第1~4層に区分した(図3・4)。

第1層：褐色(7.5YR4/6)の焼土偽礫・炭片を多く含む整地層である。一部は重機掘削時に削平され、礎石建物SB01の範囲内のみ残存していた。残存層厚は最大で15cmある。豊臣後期に位置づけられる土師器皿1・2、青花4、肥前陶器大皿11、軒丸瓦12のほか(図5)、志野・備前焼などを含むことから、大坂冬の陣の焼土層に比定できる。本層上面でSK08および井戸SE02~07を検出したが、出土遺物の年代観から、井戸は本層よりさらに上から掘込まれたものと判断される。

第2層：オリブ褐色(2.5Y4/3)の粘土偽礫が細粒~粗粒砂に散在する整地層で、層厚は約20cmある。本層上面で、礎石建物SB01および土壌SK07・13を検出した。SB01の範囲内では、上面が被熱により赤色に変色していた。豊臣後期の肥前・瀬戸美濃焼などの陶器・土師器・青花・銅銭および漆器椀13(図5)のほか、大量のスッポンの骨が出土した。

第3層：暗オリブ色(5Y4/3)のシルト質細粒砂からなる作土層で、微細な炭粒を多く含む。層厚は5~15cm

あり、上面で落込み16、下面で土壌SK31および鋤痕を検出した。本層中には、細片化した中世後半の土師器・瓦器・瓦質土器・中世陶器・瓦が含まれる。

第4層：側溝断面および、調査区南東端に設定した深掘りトレンチで確認した河成層である。層厚

は150cmまで確認した。上半は灰オリーブ色(5Y5/3)シルト～中粒砂の互層、下半は灰白色(N8/)粗粒砂～礫からなり、下半ではトラフ型およびプラナー型斜交層理が発達する。第4層下半の古流向は、北東から南西方向ないしは北から南方向であり、大川から供給されたと推測される。第4層の下半から土師器の細片が1点出土した。胎土が精良なことから古代の可能性はある。

ii)遺構および遺物

a)近世(図5・6)

第1層上面でSE02～07、SK08、第2層上面でSB01、SK09・13をそれぞれ検出した。SE02～07は、出土遺物の年代観からいずれも18世紀末～19世紀にかけてのものである。以下、第2層上面で検出したSB01を中心に、豊臣期の調査成果を報告する。

SB01は、調査区内で北辺および東辺を確認した大型の礎石建物である。礎石の分布範囲は調査区外の南側および西側にも及んでいる。建物範囲内は周囲より若干低くなっており、第1層はこの範囲にのみ分布していた。礎石とその抜取穴の位置、および第1層の分布範囲から、建物の規模は東西16.0m、南北8.5m以上に復元できる。なお、SB01北辺付近の第1層中からは、比較的多くの瓦が出土しており、このうち軒丸瓦12を図化した(図5)。瓦の出土状況から、SB01は軒が北側にある瓦葺の

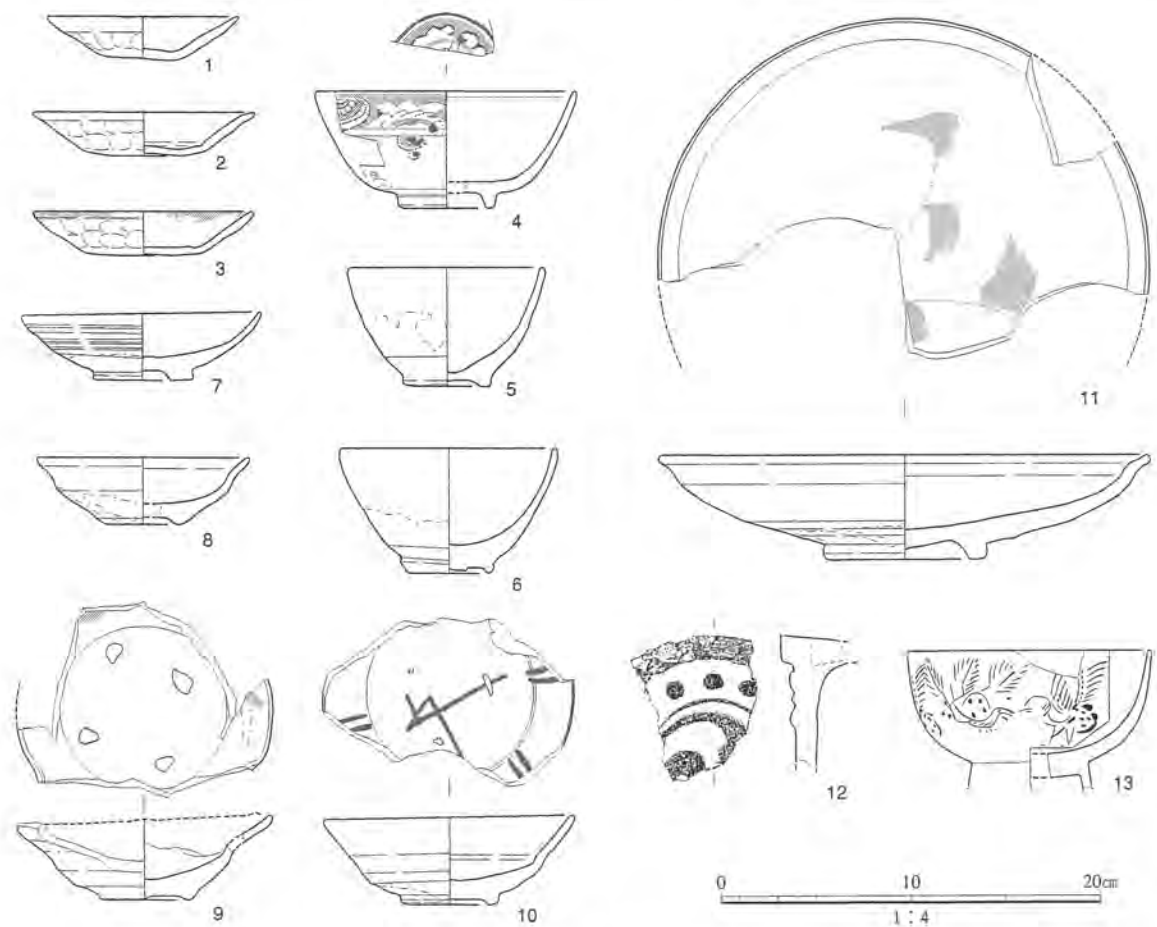


図5 出土遺物実測図

第1層(1・2・4・11・12)、第2層(13)、SK08(3・7・8)、SK09(6・9・10)、SK13(5)

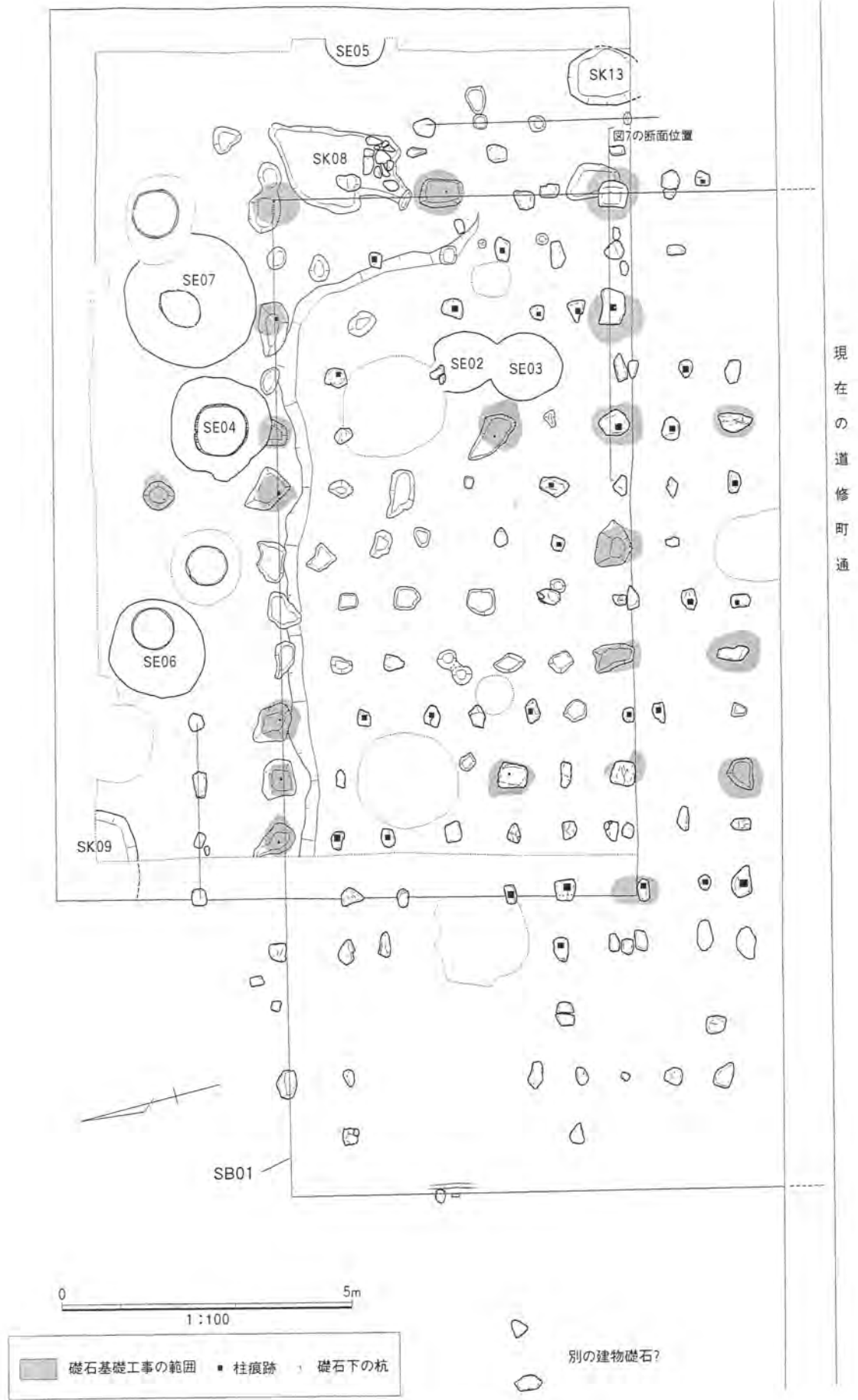


図6 第1層上面および第2層上面の遺構

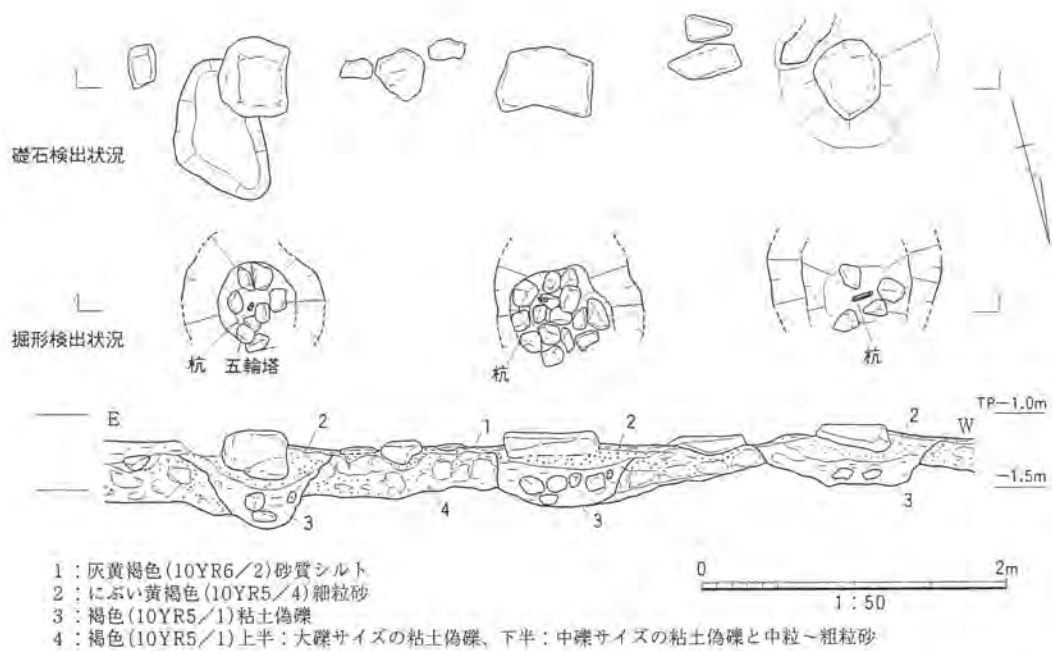


図7 SB01礎石平面・断面図(部分、断面位置は図6に示す)

建物であったといえる。また、SB01から離れた西側にも東西に並ぶ礎石2個があり、この周辺にも焼土が分布することから、別の建物が存在した可能性がある。なお、敷地内の北半には、第1層が分布しておらず、建物の分布範囲は敷地内の南半に限定されていたようである。

礎石は約半数が遺存しており、残りは抜取られていた。建物範囲の北東端にあるSK08は、第1層上面から掘込まれた浅い土壌であるが、豊臣後期の土師器皿3、肥前陶器皿7・8などとともに(図5)、礎石に使用されたとみられる大型の礫が集積していた。このことから、建物廃絶直後に抜取られた礎石が複数あったようである。

礎石の配置は、東西が約1m間隔で並び、17間ある。これに対し、南北は間隔が不揃いであるが、建物北辺から南側6.0mと8.0mでは、大小の礎石が交互に東西に柱筋をそろえて並んでいる。検出した礎石の上面には炭化した柱材の痕跡が残るものがあり、輪郭を確認できたものはいずれも一辺11~12cmの方形であった。建物北辺から南側6.0mの東西の柱筋がそろった箇所で、柱間の距離を計測すると、10間分は9.90mあり、1間は0.99mとなる。礎石の配置および柱痕跡から復元できる建物の下部構造は、礎石の上に柱を据えたあと、南北方向に渡した大引きを支え、この上に床となる板材を東西に渡したと考えられる。また、建物東辺から約1m西側の礎石の脇には、掘形が直径0.1~0.2mの柱穴が2基あり、これらは床を支える補助柱であろう。

SB01の外側には、庇や縁側などの外表施設に伴うとみられる礎石や柱掘形がある。建物東辺の1.2m東側には、1.0~1.5m間隔で柱掘形および小型の礎石が南北方向に並ぶ。また、建物北辺の1.5m北側には、礎石4基が建物と柱筋をそろえて東西方向に並ぶ。このほか、建物北辺から2.0m北側で、礎石を据えたと思われる掘形1基を確認した。

礎石の設置方法は、整地層(第2層)の途中もしくは上面にそのまま小型の礎石を据えるものと、掘形を掘った後に大型の礎石を据えるものの2者がある。後者は建物の北辺、西辺に多く見られること

から、特に荷重がかかる場所に念入りな基礎工事を行って大型の礎石を据えたことがわかる。上述した建物北辺から6.0m南側の東西に並ぶ大型の礎石や、このラインから南北両側2.0mの位置にある複数の大型の礎石も、掘形を掘ったのちに据えられていた。調査で得られた情報から建物の上部構造を復元することは難しいが、この部分も構造上、荷重がかかる場所であったと考えられる。

大型の礎石の設置方法は、第2層の上から直径0.7m前後の掘形を掘削し、下半に第2層と同質の粘土偽礫を、上半に細粒砂を充填したあと、その上に据えていた(図7)。掘形上半に充填した砂は、礎石を据えるための緩衝材の役割を果たしたものであろう。また、建物南東部分では、掘形下半に拳大の礫を詰めており、うち1点には五輪塔の破片が転用されていた。礫を詰めた掘形は5基確認したが、いずれも下位に落ち込み16が分布する範囲にあり、特に軟弱な部分の地盤を補強するためとみられる。また、確認したすべての礎石基礎の掘形の中心には、長さ32~40cmの杭が1本ずつ打込まれていた。柱筋がそろそろ南北の杭は、1.0m間隔で均等に並ぶことから、礎石を据える前の建物の割付に用いたものと考えられる。

なお、SB01内東半の第2層上半部から、スッポンの骨が大量に出土した。整理が進んでいないため解体痕の有無は確認できていないが、散乱した骨が複数箇所にとまって出土することから、自然死したものではなく食用に供されたあと捨てられたものであろう。大型の礎石を据えるための土壌内からも出土していることから、建物が機能している間に床下に捨てられたものではない。この場所の整地から建物の基礎工事を行うまでの間に、付近で食したものを投棄した可能性が高い。また、SB01東側では、整地が複数段階に分けて行われており、第2層内からはほぼ完形の漆器碗13が出土した(図5)。塗色は内面黒、外面赤で、外面に黒色で鳥文様を描いている。

SB01の外側で検出した遺構は、SK09・13の2基がある。SK09は深さ0.1mの浅い土壌で、調査区北西端で検出した。埋土中に炭粒が多く含まれており、肥前陶器碗6、皿9・10が出土した(図5)。9・10は内面に鉄絵が施され、9は4箇所目跡がある。10も3箇所に釉の掛からない部分があり、重ね焼きの痕跡とみられる。時期は豊臣後期である。SK13は東西1.0m、南北1.1m以上、深さ0.3mの土壌で、調査区南東端で検出した。埋土の中層に炭の薄層を挟み、他は人為的に埋戻されていた。木製箸のほか、豊臣後期の肥前陶器碗5が出土した(図5)。

b) 中世

第3層上面で落込み16、第3層下面でSK31および鋤痕を検出した(図8)。

落込み16は調査区南東部で西端を検出したもので、上端は北東-南西方向に直線的に伸び、深さは0.8mある。底付近には植物遺体の薄層を挟むシルトが堆積しており、水が溜まった沼地のような状態であったと考えられる。調査区南壁地層断面をみると、第4層上半が落込み16付近で粗粒化していることから、かつての放棄流路であった可能性もある。その後、第3層と類似した礫を含む細粒砂で埋戻され、その上を第2層とした整地層が覆っていた。埋土中からは、中世後半のものと思われる土師期・須恵器・瓦質土器・中国製白磁・国産陶器・瓦や、曲物底・箸などの木製品が出土したほか、底付近からネコの頭骸骨が出土した。

落込み16西側の第3層下面では、北東-南西方向に並ぶ鋤痕を検出した。南壁および西壁地層断面



図8 第3層上面・下面の遺構

では、第3層上・下面がわずかではあるが規則的に凹凸をなしており、鋤痕の分布範囲が凹部と一致する。このことから、平面調査では検出できなかったが、第3層は島の作土で、落込み16と並行して畝・畝間が2～3m間隔で並んでいたと考えられる。下面で検出した鋤痕は畝間を掘削した際の加工痕であろう。

なお、落込み16の際では、直径約2.3m、深さ0.2mの大型の円形土壌SK31を検出した。埋土は第3層と同質で、遺物は出土していない。

c) 当地域の開発とSB01の性格

豊臣期船場の西側にある当地で、大坂冬の陣の際に焼失した大型の礎石建物を検出したことは、豊臣期の大坂城下町の拡大と都市計画の実態を明らかにする上で重要な成果といえる。

SB01は中世後半の畠や沼地を埋めて整地したあと建てられており、築造の時期は出土遺物からみて豊臣後期であろう。建物の規模が大きいことから、一般的な町屋とは考えられず、武家屋敷や社寺、あるいは蔵といった施設が想定しうるが、出土遺物から推定することは難しい。礎石の配置や柱痕跡から、礎石の上に柱を据え、その上に大引きを南北に渡した床張り構造の建物を復元できるが、大引きを支える柱が一辺11～12cmと小規模である点が特徴といえる。豊臣期の大坂城では、OS85-28次調査で検出された大壁造りの蔵とされる礎石建物SB508の柱規模が15～20cmであり、SB01よりは大型である[大阪市文化財協会2003]。同時期の資料が少ないが、SB01の柱規模が小さいことから、床面に大きな荷重がかかる蔵の可能性は低い。

豊臣期船場以西の開発については、慶長5(1600)年頃と推測される西横堀の開削を前後して、当地に寺社が集められ、慶長3(1598)年には津村御堂や難波御堂が現在の地に移転している[新修大阪市の史編纂委員会2001]。また、調査地南側約100mにある御霊神社には、戦国大名亀井茲矩が宅地を割いて土地を寄進し、文禄4(1594)年に現在地に鎮座したという由緒が伝わっている。当地域が船場城下町とは異なる、寺社や大名屋敷が集まるエリアとして開発されていったことを示唆する。SB01もこのような大名屋敷や寺社の施設の可能性がある。

3)まとめ

今回の調査では、大坂冬の陣の際に焼失した大型礎石建物を検出し、豊臣期船場の西側の開発を明らかにする上で重要な知見を得ることができた。建物の下部構造の復元や文献記録から、大名屋敷や寺社の施設の可能性がある、豊臣期の船場以西の状況については、残された文献記録が少ないことから不明な点が多く、考古学的な成果に期待されるところが大きい。今後の周辺の調査でも注目していく必要がある。

豊臣期に開発が進む以前、中世の後半には畠地として利用されていたことが判明した。また、当地域で人間が活動できる条件が整ったのは、大川から運搬された土砂によって陸化した以降であり、時期は少なくとも古代以降である。

参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「今橋4丁目所在遺跡(1B05-1)発掘調査報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.193-204

大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ

新修大阪市の史編纂委員会2001、『新修大阪市の史』第三巻、pp.136-137

調査地全景
(北東から)



SB01検出状況
(西から)



礎石の基礎構造



大坂城下町跡発掘調査(OJ08-3)報告書

調査個所 大阪市中央区南本町二丁目22-1 他
調査面積 136m²
調査期間 平成20年9月18日～10月2日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、大庭重信

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣期の船場城下町推定域の南西部に位置し、現在は市内の東西幹線道路である中央大通りに面した北側にある(図1)。また、近世では北の米屋町通と南の唐物町通にはさまれた街区に相当する。

同じ街区に属する調査地の東側約50mで行われたOJ95-4次調査では、大坂冬の陣に伴う焼土層の下で豊臣期の生活面が確認されており、その下には城下町造成に伴う層厚80cmの整地層と、これに覆われた湿地性の黒色粘土層が確認されている[大阪市文化財協会2004]。

大阪市教育委員会が事前に実施した試掘調査の結果、敷地北端では地表下3.2mまで近代以降の攪乱が及んでいたが、南端では地層の残りが良好で、地下約2.3mで江戸時代初期の遺物包含層が、地下約2.7mで基盤となる自然堆積層が確認された。これを受けて、地層の年代や遺構・遺物の分布を明らかにし、豊臣期前後における土地利用の状況など、当地域の歴史の変遷を復元する基礎資料を得ることを目的に、敷地の南端で調査を実施した。

調査は中央大通りに面した南北8.0m、東西16.5mの範囲を対象とした(図2)。調査の方法は、事業者が地下約2.3mまで重機で掘削した後開始し、地表下2.7mまでを人力で掘削して地層・遺構の検出・記録を行った。なお、調査区内には近代以降の攪乱が多くあり、調査区の西部・中央部・東部に鳥状に残された箇所を対象に調査を行った。

以下、本報告に掲載した図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、 $TP \pm 0m$ と表記した。指北記号は図1・2が座標北で、それ以外が磁北である。

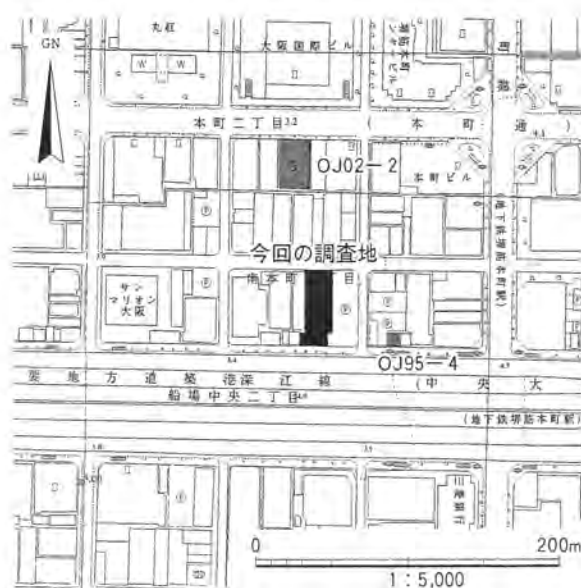


図1 調査地位置図

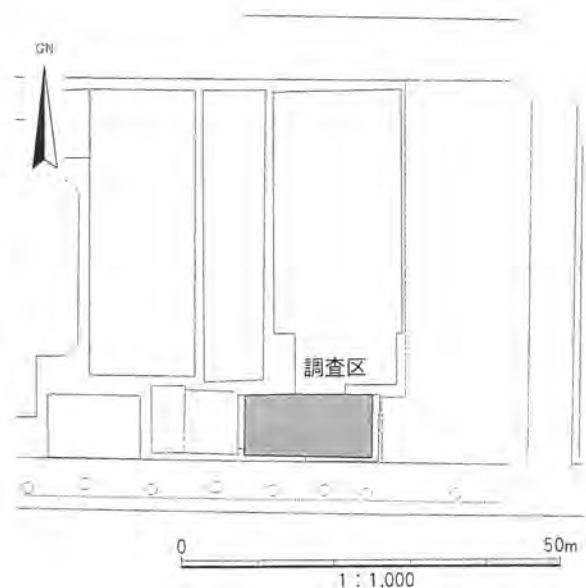


図2 調査区位置図

2) 調査結果

1) 層序(図3・4)

調査区の西部・中央部・東部にそれぞれ残存する人為層を第1～3層に区分し、以下の自然堆積層を第4層とした。

第1層：地表下約2.3m(TP+1.6m)の調査開始面から焼土を多く含む第2層までの間に遺存していた整地層で、17～18世紀代の土師器・陶磁器・瓦や、銅細工に関わる埴埴・銅片・スラグ・羽口などを含む。層厚は10cm未満である。調査区中央・東部では細分できないが、西部では遺構の上下関係によって、第1a層・第1b層に細分できる。

第1a層は黄灰色(2.5Y7/2)細粒～中粒砂からなる整地層で、上面でSD05を検出した。また、SK15は同様の細粒～中粒砂で埋められており、埋土中に18世紀代の陶磁器類が含まれることから、整地の時期は18世紀以降である。第1b層は、シルト偽礫を含む褐灰色(10YR4/1)細粒～粗粒砂からなり、上面で上述したSK15や礎石建物2・SK06を、下面で17世紀代の遺物を含むSK20など多くの土壌・井戸を検出した。

第2層：焼土・炭を多く含む黒褐色(7.5YR2/2)シルト質中粒～粗粒砂からなる整地層である。層厚は10cm未満で、肥前陶器・瀬戸美濃焼・備前焼・青花など豊臣後期の陶磁器を含むことから、大坂冬ノ陣直後の整地層と判断できる。

第3層：黄褐色(2.5Y5/6)中粒～粗粒砂からなり、下位層の上半が擾乱されたものである。上部には偽礫を含む整地層が部分的に見られた。層厚は20～30cmあった。上面付近は被熱のため赤色に変化しており、部分的に炭の薄層が分布する。上面で礎石建物1およびSK23、下面でSK32・33などを検出した。豊臣後期に位置づけられる陶磁器のほか、古代の須恵器杯蓋、古墳時代前期の土師器高杯などが含まれる。

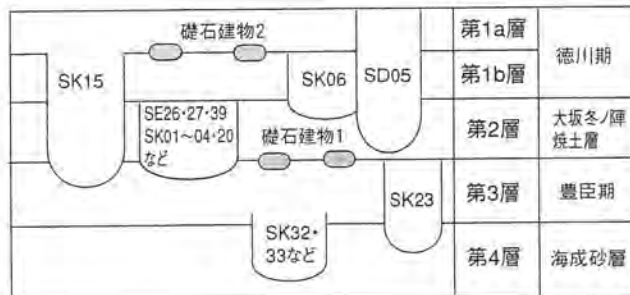


図3 地層と遺構の関係

第4層：明黄褐色(2.5Y6/6)中粒砂～礫からなる海浜成層である。TP+1.1m以下、一部深掘りによりTP-0.8mまで確認した。下半では級化構造をもつ砂礫層が反復し、上方にいくにつれ全体的に細粒化していた。また、下半では礫が東から西へ折り重なるインブリケーションが見られ、地層も同じ方向へ

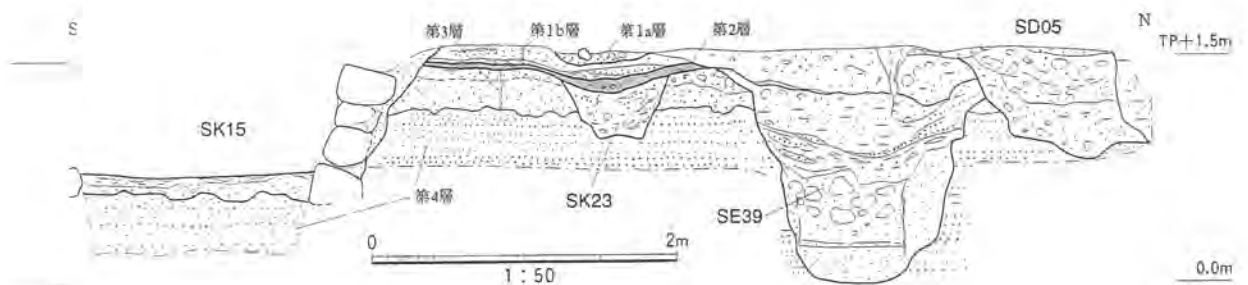


図4 地層断面図(断面の場所は図5に表示)

傾斜していた。以上のことから、第4層の堆積環境は波打ち際から海岸線が西側へ移動し、砂浜へと変化していったことがわかる。

2) 遺構と遺物(図5～7)

検出した遺構は、層序関係と出土遺物の年代観から、大坂冬ノ陣以前の豊臣期とそれ以後の徳川期に大別でき、後者はさらに17世紀代の遺物を含む遺構群、18世紀代の遺物を含む遺構群に分けることができる。以下、検出した遺構の特徴と、時期の根拠となる出土土器・陶磁器を時期毎に述べ、最後に遺構・地層出土銅製品と銅細工関連遺物をまとめて報告する。

i) 豊臣期

豊臣期の遺物を含む第3層は調査区の東部で良好に遺存しており、上面で礎石建物1を、下面でSK31～34・38を検出し、調査区西部でも上面でSK23、下面でSK21・22を検出した。

礎石建物1 東西・南北に大型の礎石と小型の礎石が交互に並び、南北で4間、東西で2間分を確認した。北西隅の礎石上面には東西・南北の割付線が墨で記されていた。割付線の方向と各礎石の位置から、柱間隔は南北が0.73m、東西が約0.94m前後に復元できる。検出した礎石列の西辺および北辺には、幅4cmの細い溝があり、床下に板を立てたものと考えられる。

SK31～34・38 調査区東部の第3層下面で検出した円形土壇で、規模は直径0.3～0.6m、深さ0.1～0.2mと小規模である。

SK21～23 調査区西部で検出した土壇である。SK23は第3層上面で検出した直径0.8m、深さ0.4mの円形土壇で、埋土は偽礫を多く含む中粒～粗粒砂である。SK21・22は第3層下面で検出した土壇で、規模はSK21が短軸0.4m、長軸0.5m以上、深さ0.3m、SK22が直径0.5m、深さ0.15mある。SK22からは肥前陶器ひだ皿5、碗10が出土した。SK21は後述するSK20に切られている。

ii) 徳川期(17世紀)

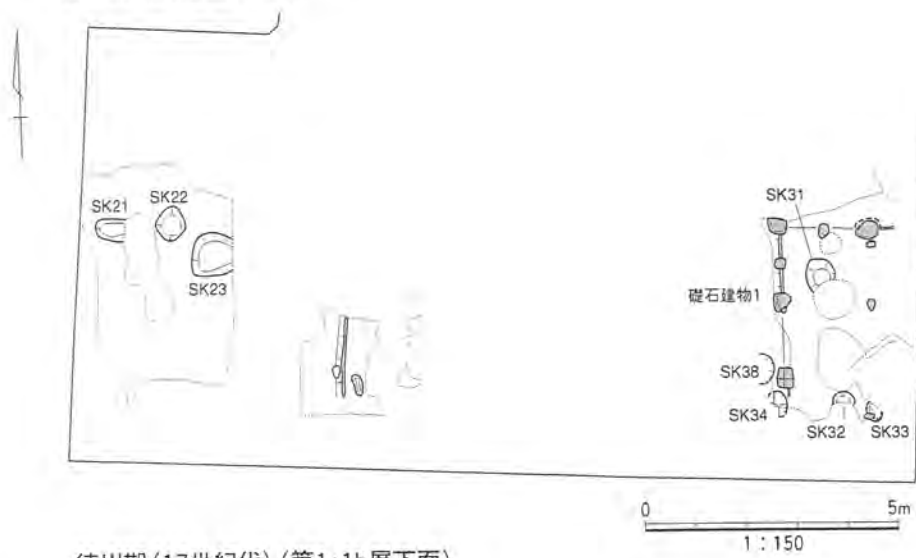
第1層もしくは第1b層下面で17世紀代の遺物を含むゴミ穴とみられる土壇および井戸を多数検出した。この時期に含めた遺構には、層序関係が不確かで、出土遺物から判断したものも含む。

SK01～04・08・13 調査区東部で検出した土壇である。平面形はSK02・03・08・13が直径0.8m前後の円形、SK01が長軸1.3m、短軸0.6mの楕円形で、SK04も平面形がSK01と類似する。検出面からの深さは0.4～0.5mあり、いずれも埋土中に炭粒を多く含む。特にSK01・03の埋土中には貝が多く含まれていた。SK01～03・08・13は南北方向に並んでおり、当時の町割りや建物の配置に規制されて掘られたゴミ穴であろう。

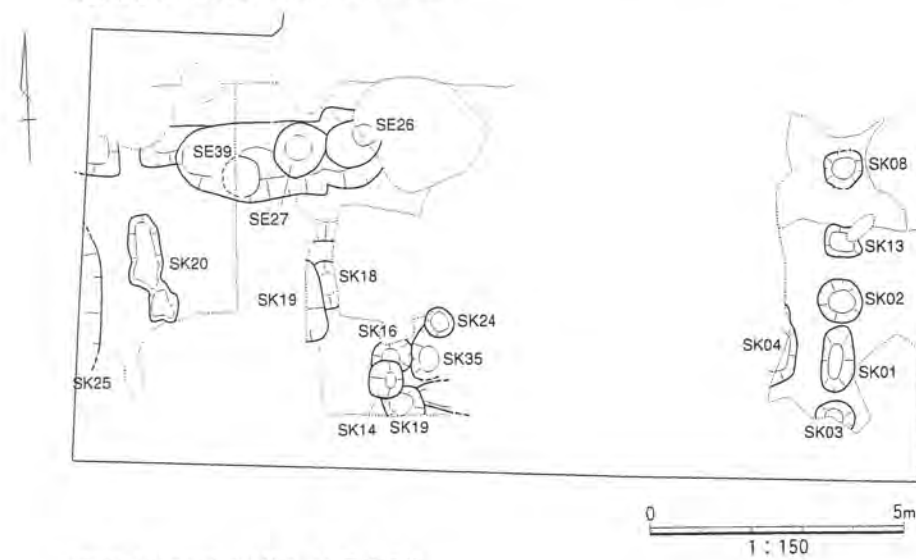
SK01から肥前陶器皿4・碗6、SK03から肥前陶器碗7が出土した。4は溝縁皿、6は口縁部の下方でくの字形に屈曲する碗である。7も6と共通しており、内野山窯の製品に多く見られる形態である。いずれも17世紀中頃前後のものである。

出土した貝の内訳は、SK01がハマグリを主体とし、少量のヤマトシジミ・アカガイ・サルボウ・アワビ類・サザエ・バイなどを含む。イタヤ貝製の貝杓子もある。SK03からは多量の貝が出土し、ハマグリ・ヤマトシジミを主体とし、少量のサルボウ・シオフキ・サザエ・バイなどを含む。

豊臣期 (第3層上・下面)



徳川期 (17世紀代) (第1・1b層下面)



徳川期 (18世紀) (第1・1b層上面)

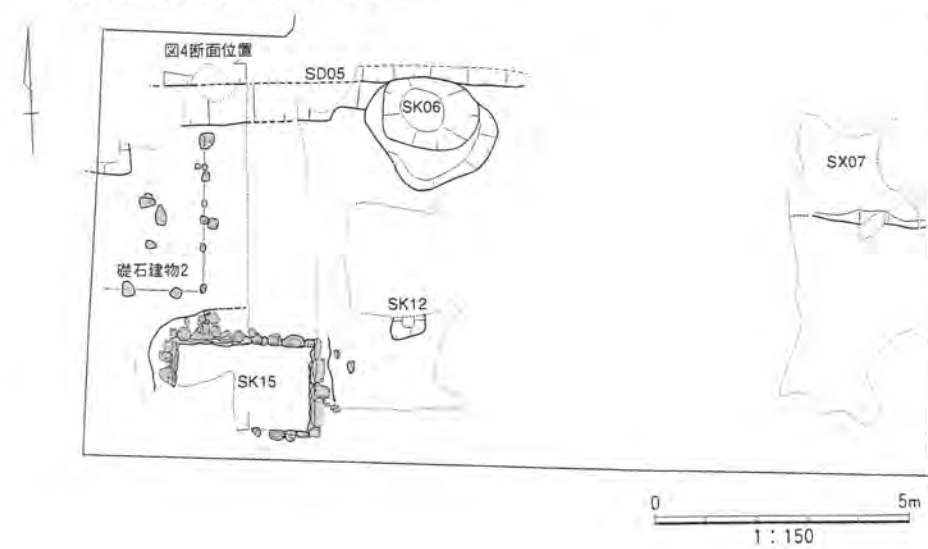


図5 検出遺構平面図

SK14・16・18・19・24・35 調査区中央南半で密集する土壌で、SK14はSK16・19を、SK24はSK35を切っている。平面形はSK14・16・19・24が直径0.5～0.7mの円形で、検出面からの深さは0.4～0.6mある。SK14からは土師器皿1・2が出土している。

SK20・25 調査区東部で検出した南北に細長い土壌である。SK20は長軸2.1m、短軸0.6mあり、検出面からの深さは最大で0.3mで、底は凹凸が著しい。SK25は東半を確認したのみであるが、南北2.1m以上ある。SK20には炭粒が多く含まれるほか、後述するような各種銅製品や銅の切屑といった、銅細工に関わる遺物が多数出土した。

SK20からは瀬戸美濃焼皿3、肥前陶器碗12が出土した。12は体部下半に稜があり、上半がゆるやかに外半するもので、外底面まで全体に釉が掛かる。17世紀中頃前後のものである。

SE26・27・39 調査区中央部北半で検出した東西に並ぶ井戸である。当初、東西に細長い大型の土壌と認識して掘削したが、底付近まで掘下げた段階でようやく円形の井戸枠を確認し、重複した3基の井戸であることが判明した。SE26はSE27を切っている。井戸枠は木質がわずかに遺存していたのみであり、直径はSE26が0.4m、SE27が0.5m、SE39が0.7mあった。

SE26から肥前陶器碗9が、SE27から肥前陶器碗11が、SE39から肥前陶器碗8が出土した。いずれも井戸枠内の底付近から出土したものである。8は胎土や釉の特徴から、福岡県上野・高取窯産と考えられる。ともに17世紀中頃前後のものである。

iii) 徳川期(18世紀)

調査区西部の第1a層上面でSD05を、第1b層上面でSK15および礎石建物2を検出した。このほか、第2層の上から掘込まれ、18世紀代の遺物を含む遺構にSK06・07・12がある。

SD05 調査区東部の北端で検出した東西溝で、溝の北半は調査区外のため規模は不明である。溝

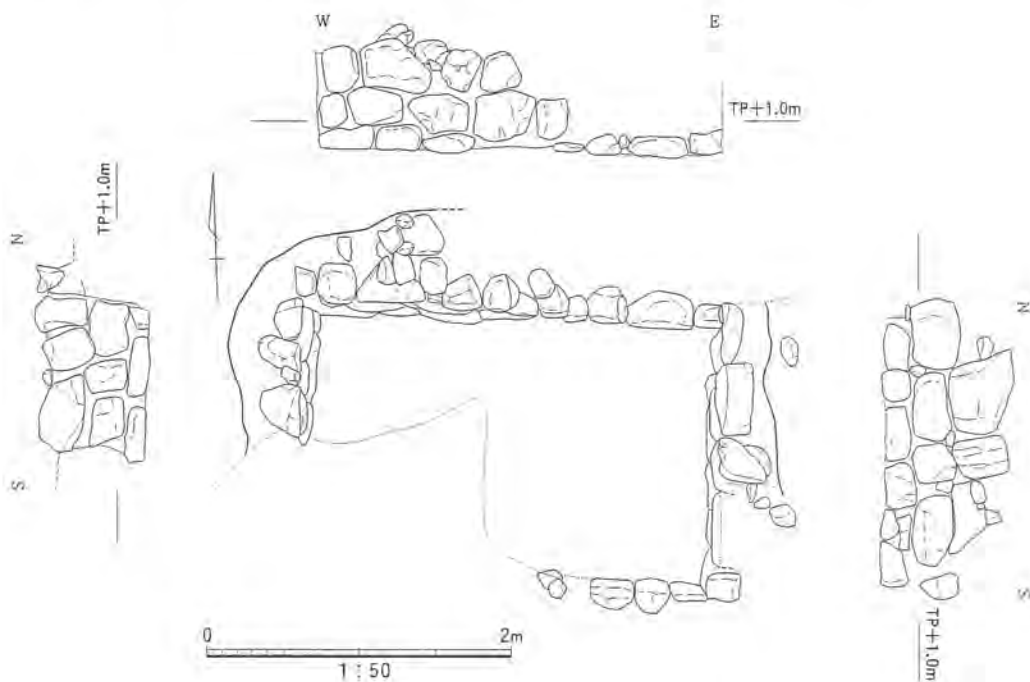


図6 SK15平・立面図

は掘直されていた。東側約50mの地点で行われたOS95-4次調査では、ほぼ同じ位置で豊臣期～現代までの背割下水が検出されており[大阪市文化財協会2004]、SD05もこれに連続するものであろう。また、調査区東部北半の第1層上面で検出した北側に傾斜する落込みSX07は、埋土中に18世紀代の陶磁器類を含み、方向からこれも背割下水の掘形の一部の可能性がある。

SK15 調査区西部南端で検出した穴蔵で、内法は東西2.6m、南北1.6mあり、高さ0.7mまで石を3段積上げていた(図6)。石の間には砂を含む粘土を塗込めていた。穴蔵は第1a層に相当する黄灰色細粒～中粒砂で埋められており、埋土中から18世紀代の肥前磁器や京焼系陶器片が出土した。

礎石建物2 SK15の北側で、第1a層を除去した段階で検出したもので、両者は同時存在していた可能性がある。調査開始面付近で検出した石は、攪乱を受け二次的に移動している可能性もあるが、南北・東西の並びが確認でき、建物の礎石と判断した。

SK06 調査区中央北部で検出した直径2.0m、深さ1.8mの大型土壇である。埋土の下半には第4層の上半に由来する粗粒砂の偽礫とともに漆喰片が多く含まれており、上半からは土師質土器大型火入や曲物容器のほか、備前焼・瀬戸美濃焼・肥前陶器・京焼系陶器・肥前磁器などの18世紀代の陶磁器が出土した。

iv) 銅製品および銅細工関連遺物(図7、写真1)

今回の調査では、各遺構・地層から各種銅製品や銅細工に関わるとみられる道具類、銅や真鍮の切屑や地金とみられる破片が多く出土した。ここでは、まとまった資料が得られたSK20を中心に報告する。

SK20からは、埴塙13、小型の銅製品23～26・28～42、棹秤の棹44のほか、多数の金属片やスラグが出土した。これらは現地では取上げたもののほか、埋土の半分(約18ℓ)を1mm目の篩を用いて水洗し、捕集したものである。

13は瀬戸美濃焼小杯を転用した埴塙で、内面には地金が付着し、黒色に変色している。内面の付着物に対して蛍光X線による成分分析を行ったところ(注1)、銅のほか砒素が含まれていた。SK35からも13と同様の埴塙に転用した小杯底部14が出土しているほか、第1層から梅干壺埴塙の可能性もある15・皿形の埴塙16が出土している。

23～26は中央に小孔が穿たれた板状の銅製品である。23は平面が蘭形で、同じ形のものでSK06の裏込め内からも出土している(22)。24・25は平面が木の葉形もしくは花卉形である。25は他よりやや厚手で立体的に湾曲しており、表面に細かな文様が見られる。これは先端に文様を刻んだタガネで打刻したものである。26は長方形の銅板で、やや不整形であることから、製品ではない可能性もある。28～39は最大幅1.0cmのハート形の銅板で、いずれも表面の外端が丸みを帯び、裏面は平滑で外縁に段が付く。図化しなかったものも含め、SK20から合計17点出土した。40・41は直径0.6cmの円形の銅板で、ハート形の銅板と同様、片面が丸みを帯びている。42はつまみ状の突起が付く銅製品の破片である。突起の上端は直径0.3cmの円形で、丸く処理されている。

写真1はSK20から出土した切屑や地金とみられるものの一部である。線状・板状のほか、断面円形の棒状のもの、厚さ1cm近くある断面方形のものなど多様である。これらについても蛍光X線によ

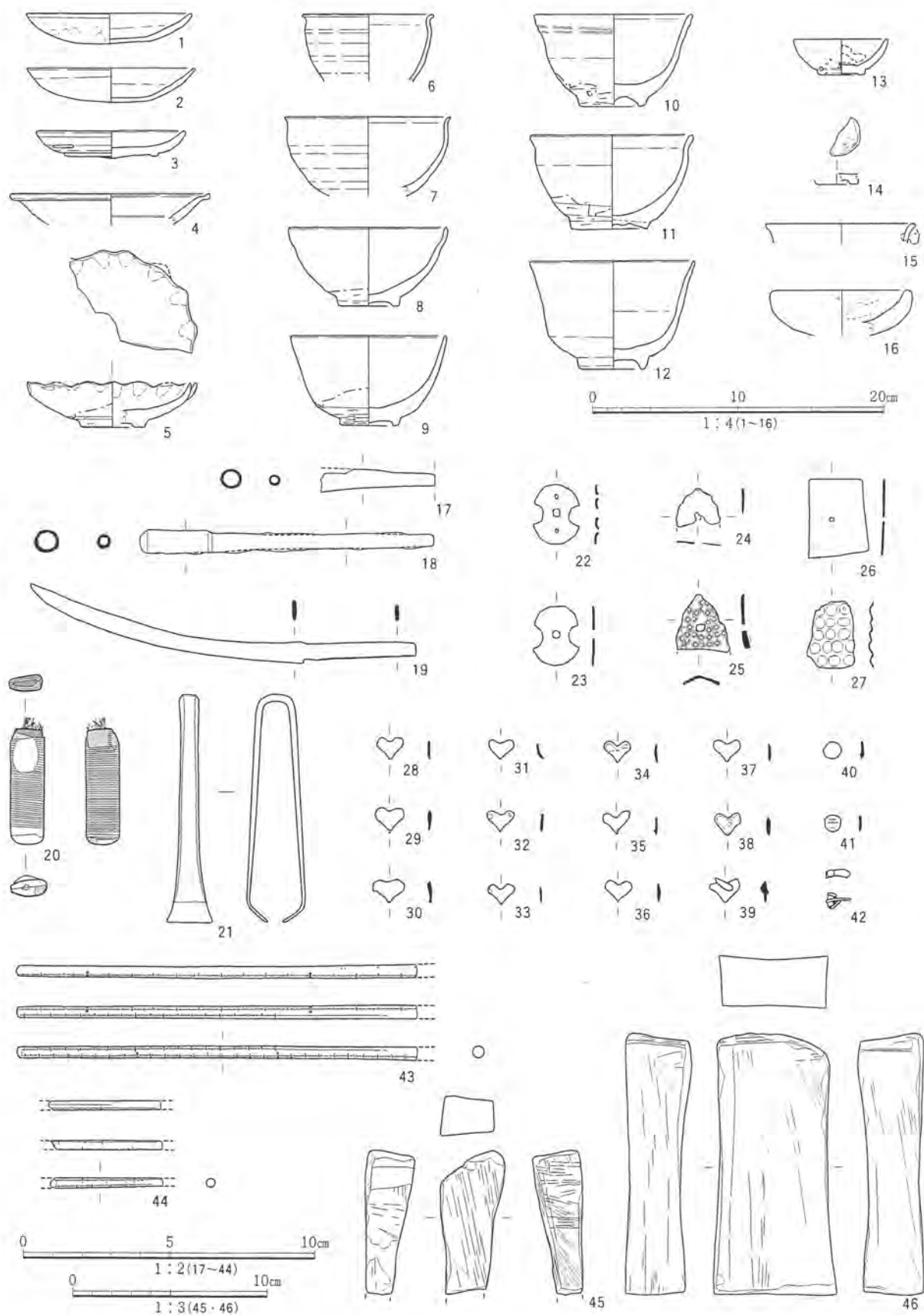


图7 出土遺物

SK22(5·10)、SK01(4·6·43·45·46)、SK03(7)、SK14(1·2)、SK20(3·12·13·23~26·28~42·44)、SE26(9)、
SE27(11)、SE39(8)、SK35(14)、SK06(22)、SK23(20)、SK33(21)、第1層(15~19)、第2層(27)



写真1 SK20出土金属片

る成分分析を行った結果、銅と亜鉛の合金(真鍮)とほぼ純銅の2種類があり、後者には少量の鉛と砒素を含むものと砒素のみを含むものがあつた。このような銅屑は、第1層やSK01・18・22・23・25からも出土している。

SK20から出土した棹秤の棹44は、三方向に目盛が刻まれた骨製品で、SK01からも同様の骨製棹43が出土している。SK01からは棹とともに48・49など合計7点の砥石が出土している。棹秤は銅の成分を調合するため、砥石は製作した

銅製品の研磨に用いられた可能性がある。

上記以外にも、第1層から煙管17・18、小刀19、SK23から小刀の柄20、SK33から毛抜き21、第2層からは魚子文様のある銅板27など多様な製品が出土した。20は幅1.2cm、厚さ0.7cm、残存長4.0cmの小型品である。内部には鉄製の茎と木質が残っており、茎の両側に木の板を当て、銅板で覆った上から銅線を螺旋状に巻き付けて固定している。

今回の調査地では、上記のように銅の地金が付着した埵塙や製作の際に生じた銅の切屑など、銅細工に関わる遺物が多く出土した。SK20をはじめとした大坂冬ノ陣後の17世紀中頃前後の遺構から多く出土しており、この時期に銅細工職人が付近で活動していたのであろう。調査区北端が敷地境に相当することから、調査区域は近世には唐物町通に面した北側街区(唐物町三丁目上半)の奥に当る。なお、豊臣期のSK22・23からも銅屑が出土しているが、出土数がわずかなため、活動の時期が豊臣期まで遡るかは断定できない。また、装飾品の一部とみられる小型の銅製品を中心に多様な銅製品が出土しているが、これらがここで製作されたものか、地金に利用するために集められたものかは、現段階では判断が難しい。

3)まとめ

今回の調査の結果、豊臣期と徳川期(17世紀・18世紀)の3時期の大坂城下町に関わる遺構・遺物を検出した。特に、17世紀代の遺構から銅細工に関わる遺物が多く出土したことから、この時期、唐物町三丁目付近に銅細工職人がいたことが明らかになり、大坂城下町における手工業生産の実態を解明する上で重要な資料が得られた。

注1)大阪歴史博物館設置のエネルギー分散型微小部測定用蛍光X線分析装置(エダックス社製 Eagle II型)を用いて、技術管理・保存科学担当係長伊藤幸司が測定した。

参考文献

大阪市文化財協会2004『大坂城下町跡』II

調査区全景(西から、
南は中央大通り)



調査区西部第1a層上面
検出遺構(南から)



調査区東部第3層上面
検出遺構(南から)



大坂城下町跡発掘調査(OJ08-4)報告書

調査個所 大阪市中央区淡路町3丁目53・60・73-1の一部
調査面積 144㎡
調査期間 平成20年10月1日～平成20年10月16日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、清水和明

1) 調査に至る経緯と経過

本調査地は大坂城下町跡の西南部に当る。従来の周辺地域の調査では、平安時代の集落地であると同時に豊臣後期に開発された船場の西橋付近に位置すると推定されている。

本調査地の北に接する敷地では、OJ97-1次調査が行われ、徳川期を中心として一部が豊臣期に遡る遺構群のほか、平安時代初期の溝などが見つかった[大阪市文化財協会1999]。さらにその周辺では、OJ97-1次調査の北に接してOJ92-22次[大阪市文化財協会2004、pp.315-325]、本調査地の北側200m程の範囲ではOS88-82次、OJ92-24次、同36次、OJ94-16次調査などが行われている[大阪市文化財協会2004、pp.281-314]。このうちOS88-82次、OJ92-22次調査では弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺物、平安時代の遺構と遺物が発見され、船場地域が陸化して開発が始まる時期を示唆するものとして注目されている。中世ではOJ94-16次調査で室町時代の大溝があり、豊臣期ではOJ94-16次調査地の屋敷地のほかは顕著な遺構はないものの、OS88-82次・OJ94-16次調査で大坂冬ノ陣の焼土層が検出されている。徳川期に入ると、17世紀から18世紀にかけて発達する城下町の変遷過程や骨加工・硯生産などさまざまな生業に係る資料がOJ92-24次・OJ94-16次調査などで見つかっており、考古学による知見から歴史的な復元が進展しつつある地域といえよう(図1)。

本調査地では、2008年9月1日に大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、現地表面下約2.6mで検出された豊臣期～徳川期にかけての遺構・遺物を主目的に、また周辺調査で明らかとなっている古代～中世の遺構・遺物の確認を含めて本調査を実施することになった。はじめに事業主によって現地表面下約2.6mまで機械掘削し、10月1日からは徳川期の屋敷地に係る遺構検出と記録保存作業を行った。10月10日からは徳川期の地層基底面で掲出された大坂冬ノ陣以降の土壌と、さらに下位の豊臣後期に遡る大規模な整地層を調査して、10月16日にすべての調査作業を終了した(図2)。

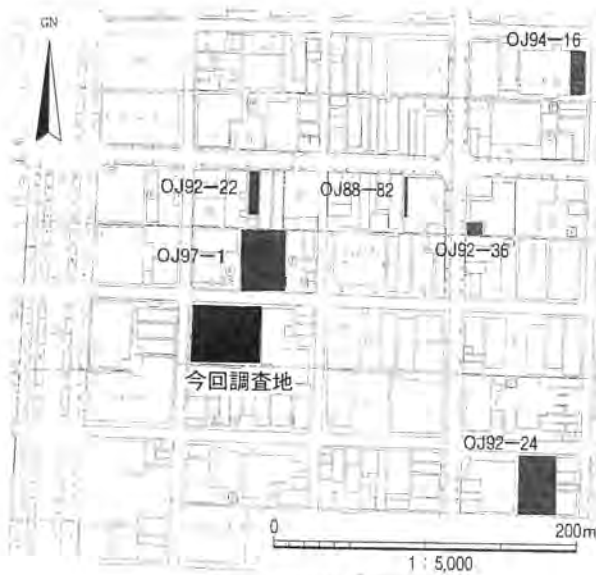


図1 調査地位置図

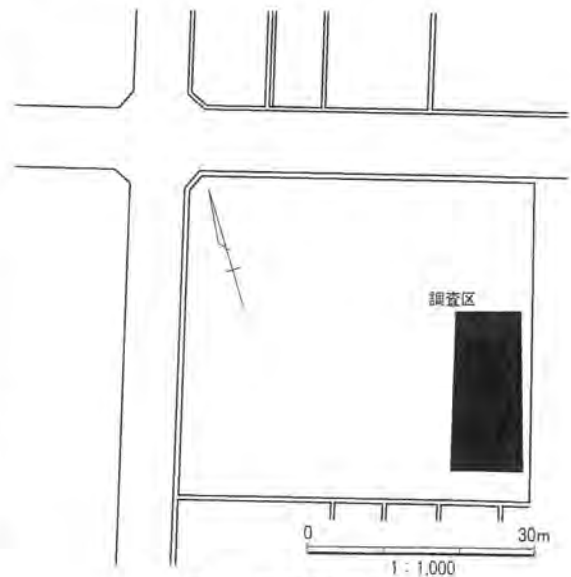


図2 調査区位置図

以下、本報告に掲載した図に示す標高はTP値(東京湾平均海面値)を用い、 $TP \pm 0m$ と表記した。本文中で用いた示北記号は図1が座標北、その他は磁北である。

2) 調査の結果

i) 層序(図2・3)

調査区北壁に代表させて本調査地の地層を記述する。

第1層：礫層で、硬化剤によって固められた現代の整地層で、層厚は約20~50cmである。

第2層：暗褐色シルト質砂層に鉄筋・コンクリート片などを含む現代の盛土層で、部分的に下位の第3層を大きく削っているため、層厚は70cmから厚いところで180cmに達する。

第3層：にぶい黄色(2.5Y6/4)極細粒~中粒砂を主体とする整地層で、黒褐色(10YR2/3)礫質シルトや焼土の偽礫を多量に含む。下位の第4層直上には極細粒~細粒砂が堆積している。遺物を採集していないが、続く第4層の遺物のほとんどが17世紀代を下限とすることから、徳川期の後半から近代にかけての地層であろう。

第4層：調査区の北部では上下2層に細分され、上層はわずかにシルト質な黒褐色(2.5Y3/2)細粒~中粒砂層、下層は黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒~中粒砂層であるが、東側では南北に延びる溝SD401の埋土となり、水つきの状態で堆積したためシルトが多く極細粒~細粒砂の薄層を挟在させている。調査区南部に向って低く傾斜して、全体に南側がよりシルト質になっている。調査区の南壁では地層の細分が困難で、黒色(2.5Y2/1)シルト質中粒砂を主体とし、多量の有機質の遺物を包含している。層厚は40~60cmで南部が厚い。本層は徳川期の17世紀後半におさまる遺物包含層で、調査した遺構のほとんどが本層の下面で検出し、他に、本層の基底面で検出した遺構がある。

第5層：含炭化物灰黄褐色(10YR4/2)シルト質中粒砂~暗灰黄色(2.5Y5/2)わずかにシルト質中粒砂層で、層厚は40~60cmで南部が厚くなっている。北壁の東側で下位の第6層以下を掘込んで第7層に達している状況が確認された。本層は豊臣期の遺物が散見される遺物包含層である。

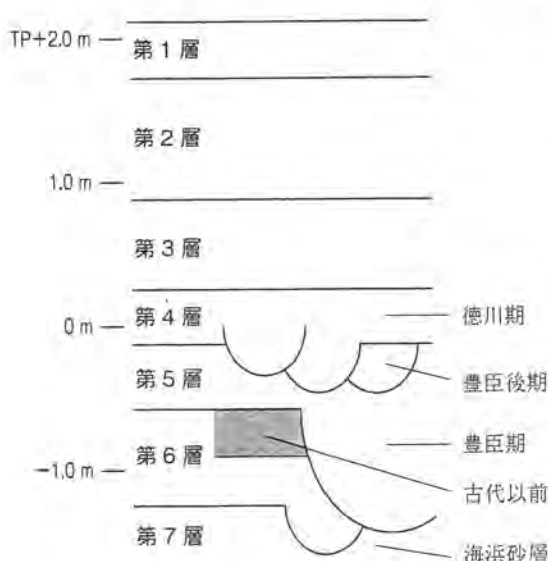


図3 層序模式図

第6層以下は、北壁から3m南側で設定したトレンチもあわせて観察した。

第6層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細礫質細粒砂層で、上部は土壌化した暗色帯であるが、第5層に削られて調査区の西北隅にのみ残存する。本層は古代以前の遺物がわずかに包含する人為層である。

第7層：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒~極粗粒砂層で、 $TP - 1.1 \sim 1.2m$ を上面として、調査区の全体にわたって堆積が認められる。ラミナが明瞭な水成の海浜砂層である。遺物は出土していない。

ii) 遺構と遺物

以下に古い時代から順におもな遺構と遺物を記載する。第5層以下は調査区北半のみでおもに地層の断面観察による調査を行った。

a. 第7層上面遺構

第6層下面が一部で第7層を削っており、断面のみの観察であるが遺構と考えられる(図4のA-A')。周辺の調査でも平安時代に遡る古代の遺構が確認されており、黒色土器A類、須恵器、土師器Ⅲ。

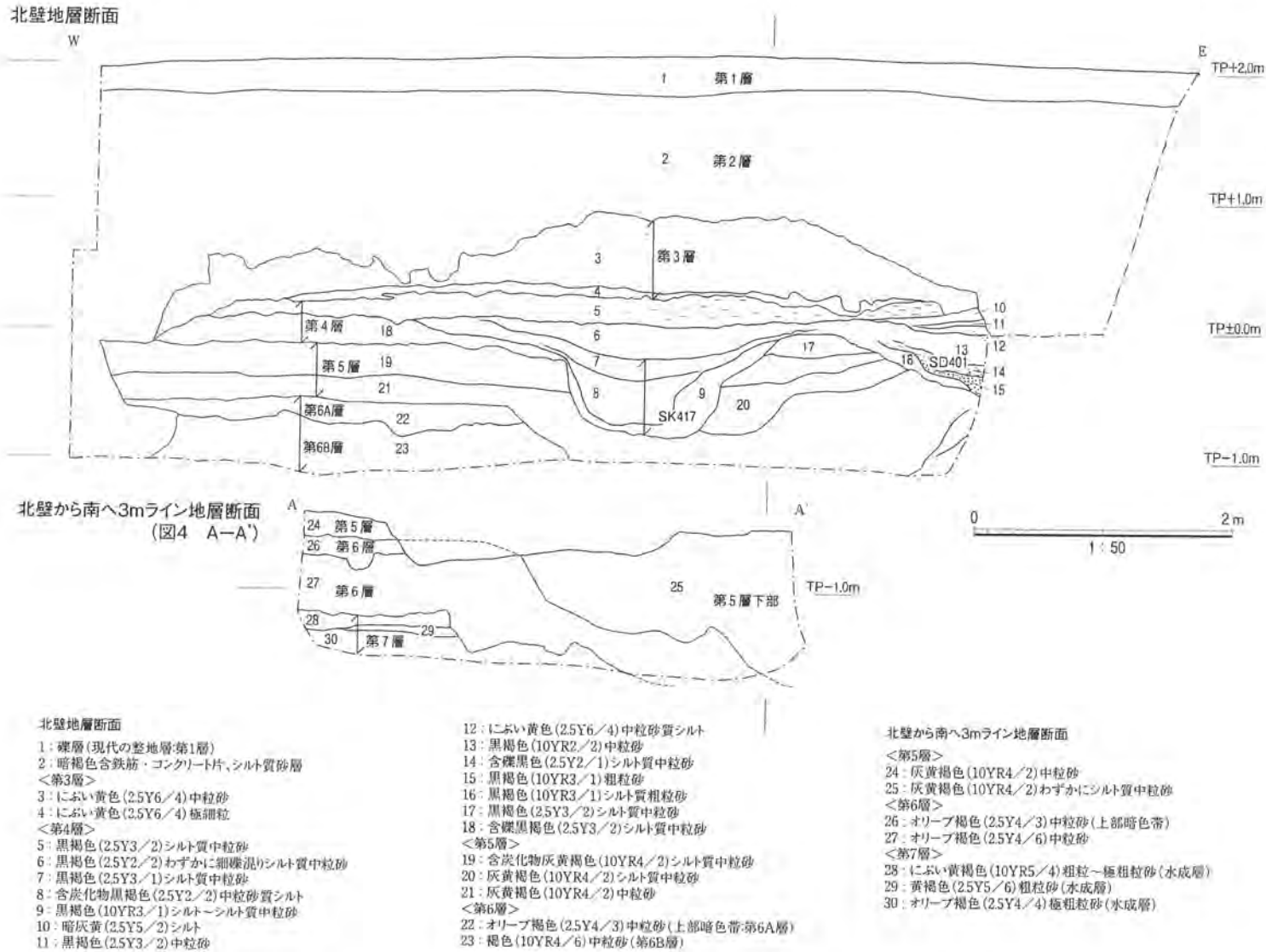


図4 調査地層断面図

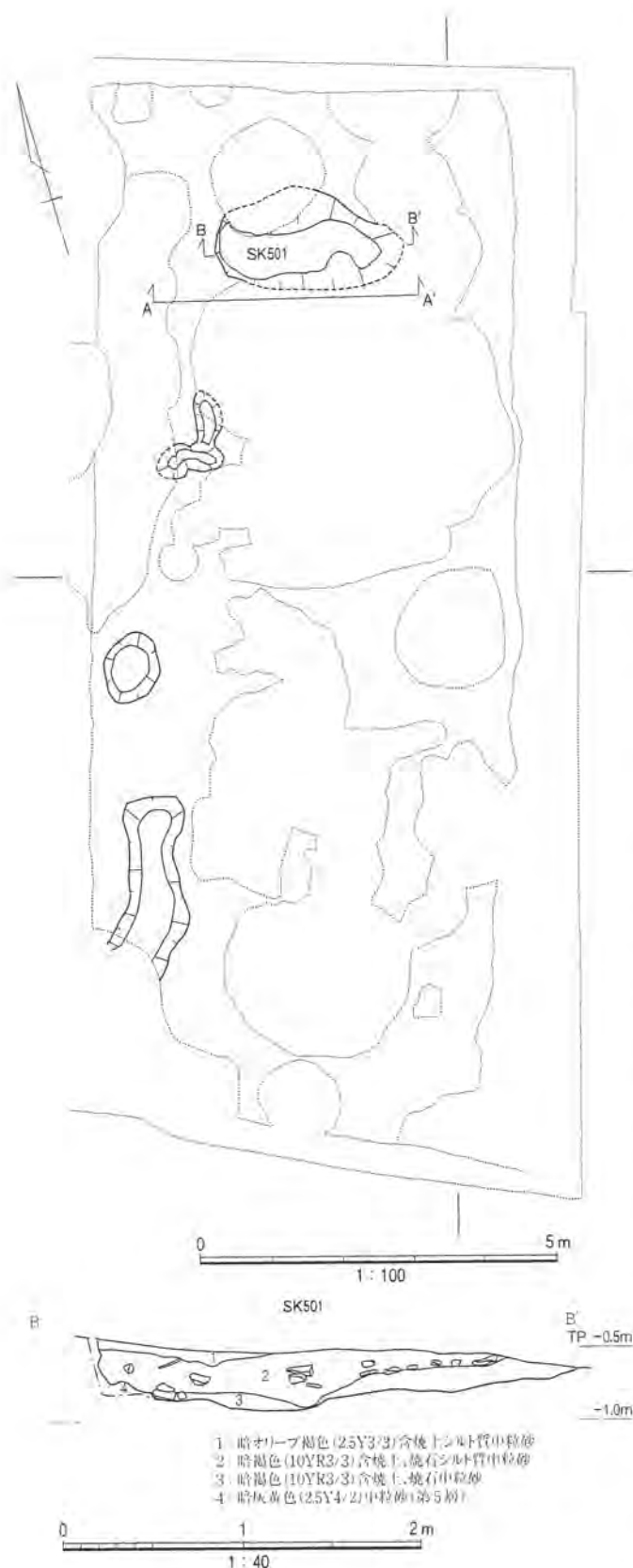


図5 第4層基底面検出遺構平面図およびSK501断面図

調査区の東側を南北に縦断する溝SD401とそのほかの溝・土壌を確認した。地層内からの掘込みを確認できたのは調査区北壁にかかる土壌SK417であるが、他の遺構も埋土の特徴、共伴する遺物の時期を鑑みて同一層準として記述する。

杯・甕などの出土遺物から同時期の遺構の可能性はある。

b. 第6層上面遺構

第5層は調査区南部ではほぼ水平に堆積しているが、東北部では第6層を削って大きく落込んでいて最深部は確認できなかった(図4)。落込みの規模と遺物の示す時期から、豊臣期の大坂城下町造成にかかわる土木工事にともなう整地の痕跡と考えられる。遺物には肥前陶器、瀬戸美濃焼(器形不明)、備前焼、瓦質土器、瓦器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器A類、土師器、中国製青花、中国製青磁・白磁、東南アジア系陶器、瓦がある。6・7は本層から出土した軒瓦である。

c. 第5層上面遺構(図5・6)

調査区北部で土壌SK501が検出された。長径2.7m、深さ0.4mの平面楕円形の土壌で、埋土には陶磁器類・瓦などのほか、大量の焼土・焼石が含まれていた。遺物は豊臣後期に属するものである。1は肥前陶器小杯、4は皿、5は刷り目が1本引の丹波焼播鉢である。2・3は土師質の管状土錘である。なお、後期難波宮の重圏文軒丸瓦8も1点ある。6016型式である。大坂冬ノ陣後の片づけに伴ってゴミなどを廃棄した土壌である。本層準で確実に遺構と判断できるものはこれのみで、他に図5で遺構としたものは、下位の第5層を構成する埋戻し土の層相の違いにすぎない可能性がある。

d. 第4層内遺構(図7~14)

調査区の東側を南北に縦断する溝

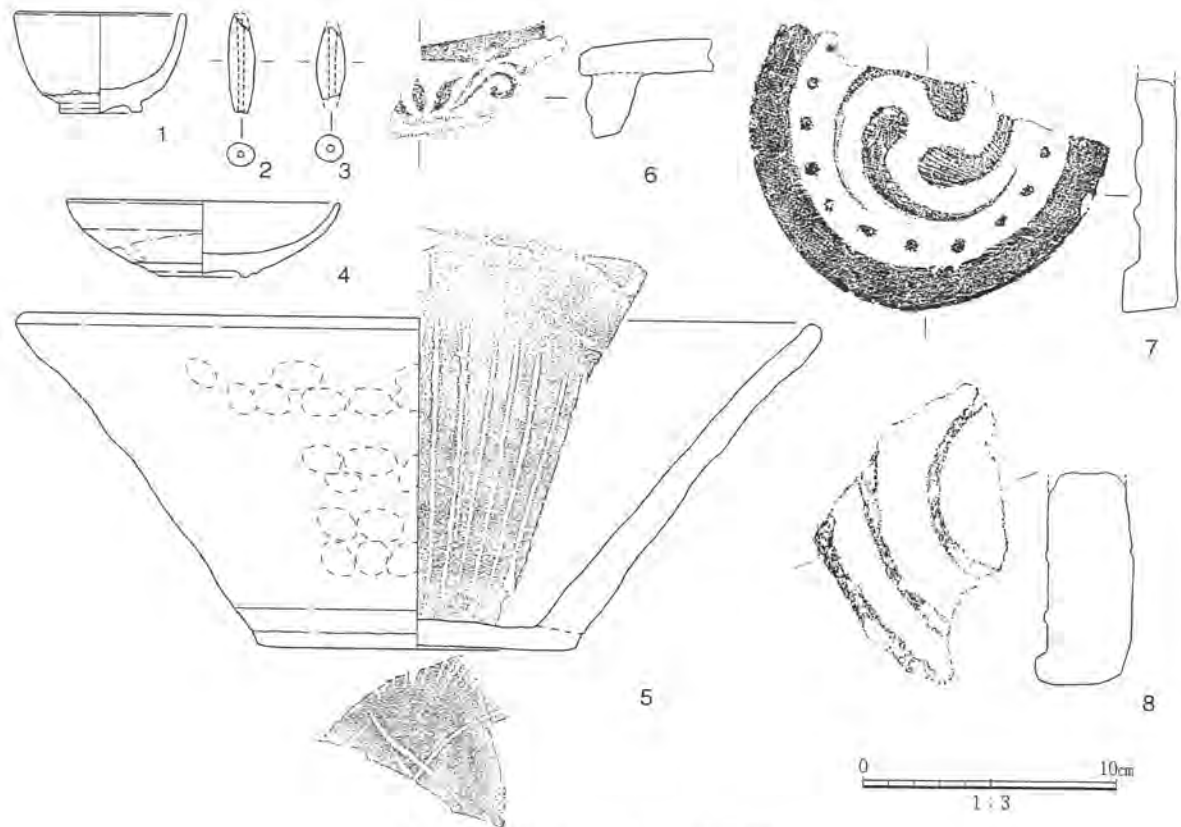


図6 第5層・SK501出土遺物実測図
第5層(6・7)、SK501(1～5・8)

溝SD401は長さ17m以上、幅は南部で0.6m、深さ0.4mである。溝底は南へ向かって深くなり、北端との比高は最大で約0.3mある。調査区北壁では第4層内の一時的な生活面から掘削されていることがわかる。埋土は黒色シルト質細粒砂層中に極細粒～細粒砂のラミナが観察され、南部ほど泥質になる。調査区の南端付近で立ち上がり、その付近が周辺より約0.1m低く削られていて、常時水溜まりの状態であったことがわかる。現在の街区に並行して南北に延びるため、敷地の東側を画する溝と考えられるが、南接する敷地との境には達せず、敷地内の南奥に排水する機能が考えられる。遺物には陶磁器類・土器類・瓦類のほか、漆塗り碗をはじめとする木製品もある。9～16・23は肥前磁器で、9～11・13は染付碗、14は染付皿、15は染付小杯で畳付に砂が付着している。12は肥前磁器青磁碗、16はソギを5本1単位で3方向に入れる白磁小杯である。青磁香炉23には脚の表面に左右対称の渦巻き文を入れている。17～21・29は肥前陶器で、19は碗、18・21は皿で、21の三日月高台内に墨書で記号を記している。17は小杯、20は高台の3方向に割りを入れた香炉で、29は胴部が筒状となる瓶または徳利である。22は瀬戸美濃焼天目碗、24～28は丹波焼で、把手付き鉢と向付、刷り目の細かい搗鉢がある。30・31は中国製青花鉢で、30は外面に「赤壁賦」、見込みに「永楽年製」銘を書いており、31は漳州窯系の製品で、畳付から高台内に砂が付着している。33・34は土師器焼塩壺である。35は土師器焙烙で、口縁端部の面は不明瞭で、外面下半にタタキメが残る。32は瓦質土器火入れで、外面には2条の貼付け凸帯が巡り、その間に「×」文を連続して刻んでいる。36は石製硯で墨磨りによる摩耗が著しい。軒丸瓦37は瓦当の珠文は14個に復元され、内面にコビキBの痕がある。そのほか、肥前磁器に

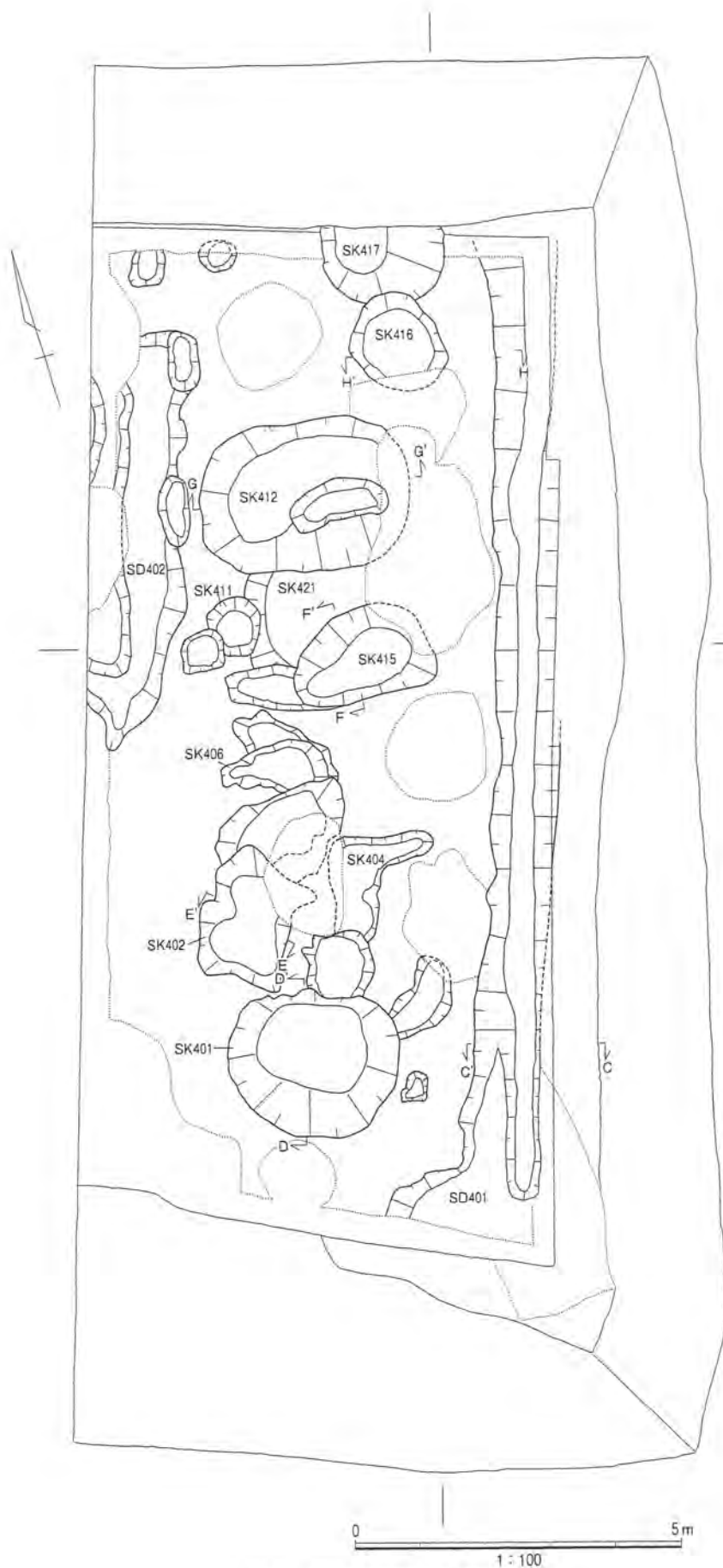


图7 第4層下面検出遺構平面図

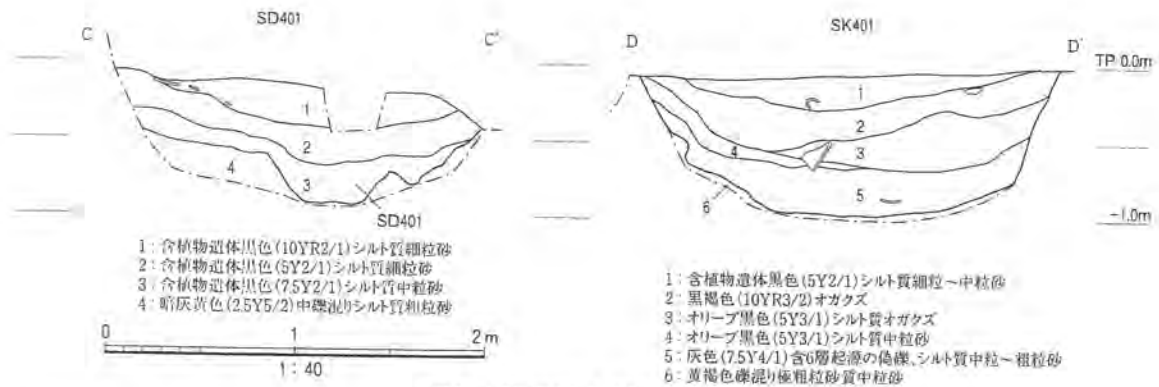


図8 SD401およびSK401断面図

は色絵碗や鉄釉碗、肥前陶器には上野高取焼の碗や瓶・絵唐津・刷毛目唐津・二彩手瓶・鉄釉瓶・壺・銅緑釉香炉、瀬戸美濃焼の天目碗・灰釉皿・黄瀬戸皿・志野皿・鉢、備前焼、信楽焼、瓦器碗、須恵器、漆器、下駄、砥石、鉄製品、銅製品、サヌカイトの剥片などがある。図化したものは17世紀中葉のもので、ほかに後葉へ降るものがある。

溝SD402は調査区西壁に沿う南北溝で、長さは6.5mで、幅は1.5mまで確認できるが、西側が調査区外になるため全幅は不明である。出土遺物には陶磁器類・瓦類・砥石・金属製品・弥生土器などがある。特に土師器皿は、溝の中央付近に35枚以上がまとまって捨てられた状態で見つかった。38～43は土師器小皿で、38・42は小型のヘソ皿、41は口縁部に煤が付着し、底部に糸切り痕がある。47～49は肥前陶器で、碗47は兜巾高台の畳付に砂が付着している。溝縁皿48は見込みと畳付に胎土目が、49は砂目が付着している。46は羽釜を模した土師器ミニチュア玩具である。鏝の上下で型作りし、合わせている。そのほか、上野高取焼の碗・鉢、瀬戸美濃焼志野(器形不明)、備前焼、丹波焼、瓦質土器、瓦器、須恵器、土師器、中国製青花碗・小杯・皿、瓦、砥石などがある。図化したものは17世紀中葉のもので、ほかに後葉へ降るものがある。

土壌SK401は調査区南部にあって長径2.6m、幅2.2mの楕円形で、深さは0.7mある。埋土は最下層の灰色シルト質中粒～粗粒砂を主体に基底の第5層偽礫を含む加工時形成層で、その上位は大量の大鋸屑を一気に廃棄して形成された層が0.2～0.3mの厚さで堆積している。遺物には陶磁器類・土器類・瓦類のほか、木製品(漆塗り碗・下駄・曲物)がある。切落された木材や板の削りかす、大量の大鋸屑などから、木材加工時のゴミを廃棄した土壌と考えられるが、その具体については出土した木製品からは判断できなかった。遺物の時期は17世紀中葉から末にかけてのものがある。44・50は肥前磁器で、染付仏飯器50の底部内面は深く削って高台を作っている。白磁小杯の44は、外面の全体にソギを入れている。中国製青花小杯の45は、底部外面に墨書されているが判読できない。51は三島手の肥前陶器皿である。ほかに、肥前磁器染付・白磁・青磁、肥前陶器、瀬戸美濃焼、備前焼、丹波焼、瓦質土器、須恵器、土師器、中国製青花・白磁、瓦、漆器・人形首・下駄などの各種木製品、砥石、魚骨、鳥骨、貝(アカニシ)などがある。木製品については後述する。

土壌SK402は長さ2.2m、幅1.5mの平面不整形で、深さ0.5mである。遺物には陶磁器類・土器類のほか、木製品がある。52～56はいずれも肥前磁器で、染付小杯52は欠損した高台の割れ口を磨いて再生している。白磁皿56は見込みと畳付に砂目が残る。ほかに肥前磁器色絵・青磁、肥前陶器(上野高取焼・

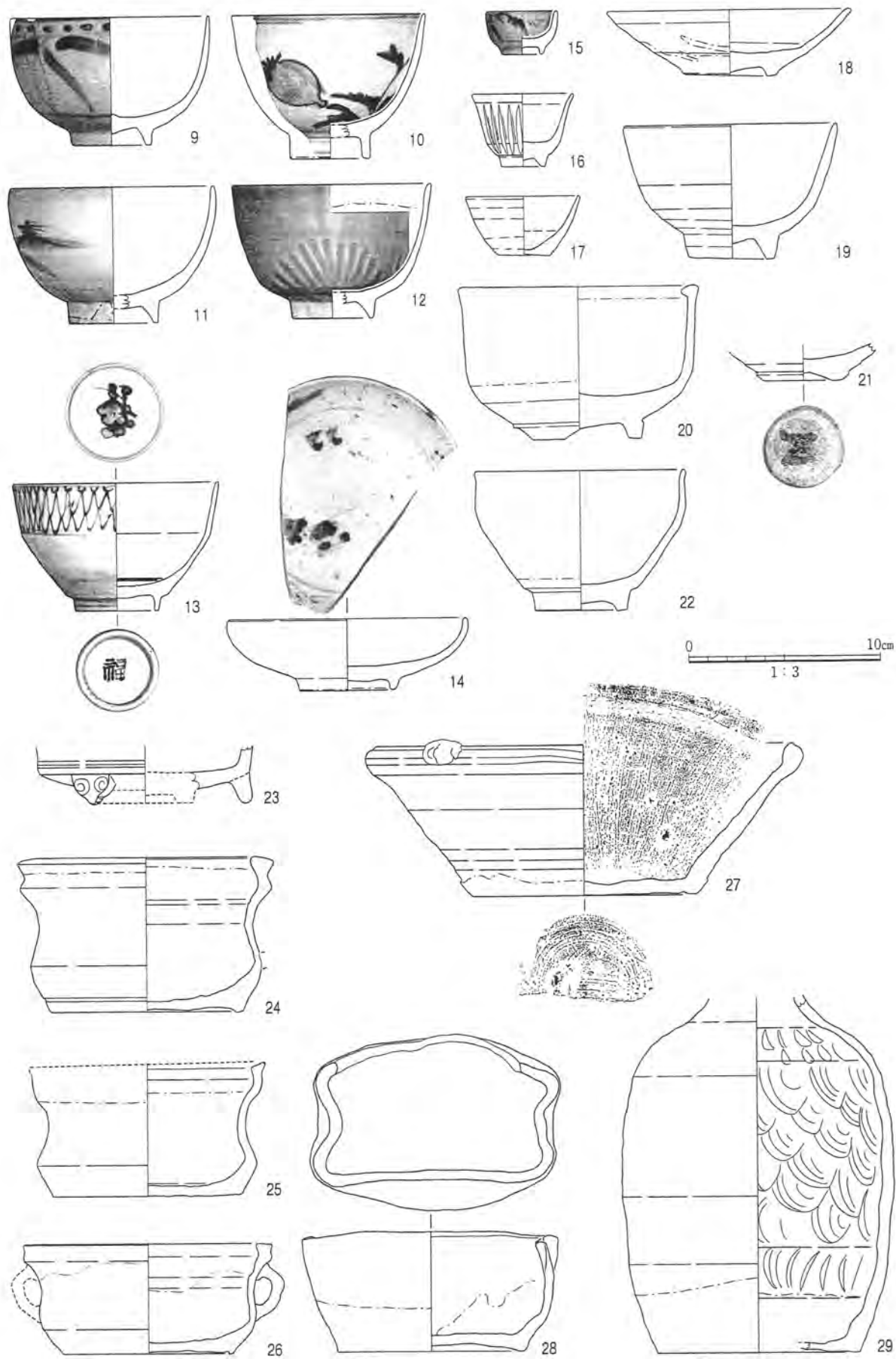


图9 SD401出土遺物実測図(1)

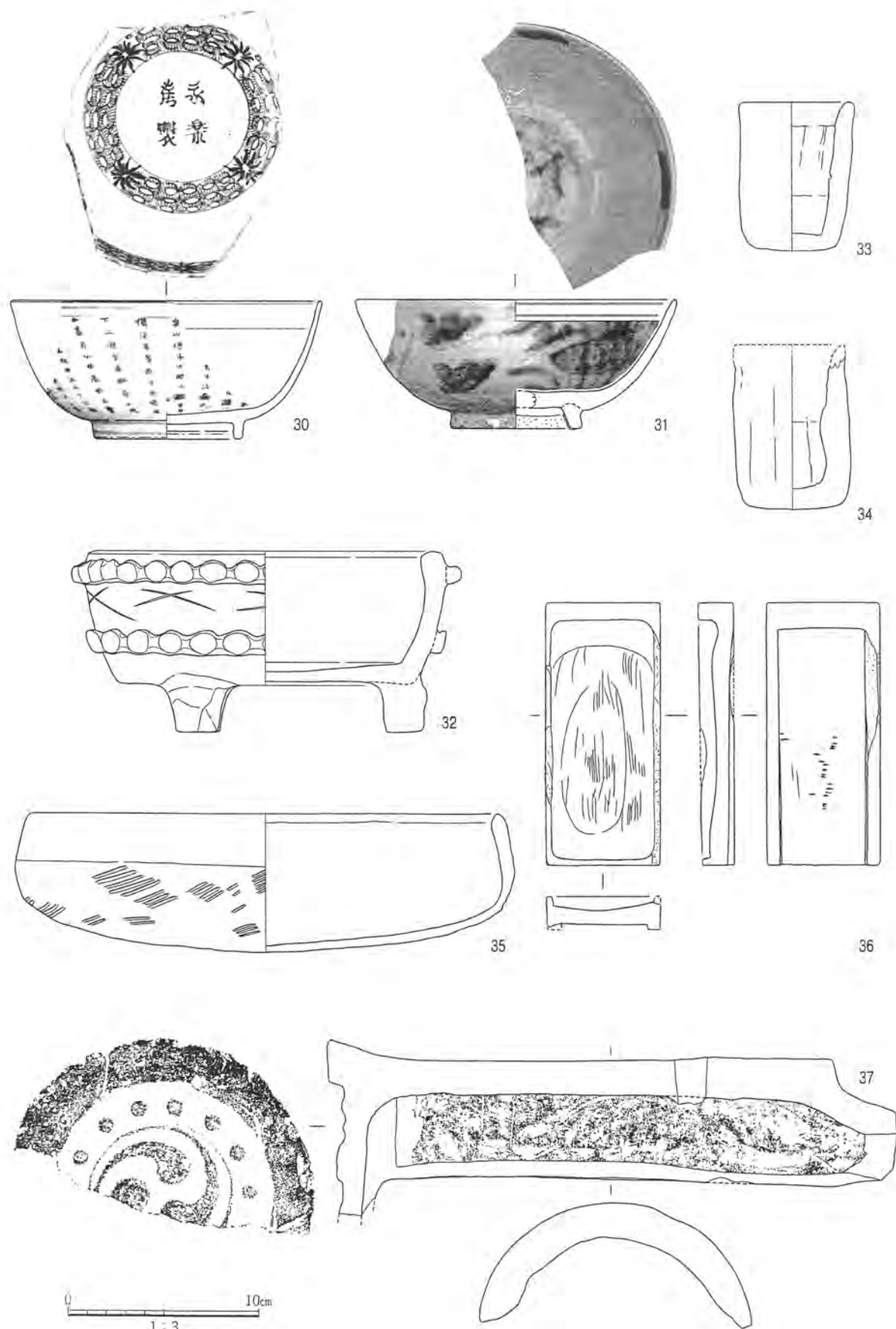


图10 SD401出土遗物实测图(2)

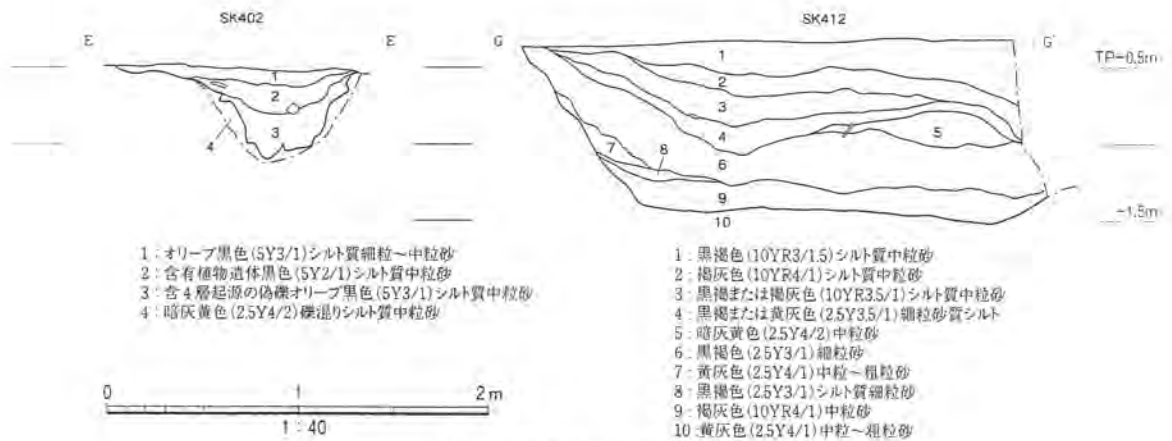


図11 SK402・SK412断面図

内野山産を含む)、瀬戸美濃焼天目碗、備前焼、丹波焼、瓦質土器、瓦器、土師器、須恵器、中国製青花皿、東南アジア系壺、瓦、漆器、骨、砥石、鉄製品、銅製品などがある。漆器は後述する。

土壙SK404は南北0.7m、東西0.6mの平面不整形で、深さは0.1mである。土師器焙烙57が出土した。

土壙SK406は長さ1.7m、幅0.8m以上の平面不整形で、深さは0.2mである。中国製青磁または肥前磁器青磁皿58が出土している。58の内面には雷文帯風の文様が陰刻されている。

土壙SK411は直径0.8mほどの平面円形で、深さは0.3mである。肥前磁器染付皿81、土製玩具の「つぼつぼ」などが出土した。

土壙SK412は長径2.9m、幅2.3mの平面楕円形で、深さは0.9mである。埋土のうち底から0.1m程度は第5層を起源とする黄灰色中粒砂の偽礫を含む加工時形成層である。その上位は黒褐～黒灰色シルト質中粒砂を主体に、中部付近には水つきのオリーブ黒色細粒砂質シルト層を挟在させているため、徐々に埋められていったことがわかる。出土遺物には陶磁器類・土器類をはじめ、瓦類、金属製品、砥石などがある。17世紀中葉を中心に、一部が後葉へ降る時期の遺物である。77・82は肥前磁器である。77は染付瓶、82は外面に大雑把な流水文を描く染付鉢である。67・68は肥前陶器溝縁皿で、どちらも三日月高台の畳付と内面見込みに3箇所の砂目を残す。73は瀬戸美濃焼天目碗、75は丹波焼鉢、78は緑～黄色みを帯びた釉をかけたミニチュア玩具である。ほかに肥前磁器白磁・青磁、肥前陶器刷毛目碗・絵唐津・瓶・壺、瀬戸美濃焼志野向付、備前焼、丹波焼、瓦質土器、瓦器、須恵器、土師器、中国製青花・白磁・青磁香炉、瓦、砥石、鉄製品、銅製品、骨、サヌカイトの剥片などがある。

土壙SK415は長さ2.2m、幅1.4mの平面楕円形で、深さは0.8mである。埋土のうち底から0.2m程度は黒褐色中粒砂質シルトで、水つきで堆積している。その上位は暗黄灰色～黒褐色シルト質中粒砂である。出土遺物は17世紀中葉の陶磁器類・土器類・瓦類・石製品・金属製品などがある。59・60・63は肥前磁器である。60は内面を青磁釉、その後外面から口縁部内面を鉄釉でかけ分け、また63は内面を白濁釉、口縁部内面から外面にかけて鉛釉をかけ分けている。62・64・65は肥前陶器で、64は内面から外面高台まで鉄釉をかけ、口縁部外面に緑釉をかけ分けている。兜巾高台の畳付から高台内は露胎である。65は口縁端部から内面に緑・黄土色の釉をかけた二彩手の皿である。61は46によく似た羽釜を模した土師器ミニチュア玩具であるが、型は同一ではない。ほかに肥前磁器染付、肥前陶器、瀬戸美濃焼天目碗、備前焼、丹波焼、瓦質土器、瓦器、須恵器、土師器、中国製青花、石製硯、砥石、

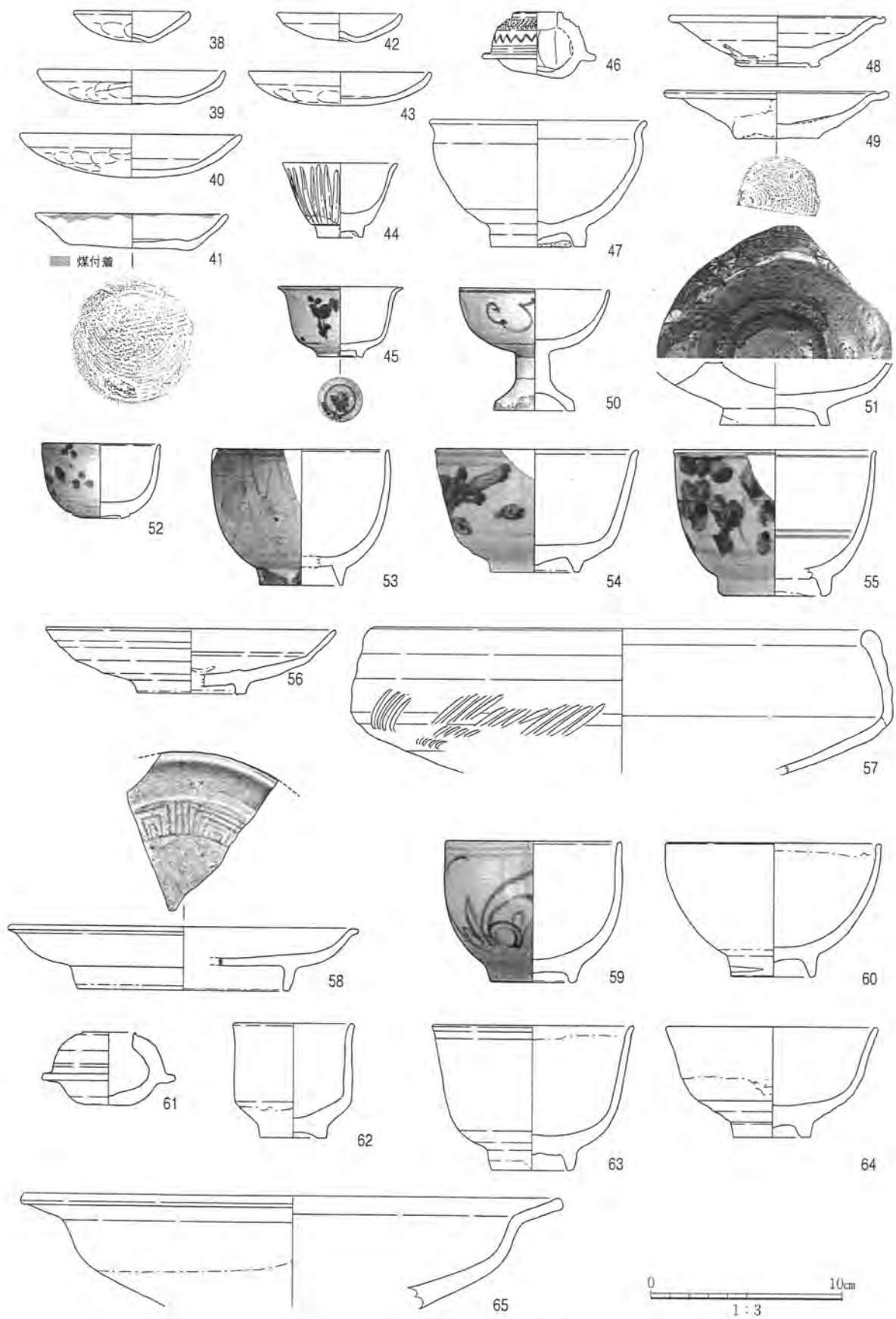


図12 その他の遺構出土遺物実測図(1)

SD402(38~43・46~49)、SK401(44・45・50・51)、SK402(52~56)、SK404(57)、SK406(58)、SK415(59~65)

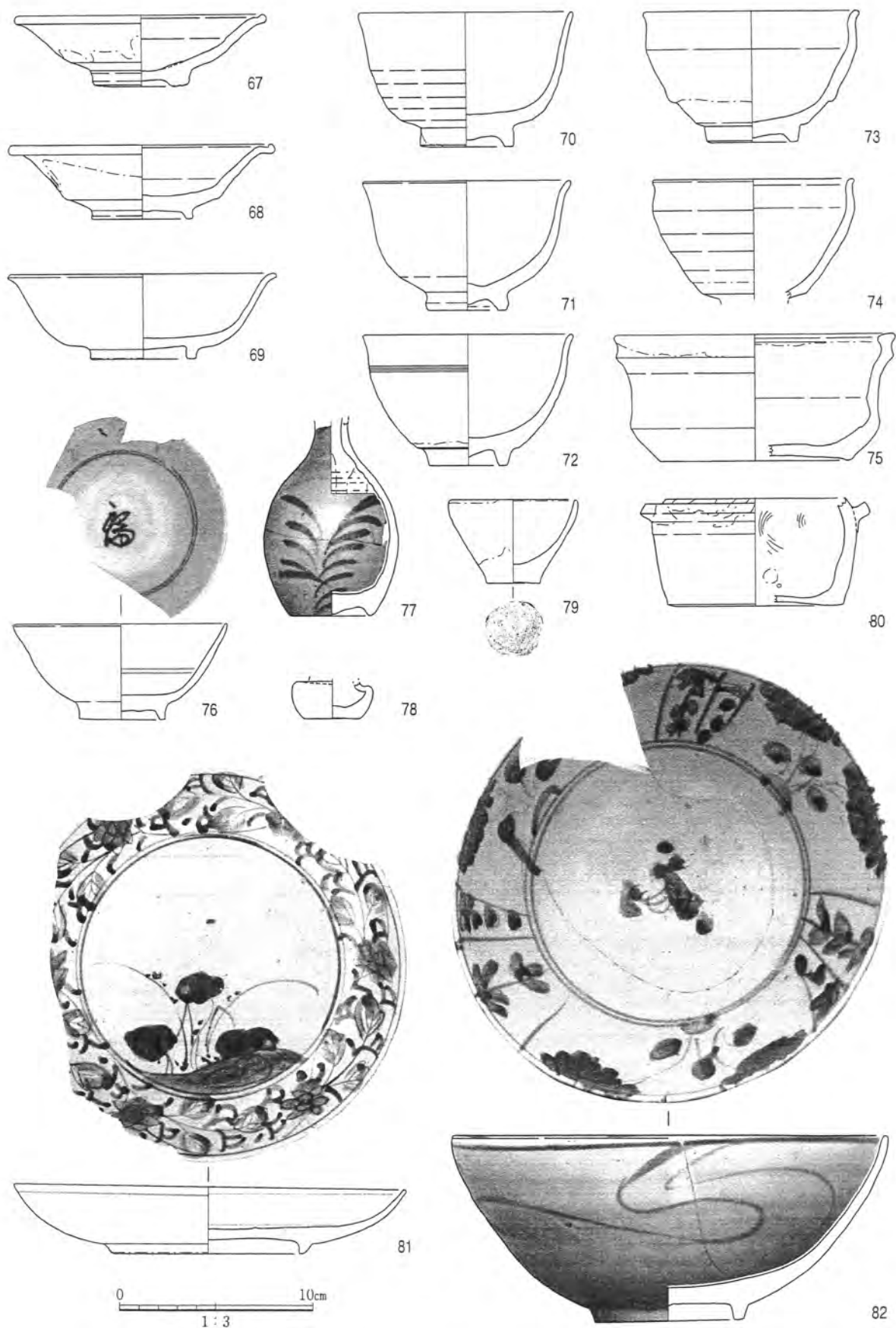


図13 その他の遺構出土遺物実測図(2)

SK411(81)、SK412(67・68・73・75・77・78・82)、SK416(69~71・74・80)、SK417(76)、SK421(72・79)

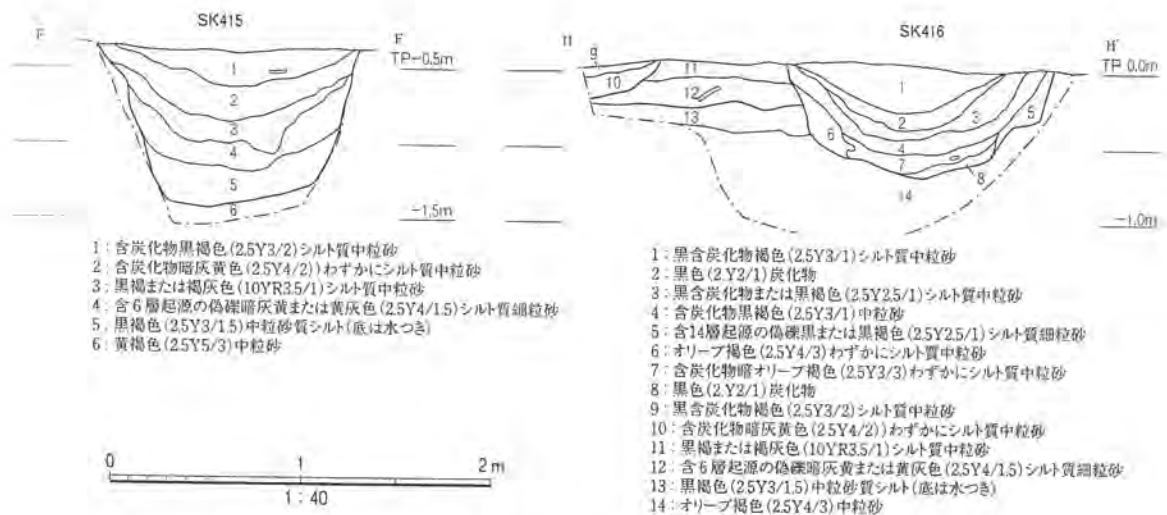


図14 SK415およびSK416断面図

鉄製品、銅製品、魚骨、サヌカイトの剥片などがある。

土壌SK416は長径1.6m、幅1.3mの平面が短い楕円形で、深さは0.6mである。底および中ほどに炭化物を多量に含むシルト層が堆積しており、徐々に埋まっていった状況がわかる。出土遺物には陶磁器類・土器類・瓦類・石製品・鉄製品・動物遺体などがあり、時期の分かるものは17世紀中葉を中心とする。69~71は肥前陶器で、69は皿、70は三日月高台の碗、71は兜巾高台で畳付に胎土目痕がある。74は瀬戸美濃焼天目碗、80は口縁部外面に凸帯を貼付けた平底の鉢で、凸帯付近にまだらに釉がかかっている。産地不詳の輸入陶器である。ほかに肥前磁器染付・青磁・白磁、肥前陶器(内野山産を含む・絵唐津・二彩手)、瀬戸美濃焼天目碗・志野皿、備前焼、丹波焼、瓦質土器、土師器、中国製青花、瓦、砥石、鉄製品、鉄滓、魚骨などがある。

土壌SK417は調査区北壁面で確認した土壌で、長さ1.6m、深さ0.6m程度である。遺構の立ち上がりは第4層内の一時的な生活面から始まっている。出土遺物は陶磁器類・土器類・瓦類・動物遺体などで、17世紀中葉を中心とする。76は中国製青花で、畳付に砂が付着し、見込みには崩れた「福」を書いている。ほかに肥前磁器染付、肥前陶器(内野山産を含む)、瀬戸美濃焼天目碗、備前焼、丹波焼、瓦質土器、須恵器、土師器、瓦、獣骨などがある。出土遺物のうち、細片のため図化してないが、銅緑釉香炉の破片はSD401から出土した破片と接合し、これらの遺構が同時に埋まったことが明らかである。

土壌SK421はSK412とSK415に挟まれた両者よりも先行する遺構であるが、出土遺物は陶磁器類・土器類・瓦類などで、遺物からみる限りは時期差がない。72は肥前陶器碗で、口縁部と体部の境に2条の沈線を巡らせている。79は肥前陶器小杯で、糸切痕のある底部には砂が付着している。そのほか、肥前磁器染付、瀬戸美濃焼、備前焼、丹波焼、瓦質土器、須恵器、土師器、中国製青花、瓦、サヌカイトの剥片などがある。

また、本層準にともなう遺構からは、さまざまな木製品が出土している。南側の湿潤な一帯の遺構に多く、特にSK401からは漆器・曲物・下駄などの資料が数多く見つかった。以下に、それらを中心

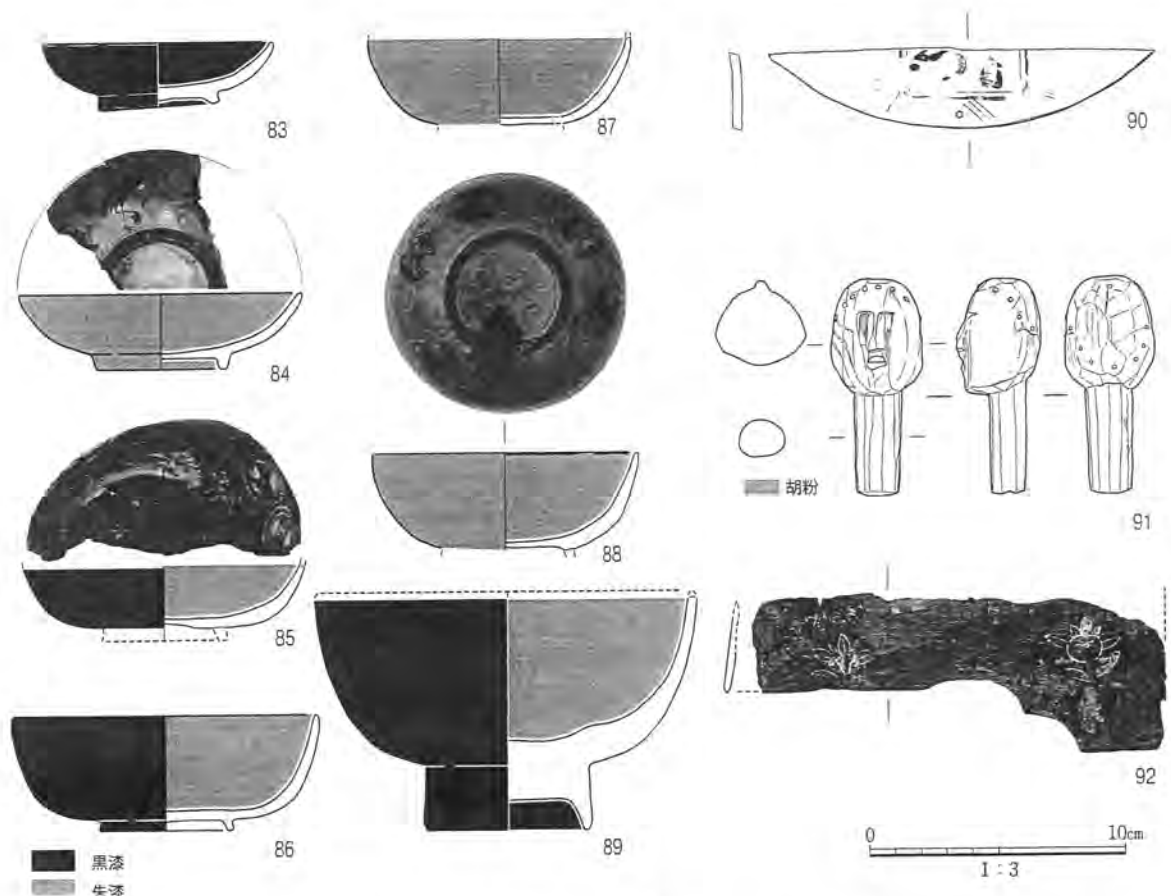


図15 木製品実測図
SK401(83~87・89~92)、SK402(88)

とするおもな資料を記述する。漆器には椀・折敷・箱などがある。83~87・89はSK401から出土した漆器椀である。83のように内外面を黒漆塗りするもの、84のように朱漆塗りするもの、86のように外面が黒漆、内面が朱漆で塗られたものなどさまざまな塗り分けがある。84は外面に黒漆で片脚立ちの鶴を描き、その右側には亀を描いたと思われるが、破断して尾のみが残っている。93は外面3方向に2個1組の円文を描いている。後述する分銅文様の一種かもしれない。86の外面には草花を描いている。87の外面には丸に桐の文様を描いている。88は3個1組の分銅文様を3方向に描いている。87・88の文様は家紋の可能性はあるが、88では1組で3種類の分銅文様を描いている。89は高台が高い。90は曲物の蓋か底板の破片で、判読不能な文字とそれを囲む2重の圏線が墨書されている。92は格狭間の割込みがある板で、黒漆に金泥で橋を描いている。箱などの漆器の側面に当たる破片であろう。91は人形の首である。目や鼻を削り出したあたりに胡粉が白く残っており、もとは全体に彩色されていたものと思われる。頭頂部1箇所と額からうなじにかけての16箇所に直径1mm弱の穴をあけ、木の軸が嵌められていた痕跡がある。頭髮の植毛のためであろう。

3)まとめ

今回の調査では、徳川期より古い時代の遺構・遺物は少ないが、豊臣期に遡る大きな落込みを見つけたことで、一帯で何らかの土木工事を行っていた状況が明らかになってきた。また、それ以前の時

代では、若干ではあるが中世・古代に遡る遺物が見つまっていることから、周辺域でそれらの時期の遺構が広がっている可能性を示しているといえよう。また、近隣の調査と同様、大坂冬ノ陣に係わる焼土層は分布していないが、SK501の埋土に含まれていた多量の焼石や焼土は、共伴する陶器類の時期からみて、それに由来するものと考えられる。

徳川期に入って多くの遺構が確認されたが、第4層下面の遺構は建物に関係せず、生活雑器を中心とした不用物の廃棄土壌と考えられる。また、SD401はそうした利用度の低い敷地奥の南に向かって排水する機能を持っていたものであろう。これらの遺構からは17世紀中葉を中心として一部が末まで降る時期の遺物が出土した。北に接するOJ97-1次で見つかった資料と合わせ、当該期の良好な資料である。特にSK401で確認された大量の大鋸屑や木材の加工屑は、当地における産業を示す可能性があるものとして、今後周辺域で行われる調査では、注意する必要がある。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1999、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1997年度-』〔第X章第3節 OJ97-1次調査〕、
pp.92-98

大阪市文化財協会2004、『大坂城下町跡Ⅱ』

調査区北壁地層断面
(南東から)



SK501の遺物出土状況
(東から)



第4層内遺構検出状況
(北から)



SD401(南部)の地層断面
(北西から)



SK401の地層断面
(東から)



SK412の地層断面
(東から)



大坂城下町跡発掘調査(OJ08-5)報告書

調査個所	大阪市中央区北久宝寺町二丁目32-5・32-10
調査面積	36㎡
調査期間	平成20年12月19日～12月24日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	文化財研究部次長 南秀雄

1) 調査に至る経緯と経過(図1・2)

調査地は豊臣期城下町の船場の西南端に当り、北久宝寺町通と南久宝寺町通に挟まれ中橋筋に西面する。調査地の敷地の南は町の境になる。調査地がある中央大通より南で堺筋より西の地域は、大坂城下町跡ではもっとも調査数が少ないところである。近隣の調査をみると、西約150mの南久宝寺町通に南面したOJ07-8次調査では豊臣期の遺構が見つからないが[大阪市文化財協会2008b]、西北西約240mの久太郎町通に北面したOJ05-9次調査では、豊臣期の2時期の遺構が検出された[大阪市文化財協会2006]。また、御堂筋と北久宝寺町通に面したOJ07-11次調査では、礎石などの豊臣期の遺構があった[大阪市文化財協会2008c]。

現在の大阪市埋蔵文化財包蔵地の大坂城下町跡の範囲は、西は心斎橋筋、南は南久宝寺町通までとされている。一方、内田九州男氏は豊臣期船場の南は、それより1.5~2.5街区南の博労町あるいは順慶町までとされており[内田九州男1993]、当該地域の発掘調査は豊臣期船場の南限を考える上で重要である。

発掘調査は、大阪市教育委員会による試掘調査で確認された豊臣期の可能性のある地層(現地表下2.3~2.8m)の上面まで事業者側で掘削し、その後、東西9m、南北4mを対象に行うよう計画されたが、着手時にはこの地層は残っておらず、すべての遺構を自然堆積の砂層上面で調査した。

報告で使用した指北方位は図1を除いて磁北、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

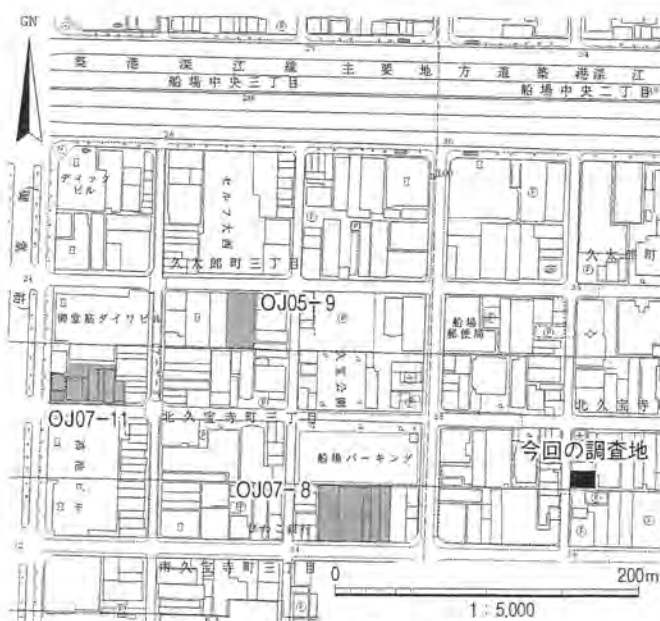


図1 調査地位置図

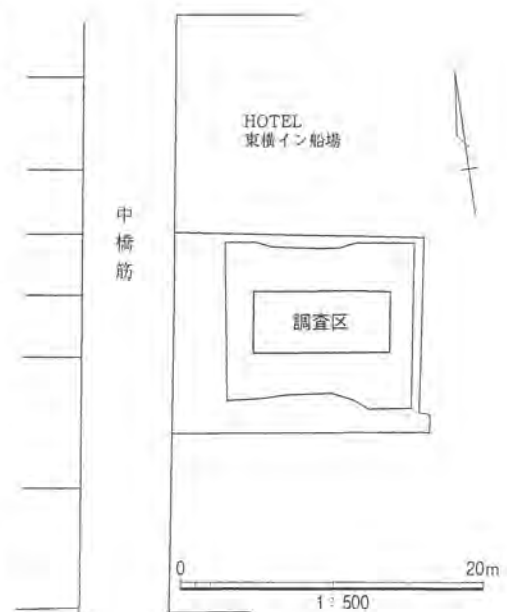


図2 調査区位置図

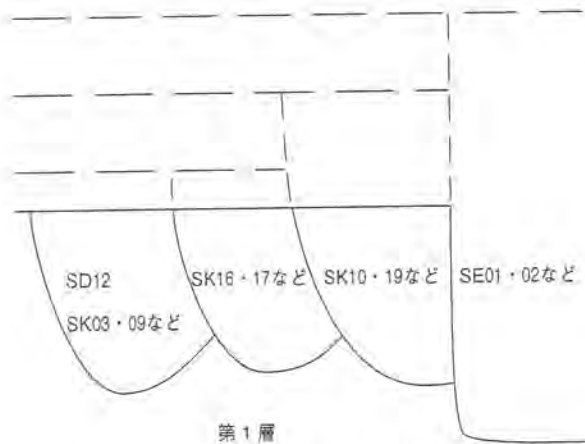


図3 地層と遺構の関係図

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第1層：黄褐色(10YR5/6)細粒砂～中礫の自然堆積層で層厚は80cm以上である。遺物は出土していない。本層上面で豊臣期以降のすべての時期の遺構を検出した。

ii) 遺構と遺物

a. 豊臣期の遺構と遺物(図4・5)

豊臣期の遺構は、出土遺物と切合い関係から判断したものである。遺物が少なく時期を断定

しがたいものは、徳川期の遺構として報告している。

SD12は幅0.70～1.18m、深さ0.65mの南北方向の溝である(写真中段)。街区と方向が合っており、敷地南縁の背割り下水へ繋がり屋敷境となる主要な排水溝と考えられる。最下層には細粒砂のラミナを含む厚さ15cmの水成のシルト層が溜まり、途中で1段深くなったところがある。遺構の前後関係はSK14→SD12→SK11、SK22→SD12である。SD12からは備前焼播鉢15、骨製耳搔き18が出土した。骨製耳搔きには端から約1/4のところのところに孔があげられている。

SK03～05・09・11・21～24・26の10基の土壇は豊臣期と推定される遺構である。多くはゴミ捨て用の穴の可能性はあるが、SK21は大きく、それ以外の用途であろう。各々の検出面からの深さはSK03が0.52m、SK04が0.55m、SK05が0.18m、SK09が0.63m、SK11が0.20m、SK21が0.42m、SK22が0.64m、SK23が0.50m、SK24が0.34m、SK26が0.32mであった。遺構の前後関係は、SK04→SK03、SK26→SK11である。出土遺物では、SK03から土師器鉢2・瀬戸美濃焼折縁皿4・備前焼壺13、SK09から肥前陶器皿8・同碗9・備前焼播鉢14、SK11から瀬戸美濃焼天目碗7・丹波焼鉢12・土師器皿を利用した円板16、SK22から土師器皿1・瀬戸美濃焼折縁皿5・青花碗10、SK23から瀬戸美濃焼丸皿3が出土した。また、瀬戸美濃焼ソギ皿6と青花皿11は側溝からの出土であるが、本来、豊臣期の遺構に伴うものであろう。また、17の犬形土製品も攪乱よりの出土であるが、豊臣期の遺物である。

調査区は、豊臣期の屋敷割でいえば北久宝寺町通に面した敷地の最奥部に当る。上記のようにしっかりした排水溝が設けられ多くの土壇があることから、少なくとも豊臣後期には町として十分に開発されていたことが窺える。

b. 徳川期の遺構と遺物(図5～7)

徳川期の遺構は3時期に大別される。SK06～08・13・15～18・20・25の10基の土壇は17世紀前半の遺構、SK10・19は17世紀末～18世紀初めと推定される。SE01・02はそれらよりかなり新しい井戸である。

17世紀前半の遺構群の中では、SK16は炭が多量に埋土に入る典型的なゴミ捨て穴で、検出面から深さ1.02mある。他にある程度の深さがある土壇では、SK07が0.58m、SK08が0.75m、SK13が0.23m、



图4 豊臣期遺構平面・断面図

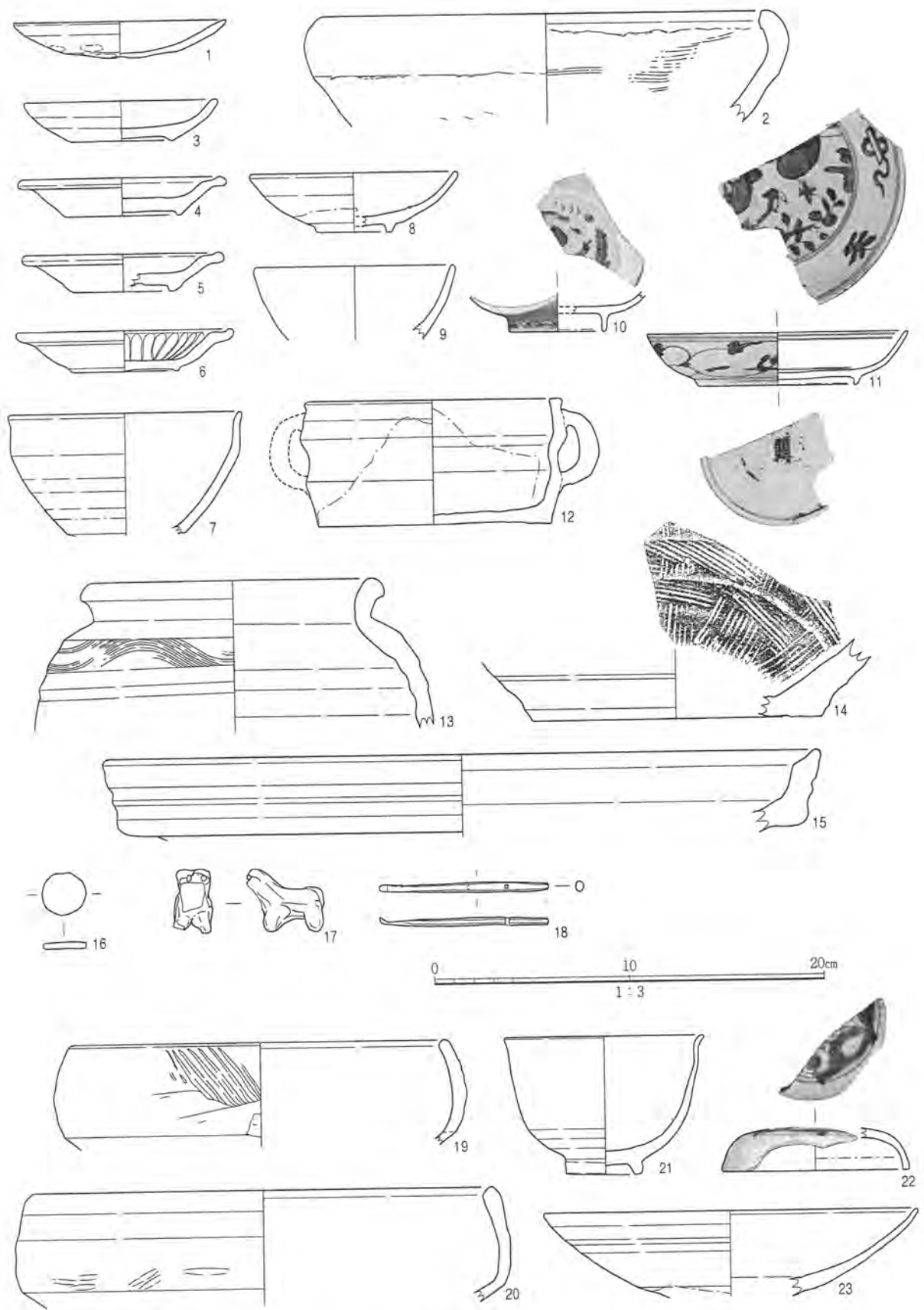


图5 出土遺物実測図(1)

SK03(2·4·13)、SK09(8·9·14)、SK11(7·12·16)、SD12(15·18)、
SK22(1·5·10)、SK23(3)、SK16(19~23)、攪乱(6·11·17)

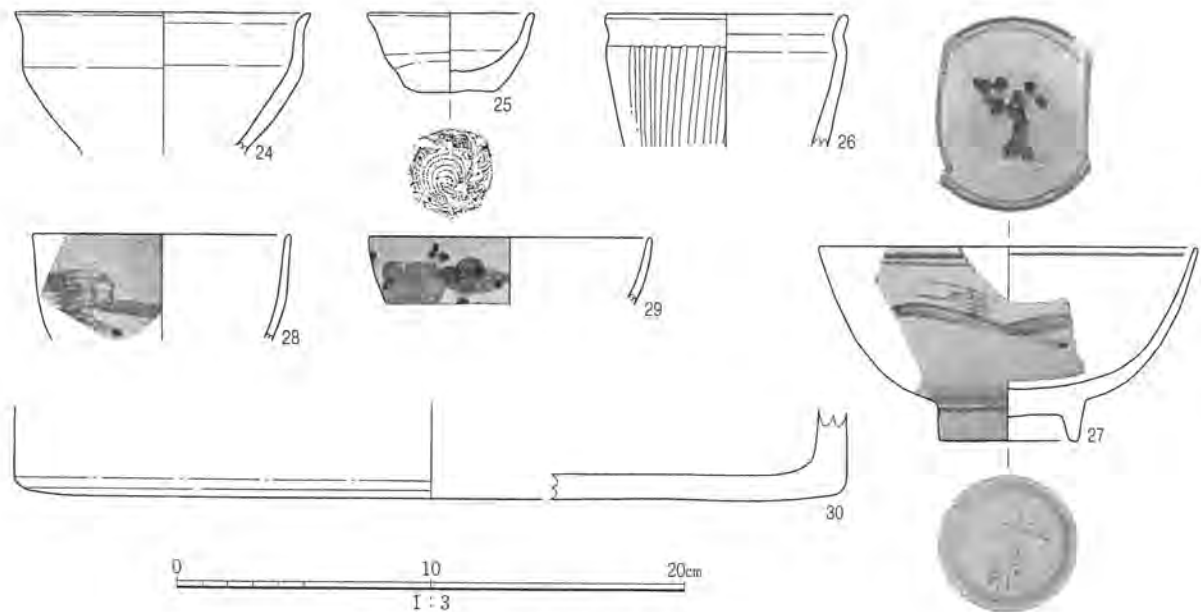


図6 出土遺物実測図(2)

SK17(24~26)、SK18(27)、SK10(28~30)

SK15が0.40m、SK17が0.30m、SK18が0.60m、SK20が0.58mである。残りのSK06とSK25はごく浅い。遺構の前後関係は、SK09→SK08、SD12→SK13、SK26→SK17、SK20→SK16、SK21→SK18→SK19などである。出土遺物では、SK16から土師器焙烙19と20・肥前陶器碗21・肥前磁器蓋22・李朝白磁皿23が出土した。19は外面を掻き上げ、20にはタタキメが残る。また、SK17から瀬戸美濃焼天目碗24・肥前陶器小杯25・肥前磁器青磁碗26、SK18から肥前磁器碗27が出土した。25の内側には全面に赤色の物質が付着している。

以上より新しい遺構としてSK10・19がある。SK10は長辺2.05m、短辺0.78m、深さ0.42mの長方形の土塋である。埋土の多くは焼けた壁と瓦で(写真下段)、焼けた瓦が出土したSK19と同様に火災の後片付けに利用された可能性が高い。SK10からは火を受けた肥前磁器碗28と29、半透明の白色釉を掛けた瀬戸美濃焼盤あるいは鉢30が出土した。これらは28・29から17世紀末~18世紀初めの遺構と推定される。

SE01・02は以上の遺構よりかなり新しく、SE02の枠は井戸瓦を使用している。

3)まとめ

豊臣期船場の南限をどこまでと考えるかは、発掘調査の成果に拠るところが大きい。現在の大坂城下町跡の指定範囲より広くとる考えが従来より出されているが、調査区のような敷地奥での豊臣期の多くの遺構や背割り下水へ繋がる排水溝の存在は、この場所が開発の進んでいない、空闲地が多く残されたところでないことを示している。おそらく、当該地域では現在の指定範囲より南や西で豊臣期の町屋の遺構が検出される可能性が高いと考えられる。

最近、推定されている船場の範囲から西や南へ離れた地点で豊臣期の建物などが発見されており[大阪市文化財協会2008a・2008d・2009]、先入観に縛られず調査を続けていくことが必要と思われる。

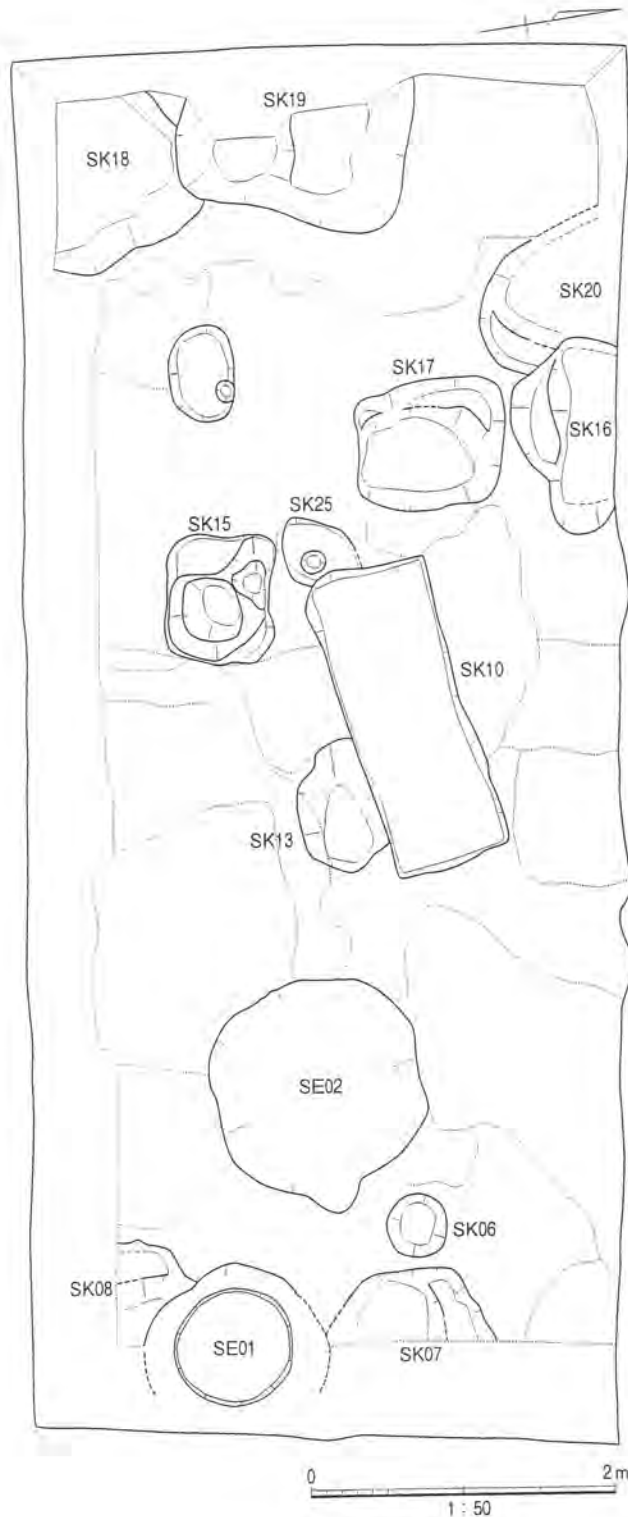


図7 徳川期遺構平面図

引用・参考文献

- 内田九州男1993、「船場の成立と展開」：『歴史ア』139号、pp.32-51
- 大阪市文化財協会2006、『オリックス・リアルエステート株式会社による建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ05-9)報告書』
- 2008a、『中央区南船場二丁目における埋蔵文化財発掘調査(OJ07-5)報告書』
- 2008b、『エムジーリース株式会社による建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ07-8)報告書』
- 2008c、『中央区北久宝寺町三丁目における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ07-11)報告書』
- 2008d、『中央区道修町四丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(OJ08-2)報告書』
- 2009、『西区西本町1丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(UT08-1)報告書』

調査区全景
(西より)



SD12など
(南より)



SK10断面
(西より)



大坂城下町跡発掘調査(OJ08-6)報告書

調査個所	大阪市中央区瓦町3丁目51・52・53(3丁目3-2)
調査面積	80㎡
調査期間	平成21年1月27日～2月7日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	文化財研究部次長 南 秀雄、岡村勝行

1) 調査に至る経緯と経過

本調査地は大坂城下町跡の中央西端にある。調査地から200mの範囲では、これまで10件の本調査が行われ、豊臣期のほか、弥生～中世の各時代の多種多様な活動の跡が見つかっている(図1)。本調査地の北で近年調査されたOJ08-4次調査では、豊臣期に遡る大きな落込みのほか、少量ながら中世・古代に遡る遺物が出土し、さらに北方のOJ97-1次調査では豊臣期の遺構群、平安時代初期の溝が見つかっている。OS88-82次、OJ92-22次・97-6次・98-8次調査では弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺物、平安時代の遺構と遺物が発見され、船場地域が陸化して開発が始まる時期を示唆するものとして注目されている。また、OJ92-24次では17～18世紀にかけて発達する城下町の変遷過程や骨加工・硯生産などさまざまな生業に係る資料が見つかっており、考古学による知見から歴史的な復元が進展しつつある地域といえよう。

当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査では、現地表下約2.3mで、徳川期の遺物包含層、さらに約2.9～3.2mで古代～中世の包含層が確認された。地層の状況や遺構・遺物の年代および分布を明らかにし、地域の歴史的変遷を復元する基礎資料を得るために本調査を実施することとなった。事業主により現地表下約2.6mまでの土砂が除去された後、1月27日から調査を開始した。調査区北側に土置き場を確保し、鋼矢板から約0.8m離して調査区を設けた結果、実質的な調査範囲は東西約11m、南北約7mとなった。徳川初期の遺構面から人力で掘り進め、随時、図面・写真による記録に努めた。最終面で古代の建物跡の調査を行い、2月7日にすべての調査作業を終了した。

以下、本報告に掲載した図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、 $TP \pm \text{〇}m$ と表記した。本文で用いた示北記号は図1・2が座標北、その他は磁北である。

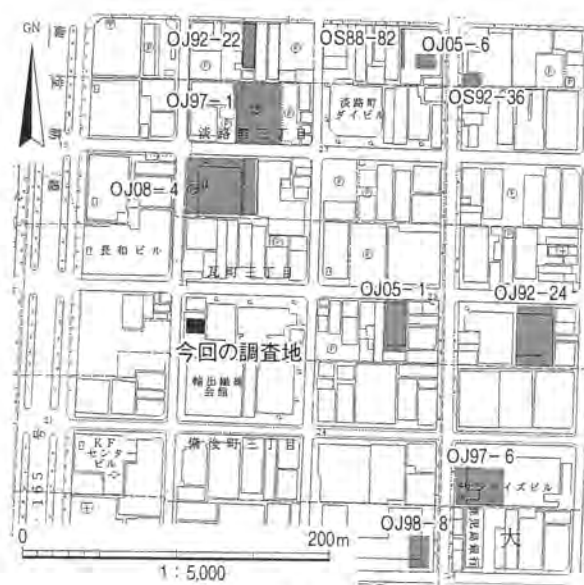


図1 調査地位置図

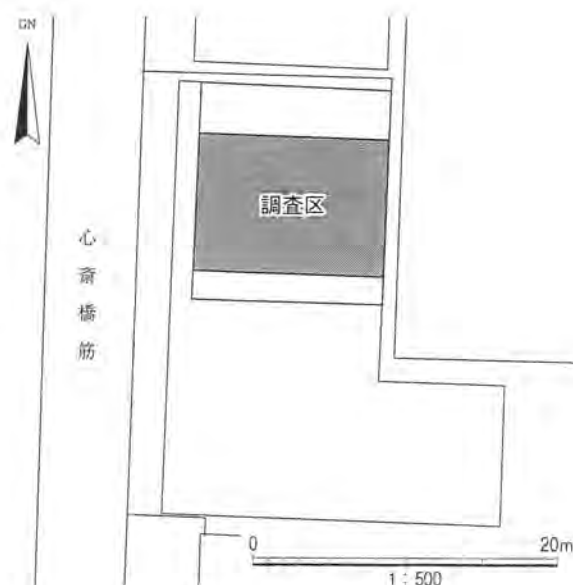


図2 調査区位置図

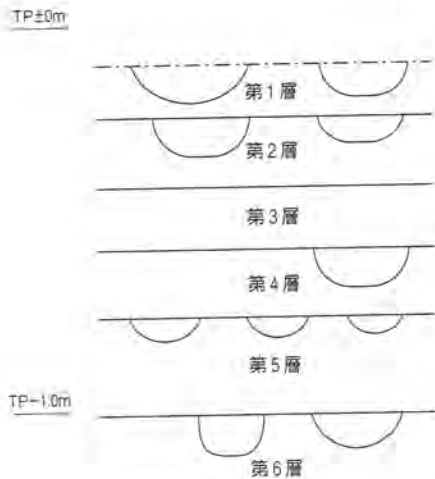


図3 層序模式図

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

現地地表下2.6m～3.5mまでの地層を第1～6層に区分した。
 第1層：暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂質シルトからなる17世紀後半頃の整地層である。既掘により調査区の大半个で削平されていたが、北壁周辺で最大層厚15cmを確認した。

第2層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂質シルトの作土層である。層厚は約20cmで、出土遺物の大半は豊臣後期に属するが、17世紀中頃の磁器を少量含む。上面で多数の17世紀代の遺構を検出した。

第3層：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質シルトの作土層で、層厚は約20cmである。出土遺物の傾向は第2層同様で、17世紀前半頃の地層と考えられる。

第4層：暗褐色(10YR3/4)中粒砂質シルトの作土層である。層厚15～20cmで、上部に酸化マンガング粒が顕著である。出土遺物の大半は奈良・平安時代の土器、陶器、瓦であるが、瓦器の小片を含む。中世に属するが、詳細な時期は不明である。上面で不定形な遺構を数基検出した。

第5層：黄灰色(2.5Y4/1)粗粒砂質シルト層の作土層である。調査区の南から2m付近で北に拡がり、最大層厚は30cmである。出土遺物の傾向は第4層と同様であり、中世に属する。上面で鋤溝が検出された。なお、本層基底で検出されたSK19は、第6層上面検出遺構とは埋土、出土遺物の時期が異なり、本層と第6層の間には本来別の地層が介在していたことが窺える。

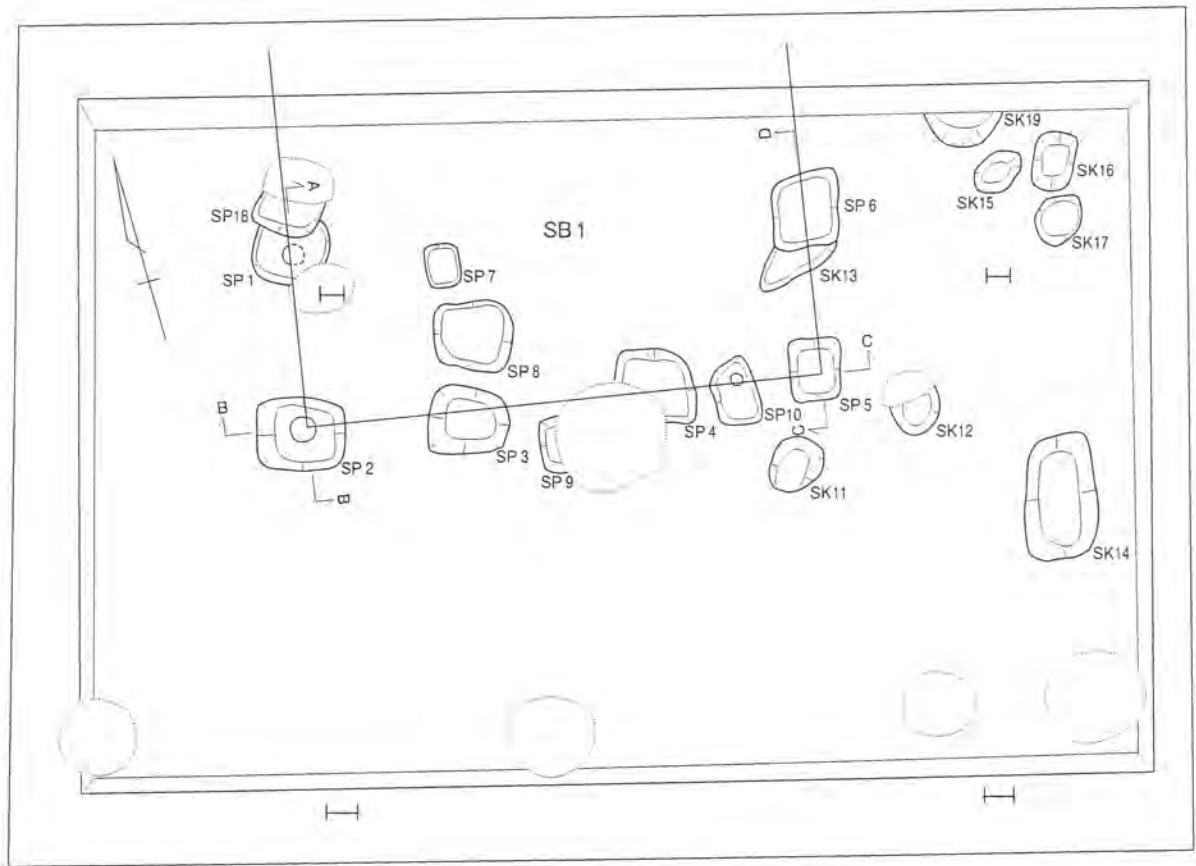
第6層：黄褐色(2.5Y5/4)極粗粒砂層で、ラミナが明瞭な海浜砂層である。層厚30cm以上で、調査区南側でTP-0.7m、北側でTP-1.0mを上面として、調査区の全体にわたって堆積が認められる。本層上位にはまったく古土壌が観察できず、第5層とは明瞭な層理面で区分されることから、上部を耕作もしくは流出で決失している可能性が高い。上面で建物跡を含む古代の遺構を多数検出した。本層から遺物は出土していない。

ii) 遺構と遺物

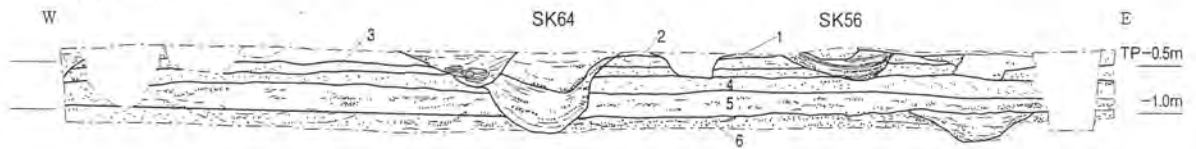
検出遺構総数は約70基で、それぞれの規模、時期、おもな出土遺物は表1に示したとおりである。ここでは主要な遺構と遺物を古い時代から記載する。

a. 第6層上面遺構(図4)

調査区北半部で約20基の遺構を確認した。SB1は南北2間(2.0m)以上、東西3間(5.4m)の掘立柱建物跡である。建物の南北軸は、磁北から東へ9°30'振る。最も遺存状態の良かった柱穴SP2は、長辺0.9m、短辺0.8m、深さ0.3m、柱痕跡の径0.2mであった。掘形埋土はオリーブ褐色中粒砂質シルトで、土師器皿1、製塩土器6のほか、土師器杯・皿・甕、須恵器杯・甕の小片が出土した。この建物跡を構成するほかの柱穴では、SP5からは土師器甕5、須恵器杯8など、奈良時代前半頃の遺物が出土した。また、SP1を切るSP18からは、9世紀代の土師器碗3が出土しており、SB1の時期はこの間に属すると考えられる。そのほか柱痕跡が確認できたのは、SP10のみであるが、平面形が隅



北壁地層断面



西壁地層断面



※数字は地層番号に対応

- | | |
|------------------------------|---------------------------|
| 1 : 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗粒砂質シルト | 4 : 暗褐色 (10YR3/4) 中粒砂質シルト |
| 2 : オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 中粒砂質シルト | 5 : 黄灰色 (2.5Y4/1) 粗粒砂質シルト |
| 3 : にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂質シルト | 6 : 黄褐色 (2.5Y5/4) 極粗粒砂 |

SB1断面

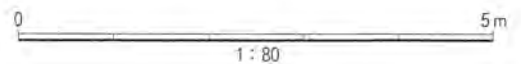
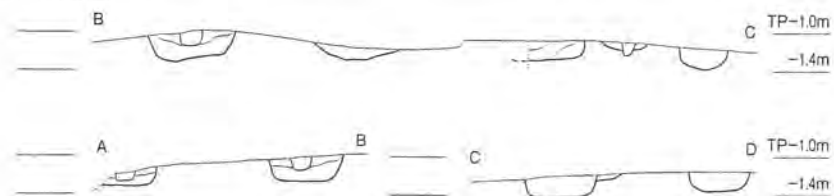


図4 第6層上面・第5層基底面(古代)遺構平面・断面図

丸方形の遺構はいずれも埋土は埋戻されており、柱穴である可能性が高い。この検出面で平安時代の遺物が出土したのはSP18のみで、ほかは奈良時代、あるいは時期不明の土師器・須恵器の小片が出土した。このほか製塩土器の小片が、先のSP2のほか、SP3・4・12からも出土している。

b. 第5層基底面遺構(図4)

調査区北東部で検出されたSK19の1基が該当する。SK19は暗灰黄色中粒砂質シルトで埋戻されており、第6層上面遺構の埋土と異なる。土師器・須恵器のほか、青磁碗13・白磁碗14のように、12～13世紀を示準する遺物が出土している点も、上位、下位の遺構群と異なる。

c. 第5層上面遺構(図5)

調査区東部で検出されたSD20～22が該当する。いずれも東西方向の鋤溝で、幅0.3～0.4m、深さは0.02mである。遺物は出土しなかったが、層序関係から中世に属する。鋤溝は上位の攪乱が少なく、第4・5層が良く保存された東部で特に明確に確認できたが、本来調査区全体に拡がっていたものと考えられる。

d. 第4層上面遺構(図5)

調査区東部で9基の遺構を確認した。SK26から瓦器の小片が出土しているほかは、土師器・須恵器の小片のみで、遺構の時期を特定できるものはない。遺構は東部に集中する傾向が窺えるが、その有機的な関連は不明である。

表1 遺構一覧

遺構 No.	種類	長辺	短辺	深さ	時期	おもな出土遺物	遺構 No.	種類	長辺	短辺	深さ	時期	おもな出土遺物
SP1	柱穴	80	80	15	奈良中頃～	土師器杯	SK35	土壇	55	40	15	徳川	瓦質土器火舎
SP2	柱穴	90	80	30	奈良中頃～	土師器杯・須恵器杯・製塩土器	SK36	土壇	55	40	15	徳川	
SP3	柱穴	80	70	15	奈良中頃～	土師器壺・製塩土器	SK37	土壇	50	40	25	徳川初	肥前陶磁器・土師器皿
SP4	柱穴	80	70	20	奈良中頃～	土師器壺・製塩土器	SP38	柱穴?	30	20	20	徳川	
SP5	柱穴	65	50	20	奈良中頃～	土師器壺・須恵器杯	SP39	柱穴?	25	20	15	徳川	瀬戸美濃焼陶器
SP6	柱穴	115	115	30	奈良中頃～	土師器・須恵器	SP40	柱穴?	30	20	20	徳川	
SP7	柱穴	40+	50	30	古代	土師器壺	SK41	土壇	80	50	25	徳川初	土師器搦鉢・灯明皿
SP8	柱穴	80	70	10	古代		SK42	土壇	80	50	15	徳川	
SP9	柱穴	60+	20+	10	古代		SK43	土壇	90	30	20	徳川初	土師器壺
SP10	柱穴	70	40	10	古代	須恵器杯	SK44	土壇	65	60	25	徳川初	肥前陶器
SK11	土壇	60	50	10	奈良中頃～	土師器杯	SK45	土壇	100	90	40	徳川初	肥前陶磁器・瓦質土器
SK12	土壇	50	50	25	古代	土師器・須恵器・製塩土器	SE46	井戸	100	110	100+	徳川初	肥前磁器・焼塩壺
SK13	土壇	60+	50+	10+	古代		SK47	土壇	70	30+	10+	徳川初	土師器灯明皿
SK14	土壇	130	75	20	奈良中頃～	土師器壺・杯	SK48	土壇	230+	200	55	徳川初	肥前陶器・土師器羽釜
SK15	土壇	55	40	10	古代		SK49	土壇	40	25+	15	徳川初	肥前陶器・鉦澤
SK16	土壇	60	45	15	古代	土師器・須恵器	SK50	土壇	180	160+	10	徳川	
SK17	土壇	60	45	20	古代	土師器	SP51	柱穴?	60	40	15	徳川	
SP18	柱穴	80	60+	10	9c 中頃?	土師器皿・甕	SK52	土壇	60	60	10	徳川初	肥前陶器・平瓦
SK19	土壇	80	55+	30	12c～13c	白磁碗・青磁碗	SP53	柱穴?	40	35	20	徳川	
SD20	溝	70+	30	2	中世		SP54	柱穴?	40	35	5	徳川	
SD21	溝	250+	40	2	中世		SK55	土壇	90+	60	20	徳川	瓦器・平瓦
SD22	溝	270+	40	2	中世		SK56	土壇	120	100+	35	徳川初	肥前陶磁器・鉦澤
SP23	柱穴?	50	45	20	中世	土師器壺・高杯	SK57	土壇	100+	50	30	徳川	肥前陶器
SK24	土壇	100	75	35	中世	須恵器杯・甕	SK58	土壇	175	55	45	徳川初	肥前磁器・輪羽口・鉦澤
SK25	土壇	175+	130	40	中世	土師器高杯・須恵器杯	SK59	土壇	70+	30	15	徳川	肥前陶磁器
SK26	土壇	200	120	30	中世	瓦器・製塩土器	SK60	土壇	140	135	5	徳川初	肥前陶磁器・鉦澤
SP27	柱穴?	30	25	10	中世		SK61	土壇	100	80	40	徳川初	
SK28	土壇	80	60+	30	中世		SK62	土壇	280	90+	30	徳川初	肥前陶磁器・土師器皿・鉦澤
SP29	柱穴?	30	25	10	中世		SK63	土壇	170	120	50	徳川初	中国製青花・古代瓦・土師器灯明皿
SP30	柱穴?	55	50	20	中世		SK64	土壇	200+	55+	80	17c 後～	肥前陶磁器
SP31	柱穴?	25	20	15	中世		SK65	瓦葺	150	70	45	18c～	平瓦
SK32	土壇	180+	130	80	17c 後～	肥前陶磁器・瓦質土器・瀬戸美濃焼陶器	SE66	井戸	130	120	100+	19c	関西系陶器
SK33	土壇	50	40	30	徳川		SE67	井戸	110	110	100+	17c 後～	備前焼搦鉢・軒平瓦
SK34	土壇	60	50	20	徳川	肥前陶器							

注：長さの単位は cm

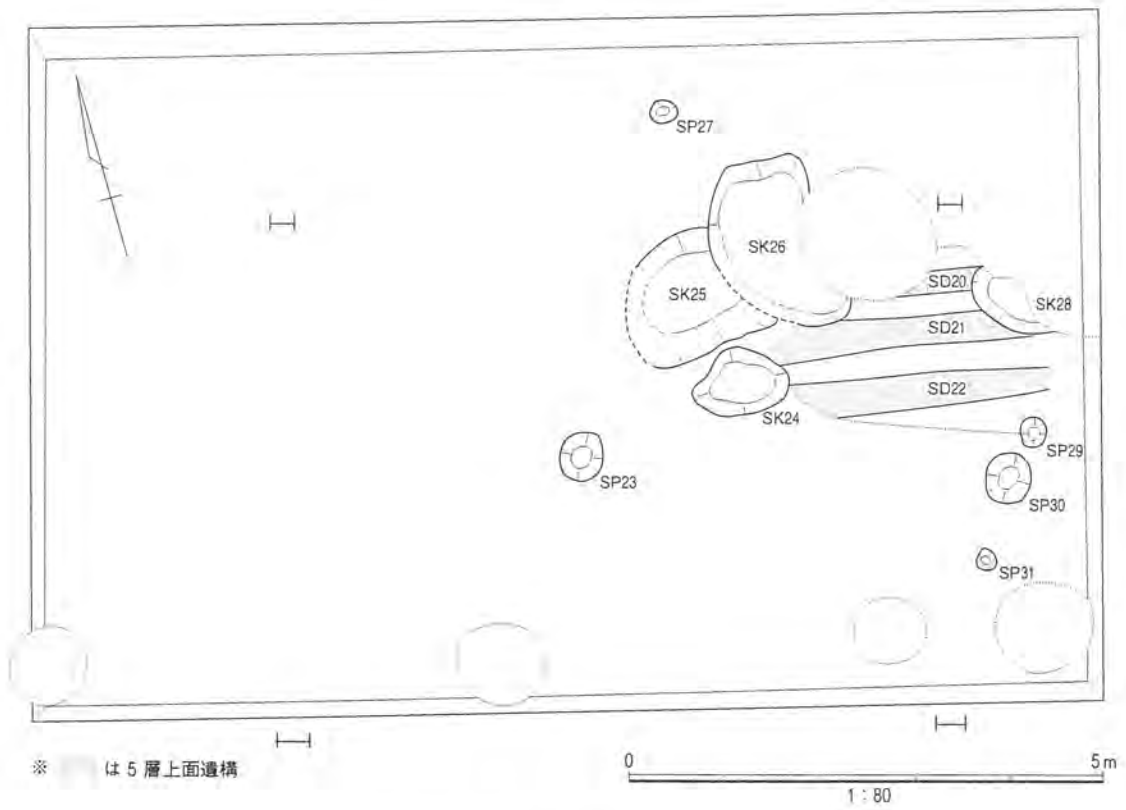


図5 第4・5層上面(中世)遺構平面図

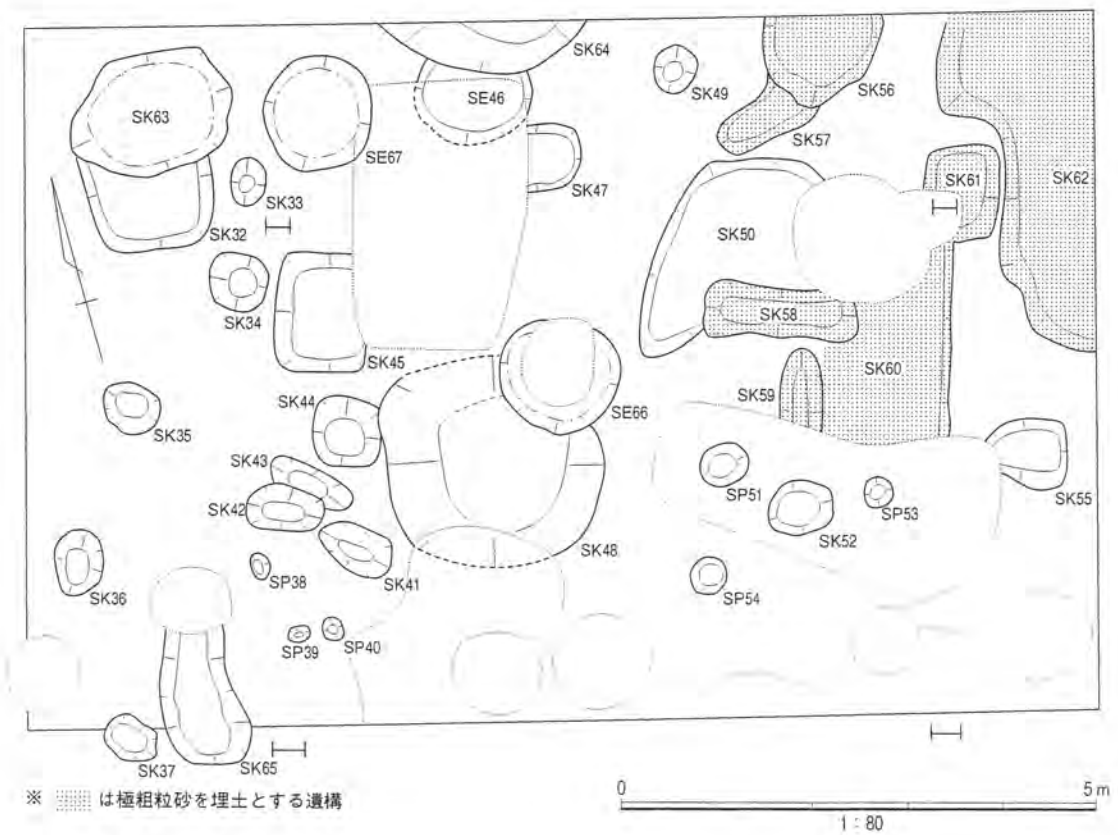


図6 第1・2層上面(近世)遺構平面図

e. 第1層および第2層上面遺構(図6)

約40基の遺構を検出した。18世紀以降の遺物を含み、上位層から掘削されたことが明らかなSK65、SE66・67以外の遺構は、層序関係、出土遺物から17世紀代に属する。この時期の遺構は井戸(SE46)、水溜状土壙(SK32・48)、土壙(SK63)、小穴で、出土遺物は肥前陶器、肥前磁器染付、中国製青花、瀬戸美濃焼陶器、備前焼、丹波焼、瓦質土器、瓦器、土師器、須恵器、瓦、鞆羽口、鉾滓がある。

平面円形の小穴は柱穴の可能性はあるが、柱痕跡を確認できたものはない。調査区では筋を揃える小穴や礎石も確認できなかった。土壙のうち、大型のSK50・64などは生活雑器を中心とした不用物の廃棄土壙であり、調査区は居住空間からやや離れた場所と考えられる。この想定と関連して、極粗粒砂を埋土とする一連の土壙SK56~62の存在が注目される。これらは調査区北東部に集中しており、SK58からは肥前磁器の小片、鞆羽口、鉾滓、SK56・60・62からは鉾滓が出土した。また、SK56の埋土下部は炭層であった。これらは17世紀前半の铸造と関わる遺構と考えられる。

f. おもな遺物(図7・8)

出土遺物は古代~近世に及ぶが、出土量から見ると次のような特徴が指摘できる。

- ①奈良時代前半と平安時代初期の土器が一定量認められる。
- ②青磁・白磁など平安時代後期の資料が少量存在する。
- ③中世では瓦器が少量出土する。
- ④近世では肥前陶器を中心に豊臣後期~17世紀前葉の資料が多い。
- ⑤17世紀前半には鞆羽口や鉾滓など铸造関係の資料がある。

以下、おもな資料を解説する。1は土師器皿で、2は土師器杯である。ともに奈良時代中頃に位置づけられる。3は土師器椀で、外面底部に指頭圧痕がかすかに残る。9世紀頃のものである。4は土師器高杯の脚部である。裾部は大きく張り、短い脚部は8面に面取りされる。奈良時代前半のものだろう。5は土師器甕である。外面は細いハケ、内面はケズリを施す。6は製塩土器である。器壁は10mmと厚手で、外面に指頭圧痕が顕著である。7・8は須恵器杯である。全体の形態、高台の位置から、奈良時代前半に位置づけられる。9・10は須恵器甕である。9の頸部は短く外反し、体部外面に縦方向の平行タタキを施す。10は内外面に自然釉がかかる。11は緑釉陶器火舎の口頸部である。小破片であるが、口径206mmに復原でき、スカシ孔は3つ以上を1単位としていることがわかる。全体の調整は摩滅が著しく不明である。都城遺跡や平安時代初期の官衙にはほぼ限定される特殊な遺物であり、市内では天王寺区伶人町遺跡(大阪星光学院敷地)に次いで、2例目である。12は緑釉陶器椀である。深さのある硬陶で、高台内を含め全面に施釉する。10世紀前半に位置づけられ、東濃産の可能性はある。13は青磁碗の小片である。14は白磁碗である。口縁端部に玉縁をつけるタイプで、平安時代末を中心に位置づけられる。15・16は平瓦である。ともに外面は縄目タタキを施し、内面は布目を残すが、後者はケズリが顕著である。厚さは前者30mm、後者15mmである。17~22は土師器皿で、ともに外面に指頭圧痕がある。19~22は、口縁端部の内外面に煤が付着しており、灯明皿として用いられている。22の外面底部には爪痕がある。23は土師器羽釜である。鏝以下に煤が厚く付着する。24は焼塩壺の完形品である。25は片口の土師器挿鉢である。摺目は縦方向3本、横方向9本を1単位とする。体部外

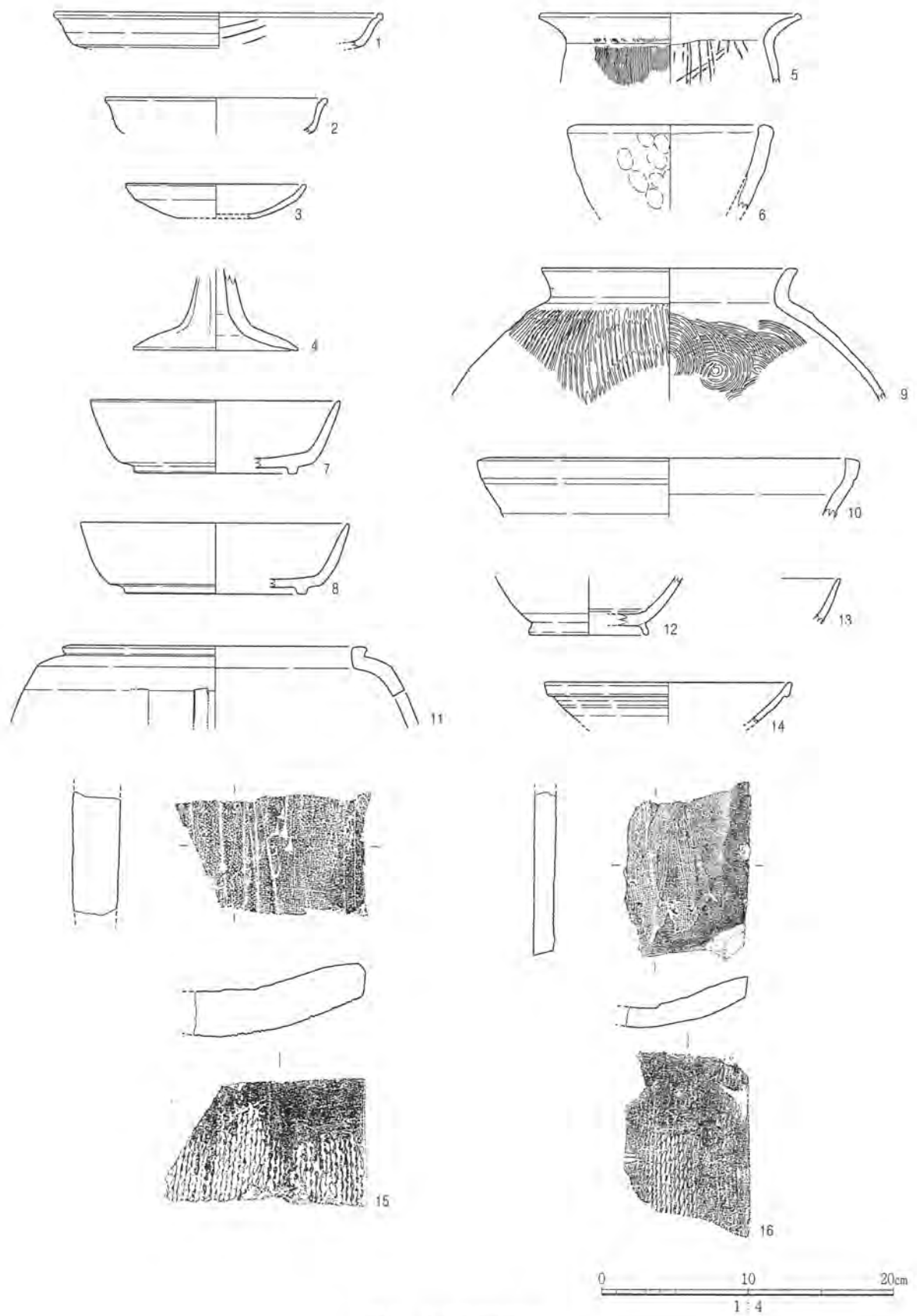


图7 古代遺物実測図

SP2(1·6)、SP5(5·8)、SP11(2)、SP18(3)、SK19(13·14)、SK25(4·7)
 第3層(12)、第4層(9·10·11·15·16)

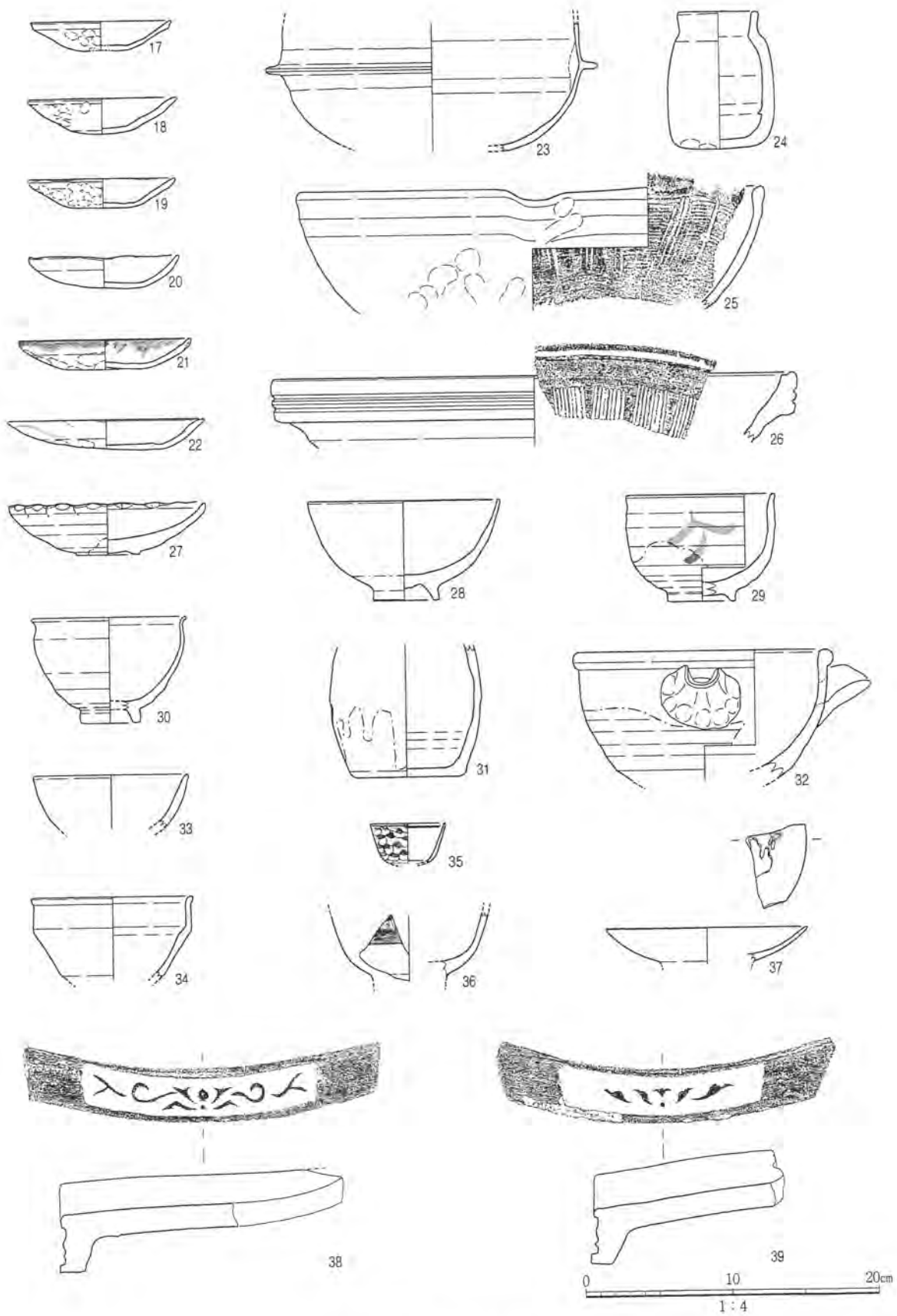


图8 近世遺物実測図

SK32(31·34·36)、SK37(17·18·27)、SK41(25)、SE46(24)、SK47(19)、SK48(23)、SK62(20)、SK63(22)、SK64(21·30·32)、SE67(26·38·39)、第1層(37)、第3層(28·29·33·35)

面に指頭圧痕が残る。26は備前焼播鉢、口縁部を上下に拡張する。摺目は8条1単位で、直線的である。27～32は肥前陶器である。27はひだ皿、28・29は碗で、後者は体部中央に銕絵の文様を描く。30は内野山系の碗であり、17世紀後半頃と考えられる。31は瓶、32は片口鉢である。33は瀬戸美濃焼の灰釉碗、34は瀬戸美濃焼白天目碗である。35は青花小杯で、外面に連弧文を施す。36は肥前磁器染付碗、37は肥前磁器色絵皿で、内面に赤の上絵付けを施す。ともに17世紀後半頃に属する。38・39は軒平瓦である。38は橋唐草文で、上外縁の瓦当中央のみを3mmほど面取りしている。39は三葉唐草文で、上外縁を軽く面取りしている。

3)まとめ

今回の調査では、古代～近世の多種多様な遺構・遺物が見つかったが、最も注目されるのは、古代の建物跡の発見である。当該期の遺構・遺物は周辺の調査でも確認されていたが、建物跡は初めてである。時期は奈良時代中頃～平安時代初期と特定しがたいものの、都城遺跡や平安時代初期の官衙に特徴的な遺物である緑釉陶器火舎の出土を考え合わせると、一般の集落ではなく、公的な施設の可能性も十分に考えられる。また、徳川時代初期の鑄造関連遺構の発見は、当地の産業の一端を示し、当該期の地域史復原に定点を与える資料として重要である。

今回は小規模な調査ではあったが、古代の難波、近世初期の地域史を考える上で大きな成果があった。

調査区の位置
(東から)



北壁断面
(南から)



第6層上面古代遺構
(南から)



SB 1 検出状況
(南西から)



SP 2 断面
(北から)



第1・2層上面近世遺構
(西から)



大坂城跡発掘調査(OS08-1)報告書

調査個所	大阪市中央区島町二丁目38・39
調査面積	360㎡
調査期間	平成20年4月21日～6月21日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	文化財研究部次長 南 秀雄、黒田慶一

1) 調査に至る経緯と経過

今回調査地は松屋町筋と鳥町通の交差点の南東角で、豊臣氏大坂城の惣構に位置する。鳥町通を挟んだ北側のOS87-81次調査地では、豊臣～徳川期のほか、12世紀、14世紀の遺構・遺物を検出し、その北のOS96-30次調査地では、12～13世紀の遺構・遺物やヒスイ製の丁字頭勾玉など古墳時代の遺物も出土している(図1)。

平成19年10月に試掘調査を行ったところ、現地表下約1.7mで17世紀と見られる遺構面に達したことから、工事側が基礎工事を終えた後、敷地中央で本調査を行うことになった(図2)。平成20年4月7日からの工事側の重機掘削には適宜立会い、掘削深度を指示し、4月21日から本調査にかかった。5月31日には写真測量を行い、6月21日に全ての作業が終了した。

なお、この調査での水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中では $TP \pm \bigcirc m$ としている。また、挿図中の座標値は世界測地系による。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第0層：機械掘削で除去した土層である。ほとんどがレンガ・礫を含む近代盛土と攪乱埋土である。

第1層：オリーブ褐色小礫質粗粒砂層、黄褐色細粒砂層、褐色砂質シルト層などからなり、層厚は25～80cmを測る。整地層が主体で、調査地西側1/3は旧建物の基礎で消滅していた。

第2層：層厚3～10cmの黄褐色シルト質砂、明黄褐色細礫質粗粒砂、オリーブ褐色シルト質砂の薄層などからなる層である。左巻き三巴文軒丸瓦60を含む。

第3層：層厚50～180cmのにおい黄色シルト質粗粒砂やシルトの偽礫を多く含むオリーブ褐色粗

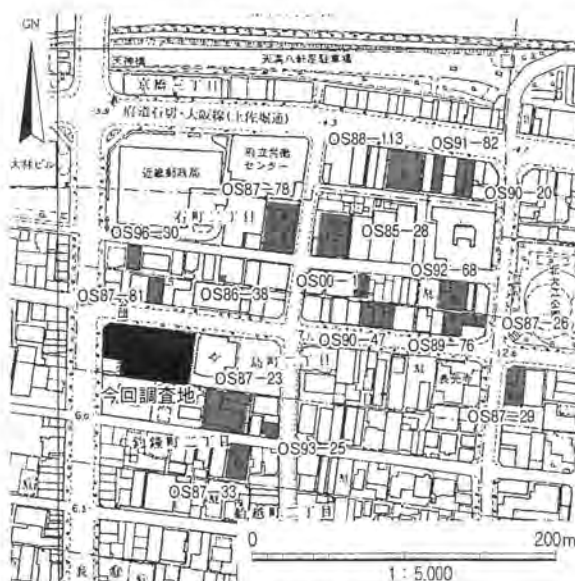


図1 調査地位置図

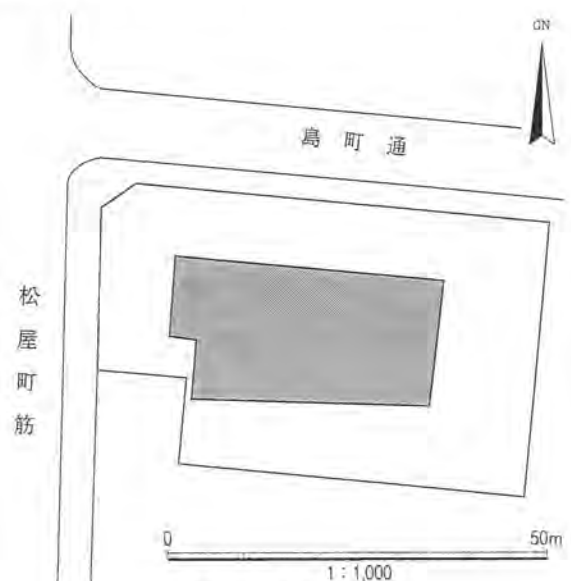


図2 調査区配置図

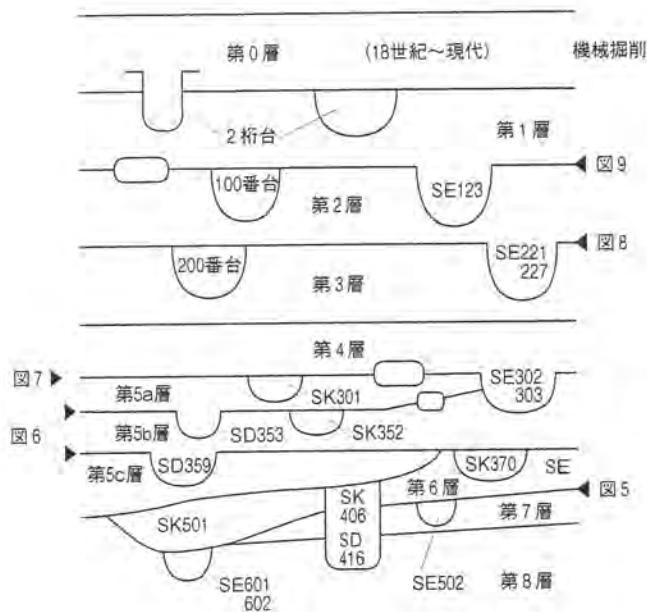


図3 地層と遺構の関係模式図

粒砂層などからなる盛土で、唐草文軒平瓦39・64など豊臣前期までの遺物を含み、慶長3(1598)年の大坂町中屋敷替え時の盛土と考えられる。

第4層：層厚10~30cmの泥質の暗灰黄色砂質シルト層からなる。上面に遺構がないことから、大坂町中屋敷替えで建物撤去後、しばらく放置された際の自然堆積層である。唐草文軒平瓦40・41が出土した。

第5a層：層厚10~30cmのスラッグを含む黄褐色粗粒砂層である。左巻き三巴文軒丸瓦26と唐草文軒平瓦42が出土した。

第5b層：層厚10~50cmの有機物を含む灰

黄褐色細粒砂層である。唐草文軒平瓦45が出土した。

第5c層：調査地北東部のみに分布する層厚30~130cmのオリーブ褐色シルト質粗粒砂層で、上面で東西溝SD359を検出した。

第6層：層厚30~130cmの黄褐色粗粒砂層である。瓦器碗3・4、備前焼鉢12、常滑焼壺13が出土した。13世紀後半の包含層である。

第7層：層厚40~60cmの黄褐色粗粒砂層で暗色化している。

第8層：河川による堆積層で、層厚10~40cmの黄褐色粗粒砂質小礫層やオリーブ褐色細粒砂層からなる。

ii) 遺構と遺物(図5~13)

a) 第7層上面検出遺構

SE601 直径0.6m、深さ0.35mの曲物の井戸で、底に直径0.25mの曲物を入れて水溜にしている。粘土偽礫を含む黒褐色小礫質粗粒砂で埋まる。須恵器・黒色土器A・土師器片が出土した。

SE602 直径0.45m、深さ0.25mの曲物の井戸で、曲物を2段入れている。粘土偽礫を多く含む黒褐色小礫質粗粒砂で埋まる。土師器皿5や須恵器、黒色土器A片が見つかった。土師器皿5は「て」字形口縁をもち、小森編年[小森俊寛2005]の京IV期中(10世紀後半)のものである。

SE502 直径1.3m、深さ1.1mの井戸で、埋土は黒褐色砂質シルトである。須恵器・黒色土器A・土師器・瓦片が出土した。

ピット群503 調査地西半に分布する直径0.3m、深さ0.2mのピットだが、並ばない。

SK501 東西3.7m、南北2.2m以上、深さ0.2mの平面が方形を呈する土壌で、黒褐色粘土質シルトで埋まっている。瓦器碗1・2と土師器皿6・8が出土した。瓦器碗1・2は内面に圏線状に暗文を巡らせ、退化した高台をもつ。尾上編年[尾上実1983]のIV2期に当り、同期は森島編年[森島康雄

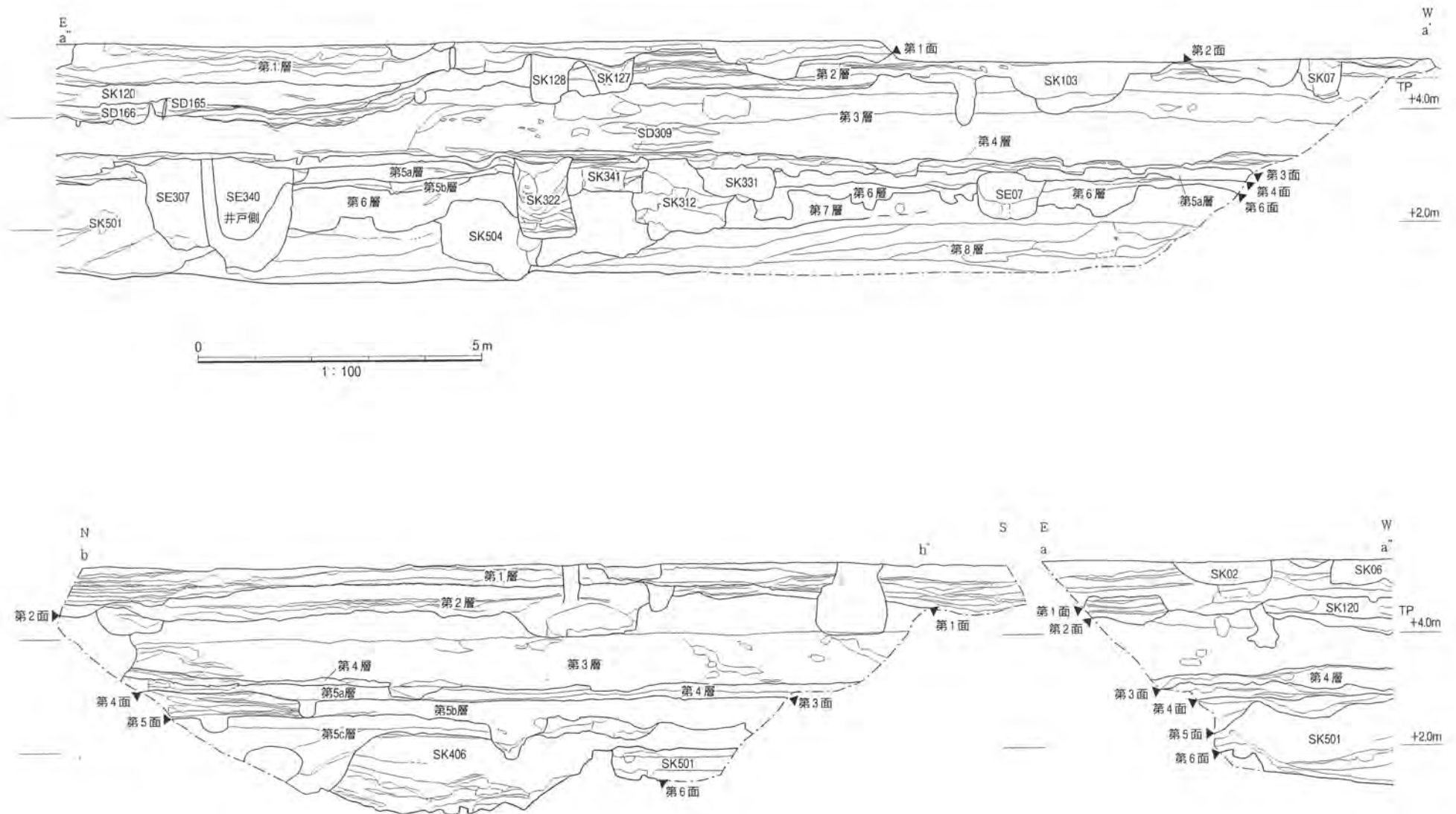


図4. 地層断面図 (断面位置は図13参照)

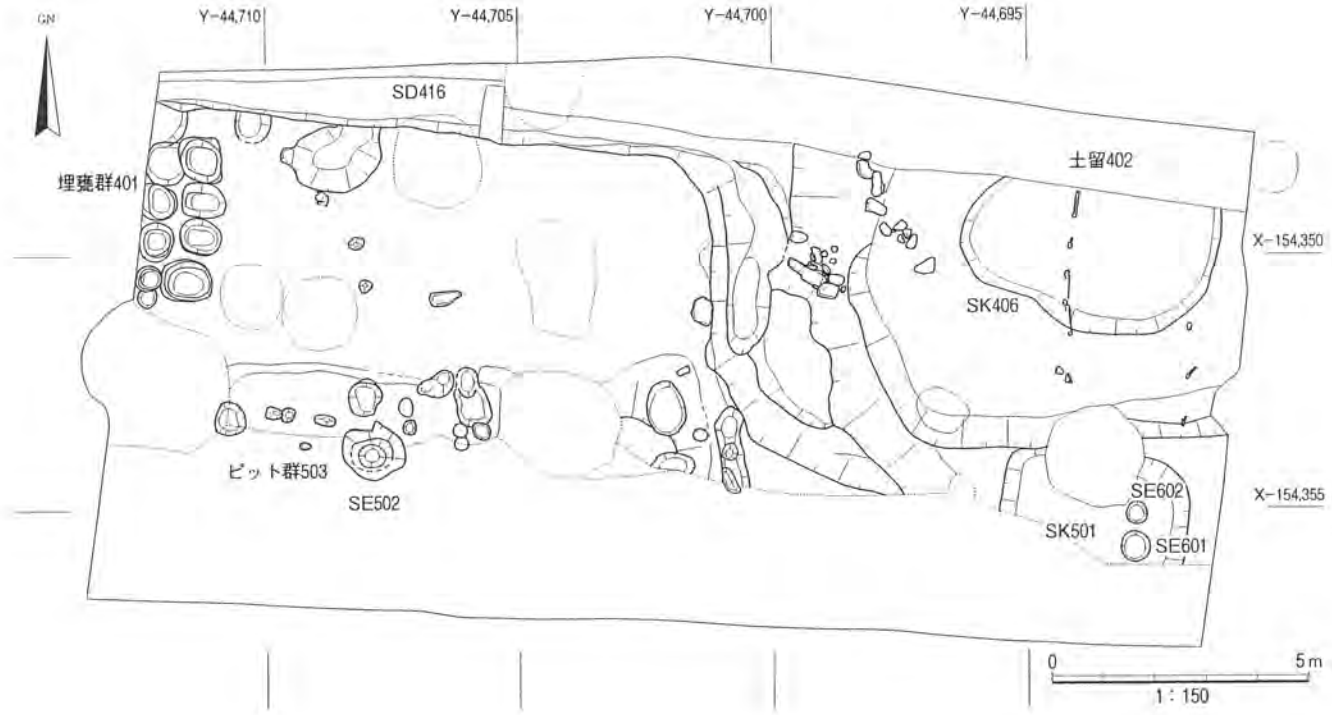


図5 第7層上面平面図

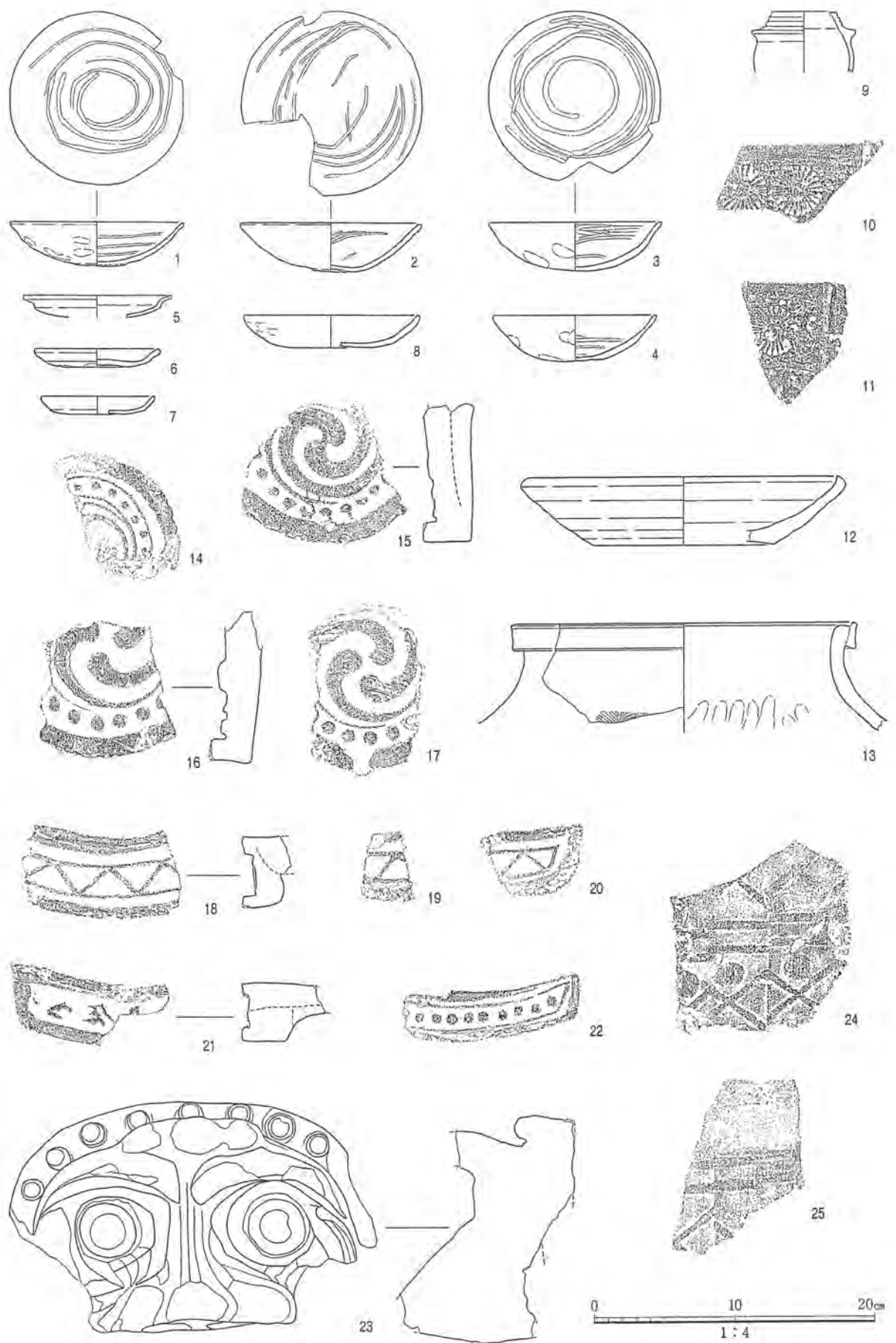


图6 出土遺物(1)

SK501(1·2·6·8)、第6層(3·4·7·12·13)、SE502(5)、SK406(9·11·14~25)、SD416(10)

1992]では13世紀第3四半期のものとする。土師器皿6は小森編年の京Ⅶ期新～京Ⅷ期古(13世紀中～後半)、土師器皿8は外面に工具で押えた痕があり、やはり同期に当る。

SK504 南壁断面(図4参照)の1辺1.7m、深さ1.4mで、埋土がシルト偽礫を多く含む黒褐色シルト質粗粒砂である。

埋甕群401 直径約0.7m、深さ0.2mの土壇が2列をなして南北に並ぶ。東列が4個、西列が5個だが、うち南端の2個は直径0.5mとやや小さい。備前焼・常滑焼・土師器・瓦片が出土し、接近して列をなす形態から埋甕の痕跡と考えられる。埋土はオリーブ褐色シルト質粗粒砂で、第5c層に相当する。

土留402 SK406がTP1.3mまで埋没した後に施工された西面する土留施設である。0.5～0.6m間隔で南北に8本の杭を打ち、東側に横板をかませている。横木の範囲はTP1.3～1.5mである。2.3m東側にも3本の杭が南北に並ぶが、横板は見られなかった。

SK406 調査地東半にある南北5.5m以上、東西10.5m以上、深さ1.4mの大土壇で、下部は黒褐色中粒砂、上部は黒褐色粘土で埋没し、北東部が東西5.0m、南北3.0m以上にわたって低くなっている。瓦質ミニチュア羽釜9、瓦質浅鉢11、軒丸瓦14～17、軒平瓦18～22、鬼瓦23、凸面に幾何学文のタタキ痕をもつ平瓦24・25のほか、15世紀後半までの遺物を含む。11は平面形が輪花を呈し、24弁の菊花文のスタンプを押捺する。14世紀前半のものと考えられる。14は右巻き三巴文で、珠文の内外に2本の圈線をもち、復元珠文数は22個である。15は左巻き二巴文で、復元珠文数は24個を数え、范キズがめだつ。16・17は左巻き三巴文で、周縁部が高く彫りも深く、復元珠文数はそれぞれ20個である。18～20の瓦当文様は圈線の内に凸線で表現した鋸歯文を入れたもので、平瓦部端面を斜めに切り、瓦当を貼り付けている。21は梵字文で、周辺のOS90-31・93-47次調査[大阪市文化財協会2003]などで出土している。22は連珠文である。23は目玉の横に接して耳をもち、頭の外側に連珠文を施した鬼面で、裏面は中央の把手の穴内部とその左右は削り取られて、地が非常に薄く、鼻孔のそばで地の厚さは0.9cmを測り、鼻の下部に口など顔の一部が付くとは思えない。おそらく鼻直下が股削りになり鼻の左右の耳の下に足元が付く隅鬼になると考えられる。13世紀頃の鬼瓦であろう。

SD416 調査地西半の北端で検出した長さ11.0m以上、幅1.3m以上の東西溝で、下部は黒灰色シルト質中粒砂、上部は黄灰色粘土質細粒砂で埋まっている。SK406に流れ込んでいたようで、出土遺物の瓦質浅鉢10は、11と同様で、両者は同一個体の可能性がある。

b)第5b・5c層上面検出遺構

SD353 第5b層上面から掘込まれた東西溝で、長さ4.7m以上、幅0.3m、深さ0.3mである。東で南に3度振っている。

SD359 第5c層上面から掘込まれた東西溝で、長さ5.0m以上、幅1.0m、深さ0.5mで、段掘りされている。東で南に12度振っている。

SD365 第5c層上面から掘込まれた南北溝で、長さ3.0m以上、幅0.4m、深さ0.3mである。北で東に6度振っている。

SK352 南東部で検出した東西1.1m、南北0.5m以上、深さ0.4mの土壇で、唐草文軒平瓦32が出土

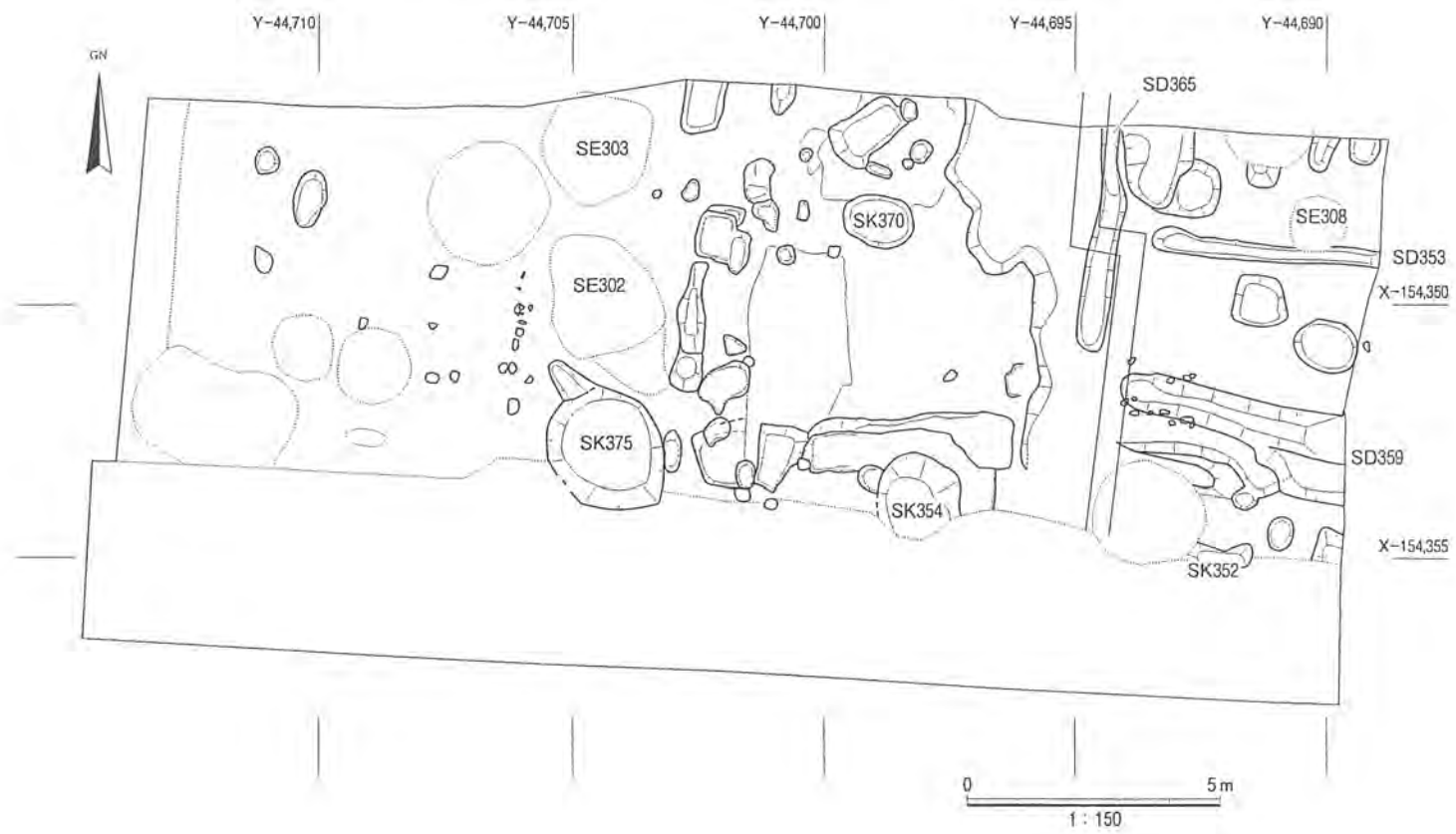


图7 第5b·5c層上面平面图

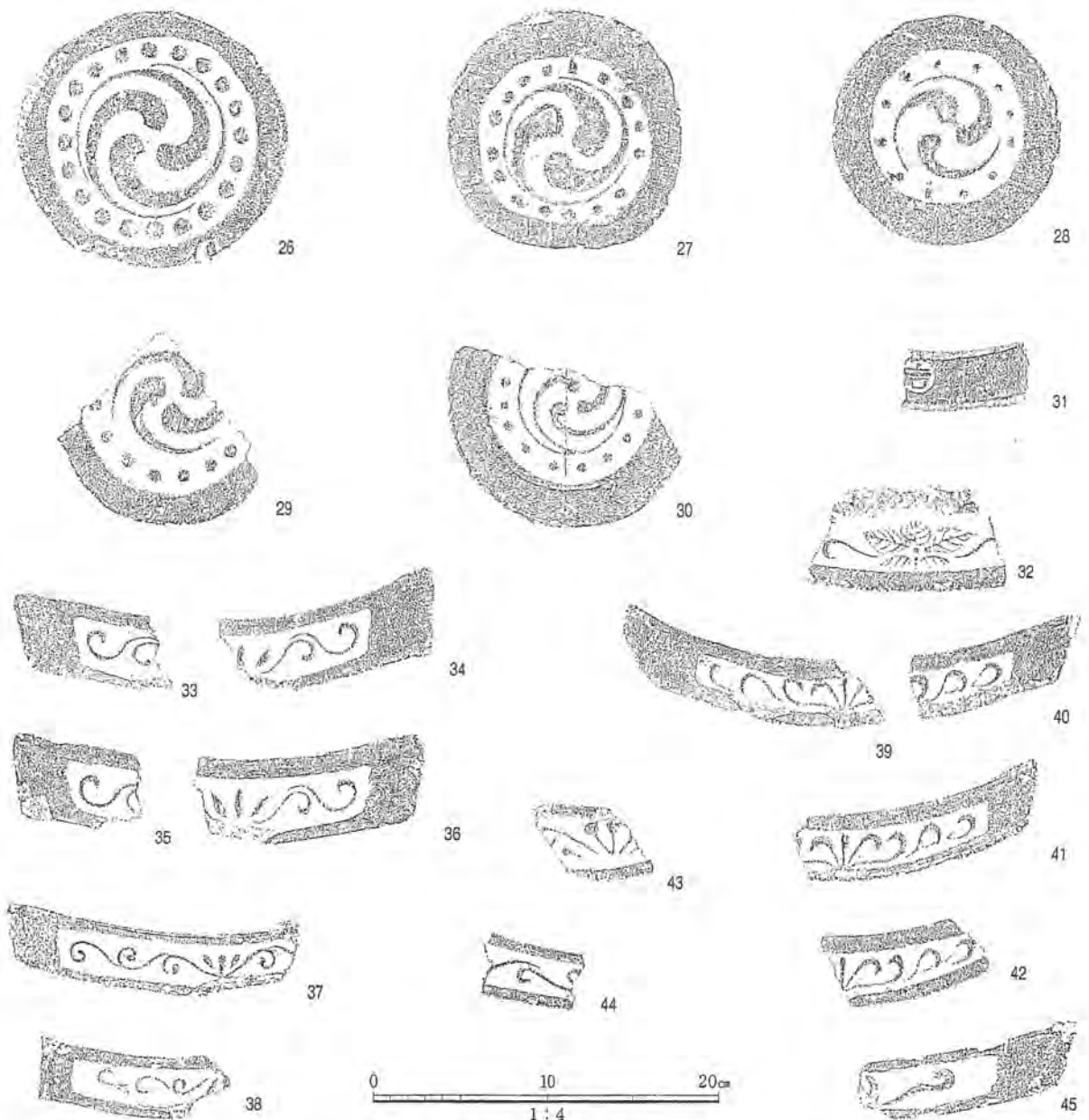


図8 出土遺物(2)

第5a層(26・42)、SK301(27)、SK321(28～31・33・35～38・44)、SK352(32)、SK370(34・43)、第3層(39)、第4層(40・41)、第5b層(45)

した。32は、天正10(1582)年前後に、播州姫路や大坂でしばしば見られる葉脈をもつ三葉を中心飾とするタイプであるが、左右の葉の先が真横に向くのは、旧大阪中央体育館の金箔押し瓦[大阪市文化財協会1992、3630番]などあるが、これは別の範で非常に大ぶりである。

SK354 直径1.8m、深さ0.4mの土塋である。

SK355 直径2.3m、深さ0.9mの土塋である。

SK370 南北1.0m、東西1.4m、深さ0.5mの瓦溜である。唐草文軒平瓦34・43が出土した。34は33・35・36と同範である。43は中心飾の三葉の先に点珠を付けたもので、OS97-45次調査[大阪市文化財協会1999]の319番と同範の可能性が高い。

c) 第5a層上面検出遺構

SA310 塀の礎石と見られ、調査地北端に3基、南端に2基残る。芯々間はいずれも1.0mで、13m以上の塀である。北で東に4.5度振る。

SB331 SK316の焼壁・スラッグ上に礎石が3基遺存していた。元はSK316を仕事場として上屋があったものと考えられる。梁行1間で2.5m、桁行1間で1mの礎石建物である。

石列311 調査地北端で1.5m分、南端で0.5m分検出したほか、塼も用いられていた。町屋の敷地境になると思われ、南北方向に幅0.6mで、白色粘土が塗られている。北で東に3度振る。

SD309 長さ7.5m以上、幅・深さともに0.2mの南北溝で、北で東に5度振る。

SE302 直径2.4m、深さ1.0mの素掘りの井戸である。

SE303 直径2.0m、深さ1.0mの素掘りの井戸である。

SE307 直径3.2m、深さ1.5mの素掘りの井戸で、オリーブ褐色シルトの偽礫で埋めた後、曲物を用いたSE340を掘っている。

SE308 直径1.2mの掘形内に、直径1.0m、高さ1.2mの火を受けて炭化した、板の厚さ3cmの桶を入れて井戸側になっている。井戸の埋土に炭が見られないことから、焼き板で作った桶を利用したものと思われる。備前焼甕が出土した。

SE340 SE307の掘形内に、直径1.8mの掘形を掘り、直径0.9mの曲物を用いた井戸側を入れている。

SK301 SE302に切られた1辺2.0mの正三角形を呈する土壌で、深さは1.0mを測る。左巻き三巴文鳥衾瓦27が出土し、27は珠文数16個を数え、範キズがめだつ。

SK304 SK305・322ともども南北に並べて掘られたゴミ穴である。直径0.8m、深さ1.0mである。

SK305 長さ1.7m、幅1.0m、深さ1.2mのゴミ穴である。

SK306 南北5.0m、東西2.5m、深さ0.3mの黄褐色粗粒砂で埋まった土壌である。この土壌の範囲ではSA310の礎石が見られないことから、土壌掘削の際、礎石が消失したと考えられる。

SK312 南壁断面(図4参照)の1辺1.8m、深さ1.5mの黄褐色～白色粘土偽礫を詰めた土壌である。

SK316 南北3.3m、東西6.0m、深さ0.2mの焼土とスラッグで埋まる土壌で、埋土上にSB331の礎石が見られることから、火を扱う仕事場と考えられる。

SK321 1辺0.7m、深さ0.3mの瓦溜である。左巻き三巴文軒丸瓦28～30、端面に吉の陽刻印のある平瓦31、唐草文軒平瓦33・35～38・44が出土した。28は、巴尾がやや短く次の巴との距離が大きく、珠文数12個を数え、範キズがめだつ。巴頭2つが範キズで繋がっている。29も巴尾が短く次の巴と離れ、復元珠文数16個で、巴頭に範キズを有す。30は珠文数15個で、タテに割れる範キズをもち、[大阪府文化財センター2006、2120番]と同範で、NM07σ型式である。33・35・36はいずれも同範で、三葉の中心飾の左右に巻きの強い唐草が2転する。37は[大阪市文化財協会1992、3660番]と同範と見られる。38は中心飾が下向きの三葉で、唐草は3転する。44は直線的な蔓をもつ唐草文である。

SK322 長さ2.5m以上、幅1.1m、深さ1.1mのゴミ穴である。

SK324 長さ2.3m、深さ0.2mのスラッグを多く含む褐灰色粗粒砂を埋土とする。

SK326 長さ1.8m、幅1.0m、深さ0.4mの白色粘土を詰めた土壌である。

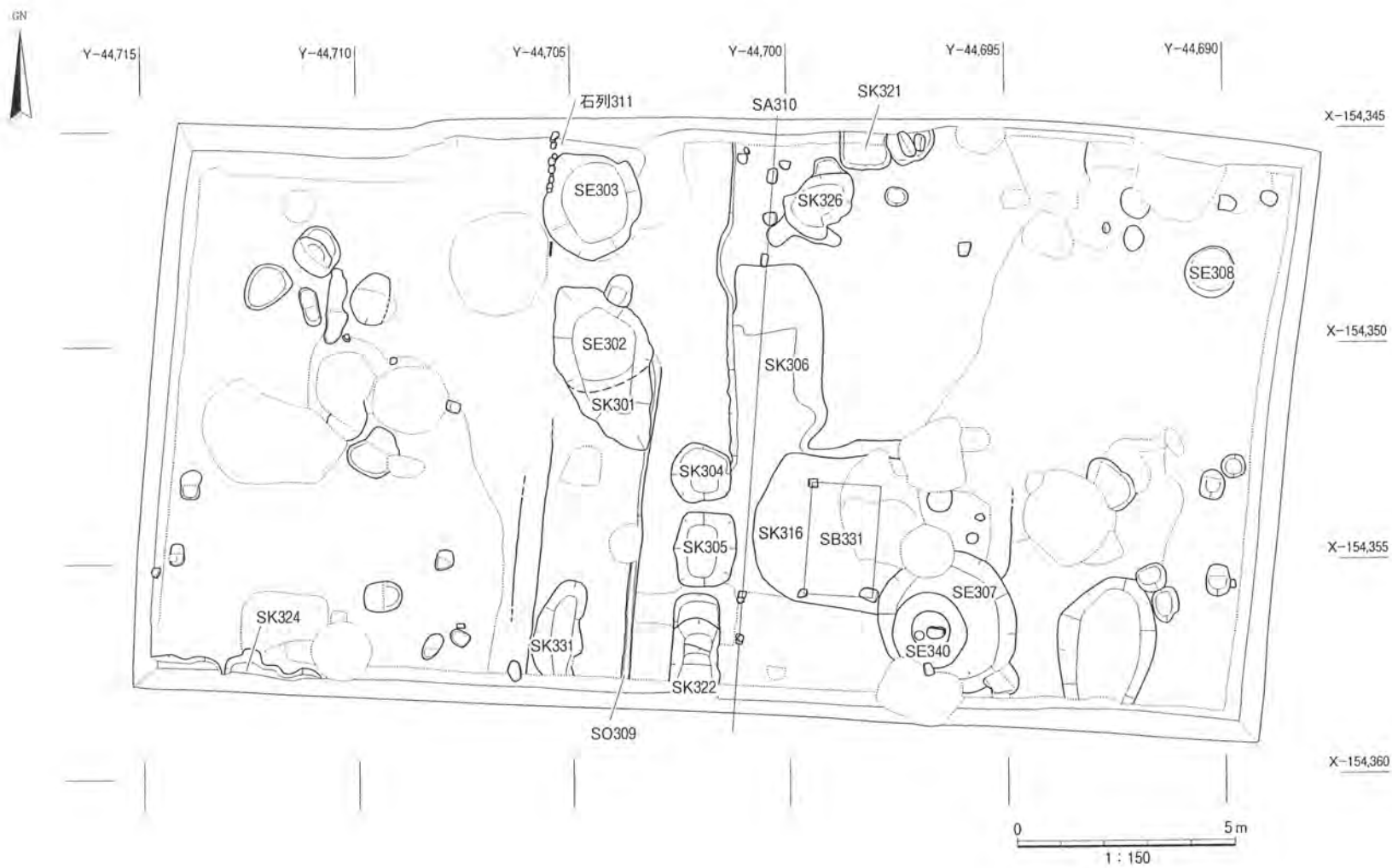


图9 第5a層上面平面图

SK331 長さ1.3m、幅0.7m、深さ0.6mのゴミ穴である。

SK341 南壁断面(図4参照)で確認した、SD309とSK322の下層にある1辺1.4m、深さ0.6mの、有機物を多く含む灰オリーブ色砂質シルトを埋土とするゴミ穴である。

d)第3層上面検出遺構

区画を示すと思われる遺構として南北溝と塙列がある。

SD108・109・165 東部に位置する幅0.2~1.0mの南北溝で、数度の切り合い関係をもつ。北で東に10度振る。

SD166 中央に位置する幅0.3~0.5mの南北溝で、北で東に7度振る。

SD211 中央に位置する幅0.2mの南北溝で、北で東に7度振る。

塙列251 1列のみ長さ8.0mにわたって検出された。北で東に8度振る。

SK201 SK03に切られる幅0.9m以上、深さ0.4mの土壌で、青花盞托51が見つかった。51は直径26cm、高さ3cmで4つの獣脚をもつ。陶胎で盤上面に漢字を配し、重ね焼の痕跡が漢字にもかかっている。

井戸 SE221・276がある。

SK202 長さ1.2m、幅0.7m、深さ0.3mの灰褐色粗粒砂を埋土とする土壌で、瀬戸美濃焼碗54と左巻き三巴文軒丸瓦59が出土した。54は釉をかけ分けた曆手茶碗で、59は巴尾が短く次の巴と大きく離れ、復元珠文数は12個である。

SK206 直径1.5m、深さ0.7mの有機物・焼土を含む灰色粗粒砂を埋土とするゴミ穴で、中国製色絵碗47・48、瀬戸美濃焼陶器碗52が出土した。47は端反りの青花碗の内面に上絵付けし、48は灰釉を施した陶胎の内面に上絵付けしている。52は口縁部に褐色の口紅、内外面に青色と褐色のタテ線を交互に描く。

SK207 SK213と切り合い関係をもつゴミ穴で、長さ2.5m、幅1.5m、深さ1.0mを測り、焼土を含む灰褐色粗粒砂を埋土とする。肥前陶器碗53が見つかった。53は外面にヨコ方向の刷毛目、内面にタテ方向の刷毛目を描き、見込みの二重圏線の内側に7個の印花文を押す。高台側面から畳付けにかけて4つの胎土目痕がある。

SK208 直径0.8m、深さ0.3mの淡灰色シルトを埋土とする土壌で、土師器羽釜57が見つかった。57は胴部上半に「三吉」と墨書する。

SK214 塙列251を切る土壌で、長径1.9m、短径1.6mの楕円形を呈し、深さ0.4mを測る。埋土は灰黄色中粒砂で、青花大皿50が出土した。50は芙蓉手の花卉内に片足を上げた人物を描く。

SK215 長さ1.5m、幅1.0mの長方形を呈し、深さ1.1mを測る土壌で、左巻き三巴文軒丸瓦62が見つかった。62は直径16cmを測る大形で、巴尾が長く半周以上し、次の巴と接する。珠文数は17個を数える。

SK227 直径2.1m、深さ1.3mの灰色細粒砂を埋土とするゴミ穴で、左巻き三巴文軒丸瓦63が出土した。63は巴尾が短く次の巴とは接しない。復元珠文数は15個である。

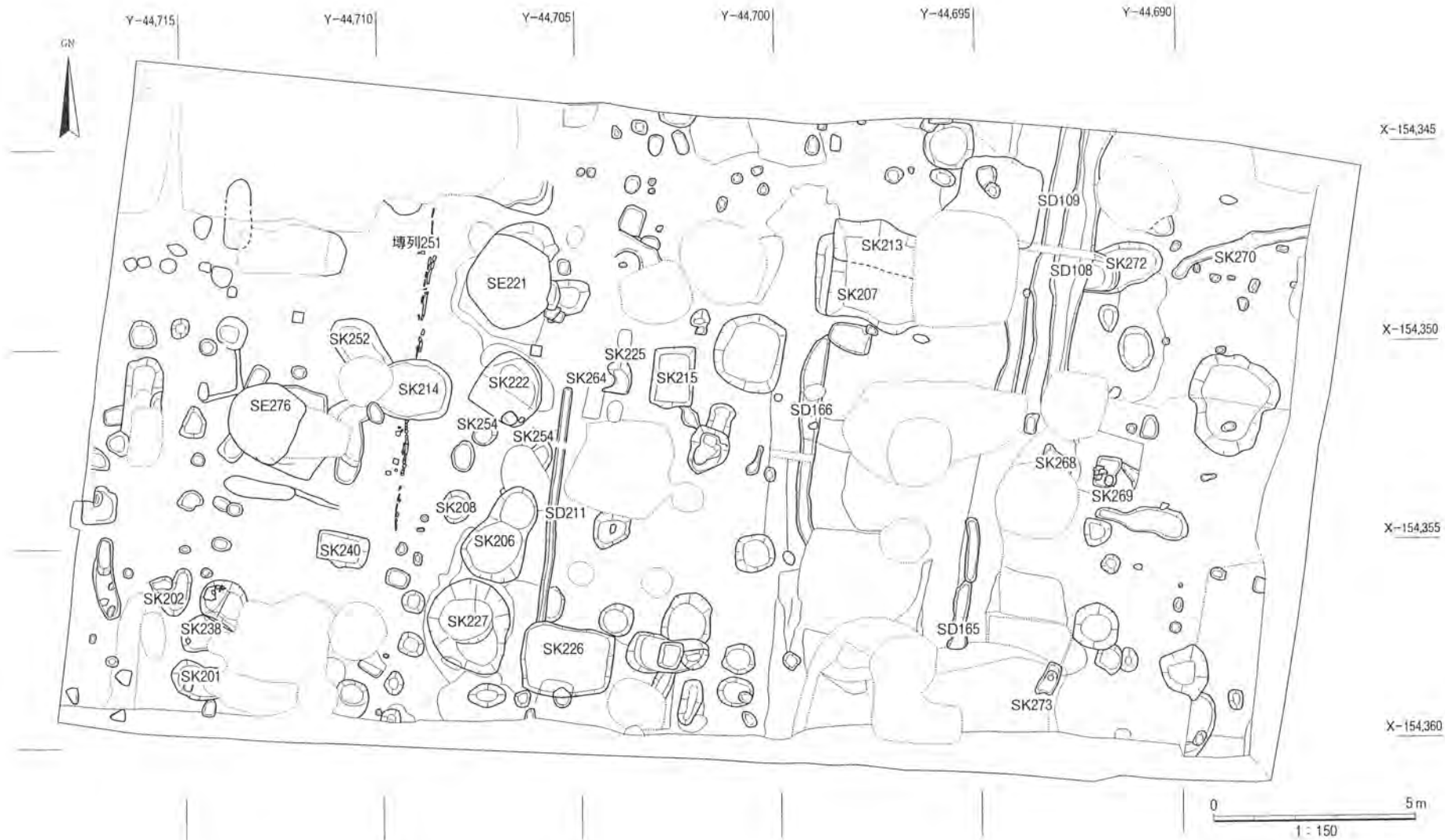


図10 第3層上面平面図

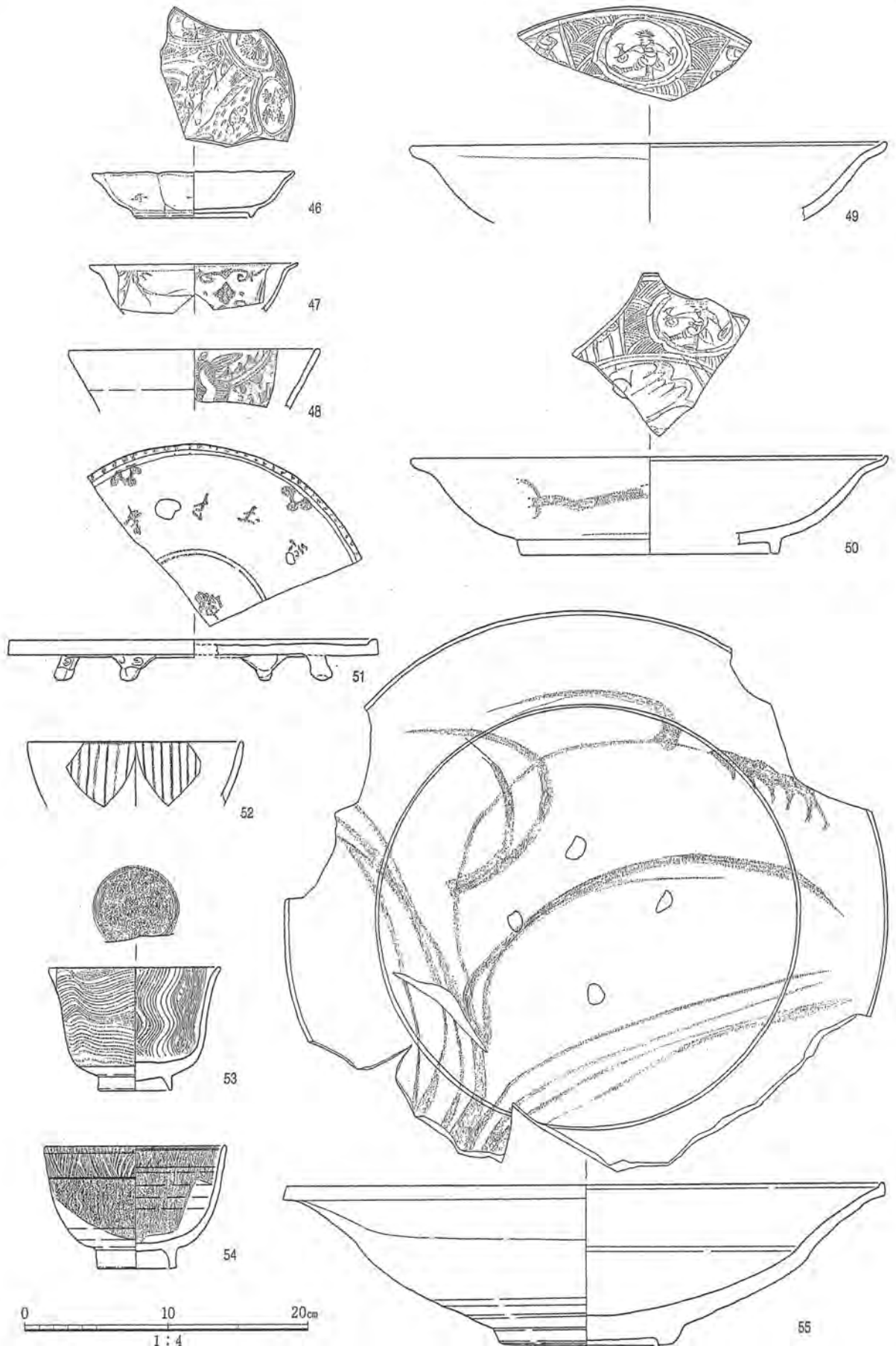


图11 出土遺物(3)

SK112(46)、SK206(47·48·52)、SK252(49)、SK214(50)、SK201(51)、SK207(53)、SK202(54)、SK238(55)

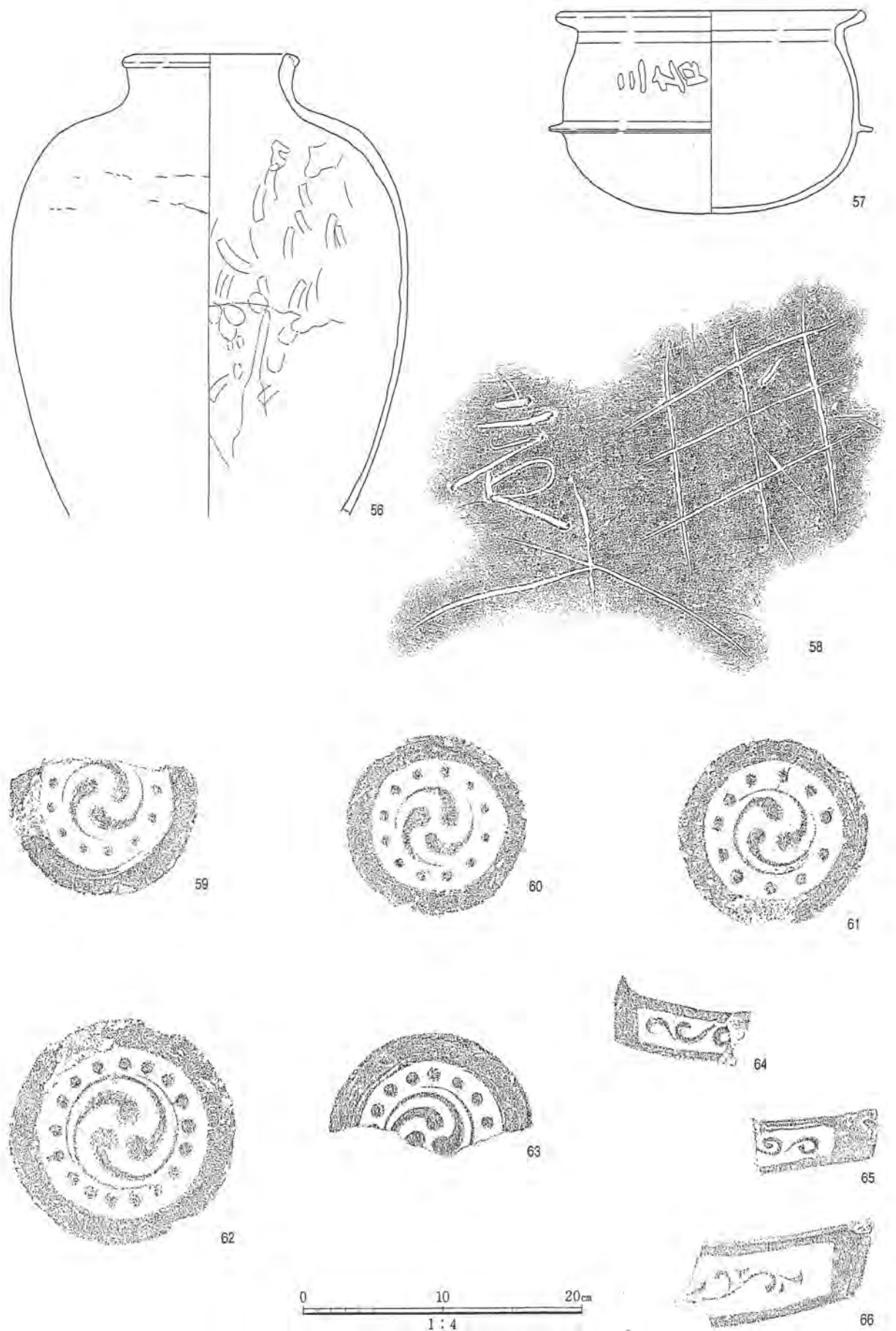


圖12 出土遺物(4)

SK240(56)、SK208(57)、SK271(58)、SK202(59)、第2層(60)、SK254(61)、SK215(62)、SK227(63)、第3層(64)、
試掘城01(65)、SK120(66)

SK238 直径1.2m、深さ0.3mの淡灰色砂質シルトを埋土とする土壌で、肥前陶器大皿55が見つかった。55は、直径42.5cm、高さ11cmで、内面全体に薄文を描く。見込みに胎土目痕4つを有す。

SK240 長さ1.3m、幅0.9mの長方形で、深さ0.4mを測る。肥前陶器甕56が出土した。56は内面に当て具痕があり、やや器壁が厚い。褐色釉は内面上半までかかる。朝鮮甕器に似るが、朝鮮にはない器形である。

SK252 SK214に切られる土壌で、長径1.5m、短径1.0mの楕円形を呈し、深さ0.4mを測る。青花大皿49が出土した。49は芙蓉手で、50とは別個体であるが同巧の絵付けで、50ともども数枚セットで所蔵されていたと考えられる。

SK254 直径0.6m、深さ0.3mの土壌で、左巻き三巴文軒丸瓦61が出土した。61は巴尾が長く次の巴と接するものもあるが、巴尾が珠文の方に流れて接しないものもある。珠文数は11個で、范キズがめだつ。

SK271 一辺2.0m、深さ1.1mのゴミ穴で、備前焼甕58が出土した。58は斜格子状のカマ記号と「二石入」をヘラ書きする。

e)第2層上面検出遺構

穴蔵01 第0層中途から掘込まれ、東西5.2m、南北4.3mの掘形を掘り、石垣で内面を化粧している。北側中央に出口の階段があり、右に折れてSK11の方に上がっていく。

穴蔵44 東西2.5m、南北3.5mの以上の素掘りの穴蔵で、床に敷石をもつ。焼瓦で埋められた。

SB101 塙列建物で東西4.5m、南北5.0m以上で、北壁から南に1.5mで間仕切りの塙列が東西に入っている。

井戸 SE17とSE54は第2次大戦で被災した井戸である。SE07・13・14・58・77・123は江戸時代の井戸である。

ゴミ穴 SK02・06は有機物や漆喰を含む土で埋めたゴミ穴である。

SK112 長さ2.0m、幅1.0m、深さ0.3mの灰黄色粗粒砂を埋土とする土壌で、青花輪花皿46が出土した。46は八弁の芙蓉手で、景德鎮産である。

SK120 長さ0.5m、幅0.4m、深さ0.3mの土壌で、唐草文軒平瓦66が見つかった。66は2転する唐草と飛び唐草、その間に子葉2つを配している。中心飾は萼をもつ三葉と見られる。

SK03・08 床面に緑青の粉が分布する土壌である。

SK104 一辺2.0mの方形で、深さ0.3mを測る土壌である。焼土が詰まっていた。

SX36 北にカマドの壁をもち、T字状に切石を置いた商工業者のカマドで、焼土が詰まっていた。

SX141 床に3枚の湾曲をもつ分厚い塙を敷いたカマドである。

瓦溜 SK18・34・39・42・45・47・49・72・111は廃瓦が詰まっていた。

試掘壙1 南東の試掘壙の埋土から、唐草文軒平瓦65が出土した。65は蔓が短く巻きが強い唐草が2転以上する。

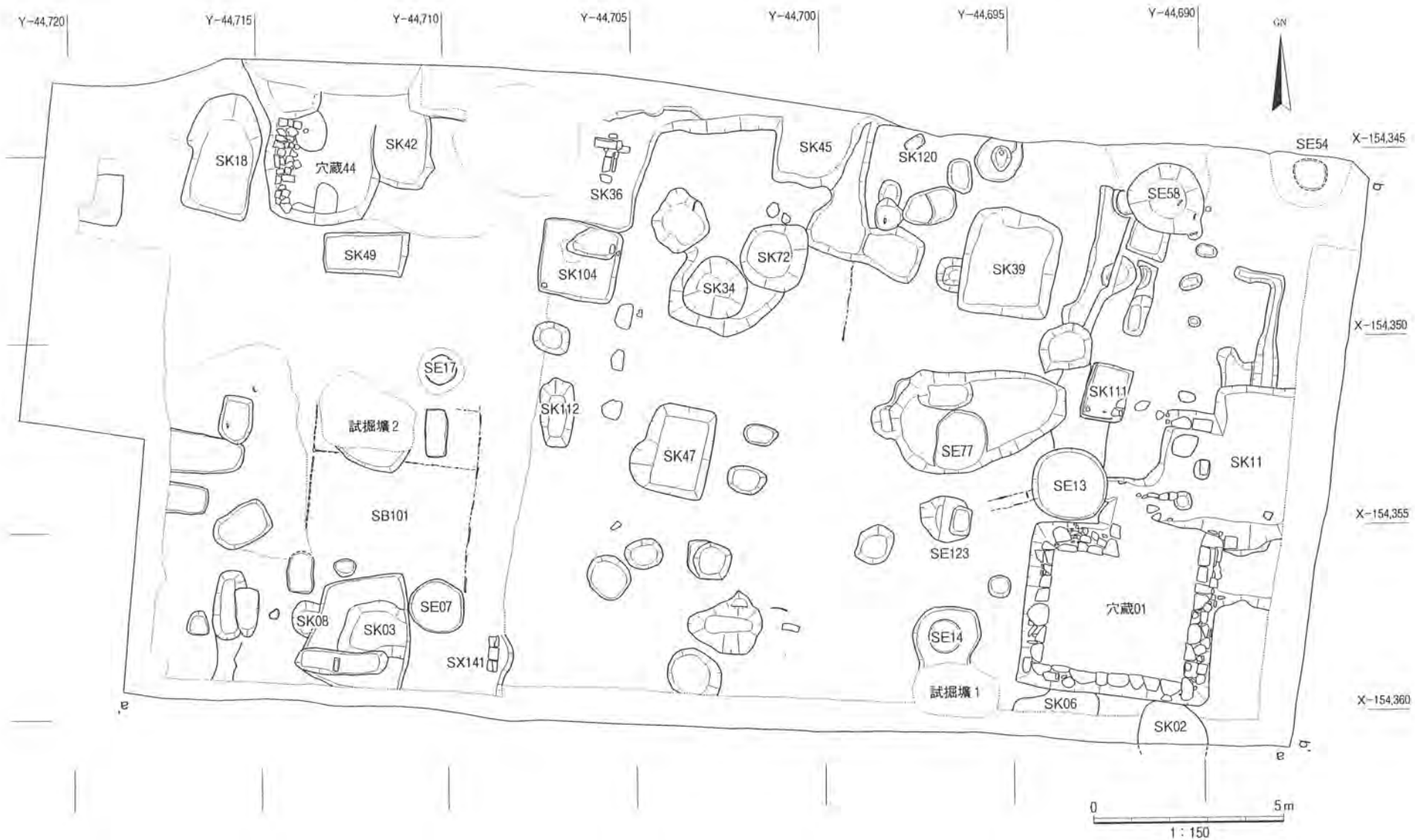


图13 第2層上面平面图

iii) 各層出土の遺物(図3・4)

第2層：左巻き三巴文軒丸瓦60は巴尾が短く次の巴とは接しない。珠文数は12個である。豊臣後期の瓦である。

第3層：唐草文軒平瓦39は[大阪市文化財協会1992、3918番]と同範である。64は唐草が3転以上する。左側縁に高さ1cmの水返しの縦棧が付くことから、隅唐草瓦の可能性がある。豊臣前期の瓦である。

第4層：唐草文軒平瓦40・41は、39と同範である。

第5a層：左巻き三巴文軒丸瓦26は半周以上する長い巴尾が次の巴胴に接する。珠文数は20個を数える。唐草文軒平瓦42は、39・40・41と同範である。豊臣前期にこの文様の軒瓦を採用し、大坂町中屋敷替え(1598年)に撤去された建物があったと考えられる。

第5b層：唐草文軒平瓦45は、C字対向の中心飾で唐草は1転である。

第6層：瓦器椀3・4は内面に圏線状に暗文を巡らせるが、高台はない。尾上編年のIV2～3期に当り、森島編年の13世紀第3～4四半期と考えられる。備前焼鉢12、常滑焼壺13が出土した。常滑焼は13世紀後半に位置付けられる。

3) 遺構・遺物の検討

SK406からは室町時代の鬼瓦・軒瓦など、寺院に伴う遺物が多く出土した。この地は明応2(1493)年、興福寺門跡尋尊が描いた「御陣図」で、天王寺から北上する道と淀川との接点に、「ワタナへ」「浄土堂」と表記されたところである。本報告遺物番号21の梵字文軒平瓦も含まれるから浄土堂との関連性が推測される。SK406も15世紀後半に埋没すると見られ、周辺の同瓦を含む土壌や溝がやはり15世紀後半に埋められていることと軌を一にする[宮本佐知子1991、大阪市文化財協会2003]ことから、当期が浄土堂の衰亡期の可能性が考えられる。

当地は上町台地の北端西側に当り、中世に淀川(現、大川)に面した渡辺津があったと考えられる地域である。渡辺は熊野街道の起点として、京都から和泉・紀伊方面への交通の要衝であると同時に、瀬戸内航路を運ばれてきた荷物がここで淀川をさかのぼる舟に積みかえられる中継地点であった。しかし、本願寺関係者の日記である『天文日記』『私心記』には、渡辺・浄土堂という地名が見えず、変わって「上手堂」が見える。天文16(1547)年9月、証如が「上手堂之下河」停泊の唐船を見物後に、天満社に参詣していることから、大坂→上手堂→天満の位置関係が確認され、ジョウズドゥとジョウドドゥという音の親近感より、上手堂は浄土堂の訛りの可能性が高い。当時の本願寺僧侶は当地を、「渡辺」と呼ばずに「上手堂」と呼んでいたのである[仁木宏1998]。浄土堂は16世紀中葉、仏家の僧侶たちにすら、当初の寺名を忘れられていたことから、すでに廃絶していた可能性が高い。

いうまでもなく浄土堂は13世紀初め、俊乗坊重源が建立するが、興福寺大乘院門跡尋尊の日記の『大乘院寺社雑事記』延徳元(1489)年条に、京都から船で「渡那部」に着いて、「浄土堂」に詣でたとあるから、その頃には存在していたと考えられる。浄土堂の位置については、今後の調査でより確実になっていくだろう。

また、調査地西端で、第5c層で埋没する埋甕群401を検出した。甕底などは撤去されていたが、豊臣期以前の室町時代後期の遺構の可能性が高い。

豊臣前期の遺構として溝や堀、石列などが3面において確認された。下の2面の東西溝、南北溝は検出が数m分にしか過ぎず正確なことはいえないが、従来の調査結果から「東で南に7度振る」[大阪市文化財協会2003]に近い数値を得ている。一番上の面であるSD309・SA310・石列311も北で東に3～5度であるから許容範囲といえるかもしれない。町屋を画する地割があったことは間違いなからう。遺物としてSK321・370が別の遺構面の瓦溜でありながら、同範瓦を出すことは注意される。豊臣前期において、統一された文様の軒瓦が葺れていた可能性が高い。

大坂町中屋敷替え(1598年)時の盛土は、層厚1.5mにも達する。また夏の陣の焼土層が検出されなかったことから、当地は江戸時代前期に削平され、被災面は消滅したと見られる。豊臣後期に相当する井戸やゴミ穴など深い遺構は存在するが、溝・礎石建物などは見られない。

4)まとめ

今回の調査で平安時代の曲物を使った井戸2基と鎌倉時代の包含層、室町時代後期の遺構・遺物を検出した。豊臣期においては前期の面を3面確認し、井戸・ゴミ穴とともに敷地境となる溝や堀・石列が見つかり、当地における城下町の状況がわかる貴重な材料を得た。後期の夏の陣の遺構面は残念ながら後世に削平を受けて消滅していたが、井戸やゴミ穴から貴重な遺物を得ることができた。

当地は大川と熊野街道が接する要衝の地であるとともに、中央貴族の信仰の対象にもなった俊乗坊重源創建の浄土堂の位置した場所でもある。今回もその片鱗を垣間見るとともに、周辺のさらなる調査でより位置を限定していきたいと思う。

参考文献

- 大阪市文化財協会1992、『難波宮址の研究』第九
大阪市文化財協会1999、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1997年度-』
大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ
大阪府文化財センター2006、『大坂城址』Ⅲ
尾上実1983、『南河内の瓦器椀』；藤澤一夫先生古稀記念『古文化論叢』、PP.689-705.
小森俊寛2005、『京から出土する土器の編年的研究』、京都編集工房
仁木宏1998、『大坂石山寺内町の空間構造』；『寺内町の研究』第2巻、法蔵館、PP.269-301(初出は『古代・中世の政治と文化』、思文閣出版、1994年)
宮本佐知子1991、『梵字瓦からみた中世の大坂』；大阪市文化財協会編『葦火』35号、PP.4-5.
森島康雄1992、『畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代』；大和古中近研究会編『大和の中世土器』Ⅱ、PP.113-127.
山崎信二2000、『中世瓦の研究』、奈良国立文化財研究所学報第59冊

第7層上面全景(南から)



SK406上に打込まれた
土留402(西から)



SE601・602(東から)



第7層上面全景(西から)



東壁断面(第1～4層)



第5c層上面検出のSD359
(左側：東から)



第5b層上面全景(南から)



第5a層上面全景(南から)



SE308(南から)



第3層上面全景(南から)



第2層上面全景(東から)



穴蔵01(西から)



内本町2丁目における大坂城跡発掘調査(OS08-3)報告書

調査個所 大阪市中央区内本町2丁目9
調査面積 140㎡
調査期間 平成20年5月26日～6月10日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、市川 創

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城跡の西南部に位置し、近隣では多くの調査が行われている(図1)。当該地域は豊臣期大坂城惣構の西辺に位置し、OS89-41次調査では南北方向(N1°W)に延びる豊臣期の石垣が、調査地東方のOS92-22次・95-26次・00-32次・89-19次ではおおよそ東西方向の石垣が検出されている。また石垣の方向が直線とならず、かつ方位に則っていないことから、現在の本町通下部に埋没谷が存在し、石垣の方位はその地形に規制されたものと推定されている[大阪市文化財協会2003]。

今回の調査地では、事前に大阪市教育委員会によって敷地内の南北2箇所を試掘調査が行われた。その結果、北側の試掘調査では現地表下約1.9mにおいて段丘構成層を、その上位には豊臣期以降の遺構及び遺物包含層を確認した。また南側の試掘調査では現地表下約2.8mにおいて石垣と思われる遺構を確認した。この結果を受け、工事が段丘構成層まで及ぶ調査区北半について発掘調査を実施することになった(図2)。

調査着手前に事業者側で擁壁工事及び現地表面から1.7mまで重機による掘削が行われたのち、2008年5月26日から調査を開始した。掘削は人力を主体とし、近代以降の遺構掘削にあたっては一部重機を使用した。その間、遺構検出・掘削・記録などの作業を適宜行い、調査を進めた。現場での作業については、6月10日に機材類の撤収を含むすべての工程を完了した。

以下、本報告で使用する標高はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中では「TP+〇m」と示す。示北記号は図1・2が座標北、それ以外は磁北である。

2) 調査の結果

i) 層序

先述のように調査着手時にはすでに現地表下約1.7mまでの地層が除去されていたが、調査区の多く

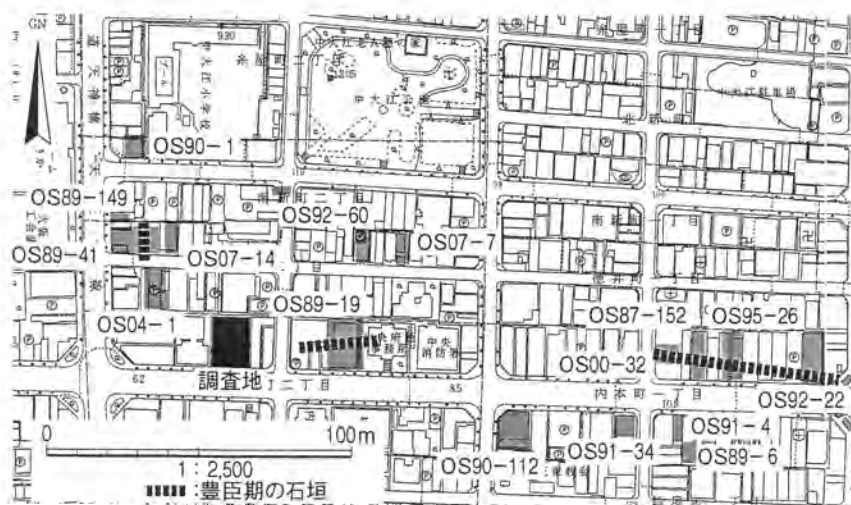


図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

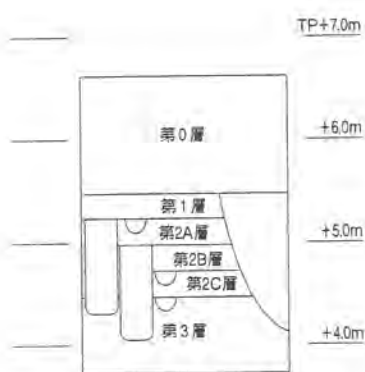


図3 地層と遺構の関係

の部分でこの深度を大きく越えて段丘構成層まで近・現代の遺構・攪乱が及んでいた。そのため以下では、断片的に観察できた調査区の南壁面の地層、および残存状況が比較的良好であった調査区北部の地層を併せ、各層の特徴について述べる(図3・4)。

第0層：現代の整地層で、層厚は最大で150cmある。

第1層：近代の整地層で、主として調査区東半に分布する。層厚は100cm以上ある。上面では焼土整理の土壙SK11~14を検出した。

重機掘削後の清掃中に、パイゴマを模したとみられる円錐状の土製品6が出土している。大阪市内ではこれまで菟田4丁目所在遺跡で出土例がある[小田木富慈美・池田研2007、大阪市文化財協会2008]。

第2層：近世の整地層である。地層の残存が比較的良好であった調査区北西部では、第2A~2C層に分層することができた。第2A~2C層はいずれも、調査区北部ほど厚く堆積していた。

第2A層は層厚15cm以上であり、黄褐色シルト質砂からなる。肥前磁器2・3など17世紀後半の陶磁器類や寛永通宝5が出土し、上面では土壙SK2A01・02、井戸SE2A03~06などを検出した。第2B層は暗オリーブ色を呈するシルト質砂からなり、最大層厚は20cmであった。出土遺物は少ないが、上下の地層および上面に掘削された井戸SE2B01の出土遺物から判断して、17世紀前~中葉の整地層で

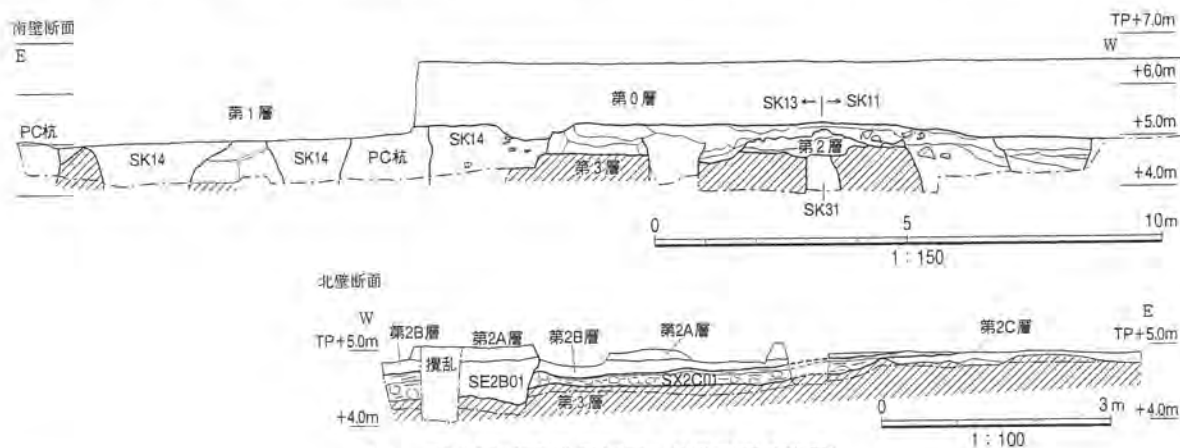


図4 調査区断面(北壁断面の位置は図6参照)

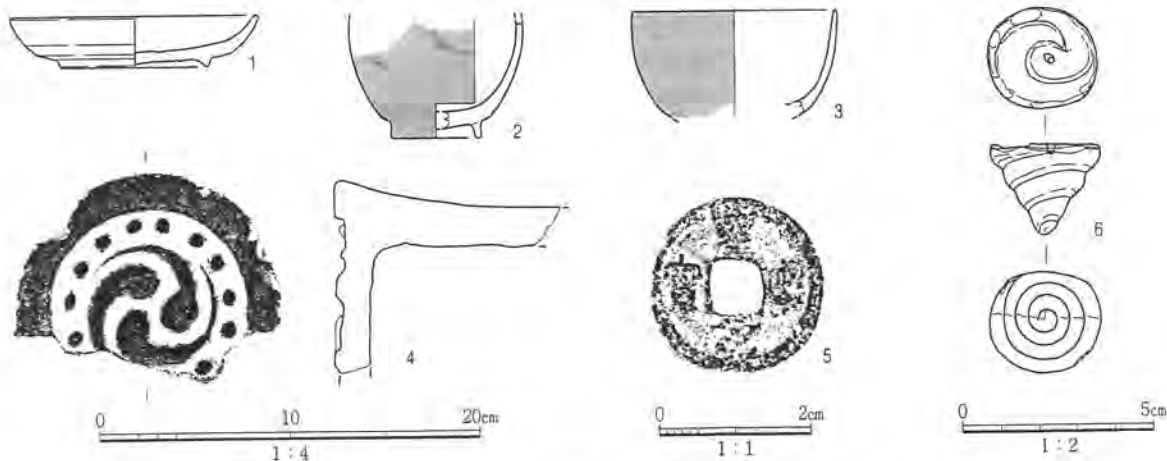


図5 各層出土遺物

第2C層(1・4)、第2A層(2・3・5)、重機掘削後清掃中(6)

ある。第2C層は最大で層厚14cmを測り、灰色を呈するシルト質細粒砂からなる。瀬戸美濃陶器1など、豊臣後期の遺物を包含する。上面で窪み状の遺構SX2C01・02、土壙SK2C03、溝SD2C04を検出した。

第3層：明褐色砂質シルトの段丘構成層で、上方細粒化している。調査区内では北へ向って下がっていたが、南側の試掘調査では地表下約320cmで本層を確認しており、本調査地内で150cmほどの比高がある。

ii) 遺構と遺物

重機掘削ののち、第2A層以下の各面において遺構検出を行った。

a. 第3層上面の遺構と遺物(図6)

上位の遺構による削平のため遺構の検出は調査区中央部に限定されるが、本来はより多くの遺構が存在していたと推測できる。土壙SK31～38のほか、柱穴SP39を検出した。時期決定可能な遺物は出土していないが、上層の時期から豊臣後期以前の遺構群である。なお、SK31は第3層の偽磔を多く含んだ他の遺構とは異なる埋土(暗灰黄色砂質シルト)を有しており、時期が異なる可能性がある。

b. 第2C層上面の遺構と遺物(図4・7・10)

浅い窪み状の遺構SX2C01・02、およびこの両遺構が埋没したのちに掘削された土壙SK2C03、溝状遺構SD2C04を検出した。

SX2C01は、南北2.80m以上、東西4.50m、検出面からの深さは0.25mを測る。下部には第3層の偽磔を含む砂質シルトが堆積し、上部には滞水性のシルトが堆積している(図4)。同遺構内では一辺30～50cmほどの石を6基検出した。また、埋没後には長さ2.30m、幅0.75mの土壙SK2C03が掘削され、拳大の石が多数投棄されていた。本遺構からは、肥前陶器7～9、土師器皿10・11、焼塩壺の蓋12、備前焼甕13などが出土している。

SX2C02は東西・南北とも2.10m以上で、検出面からの深さは0.28mを測る。埋没後には、東西の長さ2.70m以上、南北の幅0.90mを測る溝状の遺構SD2C04が掘削されていた。

第2C層上面で検出した各遺構からは肥前磁器が出土しておらず、これらの遺構の時期を豊臣後期に

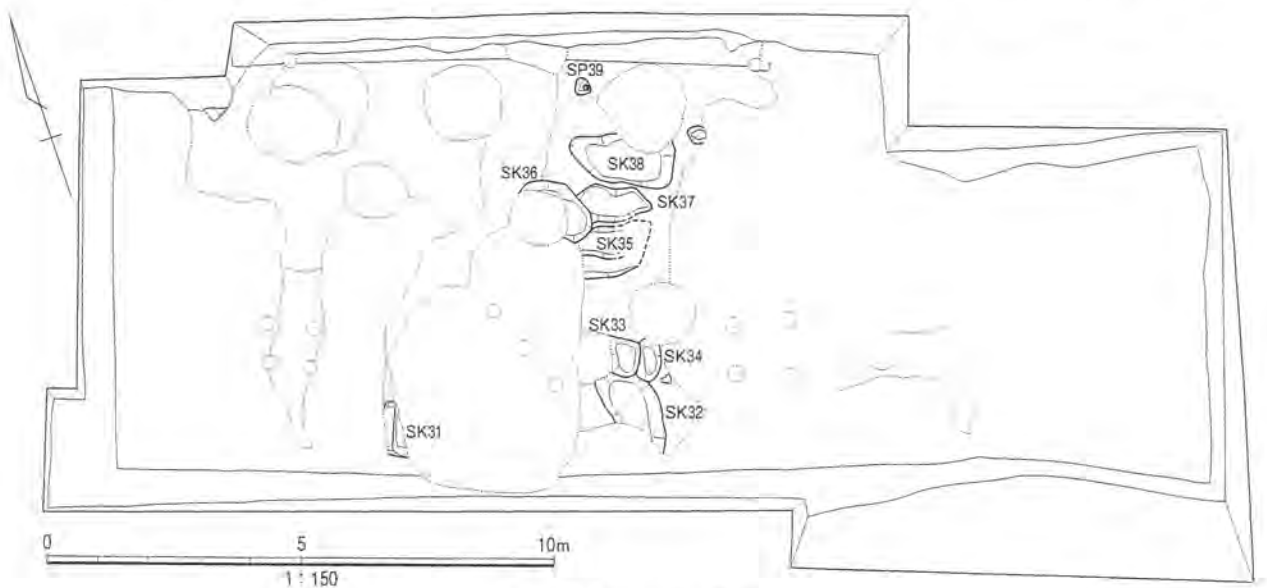


図6 第3層上面の遺構



図7 第2C層上面の遺構

比定できる。

c. 第2A・2B層上面の遺構と遺物(図8・9・10)

重機掘削後に第2A層上面で検出した遺構群、および第2A層を除去した後に第2B層上面において検出した遺構について一括して報告する。

土壌SK2A01は、東西0.26m以上、南北0.75mを測る。埋土は二分でき、いずれも人為的に埋戻されていた。本遺構からは、内面見込みに蛇の目釉剥ぎを有する肥前陶器皿25・火入れ26、土師器皿27、備前系の播鉢28、金属製毛抜29が出土した。17世紀後半代の遺物群である。また、調査区西北部で検出したSK2A02からは「五三の桐」を表現した金属製品30が出土している。飾金具と考えられる。

井戸は重機掘削後の段階でSE2A03～06の4基を、第2A層を除去した段階でSE2B01を検出した。このうちSE2A04・SE2B01は素掘りであり、その他のものは井戸枠が腐朽した痕跡を確認した。後者のSE2A03～06は直径1.20～1.90mを測る。深くまで掘削されており、重機によってT.P.+1.60m程度まで掘り下げたが、いずれの遺構も下限を確認することはできなかった。

これらの井戸のうち、SE2B01から肥前磁器碗14、肥前陶器碗15・皿16、土師器皿17、龍泉窯系の中国製青磁18、焼塩壺19、瓦質土器火入れ20、丹波焼播鉢21、軒丸瓦22が出土した。16・18については時期が遡るが、その他については17世紀中葉～後葉の遺物群である。SE2A03からは、肥前磁器碗23、軒丸瓦24などが出土している。

d. 第1層の遺構と遺物(図11)

重機掘削後の段階で、近代の大規模な焼土整理土壌SK11～14を検出した。これらの土壌によって、下位層は大きく削平を受けていた。また土壌中には一辺50cmほどの石が多数投棄されており、その中には宝篋印塔38が含まれていた(写真図版下段)。後述するガラス製容器37に1916年のエンボスが施されており、少なくともその年代以降の遺構群である。各土壌からは16世紀から近代に至る多量の遺物が出土した。以下ではそのうち特徴的なものについて記述する。

31はいわゆる「お日様マーク」をスタンプされたベトナム産の陶器皿である。灰白色を呈する胎土上に白化粧を施し、さらに施釉する。内面は蛇の目釉剥ぎし、外面下部は露胎である。18世紀を中心とした出土例がある。32は明代末の芙蓉手を模したとみられる肥前磁器鉢である。33は丹波焼の壺であ

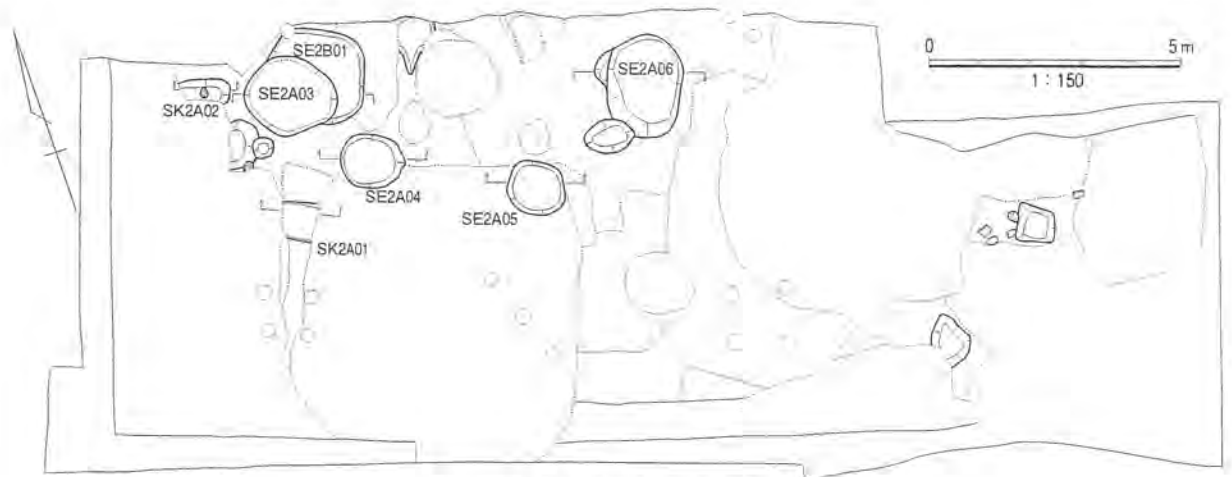


図8 第2A・2B層上面の遺構

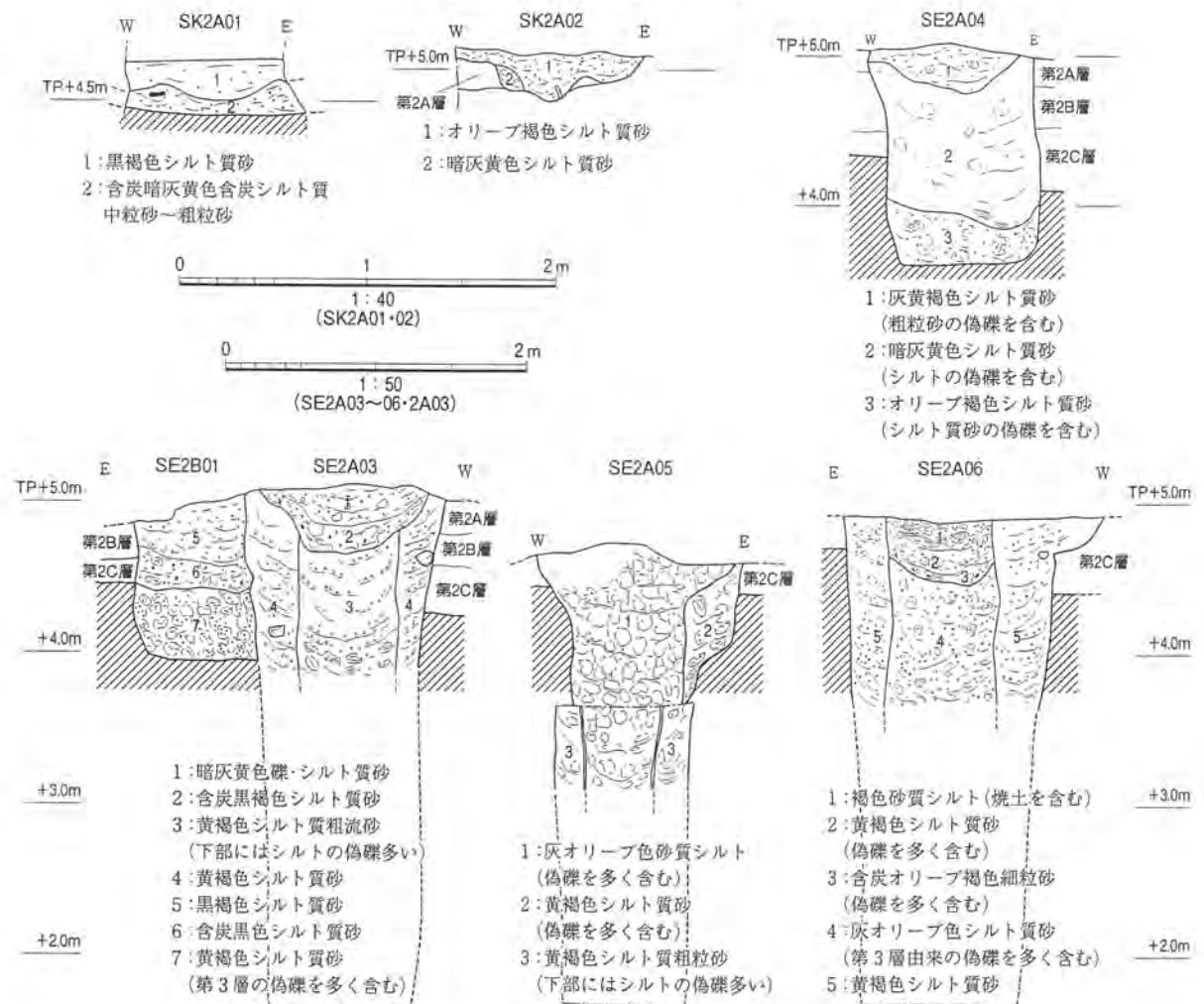


図9 各遺構断面

る。完形で出土した。鉄漿容器として使用されることのある器形である。34は内面底部に放射状の播目を有する明石産の播鉢である。鎌形軒棧瓦35には「堺北九」の刻印が施されている。瓦質に焼成された用途不明品36は、外面の全面に刺突を施し、内面は三つ葉状に凹ませている。内外面ともいねいな調整が施されている。また、中央部には直径1.5cmの孔が貫通している。白色を呈するガラス製の小瓶37は、内面に白色を呈するクリーム状の物質が残存している。化粧用クリームの容器であろう。

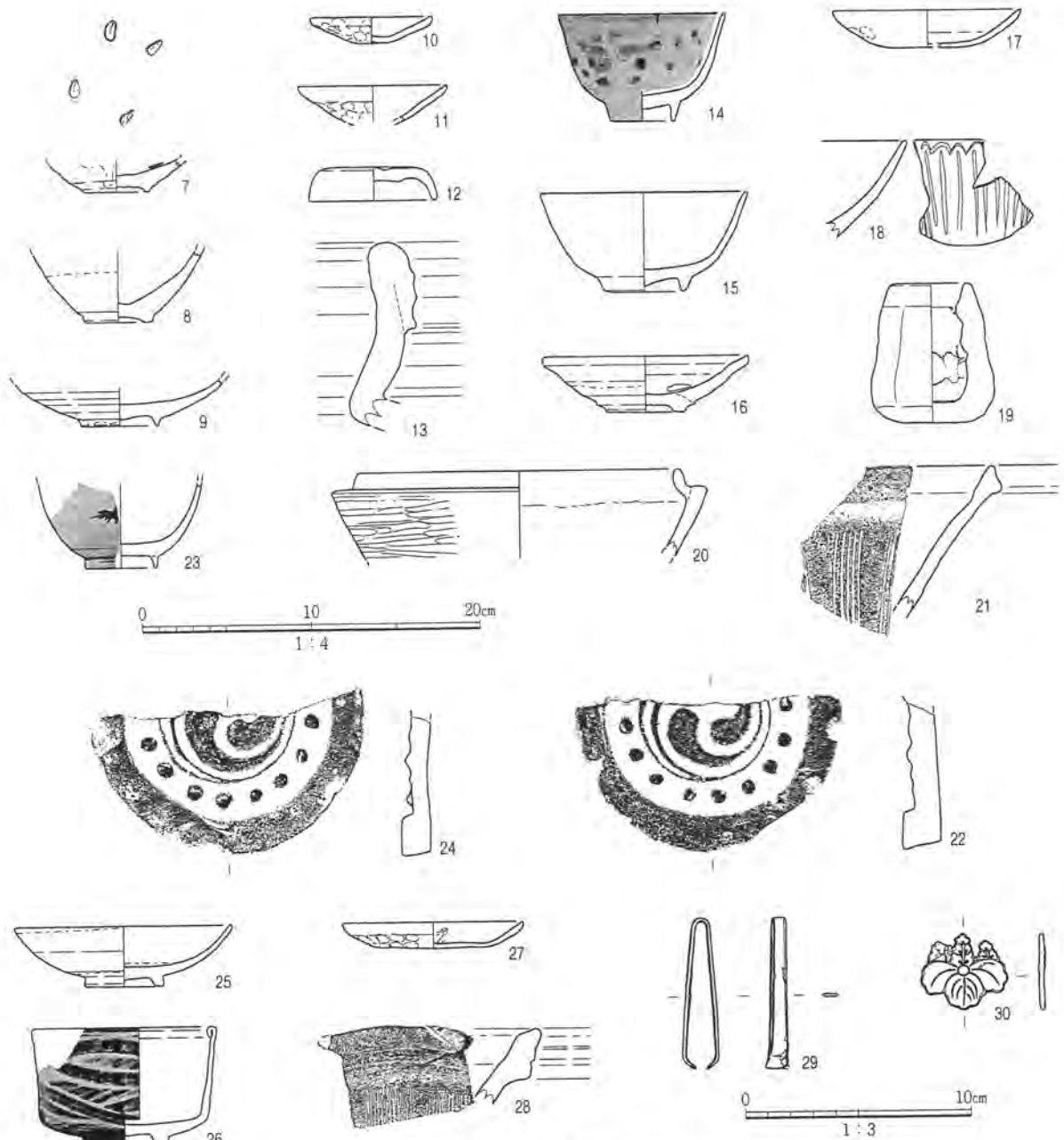
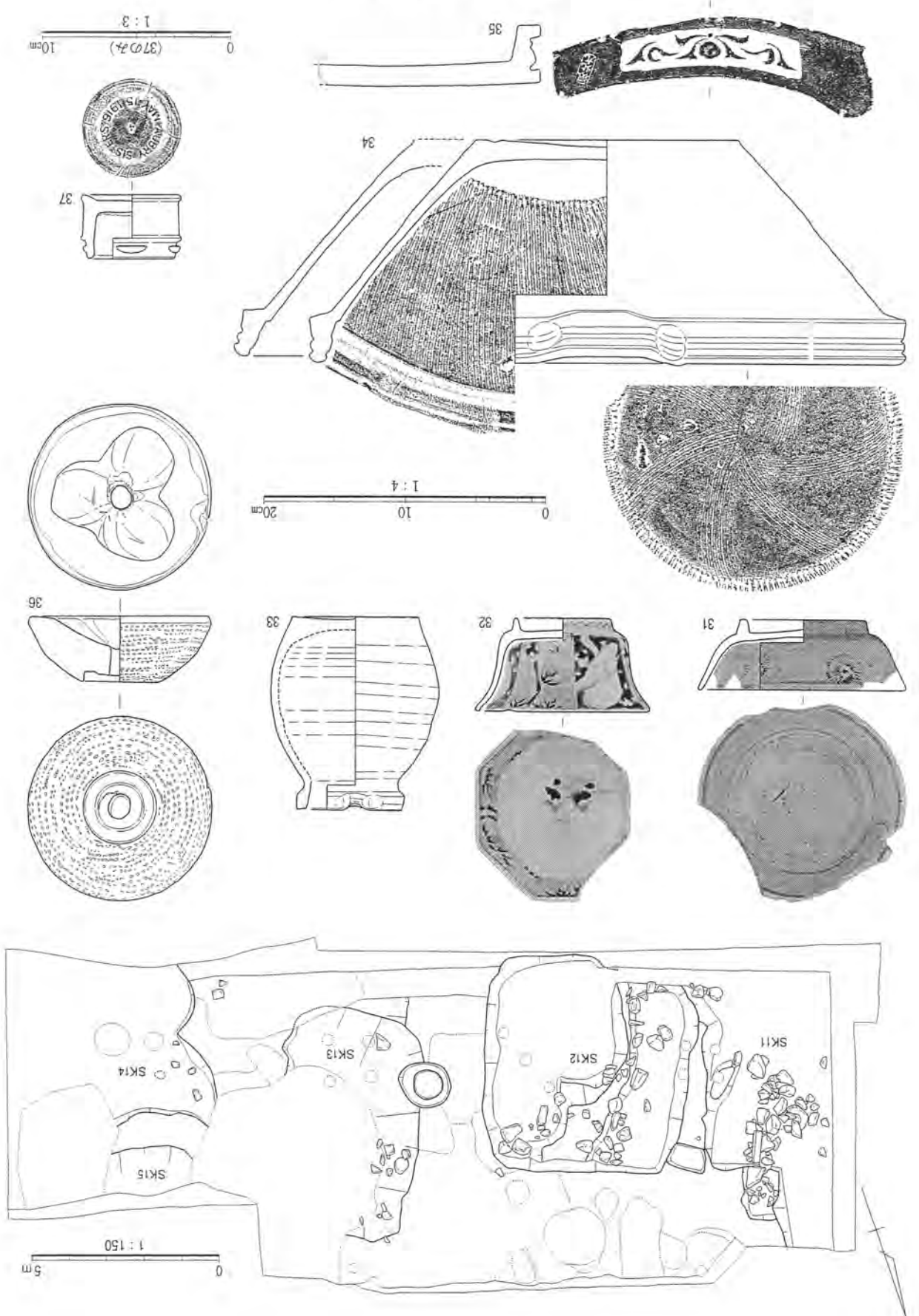


図10 各遺構出土遺物

SX2C01(7~13)、SE2B01(14~22)、SE2A03(23・24)、SK2A01(25~29)、SK2A02(30)

外面底部には「AUBRY SISTERS/MAY 15 1916」とエンボスが施されている。38は宝篋印塔基礎部分であり、一辺63.5cm、高さ44.8cmを測る大型の製品である。花崗岩製であり、ピンク色のカリ長石を含む。上面は反花座とし、残存する3つの側面のうちもっとも残存状況のよい面の格狭間には宝瓶三茎蓮を、他面には開蓮を表す。こうした文様には近江系宝篋印塔の特徴が認められる。また下面は直径40.0cm、深さ25.0cmの規模で石材を削り込んでいる。反花座が立体的であることや格狭間の形状から、14世紀後半に位置づけられる資料である(註1)。本業敷瓦39は一辺18.2cm、厚さ1.8cmを測り、上面はセメントを使用して煉瓦と接着している。本業敷瓦は明治30~40年代に多く使用されており、当初本業敷瓦を使用して床面を施工したのち、セメントが普及する大正期後半以降に煉瓦の壁を構築し、建物の増・改築が行われたものと考えられる(註2)。

図11 第1層の遺構と遺物



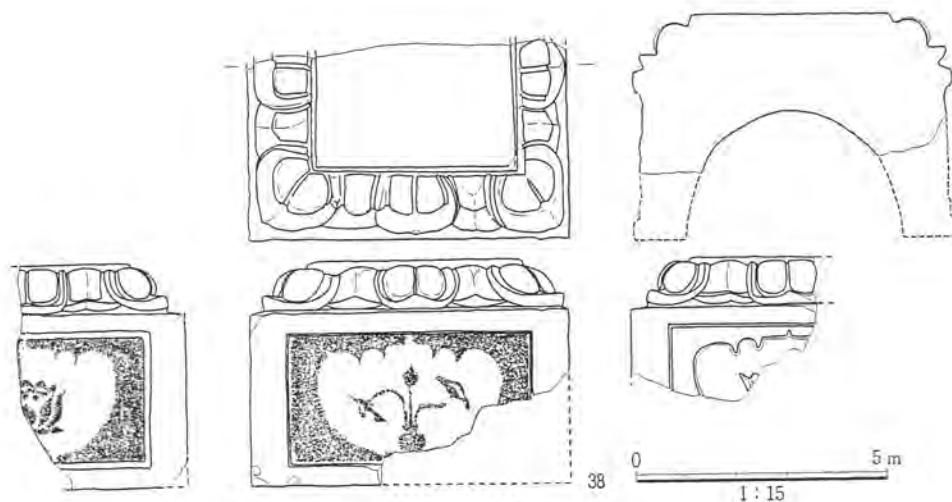


図12 SK11出土の宝篋印塔



写真1 SK14出土のタイル・煉瓦接着資料

3)まとめ

今回の調査では、近現代の攪乱が深く及んでいたとはいえ、周辺調査での成果に一定度の知見を加えることができた。

まず豊臣後期については、今回の調査では建物などが確認されず、敷地の奥にまで積極的な開発が及んでいなかったものと推測できる。また東側の複数の調査地で確認されている石垣については、試掘調査でその延長となる可能性のある遺構を確認できた。本調査と試掘調査の知見を併せると豊臣期

には調査地内で大きく高低差があったことが推測でき、該期には地形の制約を完全には克服できていなかったとする従来の知見を補強することとなる[大阪市文化財協会2003]。

また近代の土壌から出土した宝篋印塔は、断片的な資料とはいえ、不明な部分が多い中世大坂の墓制などについて考える素材を提供するものである。今後とも周辺調査における成果を積み重ねてゆくことが重要であろう。

註

- (1)本資料については、財団法人元興寺文化財研究所の狭川真一氏にご教示を賜った。また、石材の観察にあたっては文化財研究部学芸員小倉徹也の教示があった。
- (2)本資料については、大阪歴史博物館酒井一光氏にご教示を賜った。

引用・参考文献

- 大阪市文化財協会2003、「OS87-152次およびその周辺の調査」、『大坂城跡』Ⅶ、pp.243-262
- 大阪市文化財協会2008、『苅田北4丁目所在遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 小田木富慈美・池田研2007、「パーゴマのルーツ発見!」；大阪市文化財協会編『葦火』131号、pp.6-7

調査地全景
(東から)



第2C層の遺構
(西南西から)



宝篋院塔38出土状況
(南から)



中央区本町橋における
大坂城跡発掘調査(OS08-5)報告書

調査個所 大阪市中央区本町橋25-3・34-2
調査面積 150m²
調査期間 平成20年6月5日～20日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、大庭重信

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地西側縁辺の、豊臣期大坂城惣構内の西部に位置する。南隣は徳川期の西町奉行跡が存在した場所である。周辺で行われた調査でも、豊臣期や徳川期の遺構が検出されている[大阪市文化財協会2003](図1)。

大阪市教育委員会が行った試掘調査の結果、現地表下3.1~3.6mで豊臣前期およびそれ以前と考えられる遺物包含層が確認された。これを受けて、豊臣期における開発やそれ以前の土地利用の変遷を明らかにするため、調査を実施した。

敷地内南半の調査範囲は、事前に事業者により現地表下3.6mまでの地層が掘削・除去されており、その中に南北約19m、東西約8mの調査区を設定した(図2)。以下、本報告に掲載した図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP+○mと表記した。指北記号は図1が座標北で、それ以外が磁北である。

2) 調査の結果

i) 層序

現地表下3.0mから下の、TP+2.7~0.3mの間の地層を第0~10層に区分した(図3・4)。

第0層：灰色(7.5Y6/1)細粒~粗粒砂を主体とする整地層で、底付近に木片を多く含む有機物の薄層を挟む。第1層上面のSK01、SD09の上半を埋積する。東壁断面では10~20cmのみ残存するが、試掘調査では層厚が約140cm確認されている。慶長3(1598)年の三ノ丸造成に伴う整地層である。本層より上から掘込まれた近世の井戸を多数検出した。

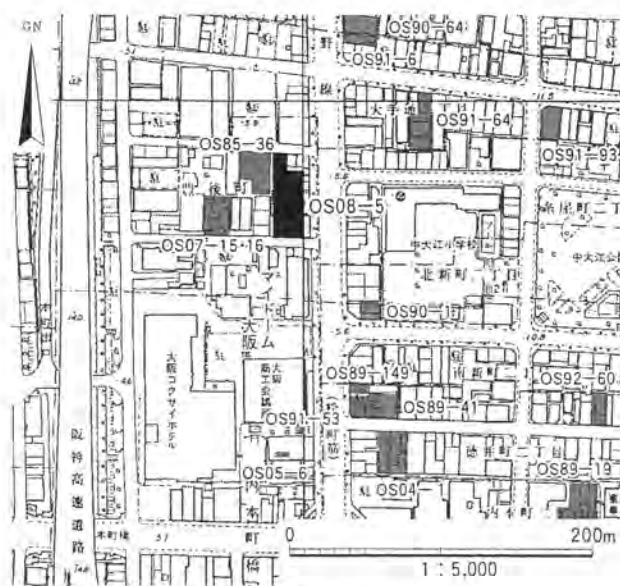


図1 調査地位置図

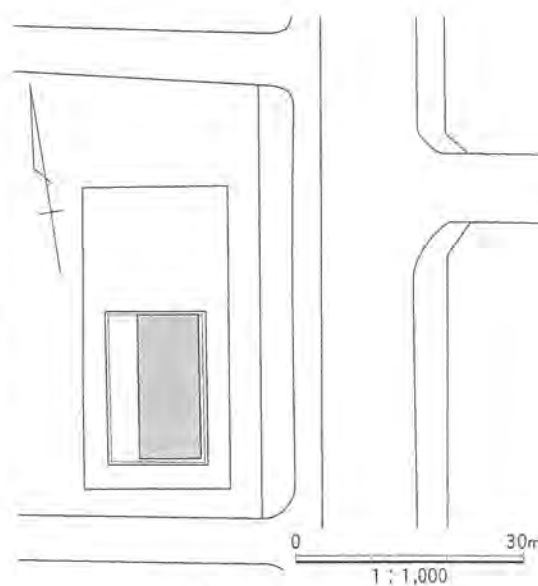


図2 調査区位置図

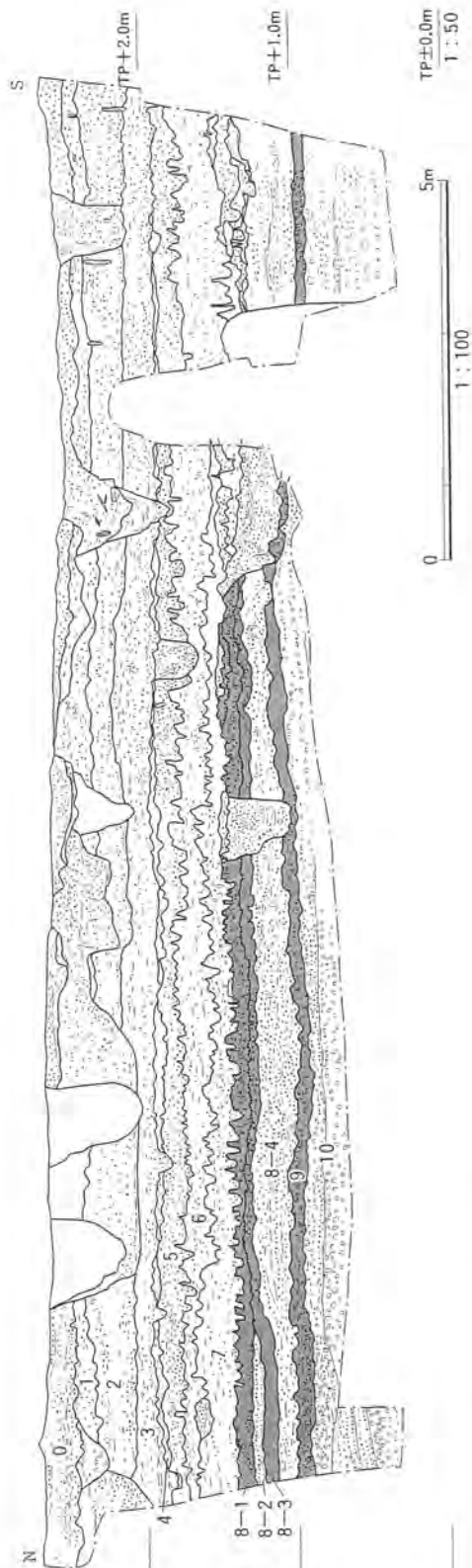


図4 東壁断面図

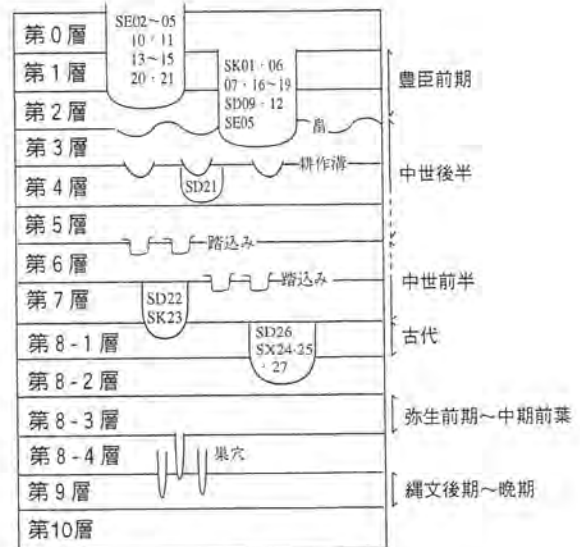


図3 地層と遺構の関係図

第1層：炭粒を含む灰色(7.5Y4/1)礫混りシルト質細粒砂からなり、やや暗色化している。層厚は10cm前後で、上面から溝・土壌などが掘込まれていた。豊臣前期の土師器・瀬戸美濃焼・備前焼や漆器・木製品などが出土した。

第2層：偽礫を含む灰色(5Y4/1)細粒～粗粒砂からなる整地層で、層厚は20cmある。

第3層：オリーブ黒色(7.5Y3/2)礫混りシルト質細粒～中粒砂からなる作土層で、下半には偽礫がめだつ。層厚は20cm前後あり、下面で耕作溝を検出した。平面的な調査は本層の下半から開始した。また、東壁断面の第3層上面で畝・畝間状の凹凸を確認している。中国青磁や瀬戸焼など中世後半の陶磁器が出土した。

第4層：オリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂質シルトからなる整地層で、層厚5cmと薄い。上下と明瞭に区別できるため別個の層番号を付けた。本層上面で溝を検出した。

第5層：偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒～粗粒砂からなる整地層で、層厚は10～20cmある。ウシなどによる踏込みにより、下面は凹凸が顕著である。中世の土師器・瓦器・陶器・瓦やウシ・ウマの骨が出土した。

第6層：オリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂混りシルト質粘土からなり、層厚は20～30cmある。排水不良の湿地的環境下で堆積したことを示す炭酸第一鉄のノジュールが点在する。本層内および上位層からの踏込みで著しく乱れる。中世の土師器・瓦・瓦器・陶器やウシ・ウマなどの骨が出土した。

第7層：オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト質細粒～中粒砂からなり、層厚は30cm以下である。下面

は踏込みによる凹凸が顕著である。古代に遡る土師器・須恵器・瓦とともに、13世紀前半の瓦器、ウシ・ウマ・シカなどの骨が出土した

第8層：第8-1～8-4層に区分した。

第8-1層は黒褐色(10YR2/2)礫質細粒～粗粒砂からなり、層厚は10cmある。古代の土師器・須恵器・瓦を多く含み、飛鳥・奈良時代のものが多い、平安時代の灰釉陶器が1点出土している。

第8-2層は灰白色(10YR7/1)細粒～粗粒砂からなり、ラミナが見られる。調査区北端で確認し、層厚は6cm未満である。

第8-3層は黒色(10YR1.7/1)細粒砂質シルトからなり、層厚は10cmある。弥生時代前期～中期前葉の土器が1点出土した。

第8-4層は褐灰色(10YR6/1)礫質細粒～中粒砂からなり、植物遺体の薄層を挟む。層厚は15～30cmある。本層を中心に、カニなど小動物の巣穴により、擾乱をひどく受けていた。

第9層：黒色(10YR2/1)シルト質細粒砂からなる湿地の泥質砂層で、生物擾乱が認められた。下半に下位層に由来する礫を多く含む。層厚は10cmある。調査区北部の約1/3の範囲で平面調査を行い、本層の下半を中心に縄文時代後期～晩期の土器が散在した状態で出土したほか、打製石鏃、カモ科の上腕骨、クロマツと思われる球果が出土した。

第10層：灰色(N6/)～暗黄褐色(10YR7/6)粗粒砂～礫からなり、ラミナが発達する。層厚は60cmまで確認し、下限は不明である。

以上をまとめると、縄文時代後期～中世前半までは湿地環境で砂泥層が堆積し(第6～9層)、第8-4層を前後する層準に特に生痕化石が顕著で、海水の影響を受けたことがわかるが、その後、徐々に淡水化したようである。中世後半頃には湿地が埋められ耕作地に利用され(第3～5層)、その後、豊臣前期の大坂城の造成が行われるようになる(第1・2層)。

ii) 遺構と出土遺物

a. 古代(図5)

第8-1層上面で溝1条のほか複数の落込みを検出した。

SD26は調査区中央で検出した東西方向の溝で、幅0.9m、深さ0.4mある。水成のシルト～粗粒砂で埋っており、上半は踏込みにより乱れていた。埋土から軒丸瓦65のほか、完形のウマの寛骨が出土した。後述するSX24に切られている。

65は複弁八弁蓮華文軒丸瓦である(図10)。中房部分が欠失するが、外縁を輪郭線で囲む。

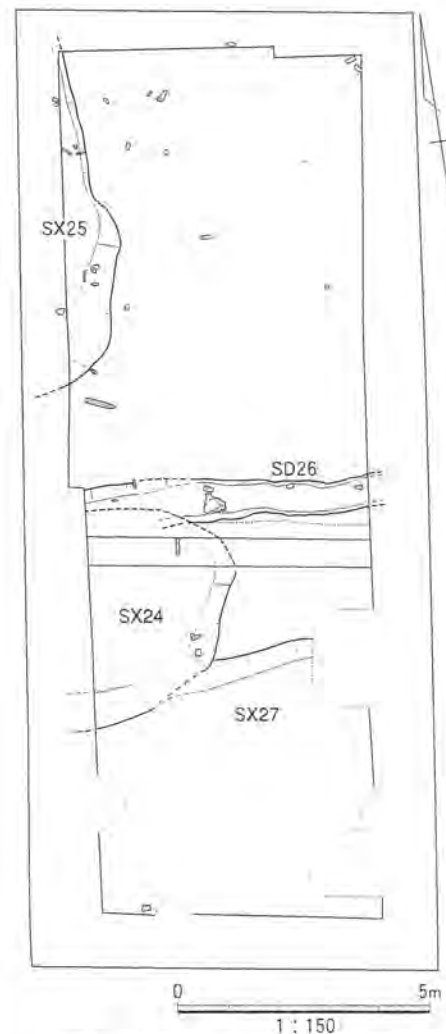


図5 第8-1層上面遺構平面図

SX27は調査区西半に分布する落込みで、東壁断面で確認した。調査区南西端がもっとも深くなる。ラミナが明瞭な砂やシルトで埋っており、水流によって抉られた跡と考えられる。また、調査区西端で落込みSX24・25を検出したが、人為的なものかどうかわからなかった。

b. 中世(図6・7)

第7層の上面、第4層の上面、第3層の下面で遺構を検出した。

第7層上面遺構はSD22・SK23がある(図6)。SD22は調査区の北東端で検出したやや北に振れる東西方向の溝である。幅0.4m、深さ0.1mと浅い。溝の下半が水成のシルト、上半が中粒～粗粒砂で埋っていた。一部を検出したのみで、自然の流痕の可能性もある。SK23は調査区南端で検出した土坑で、直径0.4m、深さ0.2mある。埋土は下位層に由来する偽礫が多く含まれる。

第4層上面遺構はSD21がある(図7)。調査区のほぼ中央で検出した東西方向の溝で、幅0.5m、深さ0.3mある。下半には水流があったことを示すシルト～中粒砂の薄層が堆積し、上半はシルト偽礫を多く含む中粒～粗粒砂で埋戻されていた。

第3層下面遺構は、調査区全域に分布する東西・南北方向の溝群がある(図7)。幅0.3～0.4m、検出面からの深さが0.1m前後で、南北方向の溝群が東西方向の溝群を切っている。調査区南側壁面で

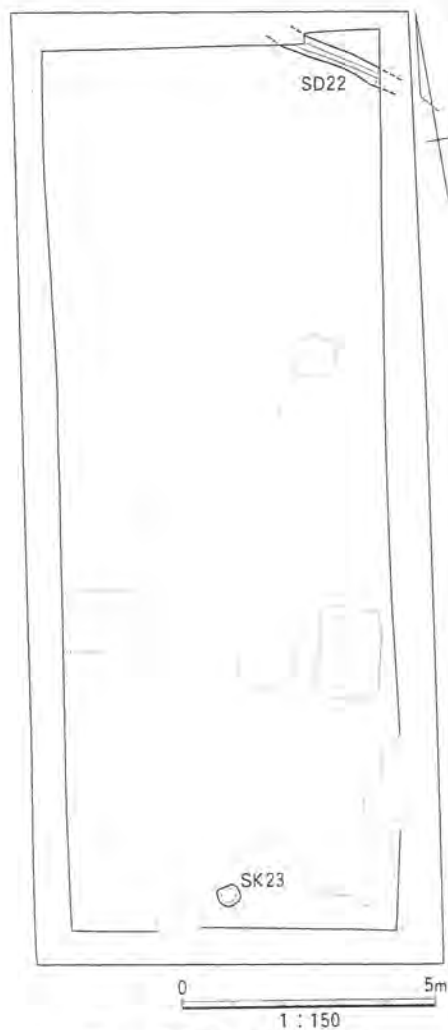


図6 第7層上面遺構平面図

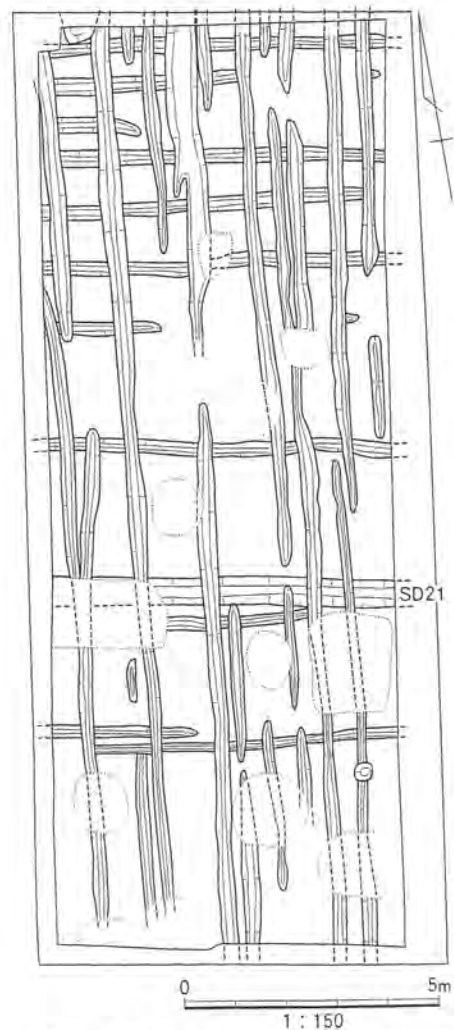


図7 第3層下面・4層上面遺構平面図

は、第3層上面に畝の畝・畝間とみられる約1.4m間隔で連続する凹凸が確認できる。凹部が溝の位置に対応することから、検出した溝群は畝畝間底の掘削痕であろう。一部の溝埋土中にはシルトの薄層が連続していた。

c. 近世(図8)

平面調査を開始した第3層の下半で遺構検出作業を行った結果、井戸・土壇・溝などを検出した。これらは出土遺物や埋土の特徴から、第1層上面から掘込まれた豊臣前期の遺構と、第0層の上から掘込まれた豊臣後期以降の遺構に分かれる(図8)。

豊臣前期の遺構は、SK01・06・07・16~19、SD09・12、SE05がある。

SK01は平面形が南北3.1m、東西1.2mの隅丸長方形の土壇である。検出面からの深さが0.8mあり、本来は1.2mほどあったと考えられる。埋土中に大量の木屑が含まれており、これらが複数回にわたって土壇内に投棄されていた。埋土をすべて持ち帰り水洗した結果、大量の木屑や桜皮、木製品をはじめ、土師器・陶磁器・動植物遺存体など、各種遺物を捕集した。このうち、土師器1~5、陶磁器6~10・13・14、漆器11・12、木製品15~39、石製品40・41を図化した(図9)。なお動物遺存体はiv)で報告する。

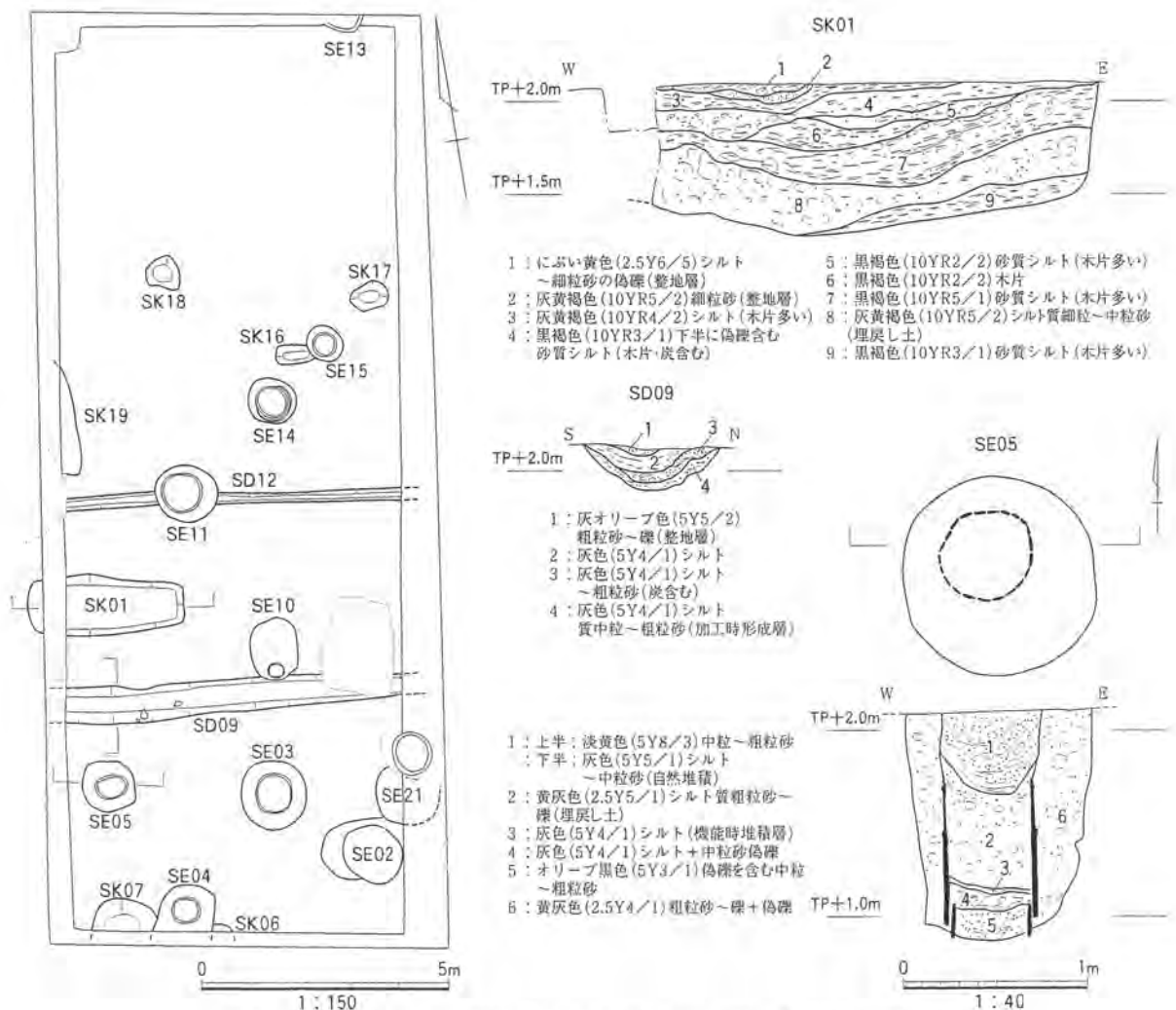


図8 第1層上面および第0層下面遺構平面図および、遺構平面・断面図

1～5は土師器皿である。1・2・4は口縁端部を中心に煤が付着しており、灯明皿に使用したとみられる。6～9は瀬戸美濃焼で、灰釉の皿6、鉄釉の皿7・小杯8・天目碗9がある。7は内底面に目跡が3箇所、外底面に輪状のトチン痕が付着している。10は中国製の青花皿である。13・14は備前焼で、13は壺か瓶の底部、14は鉢で、いずれも外底面に線刻がある。11・12は漆器椀である。塗色はともに内外面赤色で、外面に黒色で文様を描く。

木製品は未製品や製作に係わると思われるものを中心に図化した。これ以外にも大量の箸をはじめ、下駄・栓・桶・曲物底板・灯明台などの製品が出土している。15～17は上端を山形に加工し、その下に四角い孔を両面から雑に穿ったもので、樹種はスギである(注1)。16・17は孔の下端が鋸により切断されており、切断される前に孔が機能していたことがわかる。広島県草戸千軒町遺跡(鎌倉時代)で同じ形態・樹種のもものが報告されており、孔は木材の運搬用に穿ったもので、材の加工時に先端を不要なものとして切断した「鼻線」とされる[岩本芳幸1984]。15～17は幅4.8～6.5cm、厚さ2.0cm前後あり、草戸千軒町遺跡の例よりやや小ぶりであるが、同様の鼻線であろう。ほぼ同サイズのものが合計19点出土しており、この規格に合う木製品を当地で製作したと考えられる。その可能性があるものとして、桶の側板18・19を図化した。18が長さ13.0cm、幅5.2～5.9cm、厚さ0.8cm、19が長さ16.4cm、幅5.3～6.1cm、厚さ0.9cmで、18の樹種はスギである。19は内面下端に底板の圧痕、外面にタガの圧痕が見られ、上端面が内傾するように面取りされており、製品として使用されたことが明らかであるが、18にはこのような痕跡が見られず、また下端面がやや斜めに切断されている。内外面は鉋により整形され、側端面も処理されているが、製作途中で廃棄された可能性がある。

20～24はヘラである。20・21は刀状で、20は匙部分に黒色物質が付着する。22～24は板状で、上端に黒色物質が付着し、下端は先が細くなる。25はミニチュアの刀形、26は鐔、27は柄である。25は、刃部を中心に黒色塗料が残る。26・27は一連のものとみられ、柄側と鐔が合わさる部分には赤色顔料が塗布されている。27は表面に「廿一」の墨書が見られる。

28～35は木釘である。先端を斜めに切断した断面方形の28・29、断面多角形の30、先端を尖らせた断面方形の31・32、断面多角形の33・34があり、最大厚が0.5cm前後のものが多い。総数で500点以上出土した。基部には切断のための切込み痕が見られるものがある(29・31～34)。36・37は同様の切込み痕跡が両端にある棒状の木製品で、木釘を切り離した際の残材と思われる。また、数は少ないが両端を尖らせた35も出土している。35のような木釘は、桶の底板を接合する際にも使用されるが、それ以外は桶ではなく他の木製品に使用されるものであろう。

38・39は円盤状の木製品で、中央に片側から孔を穿っている。38は直径2.2cm、厚さ1.5cm、39は直径2.2cm、厚さ1.1cmある。同じ木製品が41点も出土しており、木製品製作に係わるものの可能性があるが、用途は不明である。

40は泥岩製、41は頁岩製の砥石である。40は小型品で、磨面の長軸方向に研磨による溝が2本ある。41は大型品で、鋸歯を研いだような粗い削痕がある。

このほか、注目される遺物として、土器もしくは陶器片を転用加工した土製円盤(土器約360点、陶磁器10点)、球形の土玉(約160点)が大量に出土した。土製円盤は直径1.0～4.0cmまでのものがあ

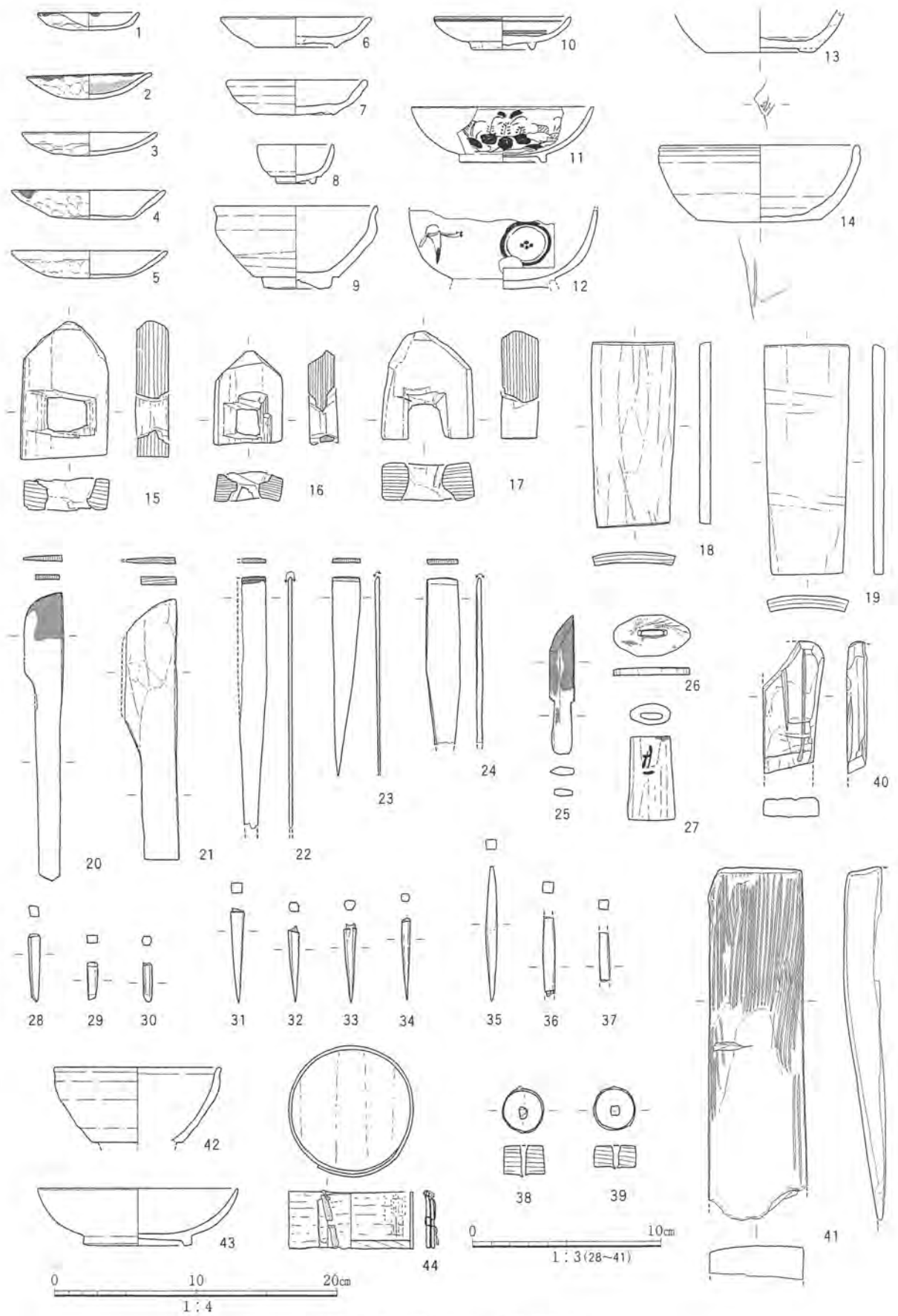


图9 第1層遺構出土遺物実測図

SK01(1~41)、SD09(42~44)

り、2.0cm前後のものが多い。また、土玉は直径1.0cm前後のものも多く、うち2点には孔が穿たれている。また、食物残渣物とみられる炭化米やモモ・カキ・ウリ科の種子のほか、未炭化のマキ属種実が大量に出土した(注2)。代表的なマキ属であるイヌマキは湿生に強く、現代では庭の垣根に用いられる。出土したものがイヌマキであれば垣根として付近に植えられていた可能性がある。

SK16~18は調査区北半で検出した土壌で、深さが0.2mと浅く、底付近が残存したにすぎない。いずれも埋土中に木箸や木屑を含む。

SD09・SD12は約4.0m離れて並行する東西方向の溝で、溝の方向は現在の町割りと一致する。東壁地層断面で確認できる本来の規模は、幅1.1m前後、深さ0.6m前後で、SD09がやや深く掘られている。埋土の下半には滞水状態で堆積したシルト層が見られ、上半を第0層に相当する整地層が覆っている。両溝の間には、上述したSK01のほかにも、木屑を多く含む土壌が調査区外に並んでおり、木材加工の際に生じた木屑の廃棄場を区画する役割があった可能性がある。SD09から瀬戸美濃焼の鉄釉天目碗42、漆器椀43、木製曲物44が出土した(図9)。43の塗色は内面赤色、外面黒色である。44は直径8.8cm、高さ4.0cmと小型である。ほぼ完形の状態で出土したが、側板と底板を接合するための釘や綴皮は確認できない。

SE05は調査区南西端で検出した木桶を枠とした井戸で、埋土の特徴や出土遺物から他の井戸とは異なり、第1層上面から掘込まれたものと判断した。井戸枠は下から3段目が抜き取られており、その後シルト~中粒砂によって徐々に埋っていた。

第0層の上から掘込まれた遺構は、SE02~04・10・11・13~15・20・21がある。出土遺物から時期が推定できるものは、SE03が17世紀前半、SE11が18世紀後半~19世紀である。SE03の底からは、イヌの下顎骨が出土している。

iii) 地層出土遺物

第9~7層から出土した土器類・土製品・瓦・石器のうち、代表的なものを図化した(図10)。なお、出土動物遺存体はiv)で後述する。

45~50は縄文土器、51はサヌカイト製の凹基無茎式石鎌で、第9層から出土した。45は緩やかに外反する深鉢の口縁部で、内外面に植物繊維を束ねたような工具で横方向にナデを加える。46は「く」の字に屈曲する口縁部をもつ深鉢で、外面に45と同様の工具で調整を行った後、上下端にナデを施す。45・46は縄文時代晩期中頃の滋賀里Ⅲ式に位置づけられる。47・48は横方向に幅広の深い沈線を施すもので、47は口縁端部が面をもつ。晩期前半の滋賀里Ⅰ~Ⅱ式に属するものであろう。49は外面に多条の沈線を交差するように施すものである。50は小片であるが、外面に縄文を施したあと幅広の沈線を配するものである。後期前半の北白川上層式に属するものであろう。45~49は胎土中に細かい長石・石英・雲母粒を含み、50は粗い長石粒を多く含むことで他と異なる。第9層からは、破片数にして約100点の縄文土器が出土したが、図化したもの以外に二枚貝や巻貝条痕文やケズリを施したものが多く見られ、時期の中心は縄文時代晩期前半~中頃と考えられる。

52は第8~3層から出土した弥生土器壺底部である。器壁が厚く、大型の長石粒を多く含む。時期

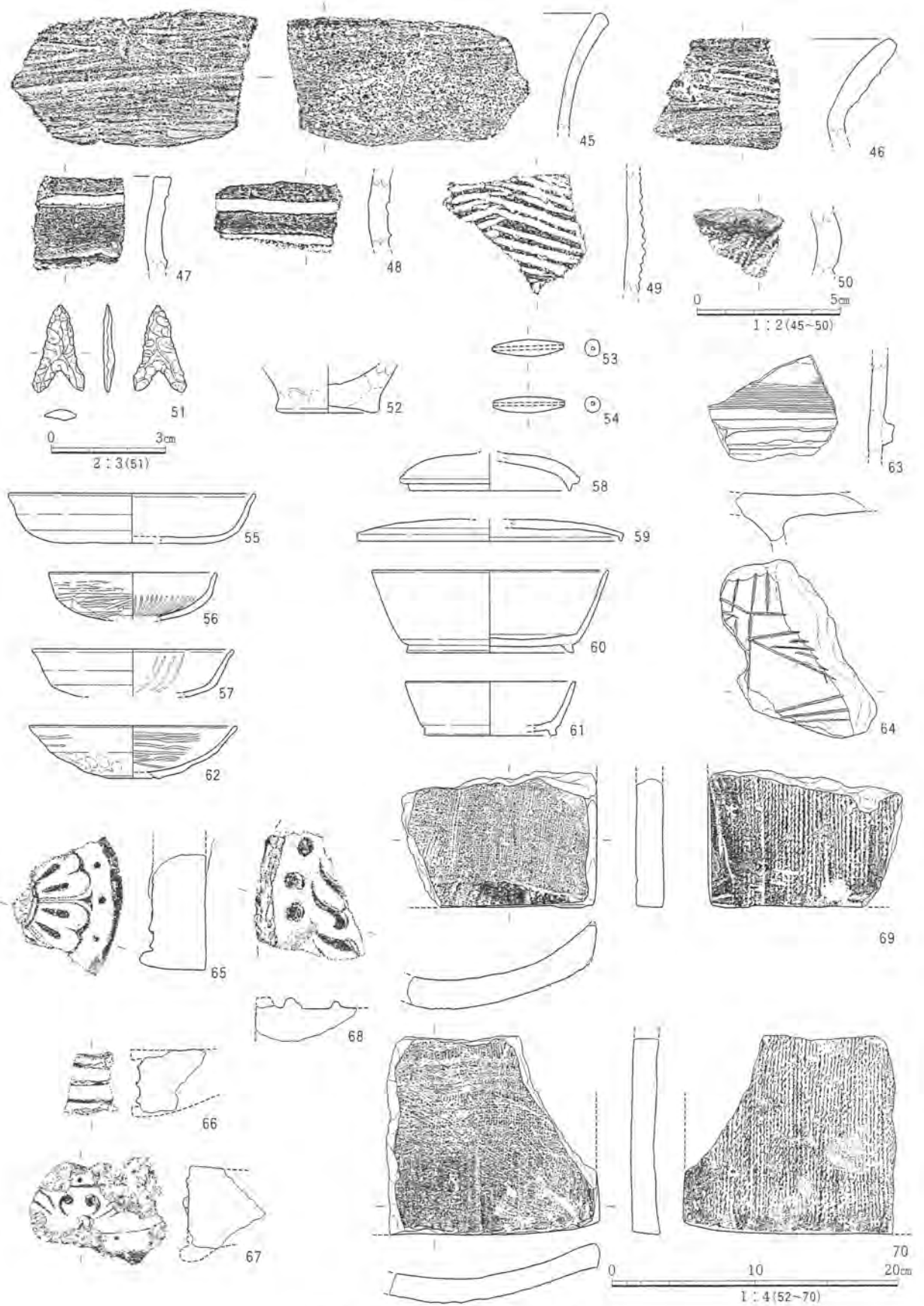


図10 第7～9層および遺構出土遺物

第9層(45～51)、第8～3層(52)、第8～1層(53～61・69・70)、第7層(62～64・66～68)、SD26(65)

は弥生時代前期～中期前葉とみられる。

53～61・69・70は第8-1層から出土した。53・54は土師質の管状土錘である。長さ5.0cm、最大厚1.1～1.2cmで、孔径は0.2cmある。同タイプの土錘が徳川期の井戸SE05からも出土しており、この孔内に2本の細い糸を燃った網が残存していた。55～57は古代の土師器杯Aである。55は無文で、56・57は内面に放射状暗文がみられ、56は外面にヘラミガキを施す。55・57は難波V古～中段階、56は難波Ⅲ中段階に位置づけられる。58は内外面に黒漆を塗布する漆器蓋である。天井部付近がわずかに反り上がることから、つまみが付いていたようである。口縁部内側にはかえりが付き、金属器を模倣した杯の蓋であろう。59～61は古代の須恵器で、59は杯B蓋、60・61は杯Bである。59・60は難波V古段階、61は難波V中段階におおむね位置づけられる。69・70は凹面に布目圧痕、凸面に幅広の縄目タタキ痕がある古代の平瓦である。70は焼成が堅質で、69は燻が掛っている。

62～64・66～68は第7層から出土した。62は瓦器椀で、底に痕跡程度の高台が付く。時期は13世紀前半で、第7層から出土した遺物の中ではもっとも新しい。

63は外面ヨコハケ調整の円筒埴輪で、突帯は台形状で低い。無黒斑で、川西編年Ⅳ期に位置づけられる。64は盾形埴輪で、平行線帯で区画した外区に鋸歯文を配する。線刻内には赤色顔料が一部に残る。63と同時期のものであろう。

66は重圏文軒平瓦、67は唐草文軒平瓦、68は鬼瓦である。66は細い3本の孤線がある。67は内区唐草文の先端が丸く膨らむ点の特徴で、上下外区を細い突線で画し、外側に小型の珠文を配する。

iv) 動物遺存体(註3)

出土した動物遺存体は、破片数にして689点以上を数え、そのうち種類と部位を同定したのは586点にのぼる。豊臣前期の土壌SK01の埋土は、0.5mmメッシュのフルイを用いて水洗選別した後に遺物を採集し、それ以外は発掘中に肉眼で確認したものだけを採集している。

a. 時期別の出土状況

縄文時代晩期(第9層)では、オナガガモ程度の大きさのカモ科の上腕骨が、1点のみ出土している。

古代(第8-1層)では、爬虫類と哺乳類が出土している。スッポンの甲板が3点、ウマの頭蓋骨などが計29点、ウシの大腿骨などが計6点、ニホンジカの枝角などが計4点、イノシシの肩甲骨などが計2点出土している。ニホンジカの枝角は自然に脱落した落角であり、第1尖は鋸で切断され、角幹は叩き切られており、肩甲骨、橈骨、中足骨は骨端部が癒合していない若い個体である。

古代～中世前期(第7～8-1層)では、爬虫類と哺乳類が出土している。スッポンの肩甲骨・烏口骨など計3点、ウマの橈骨などが計7点、イヌの大腿骨が2点、ウシの中足骨が1点、ニホンジカの上腕骨が1点のみ出土している。ウマの橈骨にはイヌの咬痕が見られ、近位部には多数の傷が見られるが、解体や肉を削いだような痕跡とは異なる。ニホンジカの上腕骨の遠位端にはイヌの咬痕が見られる。

中世前期(第7層)では、爬虫類と哺乳類が出土している。スッポンの甲板が2点、ウマの橈骨などが計19点、ヒトの大腿骨が2点、ウシの中手骨などが計10点、ニホンジカの枝角が1点のみ出土し

ている。ウマの大腿骨1点には骨幹部に筋肉を削いだような切傷が、ヒトの大腿骨1点にはイヌによる咬痕が見られる。ニホンジカの枝角は自然に脱落した落角であり、第1尖は切断され、角幹は打ち割られている。また、第1分枝上部には削った痕跡が見られる。

中世後期(第4・5層)では、哺乳類のみが出土している。ウマの遊離歯5点、中手骨または中足骨3点など計14点、ヒトの頭蓋骨と上腕骨が計2点、ウシの手根骨が1点のみ出土している。

豊臣前期(SK01)では、魚類、鳥類、哺乳類が出土している。魚類では、マダイが椎骨、前上顎骨など計153点と最多の出土を示し、前頭骨、椎骨などには切傷、切断、被熱した痕跡が見られる。マダイに次いで多く出土したタイ科は、椎骨、擬鎖骨など計51点あり、切断や被熱の痕跡が見られるものを含む。ニシン科はマイワシなどのイワシ類で、椎骨のみが計31点出土している。ハモ属は椎骨、歯骨など計28点、カツオは椎骨、角骨など計15点出土しており、両種とも被熱した痕跡が見られるものを含む。サバ属は、椎骨と主上顎骨が計14点、スズキは椎骨、主上顎骨など、トビウオ科は椎骨のみが計12点出土している。ナマズ属は胸鰭棘と椎骨が計10点出土しており、胸鰭棘には被熱した痕跡が見られる。キダイは椎骨など計9点出土しており、椎骨は切断されたものを含む。このほかクロダイ属、カレイ科は6点ずつ、エイ・サメ類、イサキ、タラ科が3点ずつ、ヒラメ、ボラ科が2点ずつ、アジ科、イサキ科、ウシノシタ科、カマス科、コイ科、コチ科、サケ科、サケ属、シイラ、タチウオ科、マイワシ、マダラが1点ずつ出土している。鳥類では、キジ科の烏口骨などが計3点、カモ科の上腕骨などが計2点出土している。キジ科はヤマドリやキジ程度、カモ科はマガモとカルガモ程度の大きさである。カモ科の上腕骨は、近位端が一部切断されている。哺乳類では、ネズミ科の椎骨、頭蓋骨など計77点出土しており、上顎や下顎の臼歯はクマネズミ属に酷似している。また、上腕骨などの四肢骨は、骨端部が癒合していない若齢の個体が多く含まれている。

徳川期では、哺乳類のみが出土している。イヌの下顎骨が1点、ウマの中足骨が1点出土している。イヌの下顎骨は下顎骨全長が143.0mmを測り、[長谷部言人1952]の分類では中大級に相当する。

b. 古代から中世の牛馬について(表1)

本調査で出土したウシとウマの体高を、下顎臼歯列および長管状の四肢骨の計測値から推定した(註4)。ウシはいずれも体高110cm前後であり、日本の在来牛である体高112cm程度の口之島牛のメスと同程度である。古代から中世にかけて体格に大きな変化は見られず、7世紀中頃の難波宮跡や8世紀前半の長原遺跡のメスとされるウシとほぼ同様であり、12世紀の平安京のウシと比べると小さい(註5)。ウマは体高135cm程度の本曾馬に相当する中型馬を主体とするが、中世には体高130cmを下回る小型馬が含まれる。また、古代のウマの下顎骨は全臼歯列長が178.7mmを測り、8世紀後半の平城京や長原遺跡のウマより大きな個体が予想される(註6)。歯冠高から推定したウマの年齢は、4歳の若齢の個体や、7~14歳までの壮齢、老齢の個体が見られる。

出土したウシやウマの骨には、明瞭な解体痕が見られないが、散乱状態で出土していること、中世前期のウマの大腿骨には骨幹部に肉を削いだような痕跡が見られることから、牛馬を解体した後、肉を食用にしていたと考えられる。森の宮遺跡の7世紀のウマや、住友銅吹所跡から出土した7世紀~8世紀のウマの骨には、解体痕や肉を削ぎ取った痕跡が見られ[久保和士1999]、古代から中世には、

表1 ウシ・ウマの部位別集計表

時期	種類	頭蓋骨		椎骨		肋骨		下顎骨		肩甲骨		上腕骨		桡骨		尺骨		中手骨		寛骨		大腿骨		脛骨		中足骨		その他	計
		左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右		
古代	ウシ			1								1									1	1			1	1		6	
	ウマ	4		3					3	3	4					1			1		3	1						30	
古代～ 中世前期	ウシ														1												1		
	ウマ								1							1											8		
中世前期	ウシ					1	1	1										1									10		
	ウマ			1										1	3			1			2	1	1				19		
中世後期	ウシ																										1		
	ウマ	1									1										1						15		
徳川期	ウマ																	1									1		

表2 魚類の部位別集計表

	前頭骨		前上顎骨		主上顎骨		歯骨		角骨		方骨		舌顎骨		主鰓蓋骨		前鰓蓋骨		椎骨	その他	計	
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右				
アジ科					1																	1
イサキ				1							1								1			3
イサキ科																		不明	1			1
ウシノシタ科																			1			1
エイ・サメ類																			3			3
カツオ									1										13	尾骨1		15
カマス科				1																		1
カレイ科																			6			6
キダイ			1				1			1									5	口蓋骨(左1)		9
クロダイ属			1										1								上後頭骨1前上顎骨/歯骨1角舌骨(左1)	6
コイ科																					鰓棘1	1
コチ科						1																1
サケ属																						1
サケ科																						1
サバ属					1																	13
シイラ				1																		1
スズキ			1			1										1						8
タイ科							1	1	1	1	1		2	1			2	1	18	上後頭骨2上耳骨(右1)第一神経間棘3前上顎骨/歯骨4口蓋骨(左2不明1)涙骨(左1)後鰓頭骨(左1右1)擬鎖骨(左3不明1)基鰭骨(左1)準下尾骨1尾部棒状骨1		51
タチウオ科								1														1
タラ科					1														2			3
トビウオ科																			12			12
ナマズ属																			2	擬鎖骨(右2)胸鰭棘(左4右2)		10
ニシン科																			31			31
ハモ属					1	1	5	2	1		1								14	前上顎骨-鰓骨-鰓骨板1歯骨(左右不明2)		28
ヒラメ																					擬鎖骨(左1)尾舌骨1	2
ボラ科																			2			2
マダイ		5	11	7	2	5	8	8	5	3	4	7	2	4	3	3	3	3	21	上後頭骨3副蝶形骨3前耳骨(左2)翼耳骨(左3右1)外後頭骨(左1右1)鰓骨2第一神経間棘1口蓋骨(左3右3)後鰓頭骨(左4右5)間鰓蓋骨(左2右3)角舌骨(右2)上擬鎖骨(左2右1)擬鎖骨(右2)肩甲骨(左2右2)基鰭骨1尾部棒状骨1		153
マダラ																						1
計																						371

当地付近でウマを食用とする習慣が普及していたことが考えられる。また、平城京や平安京では、都城の南方において斃牛馬処理や皮革生産が行われたことが指摘されている[松井章2004]。牛馬解体に伴う皮革の生産は、中・近世にも行われており、当調査出土のウシやウマも、解体の際に皮を剥いで、皮革として利用した可能性を指摘したい。ウマの四肢骨は、骨端部にイヌなどの食肉動物による咬痕が見られ、ニホンジカやヒトにも同様の咬痕が認められることから、当地に動物や人間の遺体が野晒しで遺棄されていたと考えられる。

c. 豊臣前期の魚類利用(表2)

土壙SK01から出土した魚骨の大部分は、大坂城下町の魚市場跡から出土したものに含まれ[久保1999]、海水魚が淡水魚を大きく上回る。15世紀末から16世紀半ばには、本願寺北側に始まるという川魚市があり、イナ、セイゴと呼び習わす海水魚のボラ、スズキの幼魚が汽水域で漁獲されるため、大坂ではそれらも川魚市場で商われていた[酒井良介1997]。出土したスズキはいずれも体長30cm以下のセイゴであり、ボラも体長20cm程度のイナが含まれ、これらも川魚として扱われたことが考えられる。海水魚は、マダイをはじめとして大阪湾沿岸で漁獲される魚種が主体である。一方、暖海性のキダイ、カツオ、トビウオ科、シイラや、寒海性のタラ科、サケ属は、日本海や太平洋の沿岸から搬入されたことを示唆し、広域な海産物流通を物語る。これまで大坂城下町跡ではタチウオ科が出土していないが、本資料によって大坂市中で流通していた可能性が示される。

マダイの椎骨には、腹部をぶつ切りにしたものや、身を3枚におろしたことを示すものが含まれる。また、マダイの前頭骨には、正中線に沿って左右真二つに切断する「兜割」が見られ、身を賞味するだけでなく、出汁として骨も利用していたことが窺える。マダイ、カツオ、ハモ属などには、直接火に晒されたと考えられる骨があり、調理後に竈などに投棄したと考えられる。しかし、このような被熱した魚骨は全体の一部であり、竈も検出していないことから、可能性を指摘するに留めておきたい。

ハモ属とタラ科は季節性を強く反映する魚種であり、ハモ属は大阪では天神祭に欠かせない伝統的な食材である。19世紀初期の料理本である『会席料理細工庖丁』や『当世料理筈』には、ハモが夏から秋にかけて、タラ科が冬に頻出する[吉井始子1980]。夏と冬を代表する魚種が同時に出土しており、一括にして廃棄されたゴミではない可能性がある。

3)まとめ

今回の調査の結果をまとめると、以下の通りである。

①縄文時代後・晩期から豊臣前期までの地層が良好に遺存しており、上町台地西端の環境と人間活動の変遷を知ることができた。

②上町台地西側で初めてまとまった数の縄文土器が出土した。縄文時代晩期前半(滋賀里Ⅰ～Ⅲ式)のものが主体で、1点だけ後期前半の北白川上層式に遡る土器が含まれる。台地東側の森の宮遺跡と時期的に併行することから、今後、両遺跡の関係が問題となろう。

③第7層および第8-1層から、古墳時代中期の埴輪や古代の土師器・須恵器・漆器・瓦等の各種遺物が出土した。いずれも、居住に適さない台地縁辺の水際に投棄、あるいは流入したものと考えられる。埴輪の出土は付近に古墳が存在したことを示し、調査地北側約150mのOS93-47次調査でも、同時期の各種埴輪が出土している。また、古代の各種遺物からは、付近に難波津や難波宮などに関連する施設・寺院が存在したことを窺わせる。

④上記の遺物とともに、ウシ・ウマを主体として、イノシシ・シカ・イヌ・ヒト・スッポンなど、各種動物遺存体が出土した。明瞭な解体痕は確認できなかったが、文献資料や他の遺跡調査例から、ウシ・ウマは使役された後に、食肉や皮革用として利用された可能性がある。

⑤豊臣前期の遺構のうち、大量の木屑が含まれるSK01の埋土を水洗した結果、当時の木製品生産や木材流通を考える上で重要な資料を得ることができた。中でも多く出土した鼻線は、桶材を製作した際の切れ端の可能性が指摘できる。それ以外にも大量の木釘や綴紐用の桜皮などからは、別の木製品をも製作していたことを示唆し、今後、同時に出土した他の木屑の形状や樹種などからも製作工程・製作品目を明らかにしていく必要がある。

⑥SK01からマダイを主体とする淡水産、海水産の魚類が出土し、豊臣前期の魚利用に関する資料を得ることができた。今回出土した種類は、近世の大坂城下町に流通していた種類が大部分であり、多種多様な魚類の利用が明らかになった。

註

- (1) 報告した木製品の樹種は、徳島大学埋蔵文化財調査室中原計氏に同定していただいた。
- (2) 報告した種子遺体の種類は、古環境研究所金原美奈子氏に同定していただいた。
- (3) iv動物遺存体は、京都大学大学院人間・環境学研究科丸山真史氏に同定・報告していただいた。
- (4) ウマの体高および年齢の推定は、林田・山内(1957)と西中川編(1991)に準じた。
- (5) 難波宮址(NW90-7)は[宮路・松井2004a]、長原遺跡(NG01-14)は[宮路・松井2004b]、平安京は[丸山・松井2005]を参照。
- (6) 平城京は[松井1984]、長原遺跡(NG01-14)は[宮路・松井2004b]を参照。

参考文献

- 岩本芳幸1984、「草戸千軒町遺跡の鼻線」：『草戸千軒』No.137
- 大阪市文化財協会2003、『大坂城Ⅶ』
- 久保和士1999、「近世大坂における水産物の流通と消費」：『動物と人間の考古学』真陽社、pp.137-179
- 酒井亮介1997、「魚介類の流通と魚商内」：『大阪府漁業史』大阪府漁業史編さん協議会、pp.147-206
- 西中川駿編1991、『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告
- 長谷部言人1952、「犬骨」：『吉胡貝塚』文化庁、pp.146-150
- 林田重幸・山内忠平1957、「馬における骨長より体高の推定法」：『鹿児島大学農学部学術報告書』第6号、pp.146-156
- 松井章1984、「動物遺存体」：『平城京右京八条一坊十一坪 奈良国立文化財研究所』pp.54-56
- 2004、「近世初頭における斃牛馬処理システムの変容」：『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会50周年記念論集 考古学研究会、pp.407-416
- 丸山真史・松井章2005、「平安京左京六条三坊五町から出土した脊椎動物遺存体」：『平安京左京六条三坊五町』(財)京都市埋蔵文化財研究所、pp.126-137
- 宮路淳子・松井章2004a、「NW90-7次調査地から出土した動物遺存体」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究第十二-宮殿周辺地域の調査-』、pp.193-202
- 宮路淳子・松井章2004b、「長原遺跡(NG01-14次)調査出土の動物遺存体について」：大阪市文化財協会編『長原遺跡 東部地区発掘調査報告Ⅶ』、pp.55-69
- 吉井始子1980、『翻刻江戸時代料理本集成』第8巻 臨川書店

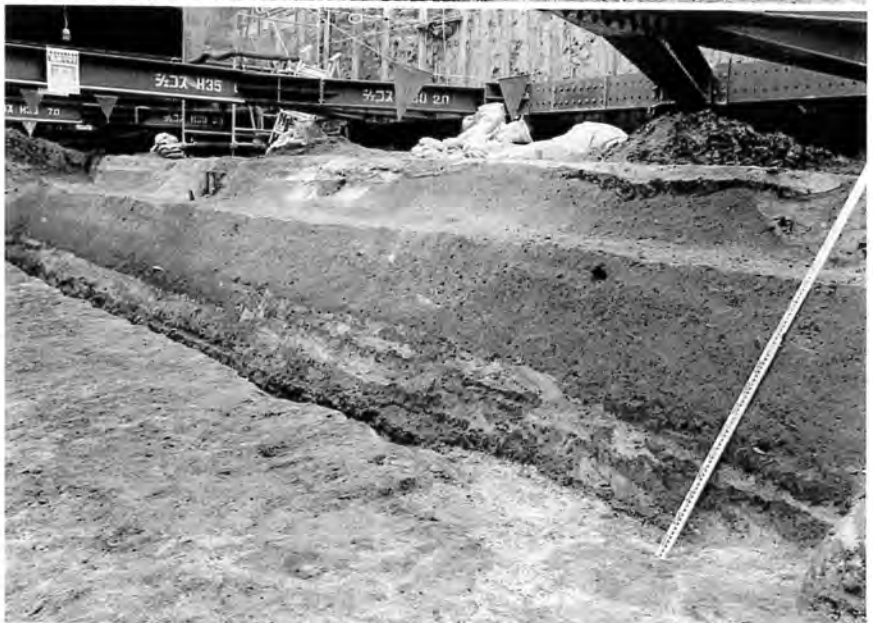
近世の遺構検出状況
(南東から)



第9層縄文土器出土状況
(西から)

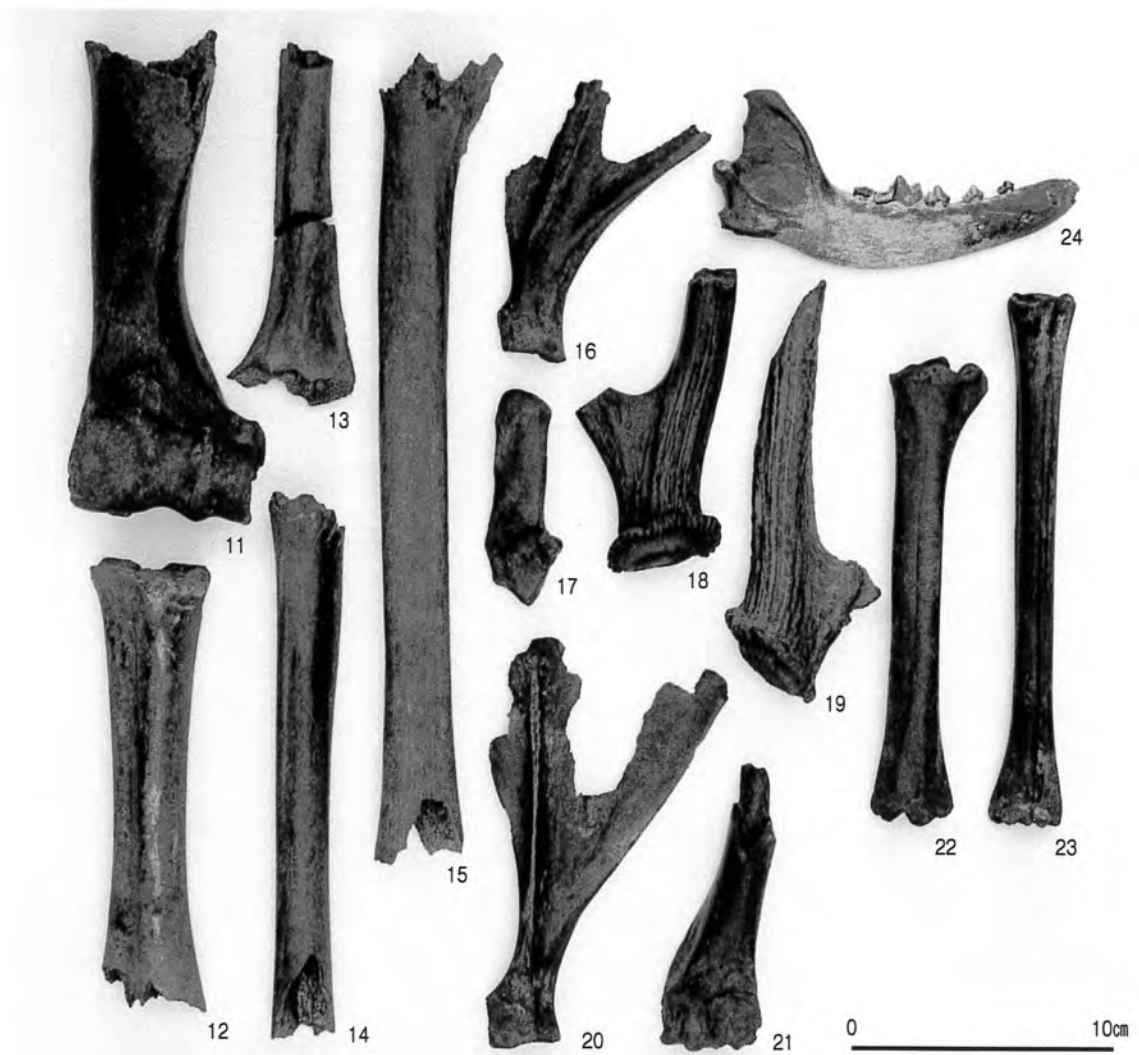


調査区東壁地層断面
(南西から)





ウマ(1・2:下顎骨・第8-1層、3:椎骨・第7層、4:橈骨・第7層、5:脛骨・第7~8層、6:大腿骨・第7層、7:中手骨・第7層、8:膝蓋骨・SD26、9:踵骨・第7層、10:末節骨・第6層)



- ウシ(11: 上腕骨・SD26
- 12: 中足骨・第8-1層)
- ヒト(13: 上腕骨・第5層
- 14・15: 大腿骨・第7層)
- イノシシ(16: 肩甲骨・第8-1層
- 17: 踵骨・第7層)
- シカ(18: 角・第8-1層
- 19: 角・第7層
- 20: 肩甲骨・第8-1層
- 21: 上腕骨・第7-8層
- 22: 橈骨・第8-1層
- 23: 中足骨・第8-1層)
- イヌ(24: 下顎骨・SE03)
- ウマ(25: 寛骨・SD26)

大坂城跡発掘調査(OS08-6)報告書

調査個所 大阪市中央区徳井町二丁目60・61
調査面積 54㎡
調査期間 平成20年6月24日～7月2日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、市川 創

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城跡の西南部に位置し、近隣では多くの調査が行われている(図1)。当該地域は豊臣期大坂城惣構の西部に位置し、OS89-41次調査では南北方向(N1°W)に延びる豊臣期の石垣が、調査地東方のOS92-22次・95-26次・00-32次・89-19次ではおおよそ東西方向の石垣が検出されている。また石垣の方向が直線とならず、かつ方位に則っていないことから、現在の本町通下部に埋没谷が存在し、石垣の方位はその地形に規制されたものと推定されている[大阪市文化財協会2003]。

今回の調査地では、事前に大阪市教育委員会によって試掘調査が行われた。その結果、現地表下約1.9m以下において17世紀以前と考えられる遺物包含層を確認したため、発掘調査を実施することになった(図2)。

調査着手前に事業者側で擁壁工事及び現地表面から1.9mまで重機による掘削が行われたのち、2008年6月24日から調査を開始した。掘削は人力によって行い、遺構検出・掘削・記録などの作業を適宜行い、調査を進めた。現場での作業については、7月2日に機材類の撤収を含むすべての工程を完了した。

以下、本報告で使用する標高はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中では「TP+○m」と示す。示北記号は座標北である。

2) 調査の結果

i) 層序

調査着手時にはすでに現地表下約1.9mまでの地層が除去されており、また調査区西半は近代の攪乱によって地層が大きく削平されていたが、調査区南壁東半部において地表面から現地表下約4.5m(T.P.+0.5m)までの地層を確認することができた。以下では、各層の特徴について述べる(図3～6)。

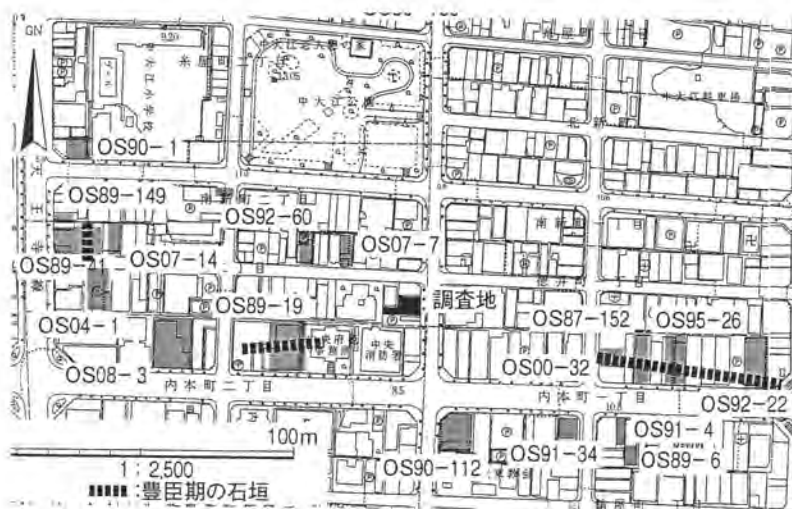


図1 調査地位置図

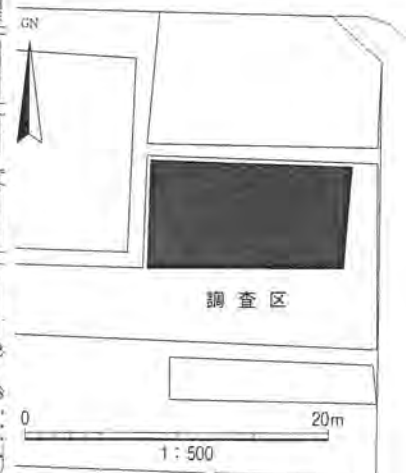


図2 調査区配置図

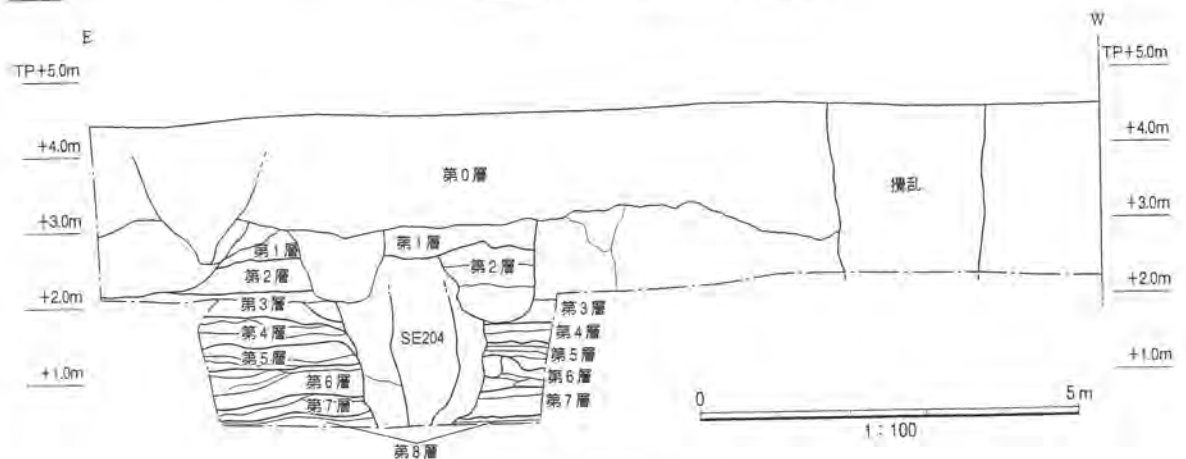
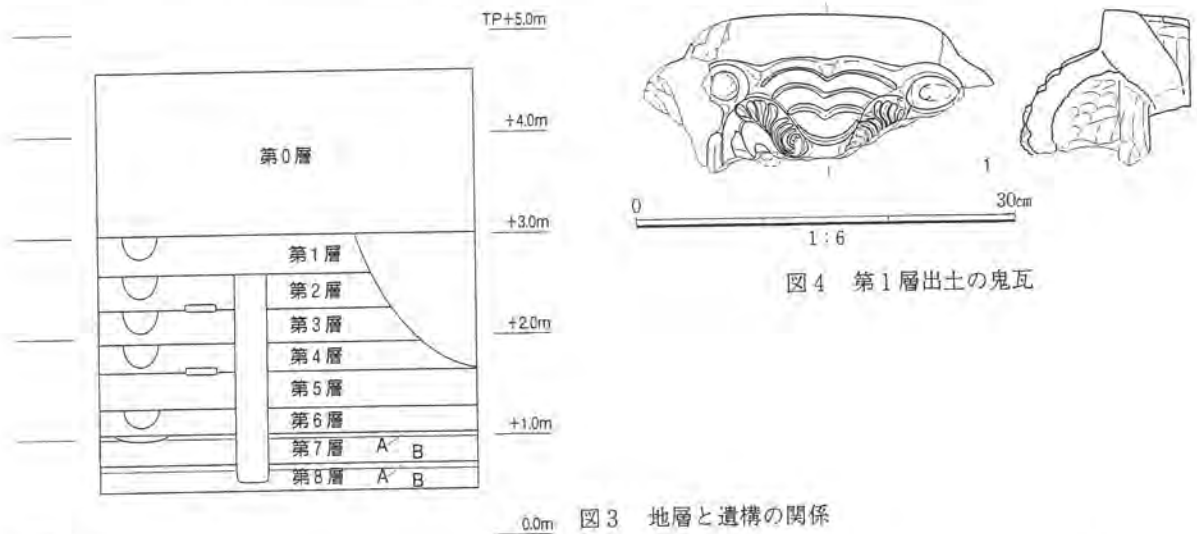
第0層：現代の整地層で、層厚は150cmである。

第1層：近代の整地層であり、黒褐色を呈する砂質シルトからなる。層厚は120cm以上である。調査区西部では本層整地後の掘削が深くまで及び、下位の地層が失われていた。本層より鬼瓦1が出土している。

第2層：黄褐色を呈するシルト質中粒～粗粒砂からなる整地層である。層厚は最大で42cmある。灯明皿として使用された土師器皿12、肥前陶器皿14・15・18、肥前陶器碗16・17のほか、肥前磁器など17世紀中葉までの遺物を包含する。本層上面で溝SD201、溝状遺構SD202、井戸SE203・204、土壙SK205～208を検出した。

第3層：にぶい黄色のシルト質粗粒砂からなる整地層である。層厚は36cmであり、上半は砂質シルトの偽礫を多く含んでいた。本層からはヘラによって播目を施した丹波焼播鉢10などが出土した。豊臣後期の層準である。本層上面では溝SD301～304、土壙SK305～314、礎石列SX315を検出した。

第4層：黄褐色～暗灰黄色を呈するシルト質砂からなる整地層である。層厚は40cmあり、上部には砂質シルトの偽礫を多く含んでいた。本層からは肥前陶器皿13など、豊臣後期に属する遺物が出土している。本層上面では溝および溝状遺構SD401～403、土壙SK404・405を検出した。



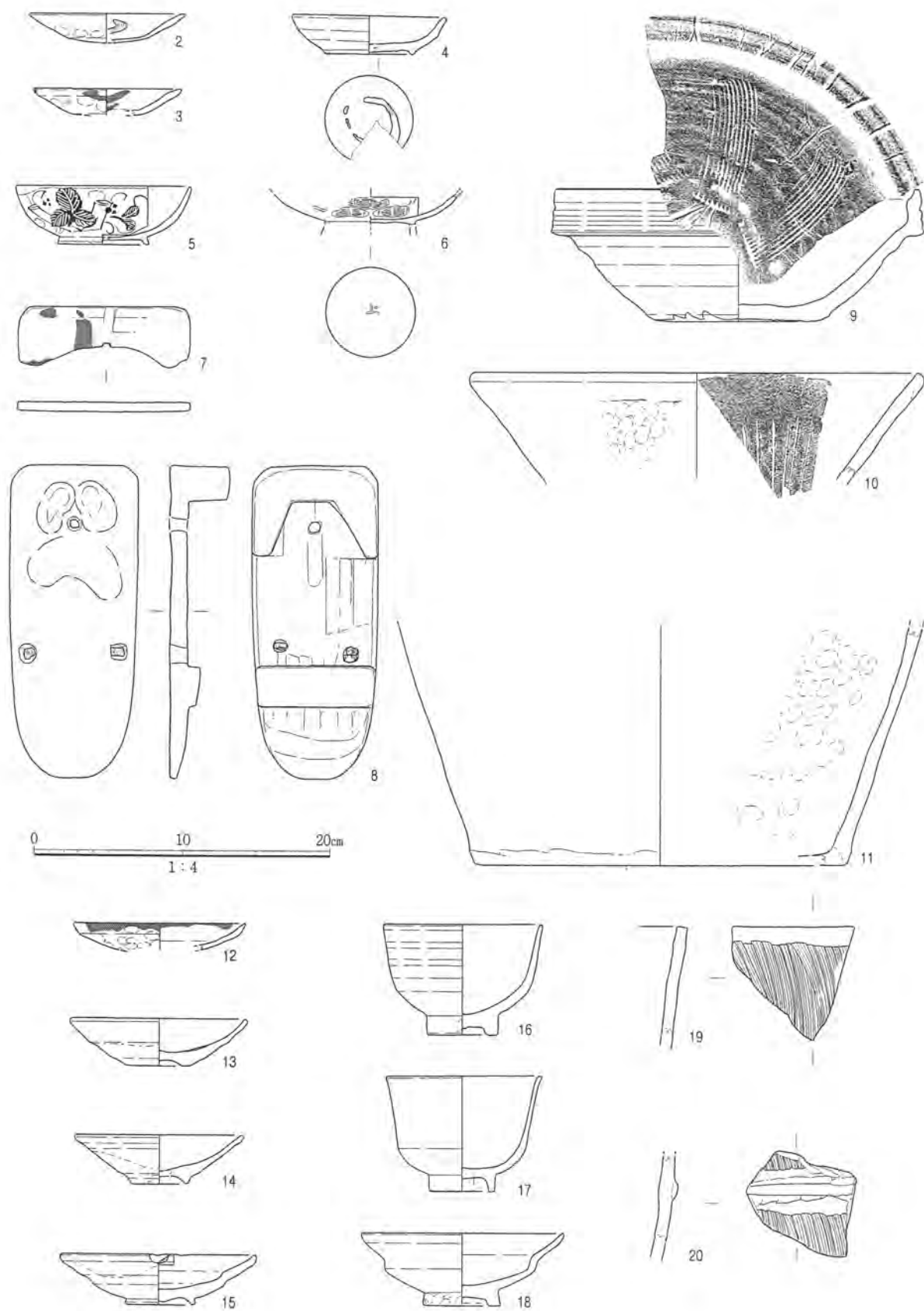


图6 各層出土遺物

第7層(19)、第6層(20)、第5層(2~9·11)、第4層(13)、第3層(10)、第2層(12·14~18)

第5層：暗灰黄色～黒色を呈する砂質シルト～シルト質砂からなる整地層である。層厚は32cmである。最上部は焼土塊をわずかに含んで固く締まり、中位は粘性が強かった。掘削の段階で漆器・魚類の鱗など有機性の遺物を多く認めため、土を48.6kg持ち帰り、水洗・篩分けを行った。その結果、後述する魚骨などを多く検出し、うち20点を同定することができた。本層からはこの他に、土師器皿2・3、瀬戸美濃焼皿4、漆器椀5、漆器皿6、備前焼播鉢9、瓦質土器甕11、用途不明の木製品7、下駄8が出土しているが、肥前陶器は含まれていない。これらは豊臣期の遺物相を示しており、二次的に被熱した遺物が多いことが特徴である。本層上面では礎石と思われる石材2基を検出した。

第6層：灰黄褐色～オリーブ灰色を呈するシルト質砂からなる整地層である。層厚は40cmであり、上部にはシルトからなる偽礫を多く含んでいた。本層上面から掘削された土壙を調査区南東隅の壁面で確認している。円筒埴輪の突帯部20が出土した。

第7層：灰黄褐色を呈するシルトからなる水成層である。層厚は最大で28cmであり、土壌化して暗色を帯びる7A層と、土壌化の及ばない7B層に細分できる。本層からは円筒埴輪の口縁部19が出土したほか、土師器・須恵器の細片が出土している。上面では整地土を確認した。

第8層：にぶい黄褐色を呈する細粒砂質シルトからなる水成層である。層厚は18cm以上あり、土壌化して暗色を帯びる8A層と、土壌化の及ばない8B層に細分できる。なお、第6層以下では時期決定可能な遺物は出土していない。

ii) 遺構と遺物

重機掘削によって第2層上部までが除去されていたが、以下各面において遺構の検出を行った。

a. 第7層上面の遺構(図7)

シルトの偽礫からなる整地土を検出した。整地土下位の第7層は上面が暗色化しておらず、第7層を掘削したのち整地が行われたことがわかる。

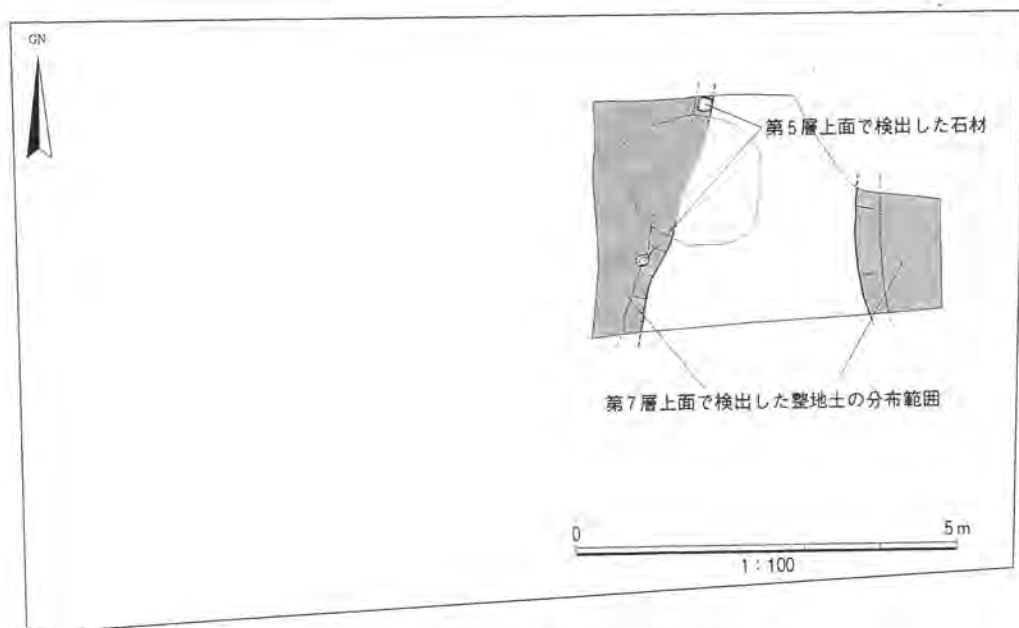


図7 第7層および第5層上面の遺構

b. 第5層上面の遺構(図7)

礎石と考えられる石材2基を検出したが、建物などを復元することはできなかった。

c. 第4層上面の遺構と遺物(図8・12)

溝および溝状遺構SD401~403、土壙SK404・405を検出した。

南北に延びる溝SD401は、幅0.7m、長さ3.0m以上を測る。埋土は二分でき、下部にはオリーブ褐色を呈する砂質シルトが堆積し、上部はシルトの偽礫を含む黄褐色シルト質砂によって埋戻されていた。また、遺構の埋没後は第3層によって覆われる。本遺構からは、古代に遡る平瓦32が出土している。凹面には桶巻造の痕跡、凸面には斜格子タタキ痕が観察できる。

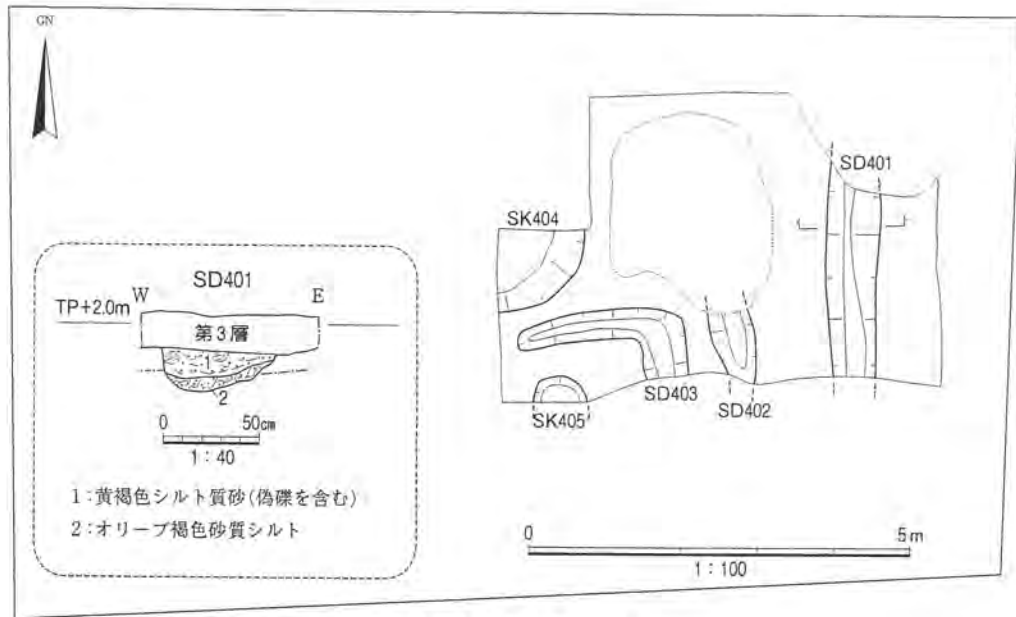


図8 第4層上面の遺構

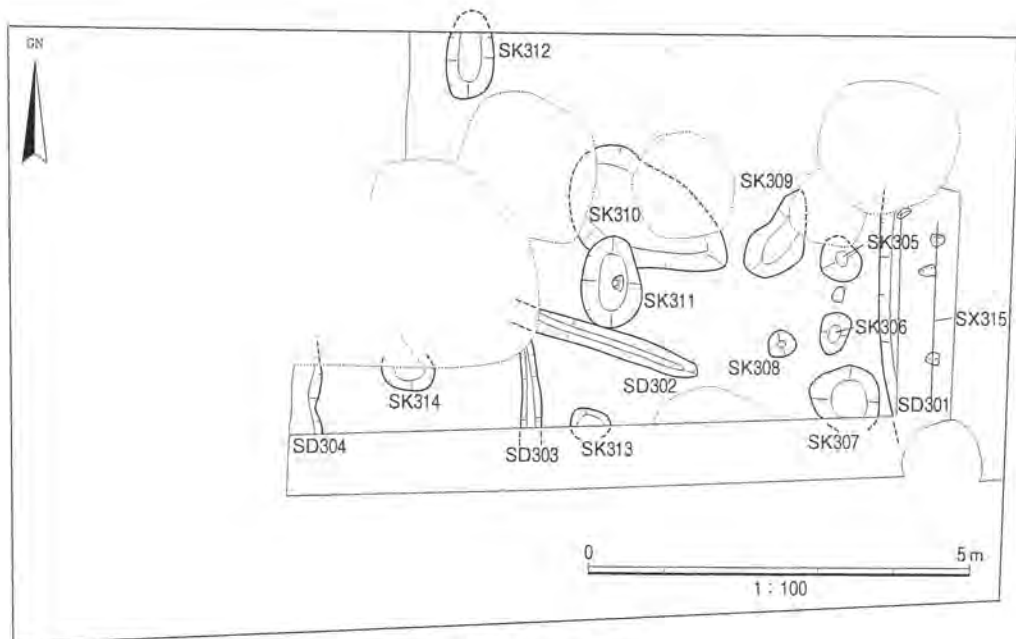


図9 第3層上面の遺構

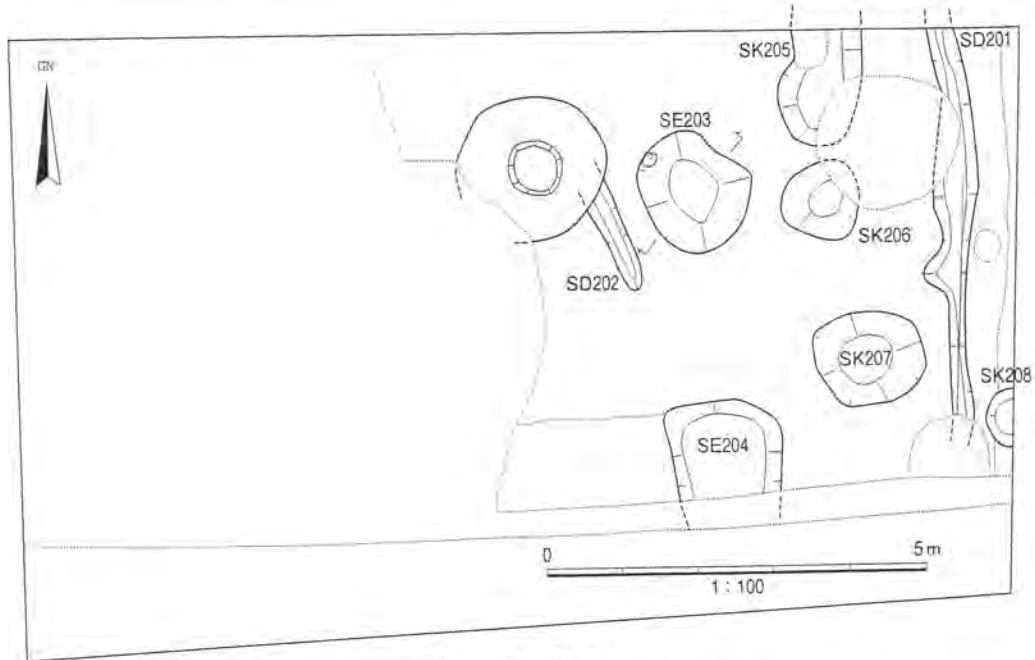
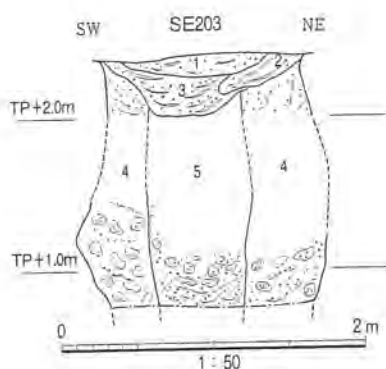


図10 第2層の遺構



- 1: オリーブ褐色粗粒砂
(シルトの偽礫を含む)
- 2: 黒褐色シルト質砂
- 3: 含炭黄灰色シルト質砂
- 4: 灰黄色シルト質砂
(下部はシルトの偽礫を含む)
- 5: 灰色シルト質砂
(シルトの偽礫を多く含む)
下部は粘性が強い)

図11 SE203断面

また、SK404からは内面見込みに胎土目跡を有する肥前陶器皿21、備前焼播鉢28が出土している。これらを含め、第4層の遺構から出土する陶磁器類は豊臣後期の遺物相を示している。

d. 第3層上面の遺構と遺物(図9・12)

本層上面では溝SD301～304、土壇SK305～314、礎石列SX315など、比較的密に遺構を検出した。

このうちSD301は南北に延びる溝で、幅0.3m以上、長さ2.7m以上、深さ0.3mを測る。また、SD301の東側では礎石列SX315を、西側では残存する礎石を挟んで礎石採取穴と考えられる浅い土壇SK305・306を検出している。

第3層上面で検出した遺構からは、SK311から出土した肥前陶器碗22をはじめとして豊臣後期に属する遺物が出土している。

e. 第2層上面の遺構と遺物(図10～12)

溝・溝状遺構SD201・202、井戸SE203・204、土壇SK205～

208を検出した。

このうちSD201は南北に延びる溝で、最大幅0.6m、長さ5.0m以上を測る。

SE203は、直径約1.8m、深さ1.6m以上を測る井戸である。検出深度の下半では井戸枠が腐朽した痕跡を確認した。本遺構からは、焼塩壺の蓋23、土師器皿24・25、刷毛目で文様を施す肥前陶器皿27・碗29・鉢30、備前焼壺の底部31のほか、「本多(カ)」と墨書された砥石33が出土している。

その他、本層準に伴う遺構からは、肥前陶器向付26、表面に擦痕を有する土製品34、金属製の煙管吸口35などが出土している。上層を削平された状態で検出した遺構から出土した遺物であるため時期にはやや幅があるが、おおよそ17世紀代の遺物相を示す。

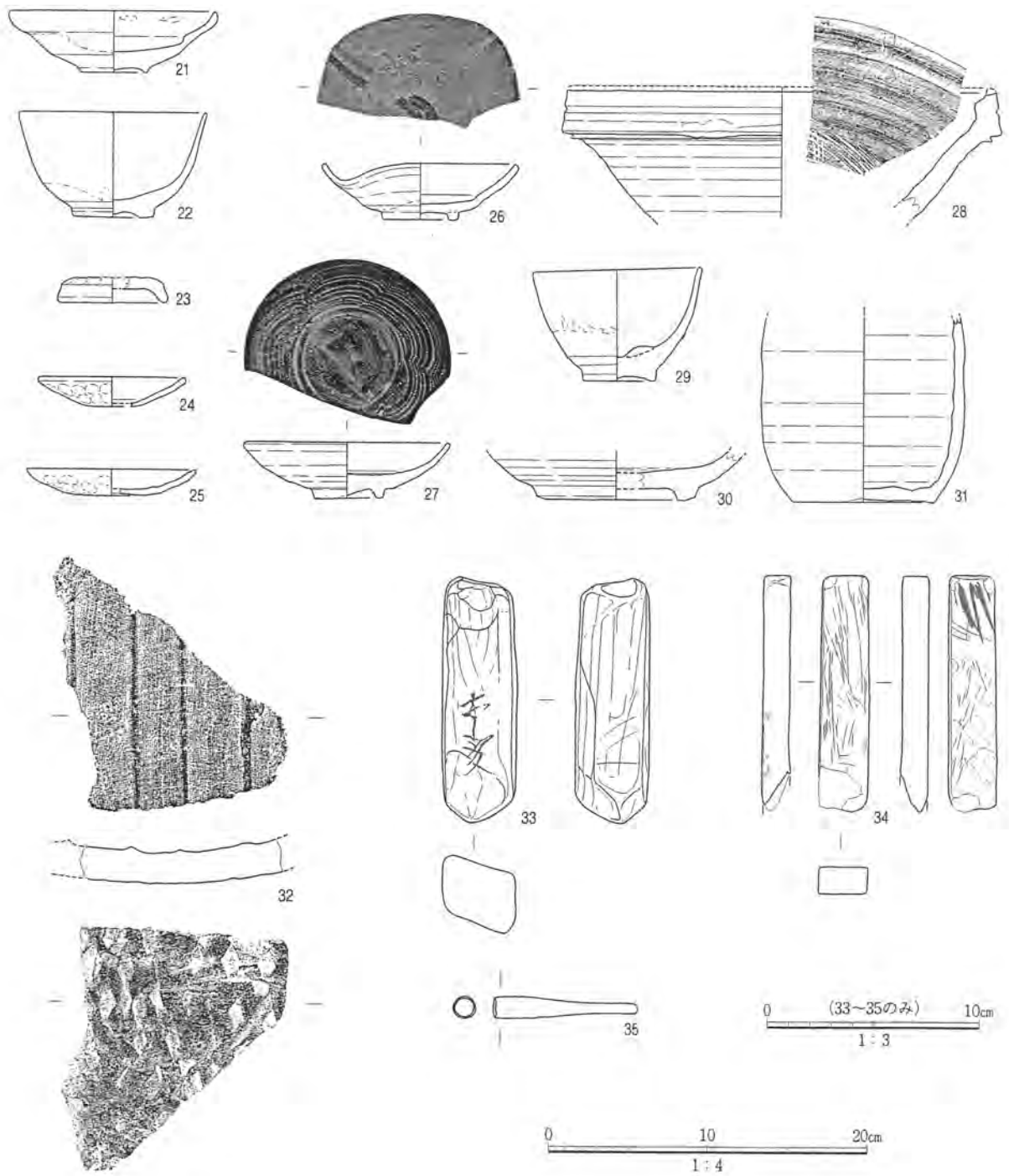


図12 各遺構出土遺物

SD401(32)、SK404(21・28)、SK311(22)、SE203(23~25・27・29~31・33)、SE204(34)、SK206(26)、SK208(35)

3)大坂城跡(OS08-6次)第5層出土の動物遺存体について

丸山真史(京都大学大学院人間・環境学研究科)

出土した動物遺存体は、いずれも整地層から出土しており、遺跡土壌の水洗篩別によって採集されたものである。魚類はマダイ8点、アジ科3点、ハモ属1点、コチ科1点、ボラ科1点、計14点を、哺乳類はネズミ科と思われる肋骨2点を同定した(表1・2)。

魚類ではマダイには左右真二つに切断した前頭骨が含まれており、今日の「兜割」と称される解体法を示す。この「兜割」したマダイの料理には、潮煮などが想定される。マダイの大きさは、現生骨格標本との比較から、体長30cm以上の個体ばかりと推測される。同定したアジ科は、マアジやムロアジといった小型のアジの仲間であり、大きさは体長20cm以下の小さな個体と20cm~30cm程度の個体が含まれる。ハモ属は、大坂や京都では夏の風物詩であり、天神祭には欠かせない魚種であり、大きさは体長50cm未満の小さな個体である。大阪市、京都市内の遺跡から出土するハモ属の一般的な大きさと比べて、かなり小さな個体であるといえる。コチ科やボラ科も、近世遺跡から一般的に出土する魚種である。一方、哺乳類のネズミ科は、屋敷に住みついたものが駆除されたことも考えられる。

魚類遺存体は、今日でも食用となる水産資源であり、いずれも食料残滓と考えられ、豊臣期の大坂における食生活の一端を知ることができる貴重な資料である。

4)まとめ

今回の調査では、近代の攪乱が調査区西半で深く及んでいたとはいえ、周辺調査の成果に一定度の知見を加えることができた。

表1 出土した動物遺存体一覧

番号	大分類	小分類	部位	左右	加工痕	推定標準体長	備考
1	硬骨魚綱	アジ科	方骨	左		20~30	
2	硬骨魚綱	アジ科	前上顎骨	左		20以下	
3	硬骨魚綱	アジ科	主上顎骨	右		20以下	
4	硬骨魚綱	コチ科	部位名不明	-		30~40	
5	硬骨魚綱	コチ科?	前鰓蓋骨?	右		30~40?	
6	硬骨魚綱	ハモ属	前上顎骨-篩骨-鋤骨版	-		50以下	
7	硬骨魚綱	ボラ科	椎骨	-		30~40	
8	硬骨魚綱	マダイ	主上顎骨	左		30~40	
9	硬骨魚綱	マダイ	角骨	左		40~50	
10	硬骨魚綱	マダイ	方骨	左		40~50	
11	硬骨魚綱	マダイ	後側頭骨	右		40~50	
12	硬骨魚綱	マダイ	神経頭蓋の一部	右	切断?	40~50?	
13	硬骨魚綱	マダイ	角舌骨	右		40~50?	
14	硬骨魚綱	マダイ	上擬鎖骨	右	切傷?	40程度	
15	硬骨魚綱	マダイ	前頭骨	-	切断	40程度?	兜割(2分割)
16	硬骨魚綱	不明	椎骨	-		小型	
17	硬骨魚綱	不明	上舌骨	左		小型	
18	硬骨魚綱	不明	椎骨	-	切断	中型	輪切り
19	哺乳綱	ネズミ科?	肋骨	-		-	
20	哺乳綱	ネズミ科?	肋骨	-		-	

まず地形についてみれば、調査地は復元された古地形の中で「本町谷」と呼称される埋没谷中に位置している(図13)。今回の調査では現地地表下約4.5m (T.P.+0.5m)までの地層を確認したが段丘構成層には到達しておらず、「本町谷」の存在を再確認することができた。

こうした谷地形は自然堆積と盛土によって少なくとも豊臣期にはおおよそ埋没し、人間活動が積極的に展開される。今回の調査では明確な建物跡などを検出することはできなかったが、豊臣期以降各時期の井戸・土塙・溝を確認することができた。このうち調査区東端で検出された溝SD401・301・201は各時期でほぼ踏襲した位置に掘削されており、敷地境など土地の区画に係わる遺構であると考える。ここで重要となるのは遺構の方位であり、豊臣後期のSD401・301、徳川期の

表2 出土動物遺存体種名表

脊椎動物門	Vertebrata
硬骨魚綱	Osteichthyes
ウナギ目	Anguilliformes
ハモ科	Muraenesocidae
	ハモ属の一種 <i>Muraenesox</i> sp.
ボラ目	Mugiliformes
ボラ科	Mugilidae
	ボラ科の一種 Mugilidae gen. et sp. indet.
カサゴ目	Scorpaeniformes
コチ科	Platycephalidae
	コチ科の一種 Platycephalidae, gen. et sp. indet.
スズキ目	Percidae
アジ科	Carangiae
	アジ科の一種 Carangiae, gen. et sp. indet.
タイ科	Sparidae
	マダイ <i>Pagrus major</i>

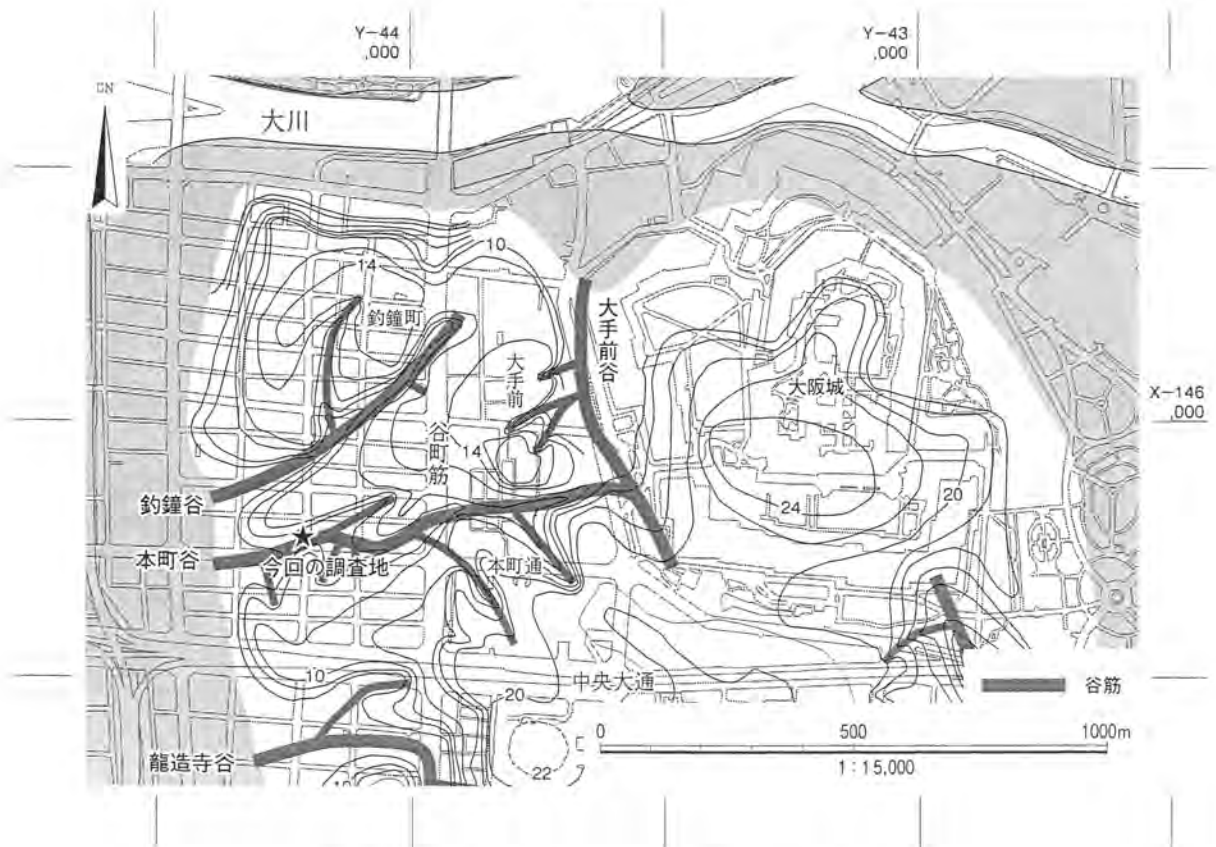


図13 上町台地北端の旧地形(寺井誠2004所収図を改変)

SD201がいずれもほぼ正南北方向に掘削されていた。周辺の調査では豊臣期の遺構は方位が一定しておらず、こうした知見から豊臣期の段階では起伏のある地形を完全には克服できていなかったこと、また敷地毎に地形への対応が異なっていたことが指摘されている[大阪市文化財協会2003]。そうした敷地毎の対応の一例として、今回の調査区では方位に則った整備が行われていたことが明らかとなった。

また、豊臣期の整地層である第5層から出土した魚骨などを同定・分析することによって、該期の大阪における食生活についてデータを加えることができた。

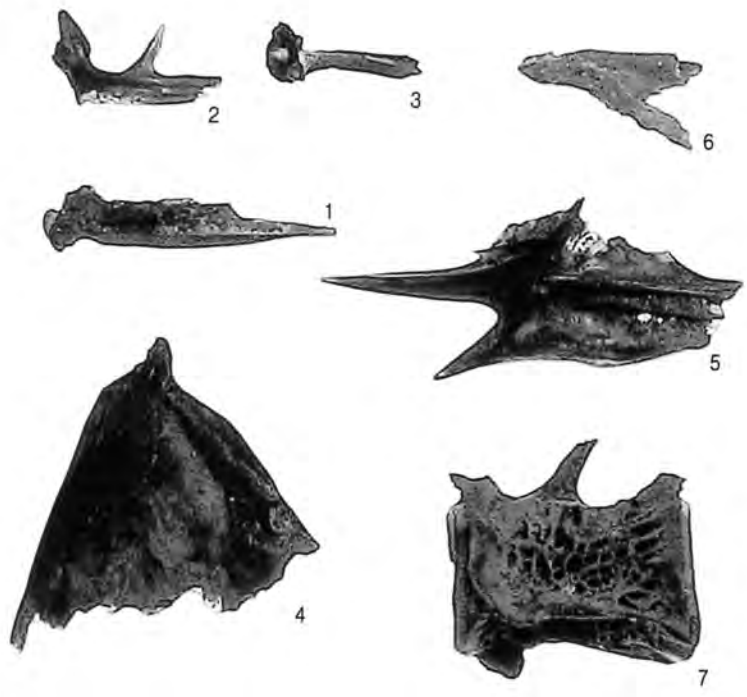
今後とも周辺調査における成果を積み重ね、より蓋然性の高い歴史像を構築してゆくことが重要であろう。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2003、「OS87-152次およびその周辺の調査」、『大坂城跡』Ⅳ、pp.243-262

寺井誠2004、「難波宮成立期における土地開発」、大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十二、pp.161-170

- 1: アジ科 方骨
- 2: アジ科 前上顎骨
- 3: アジ科 主上顎骨
- 4: コチ科 部位名不明
- 5: コチ科? 前鰓蓋骨?
- 6: ハモ属 前上顎骨-篩骨
- 鋤骨版
- 7: ボラ科 椎骨
- 8: マダイ 主上顎骨
- 9: マダイ 角骨
- 10: マダイ 方骨
- 11: マダイ 後側頭骨
- 12: マダイ 神経頭蓋の一部
- 13: マダイ 角舌骨
- 14: マダイ 上擬鎖骨
- 15: マダイ 前頭骨



第8層上面検出状況
(南西から)



第3層上面検出状況
(南東から)



南壁地層断面
(北東から)



大坂城跡発掘調査(OS08-8)報告書

調査個所 大阪市中央区内淡路町一丁目3-1・42-5
調査面積 35m²
調査期間 平成20年7月4日～7月17日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、大庭重信

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地上の谷町筋西側に位置し(図1)、豊臣期大坂城三ノ丸の西側外郭に当る。東西道路をはさんだ南東側で行われたOS87-133次調査では、豊臣前期の礎石建物が検出されており[大阪市文化財協会2003]、東側の谷町筋で行われたOS97-1次調査では、三ノ丸西外郭と考えられる塀や柵などが検出されている[大阪市文化財協会1999]。周辺の調査では、古代～中世の遺構も確認されている。

当該地で計画された共同住宅建設に先立ち、平成20年5月23日に大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、現地表下185～205cmの間に中世とみられる地層が遺存していることが判明した。この結果を受け、この地層の性格と当地での人間活動の変遷を明らかにするために、発掘調査を実施した。

事業主が事前に現地表下180cmまでの地層を除去した後、敷地内北半に東西7m×南北5mの調査区を設定し、調査に着手した(図2)。以下、本報告に掲載した図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、 $TP+○m$ と表記した。指北記号は図1・8が座標北で、それ以外が磁北である。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

$TP+13.6m$ ～ $12.6m$ までの地層を第1～4層に区分した(図3・4)。

第1層：暗オリーブ灰色の大礫サイズ粘土偽礫に粗粒砂が混る整地層である。土師器・瀬戸美濃焼や青花などの陶磁器・瓦といった豊臣前期の遺物が含まれることや、周辺の調査成果から、大坂城



図1 調査地位置図

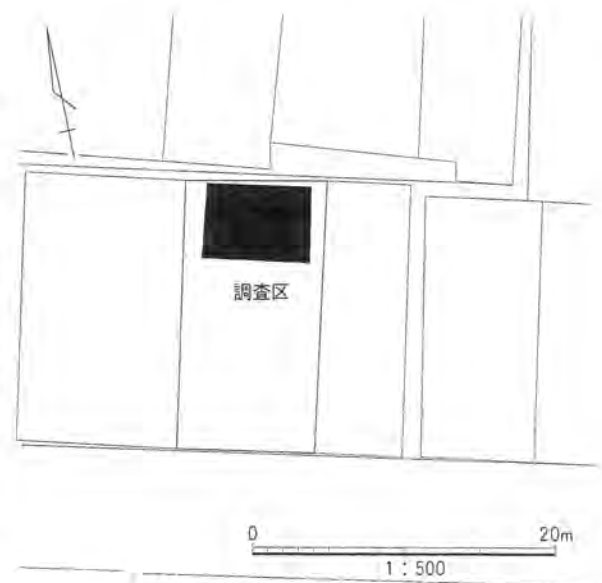


図2 調査区位置図



図3 地層と遺構の関係図

三ノ丸造成時の整地層と判断できる。上半は重機掘削時に削平されていたが、試掘調査の結果では層厚が50cmあった。

第2層：灰色礫混り砂質シルトからなる作土層で、層厚は20cmある。本層上面でSK01・SD02および畝の間とみられる細長い窪みを、下面でSK03を検出した。豊臣前期の土師器、備前焼や青花などの陶磁器・瓦を含む。

第3層：にぶい黄褐色シルト質中粒～粗粒砂からなる作土層で、層厚は20cmある。本層下面で南北方向の鋤溝を多数検出した。中世後半の土師器・瓦器・瓦質土器・白磁のほか、円筒埴輪や古墳時代～古代の須恵器の細片を含む。

第4層：灰黄褐色砂質シルトからなる段丘構成層(地山)である。本層上面でSD04・05、SP06～08を検出した。

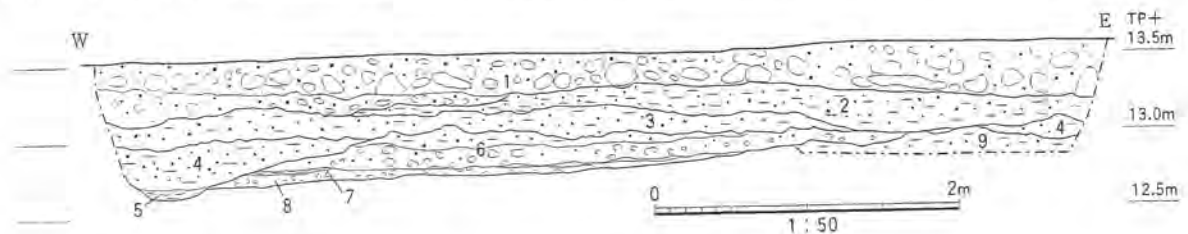
3) 遺構および遺物

i) 中世(図5・6)

第4層上面でSD04・05、SP06～08、および第3層を埋土とする南北方向の鋤溝を検出した。

SD04 調査区西端で検出した南北方向の溝で、正方位からやや東に振っている。検出面での幅1.6m、深さ0.5mある。溝の東肩は傾斜が緩やかであるのに対し、西肩は急で、溝底も西半が深くなっている。溝底西半の深くなった箇所には、溝機能時に堆積した水成のシルト層(図6-3層)が見られ、その後埋められていた(同2層)。調査区の南北壁面で溝底の標高を比べると、南側が北側よりも7cm高い。平面では認識出来なかったが、地層断面の観察により、後述するSD05埋没後に掘削されたことが判明した。中世前半とみられる土師器・瓦器の細片が出土した。

SD05 調査区北端で南肩を検出した東西溝である。埋土の下半に溝機能時に堆積した薄いシルト層(図4-7層)が見られ、その後埋められていた(同6層)。SD04に切られているが、SD04の西側へは続いておらず、また調査区南壁断面ではSD04に先行する溝の埋土が確認できることから(図6-4・



- 1: 暗オリーブ色(5Y4/3)大礫サイズの粘土偽礫と粗粒砂が混じる(整地層、第1層)
- 2: 灰色(5Y4/1)炭粒を含む礫混り砂質シルト(作土層、第2層)
- 3: にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質中粒～粗粒砂(作土層、第3層)
- 4: 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質中粒～粗粒砂(SD04埋土)
- 5: 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト(SD04機能時堆積層)
- 6: 暗灰黄色(2.5Y5/2)第4層に由来する砂質シルトの偽礫、上半は硬く締まる(SD05埋土)
- 7: 黄灰色(2.5Y5/1)シルト((SD05機能時堆積層)
- 8: 黄灰色(2.5Y5/1)第4層に由来する砂質シルトの偽礫(SD05加工時形成層)
- 9: 灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト(段丘構成層、第4層)

図4 調査区北壁地層断面図

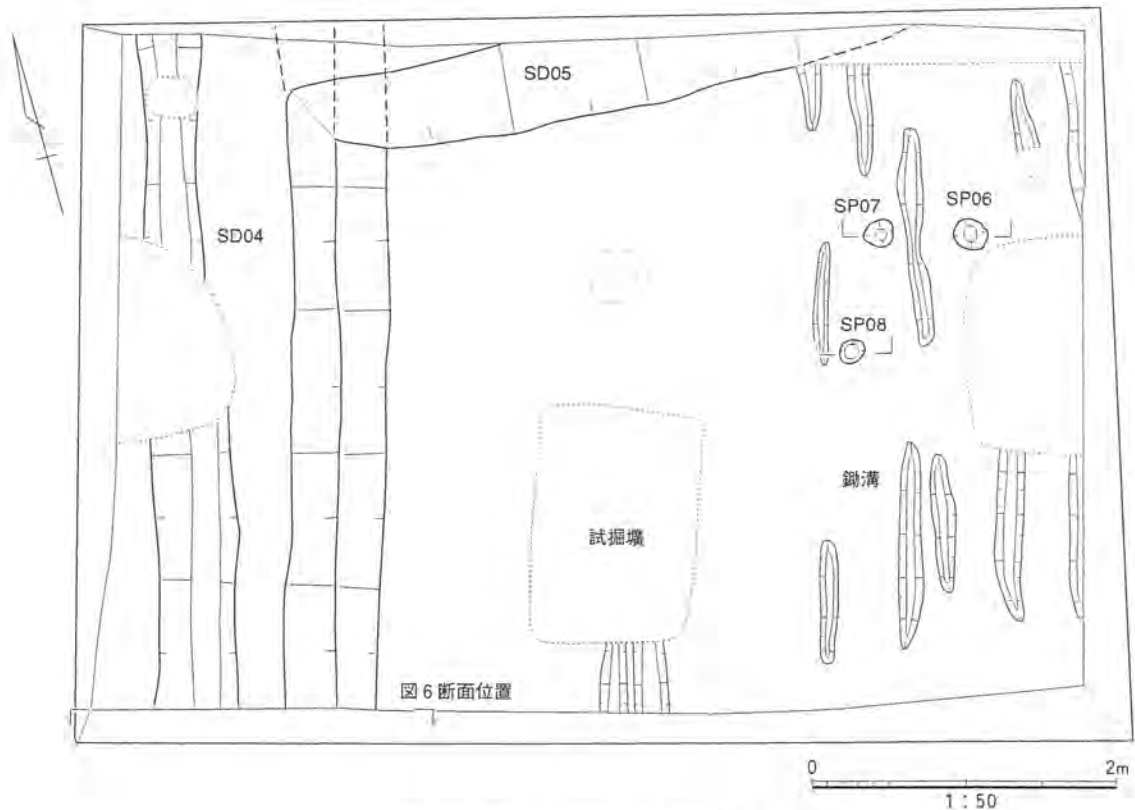


図5 第3層下面および第4層上面の遺構平面図

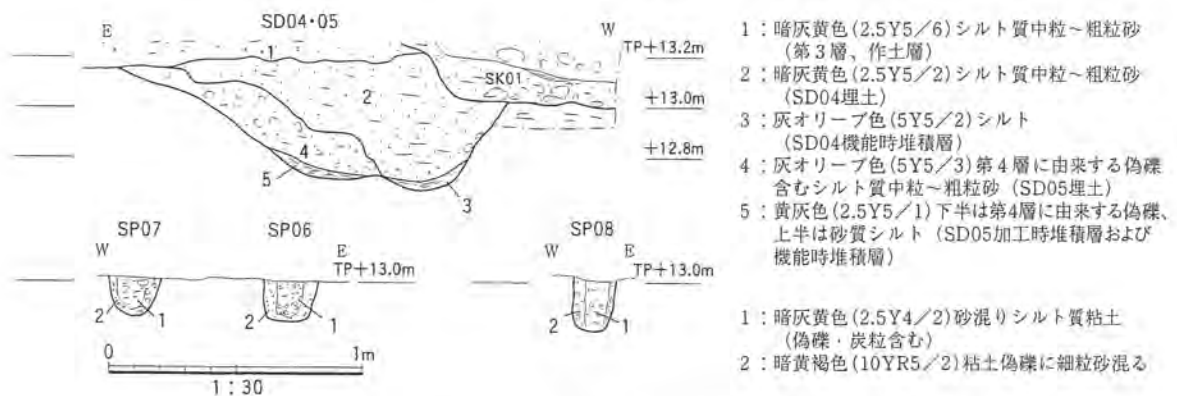


図6 SD04・05、SP06～08断面図(断面位置は図5に示す)

5層)、当初はSD04と重なる位置に存在していた南北溝と、L字もしくはT字状に連結していたと考えられる。中世前半とみられる土師器・須恵器・瓦器の細片が出土した。

SP06～08 調査区北東部で検出した柱穴で、堀形の平面形は直径0.2mの円形、深さは0.2m未満で、直径0.1mの柱痕跡を確認した(図7)。埋土が共通することから一連のものの可能性が高いが、他の柱穴は確認ができなかった。

ii) 近世(図7)

豊臣前期の遺物を含む第2層は、第1層に覆われて上面が遺存しており、上面でSK01・SD02・畠の畝間とみられる細長い窪みを、下面でSK03を検出した。

SK01 調査区南西端で一部を検出した土壌で、深さは0.5mある。下半に薄いシルトが堆積したの

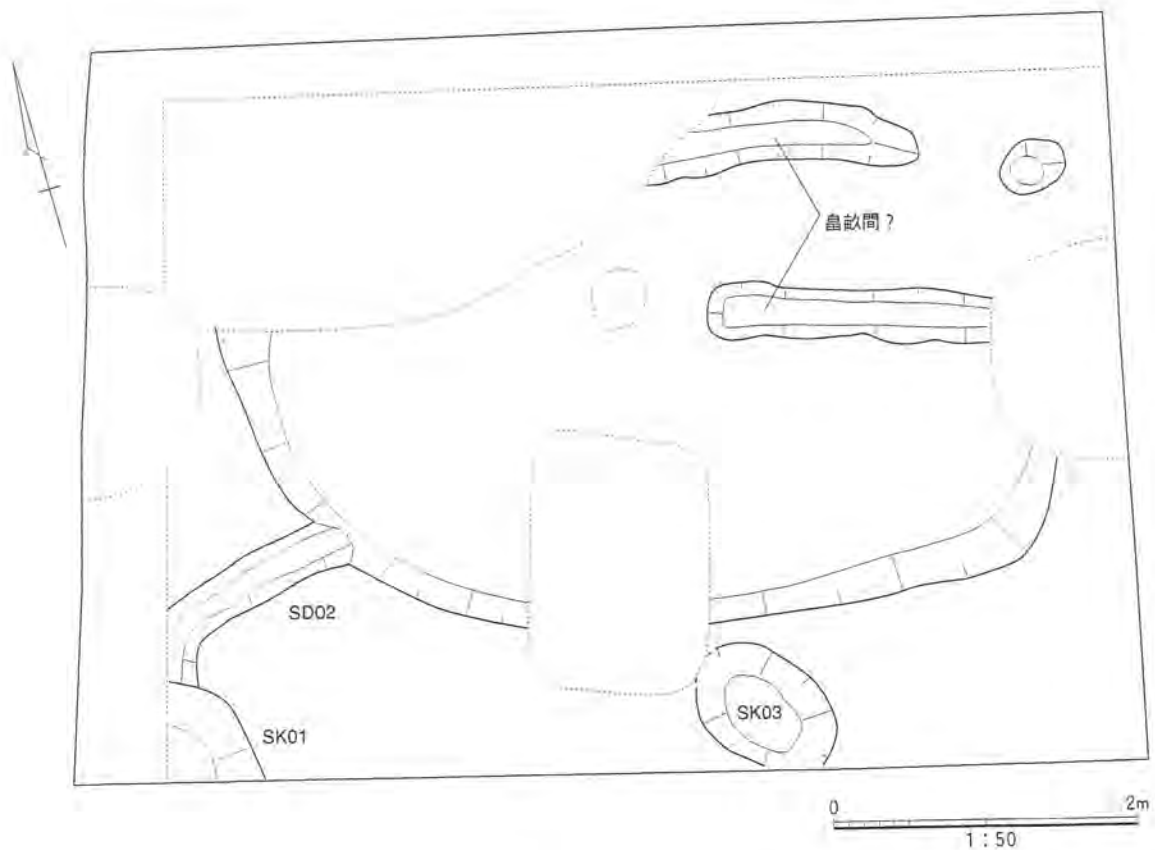


図7 第3層下面および第4層上面の遺構平面図

ち、第1層によって埋められていた。遺物は出土していない。

SD02 調査区西南部で検出した東西方向の溝である。幅0.3m、深さ0.1mあり、後述する畝に付属する水路の可能性はある。SK01に切られていた。

畝 調査区北半は南半より一段低くなっており、低い側の北半で東西方向の細長い窪みを2条検出した。窪みは幅0.3m、深さ0.1m未満で、底にはシルト～細粒砂の薄層が堆積していた。その後、第1層の整地層で全体が覆われていた。配置から畝の畝間とみられ、畝幅は0.8mと幅広である。

iii) SD04・05の位置づけ(図8)

今回の調査で検出した、中世前半の遺物を含む東西・南北溝(SD04・05)について、周辺の調査成果からその性格を検討する。

図8は過去の調査データから周辺の地山上面の地形を復元し、中世の遺構および遺物が多く出土した地点を示したものである。この図から判るように、調査地のすぐ南側には北東-南西方向の谷が存在する。OS97-1次調査では谷の西北半部分を検出しており、深さ5m以上あり、大坂城の三ノ丸造成によって埋立てられるまでは、粘土・砂の互層によって徐々に埋まっていたことが判明している。したがって、この谷は豊臣前期以前までは存在し、周辺の土地利用に大きな影響を与えていたことが予想される。

今回の調査で検出したSD04・05も、位置関係からこの谷と連結していた可能性が高い。また、調査地以南に広い平坦地を想定することは難しく、検出したSP06～08も作業小屋などの小規模な建物

であろう。SD05を南東側の屋敷地を囲む区画溝とみることは難しい。

谷を挟んで南側の平坦地では、SD04・05と時的に重なる可能性のある遺構・遺物が複数の調査で検出されている。特にOS86-35次調査地では、柱列や井戸・土塋などとともに、瓦が多く出土しており、瓦葺きの施設を含む居住域が一带に存在したことが想定されている[大阪市文化財協会1999]。一方、今回の調査地西北隣のOS88-83次調査地では、詳細な時期は不明であるが、豊臣期の整地層下で幅4.5mの東西方向の大溝とともに、その際に据えられた礎石1個が検出されている[大阪市文化財協会1990]。今回検出した溝との関係は不明であるが、今後の調査でも注意する必要がある。

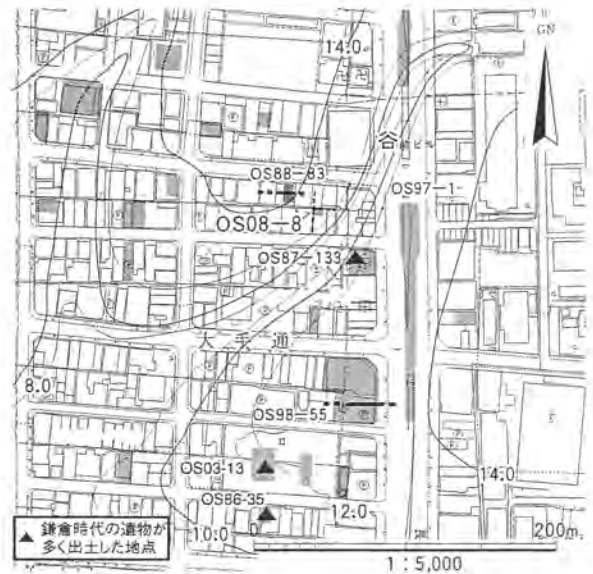


図8 調査地周辺の地山上面の古地形と中世の遺構

3)まとめ

今回の調査地は、豊臣前期まで存在していた谷の縁辺に位置しており、中世後半から豊臣前期までは耕作地に利用されていたことが判明した。また、中世前半には南北・東西方向の溝が存在していた。谷と係わって掘削されたものと考えられるが、その性格については、今後の周辺の調査で明らかにしていく必要がある。

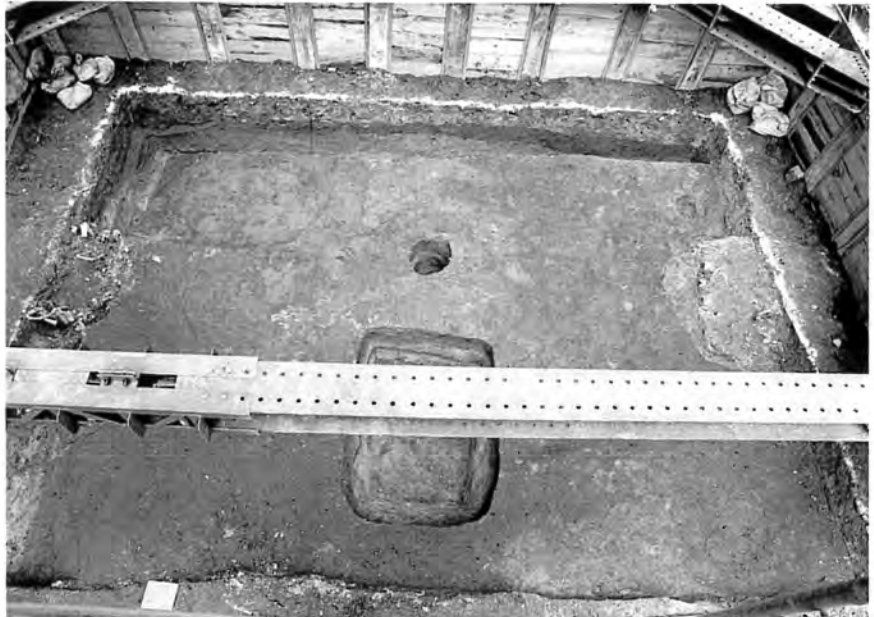
参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1990、『昭和63年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

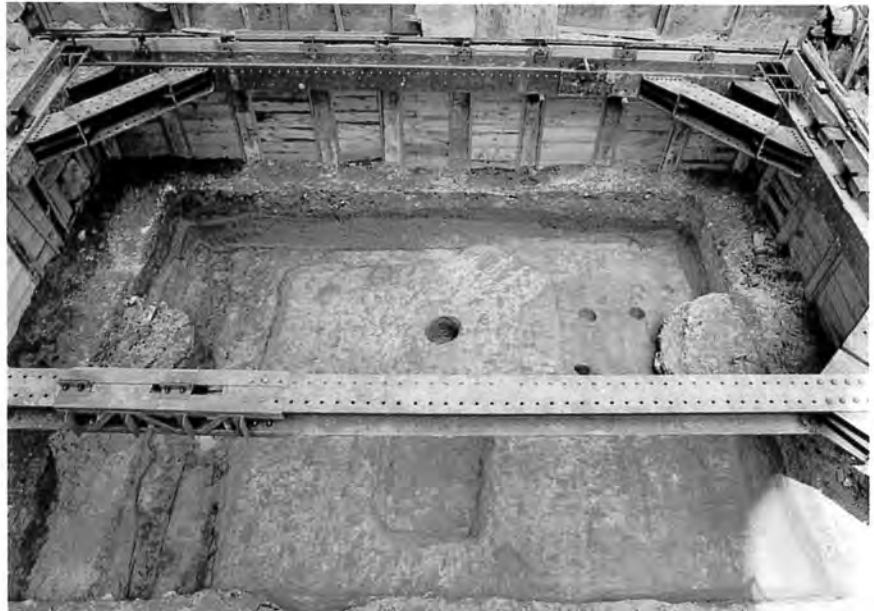
大阪市文化財協会1999、『大坂城』Ⅳ

2003、『大坂城跡』Ⅶ

第2層上面検出状況
(南から)



第2層上面検出状況
(南から)



SD04(南東から)



大坂城跡発掘調査(OS08-10)報告書

調査個所	大阪市中央区東高麗橋28-3
調査面積	50㎡
調査期間	平成20年10月27日～11月1日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	文化財研究部次長 南 秀雄

1) 調査に至る経緯と経過(図1・2)

調査地は豊臣氏大坂城跡惣構の西北隅に位置し、東横堀川から東へ約80m、土佐堀通から南へ約200mのところである。もっとも近接しているのは、道を挟んだ北向いのOS07-8次調査で、弥生・平安・鎌倉の各時代の遺構があり、豊臣期には畠であった[大阪市文化財協会2007a]。

今回の調査成果と関連し、周辺の豊臣期の遺構で注目されるのは、堀・堤とも呼ばれる、規模の大きな溝や土盛の存在である。まず、北北西約140mのOS89-148次調査では、下端幅5.0m、上端幅3.0m、高さ1.5mの東西の堤状盛土があった。東で南に13度振り、1596年の惣構築造期の遺構と推定されている[大阪市文化財協会2003]。また、南約130mのOS93-47次調査では、幅3.0~6.0m、深さ2.0mの東西の溝があった。東で南に7度振り、1598年の三ノ丸造成で埋められた豊臣前期の遺構である[大阪市文化財協会2003]。OS93-47次西隣のOS87-100次調査地では、幅2.6m、深さ0.6mの溝があり、溝の東には高さ0.4mの盛土があった。この遺構は北で東に6度振り、豊臣前期である[大阪市文化財協会2003]。南約200mのOS97-45・07-6次調査地では、幅7~9m、深さ1.3~1.9m、推定長29mの南北の溝があった。方向は北で東に1~2度振っており、豊臣後期の途中で埋められている[大阪市文化財協会2007b]。OS97-45次調査地では、この溝の東に下端幅1.5m以上、上端幅0.8m以上、高さ0.8mの土塁または堤状遺構があった。この遺構が築かれたのは豊臣前期である[大阪市文化財協会1999]。

目下のところ、以上の溝や土盛遺構が集まるのは、北は石町通で南は大手通、西は東横堀で東は松屋町筋の南北約350m、東西約150mの地域である。主体は豊臣前期にあり、埋められた後は惣構内の他の地域と同様、建物などが密に設けられる。

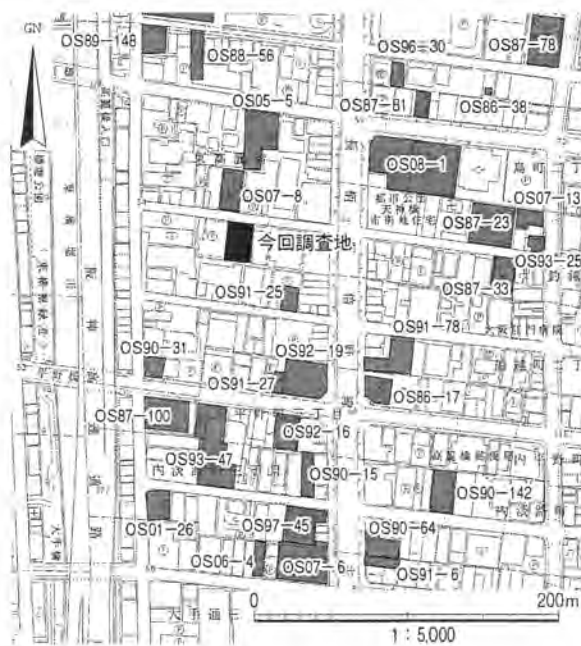


図1 調査地位置図

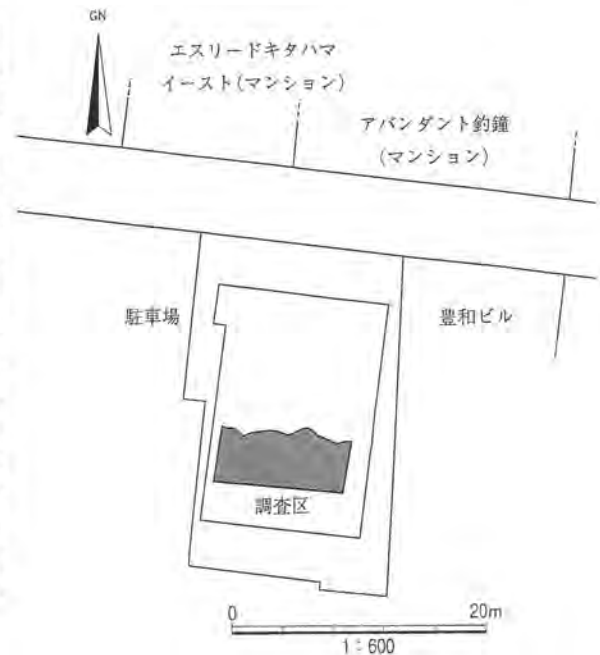


図2 調査区配置図

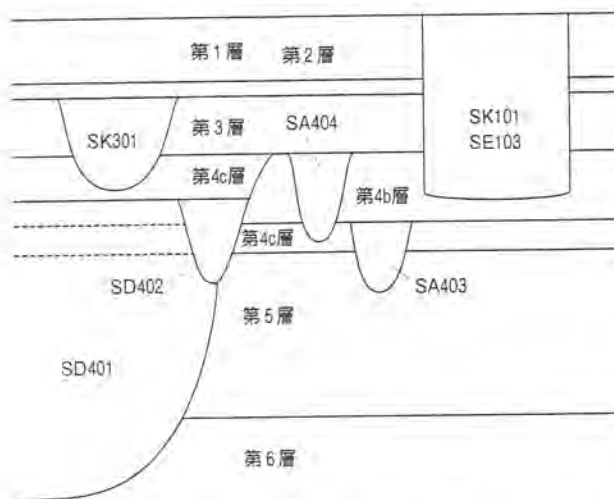


図3 地層と遺構の関係

本調査は、大阪市教育委員会の試掘を基に調査対象地域を敷地奥の5m幅に設定し、建物施工者がここをGL-2.3mまで、他を工事敷のGL-2.8mまで掘削した状態で着手した。その後、横矢板より控えを取り、50~60cm下の第4層上面まで全面的に調査した。その下は東西約5.5m、南北2mの間を掘り進めたところ、大きな溝状遺構SD401に気づき、急遽、その場所に南北3m、東西2mのトレンチを設定して第6層まで掘削した。したがって、トレンチの場所と建物杭の部分を除き、敷地

内では第4層以下、つまり豊臣前期以前の遺構が残っている。

報告で使用した北方位は道路現況図より合成した座標北、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第1層：明黄褐色(10YR7/6)中粒砂層で層厚は30cm以上である。シルトの小さな偽礫を含む。豊臣後期あるいは大坂夏の陣直後の可能性がある整地層である。図5の18~22が出土した。

第2層：黒褐色(10YR3/1)の炭・焼土層で層厚は8cm以下である。第1・3層の出土遺物から大坂夏の陣の焼土層の可能性がある。調査区西南部のみに分布する。

第3層：褐色(10YR4/4)細粒~中粒砂層で層厚は10~52cmである。炭片と小礫が入り、上面は緩やかに凹凸している。豊臣後期である。図5の13~15が出土した。

第4a層：黄褐色(10YR5/6)シルト質粗粒~極粗粒砂層などで層厚は45cmである。SD402以北に分布する。

第4b層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂層などで層厚は35~60cmである。SD402の南で厚い。SA404の柱穴、SD402は本層上面から掘られている。

第4c層：にぶい黄色(2.5Y6/4)細粒砂層で層厚は23cm以下である。SA403の柱穴は本層上面から掘られており、SD401もその可能性が高い。

第4a~4c層では肥前陶器は出土しておらず、豊臣前期と推定される。図5の7・8が出土した。

第5層：灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細粒~中粒砂層と暗褐色(10YR3/3)小礫質中粒砂層からなる。層厚は150cm以上である。北から南へ深くなる大きな遺構の埋土の可能性がある。本願寺期以前で、図5の1~6をはじめ、瓦器・中世陶器・緑釉陶器・黒色土器などが出土した。

第6層：黄褐色(2.5Y5/4)砂礫層で層厚は40cm以上である。時期はわからない。

ii) 遺構と遺物

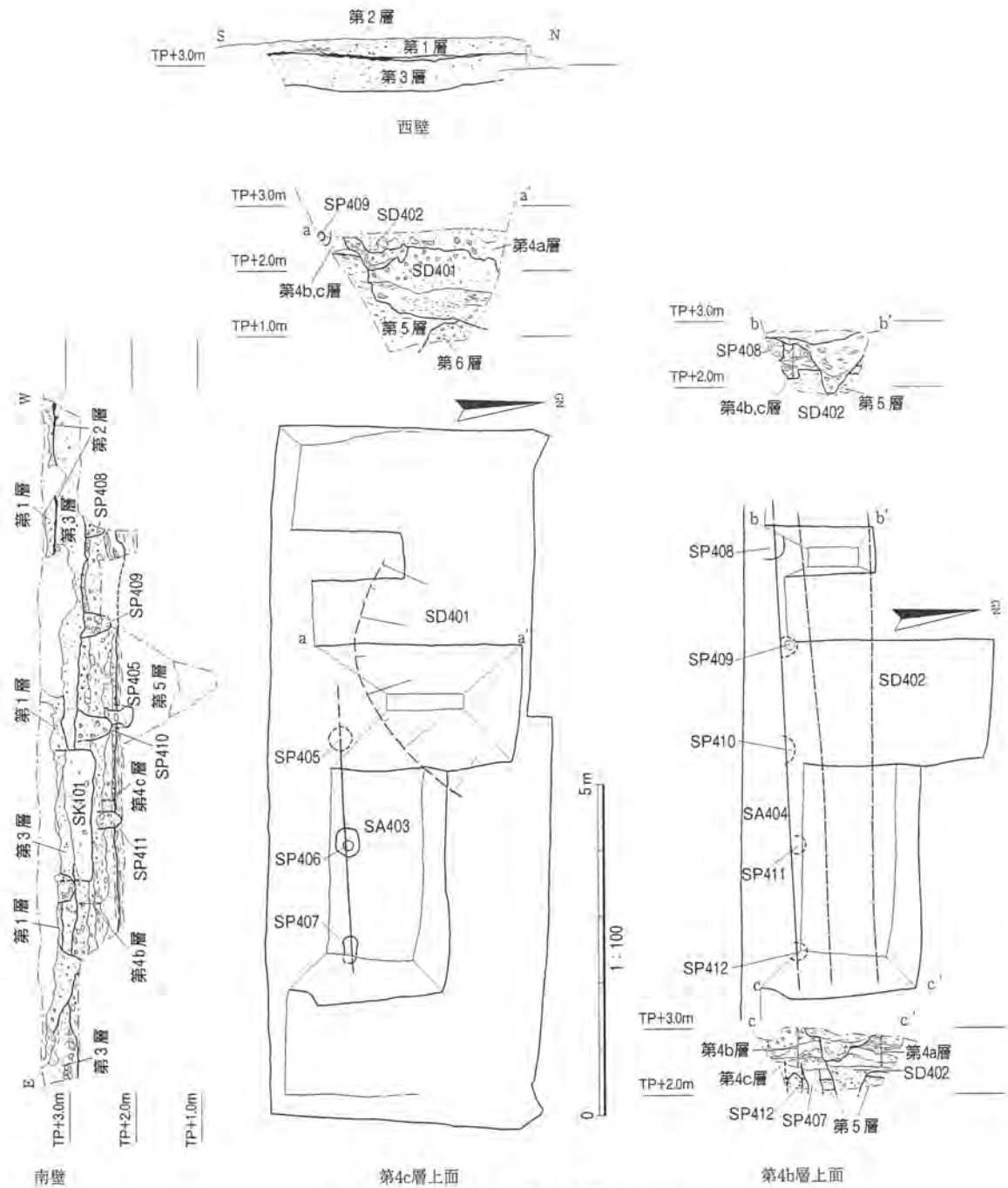


図4 地層断面図と第4層遺構平面図

a. 第4層関連の遺構と遺物(図4・5)

大きく見ると(SD401・SA403)→(SD402・SA404)に変遷する。

SD401は深さ1.2m以上あり、大きな遺構の南端の可能性はある。SA403や上層のSD402・SA404の位置がSD401の上端とほぼ合っていることもそのように推定される理由で、この付近が南北の境となっていたようである。SD401は、南北方向の大きな溝の南端の可能性はある。SD401の下層は水成層が従、埋め土が主で、その上は一気に埋められている。SD401の南東には3個の柱穴があり、塀SA403とした。掘形は直径0.35~0.40m、深さ0.45m以上、柱痕跡は直径約0.15mである。柱間は1.6mで、方向は東で南に4度振る。SD401とSA403は共存していた可能性がある。

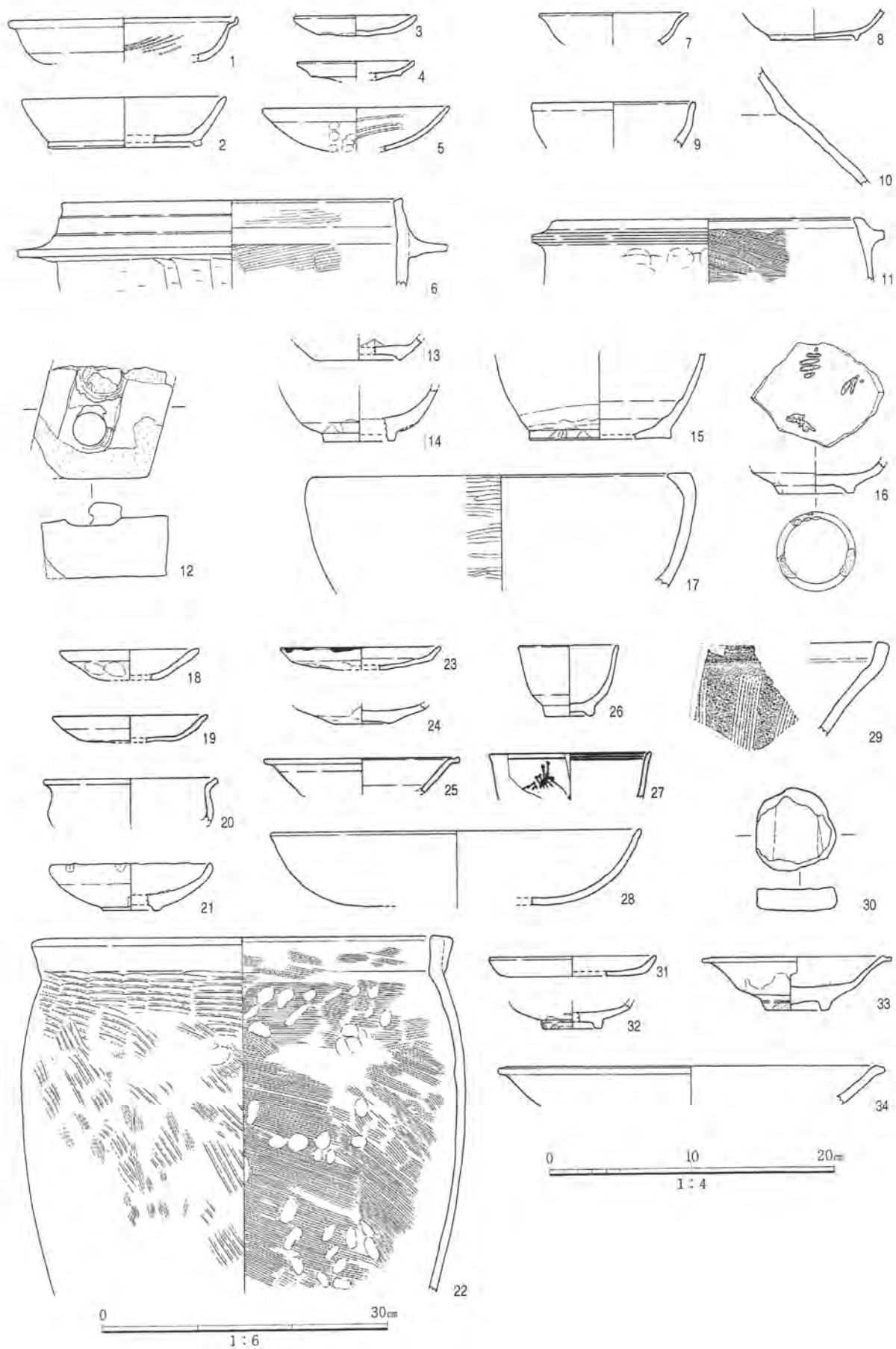


图5 出土遺物実測図

第5層(1~6)、第4層(7·8)、SD401(9~12)、第3層(13~15)、SK301(16·17)、第1層(18~22)、SK101(23~30)、SE103(31·32)、SK102(33·34)

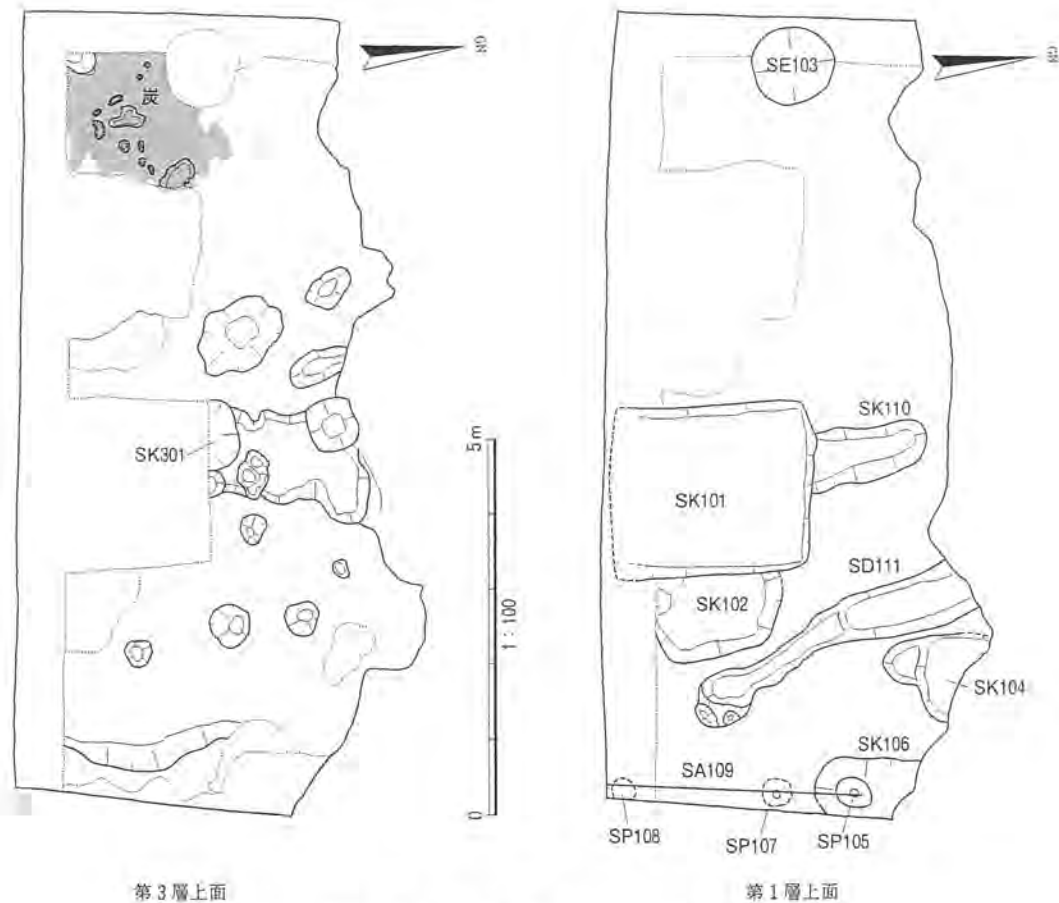


図6 第3層、第1層上面検出遺構平面図

SD401からは図5の9～11が出土した。9は瀬戸美濃焼碗、10は両面に褐色の釉が掛かった産地未詳の輸入陶器壺の肩部、11は瓦質土器の羽釜である。12は鬼瓦の左脚下端部で、南北トレンチの第4c層～第5層出土であるが、SD401の遺物の可能性がもっとも高い。SD401・SA403は豊臣前期の遺構である。

第4b層を盛った後にSA404とSD402が造られる。西側の小トレンチ断面ではSP408の掘形をSD402が切っており、造られたのはSA404→SD402の順で、併存もあり得る。また、SA404がある南側が高く、トレンチ東壁ではSD402の側と約0.5mの段差が見られる。SD402は、断面によれば幅0.65～約1mで、深さは0.6m以上である。柱を建てた布掘りの可能性も考えられるが、確認できていない。SA404は4間分6.2mが検出された。柱穴の大部分は南壁断面で確認したもので、SP410は直径0.5m、深さ0.55m、SP411は深さ0.7mある。方向は、下層のSA403と同様に東で南に3～4度振る。SA404とSD402は豊臣前期の遺構である。

b. 第4層上面～第3層上面の遺構と遺物(図5・6)

第4層上面は緩やかな凹凸があり、とくに遺構はなかった(写真2枚目上段)。次の第3層上面も緩やかな凹凸があり、浅い窪みが散在していたが、遺構はSK301のみである。東西0.93m、深さ0.40mで、下半は水漬きの粘土層、上半は炭層を挟む埋め土である。SK301からは図5の肥前陶器皿16、瓦質土器火入17が出土した。16の見込みに残る目跡は2枚貝によるものである。

調査区南西には第2層の炭・焼土が分布し、第3層上面で堅く焼けた焼土面があった。SE103の東側の南北1.2m以上、東西1.8m以上の範囲である。第4層上面と第3層上面は豊臣後期であるが、建物などがなく生活臭に乏しい。

c. 第1層上面検出の遺構と遺物(図5・6)

第1層上面検出で古い遺構は、中央部の穴蔵SK101とそれに切られるSK102、東端のSA109とSK106、西端のSE103などである。

SK101は南北2.8m、東西2.25mのきれいな四角形で、調査面からの深さは0.9mある。図5の23～30が出土した。23は土師器皿、24・25は肥前陶器皿、26は同小碗、28は同鉢、27は肥前磁器碗、29は丹波焼播鉢、30は平瓦を加工した円板である。これらからSK101は17世紀中頃と推定される。SK102は南北1.65m以上、東西1.15m以上で、深さ0.27mである。肥前陶器皿33・34が出土した。

SA109は柱穴3個からなり、建物の可能性もある。北端のSP105では直径約10cmの柱が残っていた。SE103は直径1.1mで、土師器皿31と肥前陶器32が出土した。

d. 各層出土の遺物(図5)

土師器杯A1、須恵器杯B2、土師器皿3、瓦器皿4、同碗5、瓦質土器羽釜6は第5層出土である。1・2は8世紀、5は13世紀、6は15世紀頃のものであろうか。瀬戸美濃焼ソギ皿13、肥前陶器碗14、同壺15は豊臣後期の第3層の出土である。土師器皿18・19、肥前陶器碗20、同皿21、土師器湊焼甕22は第1層の出土である。大坂夏ノ陣前後の陶磁器の特徴を有す。

3)まとめ

今回の調査では、極めて限られた広さであるが、豊臣前期から後期への遺構の変遷を追うことができた。注目されるのはSD401をはじめとする豊臣前期の遺構群で、これらは防御機能をもった、大きな屋敷の区画施設の可能性も考えられる。周辺では類似の遺構が点々と見つかっており、松屋町筋の東とは異なり、城下町の中で特殊な役割と景観を有した地域であった可能性が想定される。これらは惣構や三ノ丸が築造される頃、大方の機能を終え、埋められたり壊されたようである。周辺地域では、上記の遺構群に留意して今後、調査をしていく必要がある。また、中世から古代の遺構と遺物も多い地域で、それに対応した発掘調査が求められる。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1999、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1997年度-』

2003、『大坂城跡』Ⅶ

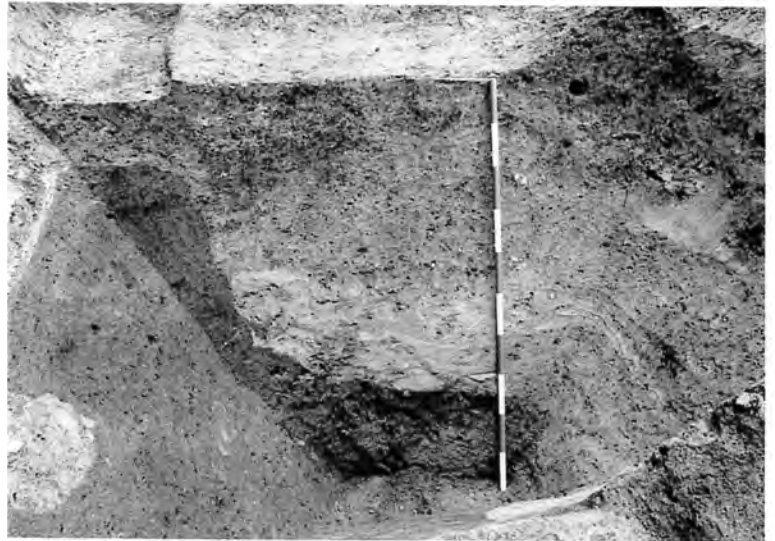
2007a、『日本エスリード株式会社による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS07-6)報告書』

2007b、『日本エスリード株式会社による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS07-8)報告書』

第4層の遺構群
(東より)



SD401断面
(東より)



SD402・SP407・SP412断面
(西より)





第1層上面全景
(東より)



第3・2層上面全景
(東より)
※奥の炭層が第2層



第4層上面全景
(東より)

大坂城跡発掘調査(OS08-11)報告書

調査個所 大阪市中央区島町2丁目18-2
調査面積 45㎡
調査期間 平成21年2月13日～2月18日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、清水和明

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城跡の西北部にあり、島町通が西に向かって急勾配で低くなり、内骨屋町筋と交差する手前に位置する(図1)。調査地の東側100m以内に位置するOS87-26・90-47次調査地では、現在の街区の方位と大きく異なる大坂本願時期の溝が見つかり、それが豊臣前期に入って、現在に近い町割りで城下町が整備され始めたことが明らかになっている。また徳川期では、90-47次の井戸から18世紀初頭ころの茶会席用の器とともにそれらを焼いたとみられる窯道具が見つかっており、近世後半の大坂における陶器生産にかかわる重要な発見となっている。さらに、87-26・89-76次調査では、土壌に多量の焼土・陶磁器・瓦が廃棄された状態で見つかり、18世紀前葉の陶磁器から1724(享保9)年の「妙知焼」との関連が想定されている[大阪市文化財協会2003]。

また、北側50m付近のOS85-28次調査地では、大坂本願時期の大規模な南北方向の堀が見つかり、豊臣期では87-78次調査の成果などによって、前期には魚市場をはじめとする町屋があり、後期には武家屋敷へ変化したことが確認されている。西側のOS86-38・87-81次調査地は、上町台地の西側にあつて大川の南岸と東横堀川が接する地点の東側に当り、室町時代の遺構や遺物が見つかることから、中世「渡辺」との関連も推測されている。南側ではOS87-33次調査地で古代の地層から飛鳥時代中頃の土器とともに埴塙状土製品や鞆羽口など金属製品の生産や加工と関係する資料が見つかることが特筆される[大阪市文化財協会2003]。このように、本調査地の周辺は従前から調査

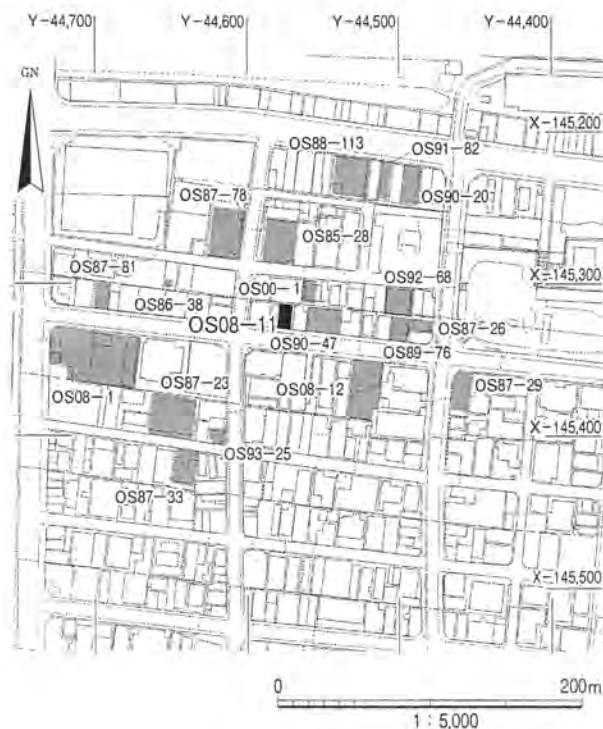


図1 調査地位置図

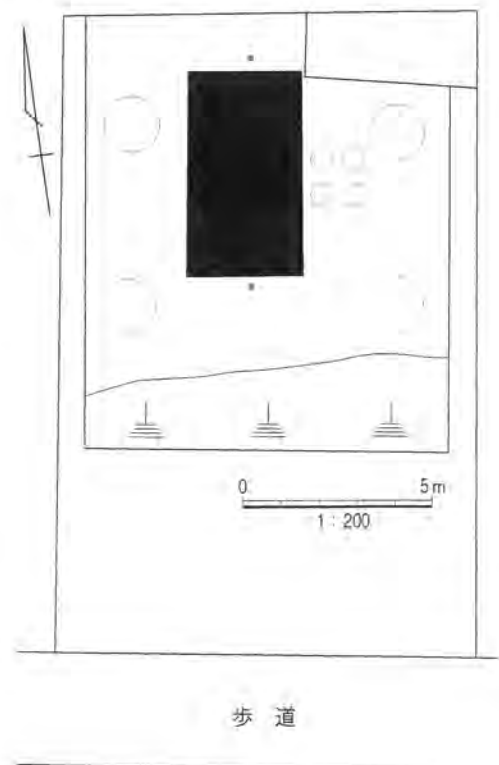


図2 調査区位置図

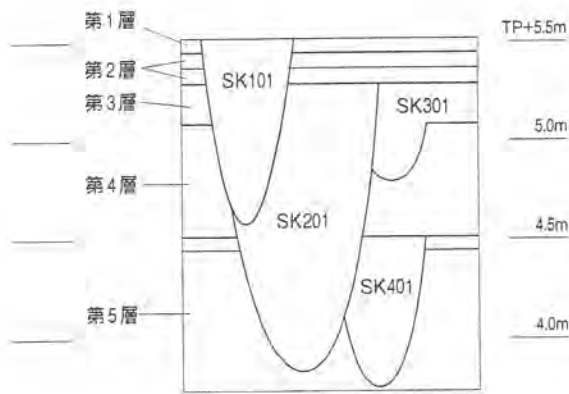


図3 層序模式図

が繰り返し行われ、古代から近世にかけての歴史的景観の復元が進みつつある地域である。

本調査地は大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、現地表面下約2mで見つかった焼土層および下位の遺物包含層の調査を主目的とした(図2)。事業主により、あらかじめ焼土層上面まで重機掘削を済ませ、平成21年2月13日から調査を開始した。この焼土層は、後述のように焼土偽礫や焼壁、焼けた瓦などを廃棄した徳川期の土壌

の埋土であり、16日まで同時期の遺構群を調査した。その後、下位の地層を人力で掘削し、豊臣期および大坂本願時期の遺構群を調査して、18日にすべての調査作業を終了した。

以下、本報告に掲載した図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP+○mと表記した。本文で用いた示北記号は図1が座標北、その他は磁北である。

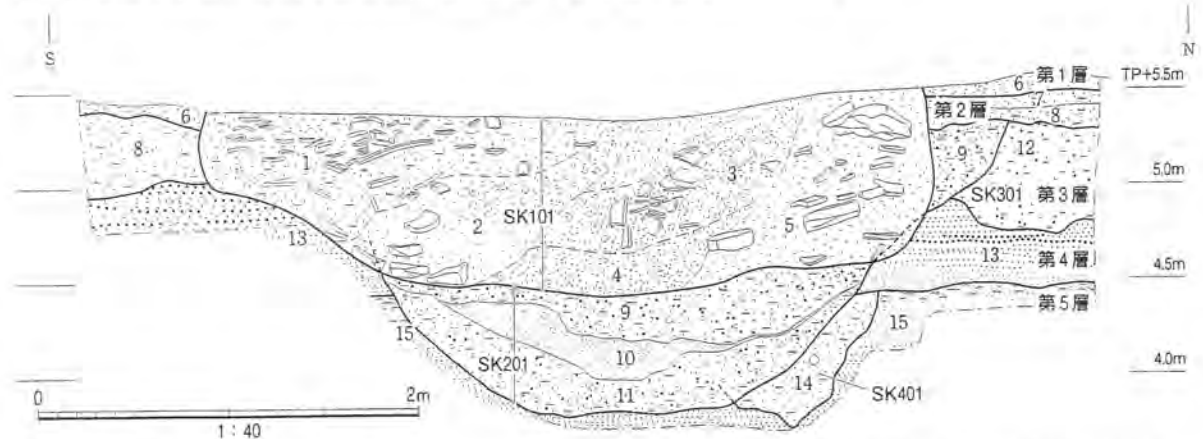
2) 調査の結果

i) 層序(図3～5)

確認された地層のうち、最も新しいものは後述のSK101の埋土である。18世紀前葉の陶磁器のほか大量の瓦、焼土、焼壁が廃棄されているが、基本層序としては扱わない。

第1層：オリブ褐色(2.5Y4/6)わずかにシルト質中粒砂層の整地層で、層厚は10cm以内である。

第2層：調査区北部では上下2層に細分された。上部は含炭化物、灰黄褐色(10YR4/2)わずかにシルト質中粒砂層で暗色化した古土壌である。下部は黄褐色(2.5Y5/3)わずかにシルト質細粒～中粒砂層の整地層である。南部では暗色化した上部層を確認できなかった。層厚は北部で20cm以内、南部で



- | | |
|---------------------------------------|------------------------------------|
| 1: 含瓦、黄灰色(2.5Y5/1)シルト質中粒砂 | 9: 含15層偽礫、明黄褐色(2.5YR6/6)シルト質中粒～粗粒砂 |
| 2: 含瓦、焼土偽礫、赤褐色(5YR4/6)中粒砂 | 10: 黄褐色(10YR5/6)細粒砂(水成層) |
| 3: 含瓦、焼壁、焼土偽礫、赤褐色(5YR4/6)中粒砂 | 11: 含15層偽礫、明黄褐色(10YR6/6)シルト質中粒～粗粒砂 |
| 4: 含瓦、焼土偽礫、黄灰色(2.5Y5/1)中粒砂 | 12: 褐色(10YR4/4)細礫混りわずかにシルト質中粒砂 |
| 5: 含瓦、焼壁、赤褐色(5YR4/6)中粒砂 | 13: におい黄色(2.5Y6/4)細粒砂～細礫(水成層) |
| 6: オリブ褐色(2.5Y4/6)わずかにシルト質中粒砂 | 14: におい黄色(2.5Y6/4)シルト質中粒砂 |
| 7: 含炭化物、灰黄褐色(10YR4/2)わずかにシルト質中粒砂(暗色化) | 15: 最上部は褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂(暗色化) |
| 8: 黄褐色(2.5Y5/3)わずかにシルト質細粒～中粒砂 | 下部は明黄褐色(10YR6/6)細粒～中粒砂(水成層) |

図4 西壁地層断面図

50cm以内である。

第3層：褐色(10YR4/4)細礫混りわずかにシルト質中粒砂層の作土で、層厚は約20cmである。肥前陶器が出土したSK201をはじめとする豊臣後期の遺構は本層の上面で検出された。また、調査区の西北隅では、地層断面の観察のみであるが、本層下面のSK301を確認した。

第4層：にぶい黄色(2.5Y6/4)細粒砂～細礫を主体とし、北へ進行する斜行型ラミナが認められる水成層である。層厚は60cm程度。本層からは時期不詳の近世瓦片が出土した。

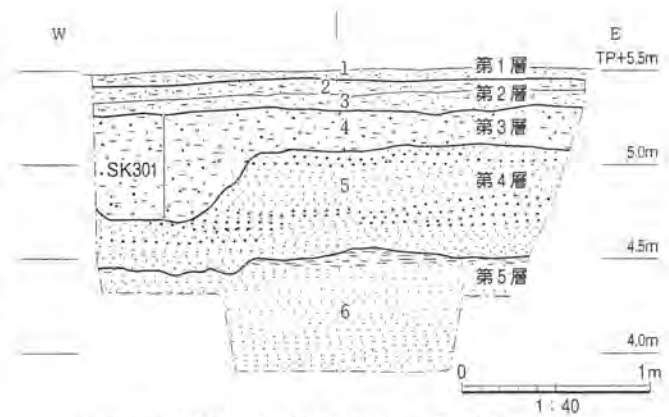
第5層：明黄褐色(10YR6/6)細粒～中粒砂を主体とする水成層で、上方へ細粒化している。最上部の層厚10cm程度は褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂層となり、やや暗色化し古土壌とみられる。層厚は80cmまで確認したが、さらに下位へ続いている。本層の上面でSK401を確認した。

ii) 遺構と遺物

以下に古い時代から順におもな遺構と遺物を記載する。

a. 豊臣期以前の遺構(図6：左)

SK401 本調査地で確認した最も古い時代の遺構である。第5層最上部のやや暗色化したシルト質細粒砂層上面から掘込まれた土壌で、長さ0.7m以上、幅0.4mである。埋土はにぶい黄色(2.5YR6/4)



- 1: オリーブ褐色(2.5Y4/6)わずかにシルト質中粒砂
- 2: 含炭化物、灰黄褐色(10YR4/2)わずかにシルト質中粒砂(暗色化)
- 3: 黄褐色(2.5Y5/3)わずかにシルト質細粒～中粒砂
- 4: 褐色(10YR4/4)細礫混りわずかにシルト質中粒砂
- 5: にぶい黄色(2.5Y6/4)細粒砂～細礫(水成層)
- 6: 最上部は褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂(暗色化)
下位は明黄褐色(10YR6/6)細粒～中粒砂(水成層)

図5 北壁地層断面図

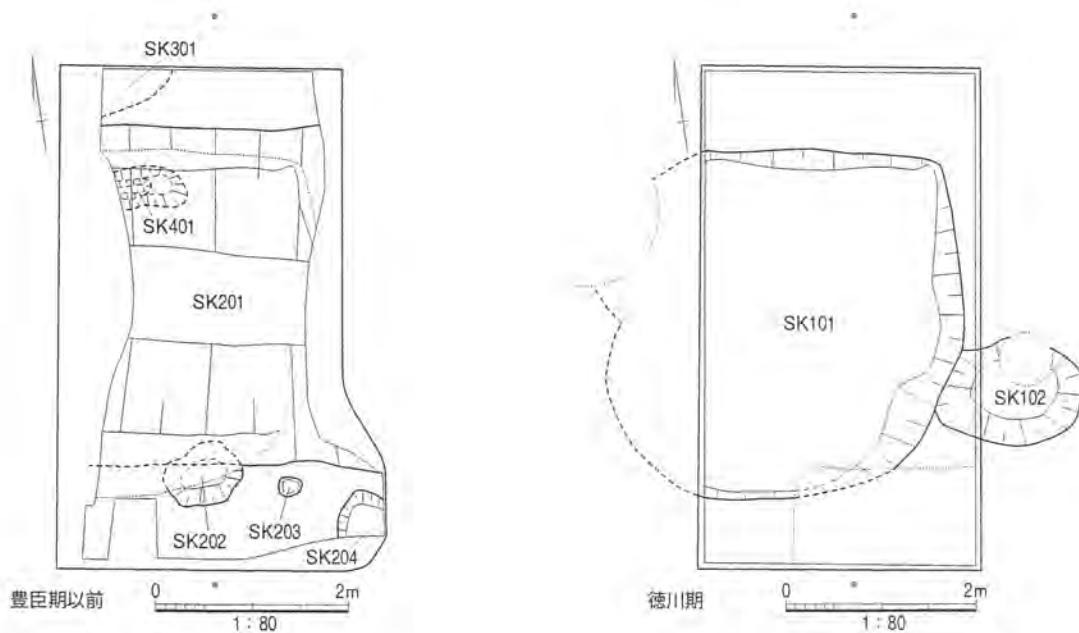


図6 遺構平面図

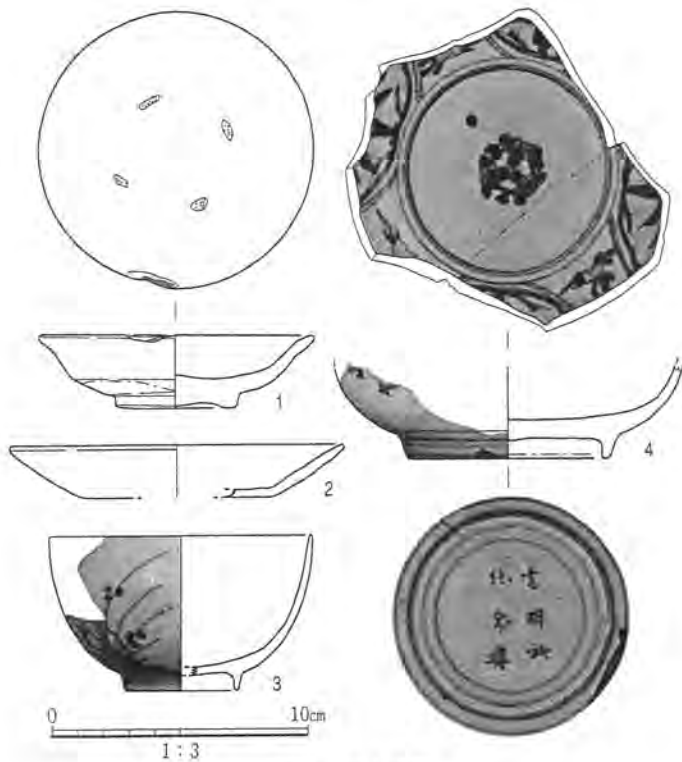


図7 出土遺物

SK201(1・2)、SK101(3・4)

中粒砂層で、加工時堆積層とみられる。その上位は細粒砂を主体とする水成層で、さらに明黄褐色(10YR6/6)シルト質中粒～粗粒砂層によって埋戻されている。この埋戻し土から肥前陶器皿1や瀬戸美濃焼灰釉陶器皿、備前焼播鉢、土師器皿2、瓦片などが出土している。1は三日月高台の脇から内部にかけて無釉で、口縁部のわずかに欠けた箇所にススが付着しており、灯明皿に転用されたものであろう。2は平坦な底部から直線的に口縁部へ広がる土師器皿である。これらの遺物から、SK201の廃絶時期を豊臣後期に求められる。

SK202～204 そのほかSK201の南側に小規模な土壙が3基見つかった。SK204から鉄釉を掛けた瀬戸美濃焼碗、土師器の細片が出土している。これらもSK201と同様の時期であろう。

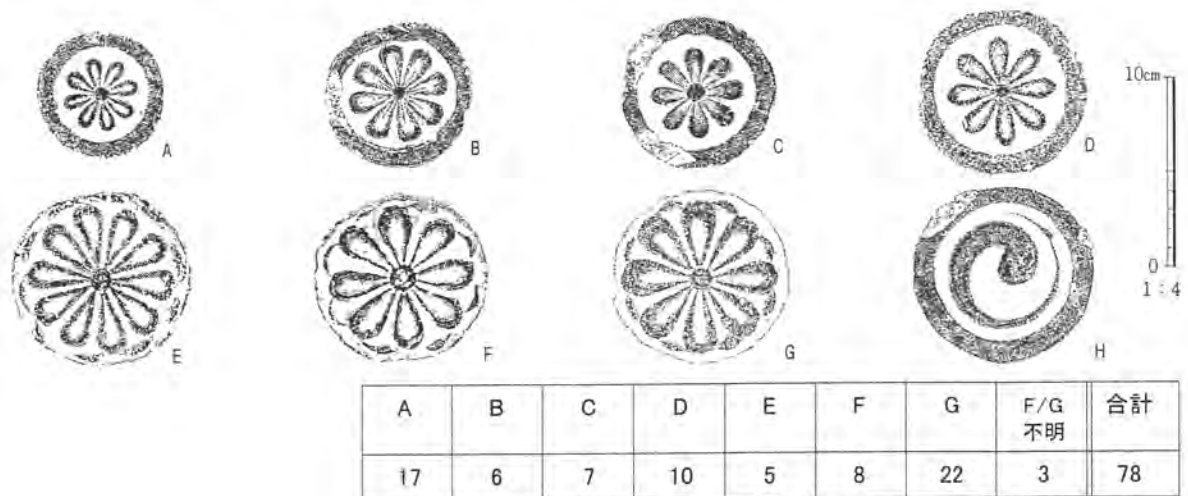


図8 SK101出土菊丸瓦・小型軒丸瓦

シルト質中粒砂層で、時期不詳の中世平瓦片が出土した。

SK301 調査区北壁と西壁の地層断面で確認した。平面の形状は不明だが、地層の観察からは第3層下面の遺構である。本遺構内の出土遺物は確認できなかった。

SK201～204は第3層上面遺構である。

SK201 幅3.6m、深さ1.4m弱で、西側がやや深くなっている。確認できた長さが十分ではないが、現在の島町通にはほぼ平行するため東西方向の溝の可能性がある。OS90-47次調査など周辺で関連する遺構は見つかっていない。埋土の基底は下位層起源の偽礫を含む明黄褐色(10YR6/6)シルト質

b. 徳川期の遺構(図6：右)

SK101 南北3.7m、東西3.8mの土壇で、西部は調査区外に続くが、精査によって平面形のみを確認した。北側は隅丸方形、南側はより丸みを帯びている。深さは最深部の比高が1.1mで、北へ向かって傾斜し、埋土も北から順に埋戻されている。埋土は廃棄の単位に応じて黄灰色(2.5Y5/1)シルト質中粒砂層や赤褐色(5YR4/6)中粒砂層からなり、被熱した瓦、焼けた壁土、焼土偽磔を多量に含んでいることから、火災を受けた建物の片付けをしたゴミ穴と考えられる。出土した陶磁器には肥前磁器染付碗3・筒型碗・皿4・白磁碗、肥前陶器皿・刷毛目碗、備前焼壺、丹波焼甕の細片がある。18世紀前葉のものである。3は底部からやや内湾気味に立ち上がる碗で、高台内に「□[太カ]明年製」の銘がある。4は肥前磁器染付皿で、高台内に「太明成化年製」の銘がある。瓦は巴文軒丸瓦・唐草文軒平瓦と平瓦・丸瓦が多量に捨てられていた。また、2種類の鬼瓦、方形飾り瓦のほか、輪違い瓦・菊丸瓦などの棟込瓦が多数見つかっている。菊丸瓦は78点が出土した。瓦当面の大きさと花卉・中房の特徴から7型式に大別できる(図8：A～G)。それぞれの出土個体数は図中に示した。A～D型式は花卉の周囲に外区を設け、花卉は8弁である。E～G型式は外区を持たずA～D型式に比べ大振りな瓦当面である。F・G型式は8弁、E型式は唯一10弁の花弁に間弁を配している。ほかに一つ巴文の軒丸瓦が4点出土した(図8：H)。どれも筒部の大半を欠失するが、棟込瓦の差込部と異なり側縁が平行している。そこで小型の軒丸瓦としたが、棟積みの最下部に使われる薨巴などの可能性もある。これらの瓦は黄灰～赤褐色を呈するものが多く、屋根土が焼け付いたものも少なくない。壁土片は内外両面が残っているものがなく、厚さを確定できないが、残存する最も厚いもので15cmに達し、内部に木舞の痕が空洞になって残っている。分厚いものは土蔵の可能性もあろう。やはり被熱している。

SK102 SK101の東側に位置する。東西1.6m、南北1.1mの楕円形で、西側をSK101によって切られている。深さは0.1m弱で、埋土はSK101と同様に焼土を多く含んでいる。出土遺物には肥前磁器染付蓋、肥前陶器、備前焼壺、丹波焼甕の細片があり、SK101と同様の時期であろう。

3)まとめ

豊臣期以前では、後期に廃絶された溝と考えられるSK201が注目され、周辺で連続する溝は未検出であるが、豊臣期の島町通に平行して掘削された可能性がある。また、さらに遡って複数の層準で遺構が検出された。最も古いSK401は時期不詳であるが、中世に遡る可能性がある。

徳川期の調査では、18世紀前葉に被災した建物のゴミを廃棄した大型の土壇SK101が見つかった。周辺調査で「妙知焼」との関連が指摘されているが、本例はそれを補強するものである。被災建物の棟数は不明であるが、菊丸瓦など棟込瓦が多く見つかっている特徴があり、分厚い壁土の存在からも、土蔵など大型建物が付近に存在していたことが想定される。今後、周辺域の調査では徳川期の建物の存在にも注意する必要があるだろう。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ

SK201ほか掘削状況
(南から)



SK201埋土断面
(西から)



SK101掘削状況
(南から)



大坂城跡発掘調査(OS08-12)報告書

調査個所 大阪市中央区島町2丁目29
調査面積 20㎡
調査期間 平成21年2月10日～2月14日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、松本啓子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は現在の大阪城の北西にあって、豊臣期には谷町筋から東横堀川の間には築かれた大坂城惣構の北部に当る。本調査地が南に接する東西道路は船場地域を結ぶ豊臣期以来の幹線道路である。周辺は近世初頭以降、大坂の中でも経済的に重要な地域と考えられる場所である。

調査地周辺ではいくつかの発掘調査が行われ、豊臣期の大名屋敷やその敷地を区画する石垣などの遺構や豊富な遺物をはじめ、大坂夏ノ陣の焼土層、城下町に伴う遺構・遺物など、数多くの重要な成果が得られている。

大阪市教育委員会によって建設工事に先立って行われた試掘調査で、地表下約1.3mの深さで豊臣期から徳川初期とみられる遺物包含層が認められたため、関係諸機関との協議を経て、本調査を行うことになった。

調査は平成21年2月10日から開始した。図2のように調査地中央やや南よりの場所に東西4m、南北5mの調査区を設定した。地表下約1.3mまでの間の土は重機によって除去し、その後は人力によって慎重に掘り下げ、地表下約2.2mの段丘構成層(地山)までを調査した。この間、遺構と遺物の検出に努め、写真撮影・実測などの記録をとった。平成21年2月14日に埋戻しを行い、器材の撤収を含め、現地におけるすべての作業を完了した。

なお、この調査の水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+○mとしている。また、挿図中の座標値は世界測地系による。

2) 調査の結果

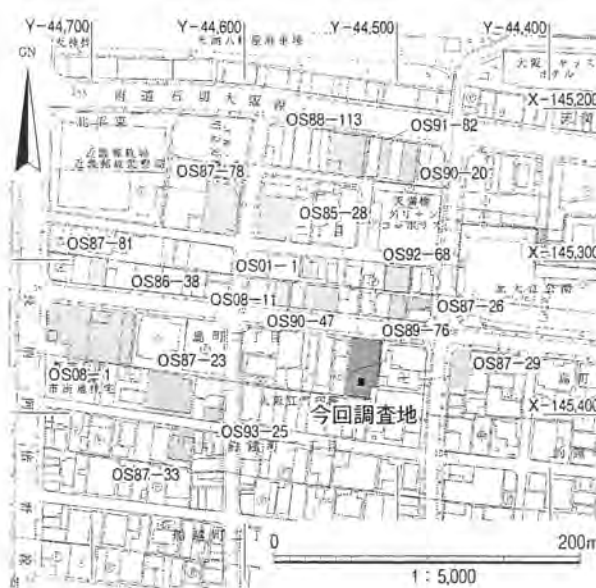


図1 調査地と周辺の調査

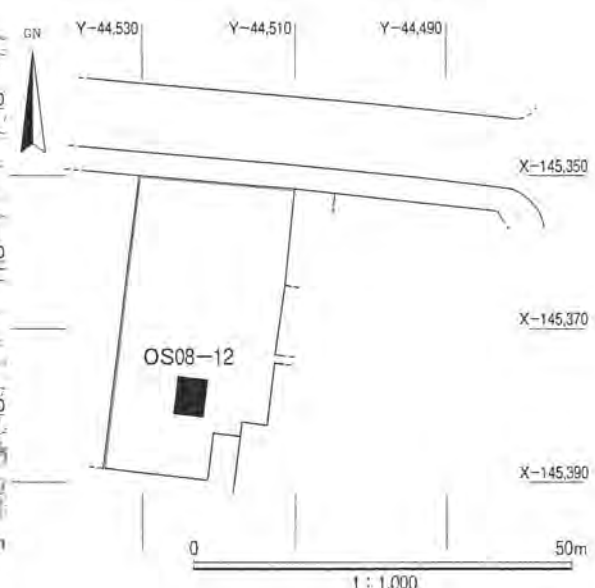


図2 調査区の位置

i) 層序(図3・4、図版1)

本調査における基本的な層序は以下のとおりである。

第1層：現代の盛土である。本層の上端はほぼ平坦であるが、下端は東側が高く西側が低くなっている。層厚は60~210cmである。

第2層：灰色シルト質砂を主体とする盛土層で、本層以上を重機によって除去した。残りの良い東側で最大層厚は55cmである。本層から18世紀後半~19世紀中頃の遺物が出土した。したがって本層は徳川末期頃の整地によるものと考えられる。

第3層：オリーブ褐色の粘土を含むシルト質砂を主体とする盛土層で、炭や焼土が混る。大坂夏の陣直後の徳川初期の整地によるものである。本層は下位にある第2面の土壌群を埋めていて、層厚は20~80cmである。本層上面が調査第1面で、土壌や小穴、石列が見つかった。もともと調査地周辺は東から西へと大きく下がっているが、調査区西半部のSX05の埋土によってSX05の上端と本層上面の高さがTP+10.8mほどで水平になっている。この上に石列や土壌が見られたことからSX05も盛土であったとみられるが、本層の時期(17世紀前半)よりSX05の時期(17世紀中頃~後半)のほうがやや新しく、2時期の整地の可能性がある。

第4層：粘土やシルトを含む砂を幾層も積上げた盛土層で、層厚は100cmある。豊臣後期の遺物を含む整地層である。本層上面では調査区東部で小穴が見つかり、中央から西側でSX20と、このSX20の上面でSK10~15が見つかった。SK10~15は第3層で埋められているが、石材の採取穴とみられるため、本層上面の遺構としている。また、SX20はこれらの石材を設置するための掘込みとみられる。

第5層：灰白色の均質な細粒砂層で、層厚は30cm以上である。東から西へと傾斜するラミナが顕著に観察され、傾斜地であったことがわかる。出土遺物はなく、本層以下が段丘構成層(地山)である。

ii) 遺構と遺物

a. 第5層上面の状況と第4層の出土遺物(図5・8、図版2上段)

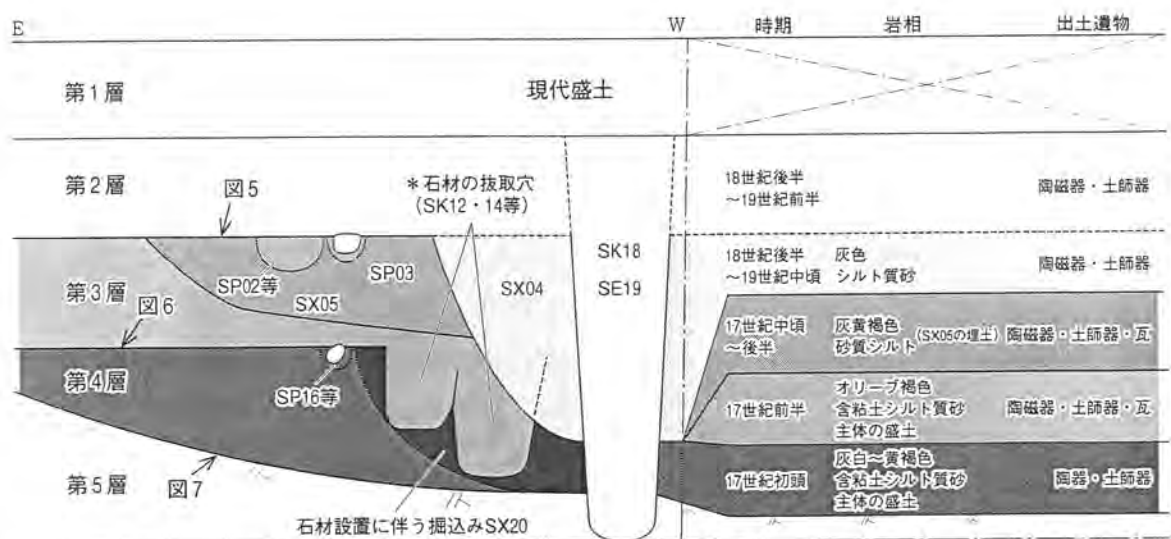
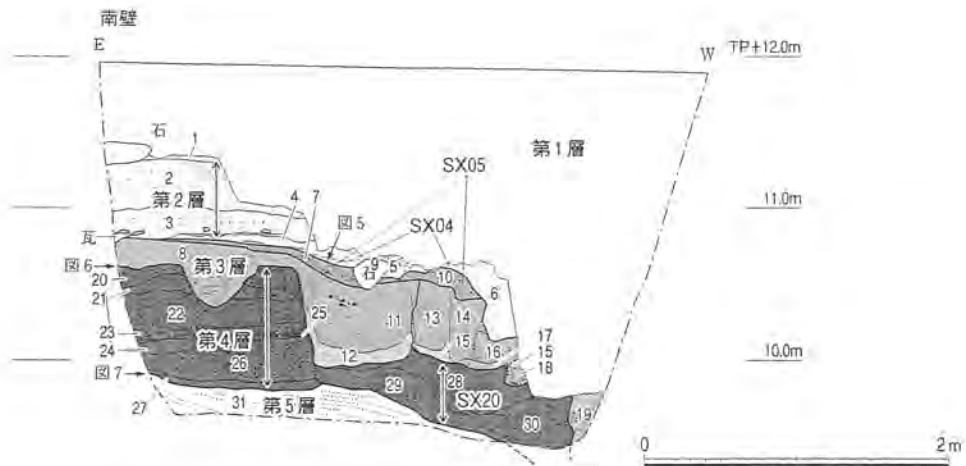


図3 地層と遺構の関係



第2層

- 1: 含砂に黄褐色(10YR4/3)シルト質粘土
- 2: 含砂オリブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルト
- 3: 含砂暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト
- 4: 含粘土黄褐色(2.5Y5/3)砂質シルト(SX04)
- 5: 含粘土オリブ褐色(2.5Y4/4)砂質シルト(SX04)
- 6: 含砂灰色(5Y5/1)シルト質粘土(SX04)

第3層

- 7: 含炭・粘土灰黄褐色(10YR6/2)砂質シルト(SX05)
- 8: 含炭・粘土オリブ褐色(2.5Y4/4)シルト質砂
- 9: 含細粒砂暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粘土
- 10: 含粘土暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト(SX05)
- 11: 含炭・粘土暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質砂
- 12: 黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト(炭多い)
- 13: 含炭・砂暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト
- 14: 含炭・細粒砂オリブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルト
- 15: 含炭黒色(2.5Y2/1)シルト
- 16: 含細粒砂オリブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粘土

17: 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト

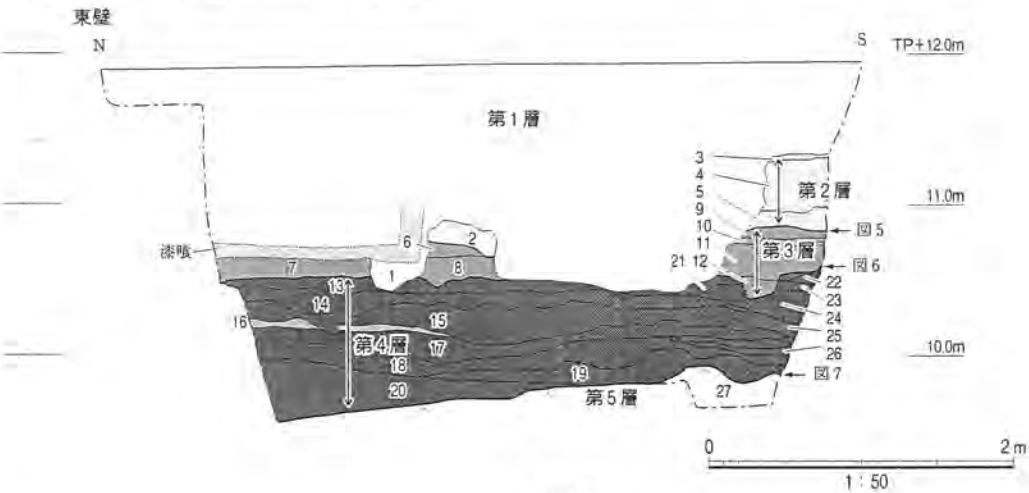
- 18: 黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト
- 19: 黒褐色(2.5Y3/2)シルト質砂

第4層

- 20: 含炭・砂黄褐色(2.5Y5/3)粘土質シルト
- 21: 含粘土黄褐色(2.5Y5/4)シルト質砂
- 22: 含中粒砂に黄褐色(2.5Y6/4)シルト質細砂
- 23: 黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒~中粒砂
- 24: 黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒砂
- 25: 含炭黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂
- 26: 灰白色(5Y8/1)中粒~細粒砂
- 27: 含粘土に黄褐色(2.5Y6/4)シルト質細粒砂
- 28: 含炭黄褐色(2.5Y5/3)シルト質細粒砂(SX20)
- 29: 黄褐色(2.5Y6/4)極細粒砂質シルト(SX20)
- 30: 黄褐色(2.5Y6/3)細粒~極細粒砂(SX20)

第5層

- 31: 灰白色(5Y8/1)細粒砂(地山)



第1層

- 1: 暗オリブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルト

第2層

- 2: 黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルト
- 3: 含砂に黄褐色(10YR4/3)シルト質粘土
- 4: 含細粒砂オリブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粘土
- 5: 含砂暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト

第3層

- 6: 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト
- 7: 黒褐色(10YR3/2)シルト
- 8: 黄褐色(10YR4/3)シルト
- 9: 含炭・粘土黄褐色(2.5Y5/3)砂質シルト
- 10: オリブ褐色(2.5Y4/4)砂質シルト
- 11: 含粘土オリブ褐色(2.5Y4/4)シルト質砂
- 12: 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂

第4層

- 13: オリブ褐色(2.5Y4/3)砂質シルト
- 14: 黄褐色(2.5Y5/3)シルト質砂
- 15: 黄褐色(2.5Y5/4)シルト質細粒~中粒砂
- 16: 含砂黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト
- 17: 黄褐色(10YR4/3)細粒~中粒砂
- 18: 灰白色(5Y8/1)細粒~中粒砂
- 19: 黄褐色(2.5Y6/4)細粒砂(粘土の偽礫含む)
- 20: 含粘土に黄褐色(10YR5/4)シルト質砂
- 21: 含粘土オリブ褐色(2.5Y4/3)シルト質砂
- 22: 含炭・砂黄褐色(2.5Y5/3)粘土質シルト
- 23: 含粘土黄褐色(2.5Y5/4)シルト質砂
- 24: 含中粒砂に黄褐色(2.5Y6/4)シルト質砂
- 25: 灰白色(5Y7/2)シルト質細粒~中粒砂
- 26: 褐色(10YR4/6)シルト質細粒砂

第5層

- 27: 灰白色(5Y8/1)細粒砂(地山)

図4 南壁・東壁断面図

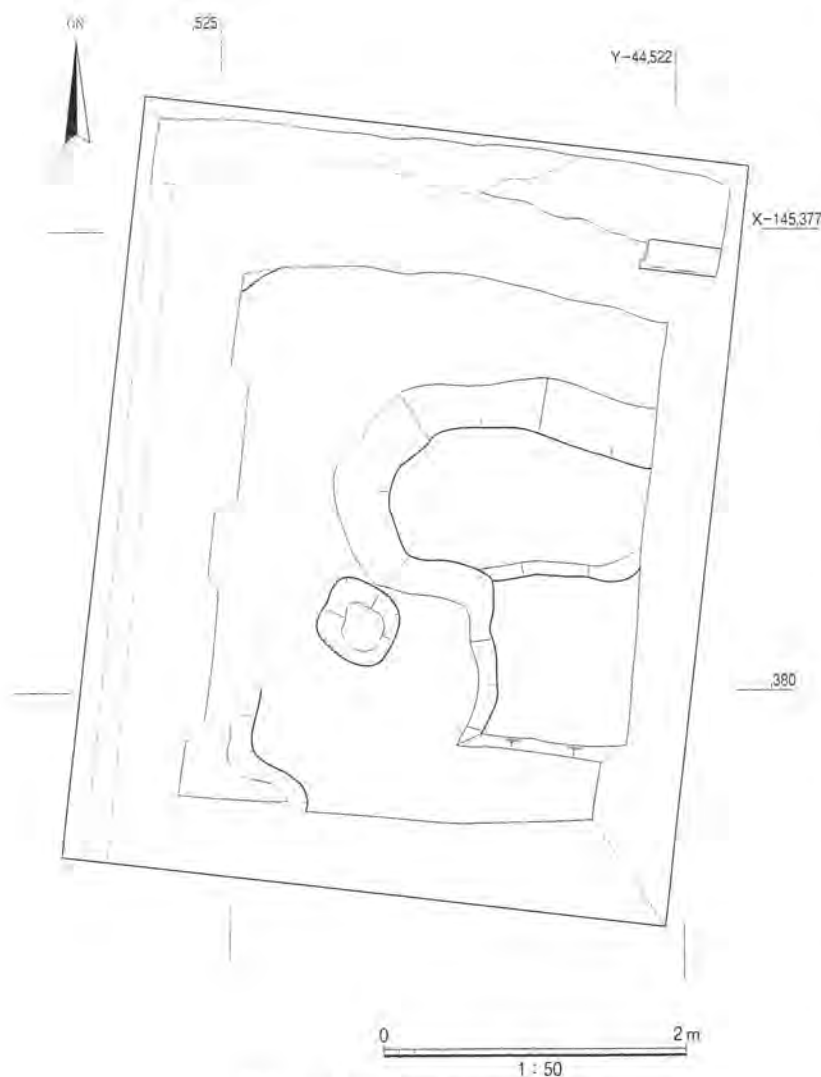


図5 第5層上面(地山上面)の状況

段丘を構成する自然堆積層(第5層)の上面で、もともと西へと下降する傾斜面である。第5層上面に遺構はなく、この面の上に第4層を盛って整地している。したがって図5に示した第5層上面の凹凸は第4層の整地によるものである。

第4層から図8の瀬戸美濃焼鼠志野の皿1、肥前陶器碗2、唐草文軒平瓦3、丹波焼の片口水盤4などの遺物が出土し、16世紀末～17世紀初頭に整地されたことがわかる。

b. 第4層上面の遺構と遺物(図6・9、図版1上・下段、図版2中段)

第4層上面で土壇6基と掘込み、小穴2基が見つかった。

掘込みSX20は調査区の中央部から西側にあつて、TP+10.6～10.4mとなる第4層上面から約1.0mの深さに掘り込んでいた。この中にぶい黄褐色の極細粒砂質シルト～細粒砂を第4層上面の高さまで充填している。SX20の出土遺物はない。

SK10～15はSX20の上面で検出されたもので、規模や形状・立地からみて、石材は残っていないが、石材の抜取穴とみられる遺構である。これらはSX20の上端に沿って南北に並ぶ平・断面とも隅丸長方形に近い形状の一群SK10～13と、この西側に南北に並ぶ平面円形とみられるSK14・15がある。SK13は東西0.9m、南北0.2m以上で、深さ0.8m、SK11は東西0.6m、南北0.8m、深さ0.8m、SK10は東西0.5m、南北0.7m、深さ0.5m、SK12は東西0.7m、南北0.6m以上、深さ0.9mあり、南壁には深さ0.7mで同様の土壇が観察された。SK14は東西0.3m以上、南北0.5m以上、深さ0.5m以上で、SK15は東西0.3m以上、南北0.8m以上、深さ0.5m以上である。これらはSX20と同時に構築されて敷地境界を形成していたと考えられる。すべて第3層によって埋められており、底に炭や焼土が多く見られるものがある。

遺物はSK10から土師器皿5、丹波焼播鉢7、肥前磁器碗11が出土し、SK11から肥前磁器白磁碗10が、

またSK12から丹波焼播鉢8、瀬戸美濃焼天目碗9が出土した。これらの遺物から、抜取穴の埋まった時期、すなわち第3層の盛土の時期は17世紀前半～中頃と考えられる。

小穴SP16・17はSX20の外側に沿って並んで見つけた。長径が0.30m、短径が0.25～0.20mで、深さはともに0.10m未満のもので、暗灰褐色砂質シルトで埋まっていた。SP16から近世瓦の破片が出土した。

c. 第3層上面検出の遺構と遺物(図7・10～12、図版2下段)

第3層上面では2時期の遺構が見つかった。古いほうの遺構としては、第3層の上面に構築された掘込み

または整地層とみられるSX05と土壙SK02・06・07、小穴SP01・03がある。また、新しいほうの遺構としては、第2層下面の掘込みSX04と、第2層の層中または上面から掘り込まれた土壙SK18、井戸SE19がある。

SX05は、調査区東よりの位置から西側に向かって掘り込み、炭と粘土を含む灰黄褐色の砂質シルトで埋めている。西側が厚く、0.2mほどの厚さとなる。土壙SK02・06・07はSX05の上面から掘り込まれている。出土遺物は瀬戸美濃焼の青織部向付12、肥前か京・信楽焼系の陶器呉器手碗13、肥前陶器向付14と皿15、肥前磁器染付碗16と白磁鑄削小碗17、土師器の皿18、焼塩壺21と蓋19などがある(図10)。これらは17世紀中頃～後半のものが大半を占めるが、12・14・17といった17世紀初頭～前半の遺物も含まれる。

SK06は東西1.2m、南北0.1m、深さ0.4m以上、SK02は東西0.8m、南北0.7m、深さ0.2mで、SK07は直径約0.4mで、深さが0.1mと、いずれも浅いものである。遺物はSK02から土師器の焙烙20が出土した。17世紀中頃～後半のものである。

SP01は直径0.2mほどの小穴で、深さは0.1m前後である。

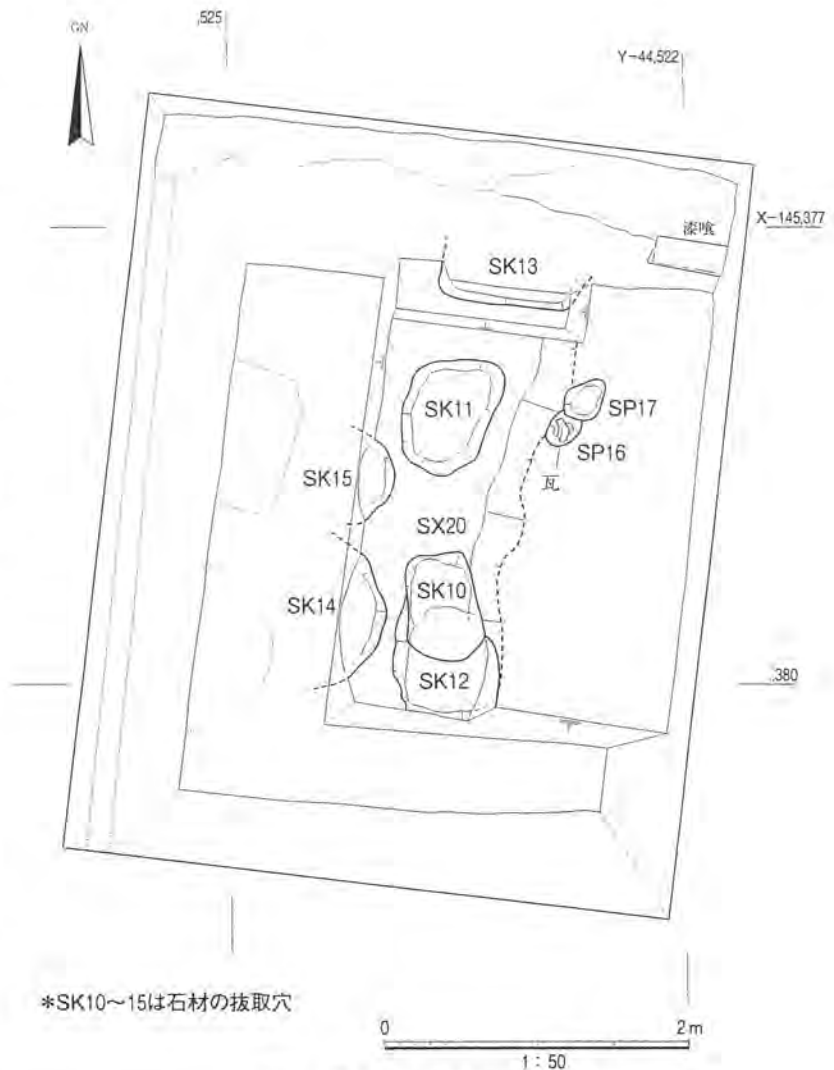


図6 第4層上面の遺構平面図

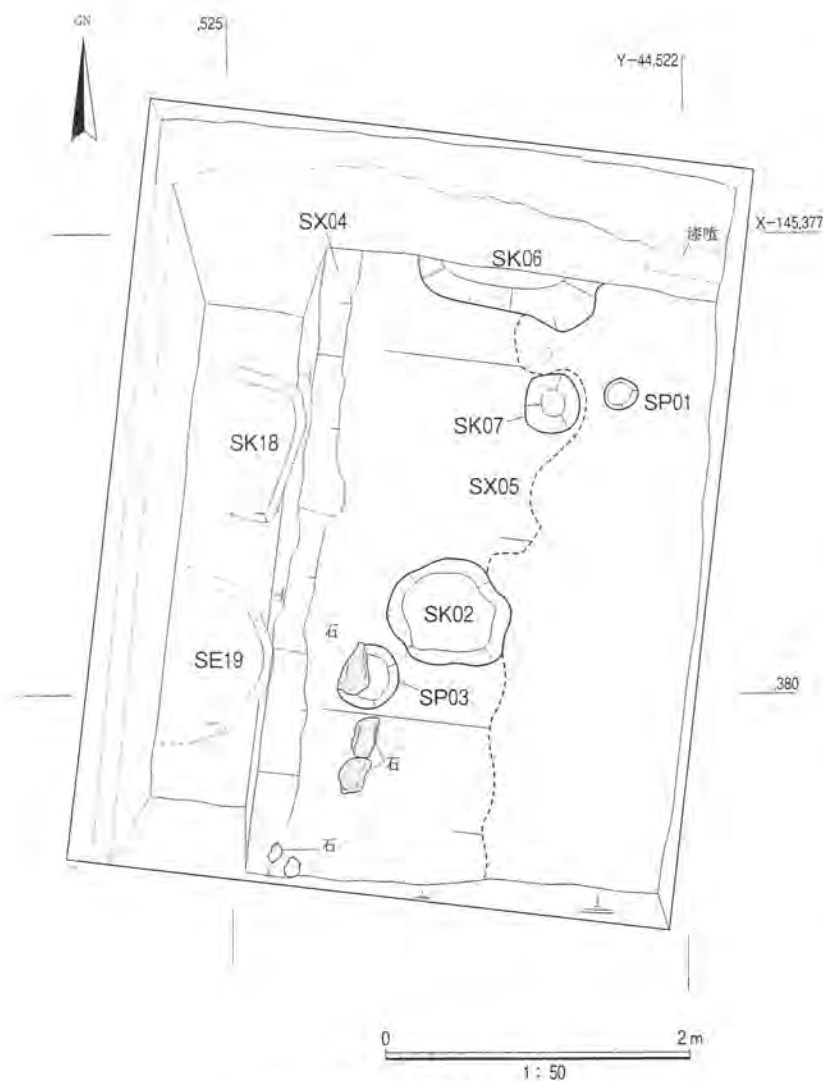


図7 第3層上面の遺構平面図

SP03は直径約0.40mの小穴で、深さは0.06mしかない。人頭大の石が据えられており、同様の石はSP03の南側に2個配置されており、さらに南にもやや小さい石が置かれていた。

これらの遺構は、第4層上面のSX20・SK10～15のほぼ真上に位置しており、第4層上面同様に敷地境の状況を示しているものと考えられる。

第2層下面の掘込みSX04は、調査区の西半にSX05とほぼ平行に設置されていた。敷地境であろう。埋土は第2層と同じ灰色シルト質の砂で、深さは0.5m以上ある。出土遺物のうち、肥前磁器染付の壺22、皿23・28、仏飯器24、蕎麦猪

口25、筒形碗26、端反碗29、碗30と、肥前磁器色絵皿27、墨書のある土師器焼塩壺31、関西系陶器筒形碗32、瀬戸美濃焼耳付壺34、ヨーロッパ・マジョリカ陶器薬壺(ザルフポット)とみられる青釉陶器壺の底部33、肥前陶器三島手大鉢35、堺播鉢36を図11に図示した。SX04の遺物は18世紀末～19世紀前半までのものが大半を占め、江戸時代の終わり頃の遺構であることがわかるが、22や33は17世紀中頃～後半、23や28は18世紀中頃のものともみられ、古い地層や遺構に由来する遺物であろう。

SK18は東西0.8m以上、南北1.0mの平面形が隅丸方形の土壙で、炭・焼土の混る灰色砂質シルトと大量の遺物で埋まっていた。後述のSE19とともに検出面から1.5mほど掘り下げたが、西壁に近く、安全のため完掘はしていない。出土遺物のうち、肥前陶器片口鉢38と碁石39、土師器ミニチュア羽釜40、肥前磁器染付碗の蓋42を図12に示した。これらは18世紀末～19世紀中頃のものである。

SE19は直径1.0mほどの円形の井戸で、埋土は暗灰褐色の粘土質シルトで、炭・焼土・砂が混る。大量の遺物が出土した。これらのうち、肥前陶器天目碗37、肥前磁器染付碗43・44と蓋41、軟質施釉陶器灯明受皿45、土師器皿46・47と火鉢48を図12に図示した。18世紀後半～19世紀中頃までのものが大半を占める。

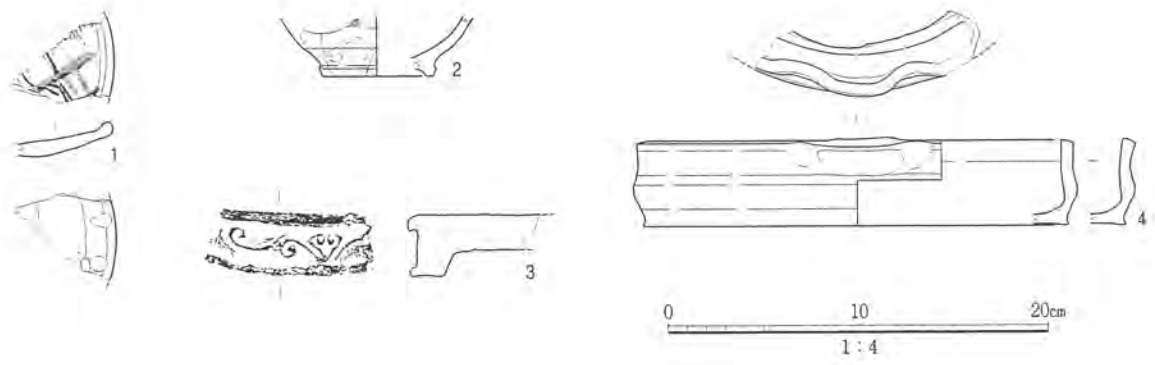


図8 第4層出土遺物実測図

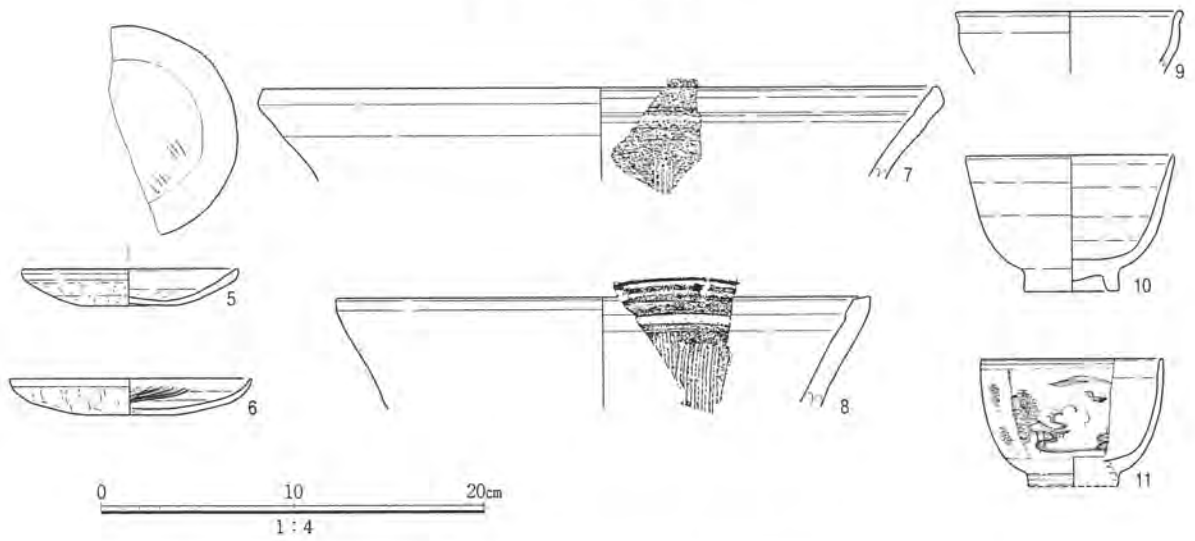


図9 第4層上面の遺構出土遺物実測図
SK10(5・7・11)、SK11(10)、SK12(6・8・9)

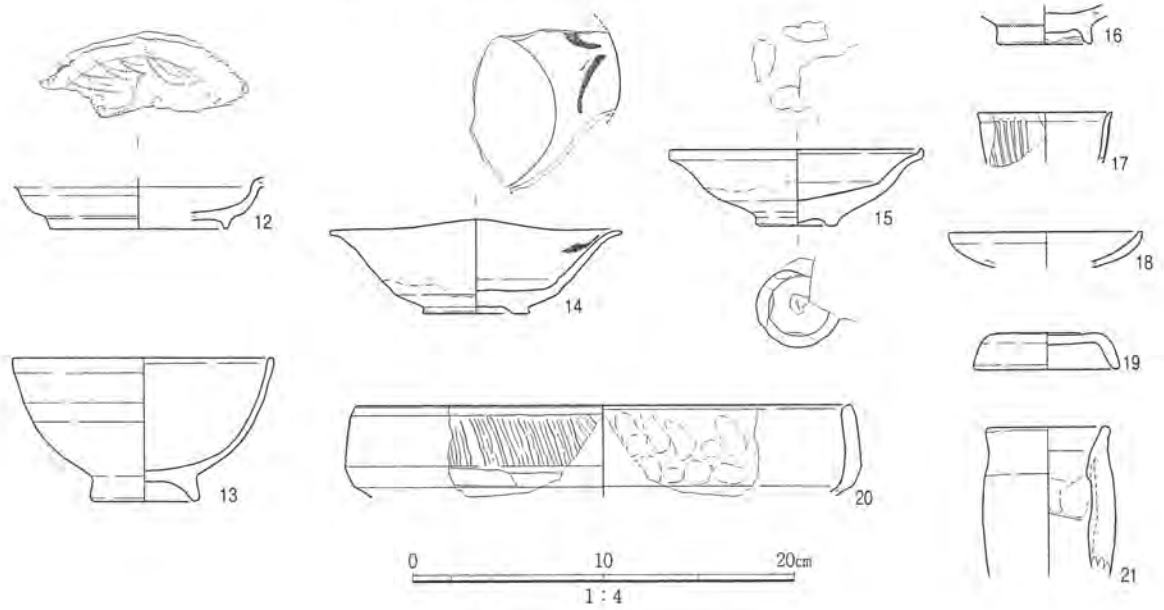


図10 第3層上面出土遺物実測図
SX05(12~19・21)、SK02(20)

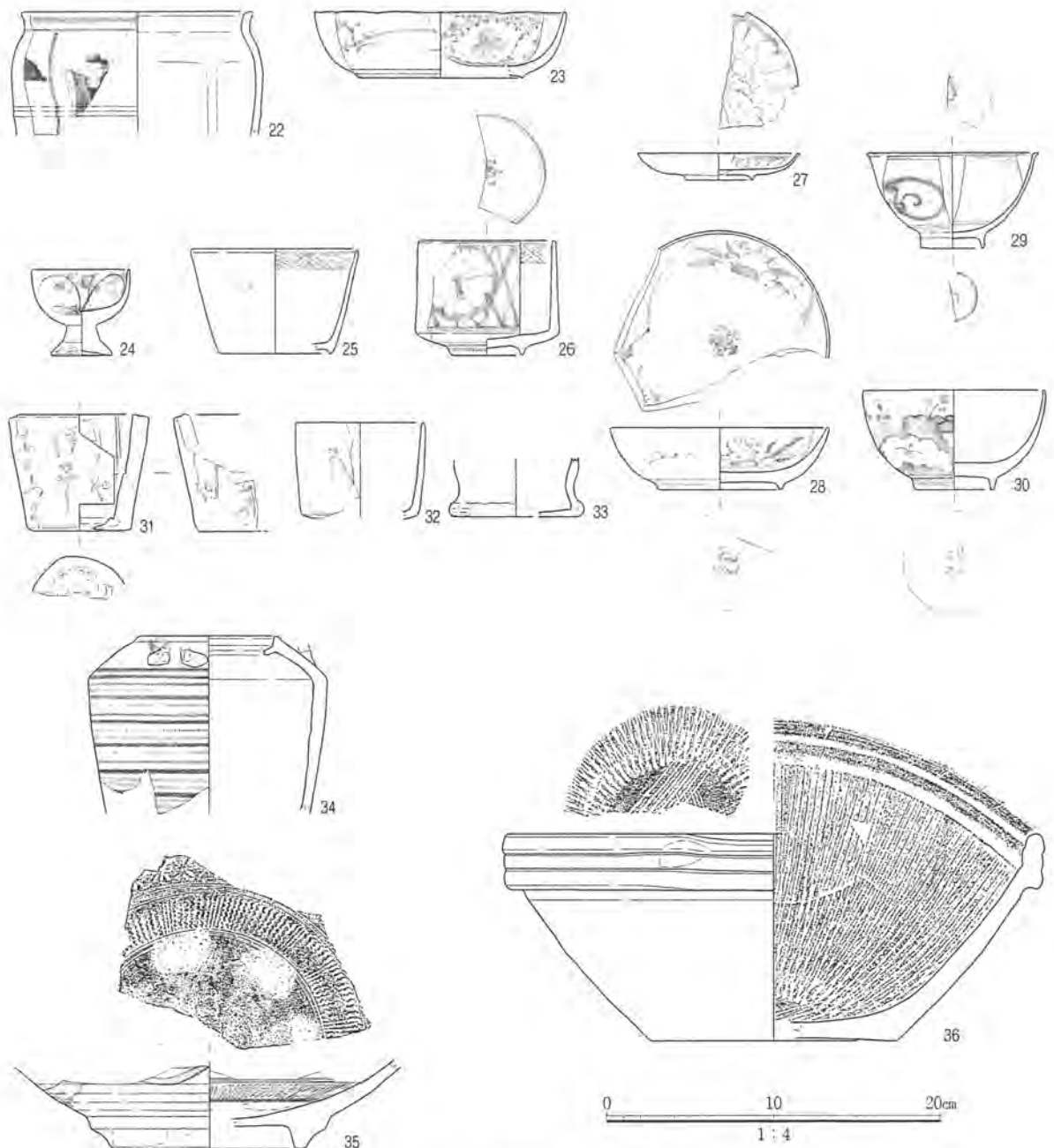


図11 SX04出土遺物実測図

iii) 遺構と遺物の検討

今回の調査で注目されるのは第4層上面の石材抜取穴とみられる遺構群である。長さ・幅・深さとも1m近くある抜取穴がSX20の内側にSX20の縁に沿うように南北に並び、その西側にも直径1m近くに復元できる抜取穴が並んでいる。そしてこれらの土壌は17世紀前半の第3層で一度に埋め戻されていた。

こうした遺構群を考える上で、本調査地の北西約80mの位置にあるOS01-1次調査が参考になる[大阪市文化財協会2003a]。

図13に示したように、OS01-1次調査では豊臣後期に構築された敷地境を区画する石垣が現在の敷地境界に沿うように南北に検出された。ここで使用された主たる石は長さ・幅・高さとも1m近く

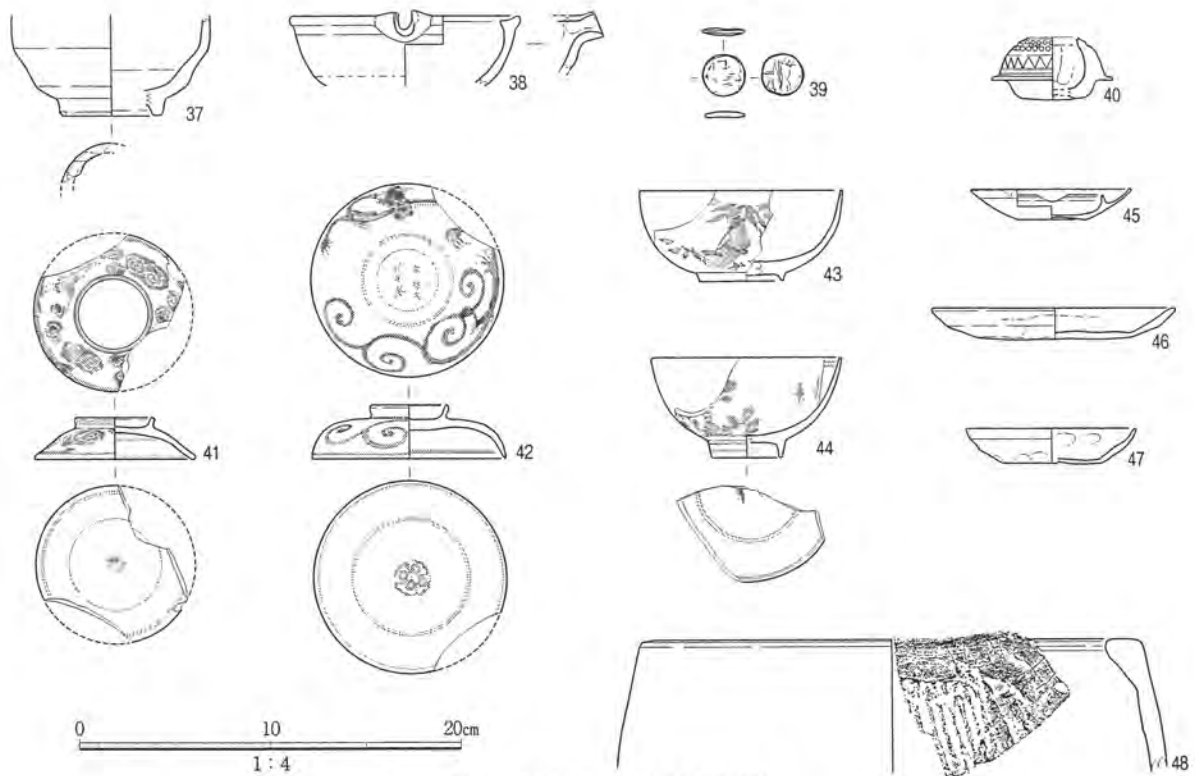


図12 SK18・SE19遺物実測図

SK18(38~40・42)、SK19(37・41・43~48)

もあるもので、豊臣後期の整地層を掘り込んでこれらの石を設置し、隙間に小石や土を充填して積み上げていた。検出面からの石垣の高さは2mを超える。この主たる石の大きさと今回検出した第4層上面の抜取穴の規模に類似点を見いだせる。

また、OS01-1次調査地と西隣の敷地との高低差は現状でも約2mあり、豊臣期に急斜面を盛土して敷地を確保していたことがわかる。今回の調査地でも、図13の等高線からもわかるように、西隣の敷地との高低差が現状で約2mほどあり、もとは急斜面で、盛土して平坦面を確保していたことがわかる。また、現状においてこの石垣ラインの南への延長線はOS90-47次調査地の西端や北向かいの敷地境と重なり、この間で道路の傾斜が変化する。

本調査地が南に面する島町通りは豊臣期の大坂城が築かれた当初からの幹線道路であったため、現



写真 本調査地北側の道路(左)と一筋南の道路の釣鐘屋敷付近(右)の高低差



OS01-1次調査の石垣(南から)



OS01-1次調査の石垣(北西から)



石垣と北面の道路と敷地境界(南から)



OS01-1次調査北面の道路(西から)
右から2本目の電柱の右手が調査地

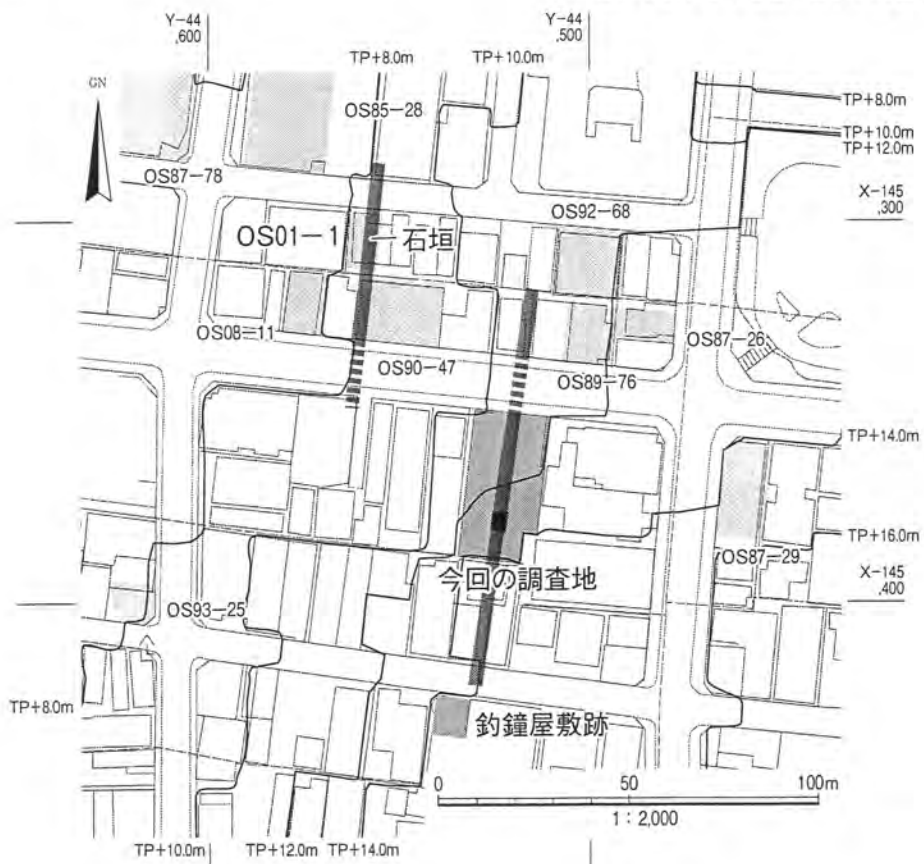


図13 OS01-1次調査の石垣と現地表の等高線

状でもさほど急傾斜とはなっていないが、一筋南の釣鐘町の通りは9頁の写真右や図13の等高線で示したように釣鐘屋敷付近で急激に西に向かって下降している。釣鐘屋敷は1634(寛永11)年に設置された「大坂町中時報鐘」と呼ばれる時計台で、この敷地の東端と今回見つかったSX20の上端ラインはほぼ一直線に並び、このラインを境にして現状の釣鐘町の道路は急激に西へ下降している。

こういったことや、第4層上面の抜取穴が豊臣後期の整地(盛土)層を掘り込むSX20の内部にあって同時に構築された可能性があること、17世紀前半の遺物とともに炭・焼土が混る第3層で埋められていることなどを考え合わせると、これらの抜取穴はもともとこれらの穴にあう大きさの石材が設置されていて、OS01-1次調査のように石垣として豊臣後期に設置され、1615年の大坂夏ノ陣でこの地にあった屋敷が廃絶した後、17世紀前半～中頃、石垣の主たる石が引き抜かれて整地されたことを示しているとは考えられないだろうか。

そして、その後もこの位置が敷地境として機能し、それが本調査で検出したSX05やSX04として残ったのではないだろうか。こういった可能性が考えられる。

3)まとめ

今回は小規模の調査ではあったが、16世紀末～19世紀中頃の敷地境界の変遷を辿ることができた。今後、周辺で行われるであろう調査成果とも合わせて、更なる検討を加え、大坂城・大坂城下町の歴史の変遷を明らかにする必要がある。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2003a、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告書-2001・2002年度』pp.37-48
2003b、『大坂城跡』Ⅶ

第5層上面の状況
(南から)



第4層上面の遺構
(南から)



第3層上面の遺構
(南から)



南壁断面
(東北から)



東壁断面
(西から)



北壁断面
(南から)



- ・調査箇所 大阪市中央区大阪城 大阪城公園山里丸
- ・調査面積 約485㎡
- ・調査期間 平成21年2月23日～3月31日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、藤田幸夫、高橋工、森下真企

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は特別史跡大坂城跡の山里丸に位置する(図1・2)。山里丸では雁木が樹木などの影響により変形したり、失われている箇所がある。今回の発掘調査は、徳川氏大坂城築城当時の状況や盛土のようすを明らかにし、今後の雁木の修復に際しての資料を得ることを目的として実施した。

調査は3箇所で行った(図3)。1区は西片菱櫓南雁木石垣の山里口出桁形石垣に接する位置で、面積は110㎡である。2・3区は山里門西石垣での調査である。その内2区は西片菱櫓に接する位置で210㎡を、また3区は山里門に近い箇所で行った。山里門西石垣は東端部を除いて上部の雁木が失われており、傾斜面には人頭大の平坦な河原石が葺かれている。また、現地表面には埋もれた雁木石が一直線に認められる。東端部には現地表面に埋もれて見られる雁木石より上に6段の雁木石が認められる。3区は遺存する7段の雁木石に接して設定した。

調査の方法

1区については雁木石を記録後に取り外し裏込め石の状況を確認するとともに、雁木上面を人力で掘削し、多聞櫓の礎石や本丸石垣の裏込めの状況の確認に努めた。東側の平坦な箇所では近代以降の堆積層を機械で、それ以下は人力で掘削し、雁木築造時の地表面や盛土の過程および改修の有無等についての確認に努めた。

2・3区は雁木相当部に葺かれている河原石を取り外し、裏込め石の確認に努めた。平坦部では3区では1区と同様に機械掘削を併用したが、2区では樹木が存在することからすべて人力で掘削した。

現状の雁木・石垣および調査で検出した裏込め・雁木等の遺構については写真測量を実施した。

〈調査の結果〉

1. 層序(図4)

第0層：現代の盛土層である。

第1層：第2次世界大戦時の焼瓦・焼壁やコンクリートを含む整地層である。

第2層：黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルトの盛土層で、層厚は20cm前後である。

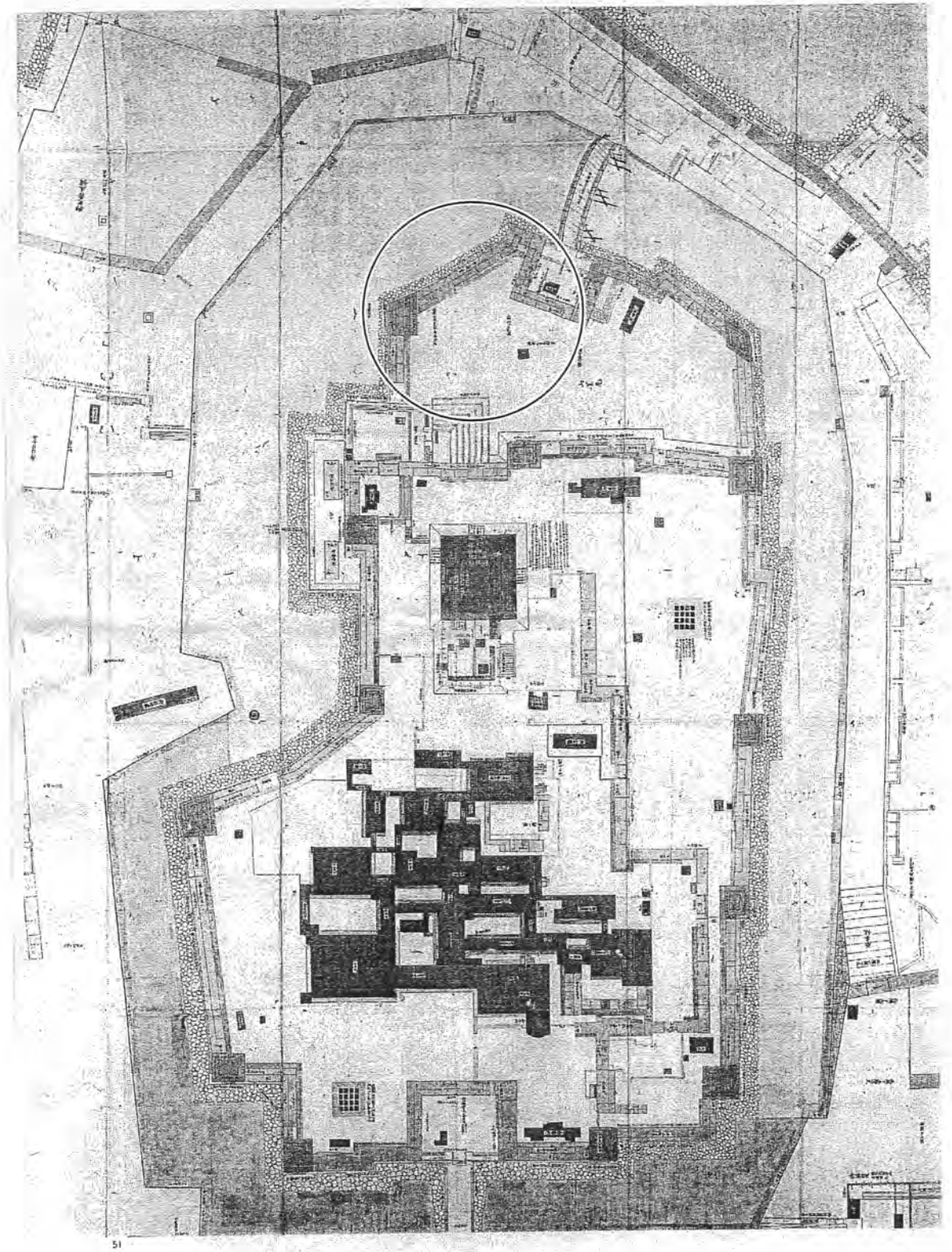


図1 調査地位置図(『大坂城絵図』を一部加筆)

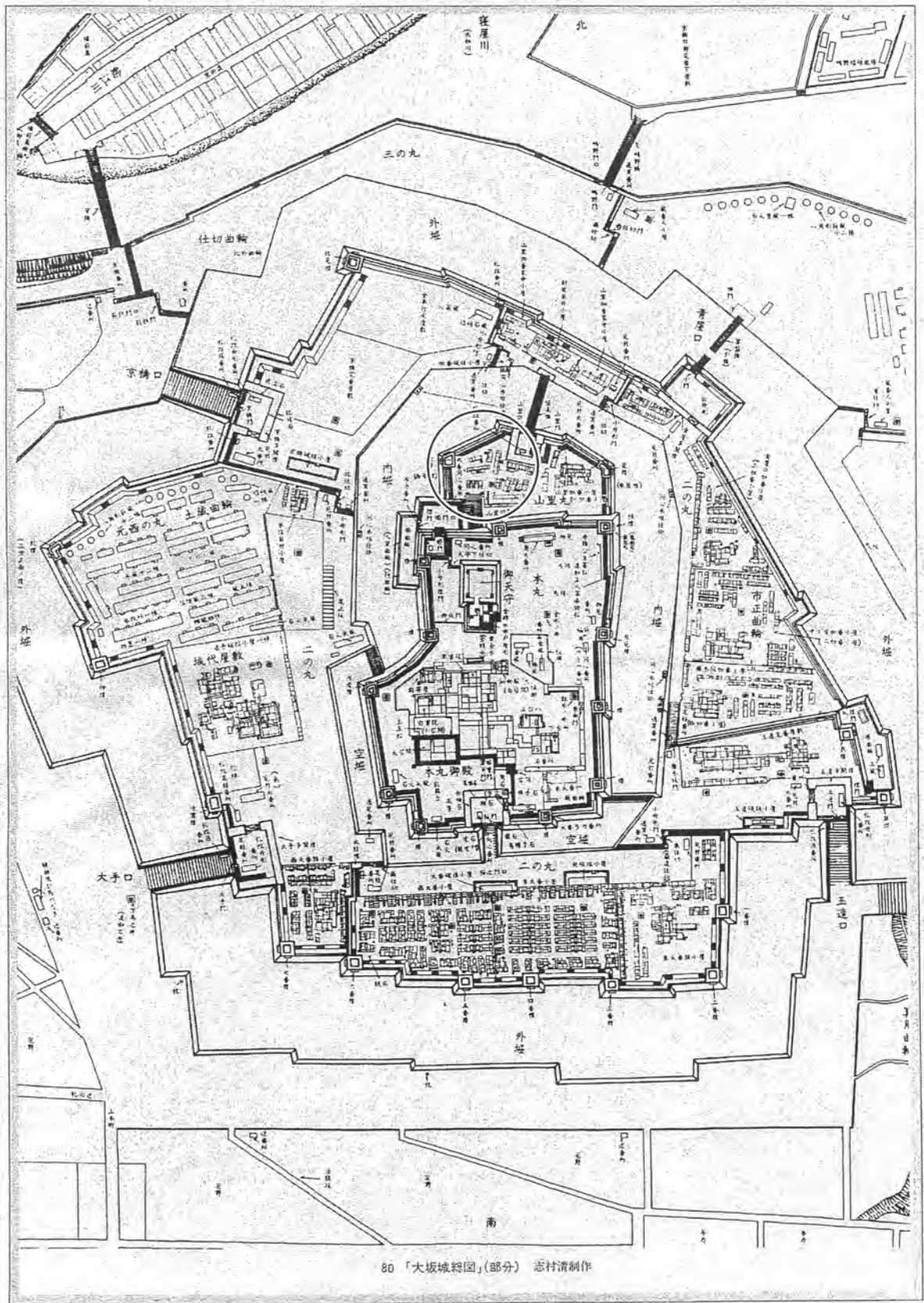


図2 調査地位置図(「大坂御城図」を一部加筆)

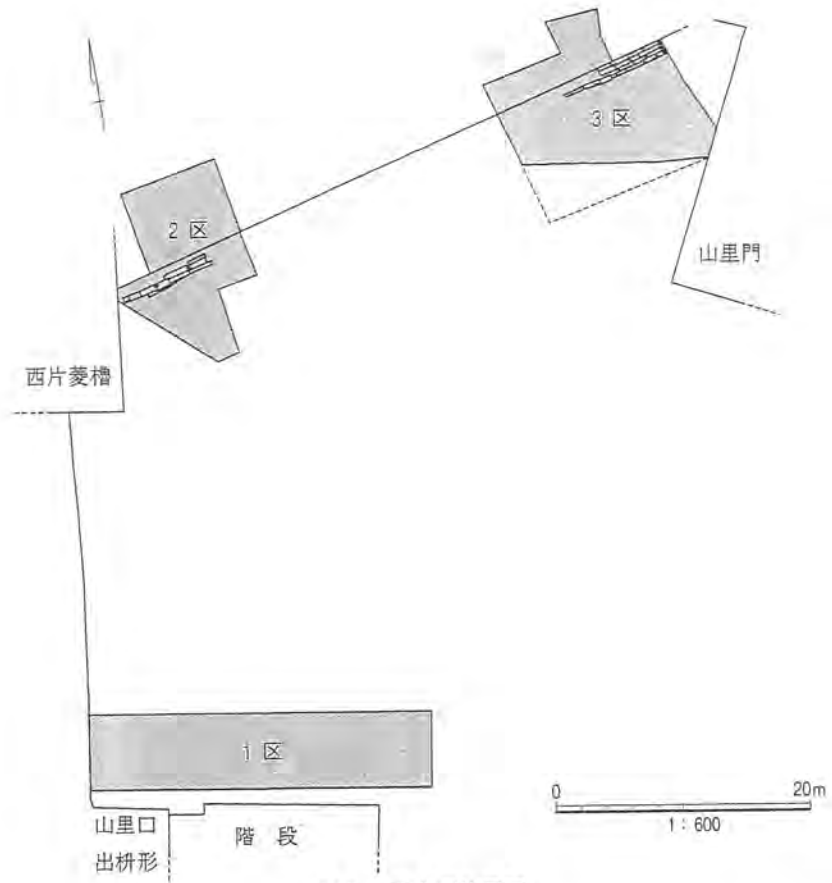


図3 調査区位置図

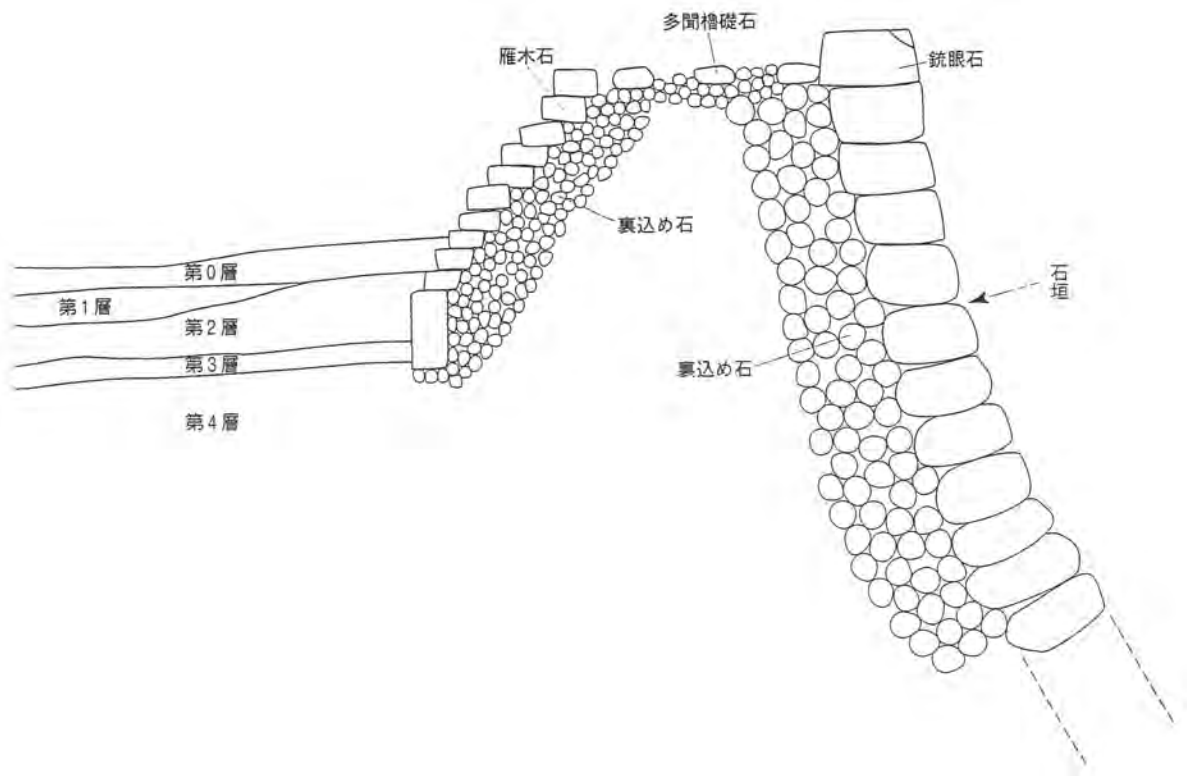


図4 地層と遺構の関係図

第3層：焼瓦・焼壁を多く含む層で層厚20cm前後である。焼瓦・焼壁は戊辰戦争に起因するものであろう。

第4層：徳川氏大坂城再建時の盛土である。盛土には上町層や、大坂夏ノ陣で焼亡した豊臣氏大坂城の焼瓦・焼壁を含む土も使用されている。

2. 遺構と遺物(図5・6)

1区

雁木 現状では10段確認できるが11段目が最下段であることを確認した。最上段から10段目までは高さは約24cmで踏み幅の調整部分も約24cmであるが、最下段の雁木石は高さ60cm前後と大きい石材

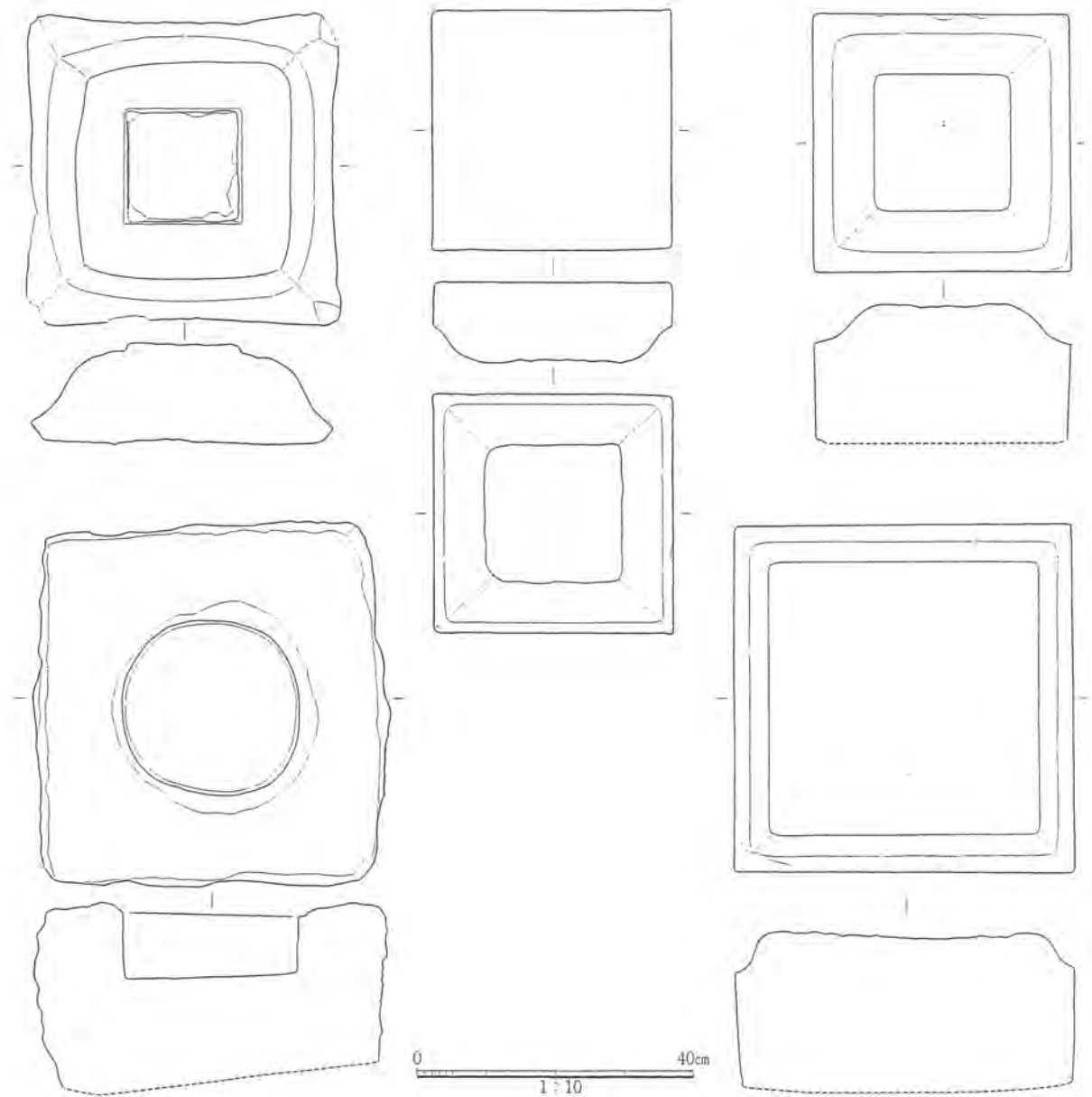


図5 1区出土石灯籠(1:10)

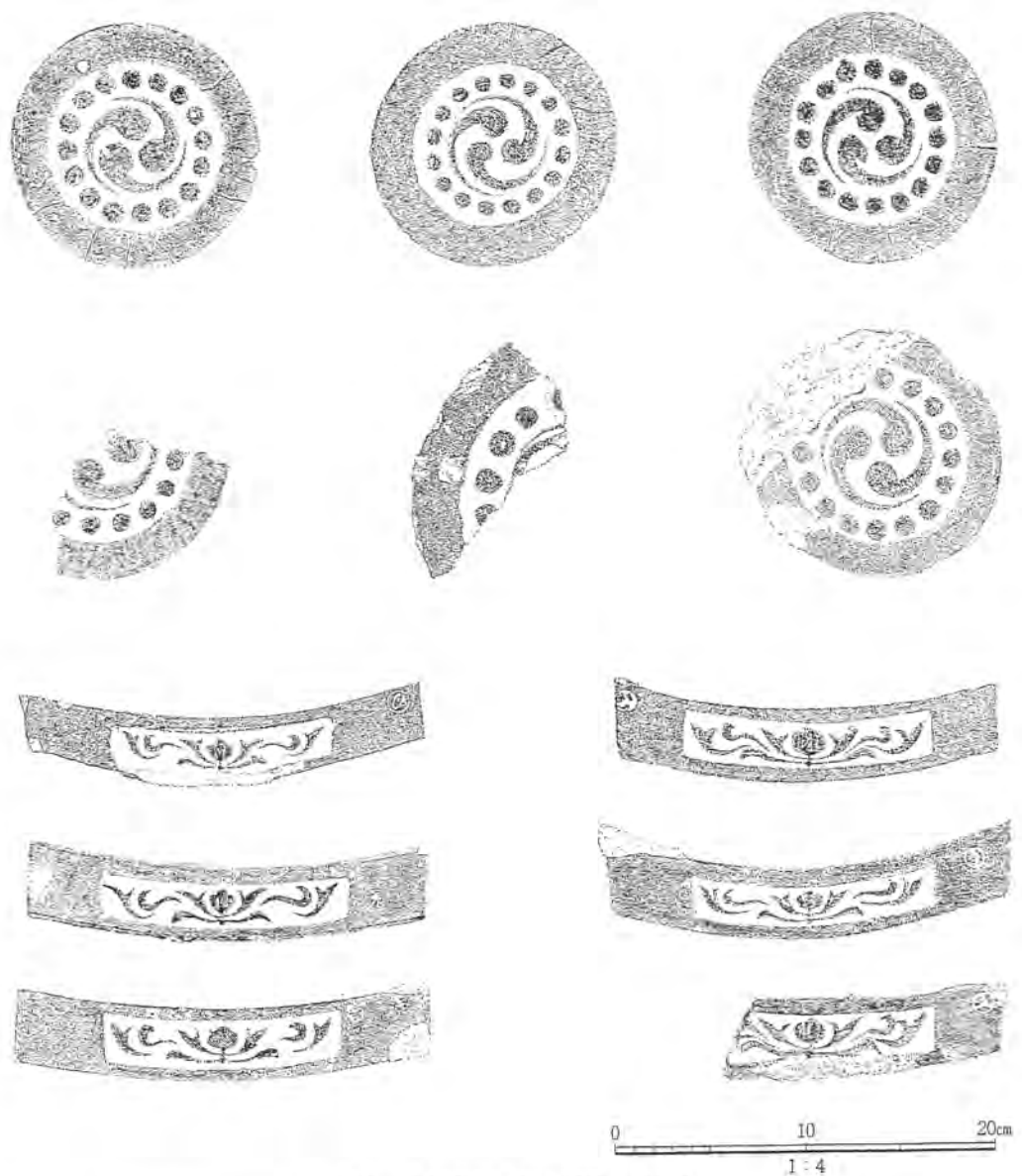


図6 1区多聞櫓出土軒丸・軒平瓦

である。また、最下段の雁木石は上面から45cmまでを丁寧に調整し以下は雑な調整となる。この調整の変換部が第4層の上面に等しいことから、雁木構築時に山里丸の地表面が意識されており、地上に見える部分については丁寧に調整していたことが判明した。

なお現状では、雁木最上段の上に長さ40cm程度の石で一段を構成しているが、このような状況は大坂城の他の場所では見られない。この石積みは山里口出桁形石垣に近い部分では石も小さくそれぞれをコンクリートで接着しているが、西片菱櫓付近では石材も大きく、表面には火を受けた痕跡が認められる。この石積みは1区では、後世に築造されたことは明らかであるが、西片菱櫓付近の石が焼けた痕跡や、後述する多聞櫓の礎石の高さから考えて、戊申戦争時にはこの石積みが存在していた可能性は否定できない。

多聞櫓礎石 数箇の礎石を確認した。表面に火災痕跡が認められるものもある。柱間は1.8m前後と想定される。礎石検出中に軒丸瓦・軒平瓦(図6)が出土した。

裏込め石 雁木の裏込め石は20~30cm大の河原石を主とするが、一石五輪塔の破片(火輪~地輪上

部)が1基出土した。

中央部から石灯籠の部品が数点出土した(図5)。これらはレンガを含む土壌から出土している。山里丸に存在した石灯籠が後世に破棄されたものであろうか。石灯籠は笠や中台・基礎部で、火袋や竿は見られない。

2区

雁木 地表面に残る7段目の雁木の下部にさらに1段の雁木を検出した。8段目の雁木の下部にはコンクリートの台が認められる。7・8段目の雁木は高さ、踏幅とも約20cmと直方体で後面の不調整部がなく、長さは1m前後である。これらは他の場所に遺存する雁木に比べて小さく、後世の補修材であろう。

上記の補修材の前面(南側)下部に4段分の雁木を検出した。これらの雁木は南にずれ落ちた状態であった。

3区

雁木 東側の上段の雁木が認められる地点では合計11段の雁木を確認した。最下段の雁木の規模は1区と同様である。中央より西の雁木が認められない箇所では2区と同様に7・8段には新しい補修材を使用している。

裏込め 2・3区ともに人頭大の河原石を外して裏込め石を検出したが、1区ほど密ではない。また、レンガ等が混在することから後世の積み直しが想定されよう。また、上面の礎石も遺存しない。

〈まとめ〉

今回の調査では、1区、3区で山里丸築造時の旧地表を確認した。また、1区では埋もれていた多聞櫓の礎石を検出した。

山里門西石垣では、東端を除いて新しい石材で補修されていることを確認した。この雁木が破壊されたのは、第2次世界大戦時の空襲によるものと伝えられており、2区からは爆弾の破片と思われる金属も出土している。爆撃により地上の雁木が破壊されたことから、新たな石材で補修し、裏込め石を修復し、表面の土の流出を防ぐために河原石を葺いたものと思われる。地表下には8段目以下の雁木がずり落ちた状態で地下に遺存する可能性が高いと思われる。

1区雁木石
取り外し作業
(北から)



1区雁木石
取り外し後
(東から)



1区雁木石
最下段検出状況
(北東から)



2区全景
(南西から)



3区東部
(南から)



3区全景
(南西から)



大坂城跡発掘調査(OS08-14)報告書

調査個所	大阪市中央区内平野町3丁目2-15
調査面積	40㎡
調査期間	平成21年3月10日～3月14日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	文化財研究部次長 南 秀雄、黒田慶一

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は松屋町筋と内本町通の交差点の南西角で、豊臣氏大坂城の惣構に位置し(図1)、周辺は古代から近世に至る遺構・遺物が濃密に分布する。豊臣期の遺構として、内本町通を挟んだ北側のOS92-19次調査地では豊臣前期の礎石建物を伴う屋敷地と同後期の土壌群を検出し、今回の調査地の西隣OS92-16次調査地では豊臣後期の掘立柱建物を、その西側のOS93-47次調査地では豊臣後期の塼列建物をはじめとする礎石建物と屋敷地を画する石組溝が見つかった[大阪市文化財協会2003]。

大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地下1.8m以下に17世紀の遺物包含層が確認されたことから、事業主側が基礎工事を終え、地下1.8mまで重機掘削の後、敷地南寄りで行本調査を行うこととした(図2)。調査は人力により地下2.8mまで行った。

なお、この調査での水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+○mとしている。また、図1は座標北を、それ以外の平面図は磁北である。

2) 調査の結果

i) 層序(図3～5)

第1層：機械掘削で消滅した17世紀から現代に至る地層である。

第2層：層厚約15cmの黄褐色粗粒砂質シルト層である。

第3層：層厚約10cmの黄褐～暗灰黄色の粗粒砂質シルト層で、肥前陶器碗4・皿6が出土した。17世紀中葉の整地層である。調査区の西半で本層と第2層間に層厚約5～20cmの灰層が介在する。上面



図1 調査地位置図

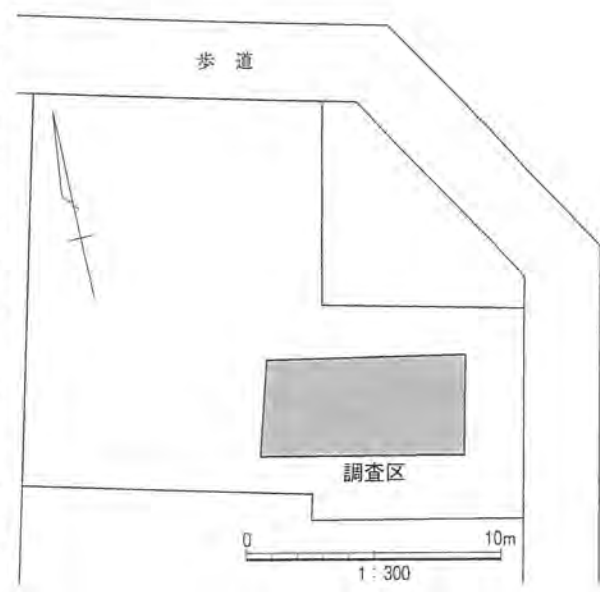


図2 調査区位置図

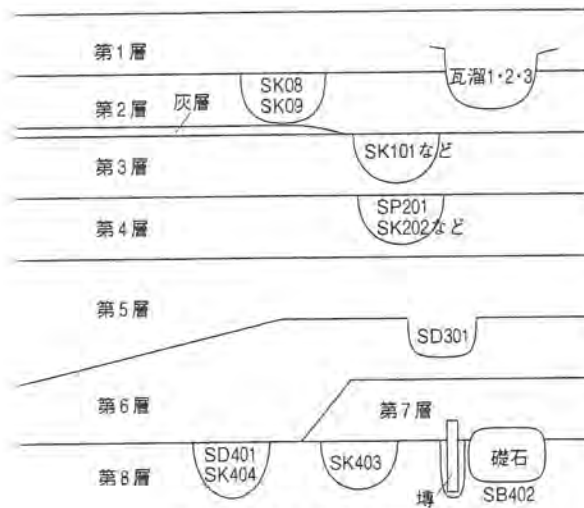


図3 地層と遺構の関係図

に100番台の遺構が分布する。

第4層：層厚10～30cmの黄褐～黒褐色のシルト質粗粒砂層で、肥前陶器皿3、青花皿9、丹波焼播鉢10を含む。17世紀中葉の整地層である。上面に200番台の遺構が分布する。

第5層：層厚10～30cmの炭を含むオリーブ黄色粗粒砂質シルトで、SD301は本層で埋没する。肥前陶器碗1・皿2・向付鉢5、備前焼鉢8が出土した。8は第6層出土の破片と接合した。17世紀中葉の整地層である。

第6層：層厚10～40cmの炭・焼土を含むにぶい黄橙～褐色の粗粒砂質シルト層で、調査区西半では第7層を削平した後、本層が堆積している。17世紀前葉の整地層である。

第7層：層厚30cmの炭・焼土・瓦礫を含む灰黄褐色粗粒砂層で、大坂夏ノ陣の焼土層である。

第8層：層厚60cm以上のにぶい黄褐色シルト質粗粒砂層で、1598年の大坂町中屋敷替え時の盛土である。上面に埴列建物SB402や南北溝SD401などがある。

ii) 遺構と遺物(図5～13)

a. 第8層上面検出遺構(図6)

SB402 埴列建物の西壁のみが見つかり、礎石と埴を立てるための南北溝からなる。2基の礎石は平面が0.4m×0.6mのほぼ長方形を呈し、ほぼ地中に埋められ第8層上面から高さ0.05mほどしか顔を出していなかった。礎石上の焼けた柱痕跡から推定される柱の芯々間は1.2mで、柱間に木舞を厚さ0.15～0.25mで組み、木舞と以下で見る埴列の間に壁土を入れたようである。埴を入れた南北溝は礎石の西辺に接するように掘られ、深さ0.15m、幅0.25mを測る。東肩に埴を立て、溝に瓦片を詰めて埴を自立させた。埴列と木舞外面とは0.15mほど開いていた(図7)。

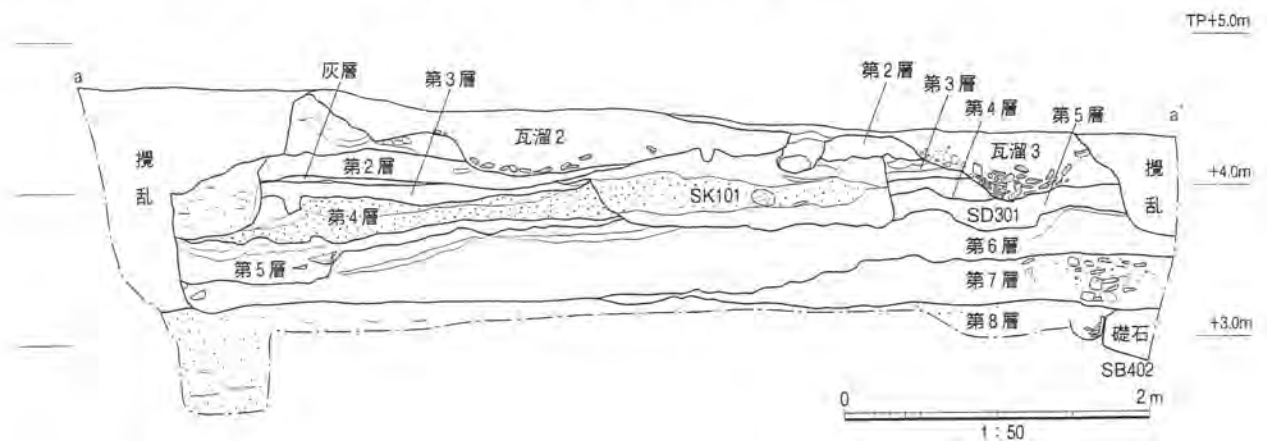


図4 北壁断面図

SD401 長さ2.5m以上、幅0.5m、深さ0.2mの南北溝で、埋土はにぶい黄色シルト質粗粒砂である(図7)。

SK403 SB402を切る直径1.0mの円形の土壇である。

SK404 長径1.0m、短径0.5mの平面が楕円形を呈する土壇である。

b. 第6層上面検出遺構(図8)

SD301 長さ0.7m以上、幅0.5m、深さ0.1mの南北溝で、第5層で埋没する。第6層上面はこの溝の西側で、東から西へ低く下がっていくので、西の低地へ雨水などが流込まないように掘られた簡易的な溝とみられる。

c. 第4層上面検出遺構(図8)

SP201 直径0.3mの不整円形のピットで深さ0.1mを測り、肥前陶器碗13が出土した。

SP203 直径0.25m、深さ0.15mのピットである。

SP204 長径0.45m、短径0.35mの楕円形のピットで、深さ0.1mを測る。

SK202 長さ1.4m、幅0.5m以上、深さ0.4mの土壇で、肥前陶器碗14、土師器皿15が出土した。15は底部外面をユビオサエする。

SK205 長さ1.0m、幅0.5m以上、深さ0.2mの土壇である。

SK206 長さ1.2m、幅0.4m以上、深さ0.2mの土壇である。

SK207 長さ1.2m、幅0.5m以上、深さ0.6mの土壇である。

d. 第3層上面検出遺構(図9)

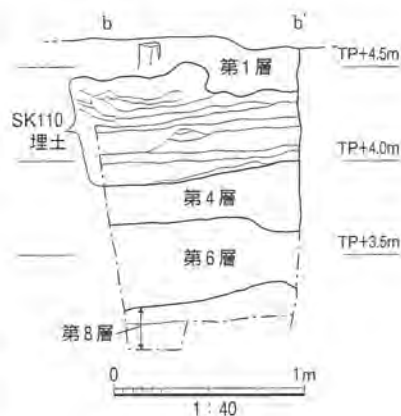


図5 南壁断面図

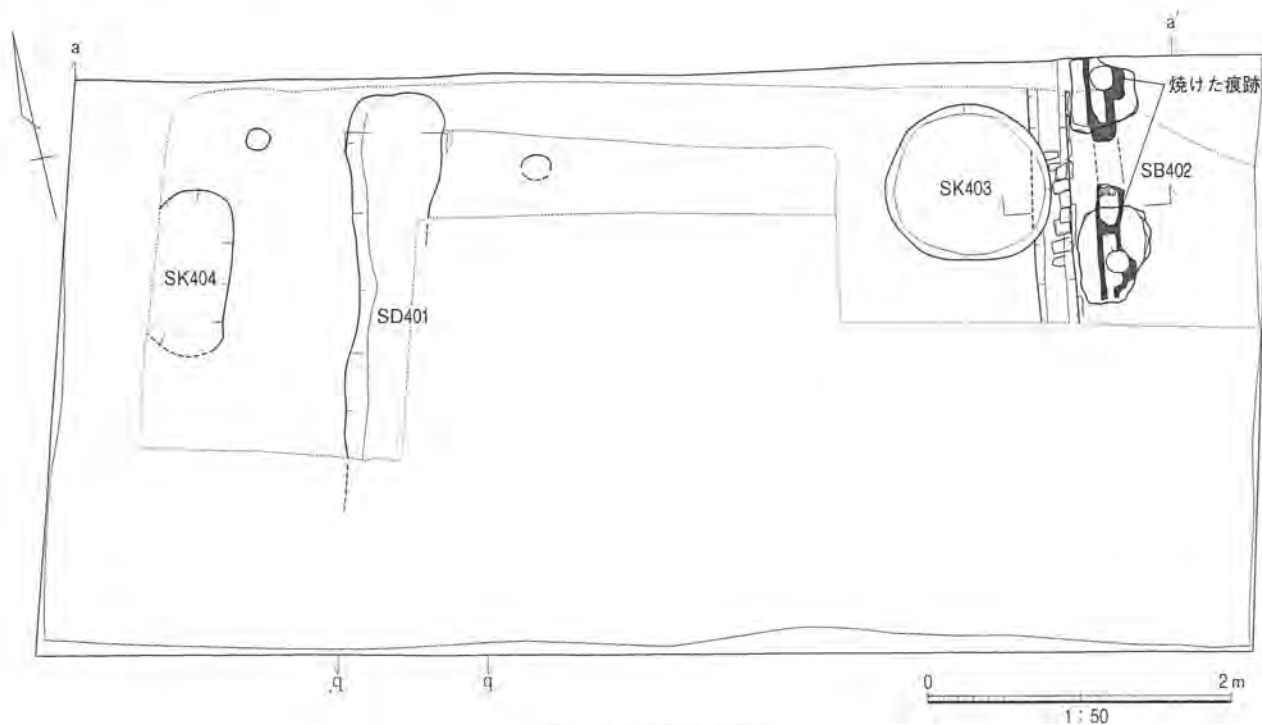


図6 第8層上面平面図

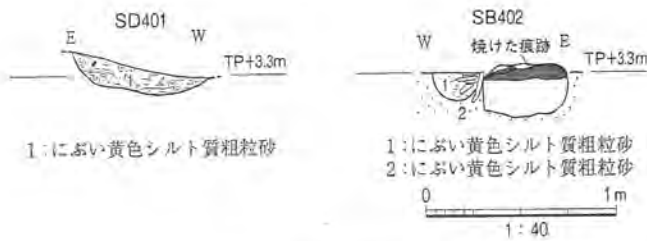


図7 遺構断面図(1)

SK107・110・111は埋土に多量の灰を含み、本層上面に堆積した灰層ともども、なんらかの操業に伴う遺物と考えられる。

SP113 直径0.3m、深さ0.15mのピットである。

SP114 直径0.3m、深さ0.15mのピット

である。

SP115 直径0.4m、深さ0.15mのピットである。

SK101 長さ2.0m以上、幅1.9m、深さ0.5mの平面不整形の土壇で東肩はほぼ垂直に掘込まれ、落ち際に長さ数十cmの石が詰められていた。埋土は純粋な灰か灰・炭混りの粗粒砂である。

SK103 直径0.5m、深さ0.3mの断面が舟底形の土壇で、埋土の下部層は炭・焼土を含む(図10)。

SK104 長さ0.7m、幅0.3m以上、深さ0.35mの土壇で、主に粗粒砂質シルトを埋土とする(図10)。

SK105 長さ0.6m、幅0.3m、深さ0.1mの平面が不整形の土壇で、炭を含む粗粒砂質シルトを埋土とする(図10)。

SK106 SK112を切る長径1.3m、短径0.8m、深さ0.6mの平面が楕円形を呈する土壇である(図10)。肥前磁器碗20・21、肥前陶器碗22、丹波焼大平鉢23、焙烙24が出土した。20は見込みに花卉文を配し、21は体部外面に菊唐草文を描く。

SK107 長さ1.3m、幅0.8m、深さ0.7mの平面がほぼ長方形で、垂直に掘込まれた土壇である。埋土の主要構成物は灰で、鞆羽口19、土師器皿25・26、肥前磁器皿27が検出された(図10)。19の図の斜線部分は被熱した範囲で、25はいわゆるヘソ皿で、26は内面と口縁部外面のみナデ調整する。

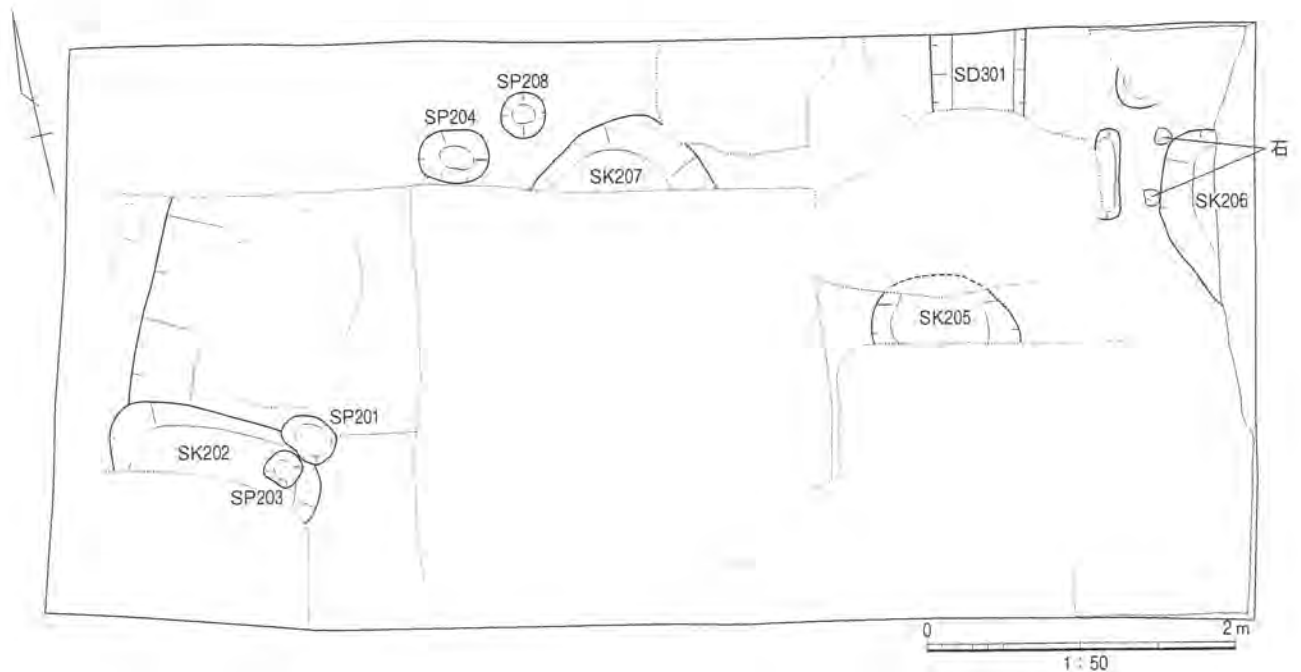


図8 第4層上面平面図(SD301のみ第6層上面)

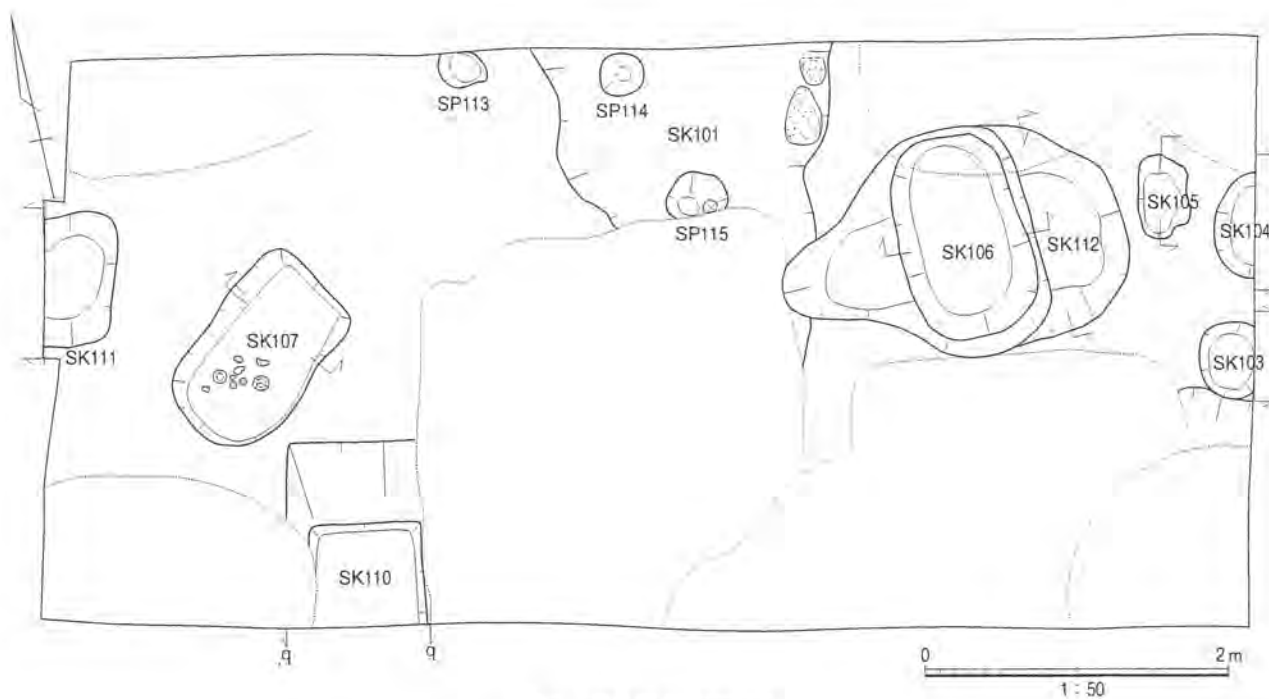


図9 第3層上面平面図

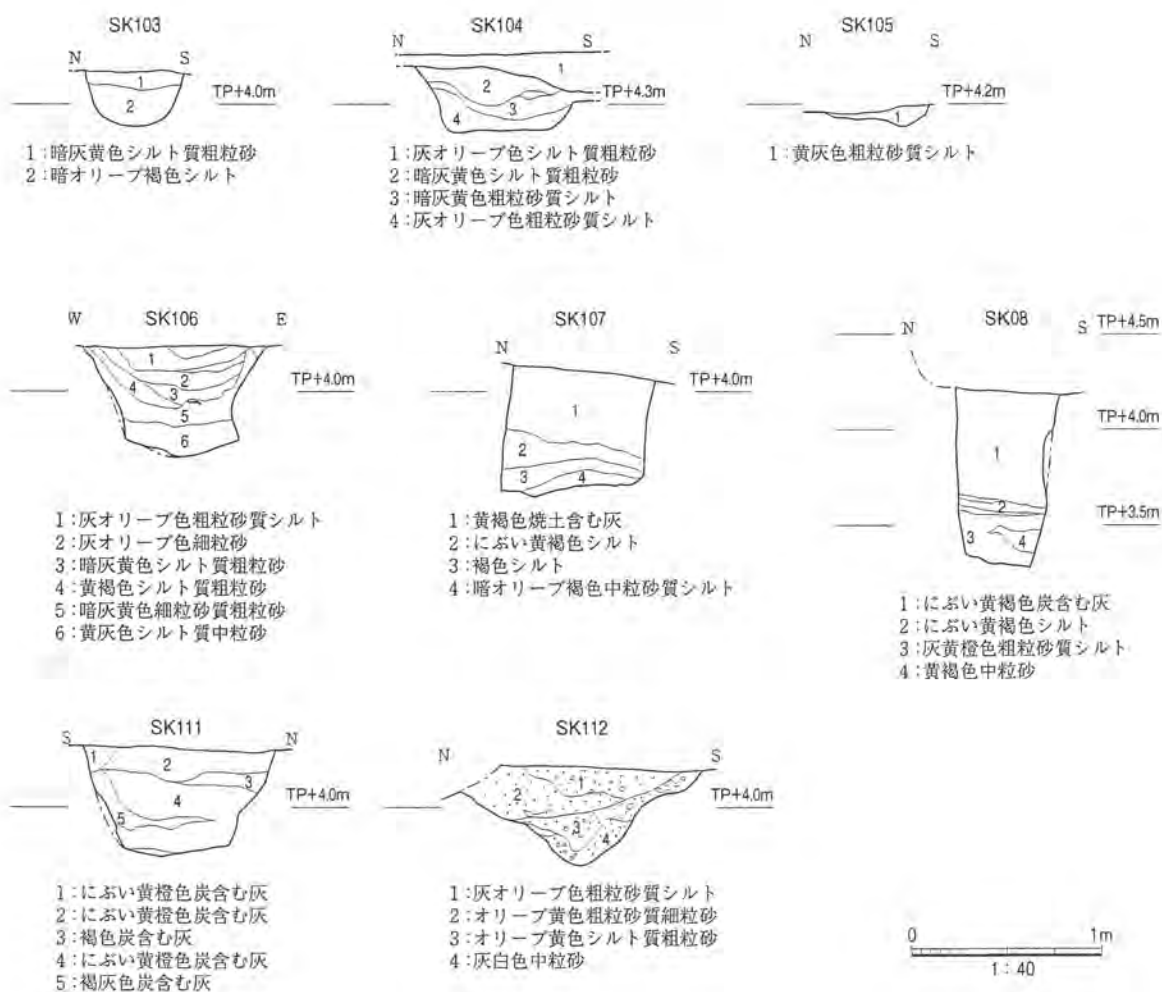


図10 遺構断面図(2)

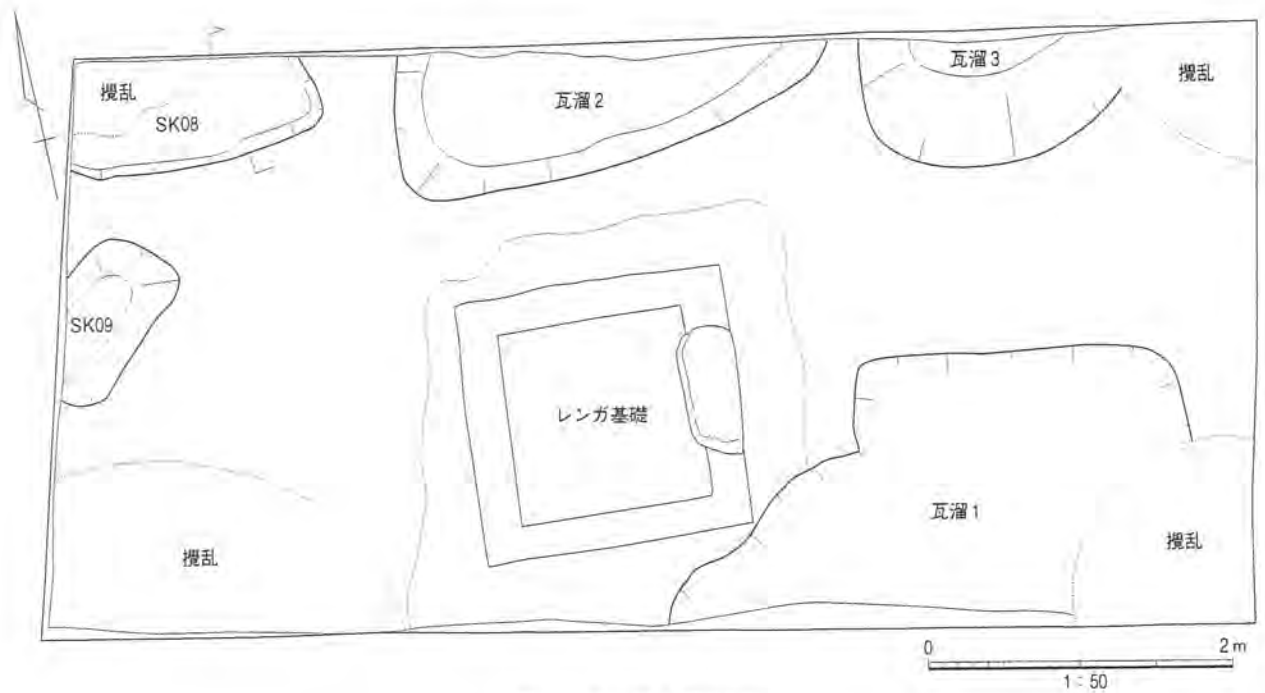


図11 第2層上面平面図

SK110 長さ0.8m以上、幅0.5m以上、深さ0.6mの土壌で、埋土の主要構成物は灰である(図5)。土師器皿16と硯17が出土した。16はヘソ皿で、17は楕円形を呈し、海部分が欠損している。

SK111 長さ0.9m、幅0.5m以上、深さ0.6mで、断面が台形を呈する土壌で、炭混りの灰を埋土とする(図10)。見込みに草花文を配した肥前磁器皿18が見つかった。

SK112 長さ2.3m、幅1.5m、深さ0.5mの断面V字形を呈する土壌である(図10)。

e. 第2層上面検出遺構(図11)

SK08 一辺1.7m、深さ0.9mのはほぼ垂直に掘込まれた土壌で、灰を埋土の主要構成物とする。土師器皿28・29、肥前陶器皿30、備前焼四耳壺31、土師質羽釜32が出土し、28はヘソ皿だが、見込みの突出部に押圧を加えて平らにし、29は口縁部外面のナデ調整以外はユビオサエを施し、30は見込みに砂目痕4個を置く。

SK09 長さ1.2m、幅0.6m、深さ0.2mの平面長方形を呈する土壌で、黒褐色シルト質粗粒砂を埋土とする(図10)。

瓦溜1 調査区南東部に位置し、東西3.5m、南北1.8m、深さ0.7m以上を測り、焼瓦をはじめとする瓦礫を埋めている。近代の遺物も含むが、江戸時代の瓦溜が近代の瓦溜に切られたと思われる。軟質施釉陶器乗燭33、肥前磁器皿34、左巻き三巴文軒丸瓦35、鬼瓦36・37が見つかった。33は鉄釉をかけ、34は外面に唐草文、内面に花と実を描く。35は珠文13個を数え、範キズが目立ち、珠文3個を串刺したような範キズが特徴的である。36は鬼の額上の髪と右角で、37は左足元の破片で、母屋は粘土板を接合して作っている。

瓦溜2 長さ3.0m、深さ0.5mを測り、焼瓦をはじめとする瓦礫を埋めている。

瓦溜3 長さ1.8m、深さ0.4mを測り、焼瓦をはじめとする瓦礫を埋めている。

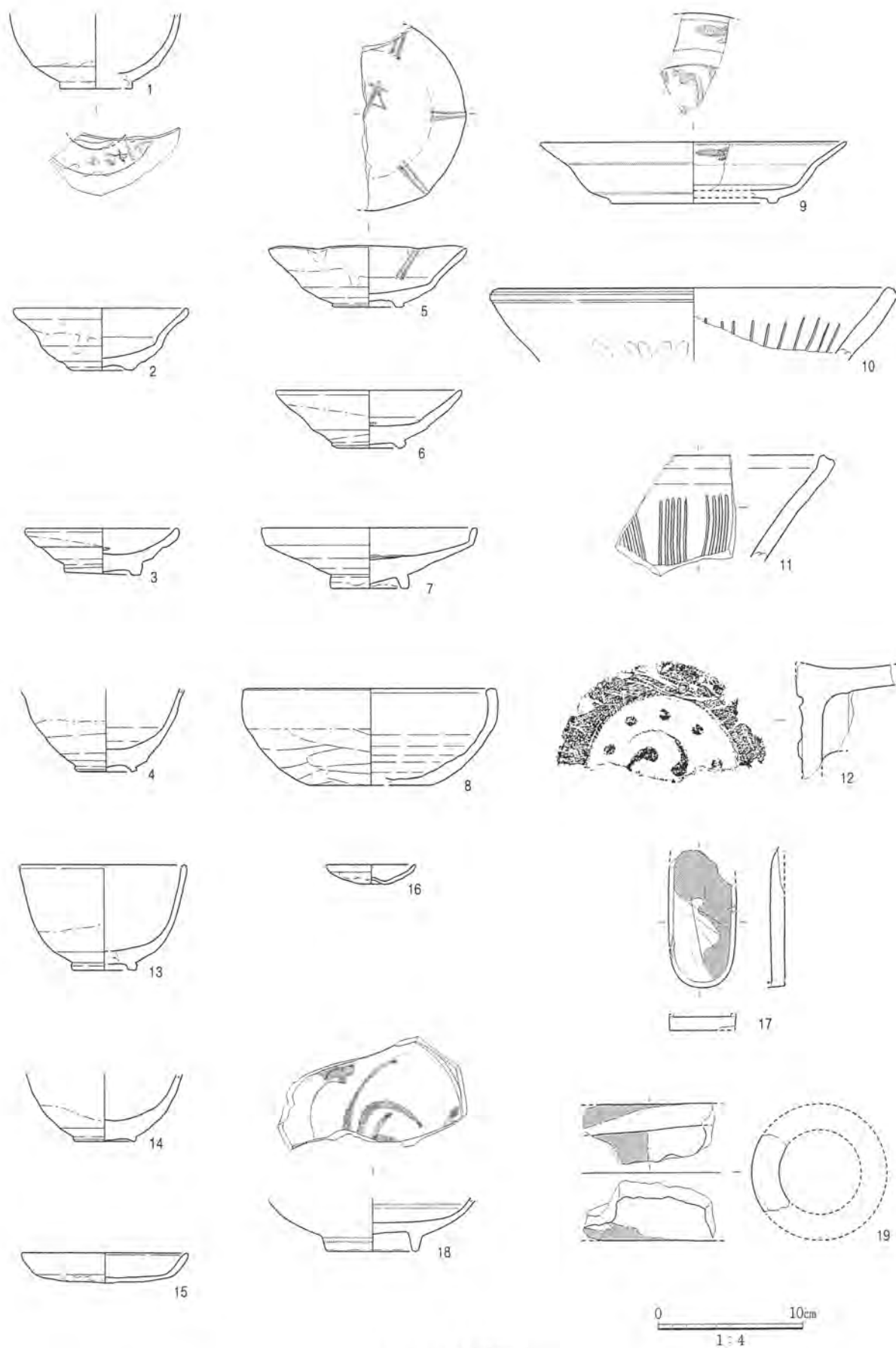


図12 遺物実測図

第5層と第6層(8)、第5層(1・2・5)、第4層(3・9・10)、第3層(4・6)、第2・3層間の灰層(7・11・12)、
SP201(13)、SK202(14・15)、SK110(16・17)、SK111(18)、SK107(19)

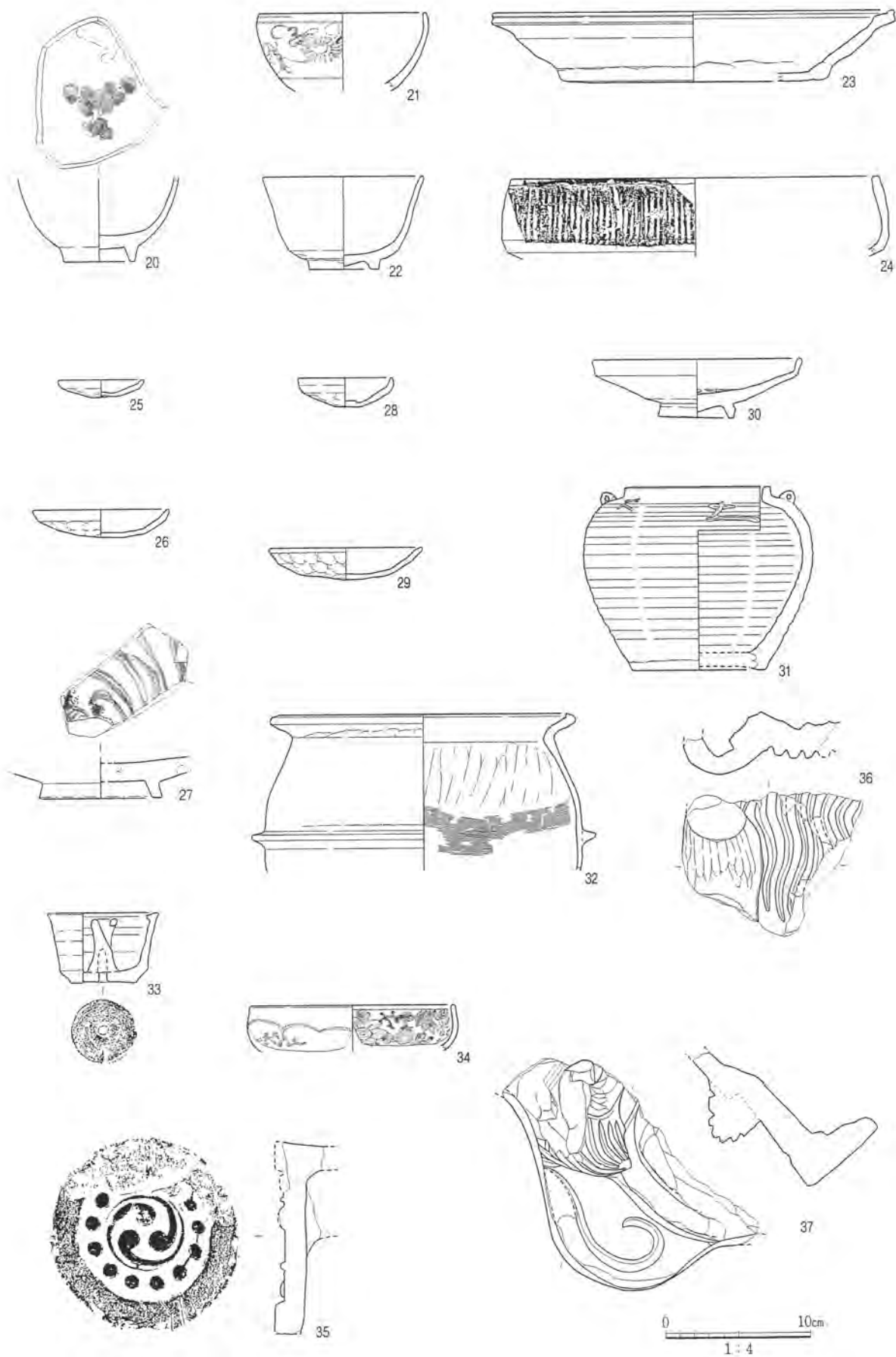


图13 遗物实测图

SK106(20~24)、SK107(25~27)、SK08(28~32)、瓦溜1(33~37)

iii)各層出土の遺物(図12)

第6層からは、体部外面を右回りにヘラケズリする備前焼鉢8が出土した。破片の一部は第5層からも出土した。

第5層からは、肥前陶器碗1・皿2・向付鉢5が見つかり、1は高台際の底部外面に墨書があり、5は六角形の体部の内面に鉄絵を描く。

第4層からは、肥前陶器皿3、丹波焼播鉢10、青花皿9が検出され、3は見込みに4個の胎土目痕をもち、10の播り目はヘラ描きする。

第3層からは、肥前陶器碗4・皿6が出土し、6は見込みに胎土目痕4個をもつ。

第2・3層間の灰層からは、肥前陶器皿7、丹波焼播鉢11、左巻き三巴文軒丸瓦12が見つかり、7は見込みに直径6cmの円を描くように砂目痕を置き、肥前陶磁編年のⅡ期(17世紀前～中葉)〔九州近世陶磁学会2000〕に位置する。11の櫛原体は5本で、12の復元珠文数は9個もしくは10個で、オタマジャクシを思わせる小さな巴文を散漫に配し、内区から周縁部内面にわたり、範の木目の転写が見られる。

第2層上面のSK08も灰を埋土の主たる構成物とし、肥前陶磁編年Ⅱ期に位置する肥前陶器皿30を含み、第3層上面のSK107・110・111も灰を埋土の主たる構成物とすると同時に、肥前磁器皿18・27を含む。加えて上で見たように、第2・3層間に介在する灰層からも同Ⅱ期に位置する肥前陶器皿7が出土している。第2層上面のSK08と第3層上面の遺構、および第2層の堆積は、17世紀中～後葉に位置付けられると考えられる。

3)まとめ

今回の調査地周辺には数多くの既調査地があり、弥生時代以降の遺構・遺物が見つかった。今回は掘削深度が浅かったから、豊臣後期と徳川期の17世紀のみの遺構・遺物を検出した。

豊臣後期の遺構として埴列建物SB402が検出された。小面積の調査だったが、建物構造の一部が確認され、西側近隣地のOS93-47次調査地の埴列建物や礎石建物との類似性から、内平野町通りの南区画は大身の人物の屋敷地であった可能性がある。

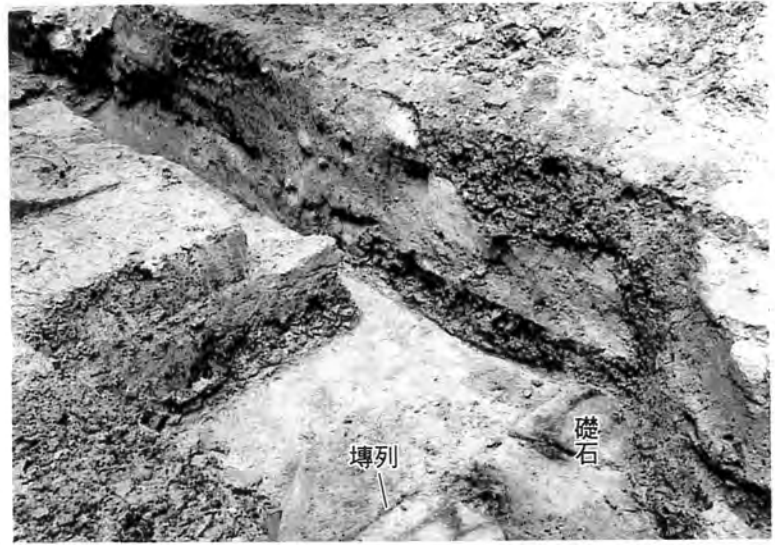
徳川期の17世紀中～後葉の遺構や地層に見られる灰の堆積は、当地の産業を知る手がかりとなるであろう。

参考文献

大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ

九州近世陶磁学会2000、『九州陶磁の編年』

第8層上面 磚列建物
(南東から)



第8層上面 礎石列
(南から)



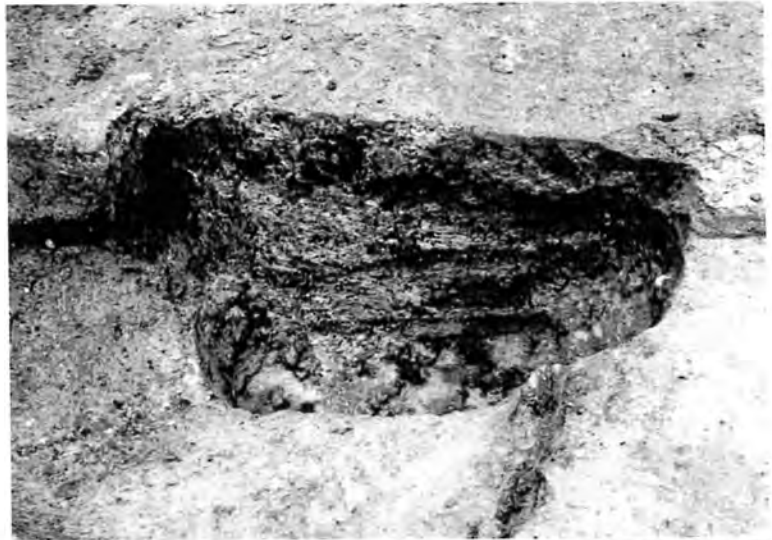
第3層上面調査区東半
(南西から)



SK107 遺物出土状況
(北東から)



SK111(東から)



第2層上面
調査区全景
(南東から)



西心齋橋1丁目所在遺跡発掘調査(WS08-1)報告書

調査個所	大阪市中央区西心斎橋1丁目23-1・2・3
調査面積	8㎡
調査期間	平成20年5月7日～5月8日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	文化財研究部次長 南秀雄、小田木富慈美

1) 調査に至る経緯と経過

今回の調査地は、上町台地先端部の西側、地下鉄御堂筋線心斎橋駅の南西に位置する(図1)。調査地付近は古くは摂津国西成郡に属し、調査地の南約200mの地点には御津八幡宮が立地し、南東400mの地点には織田信長の本願寺攻めにもその名が見られる三津寺がある。古代においては、付近は「難波御津」あるいは「難波三津」などとも文献に記された国家的港津である「難波津」の推定地の一つとなっている[千田稔1984・大阪市史編纂委員会1989a]。また、鎌倉時代には石清水八幡宮の荘園である「三津寺荘」が調査地付近一帯に存在したとされる[大阪市史編纂委員会1989b]。中世末以降、付近は三津寺村と呼ばれ、江戸時代以降は市街地化が進んだ。このように、周辺は古代から近世にいたるまで歴史的に重要な場所にあり、現在も商業地として店舗が建ち並ぶ繁華な地域である。

調査地の周囲を見ると、南東ではNB03-1次調査が行われている(図2)。この調査では、14世紀前半の遺構・遺物が検出され、当該期の居住地が付近に存在したと推定されたほか、17世紀後半に整地が行われて以降、町としての開発が進んだことが明らかにされた[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]。このほか、調査地から御堂筋を挟んで約300m東に位置する東心斎橋1丁目所在遺跡では、HB01-1次調査が行われ、17世紀中葉の遺構・遺物が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003]。

調査に先立ち行われた試掘調査で、近世以前の遺構・遺物が確認されたため、今回の調査を実施することになった。調査では、周辺で確認されている中～近世の遺構を検出することが期待された。調査区は既設のコンクリート基礎の部分避けて敷地の北に設定した(図3)。調査は2008年5月7日に開始し、近世以前の各



図1 調査地の位置



図2 調査地周辺図

層および遺構の検出・掘削作業を人力で行った。調査では江戸時代の土壌および中世以前の小穴が確認された。調査期間内は、適宜写真撮影と記録作業を行い、5月8日に現地での作業をすべて終了し、引き続き撤収作業を行った。

なお、図1・2で使用した示北記号は座標北で、図3・6のそれは磁北である。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文および挿図中ではTP+○mと略記する。

2) 調査の結果

i) 層序

調査地では現代のコンクリート基礎および表土の下位に、江戸時代以降とみられる第1層が堆積していた。さらにその下には第2層が認められた。以下で各層の特徴について述べる(図4・5)。

表土：厚さ15cmで、現代の盛土層である。

第1層：層厚10cmの暗オリーブ褐色粗粒砂質シルトからなる人為層で、調査区の北壁でのみ認められた。江戸時代後半の整地層ないしは遺構の埋土である。18～19世紀の遺物を含む。

第2層：層厚10cmの含礫暗褐色粗粒砂質シルトからなる人為層で、作土である。調査区の南壁でのみ確認された。

第3層：層厚40cm以上の褐色粗粒砂～黄褐色細粒砂層で、粒径の粗粒なものと同様な堆積層の互層からなる海浜砂層である。黄褐色細粒砂層の上面では、カニの巣穴とみられる直径2cm程度の生痕化石が確認された。古代の土師器片が出土している。1は第3層から出土した土師器杯または皿の口縁部である。口縁端部は内側に丸めている。内面には斜放射状暗文を施す。奈良時代であろう。

ii) 遺構と遺物

調査では廃棄土壌と推測される食物残渣や炭を多く含む17世紀後半以降の土壌を多数検出した。また、廃棄土壌に切られる小穴や土壌も確認された。これらの埋土は暗褐色砂質シルトで、出土遺物は土師器・瓦器の細片であることから、中世以前の可能性がある。

a. 中世以前の遺構

第3層上面では土壌SK09・17および小穴SP12～16を確認した。土壌SK09・17は平面が円形や楕円形を呈すると思われる。深さは0.2mで、埋土は暗褐色粗粒砂質シルトであった。SK09からは土師器皿3が出土している。3は口径8.2cm、器高は1cm程度とみられる。口縁部外面をヨコナデして仕上げている。12～13世紀頃であろう。SK17からの出土遺物はない。SP12～16はSP13を除いていずれも



図3 調査区配置図

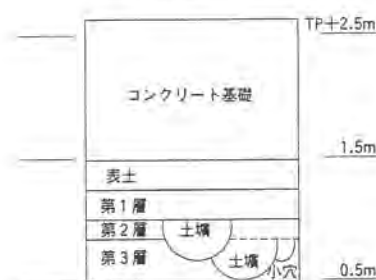


図4 地層と遺構の関係図

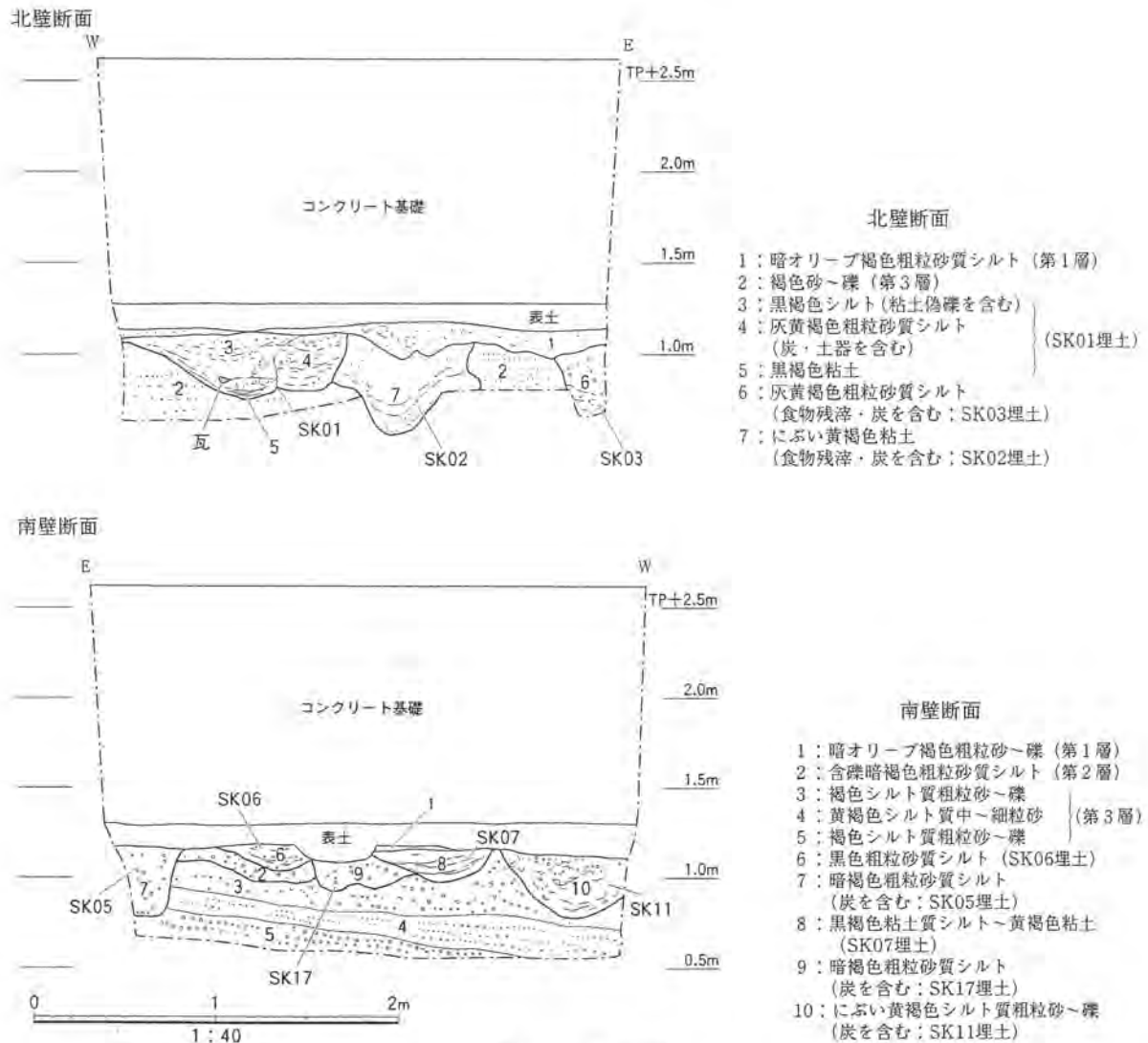


図5 地層断面図

直径0.2m、深さ0.1mの浅い小穴である。SP12からは粗い圈線状のヘラミガキを内面に施す瓦器碗の口縁部片が出土した。SP13は直径0.3m、深さ0.3mで、直径0.1mの柱痕跡が認められたことから、建物や柵などの柱穴の可能性がある。埋土からは土師器・瓦器の細片が出土している。

b. 近世の遺構

第2層上面および第3層上位の第1層基底面で土壌SK01~08・10・11を確認した。SK04は調査区の中央東寄りで検出された平面が不整楕円形の土壌で、深さは0.1mと浅く、出土遺物はない。これ以外の土壌は調査区の北と南に集中して検出された。規模は長軸が0.5~0.9mで平面は楕円形ないしは隅丸方形を呈する。深さは0.2~0.5mであった。これらは食物残渣や炭化物を含む黒褐色粘土~灰黄褐色シルトを埋土とするものが多いことから、廃棄土壌とみられる。SK01・02・08・11からは17世紀後半~18世紀前半代の国産陶磁器・土器類・瓦が出土した。4~6はSK08から出土した。4・5は肥前磁器染付である。4は碗で、口縁部外面には四方禪文を巡らせる。5は皿で、見込みを蛇の目状に釉剥ぎしている。体部外面の下半部は無釉である。6は土師器焙烙である。口縁部内外面はナデで仕上げられており、底部は型作りである。これらの遺物は17世紀末~18世紀初頭のものであろう。7は

SK11から出土した土師器焙烙である。口縁部は内湾気味で、底部にはタタキを施している。17世紀後半のものであろう。なお、SK05・07からは第3層より混入したとみられる古墳時代～古代の遺物が出土している。2はSK07から出土した製塩土器である。内外面をユビオサエと粗いナデで仕上げしており、粘土紐の接合痕跡が残る。胎土には砂粒・雲母・シャモットを多く含む。奈良時代～平安時代前半であろう。

3)まとめ

今回の調査は、期間・面積ともに小規模であったが、大きな成果を得ることができた。以下で時代を追って調査成果をまとめておく。

まず、出土した遺物の中で最も古いものは、古墳時代に属する土師器・須恵器であった。出土した

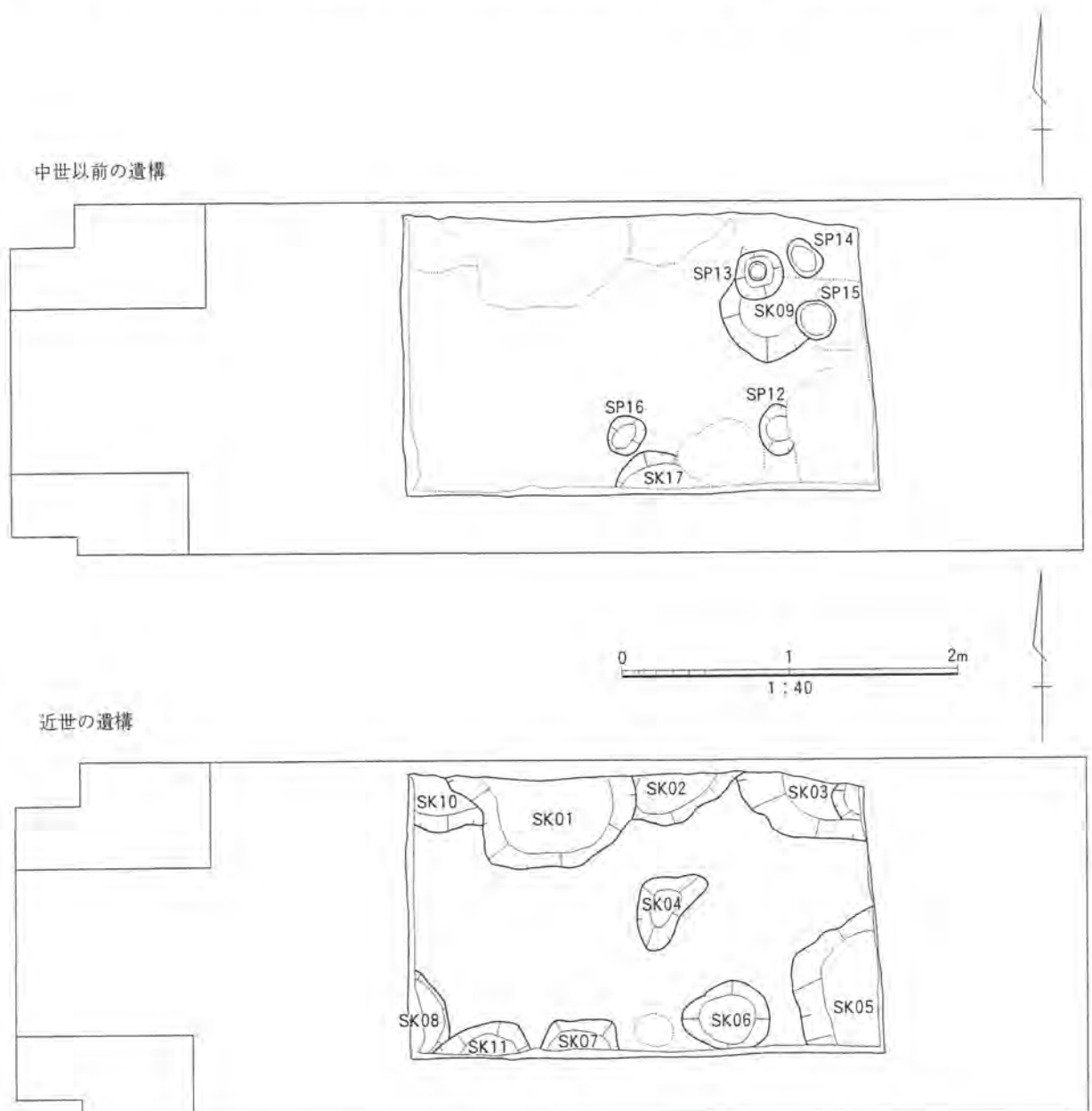


図6 遺構平面図

破片はいずれも磨滅が著しく、周辺が海底にあったことが推測される。

奈良時代の遺物は第3層および後世の遺構から出土している。これらはさほど磨滅しておらず、製塩土器も認められた。このことから、さほど遠くない地点に生活域が存在した可能性がある。なお、第3層の堆積状況からは当該期以降、調査地周辺が陸化し、砂浜となったことが推察される。

中世の遺物は12～13世紀を中心とするもので、わずかであるが遺構も確認されている。NB03-1次調査でも13～14世紀の遺構・遺物が確認されており、周辺が生活域の一部であったことが指摘されていた。また文献史料では、1220(承久2)年にすでに石清水八幡宮の荘園として「三津寺荘」が記載されており[大阪市史編纂委員会1989b]、今回の調査成果は、調査地付近が

鎌倉時代に荘園として開発されていた可能性を補完する資料となった。

江戸時代以降は、17世紀後半～18世紀にかけての廃棄土壌が多数確認されたことから、調査地付近は居住域であり、町屋が建ち並んでいたことが推測される。明治時代の地図からみて、調査地内には現状の敷地と同じく南北に長い地割りがなされていた可能性が高い。調査地の北には背割下水が流れており、南側は建物で、北側は裏庭として使用されていたのであろう。NB03-1次調査では17世紀後半の整地後に町として整備が行われた可能性が指摘されており、今回の調査成果もこれを裏付けることとなった。

さて、調査地付近には古代の国家的港津である「難波津」が存在したとする説がある。これまで古代の遺構・遺物は周辺では確認されていなかったが、今回、さほど磨滅していない遺物が初めて出土した。これを直接「難波津」の施設に結びつけることはできないが、調査地周辺が当時すでに陸化しており、生活域の存在した可能性が指摘できたことは、古代における周辺の状況を考えるうえで貴重な資料を提示することとなった。また、中世の遺構・遺物が再び確認されたことによって、「三津寺荘」およびその関連施設が付近に存在したことをより確実視できる資料を提示することができた。本遺跡における発掘調査は2例目であり、今後の資料の蓄積によって周辺の様相がよりいっそう明らかになることが期待される。

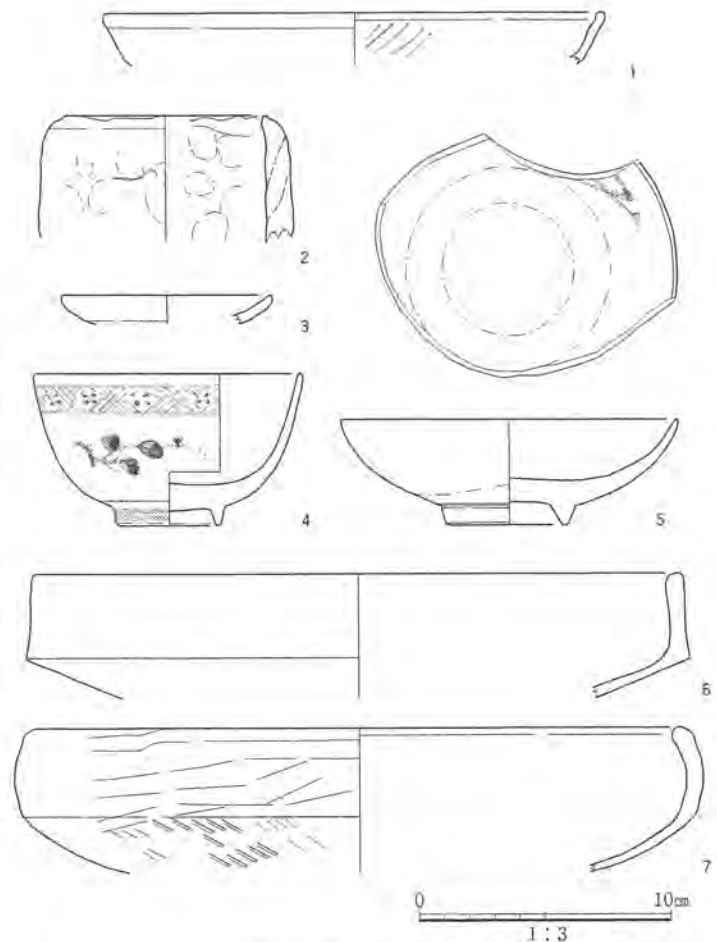


図7 出土遺物実測図

第3層(1)、SK07(2)、SK08(4～6)、SK09(3)、SK11(7)

参考文献

千田稔1984、『埋もれた港』 学生社

大阪市史編纂委員会1989a、『新修 大阪市史』第一卷

大阪市史編纂委員会1989b、『新修 大阪市史』第二卷

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、「東心齋橋1丁目所在遺跡発掘調査(HB01-1)報告書」：『平成13年度
大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.31-36

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「西心齋橋1丁目所在遺跡発掘調査(NB03-1)報告書」：『平成15年度
大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.15-20

調査地より南を望む
(手前が調査区)



第2層上面
遺構検出状況
(東から)



南壁地層断面
(北西から)



Ⅲ 西 区

西区西本町1丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(UT08-1)報告書

調査個所 大阪市西区西本町1丁目1-6・2-3・3-1・4-1・
4-2・5-5・6-4・7-3・8-3・9-3・10-
10・11・12-2

調査面積 150㎡

調査期間 平成20年8月19日～9月3日

調査主体 財団法人 大阪市文化財協会

調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、池田研

1) 調査に至る経緯と経過

本調査地は上町台地西方の大阪低地[趙哲済2006]にあり、靱本町1丁目所在遺跡B地点内に位置する(図1)。近世には西横堀川がすぐ東側を流れており、文献によれば陶器商や古船材商、関東筋問屋などが多く居住していたとされる権右衛門町や奈良屋町の一画であったと考えられるが[直木孝次郎ほか監修1986]、当地域に開発が及んだ年代を含めて考古学的にはほとんどその実態がわかっていない。

今回の調査地では建築工事に先立ち、大阪市教育委員会が試掘調査を実施したところ、現地表面下約120cmで17世紀代の遺構や遺物包含層が確認されたことから、本調査を行うこととなった。

調査区は図2のとおり設定し、調査区南北端とその間の1箇所に基準杭を打設した。現地表面下120cmまでを事業者側が重機で掘削した後、8月19日には人力掘削を開始した。第3層上面では上位層に伴う18世紀以降の遺構を一括して検出し、続いて被災面である第4・6・8層上面で平面調査を行った。第8層上面では大坂冬ノ陣で被災したと考えられる礎石建物・土壌など、豊臣後期の遺構を検出し、9月3日にはすべての作業を終了した。

なお、本調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中ではTP±〇mと記しており、示北記号は図1が座標北、図2・5・6は磁北である。

2) 調査の結果

i) 層序

ここでは東壁地層断面を中心に観察した、調査地の基本層序について報告する(図3・4)。なお、TP-1m以下については湧水が激しく、調査区中央部で部分的な深掘りによる調査を行ったのみで



図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

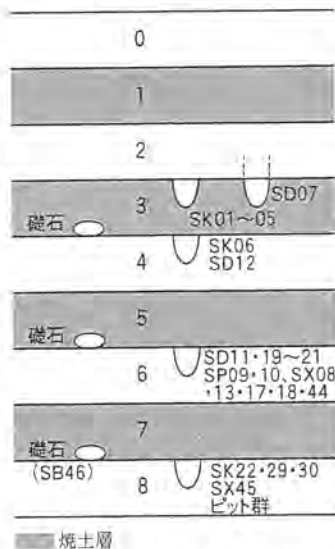


図3 地層と遺構の関係図

あるが、TP-1.55mの水準までは偽礫を多く含む盛土層が続いており、そこからTP-2.03mまでは、暗灰黄色粗粒砂質シルトからなる淘汰の悪い水成層あるいは盛土層が堆積していることが確認された。各地層の層相は以下のとおりである。

第0層：にぶい黄色砂礫質シルトを主体とする現代盛土層である。

第1層：にぶい赤褐色極細粒～極粗粒砂質シルトを主体とし、焼土・炭化物や焼けた瓦を多く含む。第2次大戦に伴う焼土層である。

第2層：にぶい黄橙色極細粒～極粗粒砂を主体とする18世紀以降の整地層である。

第3層：にぶい黄褐色極細粒～細粒砂質シルトを主体とし、炭化物を多く含む。享保9(1724)年の「妙知焼」に伴う焼土層で、本層上面では焼けた瓦・土器を片付けたとみられる土壌や溝などを検出した。

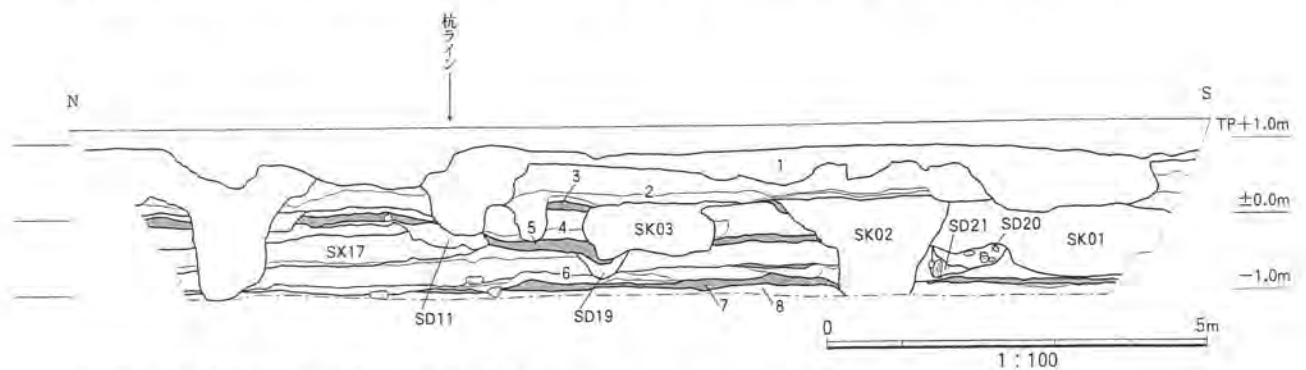
第4層：にぶい黄橙色極細粒砂質シルトを主体とする整地層で、炭化物を含む。本層の上部は被熱により赤褐色に変色している。上面では礎石・土壌・溝などを検出した。

第5層：黒褐色極細粒～細粒砂質シルトを主体とし、焼土・炭化物を多く含む。17世紀後半ごろの火災に伴う焼土層である。

第6層：黄褐色シルト質極細粒～細粒砂を主体とする整地層である。本層の上面は火災により被災しており、礎石・溝・ピットなどを検出した。

第7層：黒褐色極細粒～細粒砂質シルトを主体とし、炭化物・焼土を多く含む。慶長19(1614)年の大坂冬ノ陣に伴う焼土層である。

第8層：にぶい黄橙色極細粒～極粗粒砂を主体とする豊臣後期の整地層で、シルト偽礫や礫を含む。本層上面は大坂冬ノ陣で被災しており、礎石建物、土壌、ピット、瓦溜りなどを検出した。



- 第0層：にぶい黄色(2.5Y6/3)砂礫質シルト(現代盛土)
- 第1層：にぶい赤褐色(2.5YR4/3)極細粒～極粗粒砂質シルト(焼土・炭化物・瓦を多く含む焼土層)
- 第2層：にぶい黄橙色(10YR6/3)極細粒～極粗粒砂(整地層)
- 第3層：にぶい黄褐色(10YR4/3)極細粒～細粒砂質シルト(炭化物を多く含む焼土層)
- 第4層：にぶい黄橙色(10YR6/4)極細粒砂質シルト(整地層で、上面は火災により被災している。炭化物を含み、上部は赤褐色に変色している。)
- 第5層：黒褐色(10YR3/1)極細粒～細粒砂質シルト(焼土・炭化物を多く含む焼土層)
- 第6層：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極細粒～細粒砂(整地層で、上面は火災により被災している)
- 第7層：黒褐色(7.5YR3/1)極細粒～細粒砂質シルト(焼土・炭化物を多く含む焼土層)
- 第8層：にぶい黄橙色(10YR6/4)極細粒～極粗粒砂(シルト偽礫や礫を含む整地層)

図4 東壁地層断面図

ii) 遺構とその遺物

a. 第8層上面(図3・5)

大坂冬ノ陣で被災したとみられる遺構面で、礎石建物SB46、土塋SK22・29・30、ピット、瓦溜りSX45などを検出した。

SB46 本遺構面で検出された礎石のうち、組合うと考えられるものは南北方向2列、東西方向4列分が確認されており、柱間は南北方向が3.0m、東西方向が2.0mである。また、礎石の直径は0.3m程度である。西側以外は礎石列が調査区外に続いている可能性もあること、また本調査区は徳川期には東側に間口の開く片側町の権右衛門町の一面あるいは両側町である奈良屋町の東端に当たっていたと考えられるが、そうした町割がどこまで遡れるのか不明であることなどから、現状では一つの建物であるのかという問題を含めてその規模や構造を復元するのは難しい。

一方、SB46内では緋銭が出土している。銭の総数は30枚で、孔には紐の痕跡が観察された。内訳は唐銭1枚、北宋銭18枚、南宋銭6枚、不明5枚からなる(表1)。

当遺構面で検出されたこれらの遺構や遺物は、船場地域に比較すると遅れると考えられてきた西横堀川以西の地域における開発が、少なくとも豊臣後期の段階ではある程度進んでいたことを示す資料として重要な意味をもつ。また、調査地周辺の開発と密接な関係をもつと考えられる西横堀川の開削年代について、これまで慶長5(1600)年前後とする説から、元和5(1619)年ごろまで降るとする説まで諸説が唱えられてきたが[直木孝次郎ほか監修1986など]、その再検討を促す考古学的資料としても注目されよう。

b. 第6層上面(図3・6～8、表1～3)

17世紀後半の火災により被災したと考えられる遺構面で、礎石、溝SD11・19・20・21、ピットSP09・10、SX08・13・17・18・44などを検出した。

SX08・13、SD19 調査区北東部と東部中央で特に焼土・炭化物が厚く堆積している部分をそれぞれSX08・13とした(図6トーン部分)。SX08内では組合うものはなかったが、礎石とみられる人頭大の礫が多数検出された。出土した遺物には土師器、丹波焼、肥前陶器、青花、肥前磁器染付・瑠璃釉・

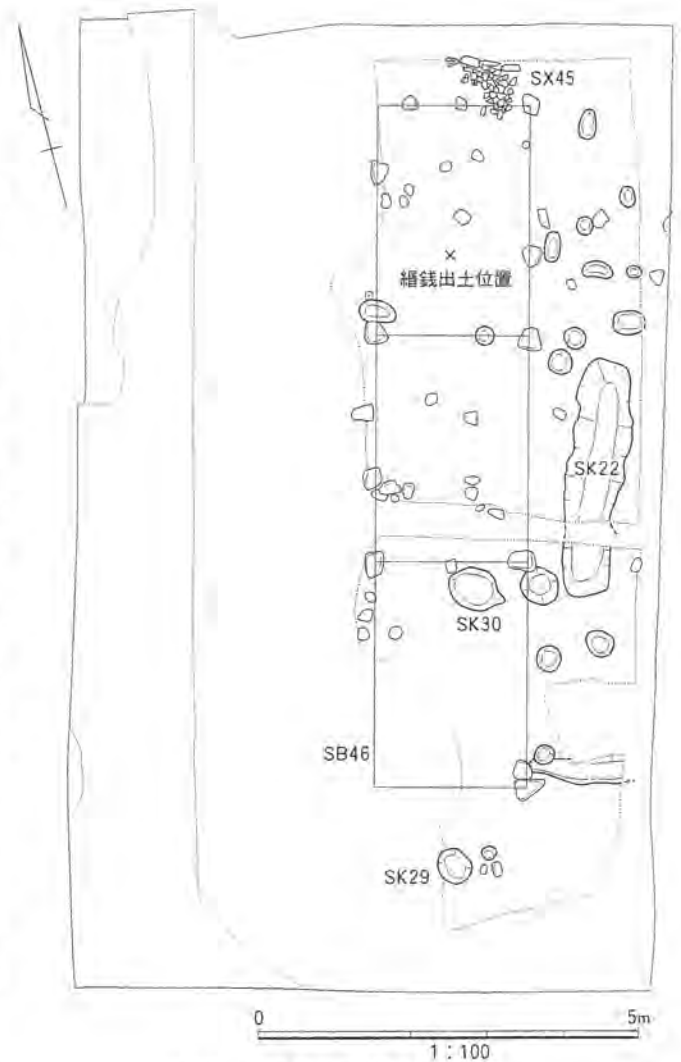


図5 遺構平面図(第8層上面)

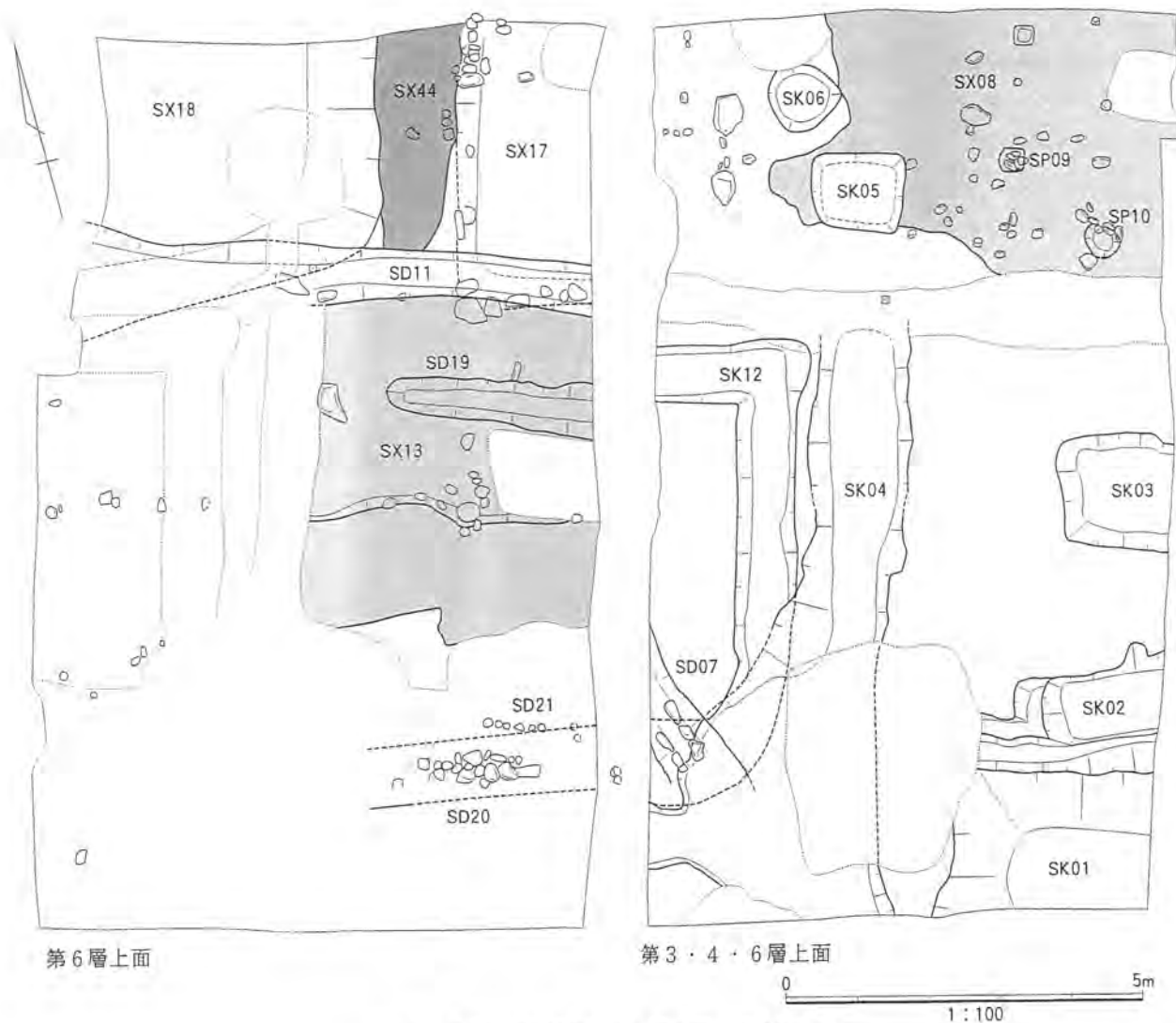


図6 遺構平面図(第3・4層上面、第6層上面)

青磁・白磁、丸・平瓦、キセル、銭貨などがある。一方、SX13内でも礎石とみられる人頭大の複数の礎が確認されたほか、東西方向の溝SD19が検出された。SD19は幅0.7m、深さ0.35m程度である。埋土はオリブ褐色極細粒～細粒砂質シルト層からなり、焼土・炭化物・シルト偽礫を含む。SX13からは土師器、瓦質土器、備前焼、丹波焼、瀬戸美濃焼、肥前陶器、中国製青花・色絵、肥前磁器染付・青磁、土鈴、壁土、銭貨、金属製品、魚骨など、多量の遺物が出土した。1～3は土師器皿である。1・3の口縁端部には煤が付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。また、2の外面には広い範囲に煤が付着している。4は備前焼鉢である。口縁端部には叩打痕が顕著で、灰落としとして使用されていた可能性がある。底部の外面には三角形の刻印がある。5は瀬戸美濃焼皿で、内底面には目跡が4箇所に残る。同様の皿が本遺構から複数出土しており、セットで用いられたと考えられる。12はいわゆる二彩唐津の肥前陶器皿である。7～9は肥前磁器染付皿で、7はほぼ完形である。7・9はいずれも釉薬が青味を帯びており、高台端部には砂が付着している。いわゆる初期伊万里に属するものであろう。8は同じ文様構成の皿が本遺構から複数出土しているおり、セットで用いられたと考えられる。10・11は肥前磁器青磁皿である。10の底部には人面を模った三足が付く。11は口縁端部に

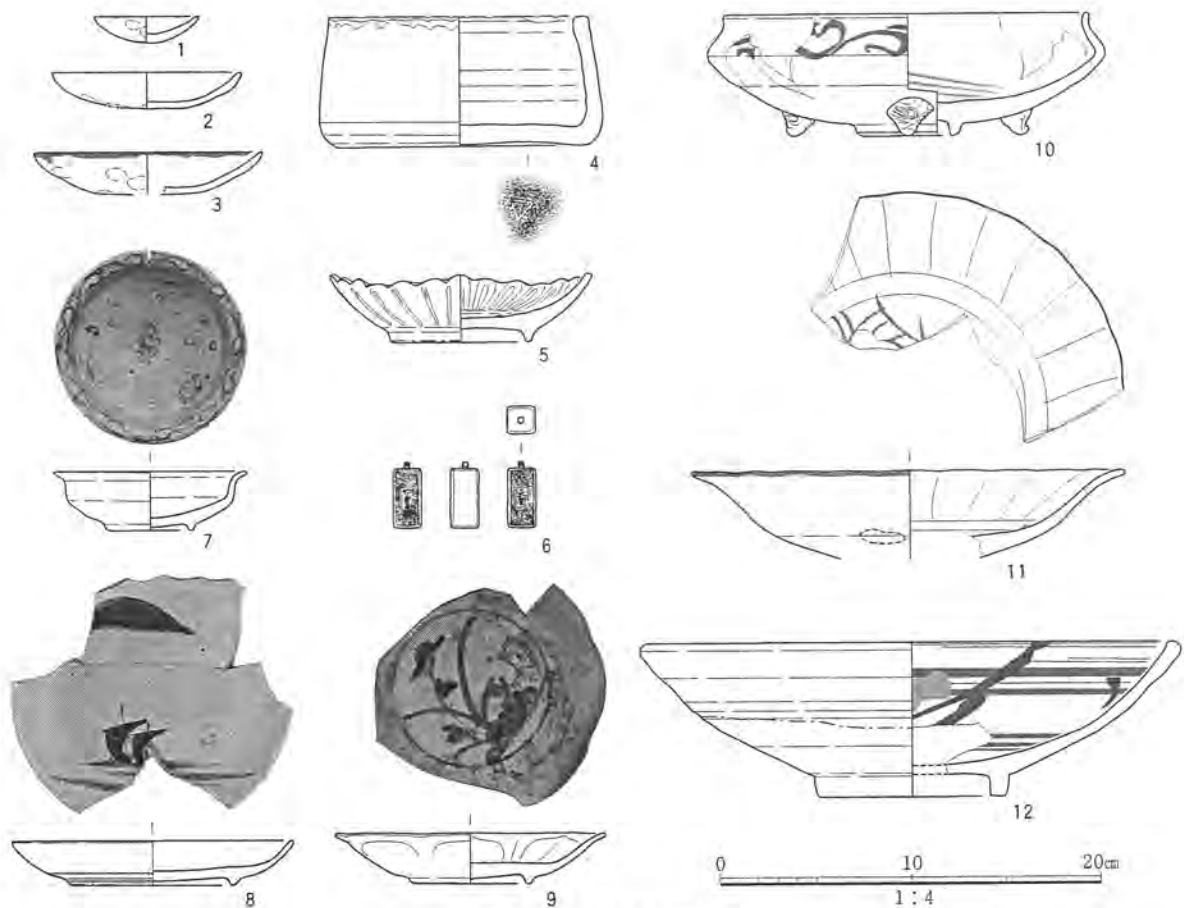


図7 SX13出土の遺物

口紅を施しているほか、底部外面には剥落痕があり、10と同様に足付きであった可能性がある。6は棹秤の錘である。側面には「天下一」と「やまと」の刻印がある。重さは57.3gある。

SD11 SX13とSX17・18の境界部で検出した東西方向の溝である。残りのよい部分では深さが0.3m程度で、埋土はにぶい黄褐色極細粒～細粒砂質シルトからなる。本遺構を境に南北で第5層の水準が異なること、ほぼ同一の位置にある近代の攪乱により上部が壊されていることなどから、本遺構面から長期間にわたって屋敷境といった重要な境界として認識されていた可能性がある。本遺構から出土した遺物には土師器、肥前陶器、肥前磁器染付・白磁、焼塩壺などがある。

SD20・21 調査区東南部で検出した溝で、残存状態は悪いが石組み溝であったと考えられる。東壁断面を観察した結果によれば、SD20はSD21とほぼ同位置に掘直されており、掘形は幅約1mある。

SX17・18・44 調査区北部で検出した遺構で、SX17・18の北端および東・西端は調査区外に続いている。SX17は深さが0.4m程度あり、肩部には磔を巡らせていたと考えられる。埋土のうち、上層はにぶい黄褐色極細粒～中粒砂層からなり、シルト偽磔を含む。下層は灰色シルト層からなり、水浸きの状態で堆積したと考えられる。本遺構からは土師器、丹波焼、肥前陶器、肥前磁器染付、瓦、金属製品などが出土した。36は丹波焼播鉢で、播目は4本1単位である。

続いて、SX18は深さが0.9m程度ある。埋土のうち、上層は緑灰色シルト質極細粒砂層、下層は灰オリーブ色極細粒～中粒砂層からなり、ともにシルト偽磔を含む。本遺構からは多数の土師器皿・灯

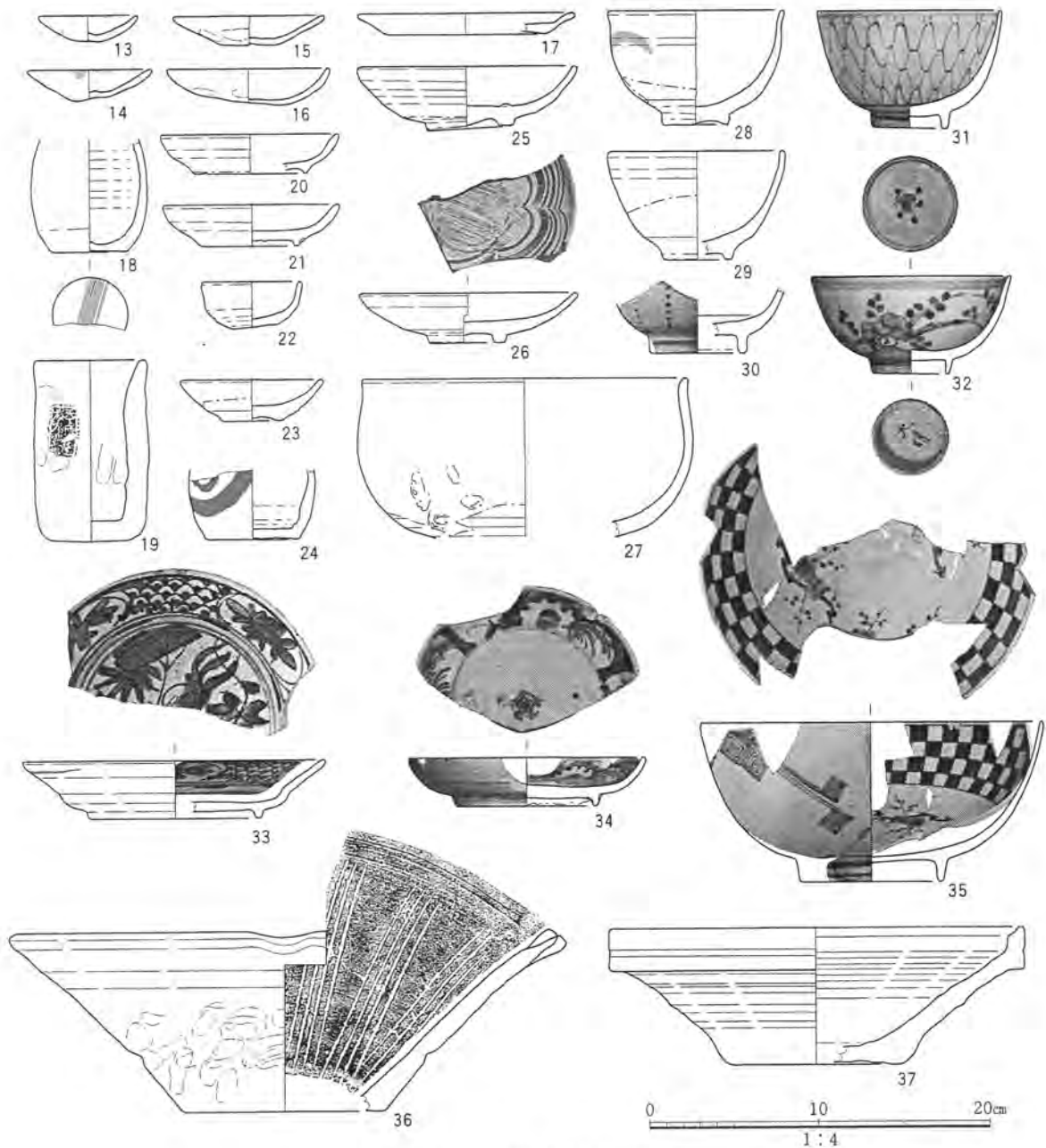


図8 遺構・包含層出土の遺物

SK03(30・35)、SX17(36)、SX18(16)、第4層(19・34)、第5～6層(32)、第6層(13・23・26・31・33)、
第7層(14・15・18・20～22・25・27～29・37)、第8層(17・24)

明皿や肥前陶器、平瓦などが出土した。16は土師器皿である。口縁端部には煤が付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。

一方、SX44はSX17とSX18の間にある幅1 m程度の平坦部で(図6の濃トーン部分)、通路などとして機能していた可能性がある。ハマグリを主体とする貝殻片が密に分布しており、地盤改良などのために敷かれたとも考えうるが、土壌サンプルを水洗選別した結果、貝類以外に魚類・両生類の骨が回収された。同定結果は表2・3のとおりである(魚類・両生類の同定は京都大学丸山真史氏による)。

c. 第4層上面(図3・6)

享保9(1724)年の「妙知焼」により被災したと考えられる遺構面で、溝SD12、土壌SK06、礎石な

どが検出された。

SD12 コの字形を呈する溝あるいは溝状の土壌で、西端は調査区外に続いている。幅0.9m、深さ0.4m程度で、埋土は浅黄色細粒～粗粒砂層などからなり、炭化物を含む。出土した遺物には土師器、備前焼、丹波焼、肥前陶器京焼風、肥前磁器染付、砥石、丸・平瓦、金属製品などがある。

d. 第3層上面(図3・6、表1)

第3層上面では上位層に伴う遺構を一括して検出した。土壌や溝など、検出された遺構は出土した遺物から18～19世紀に属するものと考えられる。

SK01～05 いずれも被災後の片付けに伴う土壌とみられ、暗褐色極細粒～極粗粒砂質シルトを主体とする埋土には焼けた瓦や土器、焼土・炭化物などが大量に含まれる。規模や形状はさまざまであ

表1 出土銭貨一覧

出土遺構・包含層	枚数	銭種	備考
第4～6層	1	皇宋通宝	
第5層	1	古寛永通宝	
第6層	7	元豊通宝?・至和元宝?・永楽通宝各1、古寛永通宝4	SX13遺物混る
第6層	2	不明	
第7層上面	30	開元通宝・大観通宝・政和通宝・熙寧元宝・天禧通宝・明道元宝・祥符元宝・聖宋元宝・慶元通宝・紹定通宝・咸淳元宝・嘉定通宝各1、元豊通宝・元符通宝・紹聖元宝・皇宋通宝・開禧通宝各2、元祐通宝3、不明5	緡銭
第7層上面	1	皇宋通宝	緡銭周辺
第7層	2	熙寧元宝・景德元宝	
第7層	3	紹聖元宝1、元豊通宝2	
第8層	2	紹聖元宝・皇宋通宝	
SK02	2	不明	
SK03	1	寛永通宝	
SX08	2	古寛永通宝	
SX13(第5層～第6層上面)	12	元符通宝・淳化元宝・嘉祐通宝・熙寧元宝・永楽通宝各1、元豊通宝2、寛永通宝3(うち古寛永2)、不明2	

表2 SX44出土の魚類・両生類

大分類	小分類	部位	部分1	部分2	左右	推定体長(cm)	備考(加工痕他)
硬骨魚綱	アマダイ属	方骨	ほぼ完形		左	20～30	
	アマダイ属	前鰓蓋骨	前位部		右	20～30	
	アジ科	椎骨	尾椎		—	20～30	
	アジ科	歯骨	後位部		右	20～30	
	カツオ	椎骨	尾椎	椎体	—	20～30?	
	カツオ	尾鰭椎体前椎体			—	20～30?	
	マダイ	前頭骨	右半分		—	20～50?	宛割? 傷は不明瞭である
	コチ科	椎骨	尾椎		—	30～40	椎体を輪切り状に切断
	不明	椎骨	第一腹椎	椎体	—	中型	
	不明	椎骨	腹椎	椎体	—	中型	
両生綱	カエル類	椎骨			—	—	トノサマガエルより大、ウシガエルより小

表3 SX44出土の貝類

出土遺構・包含層	ハマグリ	ハイガイ	シオフキ	ヤマトシジミ	イシガイ科?	カワノナ科	タニシ科
SX44	1743	1	24	2	●	26	2

●は殻頂・殻口が出土しておらず個体数は不明であるが、破片から存在が確認されたもの

るが、もっとも大きいSK04は溝状で、長さが8 m以上、深さは0.6m前後ある。

これらの土壌からは土師器、備前焼播鉢・徳利・甕、丹波焼播鉢・甕、堺播鉢、肥前陶器京焼風・刷毛目、瀬戸美濃焼、青花、肥前磁器染付・陶胎染付・青磁染付・白磁・青磁・色絵、軒丸・平瓦、壁土、基石、砥石、銭貨など18世紀前半を中心とする遺物が出土している。30はSK03から出土した産地不明の青花碗である。35は同じくSK03から出土した肥前磁器染付鉢で、高台内には「渦福」の銘がある。

SD07 調査区西南部で一部を検出した北西-南東方向の石組み溝である。埋土はにぶい黄褐色シルトからなる。

iii) 包含層出土の遺物(図8・表1)

第4層からは土師器、瓦質土器、備前焼、丹波焼、瀬戸美濃焼、肥前陶器京焼風、肥前磁器染付・青磁・白磁・色絵、砥石、軒丸・平瓦、貝類など17世紀から18世紀前葉にかけての遺物が出土した。34は肥前磁器染付皿である。19は完形の焼塩壺で、「天下一堺ミなど 藤左衛門」の刻印をもつ。

第5層からは銭貨が、第5～6層からは完形の肥前磁器染付碗32が出土している。

第6層からは土師器、須恵器、備前焼、丹波焼、瀬戸美濃焼、肥前陶器、中国製青花・色絵、肥前磁器染付、瓦、基石、砥石、銭貨、金属製品、貝類など17世紀前半を中心とする遺物が出土した。13は完形の土師器皿である。口縁端部の一部には煤が付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。23は完形の、26は刷毛目の肥前陶器皿である。26は内底面に砂目跡がある。33は粗製の中国製青花皿である。31は肥前磁器染付碗である。高台端部には砂粒が付着している。

第7層からは土師器、須恵器、瓦器、備前焼、瀬戸美濃焼、肥前陶器、青花、瓦、壁土、砥石、金属製品、銭貨、貝類など豊臣後期を中心とする遺物が出土した。14・15は土師器皿である。ほぼ完形の14は口縁端部の一部に煤が付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。18・37は備前焼である。18は袋物で、底部外面には櫛描直線文状の線刻がある。37は播鉢で、口縁部の上・下端部には重ね焼きの痕跡がある。20～22は瀬戸美濃焼である。20・21は皿、22は小杯で、ほぼ完形の21の高台内には輪トチの痕跡がある。25・27～29は肥前陶器である。28・29は碗で、28の体部の外面には鉄絵が施されている。25は皿、27は鉢で、25の内底面には胎土目の痕跡が3箇所にある。

第8層からは土師器、須恵器、肥前陶器、瀬戸美濃焼志野、青花、瓦、壁土、基石、銭貨など豊臣後期を中心とする遺物が出土した。17は土師器皿で、平安時代前期ごろのものが混入した可能性がある。24は肥前陶器の袋物である。

3) まとめ

今回の調査では、豊臣後期から徳川期にかけての複数の生活面とそれに伴う遺構が検出されたことにより、考古学的にはほとんど実態が分かっていなかった、当地域の開発の過程に関する数多くの知見を得ることができた。中でも、礎石建物や緋銭など豊臣後期に属する遺構や遺物が見つかったことは、これまでに考えられていたよりも早い時期に、西横堀川以西の地域へ開発が及んでいたことを示

す重要な成果として注目される。

今後、調査地周辺の調査が進展すれば、町割の成立や西横堀川の開削年代、居住者の職種や階層なども含め、当地域全体の具体像がより明らかになるものと期待される。

引用・参考文献

直木孝次郎・森杉夫監修1986、『大阪府の地名』平凡社、pp.383・519-520

趙哲済2006、「船場・道修町、その土地の成り立ちに迫る」：道修町資料保存会編『第13回 道修町文化講演会』、pp.9

- 43

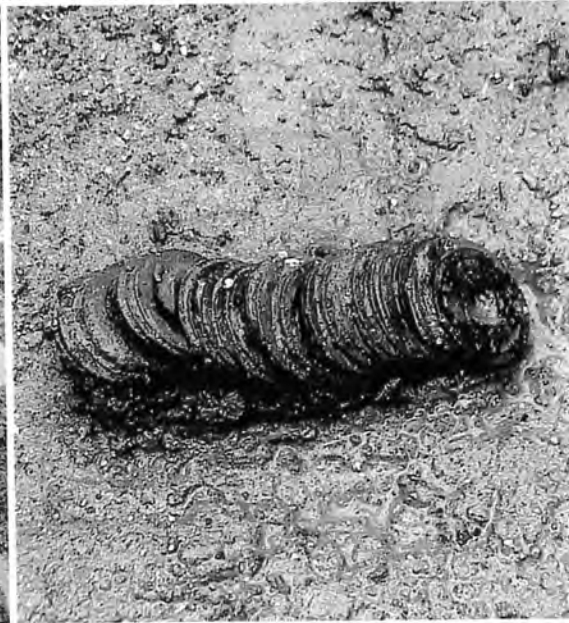
東・北壁地層断面
(南西から)



第8層上面(北から)



左：SB45(北から)
右：縹銭出土状況
(北東から)



第6層上面(北から)



左：SX13・SD19
(東から)

右：SX17・18・44
(南東から)



第3・4層上面



IV 天王寺区

北河堀町所在遺跡発掘調査(KC08-1)報告書

調査個所	大阪市天王寺区悲田院町18-9
調査面積	40㎡
調査期間	平成20年11月21日～11月26日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	文化財研究部次長 南 秀雄、大庭重信

1) 調査に至る経緯と経過

北河堀町所在遺跡は、古墳時代～中世の集落遺跡である。本調査地は西南が高く東北が低い斜面に位置し、北側の東西に延びる谷筋は和気清麻呂による河内川堀江の工事跡と推定されている。また、この谷筋を挟んだ調査地北側約500mには四天王寺の南門が位置している(図1)。

南北道路を挟んだ今回調査地の東側で行われたKC99-1・00-1次調査では、前期難波宮の造営や四天王寺との関係を窺わせる飛鳥時代の遺構・遺物が検出された。さらに、遊離資料ではあるが古墳時代後期の埴輪が多数出土し、付近に古墳が存在していたことが推定された。また、この東隣で行われたKC07-1次調査では、斜面に平行する東西方向の空堀群が検出され、中世後半に砦のような防衛施設があったことが推定された。

このような周辺の調査成果を受け、大阪市教育委員会が当該地の北半で試掘調査を行った結果、現地表下約2.2mで古代～中世頃と考えられる遺物包含層が確認された。こうした地層や遺構・遺物の分布状況を確認し、当地域の歴史の変遷を復元する上での基礎資料を得るため、今回の調査を実施した。

調査は、事業者が地表下約2.2mまでを重機で掘削した後に開始した。調査地の中央に調査区を設定し(図2)、人力で遺構の検出作業を行った。調査および本報告で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中では「TP+○m」と示す。示北記号は図1は座標北、図2・5は磁北である。



図1 調査地位置図

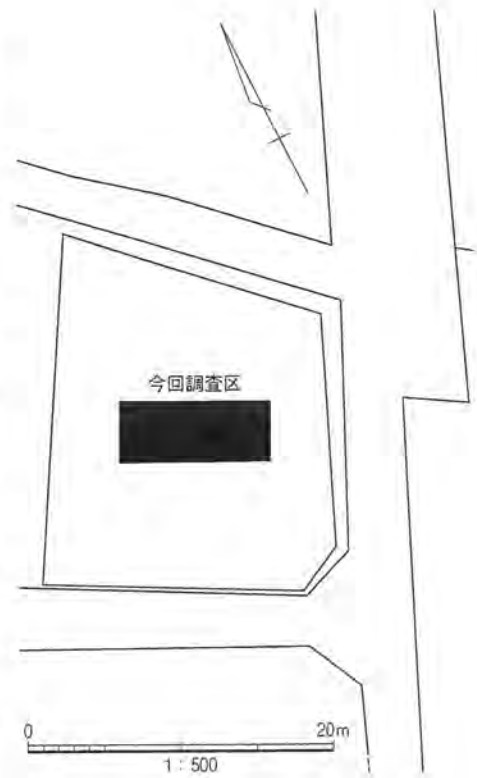


図2 調査区位置図

2) 調査の結果

i) 層序

調査区北壁ぎわに設定したトレンチで、調査開始面から1.4m下までの地層の観察を行った。調査地の層序は以下の第1～3層に区分される(図3・4)。



図3 地層と遺構の関係

第1層：池状遺構SX01の埋土である。下部はシルト偽礫を含む黄褐色シルト質中粒～粗粒砂、中部はシルト偽礫や水成のシルト～細粒砂を挟む黒褐色シルト、上部は大型の粘土偽礫を多く含む埋立て土である。近代の瀬戸美濃焼磁器や煉瓦片のほか、古墳時代の埴輪小片、古代以前の須恵器小片や18世紀代の肥前磁器を含む。

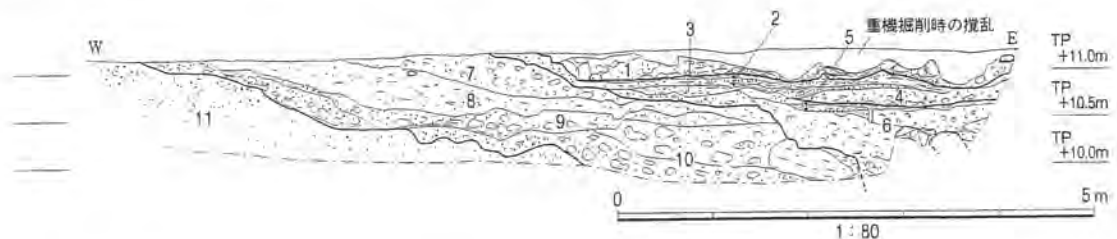
第2層：落込みSX02の埋土で、粘土～シルト偽礫を含むにぶい黄褐色～暗灰黄色の中粒砂～礫からなる。人為的に埋立てられたもので、下半でシルトの薄層が一部認められる。トレンチ東半では層厚1.4mまで確認したが、下限は不明である。18世紀代の肥前磁器のほか関西系陶器・丹波焼の小片を含む。

第3層：当地域の基盤層となる上町層で、黄褐色中粒砂～礫からなる。

ii) 遺構と遺物

調査開始面の標高はTP+11.1m前後あり、調査区北端で基盤層である第3層が露出し、以南でSX01・02を検出した(図5)。

SX01は調査区内のほぼ全域を占める池状の遺構で、調査区北部で掘形の北辺を検出した。調査区外西南側で掘形の続きを確認しており、調査区北辺付近を北端とし、調査区以南に拡がっていたと考えられる。北辺を中心に人頭大の礫が並んで検出され、原位置を保っていると判断できるものも含まれることから、池の護岸施設と考えられる。掘削深度の問題から完掘していないが、北壁断面での地層観察によると、中位に水つきのシルト～細粒砂が薄く堆積しており(図4-2・3・5層)、その上を大型の偽礫を用いて埋めていた(同1層)。池機能時のシルト～細粒砂層からは近代の瀬戸美濃焼磁器が出土し、廃絶に伴う1層からは煉瓦片が出土したことから、近代の遺構であることがわかる。



SX01埋土(第1層)

- 1：黄褐色(10YR5/6)粗粒砂～礫+粘土偽礫
- 2：黒褐色(10YR3/6)シルト～細粒砂
- 3：黄灰色(2.5Y4/1)シルト～粗粒砂
- 4：暗褐色(10YR3/4)中粒砂～礫+シルト偽礫
- 5：黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒～粗粒砂
- 6：黄褐色(2.5Y4/1)シルト質中粒～粗粒砂+シルト偽礫

SX02埋土(第2層)

- 7：暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂～礫+粘土～シルト偽礫
- 8：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒～粗粒砂
- 9：黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂+粘土偽礫、基底にシルト薄層
- 10：にぶい黄褐色(10YR6/4)粗粒砂+粘土偽礫

上町層(第3層)

- 11：黄褐色(10YR5/6)中粒砂～礫

図4 北壁地層断面図

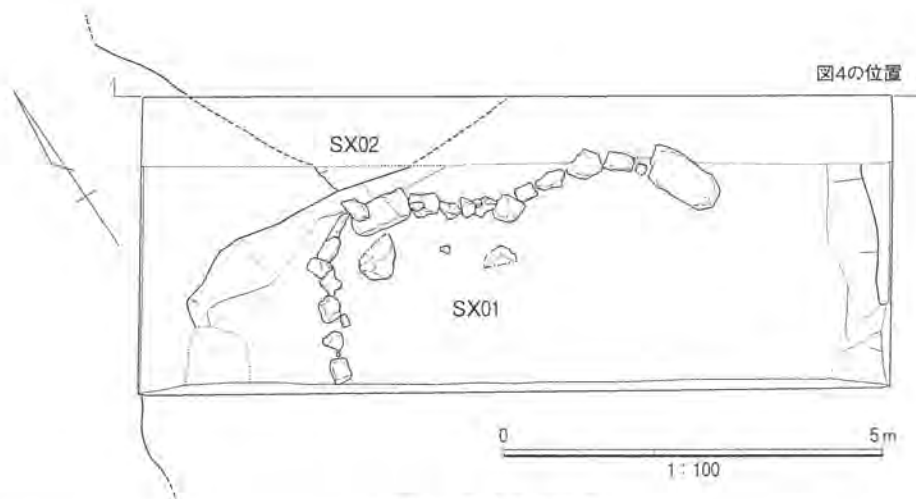


図5 調査区平面図

SX02はSX01に切られる落込みで、調査区内では西から東へ下がる肩の一部を確認した。埋土の特徴(図4-7~10層)から人為的に埋められたことがわかり、下半(同9層基底)にシルトの薄層が見られることから途中に休止面があったようである。調査区北壁沿いに設定したトレンチでは、西から東側に下がっており、東半で深さ1.4mまで確認した。埋土中から18世紀代の肥前磁器が出土している。

調査区外北側でSX02の南北方向の肩の続きを約5m確認しており、調査地中央付近に西から東に下がる大規模な落込みが存在していた可能性が高い。なお調査地西隅の壁面では、基盤層である第3層の上面をTP+12.6mの高さで確認し、その上に古代の遺構埋土もしくは遺物包含層とみられる土師器細片を含む暗褐色細粒砂質シルト層が40cmほど残存していた。このことから、調査地域の旧地形は西から東へ下がる傾斜地であり、SX02は斜面を削って低い東半を埋立てた痕跡の可能性があろう。

3)まとめ

今回の調査では、試掘調査で報告された古代~中世の遺物包含層を確認することができず、調査区内では近代の池状遺構(SX01)と近世の落込み(SX02)を検出した。調査区および調査地西隅壁面の地層観察から、調査地域は本来西から東へ下がる傾斜地であり、SX02は斜面を削って埋立てた痕跡の可能性はある。したがって、現在の街区につながる土地改変が18世紀以降に行われたのであろう。遊離資料ではあるが18世紀代の陶磁器がSX01から多く出土していることも、この時期の周辺の開発を示唆する。また、SX01には古代以前の須恵器や古墳時代の円筒埴輪の小片も含まれており、これまでの調査で推定されたように、この時期の遺構が周辺に存在していたのであろう。

<参考文献>

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002、「住友不動産株式会社による建設工事に伴う北河堀町所在遺跡発掘調査(KC00-1)報告書」：『平成12年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 大阪市文化財協会2008、「株式会社奥村組による建設工事に伴う北河堀町所在遺跡発掘調査(KC07-1)報告書」

調査地遠景
(南から)



調査区全景
(東南から)



北壁地層断面
(西から)



大坂城跡発掘調査(OS08-2)報告書

調査個所 大阪市天王寺区清水谷町19-12
調査面積 45m²
調査期間 平成20年4月21日～4月28日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、池田研、小田木富慈美

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は史跡難波宮跡の南方約200m、難波京朱雀大路推定ラインの西約100mに位置する(図1)。付近では、東南の隣接地でOS98-3次調査が行われており、西南でOS88-97次調査が行われている(図2)。OS98-3次調査では、飛鳥時代前半の遺物に加えて、古墳時代中期末の遺物が多数出土し、付近に当該期の集落の存在が指摘されている。この上位では、古代の畦畔・井戸・土壘・柱穴、室町時代の掘立柱建物1棟が検出されている[大阪市文化財協会2001]。また、OS88-97次調査では飛鳥時代の溝が確認された。周辺ではこのほかにも数多くの調査が実施され、前期難波宮期を中心に遺構・遺物や整地層が確認されている。なお、これら清水谷周辺の調査成果については、報告書が刊行されている[大阪市文化財協会2002]。

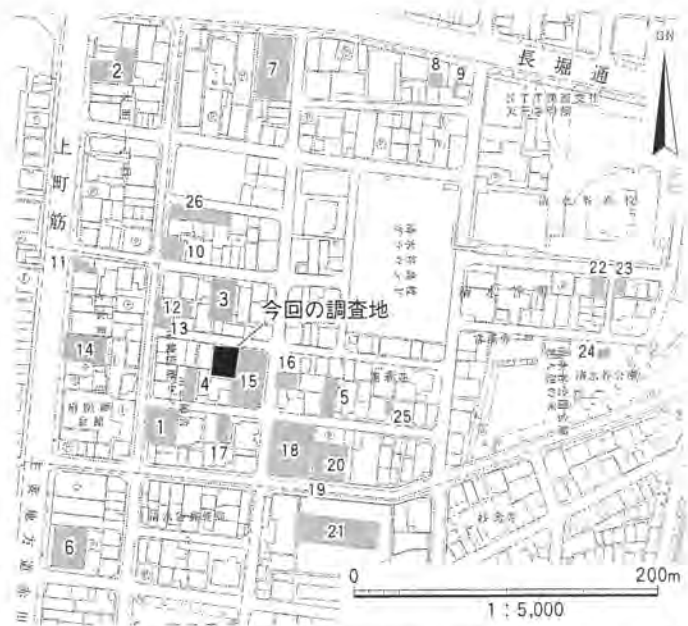
一方、近世においても、調査地から西南へ約150mの地点で行われたOS93-3次調査で豊臣期の惣構堀が確認されたほか、OS98-3次調査で溝・土壘が検出されるなど徳川期を通じて多くの遺構・遺物が検出されている。

本調査に先立ち、大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、古代以前の遺物包含層が確認されたため、発掘調査を行うことになった(図3)。発掘調査を実施するに当り、周辺で確認されたような古代・中世および豊臣~徳川期の遺構の拡がりを確認することが期待された。

調査は2008年4月21日に開始した。現代および近世の盛土層を重機によって



図1 調査地と周辺の遺跡



1 : OS91-3	2 : NW82-33-45	3 : OS87-135	4 : OS88-97
5 : OS92-7	6 : OS93-3	7 : OS96-22	8 : NS90-14
9 : NS95-11	10 : OS95-12	11 : OS00-25	12 : OS97-12
13 : OS95-1	14 : OS99-30	15 : OS98-3	16 : OS88-29
17 : OS96-28	18 : OS99-82	19 : OS87-124	20 : OS95-56
21 : OS99-16	22 : NW87-18	23 : OS98-19	24 : NS00-19
25 : NW06-1	26 : OS07-1		

図2 周辺の調査位置図

除去したところ、その下位に前期難波宮期に埋められた谷を検出し、この上部で溝や土壌が検出された。谷の深さは1 m以上あったため、谷の埋土は重機を用いて掘削し、各層ごとに人力によって精査と遺構検出作業を行った。写真撮影と記録作業はこの間適宜行った。4月26・28日に埋戻しを行い、発掘調査に関する基本的な作業をすべて終了した。本報告で使用した示北記号は図6が磁北、これ以外は国土座標第VI系に基づく座標北を示す。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文および挿図中ではTP+〇mと略記する。

2) 調査の結果

i) 層序

調査では段丘構成層の上面に古代～近世の地層が良好な状態で残存していた。各層の上面では遺構が検出された。以下で各層の特徴について述べる(図4・5)。

現代盛土層：厚さ40～100cmで、数枚の整地単位に分かれる。下部は焼土を多く含み、第二次世界大戦の戦災に伴う可能性がある。

第1層：層厚40～100cmの明黄褐色粘土質粗粒砂～小礫層で、段丘構成層の偽礫からなる盛土層である。最下部に一部レンガ敷が認められることから、近代以降と思われる。出土遺物は近世初頭の陶磁器のみである。

第2層：層厚20～60cmの暗灰黄色シルト質粘土層で、段丘構成層の偽礫を多量に含んでいる。出土遺物は認められなかった。下位の出土遺物の年代から近世以降の盛土層とみられる。

第3層：黄灰色中粒砂質シルト～粗粒砂層で、段丘構成層の偽礫を少量含む盛土層である。層厚は20～30cmである。出土遺物は認められなかったが、上面で検出される遺構の出土遺物から豊臣期～徳川期初頭以前とみられる。本層の上面では溝SD01・土壌SK02・03が検出された。

第4層：層厚20～30cmの灰色粘土質シルト層で、作土層である。西壁断面では本層上面で畦畔が確認された。出土遺物は土師器・須恵器である。

第5層：層厚20～30cmの含礫灰色中粒砂質シルト層で、作土層である。本層からは土師器・須恵



図3 調査区周辺図

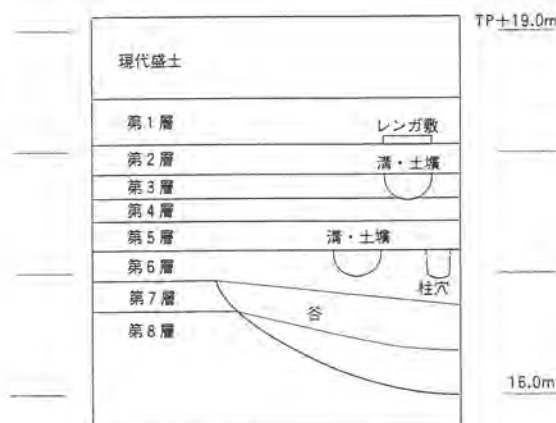


図4 地層と遺構の関係図

器が出土している。

第6層：調査地北東へ向って落ち込む深さ約1mの谷を埋める整地に伴う地層が主体で、間に水成層を挟み、第6a～6c層に大別される。古墳時代中期後半～飛鳥時代の遺物を多量に含んでいる。第6a層は層厚20～30cmの含礫灰色粗粒砂質シルト層で、数枚の単位に分れる人為的な埋戻し層である。最上部は良くしまっており、調査区の一部ではこの上位に水成の灰オリーブ細粒砂層が堆積している。第6a層上面では溝・土坑・ピットを検出した。なお、上面の清掃中に飛鳥Ⅲに属する須恵器杯蓋8が出土しており、本層の下限を示す。また、本層下部では古墳時代中期に属する須恵器甕の体部がコンテナ1箱分出土している。第6b層は層厚20～30cmで、調査区の東半部にのみ堆積する。本層は灰色粘土～灰オリーブ色粘土質中粒砂層からなり、最上部の灰色粘土は水漬きの地層である。第6c層は、段丘構成層の偽礫を含む暗灰黄色粘土質粗粒砂～炭・焼土を含む灰色粘土層である。層厚20～40cmで、しまりの悪い整地層である。以上、第6層は整地層の間に水成層を挟むことから、整地は一連ではなく、一定期間の休止期があったことが指摘される。最終的には第6a層の整地によってほぼ平坦な地形となっている。

第7層：層厚10～20cmの灰オリーブ色粘土質粗粒砂層で、段丘構成層の偽礫を含む。本層からの出土遺物はない。

第8層：明褐色砂礫層で、段丘構成層である。上面の標高はTP+16.9～15.9mで、東へ向って低くなっている。

ii) 遺構(図6)

第8層の上面では、調査区全体が北東へ向って落ち込む谷の谷頭に当たっていた。谷の深さは約1.0m

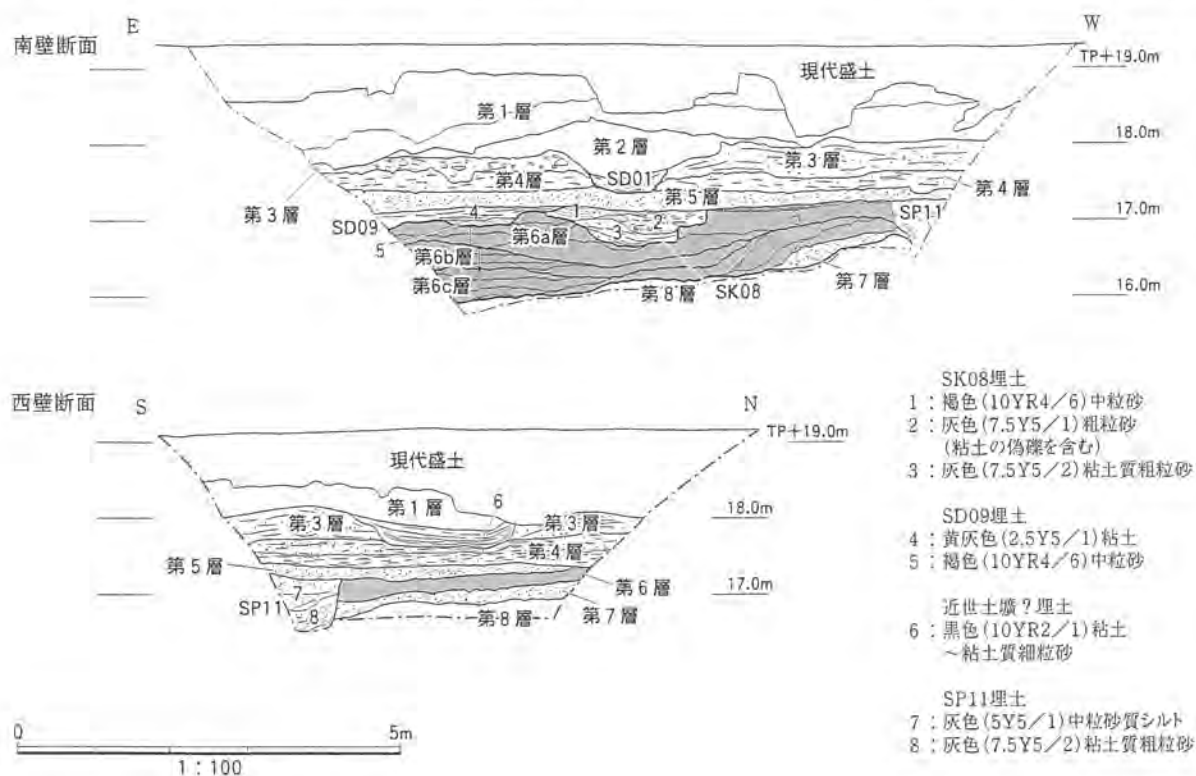
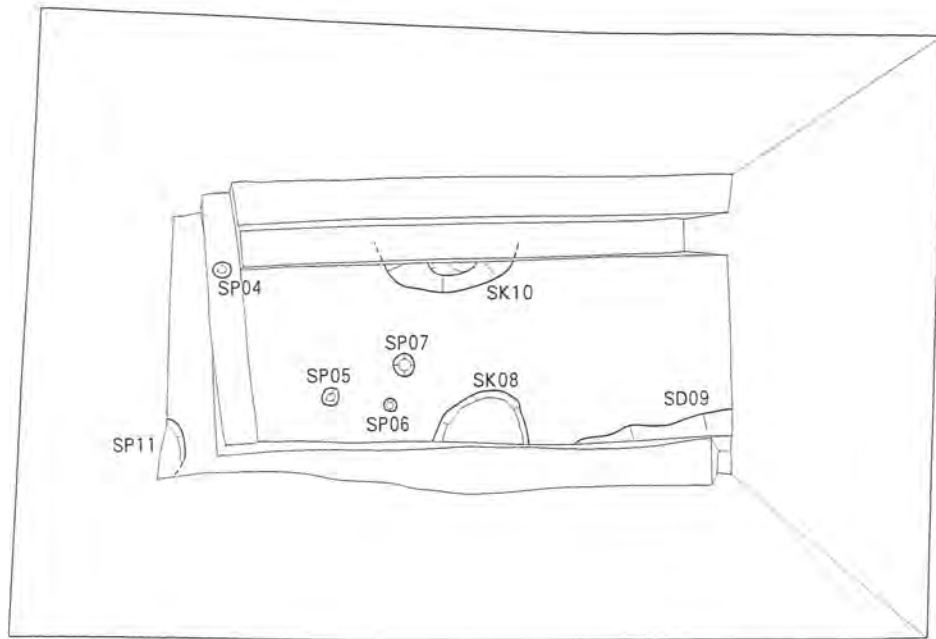
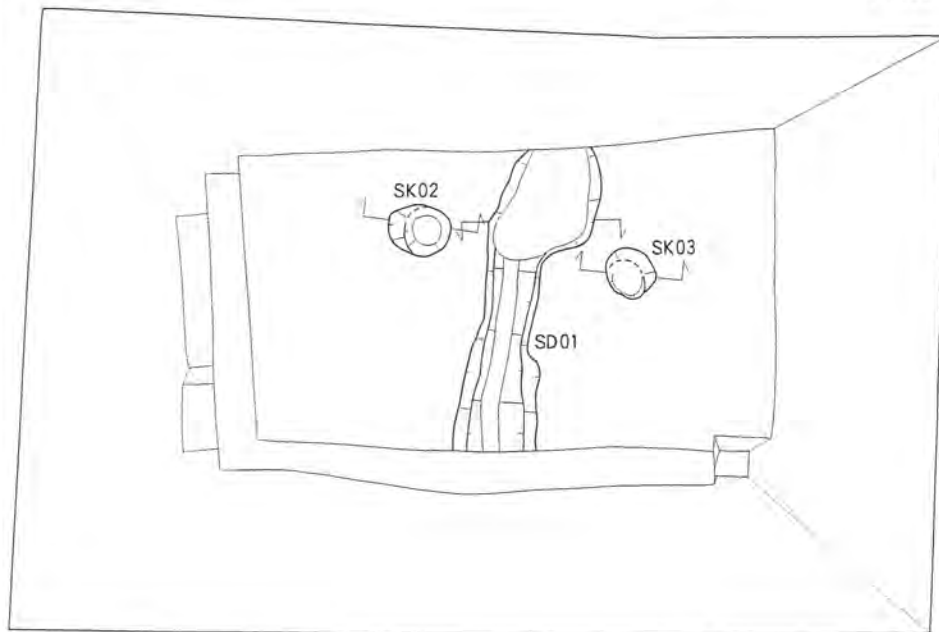


図5 調査区断面図



飛鳥時代の遺構

0 5m
1 : 100



近世の遺構

0 5m
1 : 100



- 1 : 黒褐色粘土(水成)
- 2 : 灰黄褐色中粒~粗粒砂(水成)
- 3 : オリーブ黒色粘土質中粒砂(水成)



- 1 : 黒褐色粘土(細礫を含む)
- 2 : オリーブ黒色粘土質シルト(第5層)



- 1 : 暗灰黄色細礫混り粘土質シルト
- 2 : 黒褐色粘土

0 50cm
1 : 20

図6 遺構平面・断面図

であり、幅は10m以上になると推定される。

第6層上面では溝のほかに、土壇2基とピットを検出した。

SK08は調査区中央から南で検出された土壇で、平面は円形を呈すると思われる。南壁で確認した規模は東西2.2m、深さは0.5mを測る。埋土は粘土の偽礫を含む人為的な埋戻し層である。7世紀前半～中葉に属する土師器・須恵器が出土している。SK10は調査区中央北側で確認した土壇状の遺構で、東西1.8m以上、深さ0.6mである。土師器・須恵器が出土した。SD09は調査区東南から南壁断面で確認した東西方向の溝で、幅0.8m以上、深さ0.3mを測る。埋土は上層が灰色粘土、下層が褐色

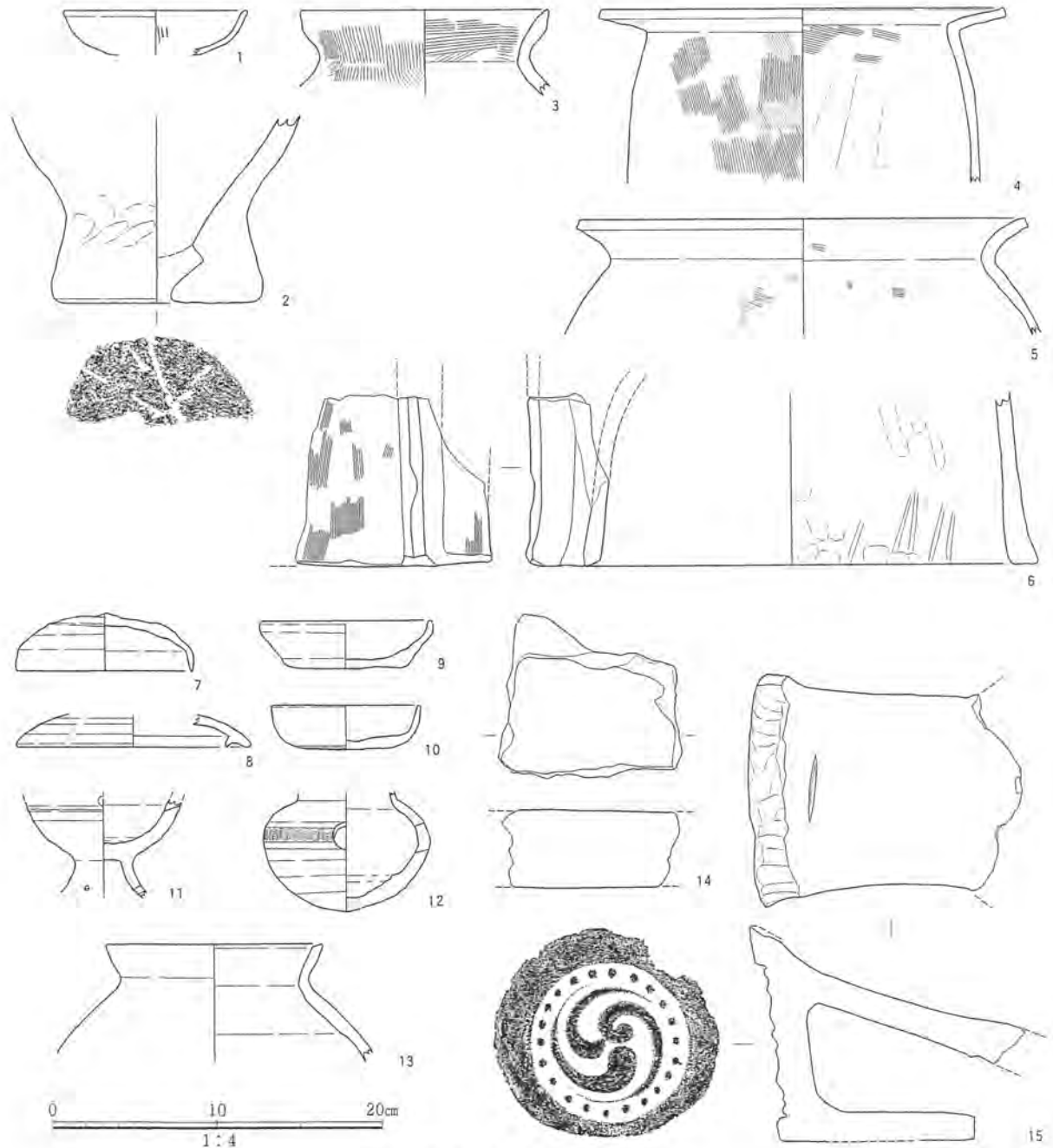


図7 出土遺物実測図

SD01(15)、第6a層上面(8)、第6a層(1・2・4～6・10・11・14)、第6c層(3・7・9・12)、第6層(13)

砂礫層で、ともに水成層である。出土遺物はなかった。SP04～07は直径0.2～0.3m、深さ0.1mの小穴で、柱痕跡は認められなかった。SP11は調査区西南隅で確認された。掘形の平面形は一辺が0.8m以上の隅丸方形で、検出面からの深さは0.7mである。掘立柱建物の柱穴とみられるが柱痕跡は明らかにしえなかった。また、これに組合う柱穴は調査区内では確認されず、建物は西側に展開するものと推測される。

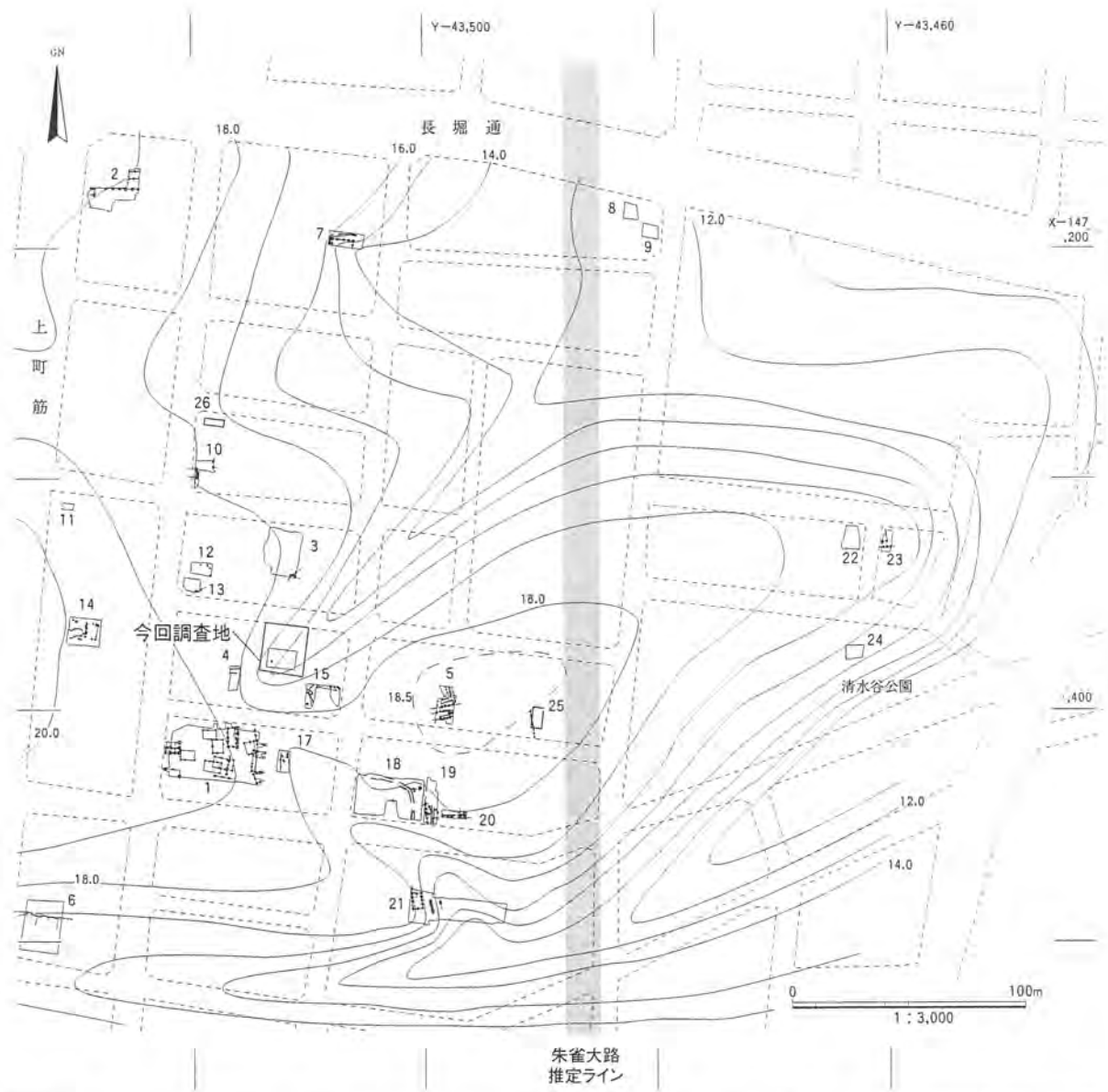
第3層上面では、土壙2基と溝を検出した。SD01は南北方向の溝で、調査区の北端で土壙状に広がっている。幅は0.6～1.2m、深さは0.3m以上を測る。埋土は黒褐色粘土～灰黄褐色粗粒砂層で、瀬戸美濃陶器天目碗片および軒丸瓦の鳥衾のほか、古代の土師器・須恵器が出土した。SD01の西と東では浅い土壙SK02・03をそれぞれ検出した。ともに直径約0.7mの平面が円形の土壙である。SK02は深さ0.1mで、出土遺物はなかった。SK03は深さ0.2mで、木片が出土したのみであった。このほかに、調査区西壁断面では土壙と思われる落込みを確認した。

iii) 出土遺物(図7)

15はSD01より出土した軒丸瓦で、鳥衾に当る。瓦当文様は右卷三巴文である。上縁部は欠けている。1～14は第6層より出土した。第6層は3枚に細分され、古墳～飛鳥時代の遺物が出土しているが、上部と下部の出土遺物に時期差は認められなかったためここでは一括して記載する。なお、第6a層上面精査中に出土した須恵器杯G蓋8および杯G身10が第6層出土遺物のなかで最も新しい様相を示す。1～6は土師器である。1は杯Aである。口縁端部は外方につまんでおり、内面には放射状暗文を施す。2は台付鉢である。内外面の調整は磨滅のため不明瞭である。底部外面には木の葉の圧痕がある。3～5は甕である。3は内外面を粗いハケで調整する。4は長胴の甕で、体部外面にはハケ調整を施し、内面下方は縦方向にナデている。5は把手が付く可能性がある。6は移動式竈の基底部分である。内面をナデ調整、外面はハケで調整している。これらの土師器は2・3が6世紀後半～7世紀前半に遡る可能性があるが、このほかはおおむね7世紀中葉に属するものであろう。7～13は須恵器で、7・8は杯蓋である。7は杯H蓋で、天井部はヘラ切り後不調整である。8は大型の杯G蓋と思われる。かえりは短めであるが著しく退化はしていない。色調は灰白色を呈する。9・10は杯G身である。11は台付の甕で、脚部の3箇所には円形のスカシ孔を有する。12は甕である。13は短頸壺である。これらの須恵器は12が古墳時代中期末、11が古墳時代後期、7・9・13は7世紀前～中葉、8・10は7世紀中葉のものであろう。14は埴である。厚さは約5.6cmを測る。

iv) 清水谷周辺の地形と遺構の分布(図8)

今回の調査では、北東方向へ延びる古代以前の谷が検出された。ここで、調査で得られたデータを清水谷周辺の地形復元図に加筆してみると、この谷は難波宮の西南で数多く検出されている幅の狭い谷の一つであることが分かった。図8によると、調査地の南では南西のOS91-3次調査地から北東のOS92-7次調査地へ向って、台地が北東方向へ舌状に張出しており、標高が高く、比較的平坦な部分に建物が分布することが指摘しえる。調査地付近にあった小規模な谷は、前期難波宮の造営とその南面整備をするさいに埋められて整地がなされるものの、建物を建てるには不適であったことが推測される。



1 : OS91-3	2 : NW82-33・45	3 : OS87-135	4 : OS88-97	5 : OS92-7	6 : OS93-3	7 : OS96-22
8 : OS90-14	9 : NS95-11	10 : OS95-12	11 : OS00-25	12 : OS97-12	13 : OS95-1	14 : OS99-30
15 : OS98-3	17 : OS96-28	18 : OS99-82	19 : OS87-124	20 : OS95-56	21 : OS99-16	22 : NW87-18
23 : OS98-19	24 : NS00-19	25 : NW06-1	26 : OS07-1			

図8 清水谷周辺の地形復元図([大阪市文化財協会2002]に一部加筆)

中世では南東のOS88-97次調査地で建物が確認されているが、今回の調査では当該期の遺構・遺物はほとんど検出されなかった。このため、遺構はOS88-97次調査地を中心に北東へ向って谷沿いに広がるか、ごく限られた範囲に集中していたと推測されよう。

3)まとめ

今回の調査は、南東の敷地で検出されたものと同様に古代～中世の遺構・遺物の検出を主目的としたものであった。調査では、調査地付近を谷頭とし北東へ向って延びる幅の狭い谷が新たに確認され、これを埋めて平坦地としていることが推測された。整地の時期については、第6層の出土遺物より7

世紀中葉すなわち前期難波宮期と思われる。その上面では溝や土塙・柱穴が検出され、調査区西側の高所にかけて建物が立地していた可能性が指摘された。なお、第6層上面からは、7世紀中葉でも新しい時期に降る遺物が出土しており、建物などの遺構が難波宮中枢部の造営に若干遅れて存在した可能性を指摘する資料の一つとなった。また、近世以降において当地は大坂城惣構内に位置するが、建物などの遺構は検出されなかった。

参考文献

- 大阪市文化財協会2001、「OS98-3次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1998年度-』、pp.61-68
大阪市文化財協会2002、「清水谷地区の調査」：『大坂城跡』VI、pp.219-233
古代の土器研究会1992、『都城の土器集成』I

古代の谷完掘状況
(西から)



南・東壁地層断面
(北西から)



SP11断面
(西から)



細工谷遺跡発掘調査(SD08-1)報告書

調査個所 大阪市天王寺区筆ヶ崎町15-3の一部
調査面積 75m²
調査期間 平成20年4月8日～平成20年4月16日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、小倉徹也、絹川一徳

1) 調査に至る経緯と経過

細工谷遺跡は大阪市天王寺区に所在する飛鳥～平安時代の複合遺跡で、西側は難波京朱雀大路跡に接している(図1)。一帯は上町台地の東縁部にあたり、沖積平野である河内平野に向かって東へなだらかに下降する地形となっている。もともと遺跡周辺は東側に開口する開析谷が発達していたが、現在では市街地化が進んで大半が埋積しており、所々で谷地形の痕跡をわずかに留めるのみである。

細工谷遺跡が発見されたのは1996年で最近のことである。難波片江線の道路整備工事に伴って行われた試掘調査による。試掘調査では奈良～平安時代の遺物包含層が確認され、大阪市教育委員会によって細工谷遺跡と命名された。この試掘調査結果をもとに1996～97年にわたって本調査(SD96-1・97-1次調査)が実施され、国内で初めて和同開珎の枝銭が出土し、あわせて「百済尼寺」の存在を示す墨書土器・木簡・富本銭なども出土したことから、全国的に細工谷遺跡の存在が広く知られるところとなった。

今回の調査地は細工谷遺跡の東端で上町台地東縁の斜面地にあたり、標高は約8m前後である(図4)。これまで周辺で行われた調査にはSD96-

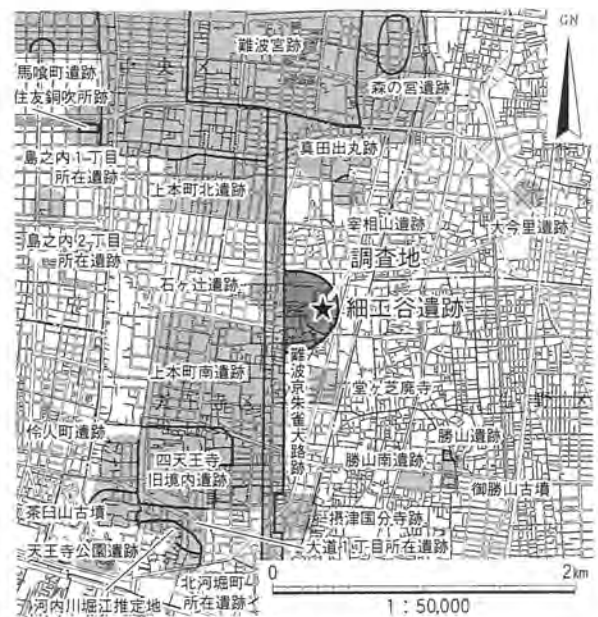


図1 細工谷遺跡位置図



図2 調査地位置図

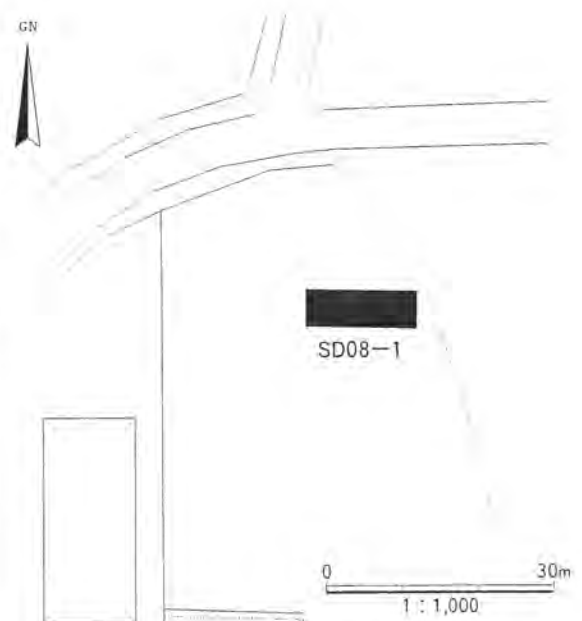


図3 調査区位置図



図4 上町台地東縁の谷〔大阪市文化財協会2007b〕に加筆

1・97-1・01-3・01-4・05-1・06-1・06-2・06-3次調査などがある(図2)。前述したSD96-1・97-1次調査地は台地を挟んで300mほど離れた場所にあり、台地縁部で細工谷の谷頭にあたるため、標高は11~15mと高くなっている。SD96-1・97-1次調査では、飛鳥から平安時代の建物・井戸・溝などが見つかり、「百済尼寺」との関係を示す文字資料などが出土したことから、調査地周辺に「百済尼寺」が存在した可能性が高いとされる。ここから東へ150mの地点に位置するSD05-1・06-1次調査地では、標高8mで細工谷の支谷にあたる場所であり、弥生~奈良時代の遺物が多く出土した。また、7世紀後半~8世紀に整地を重ねながら掘立柱建物群が建てられた状況が確認されており、一帯が飛鳥から奈良時代に大きく開発されたことが明らかとなっている〔大阪市文化財協会2007a〕。

今回の調査地はこうした遺跡の中心地にある細工谷とは異なり、台地を挟んだ北側の谷筋(五合谷という〔大阪市文化財協会2007b〕)の南斜面に位置する。細工谷と五合谷に挟まれた台地上は2001年に調査(SD01-3・01-4次調査地)されているが、地山が大きく削平されていたため、平安時代後期の溝が検出されたのみである。また、今回の調査地から西へ150m離れたSD06-2・06-3次調査では、五合谷とその支谷が発見されている。谷本体には古墳時代後期から奈良時代にかけて設営された導水路が認められ、多数の遺物が出土した。また、支谷は古墳時代から古代にかけて埋め立てられており、居住地や祭祀の場として利用されたことが明らかとなっている。

以上のように本調査地の周辺は古墳時代から古代にかけて開発が進められた歴史上重要な地域であり、既知の埋蔵文化財包蔵地内であったため、大阪市教育委員会によって試掘調査が実施された。その結果、地表下約3.4mで古代から中世の遺物包含層が確認され、本調査地にも当該期の遺構・遺物が良好に残されていることが十分に予想された。そこで、古代を中心とした遺構・遺物の有無、さらに古代から中世における土地利用の変化を解明するための基礎資料を得る目的で本調査を実施するこ

ととなった。

調査は2008年4月8日に着手した。調査地の北東側に東西15m×南北5m(75m²)の調査区を設定した後、重機で現代盛土を除去した(図3)。その後は人力によって地層ごとに平面精査と掘削を行い、遺構と遺物の検出に努めた。地層断面ならびに検出遺構は写真撮影・実測等の必要な作業を適宜行い、4月16日にすべての現場作業を終了した。

なお、本報告で使用した示北記号は図7～9が磁北、これ以外は座標北を示している。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文および挿図中ではTP+○mと略記する。

2) 調査の結果

i) 層序(図5・6)

調査地は事前工事の関係で発掘時には現代盛土部分が深く削られて平地となっていた。もともと斜面地であったが、大阪赤十字病院建設時に大規模な造成を受けていたため、盛土も相当厚く、最大で3m程度あったとみられる。なお、発掘開始時点の地表面は標高5.8mであった。

現代盛土以下の地層の堆積状況は以下のとおりである。

1層：灰色細礫を含む細粒～中粒砂質シルト層で作土層である。層厚は約20cmで、下位層との層界も明瞭であった。耕作により下位層を削平しており、西半ではほぼ水平に堆積していた。なお、斜面下方にあたる東半では、本調査に先だて行われた整地工事の重機等による荷重痕の凹凸が著しく、本来の堆積状況を観察することができなかった。本層からは土師器・須恵器のほか、瓦器・瓦質土器(羽釜片か?)・瓦等が出土したが、近世陶磁器等は認められなかった。おそらく近世以降の地層は造成時に削平を受けたものと思われる。遺物からみて、本層は室町時代頃の地層と考えられる。

2a層：灰オリーブ色の細礫を含む細粒砂質シルト層で作土層である。層厚は10～20cmであった。上位層による削平を受けており、西側で部分的に確認することができた。礫や砂が下方になるほど多くなり、大きく上・下層に細分できたが、層界は漸移的であった。

2b層：暗灰黄色細粒～中粒砂質シルト層で作土層である。層厚は約20cmで、下位層との層界はやや不明瞭であった。東半部は1層と同様に整地工事によって形成された荷重痕の変形を受けていた。瓦器細片を含んでいることから鎌倉時代頃の地層とみられる。

2c層：灰色細礫を含むシルト質細粒～中粒砂層である。層厚は10～20cmであった。水成層であり、段丘構成層に由来する粘土の小さな偽礫を含み、砂粒のラミナが断続的に認められる。上方に向かい砂の細粒化が進んでおり、最下部はシルト質中粒砂層であった。3層に細分できたが層界は漸移的である。本層も瓦器細片を含んでおり、鎌倉時代頃の地層であ

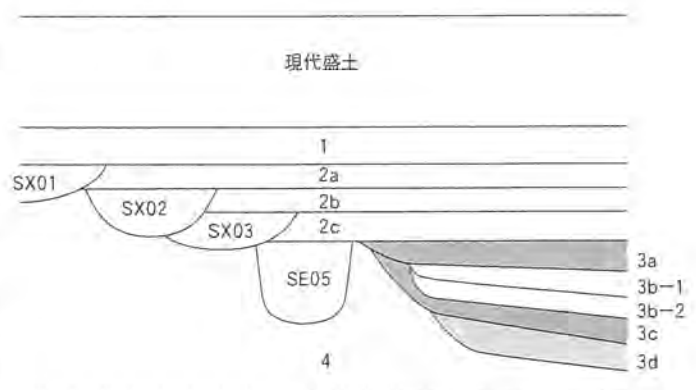


図5 地層模式断面図

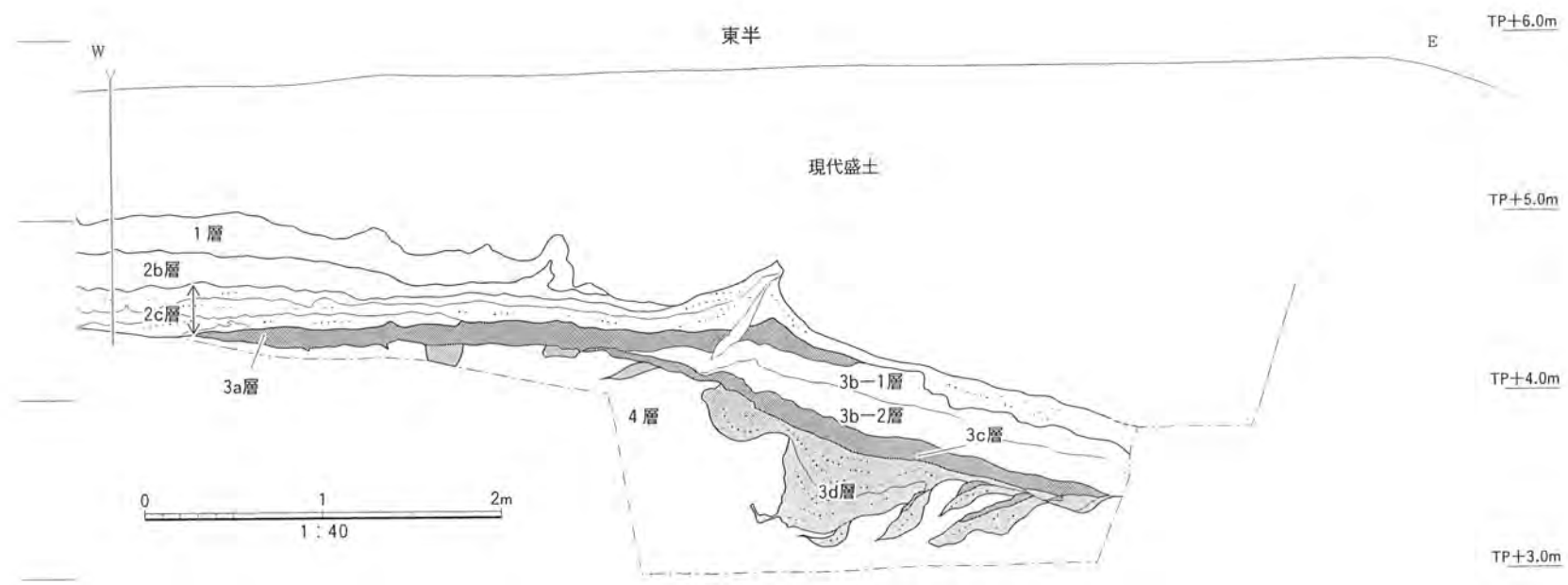
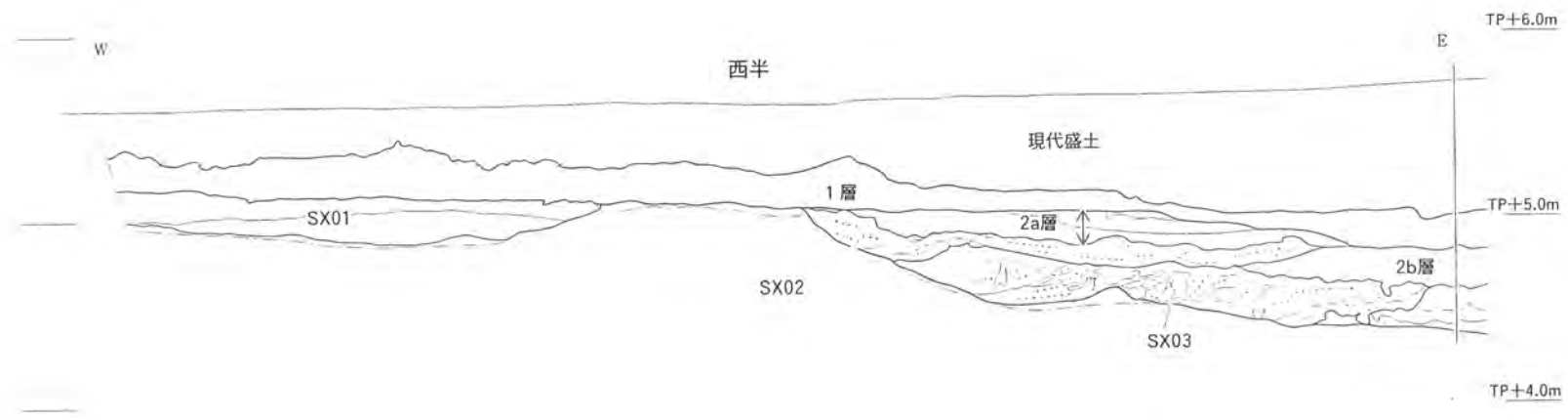


図6 北壁断面

ろう。

3a層：オリーブ黒色シルト質細粒砂層で、暗色化した水成層である。層厚は10～15cmで、東半を中心に堆積する。出土遺物はほとんど認められなかった。周辺の調査成果から判断すると、本層は奈良時代から平安時代初頭にかけて堆積した地層である。

3b-1層：灰オリーブ色シルト質細粒～中粒砂層で、斜面部にのみ堆積していた。層厚は10～15cmであった。段丘構成層に由来する粘土の小偽礫を含む。淘汰不良でラミナ等は認められない。上・下層との層界も明瞭であることから、人為的な整地層である。

3b-2層：灰色細粒砂質シルト層で、斜面部のみに堆積していた。層厚は約20cmであった。段丘構成層に由来する粘土の偽礫を多く含む。本層も人為的な整地層である。

3c層：オリーブ黒色極細粒砂質シルト層で、層厚は10cm程度であった。斜面部にのみ堆積しており、湿潤な状態で形成された堆積層である。ヒノキを主とする薄い板材の細片や檜皮片が多く含まれていたが、土器類は土師器細片がわずかに出土したにすぎない。3b層を挟むが、3a層とほぼ同時期で、連続した堆積層とみられる。

3d層：オリーブ黒色細粒～中粒砂層で、斜面部のみに堆積していた。地震による断層や褶曲が顕著に認められた。下位層との層界はやや不明瞭であった。本層の時期は周辺調査地の成果を踏まえると、奈良時代頃の地層とみられる。

4層：緑灰色粘土質中粒砂層で段丘構成層である。層厚は1m以上であった。

ii) 遺構(図7・9)

調査区の西半の2a～2c層上面で溝状の落ち込みSX01～04を検出した。いずれも上位層や遺構の切り合いによる削平を受けている。南北方向に延びているが、遺構の位置が斜面と平坦面の境界付近にあるため、溝ではなく段差の可能性もある。いずれも遺物は土師器・須恵器の細片がわずかに出土したのみである。地層からの対比によると鎌倉時代～室町時代の遺構とみられる。

SX01(図7)は2a層上面の遺構で、調査区の西端で認められた。幅2.5m以上、深さ0.3mである。埋土は上下2層に分かれ、上層は細礫を含む灰色シルト質細粒～中粒砂層、下層は灰色シルト質細粒～中粒砂層である(図6)。

SX02(図7)は2b層上面の遺構で、調査区中央で認められた。幅2.4m、深さ0.2mである。埋土は細礫を含む黄灰色シルト質細粒砂層で、下部には地山の粘土が偽礫となって混入している(図6)。

SX03・04(図7)は2c層上面の遺構で、調査区の中央で認められた。SX03は幅2.4m、深さ0.3mである。埋土はオリーブ灰色シルト質極細粒～細粒砂の水成層で、砂粒のラミナが認められる。地山の粘土が偽礫となって混入している(図6)。SX04はSX03によって削平されており、詳細は不明である。

調査区の中央の3a層上面で井戸SE05を検出した(図7・9)。径1.45mの隅丸方形に掘られた土壇の下底に曲物とそれを囲むように4つの板材により方形の井戸枠が組まれていた。この井戸枠は底面に敷かれた土居桁で、外側で1辺0.85m、内側で0.40mと0.45mであった。内側に設置された曲物の直径もほぼ40cmで井戸枠の内辺と一致する。井戸の構造は、掘形の底に基礎構造物となる土居桁を設

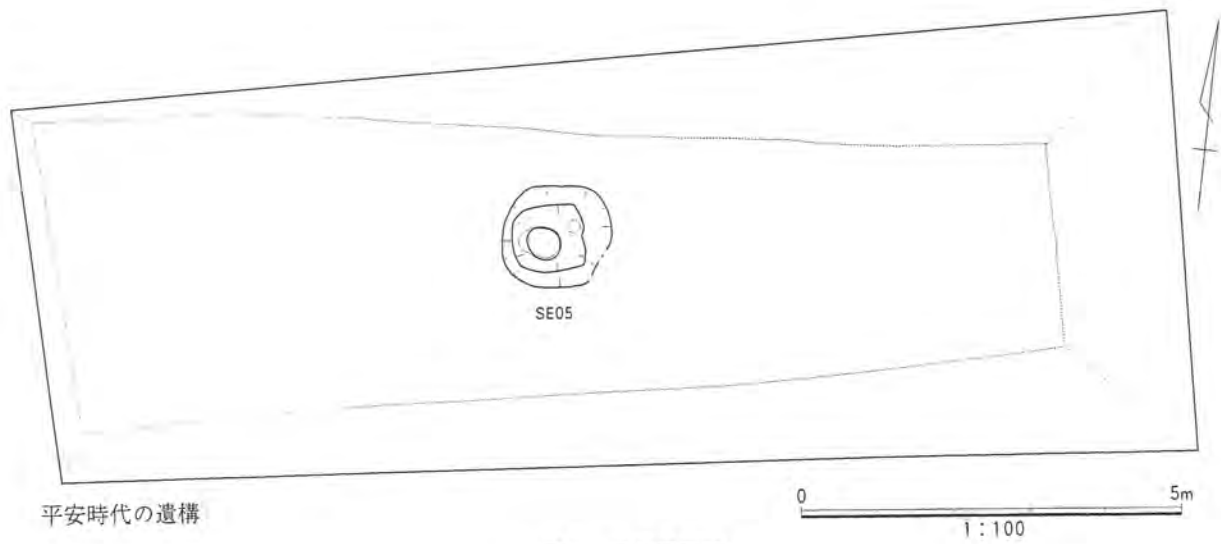
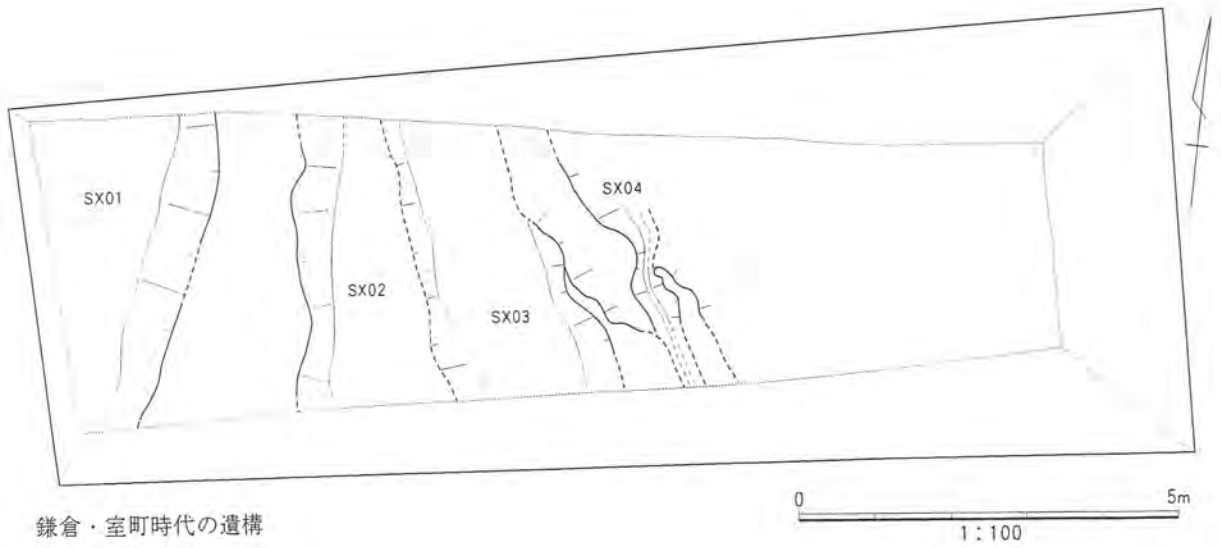


図7 遺構平面図

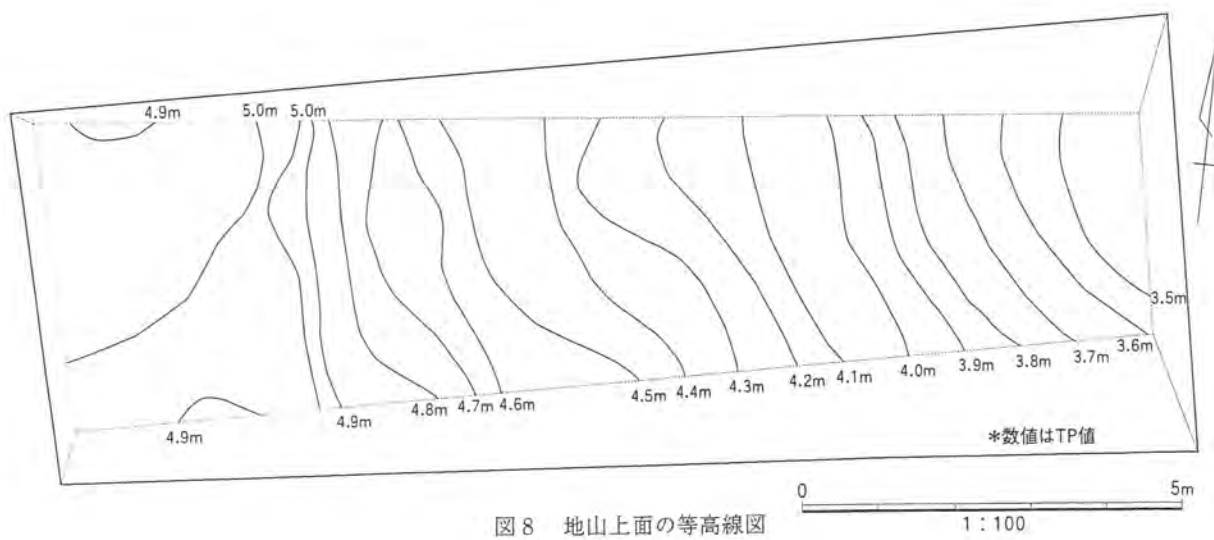


図8 地山上面の等高線図

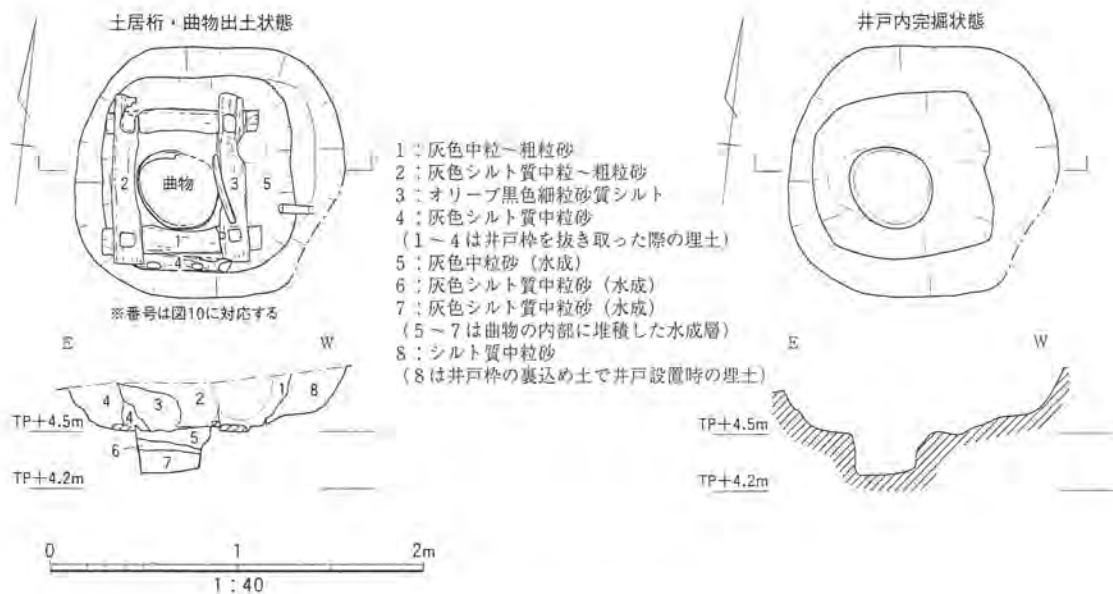


図9 SE05平面・断面図

置して四隅に隅柱を立て横板を積み上げたもので、横板組隅柱型と呼ばれるものである[鐘方正樹2003]。中央には集水装置として曲物が埋められていたが、土居桁である板材の内側が曲物に合わせて内湾するように加工されていることから、本来は複数段の曲物が積まれていた可能性がある。

SE05は設置後そのまま廃絶されたのではなく、廃絶時に井戸枠や隅柱が取り外されたものとみられる。埋土を観察すると、一部に設置時の裏込め土が認められるものの、大部分は井戸枠を抜き取った後の埋土であった。また、上部はSX03・04により大きく削平を受けていた。

SE05は2c層の基底面で検出したが、下位層である3a層との関係を明確につかむことができなかった。しかし、廃棄時の埋土の一部が3a層の岩相と類似するオリーブ黒色細粒砂質シルト層であることから、井戸の廃棄は3a層が形成されて以降であったことがわかる。さらに、井戸を設置するということは、水源まで一定の深度が必要であったと推定される。3a層のような有機物による湿潤な地層の形成が地表に近い環境下で行われたことを考慮すると、井戸の設置は暗色帯の上位に相当な地層の堆積を経た後であり、地下水源が必要となったからだと思われる。2c層に瓦器片が含まれることから、SE05の形成時期は平安時代後半頃と考えておきたい。

iii) 出土遺物

出土遺物のうち土器類は大半が1層から出土した。土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・瓦などであるが、大半は細片であった。8世紀後半の須恵器杯B、杯B蓋、12世紀後半～13世紀初頭の和泉型瓦器椀、15世紀頃の瓦質土器甕などが含まれていた。

SE05からは井戸枠基底の土居桁として利用された板材や角材が出土した(図10:1～5)。いずれもヒノキである。1～3は土居桁を構成する板材で、4枚の板材を相欠き組により方形に組み合わせたものである。3は水磨や欠損が著しいが、もとは1のような形状であったとみられる。1・2は長さ85cm、

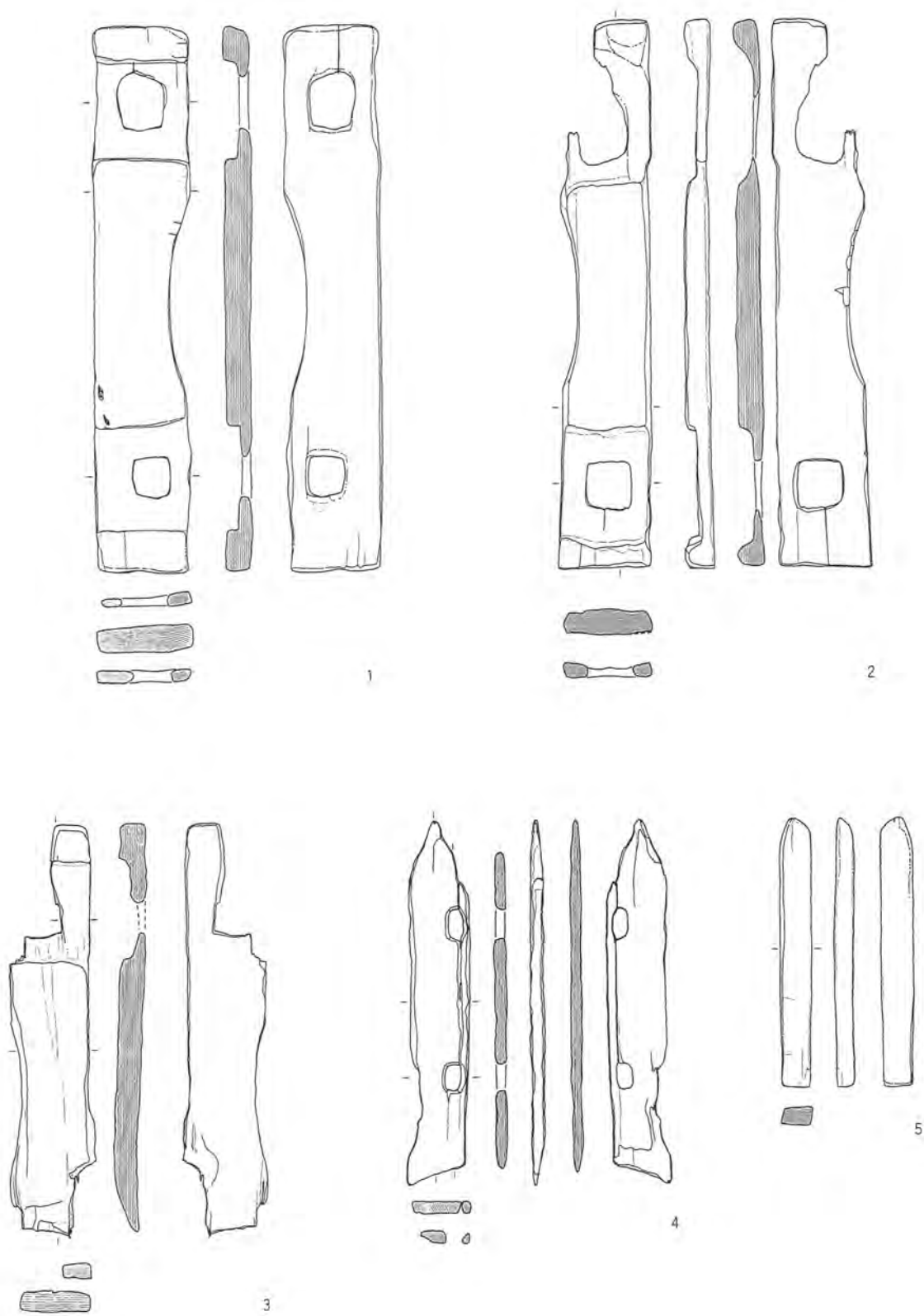


図10 出土木製品実測図(土居柩組部材ほか)

幅15cm、厚さ4cmである。相欠き部分に1辺5cmないし6cmの方形のほぞ穴を両端に設けている。4は井戸枠の一部に用いられた板材であろう。大きく欠損するため全体の形状は不明であるが、現存値で長さ58cm、幅9.5cm、厚さ2.5cmである。5は棒状木製品で、側板等を固定するために用いられたものであろう。現存値で長さ43cm、幅5cm、厚さ3cmである。

その他の出土遺物として井戸枠内部に設置された曲物がある。この曲物については非常に脆弱で遺物取り上げ時に破損してしまうおそれがあったため、硬質ウレタン樹脂で固定させた後に取り上げた(写真)。直径41cm、高さ15cmである。接合部は欠損していた。

iv) 細工谷遺跡周辺の埋没谷の復元

細工谷遺跡周辺の埋没谷の復元と谷地形の変遷については高橋工氏らの研究がある[大阪市文化財協会2007b]。それによると本調査地が位置する五合谷は、古墳時代中期以降に人為が加わるようになった。その後も五合谷は埋め立てられることはなかったものの、奈良時代には周辺で大規模な開発が行われたことがこれまでの発掘調査で明らかになっている。

一方、8世紀末以降には、近世に至るまで五合谷はおもに耕作地として利用され続けたようである。今回の調査でもこうした所見を裏づける成果を得ることができた。

3) まとめ

本調査地は東側に開口する五合谷の南斜面に位置する。ここはちょうど傾斜の変換点にあたる場所で、東方に向かって傾斜が急となっている(図8)。こうした地形が変化するのは平安時代以降とみられる。それ以降は傾斜面が緩やかになり、この付近も段差を設けながら平地化され畠地などに利用されたものと思われる。また、調査区の中央で平安時代後期に設置されたと推定される井戸を検出することができた。このような井戸の存在も平安時代以降に斜面部の土地利用が進められたことを示している。

本調査地のように谷部下方では、台地側とは異なり、今回発見された井戸のように有機物を含む平安時代以前の遺構が良好に残されている可能性が高い。今後とも周辺地における綿密な調査を継続していくことが重要であろう。



写真 曲物の取り上げ作業

参考文献

- 大阪市文化財協会2007a、『平成17年・18年度都市計画道路難波片江線の整備に伴う細工谷遺跡発掘調査(SD05-1・06-1)完了報告書』
- 大阪市文化財協会2007b、『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 鐘方正樹2003、『ものが語る歴史8 井戸の考古学』同成社

調査区完掘状況
(西から)



SX02・03完掘状況
(南東から)



SE05木製土居桁
出土状況
(南から)



細工谷遺跡発掘調査(SD08-2)報告書

調査個所 大阪市天王寺区東上町18
調査面積 80m²
調査期間 平成20年5月12日～5月23日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、小倉徹也

1) 調査に至る経緯と経過

細工谷遺跡は大阪市天王寺区のほぼ中央にある。上町台地東斜面に位置し、細工谷の地名の由来となる開析谷がほぼ東から西に向って深く入り込んだ地形を呈している。本調査地は谷の末端部付近に当り、また難波宮から南下する朱雀大路跡の東側、[積山洋2004]で想定される難波京域の東端部付近にも当る(図1)。調査地の約400m西側、SD96-1次および97-1次調査において、和同開珎の「枝銭」や富本銭などが見つかったほか、「百済尼」・「尼寺」の文字が記された墨書土器が出土した。これまで文献に記されていなかった「百済尼寺」という新たな古代寺院の存在が明らかになり、難波地域のみならず日本古代史を考える上でも重要な発見となった。

建設工事に伴って試掘調査を実施したところ、近世の作土層以深に、中世から古代にかけての地層が攪乱を受けずに良好な状態で残されていた。この試掘結果とこれまでの周辺地域の調査成果から、工事に先立って発掘調査を実施することになった。敷地内の北寄りに調査区を設定し(図2)、2008年5月12日から本調査を行った。

調査は、まず重機によって現代盛土から中世の作土層までを除去し、この後、以下を人力によって掘下げた。遺構や遺物の検出に努めるとともに、平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を



図1 調査地の位置 (『難波京復元図』[積山洋2004]の部分を用いて作図)

行い、5月23日に埋戻し作業を含めた現地におけるすべての作業を完了した。

以下、本報告に掲載した図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP+○mと表記した。示北記号は図1が座標北、それ以外は磁北である。

2) 調査の結果

i) 層序と各層出土の遺物(表1、図3～5)

調査地の現地表面は標高TP+3.5～3.6mで、ほぼ平坦であった。現地表面下約3.7m(TP-0.2m)までの地層を観察し、その結果に基づいて本調査地の層序を組み立てた。以下に層序の概略を記し、各層の岩相や特徴、SD03-1(2区)調査地の層序との対比を表1に、地層と遺構の模式図を図3、地層断面を図4、出土遺物実測図を図5に示す。なお、地層の構成物質の記載については、構成物質の主体を占める碎屑物粒子と、その運搬・堆積(沈着)条件を決定する営力の大きさととの運動関係がもっともよく反映されている碎屑物の粒径区分(ウェントワース・レイン式)によって行った。地層の色については、『新版標準土色帖』[小山正忠・竹原秀雄1996]を用いて行った。

観察した地層はすべて沖積層(難波累層)に相当し、人為によって形成された第5層以上と、主として自然の営力による第6層以下に大きく区分できる。

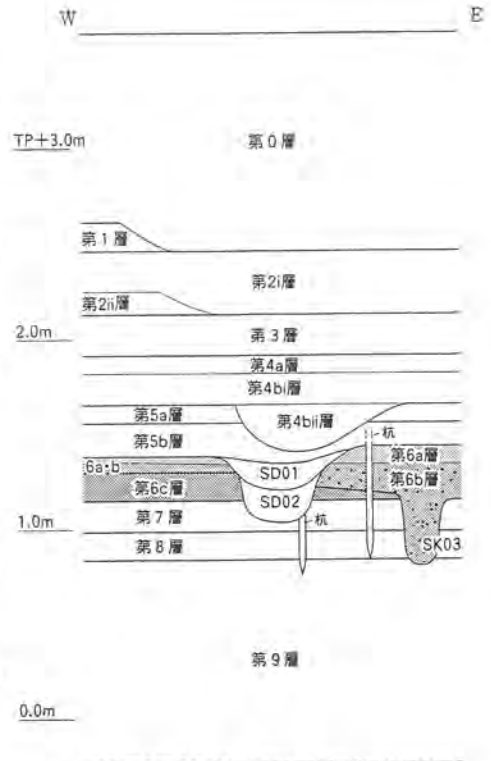


図3 地層と遺構の模式図

表1 調査地の層序

SD03-1層序	岩相	土色	層厚(cm)	自然現象 ほか	遺構	おもな遺物	時代	SD03-1 (2区) との対比
第0層	現代盛土および擾乱	-	105-130				現代 近代	0
第1層	現代作土(黒灰色シルト混り中粒～粗粒砂:西側にのみ分布)	-	15±					1
第2層	i 灰・黄灰色シルト質中粒～粗粒砂 <作土>	5Y 5/1 2.5Y 5/1	20-40				近世	2
	ii 黄灰色細粒質粗粒～中粒砂(西側にのみ分布) <泥濘堆積層>	2.5Y 5/1						
第3層	含粗粒砂～細粒 灰色 中粒～粗粒砂質シルト <作土>	7.5Y 5/1 5Y 5/1	5-20				中世	3
第4層	a 細灰青・灰色 極細粒砂質シルト 東側ではシルト質中粒～粗粒砂 <作土>	2.5Y 5/2 5Y 5/1	5-20					4a-b
	b i 含細粒～中粒砂 灰・にぶい黄褐色 極細粒砂混りシルト～極細粒砂質シルト <作土>	7.5Y 5/1 10YR 4/2	10-35					4c
	ii 褐色シルト質中粒～粗粒砂(東側にのみ分布) <泥濘堆積層>	10YR 4/5	20±		削り込み(北壁断面で観察)			4d
第5層	a 含粗粒～極粗粒砂 粗灰色 粗粒～中粒砂質シルト <作土>	10YR 4/1	5-20				5a	
	b 上部:含粗粒～中粒砂 黄灰・オリーブ灰色 極細粒～粗粒砂質シルト～粘土質シルト 下部:含細粒～細粒 オリーブ灰・黄灰色 極細粒砂質シルト～粘土質シルト <作土>	2.5GY 5/1 2.5Y 4/1	15-25	一断面 一貯蔵		瓦葺	5b	
第6層	a (西側)黒褐色 粘土質シルト～粗粒砂質シルト<泥濘堆積層> (東側)黒褐色シルト質中粒～粗粒砂 <泥濘堆積層>	2.5Y 2/1 10YR 3/1	10-20			土師器・須器器 (SD01から和同開珎の1リ森)	古代	6a
	b (西側)上部:黒色 粘土質シルト～シルト <泥濘堆積層> (東側)含シルト オリーブ黒色 粗粒～中粒砂 <泥濘堆積層> 下部:灰色 極細粒砂 <泥濘堆積層>	5Y 2/1 2.5Y 2/1	10-25			SK03 (溝跡断面で観察)		6b
第7層	c 黒色 粘土質シルト～シルト (東側にのみ分布) 上部:含シルト 灰色 粗粒～中粒砂 下部:含シルト 灰色 極粗粒～粗粒砂(東側では最下部に灰色シルト混り中粒～粗粒砂) <泥濘堆積層> (土石混み?)	2.5Y 2/1 5Y 2/1	25± 15-25				7a 7b	
第8層	含粗粒砂～細粒 灰色 中粒～粗粒砂質シルト(ラミオを観察) <干潟堆積層?>	10Y 5/1	ab.25				8	
第9層	上部:灰色 含粗粒砂～細粒シルト混り中粒～粗粒砂 下部:灰色 含細粒～中粒・シルト 粗粒～極粗粒砂 (下部から上部へ上方細粒化する。ラミオを観察。葉の根と思われる痕跡が観察) <海成層?> <海成層?>	-	≥110				9	

← 上面出土遺構 暗色帯

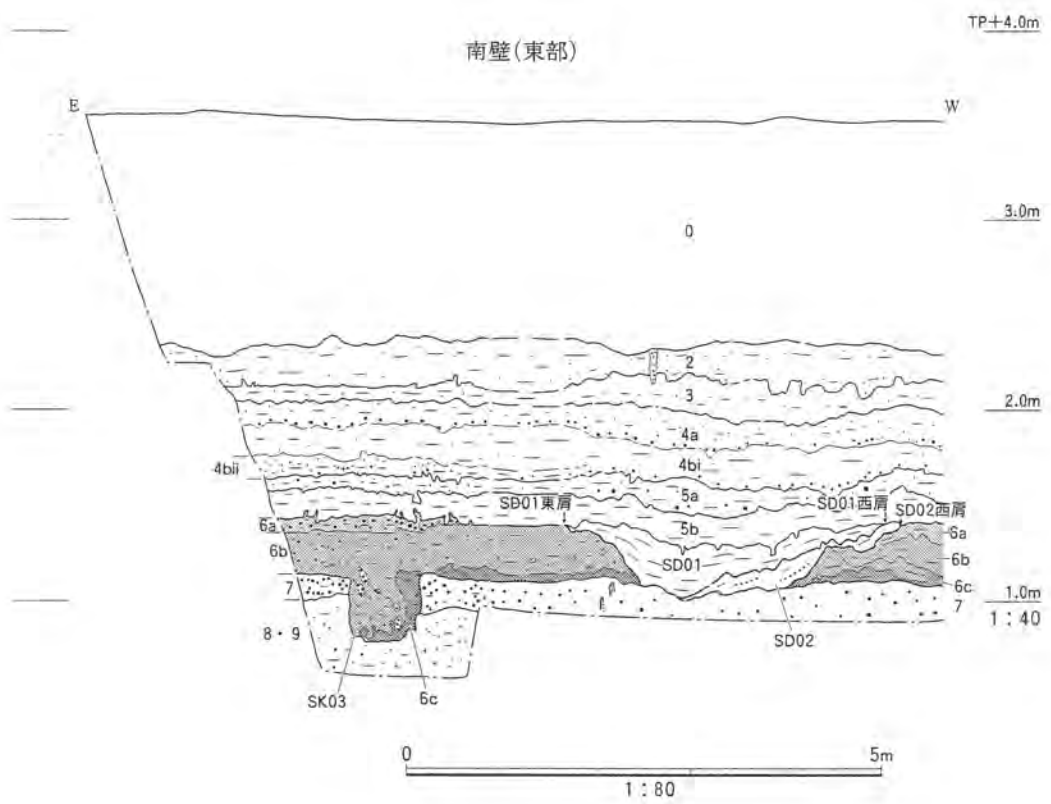


図4 北壁・南壁地層断面

第0層は現代の盛土層および攪乱層で、層厚は105～130cmである。

第1層は現代の作土層で、黒灰色のシルト混り中粒～粗粒砂からなり、層厚は15cm以下である。西端部にのみ分布する。

第2層は近世の作土層である第2a層と氾濫堆積層の第2b層に区分した。第2a層は灰色ないし黄灰色のシルト質中粒～細粒砂からなり、第2b層は黄灰色の細礫質極粗粒～中粒砂からなる。第2a層と第2b層を合わせた層厚は20～40cmで、第2a層は調査地全域に、第2b層は西部にのみ分布する。第2a層と第2b層との境界の層理面は不明瞭であったが、第2b層と下位の第3層との境界は明瞭であった。第2a層からは肥前磁器が出土した。

第3層は粗粒砂～細礫を含む、灰色の中粒～細粒砂質シルトからなる作土層である。層厚は5～20cmで、調査地全域に分布する。下位層との境界の層理面は明瞭であった。本層からは出土遺物がなく、正確な時期は明らかではない。

第4層は第4a層と第4b層とに区分し、第4b層はさらに第4bi層と第4bii層に細分した。第4a層は暗灰黄色ないし灰色の極細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は5～20cmである。第4bi層は細粒～中粒砂を含む、灰色ないしにぶい黄褐色の極細粒砂質シルトからなる作土層で、第4bii層は褐色のシルト質中粒～細粒砂からなる氾濫堆積層である。第4bi層と第4bii層を合わせた層厚は10～35cmである。第4a層および第4bi層は調査地全域に、第4bii層は東部にのみ分布する。第4bi層と第4bii層との境界の層理面は不明瞭であったが、第4a層と第4bi層との境界および第4bii層と第5層との境界は明瞭であった。第3層と同様に本層からの出土遺物はなく、正確な時期は明らかではない。

第5層は中世の作土層で、第5a層と第5b層とに区分した。第5a層は粗粒～極粗粒砂を含む褐灰色の細粒～中粒砂質シルトからなり、第5b層は上部が細粒～中粒砂を含む黄灰色ないしオリーブ灰色の極細粒～細粒砂質シルトないし粘土質シルトからなり、下部が細粒砂～細礫を含むオリーブ灰色ないし黄灰色の極細粒砂質シルトないし粘土質シルトからなる。層厚は第5a層が5～20cm、第5b層が15～25cmで、ともに調査地全域に分布する。第5a層と第5b層との境界は不鮮明であったが、下位の第6層との境界の層理面は明瞭であった。なお、第5b層からは13世紀に属する瓦器が出土した。

第6層は暗色帯構成層であり、第6a層～第6c層に区分した。第6a層は東側では黒褐色のシルト質中粒～粗粒砂からなり、西側では黒褐色の粘土質シルトないし細粒砂質シルトからなる。東側は分級の程度が悪く、やや上方へ細粒化するが、西側は分級が良く、水平なラミナが観察できた。なお、北壁の東端部付近のみ最下部に、黒褐色の粗粒～中粒砂が分布していた。第6a層は西側に層厚を減じ、第6b層と収斂していた。第6b層は東側ではシルトを含むオリーブ黒色の粗粒～中粒砂からなり、西側は上部が灰色極細粒砂、下部が黒色の粘土質シルト～シルトからなる。層厚は第6a層が10～20cm、第6b層が10～25cmである。第6c層は黒色の粘土質シルト～シルトからなり、層厚は25cm以下である。東側にのみ分布していた。第6a層および第6b層は、岩相が後述の溝SD01・SD02を境にして東側から西側へ粗粒から細粒に側方変化していた。第6a層上面において溝SD01・SD02と杭を、南壁断面における第6c層上面で土壌SK03を検出した。第6b層から奈良時代中ごろの土師器杯1のほか須恵器杯が、第6層準から土師器2のほか須恵器の破片が出土した。第6a層と第6b層との境界の層理面は、東

側では明瞭であったが、西側は不明瞭となり、漸移的であった。第6b層と第6c層との境界および第6c層と第7層との境界の層理面は明瞭であった。第6a層～第6c層は岩相の特徴から、氾濫を繰り返した湿地の環境であったと考えた。

第7層は上部がシルトを含む灰色の粗粒～中粒砂からなり、下部がシルトを含む灰色の極粗粒～粗粒砂からなる氾濫堆積層である。東端部付近にのみ最下部に、灰色のシルト混り中粒～粗粒砂が分布していた。層厚は15～25cmで、調査地全域に分布する。下位層との境界の層理面は明瞭であった。

第8層は粗粒砂～細礫を含む灰色の中粒～細粒砂質シルトからなり、層厚は平均で25cmである。波長の短いトラフ型ラミナを観察した。岩相とラミナの状況から干潟の堆積層とみられた。

第9層は上部が粗粒砂～細礫を含む灰色のシルト混り中粒～粗粒砂からなり、下部が細礫～中礫とシルトを含む灰色の粗粒～極粗粒砂からなる。層厚は110cm以上であった。下部から上部にかけて上方細粒化し、トラフ型ラミナやアシの根と思われる痕跡を観察した。本層掘削時に平面で甲殻類の巣穴とみられる生痕を観察したことから海浜成層とみられた。

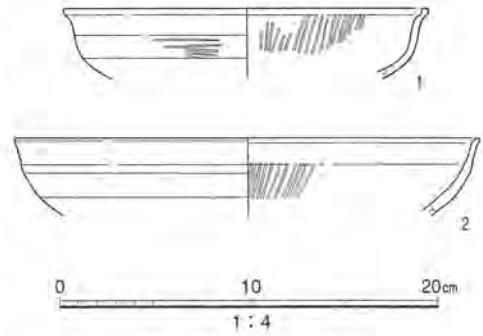


図5 出土遺物実測図
第6b層(1)、第6層(2)

ii) 遺構と遺物(図6～7、写真1)

平面的な調査は第6a層上面および第7層上面で行った。第6a層および第6c層上面の遺構平面を図6、杭立面を図7に示す。

a. 第6a層上面の遺構と遺物

調査地東端部で溝SD01・SD02と杭を確認した。

SD01 幅約2.7～3.4m、深さ約0.2～0.3mで、方向はN 8°～15°Eであった。埋土は上部が細粒砂を含む黒褐色シルトからなり、中部はラミナの観察される黒褐色の細粒～中粒砂質シルトないし黄灰色の中粒～粗粒砂、下部は黒褐色ないし暗灰色シルトからなる。後述するSD02に斜交して切っていた。埋土から、湯道の一部が残った和同開珎のいわゆるバリ銭(写真1)や須恵器・土師器、板材などが出土した。



写真1 和同開珎のバリ銭

SD02 SD01に切られており、残存する幅は約2.2m、深さは最大で約0.3mであった。方向はほぼ南北方向、下端において真北からN 8°E前後とみられた。埋土は下部が粗粒砂～細礫を含む黒褐色の中粒～細粒砂質シルト、上部が黒色のシルト質粗粒～中粒砂からなる。上部には一部でトラフ型斜交ラミナが観察された。埋土からは須恵器の細片が出土した。

杭 20本の杭を確認した。杭には丸杭が17本、角杭が1本(杭立面②)と部材を加工したと見られる板状の杭(杭立面③)が3本あり、丸杭は直径3～15cm、角杭は約4cm角で、板状の杭は約3×8cmと約5×10cmのものがあつた。また、確認した図7の3本の杭については、残存する長さが約60cm

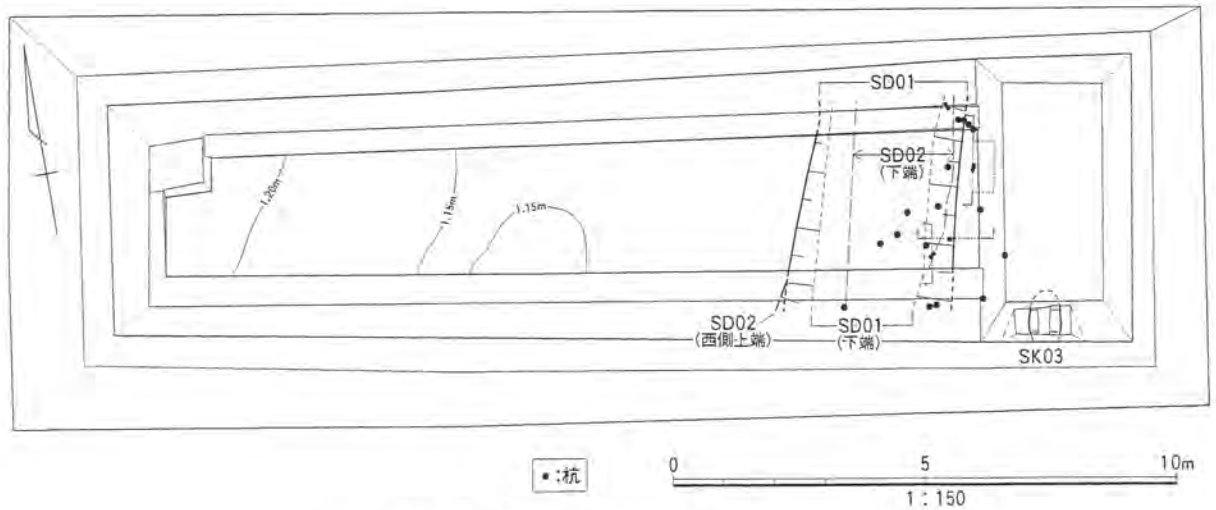
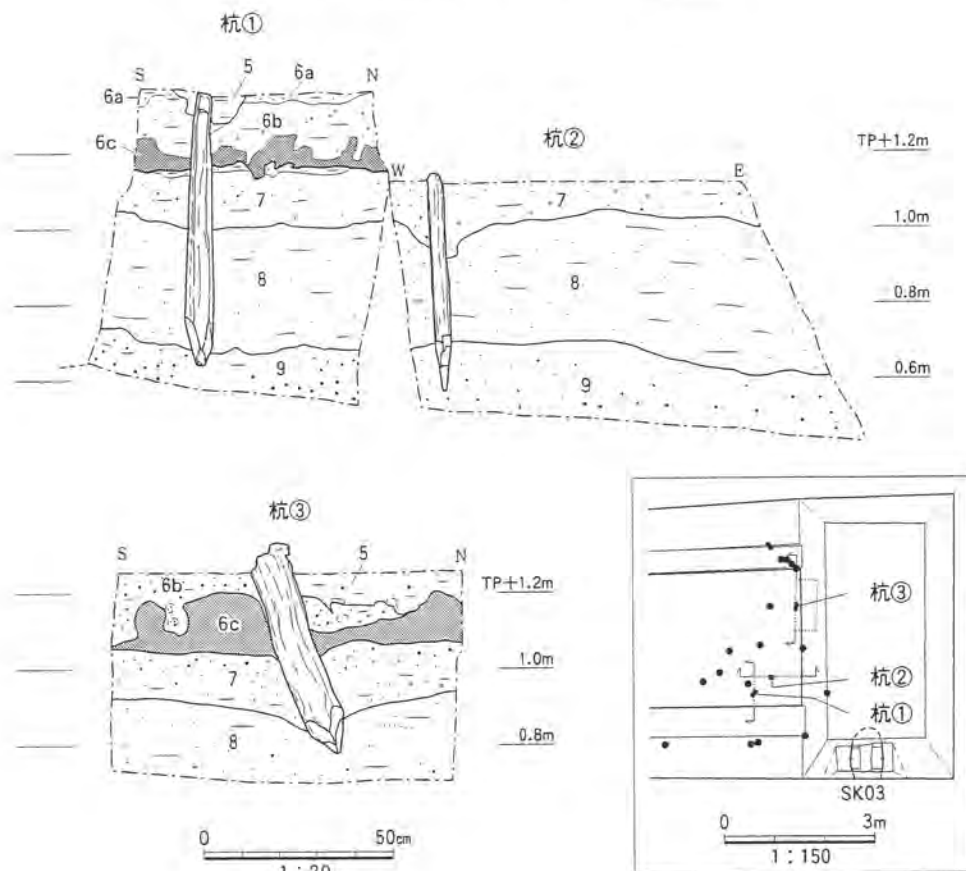


図6 第6a層および第6c層上面検出遺構平面図



検出した杭の配置と断面の位置

図7 杭立面図

前後あり、第8層もしくは第9層まで打ち込まれていた。断面観察で第6a層以下の地層に打ち込みによる変形構造が認められたことから、第6a層上面から打ち込まれたものとみられる。平面の配置はSD01・SD02の中央付近や溝からやや離れたものもあったが、大部分は溝の東半部付近にまとまっており、溝の北東部では4本の杭が接するように打ち込まれていた。前述のように第6a・6b層は湿地の堆積層で、溝を境にして第6a・6b層の岩相が粗粒になっていた。水位が上昇することによって溝の東半部が脆くなることも想定され、杭を溝東半部にまとめて打ち込むことで地盤の強度を上げ、溝

を保護したのではないかと考えた。

b. 第7層上面の検出状況

第7層上面では乾痕を確認したのみで、遺構や遺物は見つけることはできなかった。

c. 壁面で確認した遺構

南壁東端部において土壌SK03を確認した。土壌の南部分は調査範囲外、北部分は側溝掘削時に失われていたため平面の形状は正確ではないが、楕円の平面形を呈する土壌と考えた。残存する南北長は約0.6m、東西長は約0.8m、深さ約0.4mであった。埋土は主として第7b層で埋まっており、下底部に第8層の、西側壁側には第6c層の偽磔が含まれることから、第6c層上面の遺構と考えた(図4)。なお、埋土からは土師器杯身や甕の細片が出土した。

3)まとめ

今回の調査では、以下にあげる成果が得られた。

第6a層上面において検出したSD01から、湯道の一部が残った和同開珎のいわゆるバリ銭が出土した。発見直後は非常に鮮やかな銅色をしており、土壌中で酸化を免れたまま保存されていた[小倉徹也2008]。SD96-1次で出土した和同開珎と比較するため、蛍光X線による材質分析を実施した。現在のところ分析結果を検討中であるが、銅を主成分とし、ヒ素を含有する特徴があるとの分析結果が得られている。SD96-1次の和同開珎のいずれかのタイプの範疇に含まれると考えられ、その調査地近辺から流されてきた可能性がある。SD96-1次では枝銭やバリ銭などが見つかったことによつて、付近に鑄造工房があったと考えられている。今回の和同開珎のバリ銭の出土も、鑄造工房の可能性を考える上で重要な発見となった。

冒頭でも触れたが、本調査地は[積山洋2004]で想定される難波京域の東端部付近に位置し、想定される条坊地割が調査地の西端に当たっている(図1)。第6a層上面において検出した溝SD01・SD02は、それぞれ真北から8°~15°、8°前後東へ振つてはいるが、ほぼ南北方向であった。正南北方向ではないため、条坊地割に係わる遺構であるかどうかは明らかではない。しかし、溝肩部の崩壊や蛇行などによつて初期の形状と異なることも考えられ、今後、調査地周辺で行われる調査の結果を合わせて、さらに検討していくことが必要である。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1999、『細工谷遺跡発掘調査報告』I

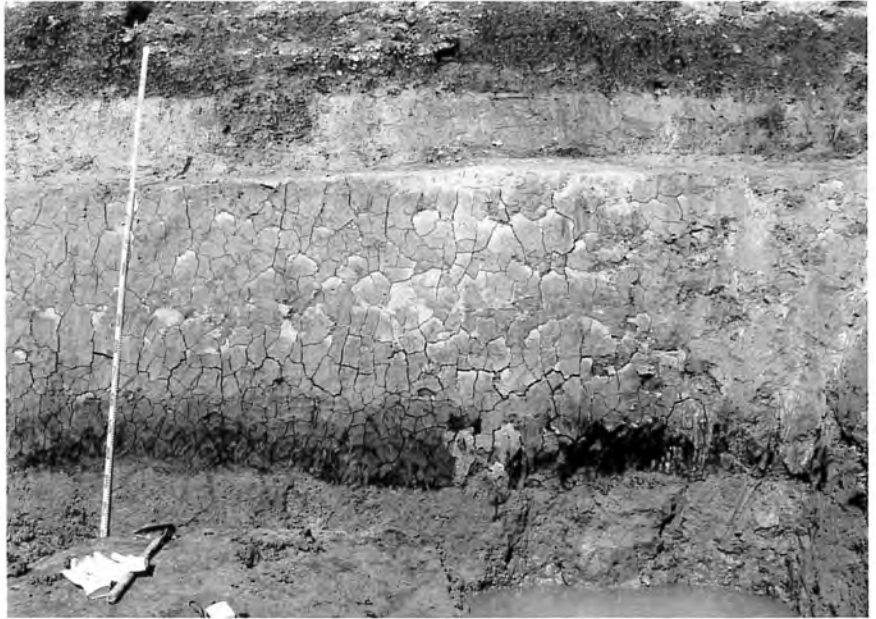
2007、『細工谷遺跡発掘調査報告』II

小倉徹也2008、「やっぱり出た和同開珎のバリ銭」：大阪市文化財協会編『葦火』135号、p.8

小山正忠・竹原秀雄1996、『新版 標準土色帖』17版 日本色研事業株式会社

積山洋2004、「宰相山遺跡と難波京」：大阪市文化財協会編『宰相山遺跡発掘調査報告』I、pp.45-53

北壁地層断面
(東端部、南から)



第6a層上面検出状況
および北壁断面
(南西から)



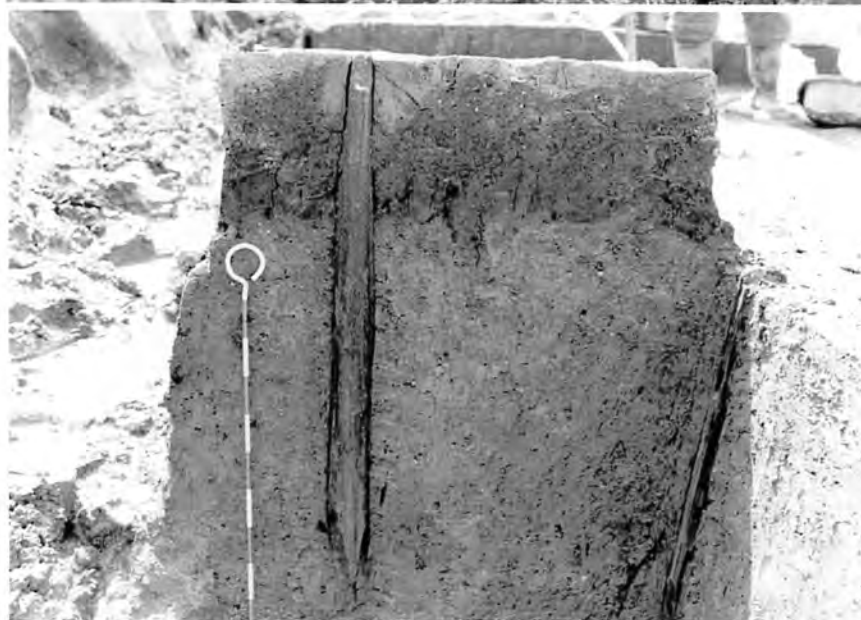
第7層上面検出状況
および南壁断面
(西から)



和同開珎のバリ銭
出土状況
(南西から)



杭の検出状況
(杭立面①、東から)



杭の検出状況
(杭立面③、南から)



細工谷遺跡発掘調査(SD08-3)報告書

調査個所 大阪市天王寺区筆ヶ崎町83-1
調査面積 54㎡
調査期間 平成20年5月14日～5月22日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、松本啓子

1) 調査に至る経緯と経過

大阪市天王寺区に所在する細工谷遺跡は原始～中世の複合遺跡で、西側は上町台地の最高所を貫く難波京朱雀大路跡に接している(図1)、ここから東の沖積平野(河内平野)に向かって下降する斜面に位置している。本遺跡の周辺は、もともと東もしくは北東側に開口する大きな開析谷に数多くの支谷が入る複雑な地形であったが、現在では市街地化が進んで小さな谷は大半が埋積してしまっている。しかし、今でも谷地形の痕跡を留めている場所が所々に見られる。

1996・97年の発掘調査(SD96-1・97-1次調査)で、国内で初めて和同開珎の枝銭が出土し、あわせて「百済尼寺」の存在を示す墨書土器・木簡や富本銭などが出土したことから、全国的に細工谷遺跡の存在が広く知られるところとなった[大阪市文化財協会1999]。

今回の調査地は細工谷遺跡の中でも上町台地の最高所近くに当たり、現地表の標高は約12.6mである。これまで周辺で行われた調査にはSD96-1・97-1・01-3・01-4・05-1・06-1・06-2・06-3次調査などがある(図2)。

SD96-1・97-1次調査地は本調査地の南西約150mの場所にあり、本調査地同様に台地縁部で細工谷の谷頭に当たるため、標高は11~15mと高い。この調査では、飛鳥~平安時代の建物・井戸・溝・



図1 細工谷遺跡位置図

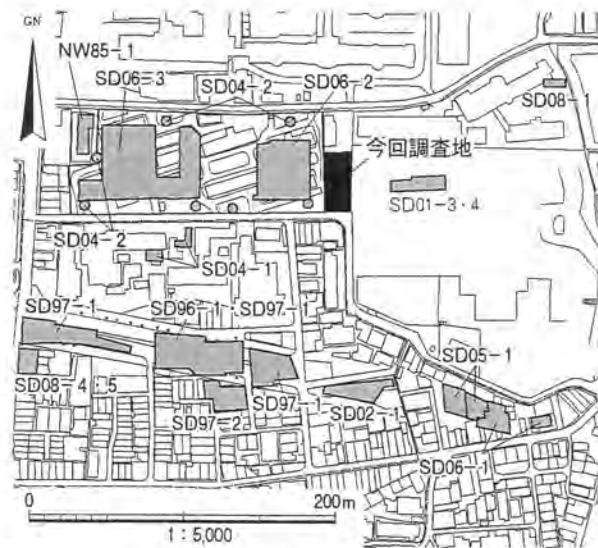


図2 周辺の調査と今回の調査地



図3 調査区配置図

流路などが見つかると、このうちの井戸から「百済尼寺」の存在を示唆する文字資料が出土した。また、流路から和同開珎の枝銭が出土したことは、前述したとおりである[大阪市文化財協会1999]。同様の標高の高い場所での調査には、2001年度に行った本調査地東隣のSD01-3・01-4次調査や、西隣の2006年度のSD06-2・06-3次調査などがあるが、すでに地山が大きく削られていたため、いずれの調査もほとんど遺構が見つからなかった。しかし、少ないながらもSD01-3・01-4次調査では平安時代後期の溝が検出され、また、SD06-2・06-3次調査では五合谷という大きな谷とその支谷、およびこれにとりつく古墳時代～古代に設営された溝(導水路)が見つかり、多数の遺物が出土した。また、支谷は古墳時代～古代に埋め立てられて居住地や祭祀の場として利用されたことが明らかとなった[大阪市文化財協会2007b]。

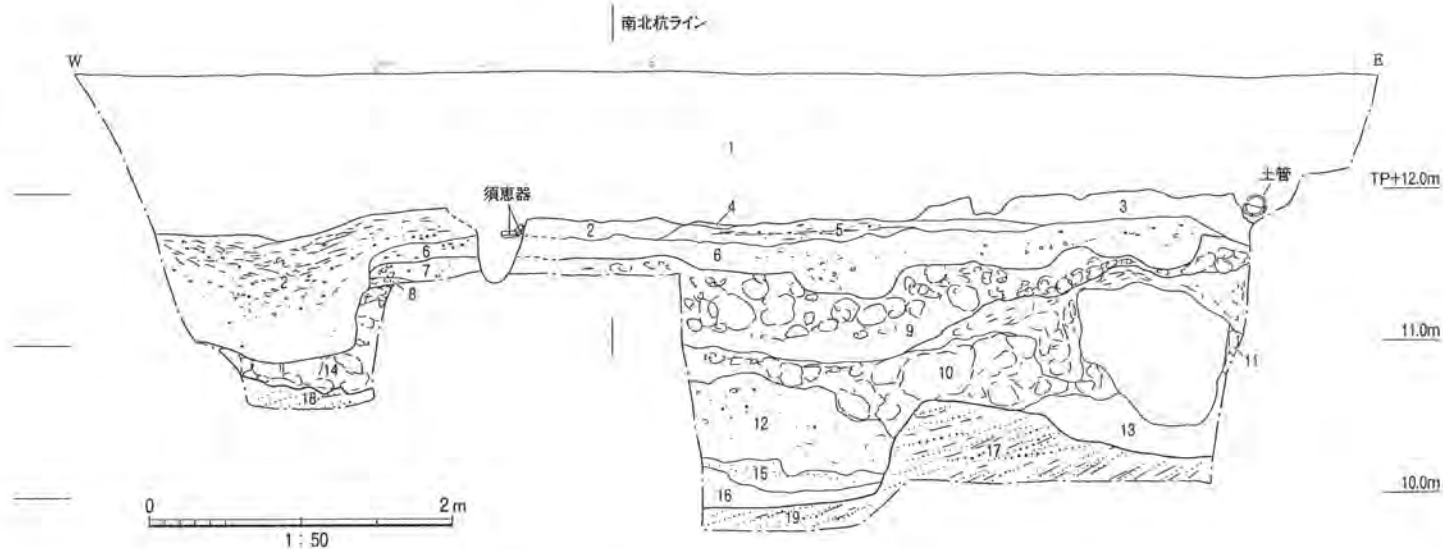
一方、標高8mほどのやや低い場所に位置するSD05-1・06-1次調査では、弥生～奈良時代の多くの遺物とともに、7世紀後半～8世紀の溝や掘立柱建物群が見つかった。ここは細工谷の支谷に当たる場所であるが、7世紀後半から8世紀にわたって整地を重ねながら掘立柱建物群が建てられていた状況が確認され、木製導水管(暗渠)の設置された溝も見つかった。このことから一帯が飛鳥～奈良時代に大きく開発されたことが明らかとなった[大阪市文化財協会2007a]。

このように、本調査地の周辺は古墳時代から古代にかけて開発が進んだ歴史上重要な地域で、既知の埋蔵文化財包蔵地内であるため、大阪市教育委員会によって試掘調査が実施された。その結果、南北2箇所の試掘のうち、南側の試掘地点では地表下約1.3mで地山とみられる地層が見つかり、本調査地にも古代・中世、あるいはそれ以前の遺構・遺物の出土が予想された。このため、遺構・遺物の有無や、原始から中世にいたる土地利用の変遷を解明するための基礎資料を得る目的で、本調査を実施することとなった。

現状で調査地内はほぼ平坦となっているが、調査地の地表面の高さは北側隣地にある建物の二階と変わらず、南高北低の傾斜地に盛土を施したことは明らかである。試掘調査の結果を見ても北側の試掘では3m近く掘削しても地山は検出されていない。これは先に行った西隣のSD06-2・06-3次調査で見つかった西から東へ走る「五合谷」に流れ込む南西-北東方向の支谷に係る傾斜であろうと予想された。このため、いつこの傾斜が埋められたのか、また、埋立ててどのように利用したのかを探るには、現地表から地山までの状況が観察できる南側試掘地点で調査するほうが良いということで、南側試掘地点の周辺で調査区を設定することになった。なお、現地表の標高は約12.6mである。

調査は2008年5月14日から着手した。試掘調査の結果に基づき、南側の試掘地点中心に図3のように東西9m×南北6mの調査区を設定した。現代盛土は重機で除去し、その後は人力によって地層ごとに平面の調査と地層の掘削を行い、遺構と遺物の検出に努めた。地層の断面および検出した遺構は、適宜、写真撮影・実測などの必要な作業を行い、5月22日に器材の撤収を含めたすべての現場作業を終了した。

なお、本報告で使用した示北記号は図3・9～11が磁北、図1・2は国土座標第VI系に基づく座標北である。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本報告ではTP+○mと記す。



- | | |
|--------|---|
| 【第1層】 | 1：にぶい黄色(2.5Y6/4)砂・礫・ガラ |
| 【第2a層】 | 2：オリブ褐色(2.5Y4/4)碎石混り礫質砂(炭を多量に含む) |
| | 3：オリブ褐色(2.5Y4/6)粘土混り礫質砂(漆喰を含む) |
| 【第2b層】 | 4：にぶい黄色(2.5Y6/4)碎石混り礫質砂(炭を多量に含む) |
| | 5：オリブ褐色(2.5Y4/6)砂・礫(炭とシルトの薄層が入る) |
| 【第3a層】 | 6：暗灰黄色(2.5Y5/2)礫を含む砂混り粘土質シルト(炭を含む) |
| | 7：オリブ褐色(2.5Y4/3)礫を含む砂混り粘土質シルト(炭を含む) |
| 【第3b層】 | 8：黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂混り粘土質シルト |
| | 9：黄褐色(10YR7/8)礫を含む砂混り粘土質シルト(灰白色砂混り粘土質シルトの偽礫顕著) |
| | 10：明黄褐色(10YR7/6)礫を含む砂混り粘土質シルト(灰白色粘土質シルトの偽礫顕著) |
| 【第3c層】 | 11：にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土質シルト |
| | 12：明黄褐色(10YR6/8)礫を含む砂混り粘土質シルト(酸化鉄が多い) |
| | 13：浅黄褐色(2.5Y7/6)礫を含む砂混り粘土質シルト(酸化鉄が多い) |
| | 14：明黄褐色(2.5Y6/6)砂混り粘土質シルトニシルト質粘土(地山偽礫が主体の盛土。酸化鉄を少し含む) |
| | 15：浅黄褐色(2.5Y7/4)砂・礫を含む粘土混り砂礫～シルト |
| 【第4層】 | 16：黄褐色(10YR5/6)礫・炭を含む砂混り粘土質シルト |
| | 17：淡黄色(2.5Y8/4)シルト～粗粒砂 |
| | 18：明黄褐色(10YR6/8)細粒～粗粒砂(ラミナ顕著、酸化鉄沈着) |
| | 19：明黄褐色(2.5Y7/6)シルト～細粒砂 |

図4 北壁地層断面図

2) 調査の結果

i) 層序(図4～8、図版下段)

本調査地の地層の堆積状況は以下のとおりである。

第1層：現代の地層で、重機によって除去した。断面の観察により、貝製ボタンを作った後の貝殻を大量に廃棄した土壌(この土壌の埋土を第1b層とする)とそれを覆う漆喰層、さらにその上を覆う最近の盛土(第1a層)が堆積していることがわかった。

第1a層はにぶい黄色の砂や礫などが主体の最近の盛土層で、層厚は約100cmあり、ほぼ水平に堆積

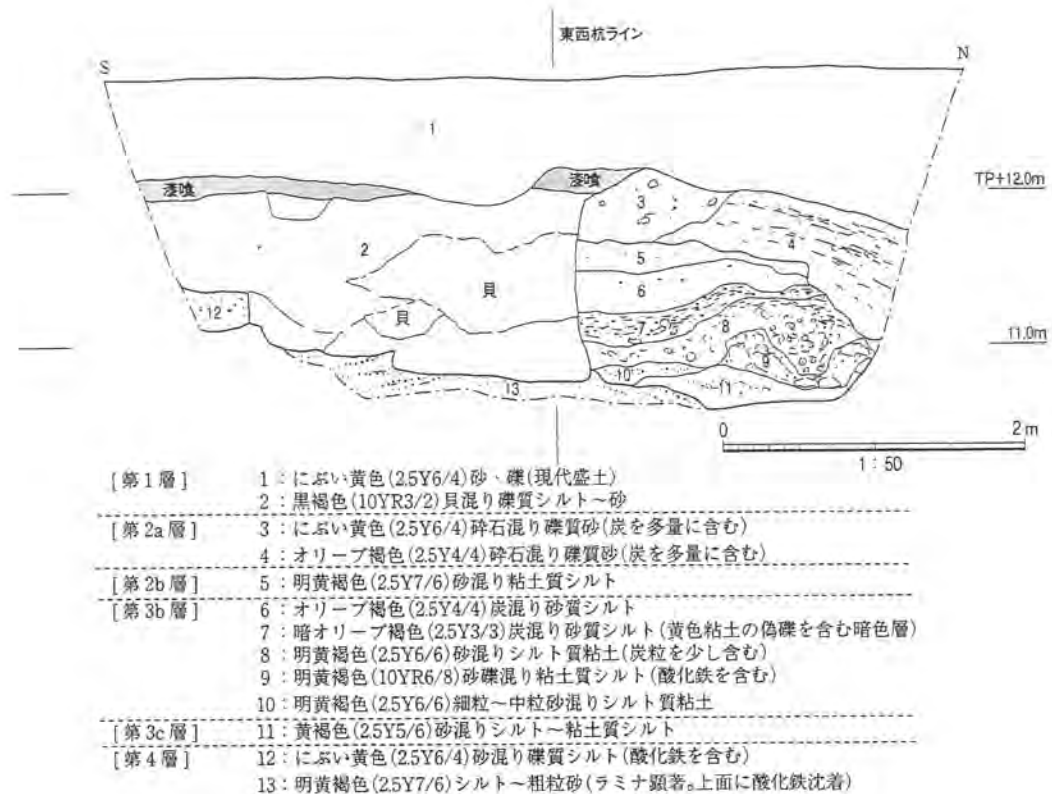


図5 西壁地層断面図

する。

第1b層は西端で見つかった貝殻の廃棄土壌の埋土で、黒褐色シルト～砂に礫と大量の貝殻が混る。層厚は約130cmである。

第2層：重機で除去した近世末期～近代の整地層で、以下の2層に分けられる。

第2a層はオリーブ褐色碎石混り礫質砂である。層厚は10～20cmであるが、本層で埋る土壌では約90cmとなる。

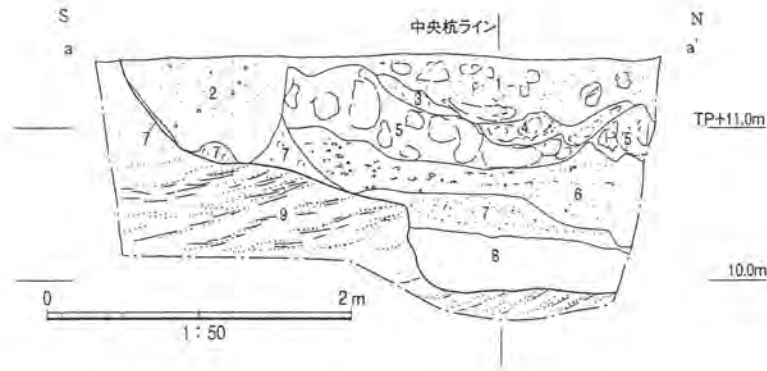
第2b層は明黄褐～暗黄灰色礫を含む砂混り粘土質シルトで、最大層厚は約60cmある。上面は平坦で、TP+11.8mとなる。均質な整地土で、偽礫はほとんど含まれない。近世末期～近代の整地層である。

第3層：近世後半の整地層である。掘削と埋戻しという整地の単位が少なくとも3回認められたため、3つの地層に細分した。

第3a層は黄褐色の炭・酸化鉄・マンガン粒・礫を含む砂混り粘土質シルトで、灰白色砂混り粘土質シルトの偽礫が多く混る。下位の第3b層を掘削して埋めたもので、土壌がいくつも重なって掘削されたのか、底面は凸凹している。最大層厚は約70cmある。第3a層上面で埋甕や溝・土壌・小穴などの近世の遺構が見つかった。

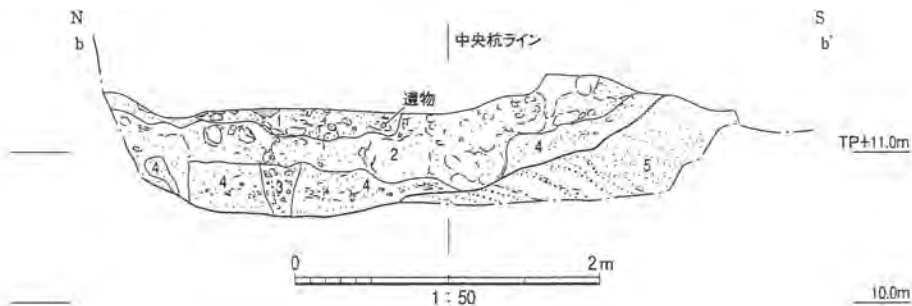
第3b層は明黄褐色の炭粒・酸化鉄・礫を含む砂混り粘土質シルトで、第4層由来の灰白色粘土質シルトの大きな偽礫が混る。第3a層以上に底面は凸凹していて、下位の第3c層上面には本層掘削時の鋤先の痕跡が点々と残っていた(図10)。最大層厚は約120cmある。

第3c層：黄褐色の炭粒・礫を含む砂混りシルト質粘土層と浅黄橙色の礫混りシルト質砂で、層厚は



- [第3a層] 1: 黄橙色(10YR7/1)砂混り粘土質シルト
2: 黄橙色(10YR7/1)シルト混り粘土質砂・礫(炭・酸化鉄・マンガンを含む)
3: 明黄褐色(10YR7/6)砂混りシルト質粘土
4: 黄褐色(2.5Y5/4)砂混り粘土質シルト(酸化鉄多い)
- [第3b層] 5: 明黄褐色(10YR7/6)砂混り粘土質シルト
6: 明黄褐色(10YR6/8)礫を含む砂混り粘土質シルト(酸化鉄多い)
- [第3c層] 7: 浅黄褐色(2.5Y7/4)礫混りシルト質砂
8: 黄褐色(10YR5/6)炭粒・礫を含む砂混りシルト質粘土
- [第4層] 9: 淡黄色(2.5Y8/4)極細粒～粗粒砂(ラミナ顕著。酸化鉄を含む)

図6 南北方向地層断面図(a～a')



- [第3b層] 1: 黄褐色(2.5Y4/4)礫を含む砂混り粘土質シルト(炭を含む)
2: 灰黄色(2.5Y7/2)砂混り粘土質シルト(炭粒を含む)
3: におい黄色(2.5Y6/4)砂・礫混り粘土質シルト(炭粒を含む)
- [第3c層] 4: 明黄褐色(10YR6/8)砂混り粘土質シルト～シルト質粘土(多くの酸化鉄と極少量の炭粒を含む)
- [第4層] 5: におい黄色(2.5Y6/4)極細粒～粗粒砂(酸化鉄を含む水成層)

図7 南北方向地層断面図(b～b')

S	地層の堆積状況	N	層名	時期・遺構・遺物等
	漆喰		第1層	現代の盛土・土壌
	2a	埋壺SX05・06	第2a層	近代の整地土
	2b		第2b層	近世末～近代の整地土・埋壺
	3a		第3a層	近世後半の整地土
	3b	SK11・SP04・SD01など	第3b層	近世後半の整地土・鋤痕
		鋤痕	第3c層	近世後半の整地土・関西系陶器
			第4層	段丘構成層(水成層)

図8 地層と遺構の関係

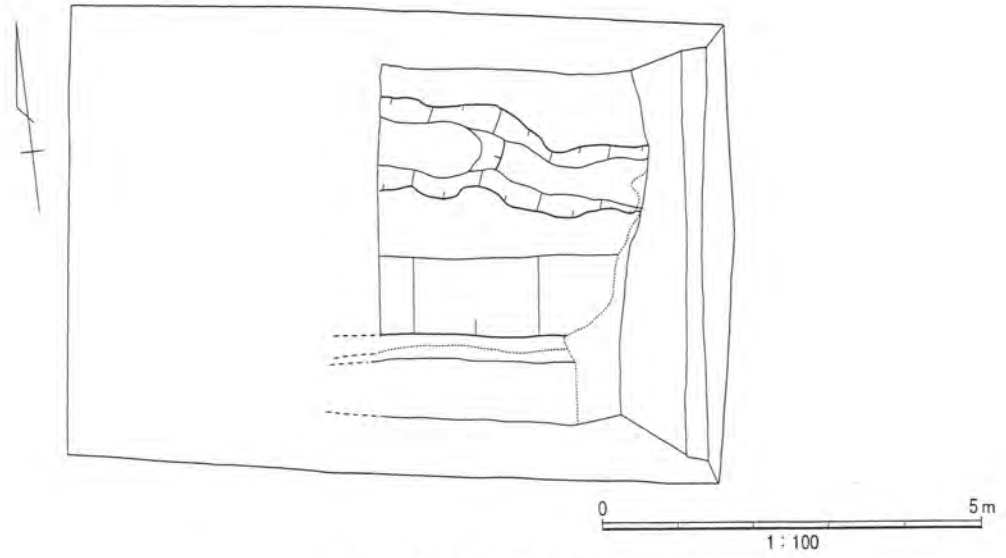


図9 地山上面の遺構平面図

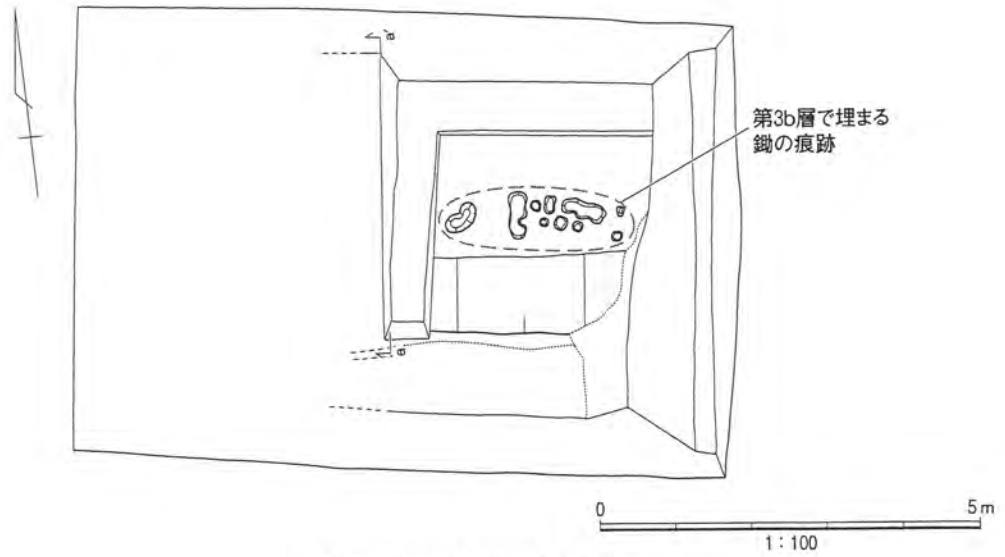


図10 第3c層上面の遺構平面図



写真1 鋤の痕跡(東から)



写真2 鋤の痕跡(南から)

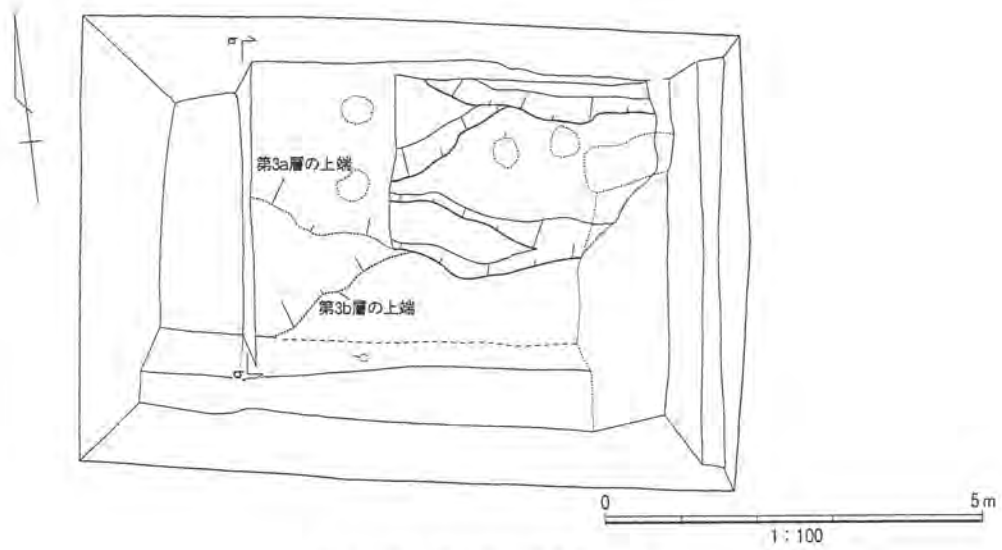


図11 第3b層上面の遺構平面図

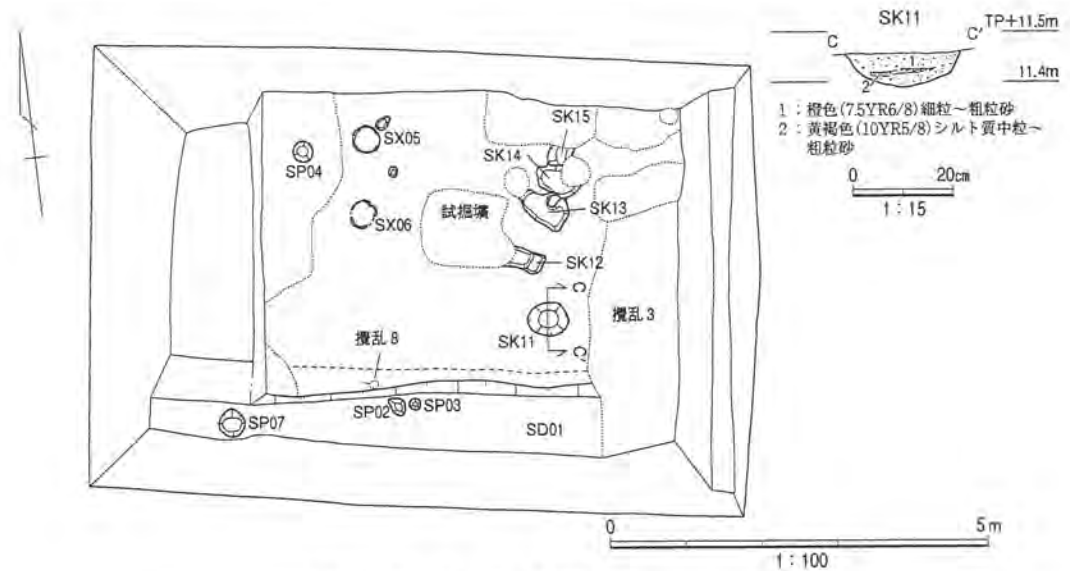


図12 第3c層上面の遺構平面図

残りのよいところで約70cmあるが、調査区中央の断面(図6)を見ると、本来は120cm以上あったことがわかる。18世紀後半の陶器片が出土した。

第4層：本層は調査区南半部がTP+11.5mと高く、そこには本層の上に第3層はなく、直上が第2b層となる。本層はここから下へ180cm以上続く。酸化鉄を含む灰黄色の粘土質シルト～粗粒砂層で、北東から南西へと流れるラミナが顕著に見られた。上部ほど細粒化し、よくしまった黄褐色の粘土質シルトとなる。出土遺物はなく、上町台地の段丘構成層(地山)と考えられる地層である。

ii) 遺構と遺物(図9～13、写真図版上・中段)

第4層上面では第3c層が掘削されたときの落込みを検出した(図9、写真図版中段)。調査区の北側を大きく1mほど掘下げた後、底面をさらに0.5mほど掘下げている。

第3c層上面で第3b層で埋る鋤痕が見つかった(図10)。砂地の上に掘られたため、崩れて不明瞭では

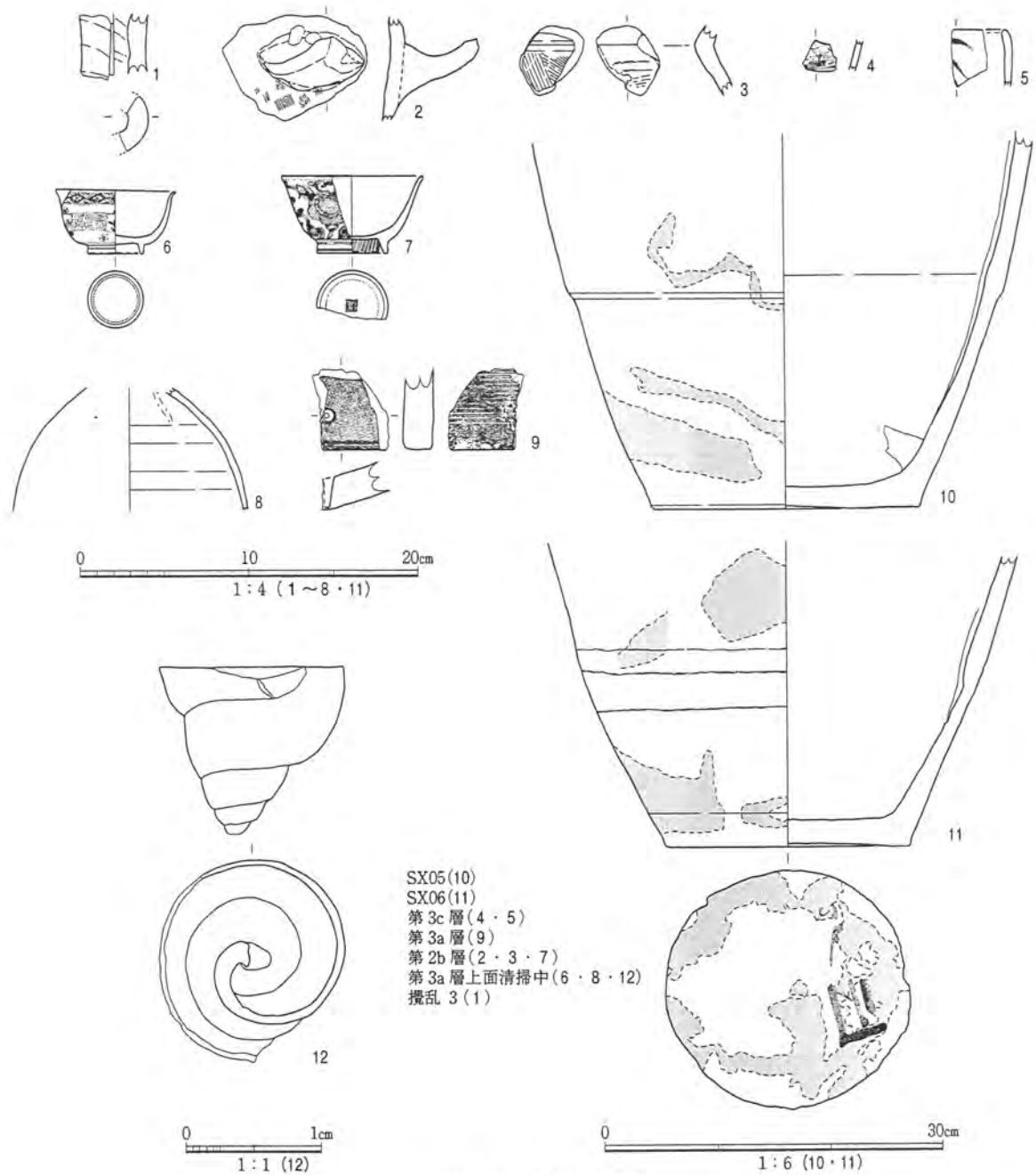


図13 出土遺物実測図



写真3 貝殻の廃棄土坑

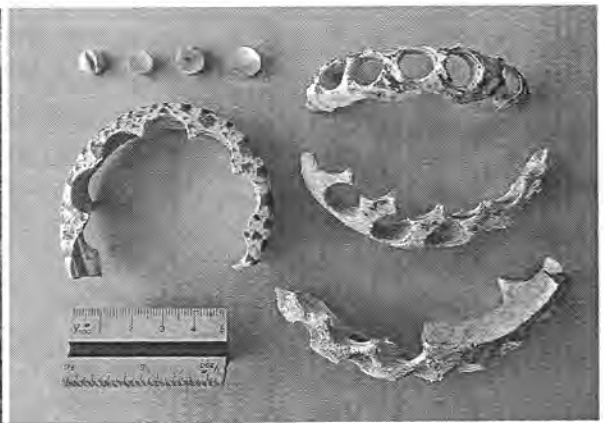


写真4 貝ボタン製作後の貝殻

あるが、幅0.12mほどの鋤の刃先が、深さ0.05 m未満のV字状の浅い窪みで残っていた。この鋤の痕跡は長軸を南北に向けて東西方向に点々と並んでおり(写真1)、東西方向に掘進めたことがわかる。

層序の項でも述べたとおり、第3b層上面は第3a層で埋る整地の凸凹を検出したに過ぎず、性格のわかる遺構は見つからなかった(図11)。

第3a層上面では、埋甕・溝・土坑・小穴などの近世後半の遺構が見つかった(図12、写真図版上段)。

SD01は幅1 m以上の東西方向に掘られた溝で、底面を平坦に掘っていて、深さは約0.2mある。第2b層が充填されていた。須恵器のごく小さな破片が出土した。

埋甕SX05・06は丹波焼の大甕2個を第3a層上面に坑を掘ってそれぞれ埋置したもので、約2 mの間隔で南北に配置されている。どちらも第2b層の整地の際に甕の上半部が失われ、土坑に埋っていた底部のみが残り、第2b層とともに胴部の破片が甕の中に落込んでいた。復元すると10・11(図13)のようになるが、口縁部を欠くため、詳細な時期はわからない。どちらも内外面に白濁した付着物がある。また、SK06の甕11は底部の外面に墨書がある。屋号か何かの記号であろうか、山笠か「のような字形の下に横線が2本書かれている。

SK11~15は、長径約0.5m、短径約0.4m、深さ0.1mほどの平面が楕円形に近い浅い土坑で、橙色の砂で埋っている(図12-SK11断面図)。出土遺物はない。

小穴SP02-03は直径0.2m未満、深さ0.05 m程度の穴で、灰褐色の粘土混りシルト質砂で埋っていた。杭の痕跡であろう。SP04-07も灰褐色の粘土混りシルト質砂で埋る小穴であるが、規模がやや大きい。SP04は直径0.25m、深さ約0.4m、SP07は直径0.35m、深さ約0.3mであるSP04から丹波焼や肥前磁器の小破片が出土した。近世後半のものである。

iii) 各層の出土遺物(図13)

各層とも出土遺物はあまり多くないが、第3a層からは近世の平瓦9とともに土師器・須恵器の破片が出土した。9は目釘穴が開けられているが、貫通していない。第3c層からは18世紀代の関西系陶器の破片4・5が出土した。

第2層では近世の肥前磁器小杯7とともに古代の土師器把手2と中世の土師器甕3が出土した。このような古代・中世に遡る遺物は、攪乱3からも須恵器の高杯脚部1が出土していて、今回の調査では見られなかった古い時期の遺構や包含層がこの付近に存在したことが窺える。

また、第3a層上面の清掃中に国産青磁瓶8や肥前磁器小杯6などの18世紀後半以降の遺物とともに、ペーゴマに利用した巻貝の貝殻12が出土した。これは貝殻を水平に切断して中に鉛などを充填し、重心を安定させて遊んだもので、中に充填した鉛が大坂城下町跡などの大阪市内の遺跡から出土している[小田木富慈美・池田研2007]。

西壁断面の土坑埋土(第1b層)から大量に出土した貝殻(図5、写真3)は、サラサバテイの貝殻である。サラサバテイ(高瀬貝)は沖縄以南に棲息する大型の巻貝で、貝ボタンの材料となることで知られている。コンテナ1箱分のサンプルを採取したところ、大半は貝ボタンを打ち抜いた痕跡の残るサラサバテイの体層部で、打ち抜かれた加工前の貝ボタンも少量含まれていた(写真4)。体層部はすべて螺頭部が切り離されており、切り離された螺頭部は出土していない。本調査地の周辺では西約100

mのSD06-3次調査地や西約550mのUH07-6次調査地でも貝ボタンの廃材を伴う遺構が検出されており[大阪市文化財協会2007b・2008]、明治期以降に当地域で貝ボタンの製造が行われていたようすが次第に明らかとなってきている。また、貝種や部位は出土地点によって異なり、UH07-6次調査地出土のサラサバテイは、本資料とは対照的に螺頭部のみで構成されている。1885(明治18)年から谷町で貝ボタンの製造を始めた高田鉦貿易株式会社の高田真志氏のご教示によれば、貝ボタンの製造は工程に応じて小規模な業者による分業体制が採られる場合が多かったとのことで、今回の調査地には体層部から貝ボタンを打ち抜く作業所があった可能性もある。

3)まとめ

本調査地では近世後半の掘削・埋戻しを1単位とする3回の整地過程と、最終面で同時期の遺構・遺物を確認することができた。また、断面だけの観察ではあるが、近代以降の貝ボタンの製作関連遺構を見つけることができた。

明治19年の『大阪実測図』ではまだ細工谷の谷地形がよく残っており、現在とほとんど形状の変わらない地形に沿った道路をもとに今回の調査地の位置を推定すると、図14のとおり、小さい谷の斜面に位置していたことがわかる。明治以前においても立地は変わらないであろうから、今回見つかった近世後半の掘削・埋戻しの3回の工程は谷地形を克服するための整地作業であったのかもしれない。

今回の調査範囲では古代や中世の遺構は見つからなかったが、近世以降の遺構や地層から古代や中世の遺物が出土したことは、すでに失われてしまっているこれらの遺跡が付近にあった可能性を示唆するものである。今後とも周辺地における綿密な調査を継続し、歴史的な景観を復元していくことが重要であろう。

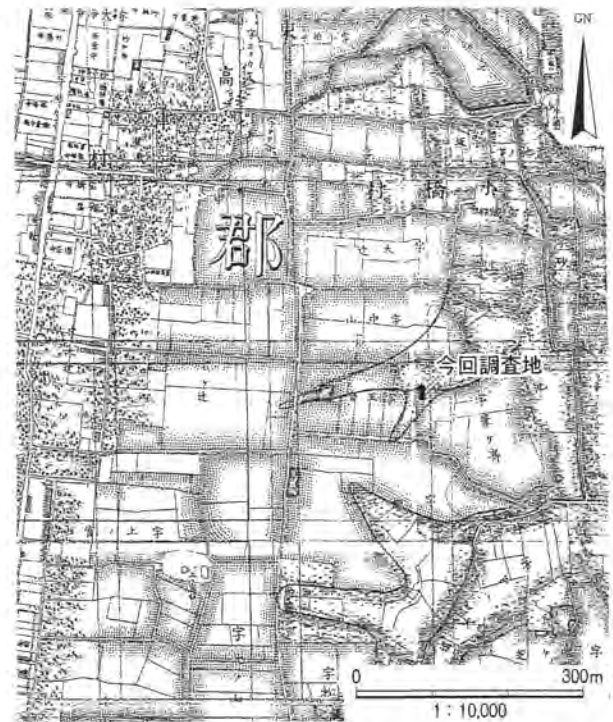


図14 調査地周辺図(明治19年作成『大阪実測図』に加筆)

参考文献

- 大阪市文化財協会1999、『細工谷遺跡発掘調査報告』I
 2007a、『平成17年・18年度都市計画道路難波片江線の整備に伴う細工谷遺跡発掘調査(SD05-1・06-1)完了報告書』
 2007b、『細工谷遺跡発掘調査報告』II
 2008、『上本町遺跡発掘調査(UH07-6)報告書』
 小田木富慈美・池田研2007、『バーゴマのルーツ 発見!』:大阪市文化財協会編集・発行『葦火』131号、pp.6-7

調査地全景(南から)



地山上面の状況
(南から)



北壁断面(南から)



上本町遺跡発掘調査(UH08-4)報告書

調査個所 大阪市天王寺区上本町6丁目1-3・10・11
調査面積 80㎡
調査期間 平成20年9月4日～9月12日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、松本啓子

1) 調査に至る経緯と経過

上本町遺跡は大阪市内を南北に通る上町台地の尾根部から東側斜面の高所に位置し、本調査地の現地地表の標高は17.4~18.0mである。台地の北端近くにある飛鳥・奈良時代の難波宮から台地の尾根上をまっすぐ南に延びる朱雀大路は、本調査地の東約300mのところを通ると推定されていて、この朱雀大路を挟んで東側が細工谷遺跡、西側が上本町遺跡である(図1)。本調査地は難波宮大極殿から約1.5km南で、難波京の中心部分と推定される場所である。

現在までの調査で、細工谷遺跡では、飛鳥・奈良時代の井戸や柱穴、木製暗渠などの遺構や、和同開珎の枝銭や「百済尼寺」を推定させる奈良時代の墨書土器など、多数の遺物が見つかるとともに、古代以前の入組んだ谷のようすが次第に明らかになり、上町台地形成時のようすを探る手がかりが得られている(SD96-1・97-1・02-1・05-1・06-1・06-2・06-3・08-4・5次調査など、図2・10) [大阪市文化財協会1999・2003・2007a・2007b・2008b]。

一方、上本町遺跡では、まだ細工谷遺跡ほど調査数は多くないが、本調査地の南約230mのUH07-6・08-3次調査(図2)、南西約420mのUS06-1次調査、同調査北側のUS04-2次と南側のUH07-1・07-2次調査などでも古代の遺構や遺物が見つかっている[大阪市文化財協会2006・2007c・2007d・2008a、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005a・2005b]。

建設工事に先立って大阪市教育委員会が行った試掘調査によると、調査地は起伏のある地形で、南東部には地表下約2.3m以下で古代~中世の遺物包含層が確認された地点と、地表下約1.6mという比較的浅い位置で地山層が見られた地点があった。こういったところでは当該期の遺構が残っている可能性があるため、こうした地層の年代や遺構・遺物の分布状況を明らかにして、この地域の歴史の変遷を復元する基礎資料を得ることを目的に、本調査を行うことになった。



図1 調査地の位置

図2 今回の調査地と周辺の調査

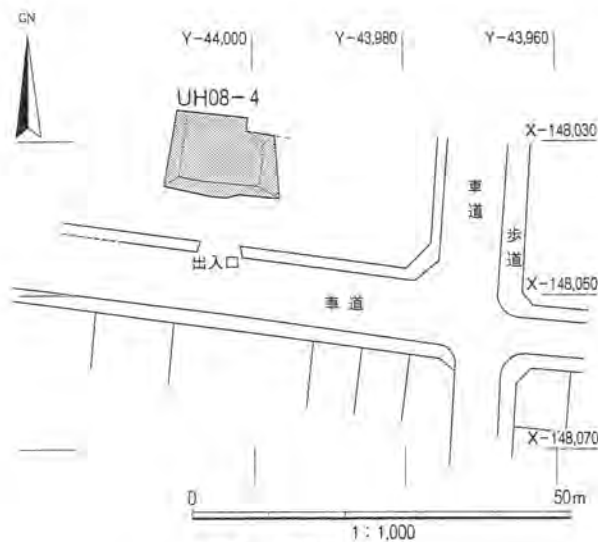


図3 調査区的位置

調査は平成20年9月4日から開始した。東西10m、南北8mの調査区を設定し(図3)、地表下約2.0mまでの間の現代～近代の地層は重機によって除去し、以下を人力によって掘下げながら、地表下約3.0mまでの間の遺構・遺物の検出に努め、随時、写真や実測などの記録を取りながら地山層まで掘進めた。9月12日には器材の撤収を含めて調査を完了した。

なお、本調査で用いた方位は世界測地系による座標北で、水準値はTP値(東京湾平均海面値)を用い、本文・図中ではTP+〇mと記す。

2) 調査の結果

i) 層序(図4・5、図版1の中・下段)

第1層：重機で除去した現代の地層で、炭・砂・巨礫・石が多く混る暗灰黄色砂質シルト層である。層厚は浅くても110cm、深いところでは220cm以上ある。現代の整地層である。

第2層：粘土・礫が大量に混る黄褐色～暗灰黄色の砂質シルト層で、昭和初期とみられる整地層である。最大層厚は135cmである。下位にある地山砂層の大きな偽礫が混るため、小範囲だけを見ると地山と見紛うような状態である。昭和11年の近鉄本社建設時または昭和29年の近鉄劇場建設時の整地層の可能性ある。

第3層：調査区の中ではSX20を設置する際の整地土と考えられる近代の人為的な搬入土層である。暗黄褐色の砂・礫混り粘土質シルト層で、最大層厚は30cmである。次項でも述べるが、SX20は漆喰を箱形に成型したもので、水溜の可能性ある。このSX20は上部を第2層によって大きく削り取られており、本層も大半が失われていると考えられる。同様の地層は西壁南部に見られ、本層の名残と考えられる。

第4層：にぶい黄橙色の礫質砂層で、大量の地山砂層の偽礫と巨礫・粘土が混る。層厚は35～95cm

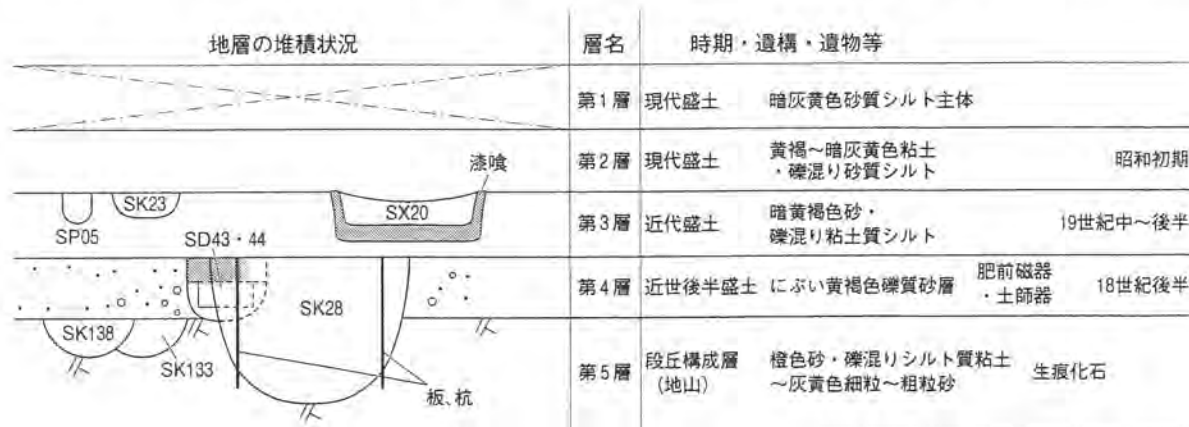


図4 地層と遺構の関係

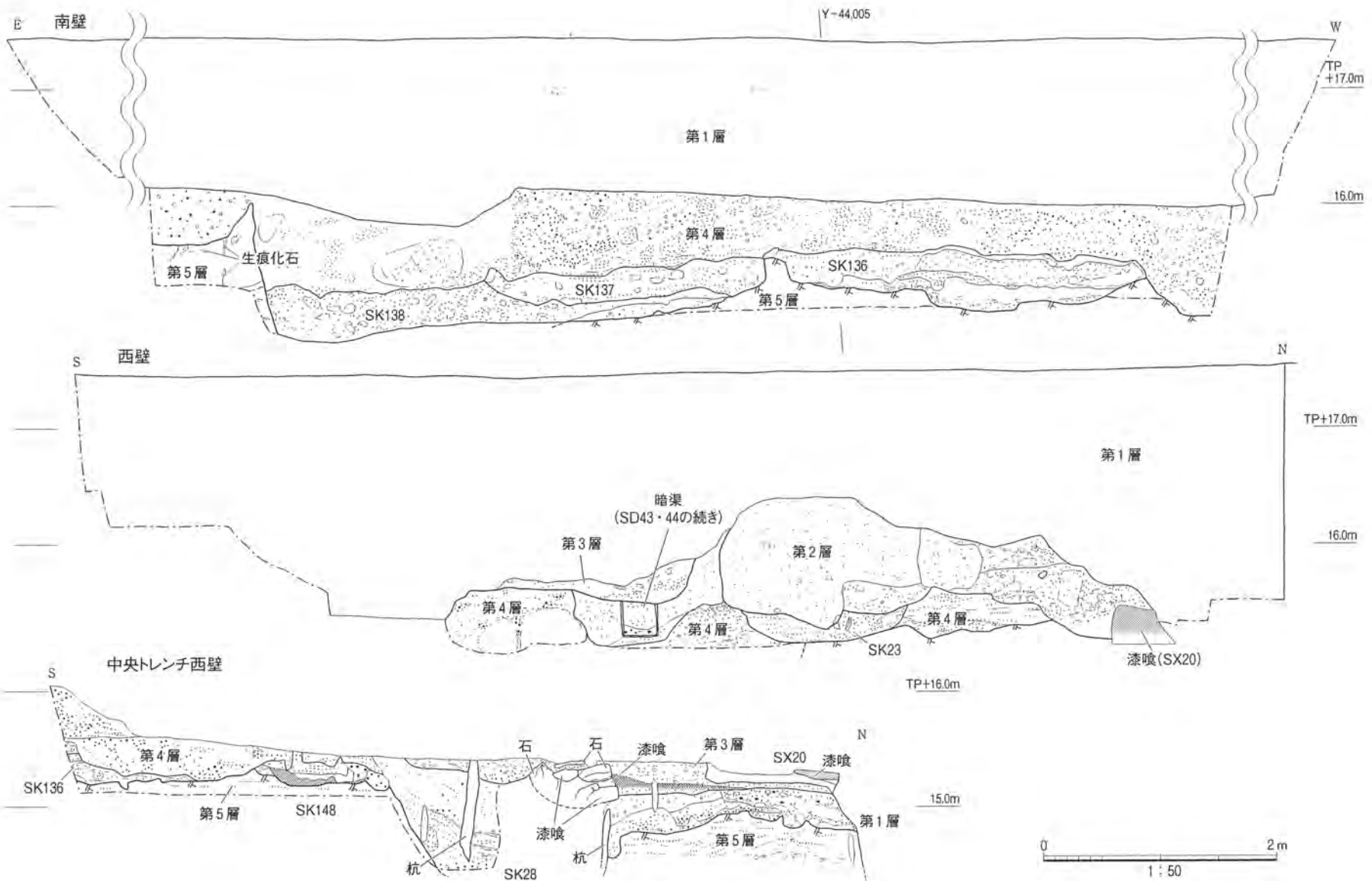


図5 断面実測図

あり、調査区南部のほうがやや厚い。近世後半の整地層である。本層上面で貯水施設SK28と木製暗渠と柵を埋置した導水施設SD43・44を検出した。

第5層：上部の橙色砂・礫混りシルト質粘土から下向かって、漸次、灰黄色の細粒～粗粒砂へと、粒径が大きくなっていく。本層からの出土遺物はなく、段丘構成層(いわゆる地山)と考えられる。層厚は180cm以上で、下限は未確認である。本層中には甲殻類の巣穴の生痕化石が多く観察された。生痕化石はチューブ状をしていて、大きいもので直径約4cm、長さ約15cmある。生痕化石が見られたこと、および周辺の調査の地層との比較から、本層は約12万年前に大阪湾内で堆積したMa12と呼ばれる海成層に比定され、上町台地の相対的な隆起によってこのように高い位置で検出されたものと考えられている[大阪市文化財協会2008b]。

ii) 遺構と遺物

a. 第5層上面の遺構と遺物(図6・9)

第5層上面で土採り穴とみられる土壌が多数見つかった。いくつもの土採り穴が重なっているため、また、これらの土壌の上を第4層で整地しているため、どの土壌も上端が大きく失われており、もと

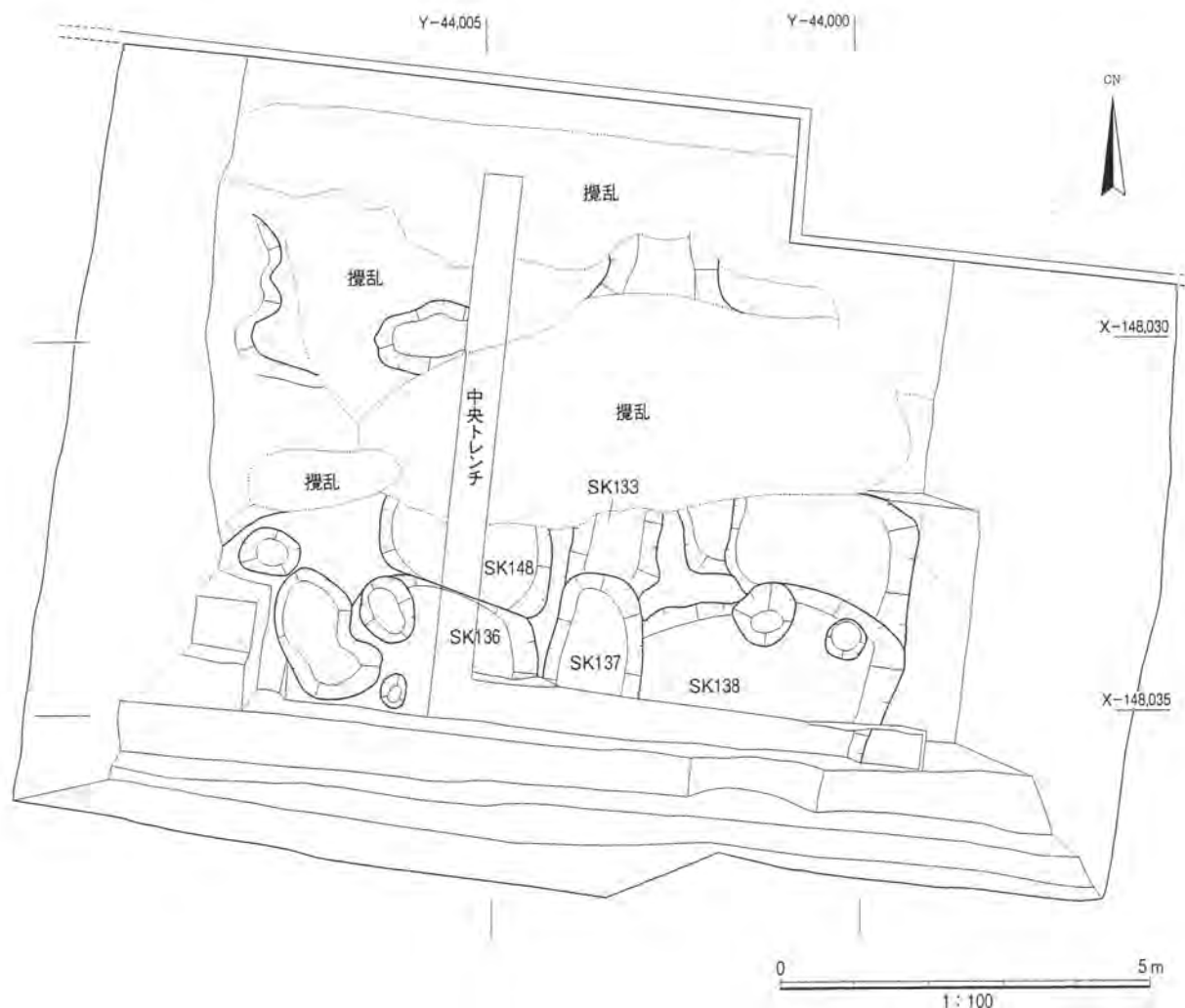
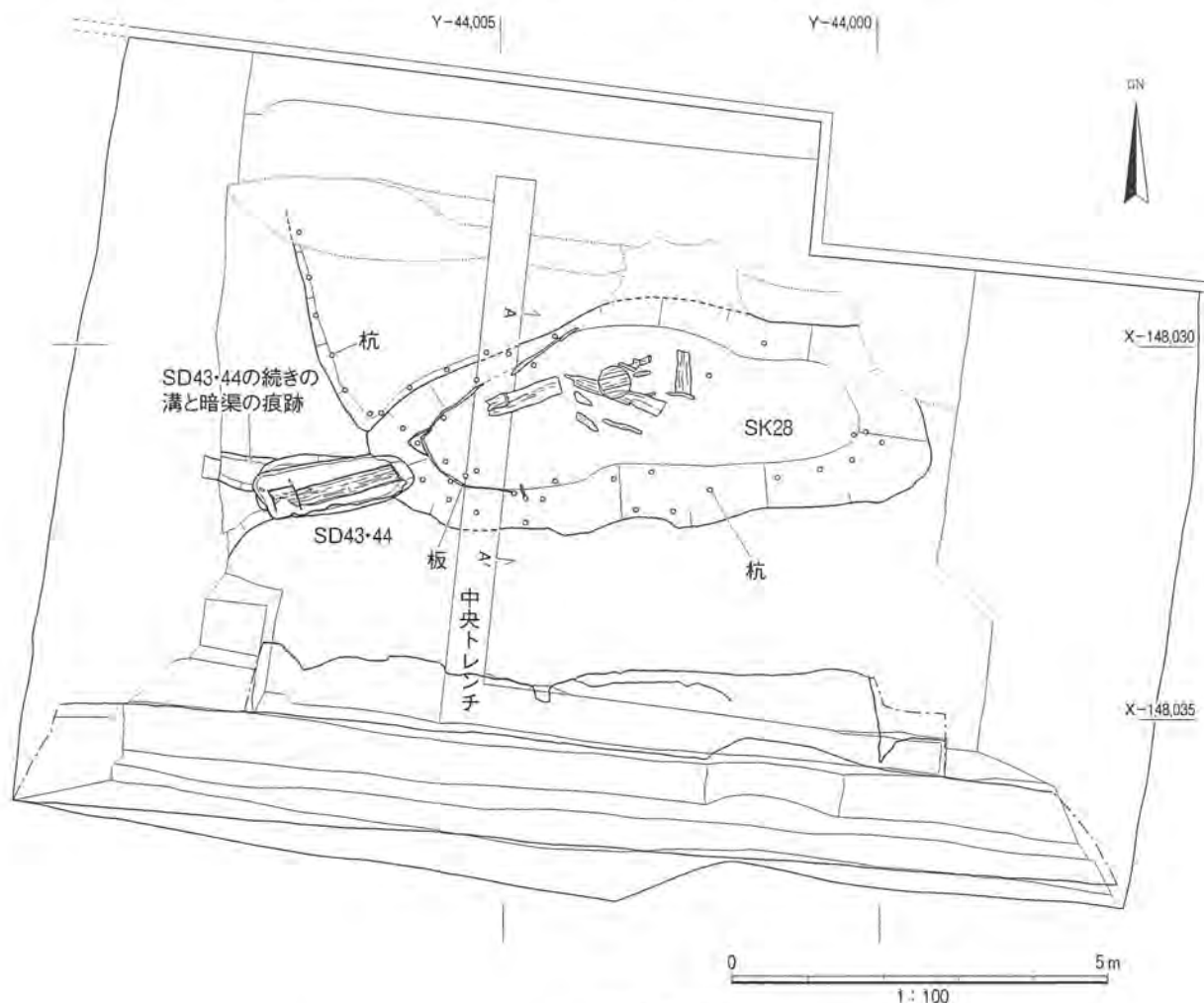


図6 第5層上面遺構配置図

の形状は復元できない。現状の規模で、東西0.8~3.5m、南北は少なくとも1.3m以上と、ばらつきがあり、いずれも不成形な土壌である。深さは0.3~1.2mである。どの土壌も基本的には淡黄灰色~灰白色の粘土混り礫質砂層で埋っており、第5層の地山砂層の偽礫を多く含む。これらの土壌には、遺物はほとんど含まれておらず、わずかにSK148から肥前磁器の破片、SK133から肥前磁器の碗・蓋(図9の12)・青磁染付の破片が出土した。これらは18世紀後半頃のものである。



SK28断面図

- 〈SK28 廃絶後の覆土〉
- 1: 黒褐色(10YR3/1)粗粒砂・シルト質粘土
 - 2: 褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土~粘土質シルト(木質多い)
 - 3: 灰オリーブ色(5Y6/2)細粒砂
 - 4: 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土
 - 5: 灰色(7.5Y6/1)粘土質シルト~細粒砂
 - 6: 灰色(5Y4/1)細粒砂混りシルト質粘土
 - 7: オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂混りシルト質粘土(木質多い)
 - 8: オリーブ黒色または灰色(5Y3.5/1)細粒砂混りシルト質粘土(木質多い)
 - 9: 灰色(5Y4/1)粘土(木質多い)
 - 10: オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土
 - 11: オリーブ黒色(5Y3/1)粘土(木質多い)
 - 12: オリーブ黒色または灰色(5Y3.5/1)細粒砂混りシルト質粘土
 - 13: オリーブ黒色(5Y3/1)粘土(木質多い)
 - 14: 灰黄色(2.5Y6/2)細粒~粗粒砂
- 〈SK28 機能時の堆積〉
- 15: 灰黄色(2.5Y6/2)シルト~粗粒砂
 - 16: 灰色(5Y4.5/1)砂混りシルト質粘土
 - 17: オリーブ黒色または灰色(7.5Y3.5/1)シルト質粘土
 - 18: 褐色(7.5Y4/6)シルト質粘土(鉄分多い)
- 〈SK28 構築時の地層〉
- 19: 灰黄色(2.5Y6/2)粘土混りシルト質砂
 - 20: オリーブ色(7.5Y5/2)粘土質砂(細粒~中粒砂)
- 〈段丘構成層(地山)〉
- 21: 浅黄色(2.5Y2/3)細粒砂質シルト
 - 22: にぶい黄橙色(10YR6/3)細粒~粗粒砂

図7 第4層上面遺構配置図・SK28断面図

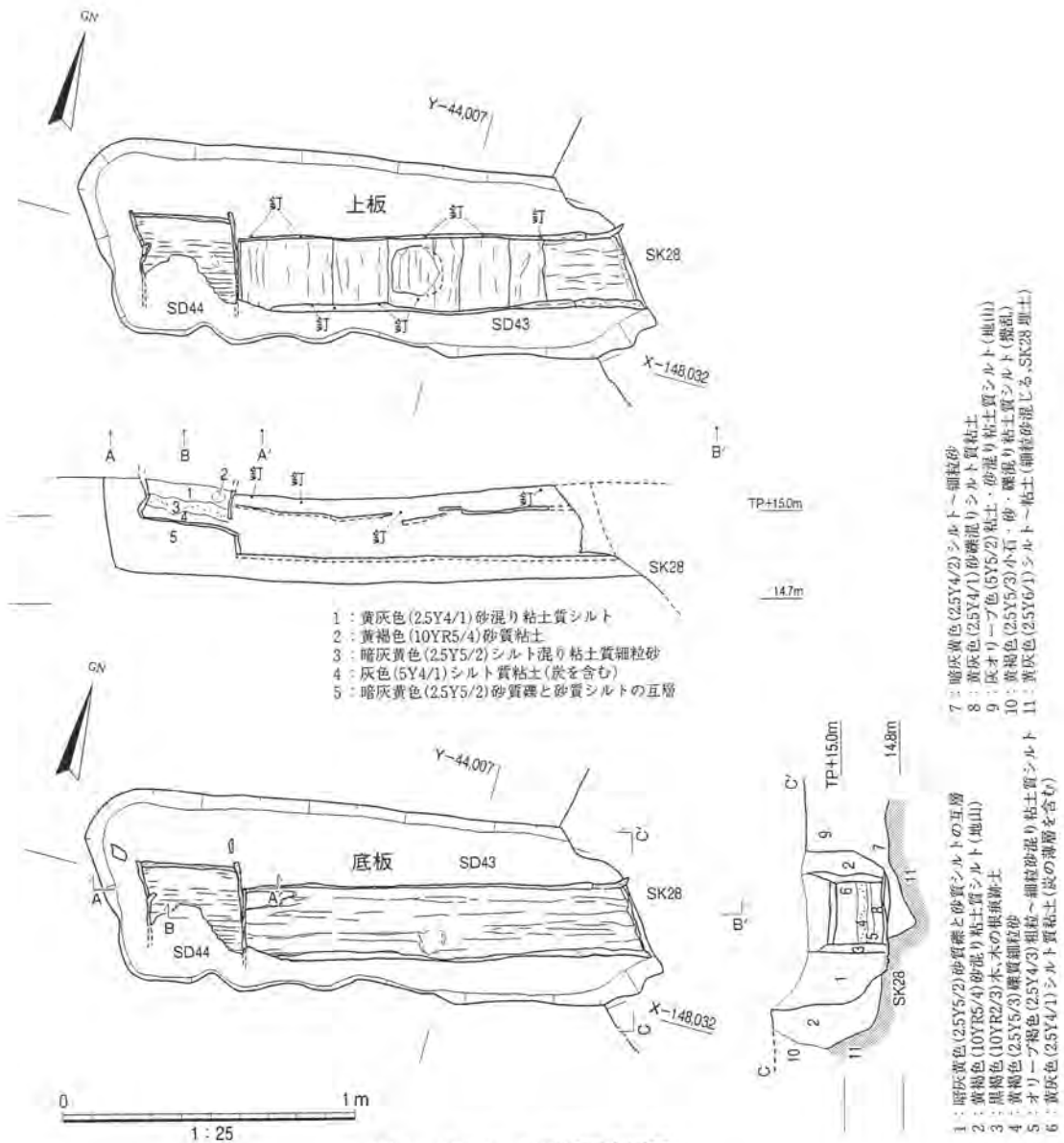


図8 SD43・44断面実測図

b. 第4層上面の遺構と遺物(図7～9、図版2)

貯水施設SK28は、東西約7.3m、南北約3.0mの平面楕円形の土塙の側面に杭を打って板の枠を設置し(図版2中段左)たもので、板枠と土塙の間には粘土質の砂やシルト質の砂を充填していた。検出面からの深さは0.8mある。西端に後述の導水施設SD43・44が設置され、ここから水を引き入れていたものと考えられる。また、杭はSK28の北西外側に弧状に続いており、この弧状の杭列から東側が浅く皿状に掘窪められている。このことから、さらに別の施設が付属していた可能性がある。

SK28の板枠の内部は、機能時の堆積層と廃絶後の覆土が見られた。このうち、機能時の堆積層は下が砂混りシルト質粘土、上が粗粒砂～シルトで、長時間内部に水が溜まっていて、上の粗粒砂～シルトが溜まる前には板枠の内部に溜まった堆積層を浚えていたことがわかる(図7、SK28断面の13)。砂混りシルト質粘土層から16世紀末～17世紀初頭の瀬戸美濃焼志野向付1と18世紀後半の関西系陶器土瓶11が出土し、粗粒砂～シルト層から19世紀前半～中頃の肥前磁器が出土した。このうち小碗2と

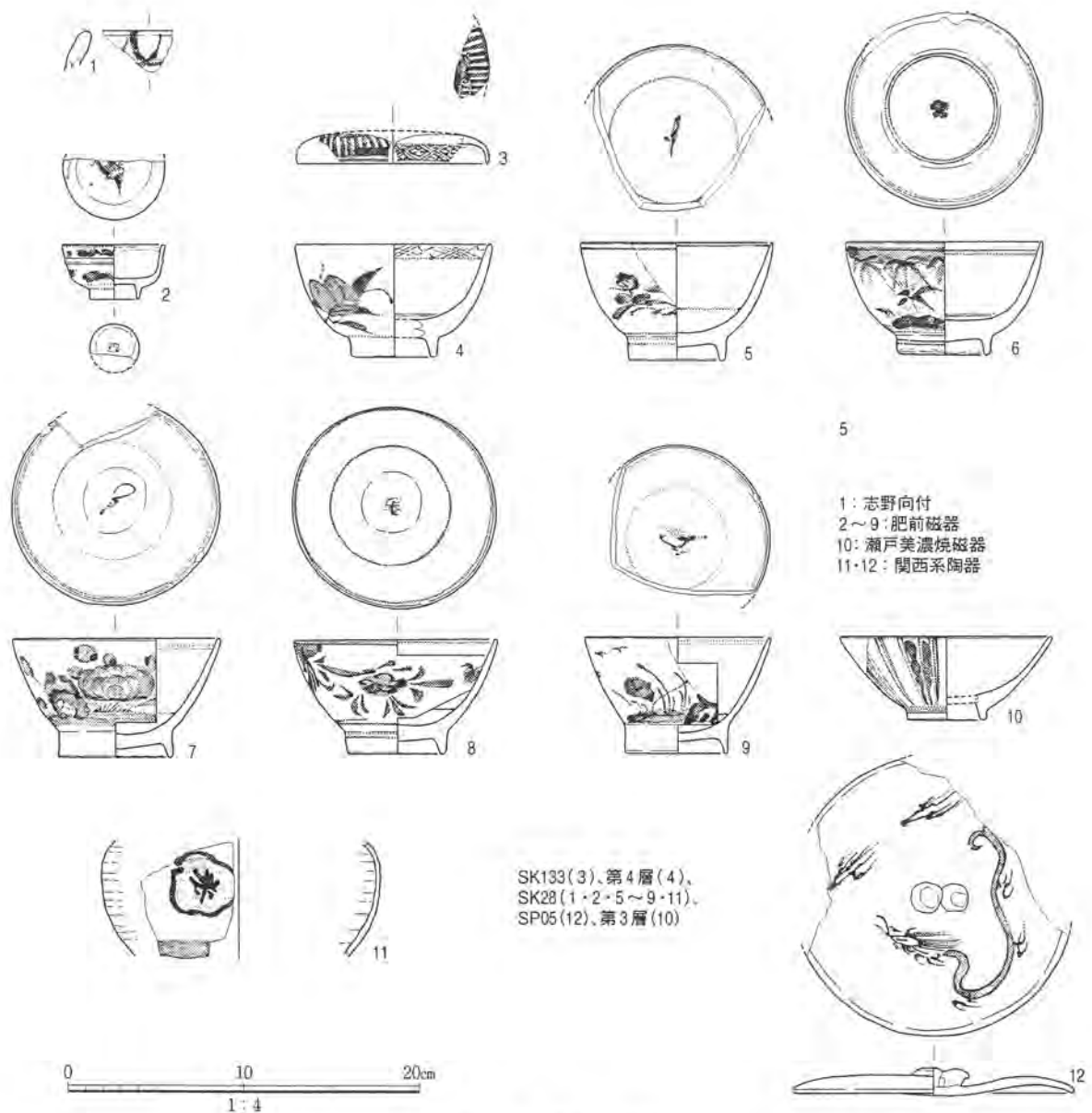


図9 出土遺物実測図

碗5を図9に示した。

また、機能時の堆積層を覆う廃絶後の堆積層はシルト質粘土～粘土質シルト層で、ここから板や桶などの木製品(図版2中段右)や陶磁器が多く出土した。また、木製品の中には腐敗して原形をとどめないものもあり、こういったものは、木質の多い粘土の薄層として観察された。この薄層の中にはSK28の蓋板だったものも含まれると考えられる。廃絶後の堆積層から出土した遺物のうち、この堆積層の時期をもっともよく示す肥前磁器の碗6と広東碗7～9を図示した。広東碗は18世紀後半から19世紀中頃に流行するが、出土した広東碗は高台内部がややハの字に開くなどの特徴から19世紀中頃、幕末頃のものと考えられる。また瀬戸美濃焼の磁器も19世紀に入ってから大坂で流通するもので、10は幕末頃の特徴をもつ。

これらの遺物からみて、SK28は18世紀後半に設置され、19世紀中頃には廃絶したものと考えられる。

SK28の東に接する導水施設SD43・44は、SK28に付設するとみられるもので、幅約0.6m、長さ約

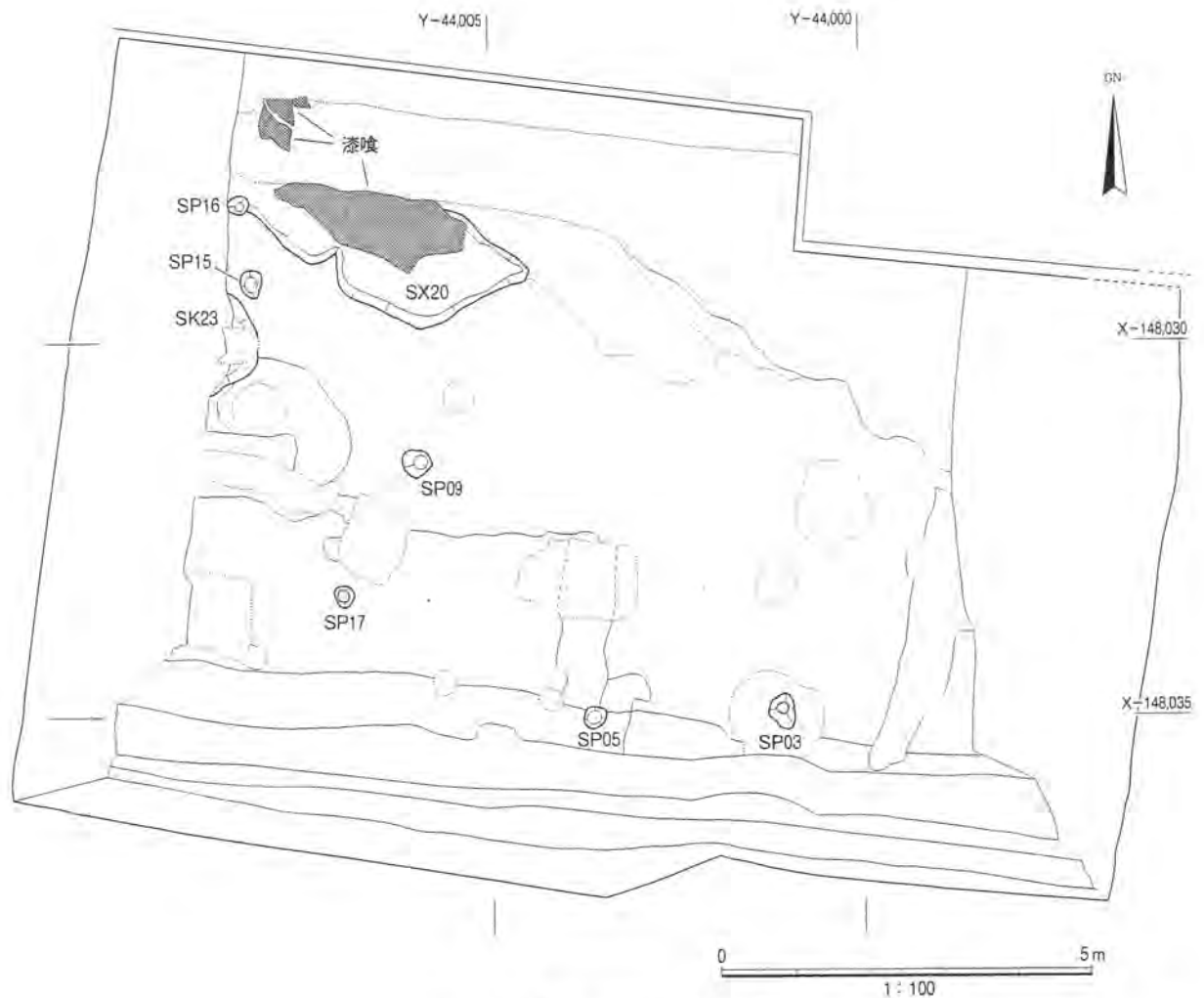


図10 第3層上面検出の遺構配置図

2.0m、深さ約0.7mの土壌を掘って木製の暗渠SD43と枡SD44を設置し、土壌との間に暗灰黄色の砂質礫と砂質シルトで埋めていた。ここから近世の軟質施釉陶器とともに古代の土師器の破片が出土した。

SD43・44とも厚さ3cmほどの柵目板を使用した箱形で、内部は空洞であるが、水が流れたことを示す砂やシルト・粘土の堆積が見られた。

SD43の木製暗渠は、幅が22cm（内径）、長さはSK28との接合部が失われているため、現状で140cmである。上部は短い柵目板で蓋をし、鉄釘で留めている。側板の上部はすでに腐植し、蓋も内部に落込んでいるが、側板に打込まれた釘の高さなどから、暗渠内部の深さはおよそ25cmあったと考えられる。

SD44の木製枡は内径で東西32cm、南北30cm以上、深さ15cm以上の箱形で、上部、および側板と底板の南端はすでに失われていた。SD43との接合部は下から4cmほどの隙間を設けている。

SD43・44と同様の構造をもつ木製暗渠の痕跡は、西壁断面でも観察された。西壁の暗渠の痕跡は底板の高さがSD43・44より50cm高い。また、SD43・44の西端には間を繋ぐ掘込みの痕跡も見られた。したがって、水源は本調査地よりも西側の高い位置にある（おそらく井戸）ものと推定される。

第4層上面では上記の貯水施設と導水施設のほかには遺構は検出されなかったため、これらが屋敷

内に構築されたものであるなら、かなり大きな屋敷であったことが想定できる。そうでないなら、集落の中の共同水利施設と考えられる。いずれにせよ、重要な施設であったことは間違いない。

c. 第3層上面検出の遺構と遺物(図9・10)

第3層上面は本調査における最初の調査面である。ここで見つかった遺構は第2層によって上部を大きく削られているため、もとの形状や性格がよくわからないものが多い。このため第3層上面だけでなく、第2層以上に係わる遺構も含まれている可能性がある。おもなものを以下に記す。

SX20は東西4.2m以上、南北1.5m以上の土壙を掘り、箱形に成形した漆喰を設置した貯水施設とみられる遺構で、漆喰の厚さは0.10mである。土壙部分は深さ0.15mほどが残存しており、漆喰との間に灰黄褐色炭混りシルト質粘土を充填していた。SX20に伴う遺物は出土していないが、SX20を覆う第2層から近世末から昭和初期にかけての遺物が出土した。近代の遺構と考えられる。

SK23は東西0.6m以上、南北1.4m、深さ0.25mの土壙で、埋土は暗灰黄色粘土・礫混りシルト質細粒砂である。出土遺物はないが、断面を見る限り、SX23の直上を第2層が覆っているのでSX20と同じ頃の遺構と考えられる。

SP03・05・09・15～17は直径が0.3～0.4mの小穴で、深さは0.07～0.20mである。埋土は灰黄褐色粘土混り砂質シルトである。このうちSP03・09・17は柱穴で、直径が約0.2mの暗灰褐色砂質シルトで埋まる柱痕跡がある。遺物は近世後半から近代の遺物が出土し、図9にSP05から出土した関西系陶器土瓶の蓋12を図示した。近代のものであろう。

d. 各層の出土遺物

第4層からは肥前磁器と土師器の破片が出土した。図9の肥前磁器碗4は18世紀後半のもので、第4層の時期を示す。

第3層から瀬戸美濃焼の染付磁器碗10が出土した。19世紀半ば頃のもので、第3層の時期の上限を示す。

3) 遺構と遺物の検討

朱雀大路を境に左京(東側)が細工谷遺跡、右京(西側)が本調査地を含む上本町遺跡が位置しているが、朱雀大路は本調査地の南東約400mのSD08-4・5次調査地あたりを南北に通ると推定されている。図11のように、明治19年の地形図には調査地付近の谷の描写があり、これを見ると、朱雀大路のすぐ東側にある細工谷遺跡付近は谷がいくつも入組んだ起伏のある地形であるのに対し、朱雀大路から西側は約1km離れた下寺遺跡あたりに海蝕崖の名残があって、ここで急激に低くなるが、この間にある上本町遺跡周辺は現地表の起伏が比較的緩やかであったことがわかる。細工谷遺跡では谷を埋立てて建物用地を確保しているのに比べると、本調査地側がもともと居住に適した場所であったことは容易に推測できる。

さらに、SD08-4・5次調査では、地山層の中に生痕化石が顕著に観察され、これが約12万年前に海の中で堆積した地層(Ma12)に比定されている。この地層の上部と本調査地の生痕化石が見られ

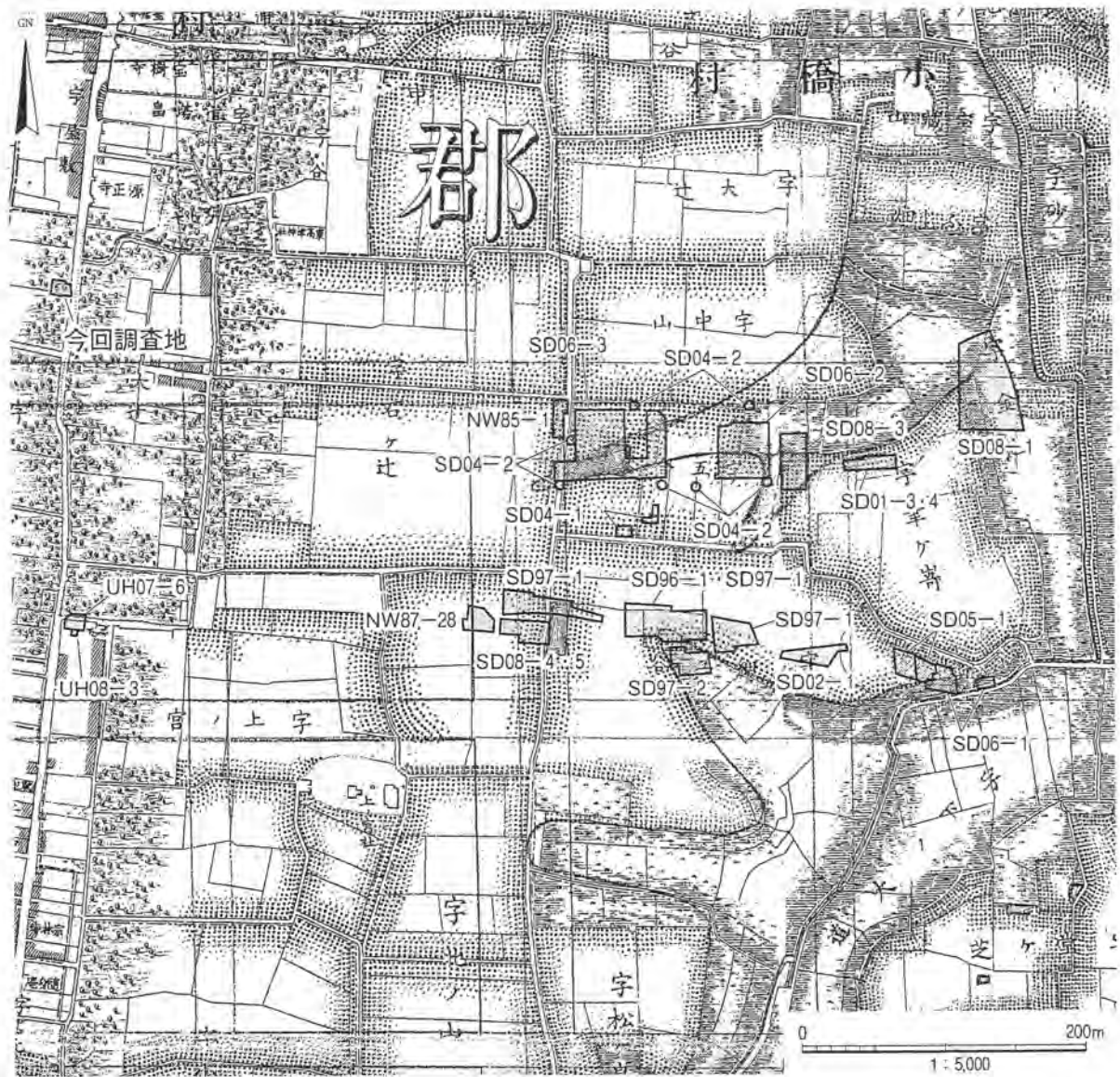


図11 周辺の地形と調査地の位置

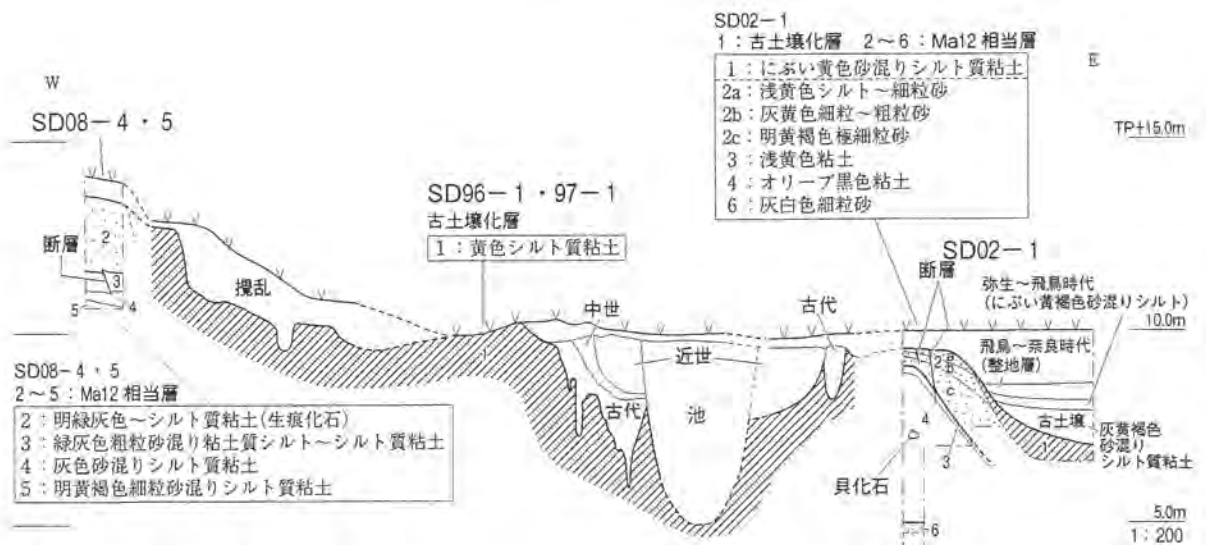


図12 段丘構成層のつながり([大阪市文化財協会2008b]より)

た地山層(第5層)はよく似ていて、同じMa12の可能性が高い。そうであるなら、現在、この地層はSD08-4・5次調査では海水面より16mも上、本調査地においても16m上にあることになる。この現象は地殻変動による相対的な隆起現象の結果で、最終間氷期から最終氷期にかけての上町台地が形成された時の状況を示すものであると考えられる。

ところで、SD08-4・5次調査から東方向に地山のようにその起伏を調べてみると、図12のようになる。SD08-4・5次調査とSD02-1次調査では本調査の第5層に相当するMa12が見つまっている。しかし、間に位置し、SD08-4・5次調査地より4mほど標高が低いSD96-1・97-1次調査ではMa12は確認されておらず、黄色シルト質粘土層が地山層となっていて、この上で古代の遺構・遺物が見つまっている。このシルト質粘土層はSD02-1次でMa12の上に堆積しているもので、Ma12の上端が風化・土壌化したものと考えられる。この地層が周辺の調査では地山として残っていて、古代の遺構・遺物が見つまっているのはほとんどがこの地層の上面である。Ma12が見つまっている地点は相対的に現地表が高い。本来はMa12の上部に古土壌があり、この失われた地層の上に古代の遺構があったのではないかと考えられる。

今回検出した遺構はすべて近世のもので、直近で地山層が大きく削られたのが18世紀後半であることがわかった。残念ながら古代に遡る遺構は見つからなかったが、近世の遺構や整地層の中に土師器などの古代の遺物が混入することは注目に値する。

これらのことを考えあわせると、本調査地は標高が高いがゆえに幾度となく削られて、多くの遺構や遺物が失われてしまったものと考えられ、古代の遺構が本調査地やその周辺に存在した可能性は、かなり高いものと推測される。

〈まとめ〉

今回の調査では、江戸時代後半から明治時代までの遺構や遺物を検出し、この間の土地利用の手がかりを得た。また、これらの遺構や地層の中に古代の難波京の時代の遺物が含まれることから、周辺に難波京にかかわる遺構の存在を推定することができた。

今後の調査成果とあわせてさらなる検討を加えてゆきたい。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2006、『昭和住宅株式会社による建設工事に伴う上本町南遺跡発掘調査(US06-1)報告書』

2007a、『平成17年・18年度都市計画道路難波片江線の整備に伴う細工谷遺跡発掘調査(SD05-1・06-1)完了報告書』

2007b、『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅱ

2007c、『上本町遺跡発掘調査(UH07-1)報告書』

2007d、『カナセ興産株式会社による建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH07-2)報告書』

2008a、『上本町遺跡発掘調査(UH08-3)報告書』

2008b、『細工谷遺跡発掘調査(SD08-5)報告書』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005a、『上本町南遺跡(US04-1次)発掘調査報告書』：『大阪市内埋蔵文化

財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.191-201
2005b、「上本町南遺跡(US04-2次)発掘調査報告書」：『大阪市内埋蔵文化
財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.203-210

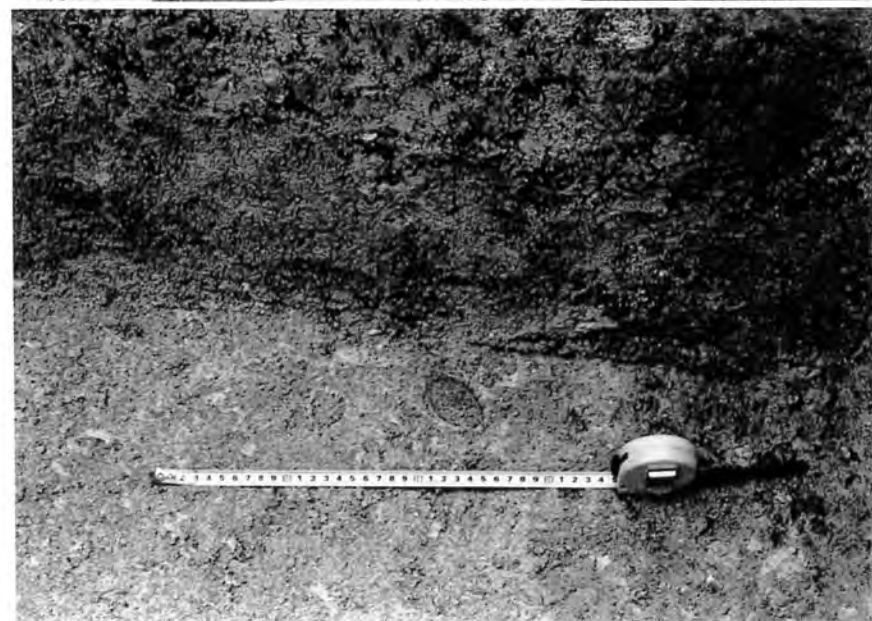
調査地全景
(東から)



南壁東端の断面
(北から)



地山上面の生痕化石
(南壁際、北から)



木製暗渠SD43の断面
(SK28内部から、東から、
西壁際に同じ暗渠の痕跡
が見える)



木製暗渠SD43と枡SD44
(南西から、右上はSK28)



SK28検出状況(部分)
左：木枠(南から)
右：木製品(北東から)



天王寺区城南寺町における建設工事に伴う
上本町遺跡発掘調査(UH08-7)報告書

調査個所 大阪市天王寺区城南寺町6-5・6-6・6-7・6-11
調査面積 80 m²
調査期間 平成20年10月2日～10月9日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄

1) 調査に至る経緯と経過(図1・2)

調査地は、前期難波宮朱雀門跡から南へ約650m、推定朱雀大路跡の中心線から西へ約70mの位置にある。また、調査地北西のOS93-3次調査[大阪市文化財協会2002a]での発見などを基に、積山洋によって復元された豊臣氏大坂城南面の惣構堀から南へ約100mになる[積山洋2000]。調査地周辺は起伏に富み、敷地内では西南西が高く、東北東隅との比高が約1.9mある。

この地域は難波宮跡周囲では必ずしも調査が多くなく、もっとも近接するのは約150m北のOS96-16次調査地である。ここでは清水谷へ繋がる支谷が見つかり、これを整地して建てられた前期難波宮期の掘立柱建物があった[大阪市文化財協会2002b]。谷は豊臣前期に完全に埋められており、埋土中に捨てられた天正13(1585)年銘の五輪塔から近くに墓地や寺があった可能性が推測されている。上町筋沿いの調査では、西約150mの大念寺において難波京との関連が考えられる直角に曲がる奈良時代の溝が見つかっており[大阪市文化財協会1981]、古代の正南北の溝はその南の専念寺でのUH92-2次調査や[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1993]、最近はさらに南約100mのUH08-8次調査で検出されている[大阪市文化財協会2009]。

大阪市教育委員会の試掘調査では7世紀の遺物包含層が確認され、これを受けて10月2日より本調査に着手した。東区(南北25m・東西5m)と西区(南北13m・東西5m)に区分して重機掘削を開始したが、基礎解体時の攪乱によって試掘の予測より遺跡は広く壊されていた。遺構や包含層を完掘し、東区北端で一部、完新統の地層を調査した後、すべての記録を終え10月9日に調査は終了し、事業者が地盤改良をして埋戻した。図2・4で使用した北方位は磁北、他は座標北、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±〇mと記した。

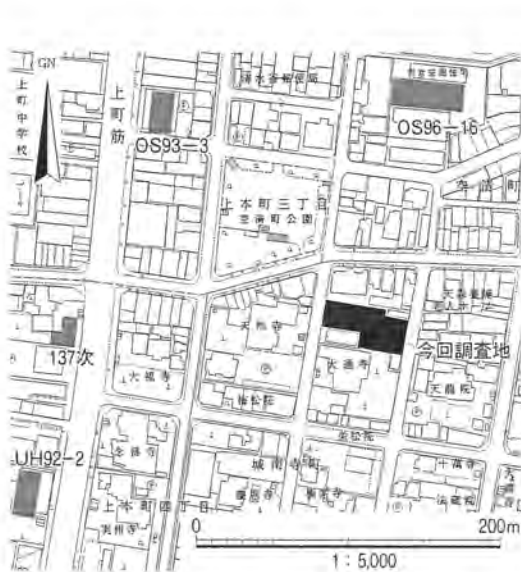


図1 調査地位置図

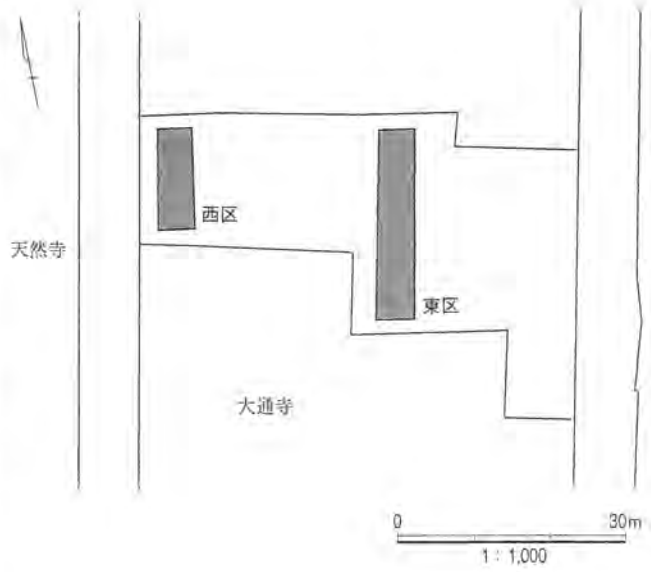


図2 調査区位置図

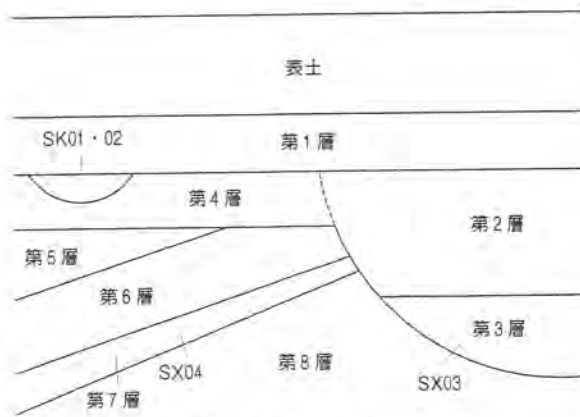


図3 地層と遺構の関係

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第1層：西区のみに残る19世紀以降の地層である。浅黄色(2.5Y7/4)シルト質粗粒砂層などで層厚は40cm以上である。

奈良時代以降、第1層に至る間の地層は、調査区内ではすべて攪乱されていた。

第2層：東区SX03の埋土上層である。黄灰色(2.5Y4/1)礫混り細粒砂質シルト層で層厚は50

cmである。出土遺物からは第3層と時期差がみられない。

第3層：東区SX03の埋土下層である。黄褐色(2.5Y5/4)シルト質中粒砂層などで、層厚は55cm以下である。本層中には小さく複雑なラミナがあり、第8層を削り込む凹凸がある。本層は南西から北東への水流による堆積と考えられる。図5の6～10が出土し、最新の9から前期難波宮期の地層と推定した。

第4層：東区北端に分布する、灰黄褐色(2.5Y4/2)礫混り細粒砂質シルト層で、層厚は30cmである。作土の可能性がある。第4層と第2・3層は接点がほとんどなく、前後関係は出土遺物に拠った。図5の4の通り、確実に7世紀中頃まで下る遺物は出土していない。

第5層：第5～7層は東区北端で検出した小谷SX04の埋土である。第5層は灰黄褐色(10YR5/2)礫混り細粒砂質シルト層で、層厚は30cmである。5が出土した。

第6層：にぶい黄色(2.5Y6/4)礫混り細粒砂質シルト層で最大層厚は55cmである。第8層の偽礫を多く含む整地層である。

第7層：黒褐色(10YR3/1)礫混りシルト質細粒砂層で最大層厚は38cmである。第8層の偽礫を含み、下部には細粒砂質シルトの水成層がある。土師器1～3や古い須恵器片が出土しており、5世紀代の地層と推定される。

第8層：黄褐色(2.5Y5/4)礫混りシルト質細粒砂層で層厚は125cm以上である。更新統(上町層)の地層で遺物は出土していない。北に傾斜するラミナが見える。上面から約1mより堅く締まった地層となる。

ii) 遺構と遺物(図4・5)

a. 古代以前の遺構と遺物

東区北端のSX04は、今は埋もれている谷の一部に当ると考えられる。第4層をSX04の埋土最上層とすると、東壁約6m間で約1.5m低くなる傾斜で、北端でTP+13.6mとなる。

SX04は西区には拡がっていない。また、調査区敷地と南の大通寺の間に段差があり、大通寺前面の道路でTP+18.0mと高いことから、大通寺敷地までは谷は延びていないと推定される。周辺の地形から考えると、SX04は南西から北東へ延びる小谷で、発掘したのは谷頭に近い南東の縁と推定される。SX04下の第8層の調査において、南西-北東方向の3段の階段状の地層のズレがあった(中段写真参



图4 东区遺構平面図・東壁断面図、西区遺構平面図・西壁断面図

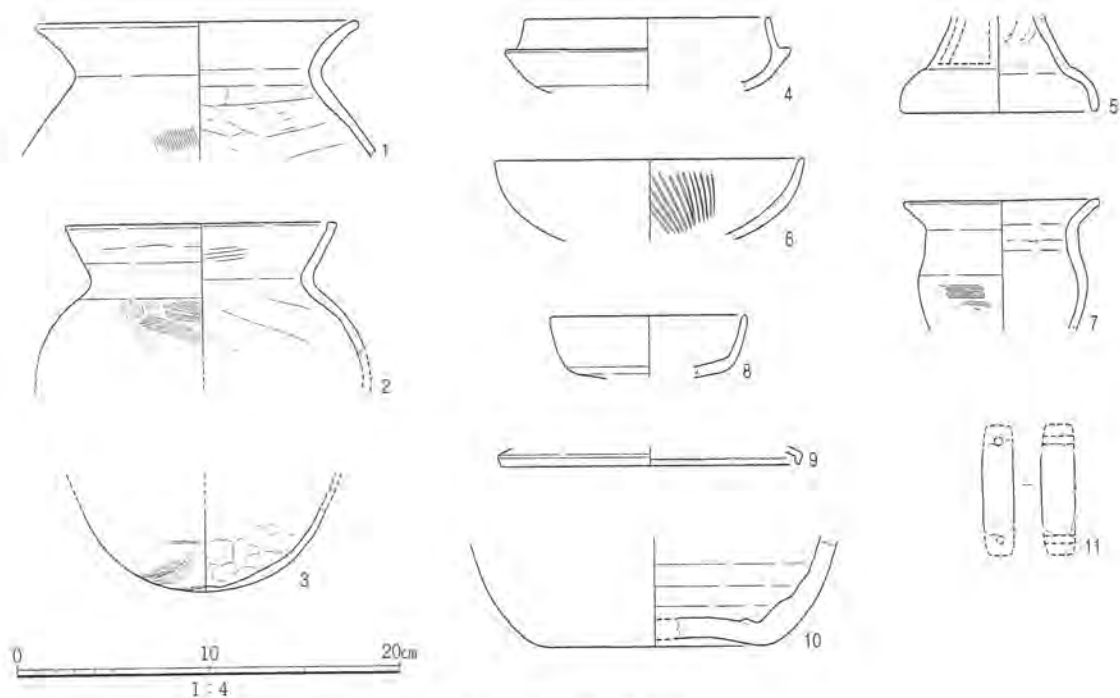


図5 出土遺物実測図
第7層(1~3)、第5層(5)、第4層(4)、第3層(6~10)、他(11)

照)。何らかの理由でSX04の縁辺が崩れたもので、SX04の方向の手懸りになると思われる。SX04の北東方向には清水谷があり、SX04は清水谷の支谷の1つと推定される(図6)。

SX04が埋まった後にSX03がある。SX03は深いところで約1.1mある。平面形はよくわからないが、堆積状況などから、SX04がある程度、埋まった後に谷の縁を流れた水流により削られた痕跡ではないかと考えられる。

SX04の最下層である第7層からは、図5の土師器甕1~3が出土した。2・3は布留式甕の新しいもので、良く似ているが大きさが合わない。体部外面の調整はハケ、内面下部はユビオサエ、上部はヘラケズリである。SX04の上層である第5層からは、須恵器の有蓋高杯脚部5が出土した。また第4層からは6世紀の須恵器蓋杯4が出土した。SX03の下層である第3層からは土師器杯C6、同小型甕7、須恵器杯G8、同杯B蓋9が出土した。これらは難波Ⅲ中段階~Ⅳ古段階に当る[佐藤隆2000]。第3層出土の10は平底の壺の底部で、底が擦れている。外面の調整はナデ、内面はヨコナデである。11の棒状土錘は攪乱からの出土である。

出土遺物からはSX04は5世紀に埋まり始め、6世紀代にはほとんど埋まっており、周辺の谷が大規模かつ広範囲に埋められた、前期難波宮造営時まで下ることはないと推定される。ただし、調査区には谷の縁辺部が含まれるだけで、谷全体が埋められた時期は今回の調査だけではわからない。SX03は、前期難波宮が存在した7世紀後半の遺構である。

b. 近世の遺構

西区第1層基底面検出のSK01は深さ0.30m、SK02は深さ0.15mで、平面形態は不明である。19世紀代の遺構である。

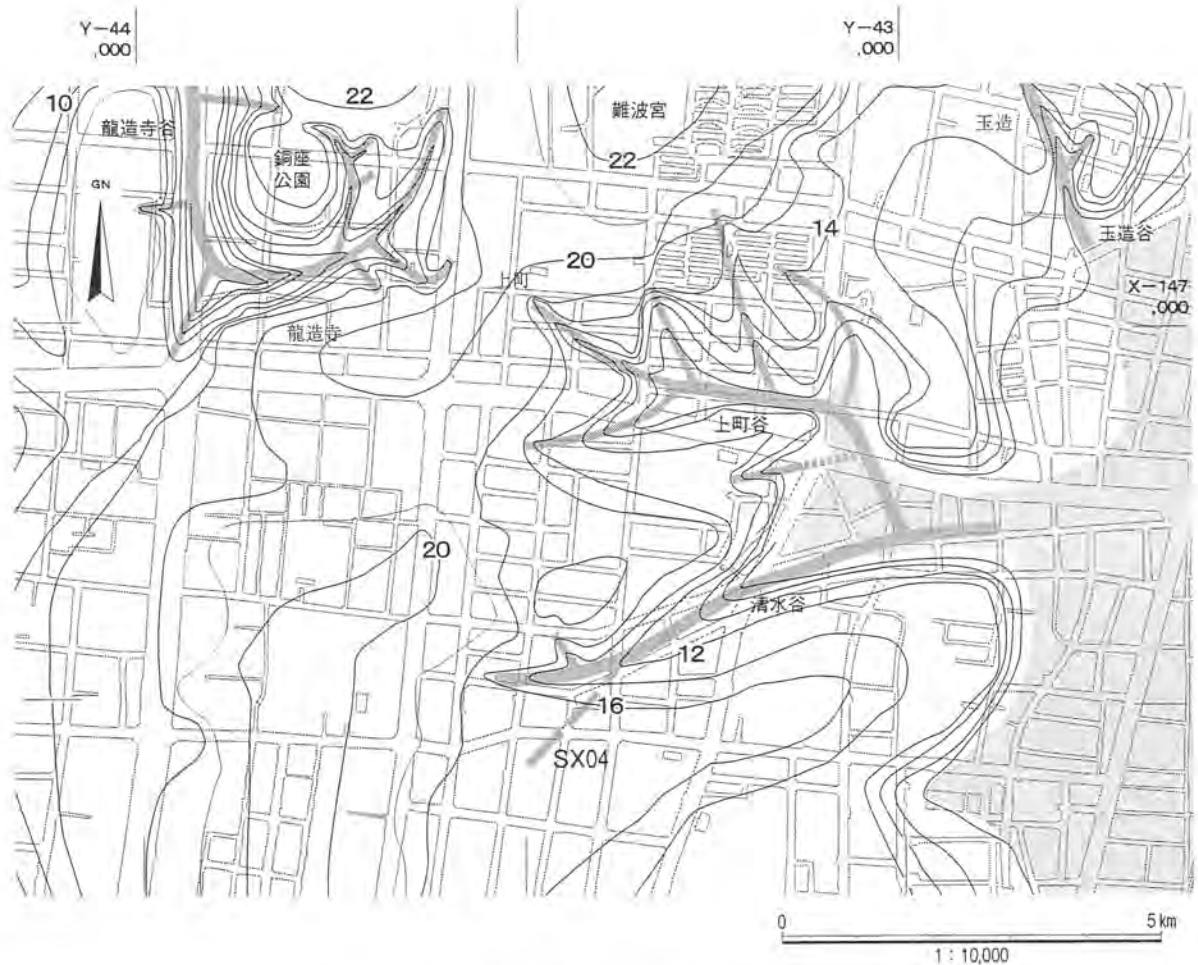


図6 SX04と難波宮跡周辺の旧地形復元(寺井誠2007より)

3)まとめ

今回の調査成果は、清水谷へ繋がる支谷の発見である。調査地周辺は、難波宮跡や大坂城跡の外になることからこれまで必ずしも本調査が多くなかった。しかし、難波宮南面で推定朱雀大路跡の西至近にあることから、難波宮・京の建設と整備において重視された場所と考えられる。周囲の起伏から他にも未発見の谷が埋まっていることは十分に予測され、また、上町筋沿いの正南北の遺構群との関係でも発掘調査による多くの成果が期待できる地域である。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1993、『平成4年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市文化財協会1981、『難波宮跡研究調査年報 1975～1979.6』

2002a、『大坂城跡』VI

2002b、『大坂城跡』V

2009、『天王寺区上本町四丁目における上本町遺跡発掘調査(UH08-8)報告書』

佐藤隆2000、『古代難波地域の土器様相とその史的背景』、『難波宮址の研究』第十一、pp.253-265

積山洋2000、『豊臣氏大坂城惣構南面堀の復原』、『大坂城と城下町』、pp.43-59

寺井誠2007、『孝徳朝難波遷都に伴う古墳の破壊』、『大阪歴史博物館研究紀要』第6号、pp.49-62

東区全景
(南より)



SX03・04
(北西より)



西区全景
(南より)



天王寺区上本町四丁目における
上本町遺跡発掘調査(UH08-8)報告書

調査個所 大阪市天王寺区上本町四丁目2
調査面積 55m²
調査期間 平成20年10月20日～10月23日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、岡村勝行

1) 調査に至る経緯と経過

上本町遺跡は上町台地上に位置し、難波宮跡および大坂城跡の南、難波京朱雀大路跡の西に広がる弥生～江戸時代の複合遺跡である。調査地は遺跡中央を南北に走る上町筋に西接し、上町台地の東斜面に当たり、周辺道路の標高はTP+17.2m前後である。周辺の調査では、西100mに位置するUN05-1次調査、北100mに位置するUH92-2次調査で古代の溝や土壌などが発見され、当該期の居住域がこの地域に広がっていることが確認されている。

調査に先立ち2008年8月27日に行われた試掘調査で、現地表下0.9mに近世遺物を含む焼土層および落込みが確認された。このため、大阪市教育委員会と事業者との協議の結果、本調査を行うことになった。調査区は敷地東北部に鋼矢板で囲まれた東西9.0m、南北4.0mと、東西5.0m、南北3.0mの2つを設定した(図2)。それぞれ1区、2区と呼ぶ。10月20日に1区の近現代の地層を地表下約0.7mまで重機で掘削した後、以下を人力で掘り進め、随時、図面・写真による記録に努めた。その結果、当初地山層と考えられた黄褐色粘土質シルト層は盛土であることが判明し、その下に古代の地層、さらに地山層上面で古代の溝、自然の落ちが検出された。現地表下3.0m以下は、安全を考慮し、掘削せず、長さ1.0mの検土杖による地層の確認に留めた。2区は1区の調査成果を踏まえ、現地表下3.0mまでを重機によって掘削し、地山層上面の遺構検出に臨んだが、さきの落ちが1区よりもさらに深く、地山層に到達せず、調査を断念せざる得なかった。10月23日に埋戻し作業、資材撤収を含むすべての作業を終了した。

なお、本報告で示す水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP+○m」と記した。座標北ならびに座標値は、現地で作成した調査区平面図を、「大阪市道路現況平面図」(1:500)に重ね合わせ、設定したものである。

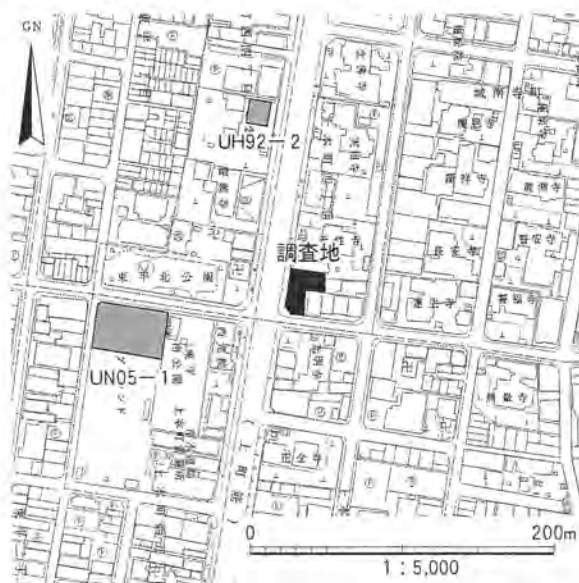


図1 調査地位置図

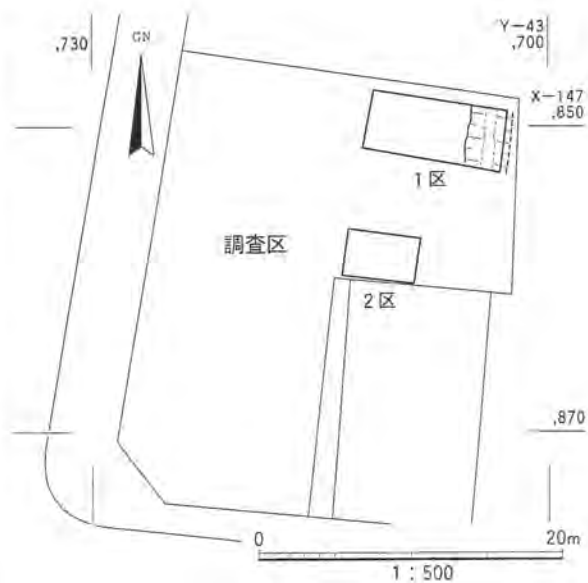


図2 調査区位置図

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

調査地の地形は現状ではほぼ平坦であるが、1区の段丘構成層上面の地形は、東北端で最も高く、西および南に傾斜していた。以下のとおり、現代盛土層以下、現地表下3.8mまでを第1～6層に区分した(図3)。

第1層：現代盛土層である。層厚は約80cmである。

第2層：黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト層で、地山層に由来する偽礫からなる盛土層である。大きく上下2度の盛土単位が認められる。層厚は約80cmである。遺物は検出できなかったが、上面で近現代の遺構が確認された。

第3層：a、bの2層に細分された。3a層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土質シルト層、3b層は暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルト層で、ともに作土層である。上面で畦畔跡約10cmの高まりが検出された。層厚はそれぞれ約35cm、約10cmである。遺物は確認できなかったが、土壌の特徴、周辺の調査成果から、近世以降の可能性はある。

第4層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)極粗粒砂質シルト層で、上部約20cmは鉄分・マンガンの沈着が顕著な作土層である。下位は層理面が明瞭でなく、淘汰が進んでおらず、あまり耕作されていない。層厚は調査区東端で約40cm、西端で約80cmである。本層からは一部奈良時代に入る可能性のあるものの、おもに飛鳥時代中から末頃に属する土器約50点が出土した。おおよそ奈良時代初めまでの地層と考えられる。

第5層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルト層で、整地層である。部分的に上部約5cmに粘土質シルトで整地している。層理面が明瞭であり、SD01機能時の地面であった可能性がある。検土杖による観察では、下位は極粗粒砂が主体となり、全体の層厚は約100cm以上である。本層からは遺物は確認できなかった。

第6層：にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土質シルト層であり、地山(段丘構成)層である。

ii) 遺構と遺物(図4・5)

調査区東端の地山層上面で、南北方向の溝SD01を検出した。東肩は調査区外にあるが、立ち上がりから復元すると、幅約2.5m、深さ約1.3mで、長さは4.0m以上である。断面はV字形を呈し、方向は真北である。埋土は最下部が極粗粒砂、中位以上は暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂～シルトを主体とする水成層からなる。取排水に関わる人工流路と考えられるが、再掘削の跡や休止面が認められないことや、偽礫を含まないことから、長期間機能していた状況は認め難い。埋土からは、土師器高杯1ほか、飛鳥時代中～末頃に位置づけられる、土師器の甕・杯・高杯、須恵器甕など約20点が出土した。この溝を覆う第4層からも同様の時期の遺物が出土しており、SD01はこの時期のものと考えられる。溝の方向を南北の正方向とするには、長さが不十分であるものの、その軸がおおよそその方向

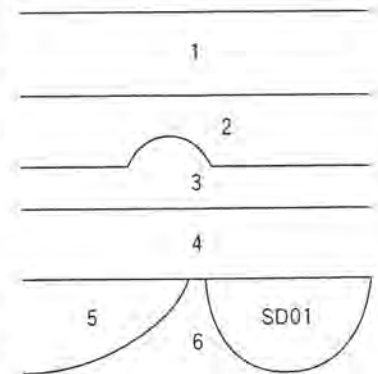


図3 地層と遺構の関係図

にあることは間違いない。ちなみに、難波宮朱雀大路跡の中軸から、溝の中軸までの距離は、約267mである。

地山層上面は、調査区北東端が最も高く、西および南に落ち込んでいる。水平方向7.0mに対し、垂直方向1.7mと約24%の急勾配であり、調査区東部から上町台地に切込む旧谷に連なる自然の落ちと考えられる。

SD01、第4層から計70点の古代の土器が出土したが、小さな破片が多く、図示できたのは次の5点のみである。1は土師器高杯の杯部である。下半はユビオサエが顕著であるが、上半は保存が悪く、調整は不明である。内面に放射状暗文がかすかに観察でき、口径は17.5cmに復元できる。SD01から出土した。2は土師器甕の口縁部で、端部を短く外反させる。内外面とも保存状態が悪いが、外面肩部にハケメが観察できる。口径は13.5cmに復元できる。3は土師器高杯の脚部である。4は須恵器杯G蓋である。口径は12.6cmである。以上は難波Ⅲ中～難波Ⅳ古段階で、7世紀中葉～末の年代が与えられる[大阪市文化財協会2000]。5はいわゆる薬壺の蓋である。かぶせ部を直角に垂下させ、端部を内傾させるタイプ

である。口径は12.0cm、高さ2.2cmである。難波地域では共伴例が少なく、詳細な時期の判定は難しいが、定型化の傾向が窺え、先述の年代よりも新しく、奈良時代に入る可能性がある。

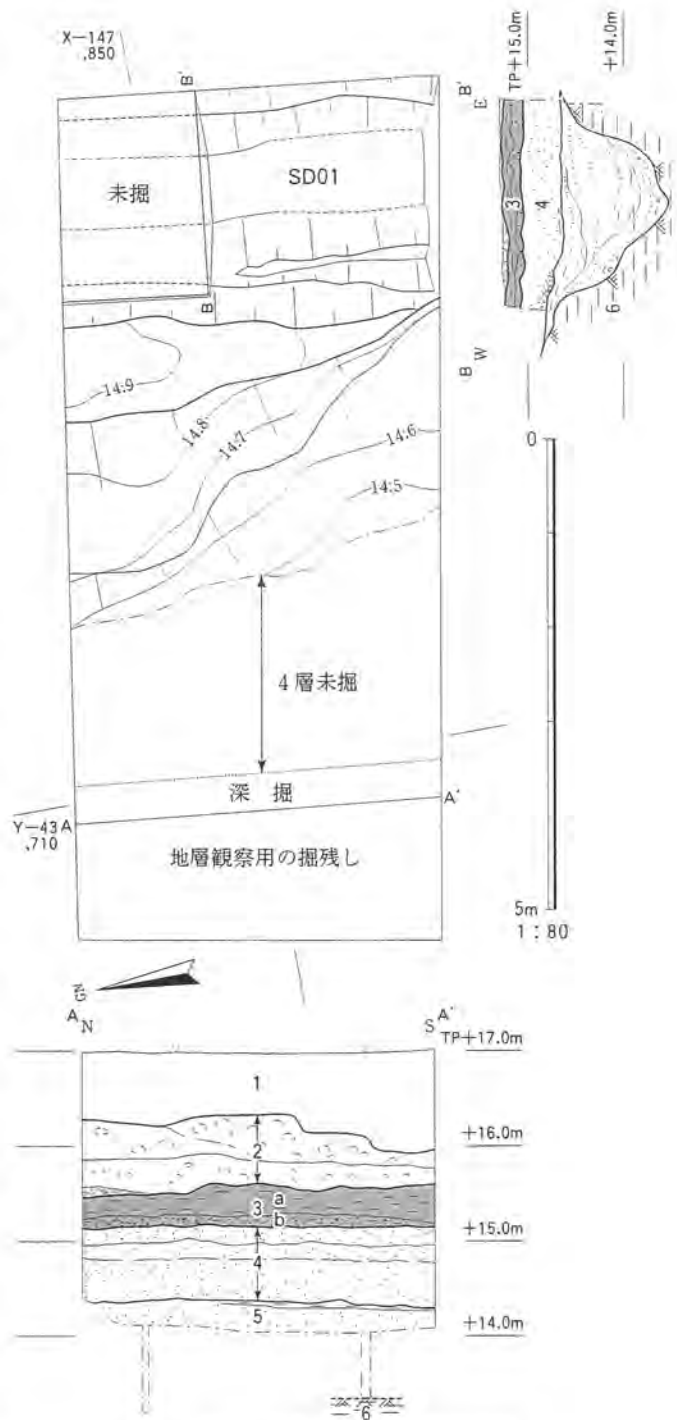


図4 遺構平面図・地層断面図

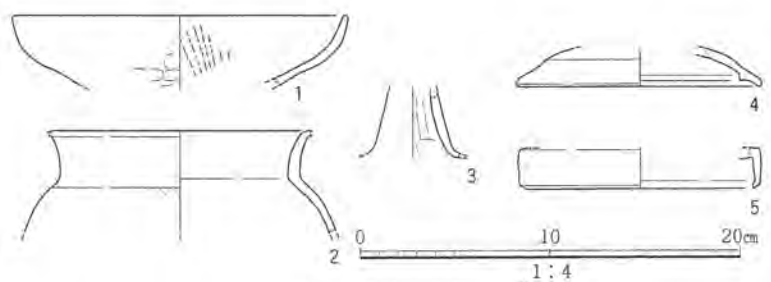


図5 遺物実測図

SD01(1)、第4層(2～5)

3)まとめ

今回の調査では、小さな面積であったにも関わらず、難波宮の時期の溝を発見することができた。幅約2.5m、深さ約1.3mもある、大型の水路はこの地域では初めての発見であり、その方向が南北に揃う点で、さらに京域の整備という大きな事業との関連をも彷彿とさせるものである。長さ4.0mの発見に過ぎないが、難波京の実態の解明に1つの軸を与えたという点においても、大きな成果であり、今後さらに周辺の調査成果を蓄積することにより、この地域の実態がより詳細に解明されるであろう。

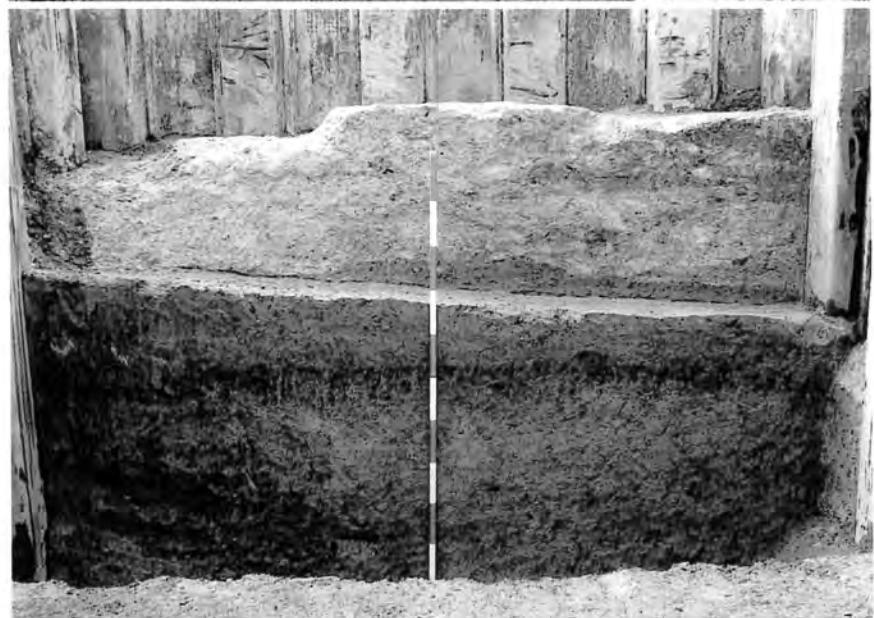
引用・参考文献

大阪市文化財協会2000、『難波宮址の研究』第十一

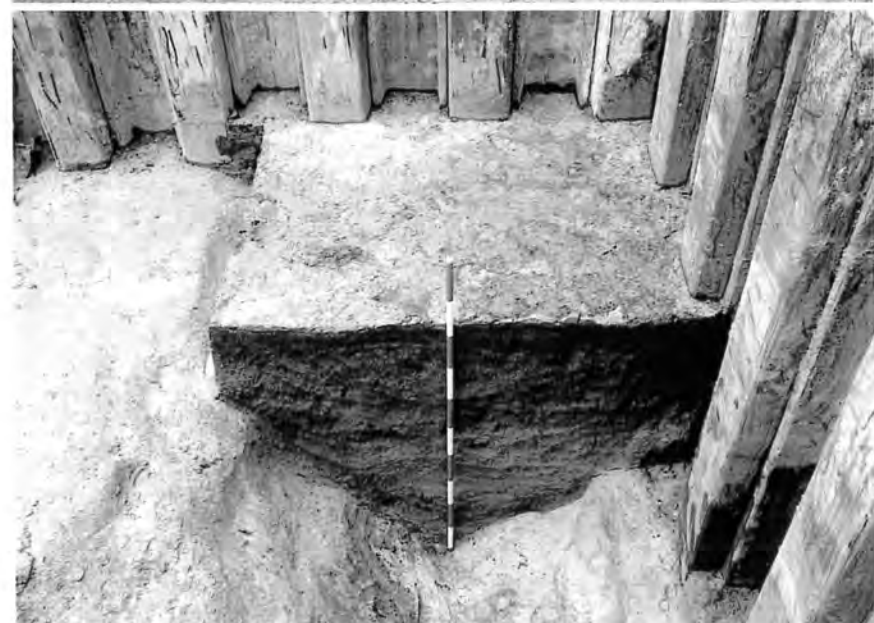
1区地山上面検出状況
(南西から)



1区地層断面
(東から)



SD01地層断面
(南から)



天王寺区六万体町における建設工事に伴う
上本町遺跡発掘調査(UH08-10)報告書

調査個所	大阪市天王寺区六万体町5-19
調査面積	40㎡
調査期間	平成21年1月27日～2月2日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	文化財研究部次長 南 秀雄、清水和明

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は四天王寺中心伽藍から北西約400mの位置にあり、谷町筋の東に接している。勝山通北側の当該地域は、四天王寺境内周辺に比べて既往の調査数は多くない。本調査地の南東15mではUS06-2次調査が行われ、平安時代に遡る可能性のある土壌のほか、室町時代の南北溝が見つかった[大阪市文化財協会2006]。この溝の続きは本調査地の北東15mのUH07-3次調査で確認されている[大阪市文化財協会2007]。また、西170mのUS04-1次調査でも室町時代の東西方向の大溝が明らかになっているなど、寺域の北・東側で散見される正方位の堀や溝が注目されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]。

本調査地では大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、現地表面下約1.3mで褐色砂層の地山層が検出された。周辺調査での成果より、その上面で中世の遺構が検出される可能性が高いことから本調査となった(図1)。平成21年1月27日から重機による掘削を開始したが、試掘箇所と重なる調査区地の南辺付近以外は地山層が現地表面下約0.7mで検出され、当初の予想よりも遺構の遺存状況が良好であった。調査の結果、中世～近世の土壌や大溝の一部と考えられる遺構などが見つかり、それらを人力により掘削して記録保存を行い、2月2日に埋戻しと撤収を含む現場における全作業を終了した。

以下、本報告に掲載した図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP+○mと表記した。本文で用いた示北記号は図1・2・8が大阪市の道路現況図(1/500)を下図にした座標北(世界測地系)、そのほかは磁北である。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

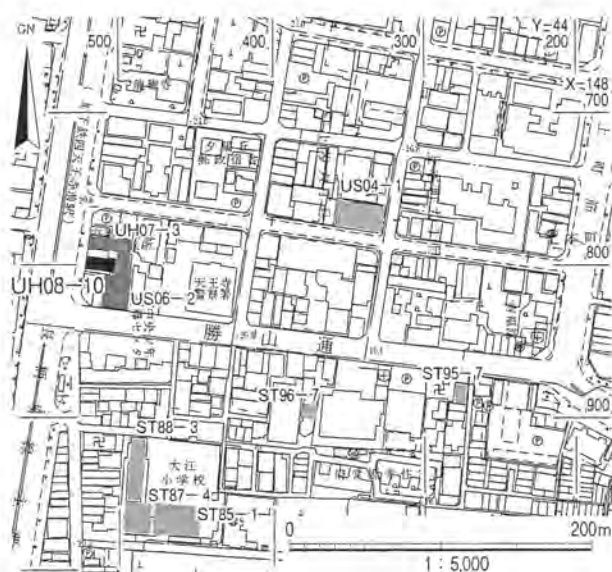


図1 調査地位置図

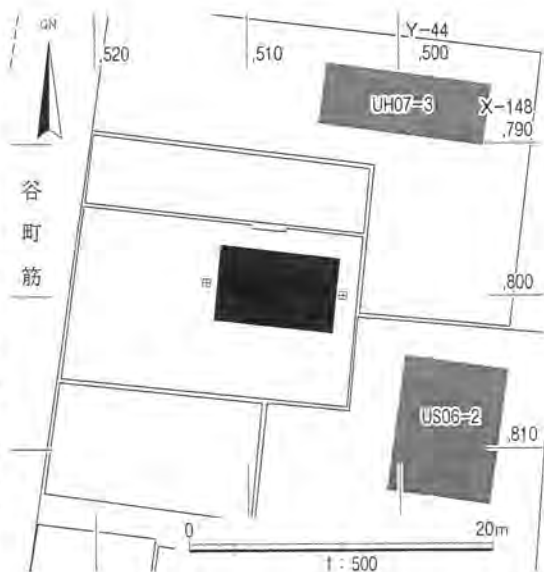


図2 調査区位置図

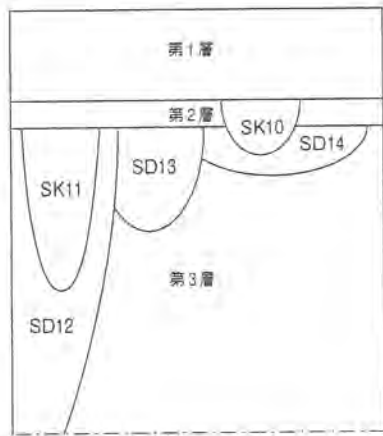


図3 地層と遺構の関係図

TP+
20.5m

重機により地山上面まで掘削したため、第1・2層は調査区壁面での地層観察にとどまる。

— 第1層： オリーブ褐色(2.5Y4/3)~にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂層で、スレートなどを含む現代の整地層である。層厚は約50cmである。

— 第2層： 調査区東部に堆積し、細礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂層で、近世整地層と考えられる。層厚は約20cmである。SK10は断面観察から本層の上面の遺構と考えられる。

— 第3層： 黄褐色(10Y5/6)で、上部はシルト質中粒砂、下部は中粒砂~細礫からなる地山層で、層厚は現地表下約2.8mまでを確認した。本層の上面で、溝と考えられるSD14をはじめ、中世の溝、近世の井戸・土壙などを検出した。

ii) 遺構と遺物

以下に古い時代からおもな遺構と遺物を記載する。

a. 中世の遺構(図5)

SD14 遺構どうしの切合い関係からは、本調査地で最も古い遺構である。埋土は褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトで他の中世遺構と異なり、中世前期に遡る可能性も考えられる。北側は幅が2m、東側が浅い段掘りとなり、西側は深さ0.4mになるが、SK13によって壊されている。中世の土師器・須恵器の細片のほか丸瓦・平瓦片が出土したが、瓦質土器はなかった。

SD13 確認した範囲は短い、ほぼ南北の溝と思われる。幅1.2m、深さ0.6mである。埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質中粒砂からなる埋戻し土で、底に水が流れた痕跡は認められなかった。出土遺物には土師器皿1・2(図7)のほか、いずれも細片であるが、須恵器・瓦器・輸入白磁・瓦がある。これらの遺物から南北朝~室町時代の遺構と考えられる。

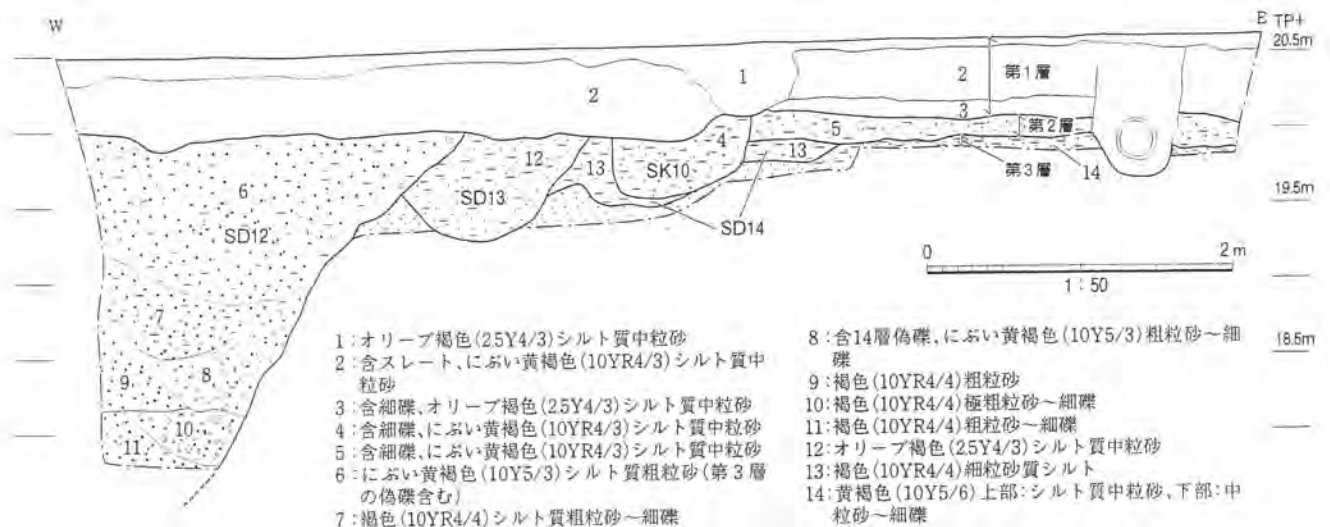


図4 調査地北壁地層断面図

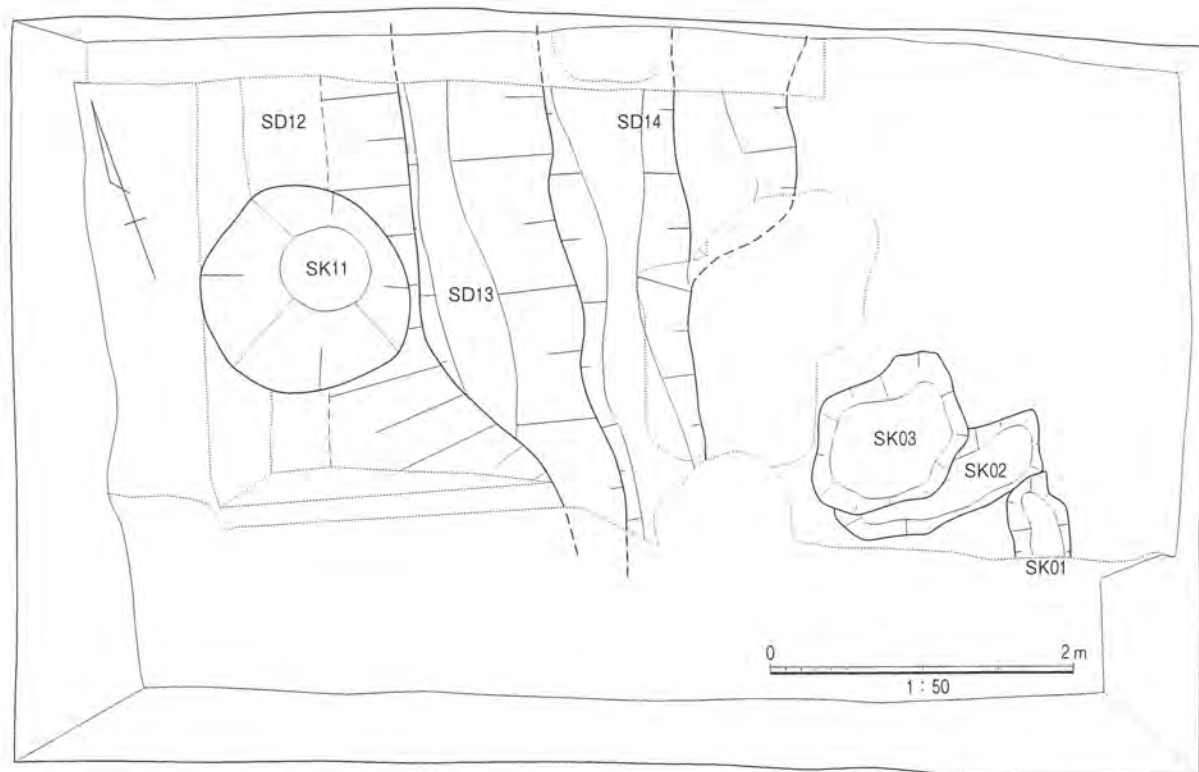


図5 中世の遺構

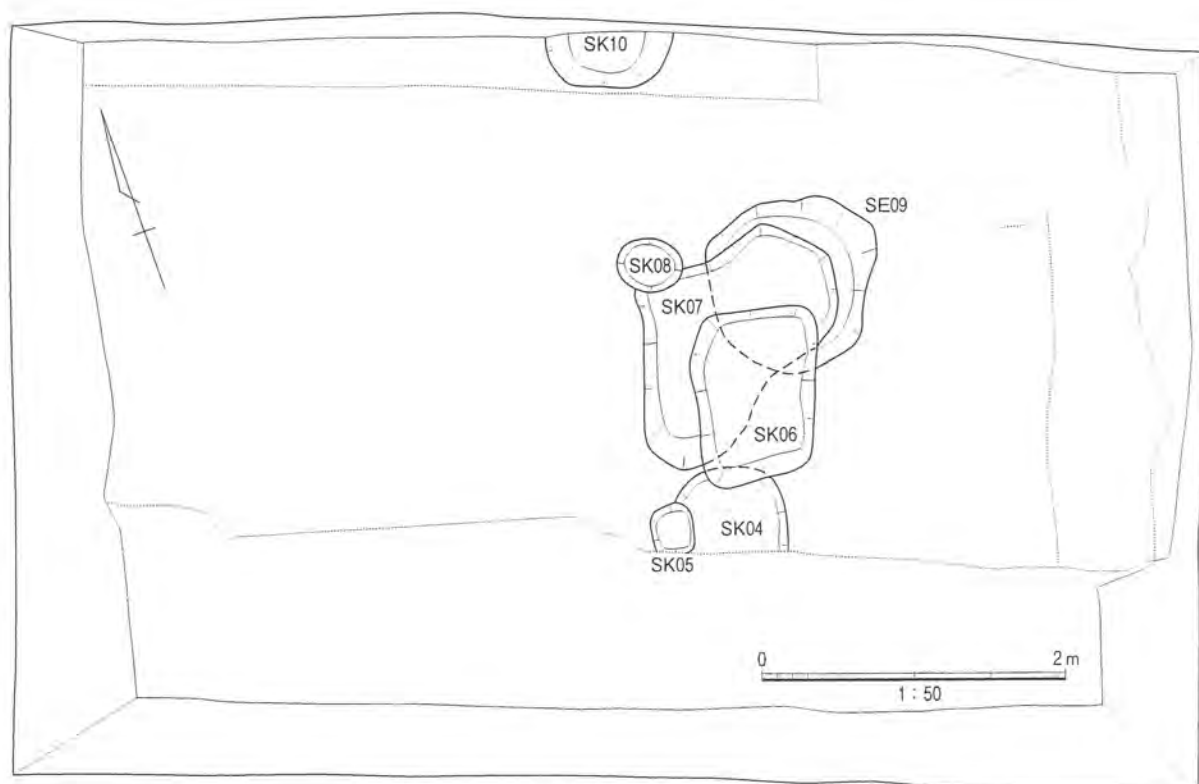


図6 近世の遺構

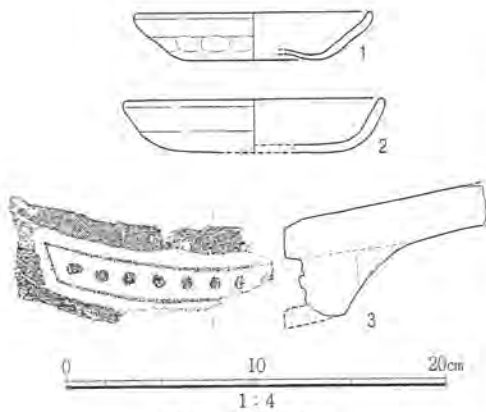


図7 出土遺物
SK11(3)、SK13(1・2)

SD12 西側の立ち上がりが不明であるが、南北に延びる大溝の可能性はある。深さは2.2m以上まで確認したが、底は未検出である。埋土はにぶい黄褐色(10Y5/3)シルト質粗粒砂～褐色(10YR4/4)極粗粒砂～細礫を主体に、第3層の偽礫を多く含んでいる。下半は壁面の崩落による自然堆積層で、上半(図4-6層)は埋戻しによる地層である。瓦器・瓦質土器・備前焼播鉢・瓦の細片が出土している。図化できる資料はないが、室町時代の遺物であろう。

SK11 平面は直径約1.4mの円形で、深さ0.7mである。埋土には水がついた痕跡が無いので、井戸ではないと考えられる。鎌倉時代の連珠文軒平瓦3(図7)が出土しているが、室町時代のSD12より新しい遺構である。

SK01～03は埋土が褐色(10YR4/4)シルト質中粒砂である。出土遺物は土師器・須恵器・瓦器、中世瓦などの細片で、近世の遺物を含まないことから中世の遺構の可能性はある。

これらの中世遺構と、前述のUS06-2・UH07-3次調査で見つかった中世遺構との位置関係は図8のようになる。SD12やSD13の東側約8mの位置で、北で東にわずかに振る幅3.6m、深さ1.1mのSD301があり、13～15世紀の瓦や瓦質土器を中心に16世紀後葉の瀬戸美濃焼鉄釉茶入まで出土している[大阪市文化財協会2007]。SD12やSD13の方位は北でわずかに西に振っているため、SD301とはずれているが、明らかに現代の地割とは異なって正方位に近い点は共通し、遺物の様相からもSD12はSD301と近い時期が想定される。

b. 近世の遺構(図6)

調査区の中央やや東寄りにSK04～08・SE09が見つかった。SK05～08は検出面からの深さが約0.3mで、埋土はSK05・07がにぶい黄褐色シルト質(10YR4/3)中粒砂、SK06・08が暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルトである。SK08では、埋土中に炭化物の薄層が堆積していた。これらからは肥前磁器染付碗・皿や関西系陶器鍋、軟質施釉陶器灯明受皿などが出土し、おおよそ18世紀後半から19世紀代にかけての遺構とみられる。SE09は平面形が円形に近く、立ち上がりがほぼ垂直である。埋土は灰褐色(7.5YR5/2)粗粒～極粗粒砂質シルトを主体とする埋戻し土で、深さ2.0mまで掘削したが底に達しなかった。形態から井戸と考えられる。関西系陶器落し蓋などが出土している。

3)まとめ

本調査地では中世の溝とみられる遺構がほぼ並行して3条見つかった。調査範囲が狭いため確実ではないが、おおよそ南北の正方位にのっており、中世の四天王寺を含めた一帯の地割に沿った遺構と考えられる。近接する調査でも室町時代の大溝が見つかったことをあわせると、当該地に複数の堀や大溝が併存するか、繰返し設置されていた状況が窺える。四天王寺およびその門前町の範囲と変遷を考える際に、これらの遺構は特に重要であろう。また、当該地は豊臣氏の大坂城下町の1つであ

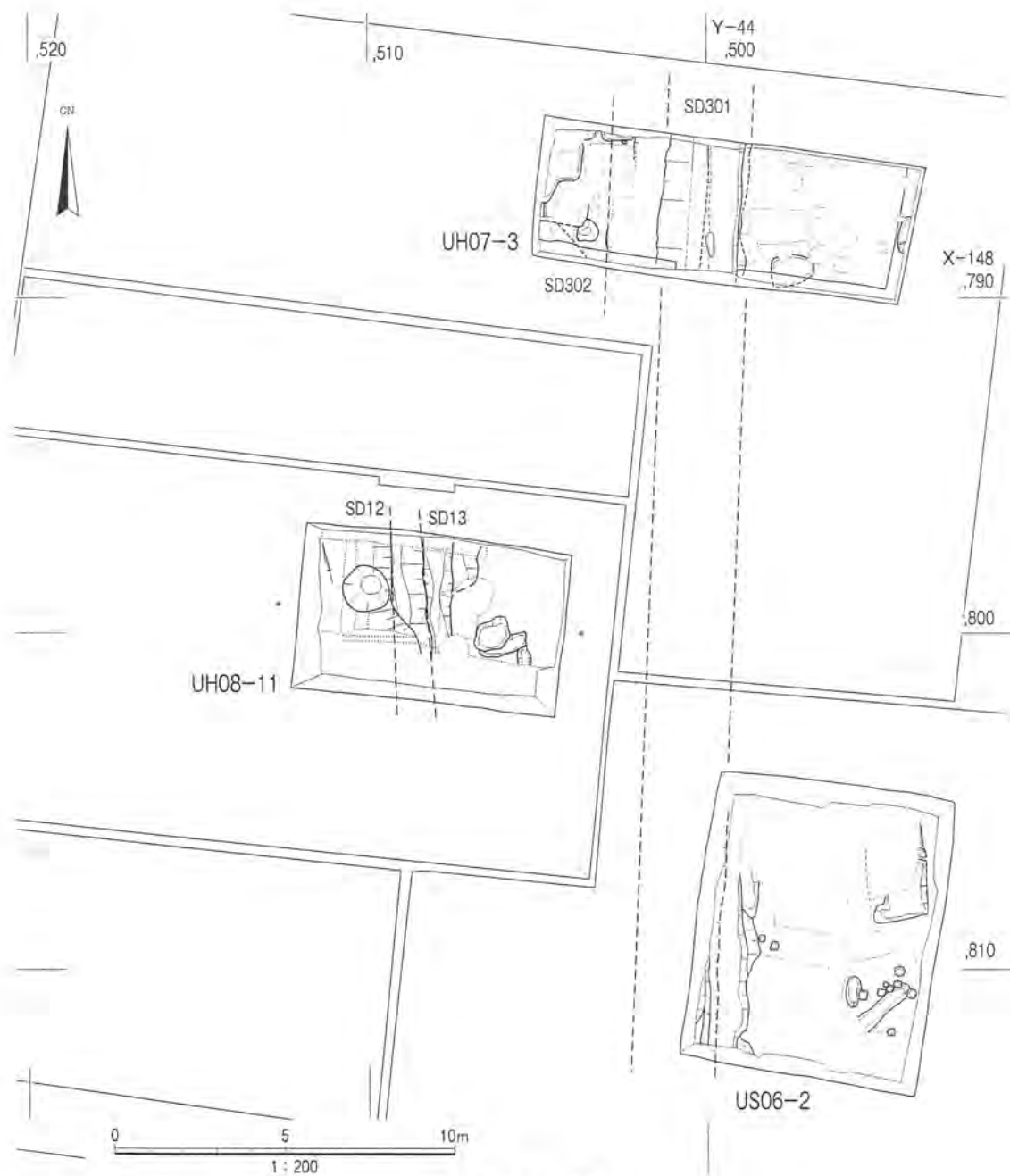


図8 中世の遺構群

る平野町に近接すると考えられ、その設置によって地割も大きく変化する。これらの堀や大溝の廃絶の状況を調べることで、その面期を明らかにすることも可能となるため、今後も周辺域における調査の進展が期待される。

引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「上本町南遺跡発掘調査(US04-1)報告書」、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』
- 大阪市文化財協会2006、「株式会社鷺谷商店による建設工事に伴う上本町南遺跡発掘調査(US06-2)報告書」
- 大阪市文化財協会2007、「天王寺区六万休町における上本町遺跡発掘調査(UH07-3)報告書」

中世～近世遺構掘削状況
(西から)



SD13・14の埋土
(南から)



SD12の埋土
(南東から)



天王寺区上本町六丁目における建設工事に伴う
上本町遺跡発掘調査(UH08-11)報告書

調査個所 大阪市天王寺区上本町6丁目307-1・307-2の各一部
調査面積 220㎡
調査期間 平成21年2月19日～3月11日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、京嶋 覚

1) 調査に至る経緯と経過

本調査地は上町台地尾根筋の東斜面に位置し、台地北端部に存在する難波宮跡の中軸線上の南北大路である朱雀大路跡が東400mに推定されている。これまでに周辺で行われた調査は少なく、UH08-4次調査などがあるのみで、古代～近世の遺構・遺物が見つかった(図1)。特に、上町筋を挟んだ東側で行われたUH08-4次調査では、中世以前の遺構は確認されていないが、18世紀後半の土採り穴とみられる土壌が多数発見されており、その上位には土採り直後に設置され、19世紀中頃に廃絶した貯水施設とそれに付設された木製暗渠・枅の導水施設が検出されたことから、大きな屋敷が付近に存在した可能性が指摘されている。

事前の試掘調査では、現地表下約1.2mで中世以前の可能性のある包含層が確認されたため、発掘調査を実施することとなった。

調査対象は敷地西部の南北20m、東西11mの範囲であり、残土の仮置き場所を確保するために、南北2区に分けて半分ずつ調査することになった(図2)。調査は2月19日に調査区範囲のアスファルト撤去作業を行い、北半部から重機による近代～現代の地層の掘削を開始した。それ以降は人力で掘削を進め、記録のための写真撮影・図化などの作業を行った。3月2日に北半部の調査を完了し、翌日から埋戻しを行ったのち、3月4日から南半部の重機による表土掘削を行い、同様に調査を進めた。3月9日にすべての記録作業を終えたのち、3月11日に埋戻し・撤収作業を終えて現場作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、図1の指北記号は座標北、その他は磁北である。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・図中ではTP+〇mと記している。

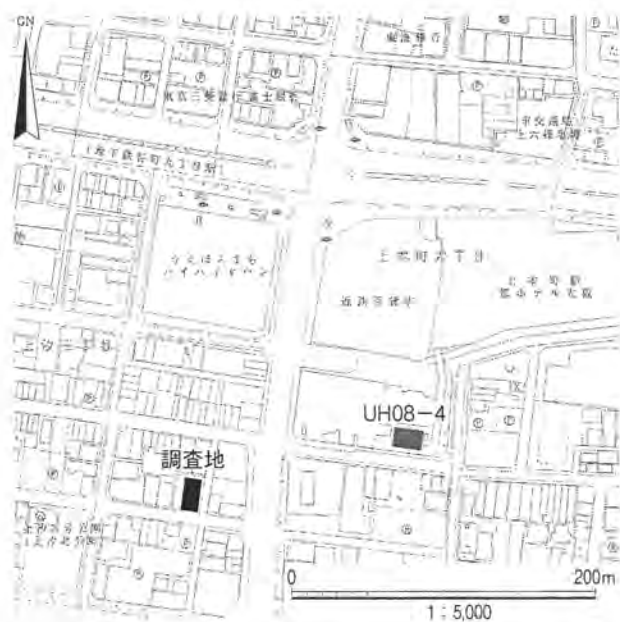


図1 調査地位位置図

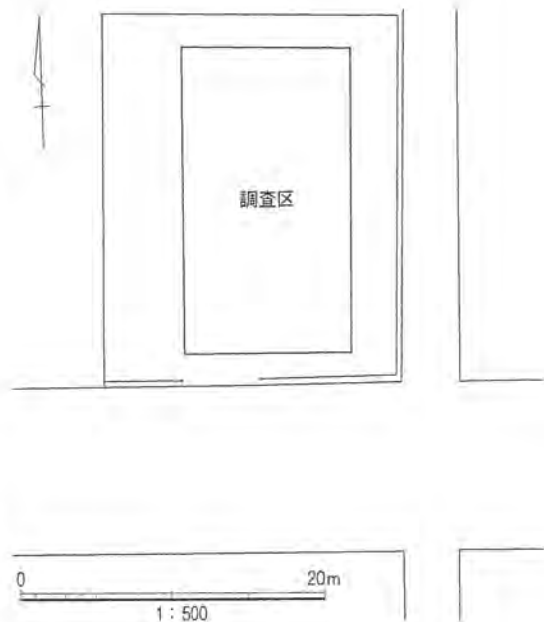


図2 調査区位置図

2) 調査の結果

i) 層序

調査地点で確認された地層を以下に記述する(図3・4)。

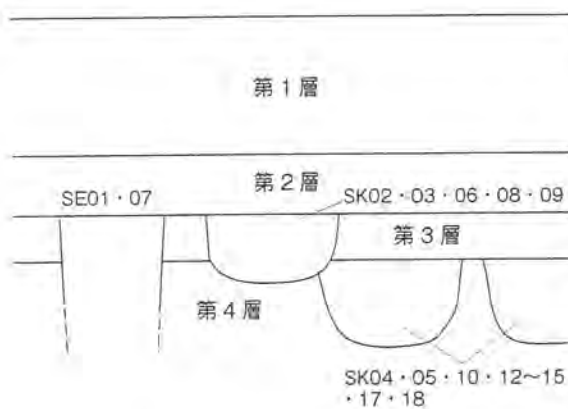


図3 地層と遺構の関係

から天王寺にかけての広範囲にわたって果樹園となっており、調査区はその北西端に位置するため、この作土層は果樹栽培に伴う可能性がある。明治30年代のこの付近は「桃山」の地名にもなった広大な桃畑で、桃の花の名所であったといわれており、本層は桃の栽培に伴う作土層と考えられる。

第3層：黄灰色(2.5Y4/1)～黄褐色(2.5Y5/6)中粒砂質シルト層で、粗粒砂～細礫を含む。層厚は20～40cmである。部分的に地山層の小偽礫を含む整地層である。調査区北端部に限って本層の下位に畝状をなす部分があり、その窪みに灰色シルト質中粒砂が薄く遺存していた。畝間溝の痕跡と思われ、本層の整地以前に図4のi・jの層を作土とする畝地だったことを示している。

第4層：にぶい黄褐色(10Y R5/3)～灰白色(5Y8/1)細粒～粗粒砂からなる地山層である。

ii) 遺構と遺物(図5～7)

a. 第4層上面の遺構と遺物

第4層上面で、土採り穴群を検出した。幅2～3m、長さ6m前後の長方形をなすもの、一辺3m前後の正方形をなすものなどがあり、深さは0.3m、0.5m、1.0m以上など様々であり、SK12・15は長方形の土採り穴の一部が段をなしてさらに深くなる。埋土は黄褐色(2.5Y5/4)～浅黄色(2.5Y7/4)シルト質中粒～粗粒砂層である。地山層の細粒砂の偽礫を含む。多くは砂質土を主体とするが、SK10のように細粒砂を含む褐灰色(10YR5/1)粘土質シルトを埋土とするものもある。

土採り穴の配置を見ると、西壁に沿って一辺3.0mの正方形を呈するSK04、南北6m、東西2m前後の長方形を呈するSK12、一辺2.0mほどの正方形のSK10が一系列に南北に並び、東壁沿いには、東西が長軸になると思われる南北幅約2mのSK18、約3mのSK17、約2mのSK15、約3mのSK13が北から南に並んでいる。両者の間には4.0～5.0m幅の土採りされていない空間が南北に存在するが、南壁際に検出された東西幅3m前後のSK05・14がその南を区切っている。このような配置は土地境界を反映している可能性があり、後述する第3層上面で検出された井戸や、廃棄土壌を除く土壌もこの土地境界を踏襲しているとみることできる。

調査区の地山層や埋土中の偽礫からみて、シルト～細粒砂が採掘されたものと思われ、壁土用の土

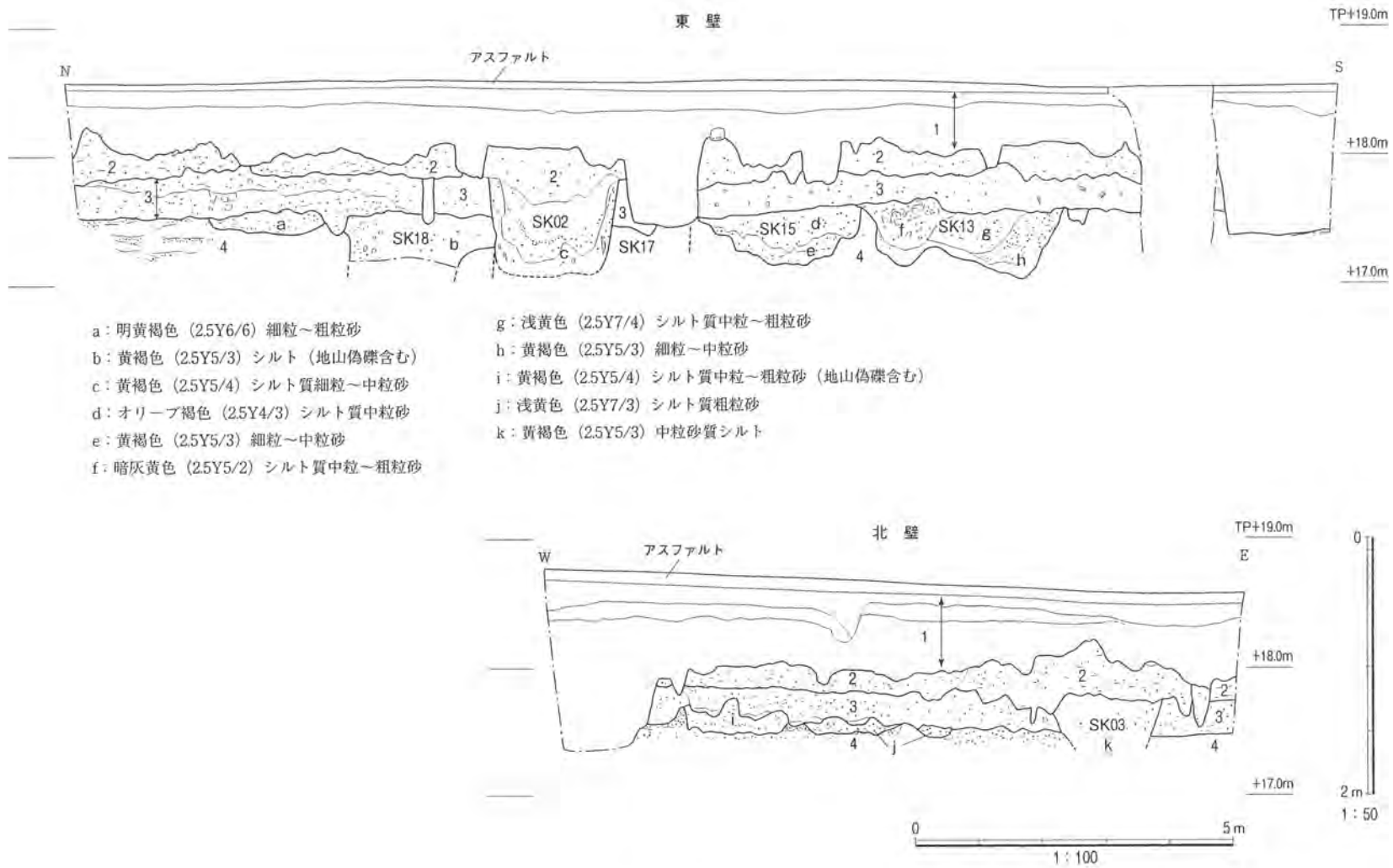


図4 東壁・北壁地層断面図

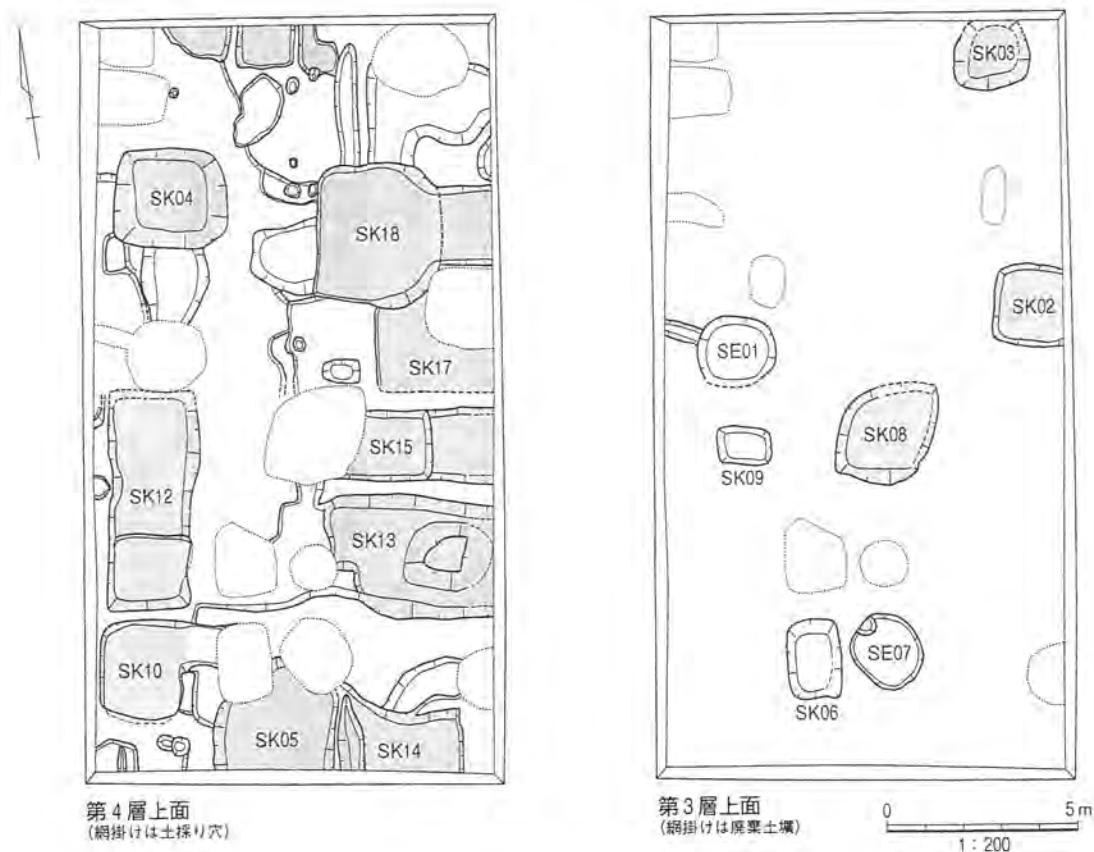


図5 第3・4層上面平面図

採り穴であろう。

これらの土採り穴からの出土遺物は概ね少なかったが、SK13は土採り直後にまとめて土器・陶磁器が廃棄されており、多くの遺物が出土した。

肥前染付磁器は碗・鉢・皿が多く、色絵碗や御神酒德利・仏飯器を含む。瀬戸美濃焼陶器に馬の目の大皿8や植木鉢があり、関西系陶器の碗16、皿14・15、灯明受皿12、行平鍋、土瓶がある。16は高台内に「朝日山」の印刻のある外面鉄釉の碗である。焼締め陶器には丹波焼大甕・德利、堺播鉢21、伊賀焼陶器片があり、軟質施釉陶器の灯明皿9～11や、土師質土器の火消し壺・焜炉・焙烙も出土している。土器・陶磁器以外では、土人形、軒棧瓦、石製硯、鉄釘・楔が出土した。

これらは後述する第3層上面の廃棄土壌からの出土遺物に近い19世紀前半ごろのものと思われ、UH08-4次調査で検出されている土採り穴群よりやや後出と考えられる。UH08-4次調査での土採り穴が不整形で切合いが顕著であるのに対して、今回の調査区では方形あるいは長方形で、隣接して整然と配列されているという相違点があるが、これは時期差と考えることができるだろう。

b. 第3層上面の遺構と遺物

第3層上面では井戸・土壌などが検出された。SE01・07はいずれも直径約2mの円形の井戸で、SE01は井戸側に井戸瓦を用いていた。

SE01からは肥前磁器碗、関西系陶器灯明受皿、棧瓦が出土し、SE07からは肥前磁器の染付碗、瀬戸美濃焼と思われる鉢、丹波焼甕、土師質土器の焜炉片と丸瓦が出土した。

SK06・09はそれぞれ2.0m×1.5m、1.0m×1.5mの長方形を呈する土壌である。深さは0.2～0.5m

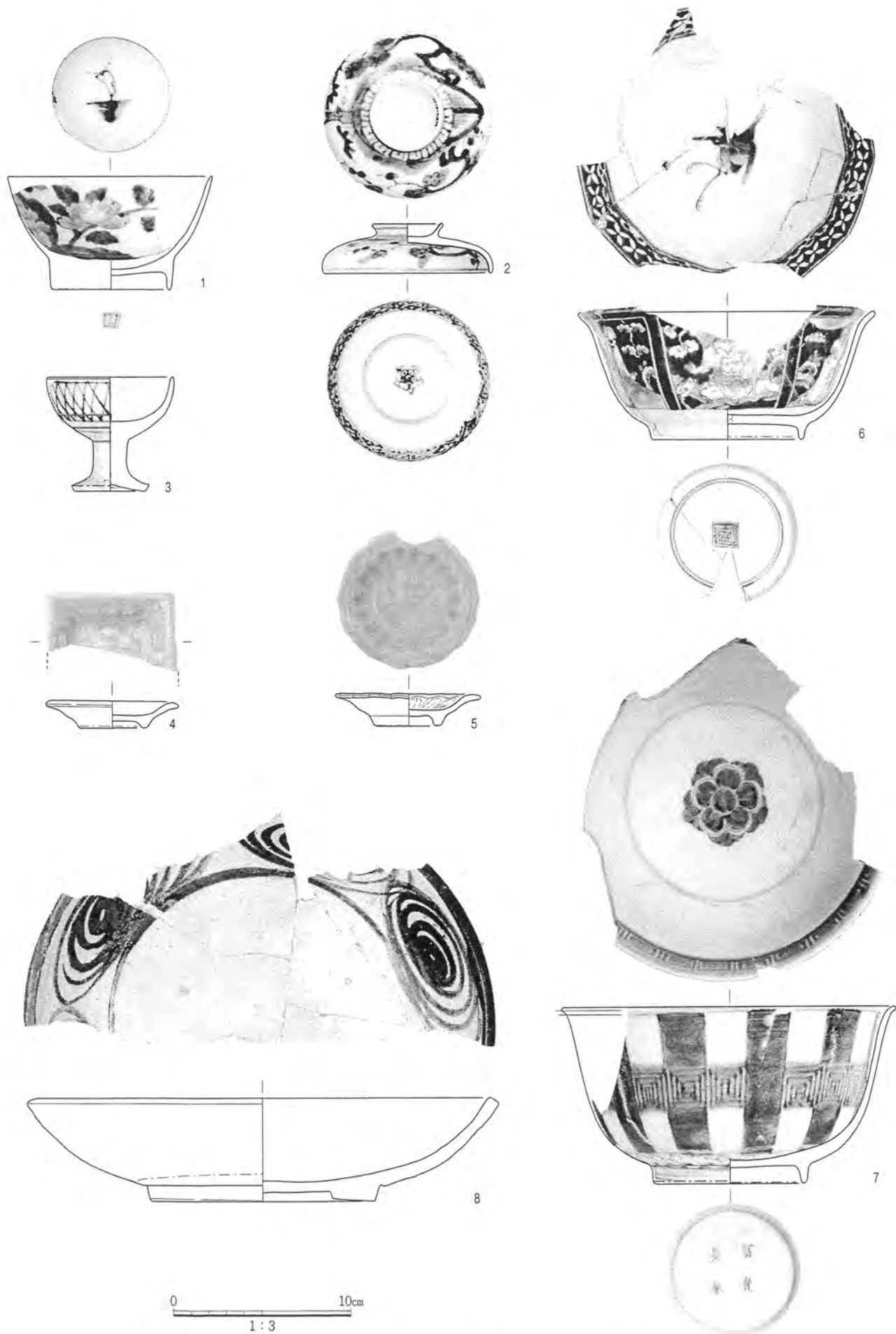


图6 出土遺物実測図(1)
SK02(4·5)、SK08(1~3·6)、SK13(7·8)

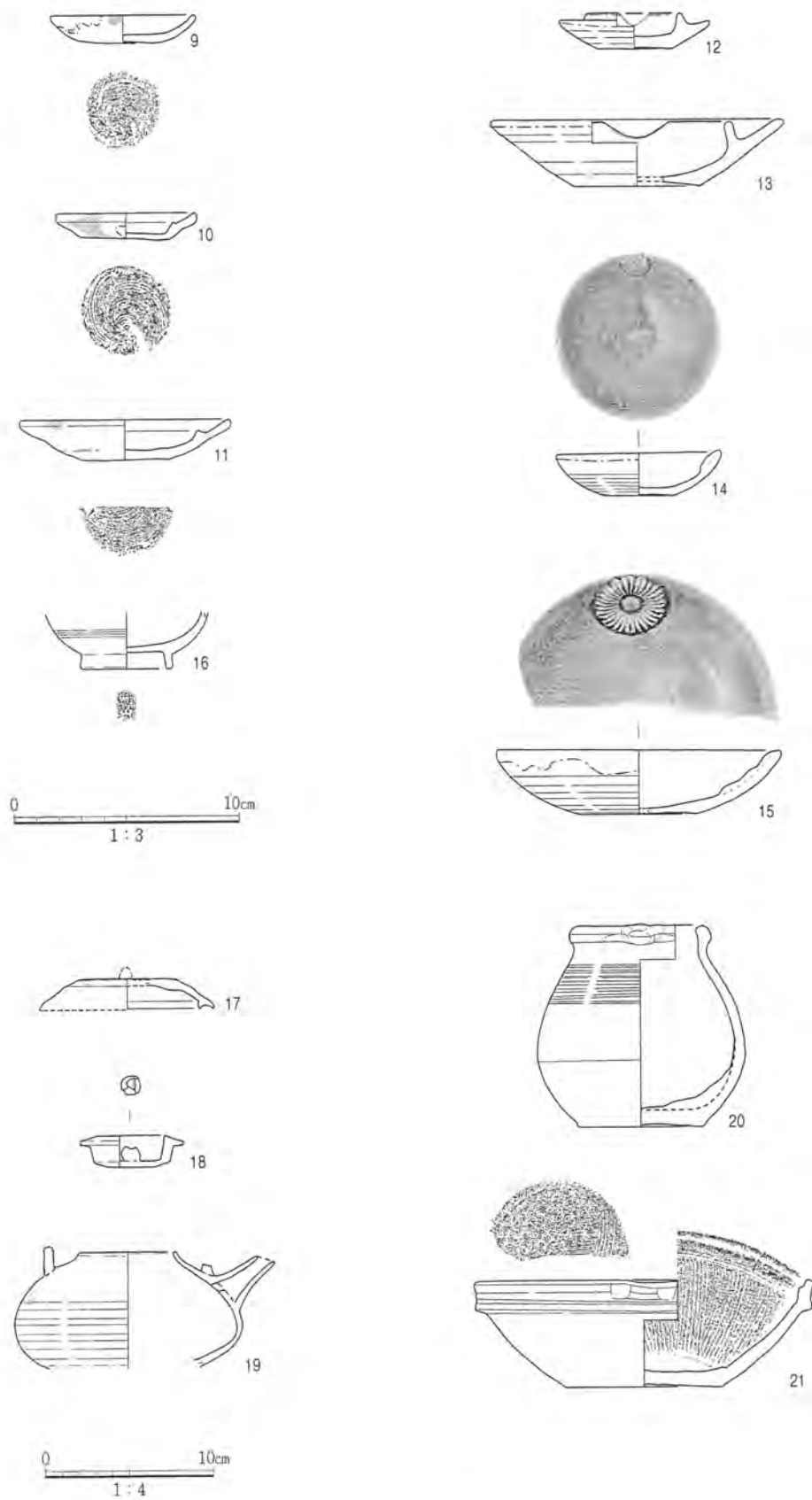


图7 出土遺物実測図(2)
SK02(17)、SK03(18~20)、SK08(13)、SK13(9~12·14~16·21)

である。肥前磁器染付碗・瓶、関西系陶器土鍋・土瓶、丹波焼甕・徳利、堺播鉢、土師質土器火消し壺、棧瓦などが出土した。

SK02は南北2.1mの方形、SK03は直径3.0mの円形、SK08は長軸3.0mの不整形をなす土壌で、いずれも大量の土器・陶磁器を含む廃棄土壌である。

出土遺物は、肥前磁器の染付碗1、蓋2、皿、鉢6・7、仏飯器3、色絵碗、鉢などがあり、大型品を中心に焼接ぎを行ったものが多く見られる。また、SK02から三田青磁の皿4・5が出土している。陶器は瀬戸美濃系鉢、関西系鍋、土瓶18・19、碗、鉢、灯明受皿13、丹波系大甕、徳利、花瓶、お歯黒壺と思われる片口壺20、肥前陶器鉢、堺播鉢、軟質施釉陶器の灯明皿がある。土師質土器の火消し壺・焜炉・焙烙、瓦質土器の焜炉も出土している。土器・陶磁器以外では、棧瓦・井戸瓦、土人形、騎羽口、不明金属製品などがある。

これらの遺物は土採り穴群からの出土遺物と大きく変わらないが、19世紀前半～中葉のものと思われる。

また、SK02の出土遺物には飛鳥時代の須恵器杯G蓋17が混入しており、他の土壌や地層からも古代の須恵器甕片が少量出土しているため、古代の遺構が存在していた可能性がある。

これらの廃棄土壌は調査区の北寄りの東半部に分布する傾向があり、周辺に存在していた屋敷地に関連する廃棄場所になっていた可能性がある。その後、第2層の作土層がこれらを覆うことから、前述のとおり19世紀後半に桃などの果樹園として造成されたものと思われる。

3)まとめ

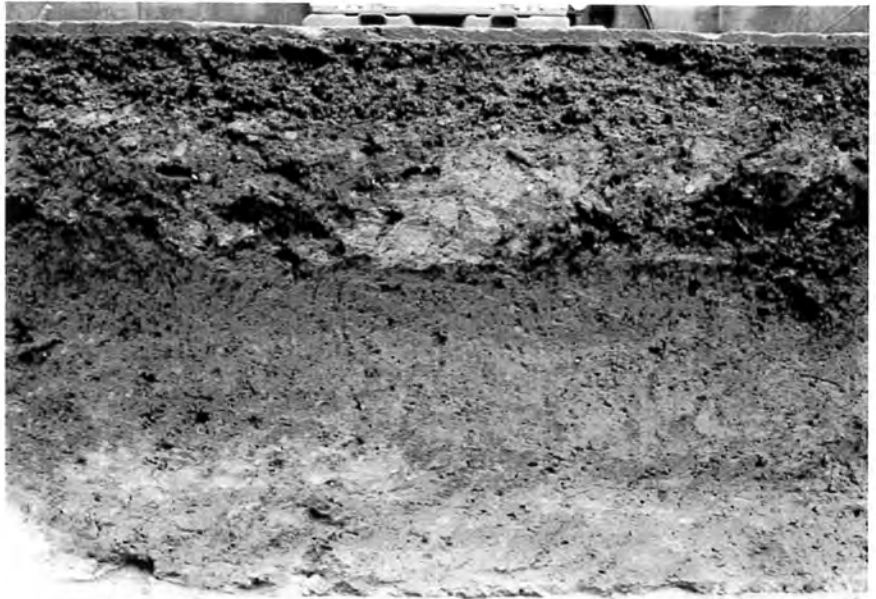
これまでに周辺で行われた調査では古代～中世に遡る遺構・遺物が検出されていたが、今回の調査地でもごく少量の土器片が出土し、当該期の遺構が存在した可能性が残されている。一方、それ以降の成果としては、江戸時代末期の土採り穴群や廃棄土壌が検出されるなど、近世末から近代にかけての土地利用のあり方をうかがわせる資料を得ることができた。

いまだ調査が十分に行われていない地域であるため、今後の調査資料の増加により新たな知見が得られることを期待したい。

引用・参考文献

大阪市文化財協会 2008、「上本町駅南複合ビル(仮称)建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH08-4)報告書」

東壁断面SK13付近
(西から)



北半部第4層上面
検出状況(東から)



南半部第4層上面
検出状況(東から)



SK02検出状況
(東から)



北半部第4層上面
全景(東から)



南半部第4層上面
全景(東から)



V 浪 速 区

浪速区下寺二丁目における
埋蔵文化財発掘調査(RJ08-3)報告書

調査個所	大阪市浪速区下寺2丁目
調査面積	830㎡
調査期間	平成20年10月17日～12月9日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	文化財研究部次長 南 秀雄、松本啓子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地西側の海蝕崖の名残とされる急な崖の裾部を南北に通る松屋町筋の西側に位置している(図1)。崖の上を通る谷町筋の標高は約21m、これと平行して崖の下を通る松屋町筋の標高が約4mで、高低差は約17mにもなる。本調査地の地表面は松屋町筋よりもさらに1mほど低い。崖の上、谷町筋の東側には飛鳥時代より連綿と続く古刹・四天王寺があって、これを中心とした古代からの門前町が一带に広がっている。発掘調査においても崖の上では古代～近世の遺構や遺物が多く見ついているが、本調査地周辺の、崖より西側の低い場所では今までに発掘調査は行われていない。しかし、本調査地よりさらに西側の臨海部では、南海難波駅南の船出遺跡(FD04-1・05-1)や敷津遺跡(SX06-1・08-1・08-2)などの発掘調査があり、海浜部における古墳時代中期以降の陸化のようすや中世の開発状況などに関する資料が得られ始めている[大阪市文化財協会2005・2006・2007・2009a・2009b]。

平成19年8月9・10日に本調査地を含めた大阪市営下寺第1住宅用地において試掘調査を行ったところ、中世の遺物包含層が確認された[大阪市文化財協会2008]。そこで、関係諸機関と協議の上、本調査を行うことになった。

調査は平成20年10月17日より開始した。浪速区下寺二丁目と三丁目を分ける道路北側の敷地の東半部に、図2のように830㎡の調査区を設定した。残土置場の用地確保のため調査区を北南に分割し、北半部から調査を行った。調査終了後に埋戻しを行い、引き続き南半部の調査に取りかかった。

試掘結果に基づき、地表下約0.7mまでの間の現代～近代の地層は重機によって除去し、以下、地表下約1.3mの自然堆積層までを、各地層毎に人力で掘り下げて遺構・遺物を確認し、記録を取った。基準点測量と写真測量をアジア航測株式会社に委託し、11月6日と12月4日に行った。

12月9日には埋戻しを行い、現地における発掘調査を完了した。

なお、本報告で使用した方位は世界測地系による座標北で、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文図中ではTP+○mと記している。

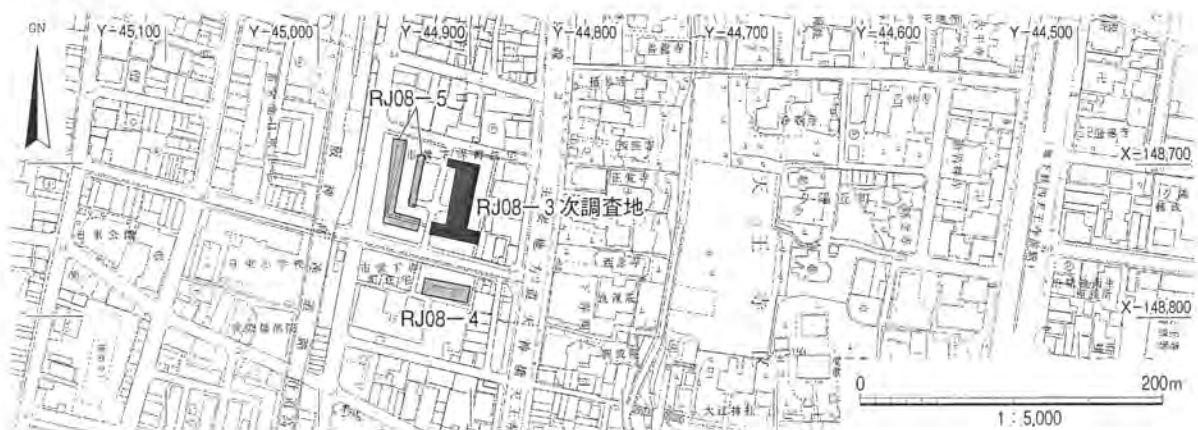


図1 調査地位置図

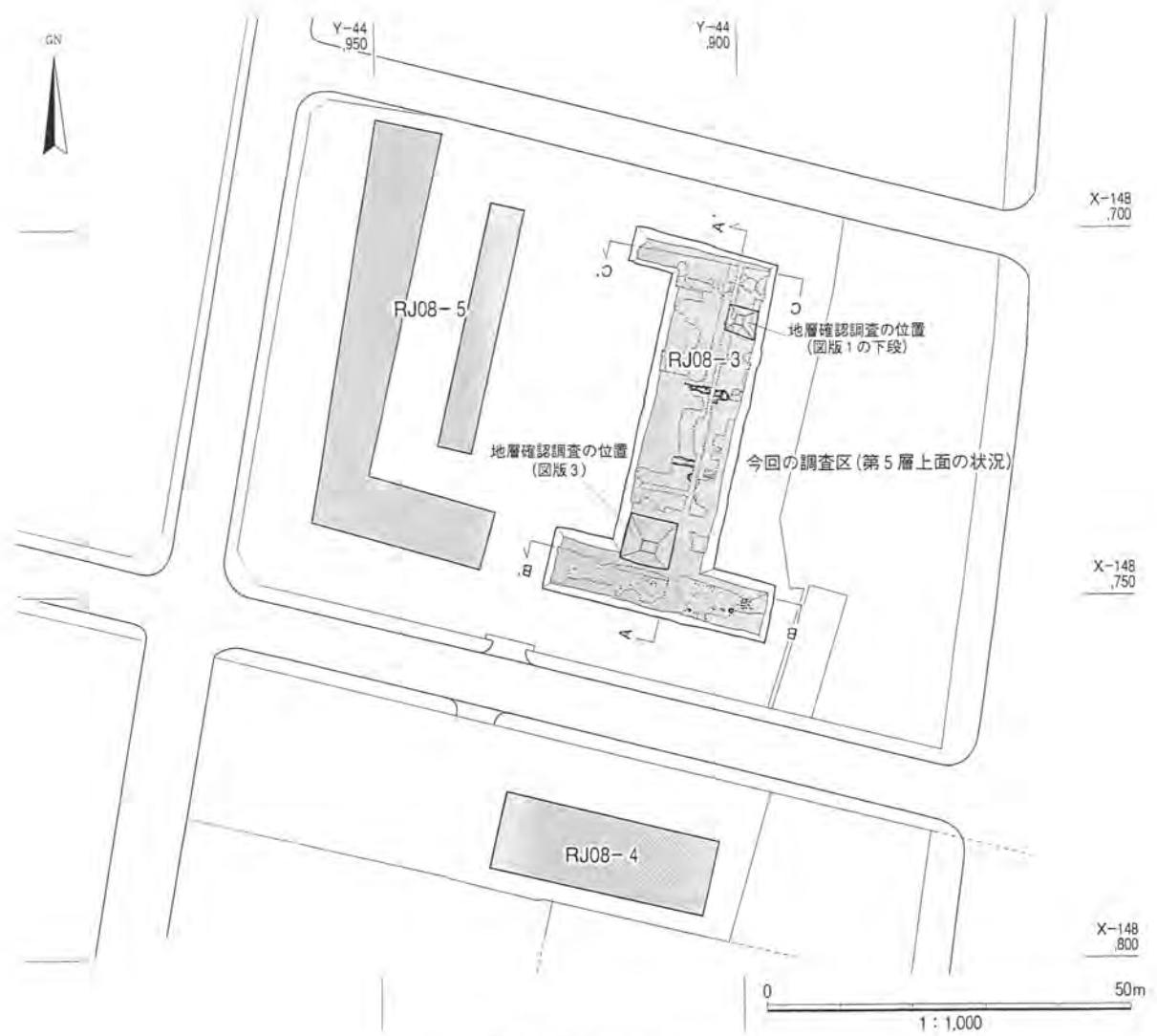


図2 調査区位置図

遺構と地層の関係	層序	岩相	遺物	時期	
SD102など SP101	1a	第1層 近世作土層	含礫黄褐色シルト質粘土	瀬戸美濃焼陶器・肥前陶器・須恵器・土師器・瓦器・瓦	16世紀末～
	1b		含砂・礫暗灰黄色シルト質粘土		17世紀初頭
足跡 畦畔 SD202 畦畔 段差	2a	第2層 中世作土層	含砂灰黄褐色礫質粘土	土師器・須恵器・瓦器・備前陶器	14世紀頃
	2b		含シルト黒褐色礫質砂 (水成層) 含礫黒褐色シルト質粘土 (水成層)	土師器・緑釉・黒色土器・瓦器・青磁	
	2c		含礫・砂黒褐色シルト質粘土	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・中国製白磁	
足跡や植物の根の跡など	3	第3層 中世水成層	含砂黒褐色粘土質シルト	土師器・須恵器・瓦器・中国製白磁	13世紀頃
	4a	第4層 古代湿地性堆積層	含砂黒色粘土質シルト (水成層)	土師器・須恵器・瓦器	12世紀頃
	4b		含極細粒砂黒色シルト質粘土		
4c	含細粒砂黒色粘土質シルト				
// //	5a	第5層 更新世段丘構成層 (地山)	にぶい黄褐色細粒～粗粒砂		
	5b				
	第6層	海成粘土層	灰色砂質シルト～粘土		

図3 地層と遺構の関係

2) 調査の結果

i) 層序(図3～5、図版1・3)

周辺のRJ08-4・08-5次調査の結果も含めた本遺跡における基本層序は図3のとおりで、図4・5は本調査地の地層断面図である。

現代表土直下の第1層は、1a・1bの上下2層に分かれる近世初頭の作土層である。本調査区では第1a層は礫を含む黄褐色シルト質粘土層で、調査区の北部と南西部に部分的に残存する。第1b層は砂・礫を含む暗灰黄色シルト質粘土を主体とし、調査区全域で認められた。最大層厚は第1a層が20cm、第1b層が34cmである。

第2層は中世の水田作土層で、2a・2b・2cの3層に分かれる。第2a層は砂を含む灰黄褐色の礫質粘土層である。第2b層は上部が主として礫を含む黒褐色シルト質粘土層で、下部がシルトを含む黒褐色礫質砂層である。第2c層は主として礫・砂を含む黒褐色のシルト質粘土層である。最大層厚は、第2a層が18cmである。第2b層は下部が20cm、上部が14cmであり、両者を合わせた第2b層全体で20cmである。第2c層は最大層厚は15cmである。第2層からは14世紀頃までの遺物が出土した。

第3層は黒褐色の粘土質シルト層で細粒～中粒砂を多く含む。最大層厚は12cmである。本層は調査区全面に堆積しており本層の上では細粒～中粒砂を含む黒褐色粘土質シルト層で盛土した畦畔を検出した。この盛土は部分的にしか分布していない。後世に削られて大半が失われてしまったものとみられ、高さは最大でも6cmほどしか残っていない。本層から8～13世紀までの遺物が出土した。

第4層は4a・4b・4c層の3層に分かれる。第4a層は砂を含む黒色粘土質シルトからなる水成層で、第4b層は極細粒砂を多く含む黒色シルト質粘土を主体とする湿地性堆積層、第4c層は細粒砂を含む粘土質シルト層で、下位の第5層を巻き上げていた。最大層厚は第4a層が8cm、第4b層が20cm、第4c層が10cmである。第4層は南端では東に向かって次第に薄くなっているが、調査区の北端では東側が厚くなっている。第4b層の上面で畦畔の痕跡と偶蹄目の足跡や植物の根の痕跡が検出された。4a・4b層から遺物は12世紀頃のものが出土した。

第5層より下位の層準は調査区北側および南側で行った下層確認トレンチ(図2)の、主として断面観察による。なお、北トレンチではTP-1.5m(図4)、南トレンチではTP-1.3m(図5)まで掘り下げて調査を行った。

第5層は海浜の堆積層で第5a・5b層の2層に分かれる。出土遺物はない。

北トレンチでは、第5a層は上部から下部にかけて、層厚約24cmの暗灰黄色の極細粒～中粒砂、層厚約15cmの赤褐色シルト質細粒砂、層厚約10cmの灰黄色シルト質中粒砂、層厚約5cmの灰褐色粗粒砂～中礫、層厚約28cmの粘土を含む灰褐色シルト質砂、層厚15cmの褐色細礫～中礫からなり、ほぼ水平に堆積していた。

第5b層は灰～赤褐色の中粒～粗粒砂からなり、層厚は最大95cm、傾斜して堆積していた。

南トレンチでは、第5a層はさらに2層に細分でき、上部は層厚約95cmのにおい黄褐色の極細粒砂～細礫からなり、下部は層厚約100cmの黄灰・灰白・黄褐色の細粒砂～細礫からなる。下部では3回の

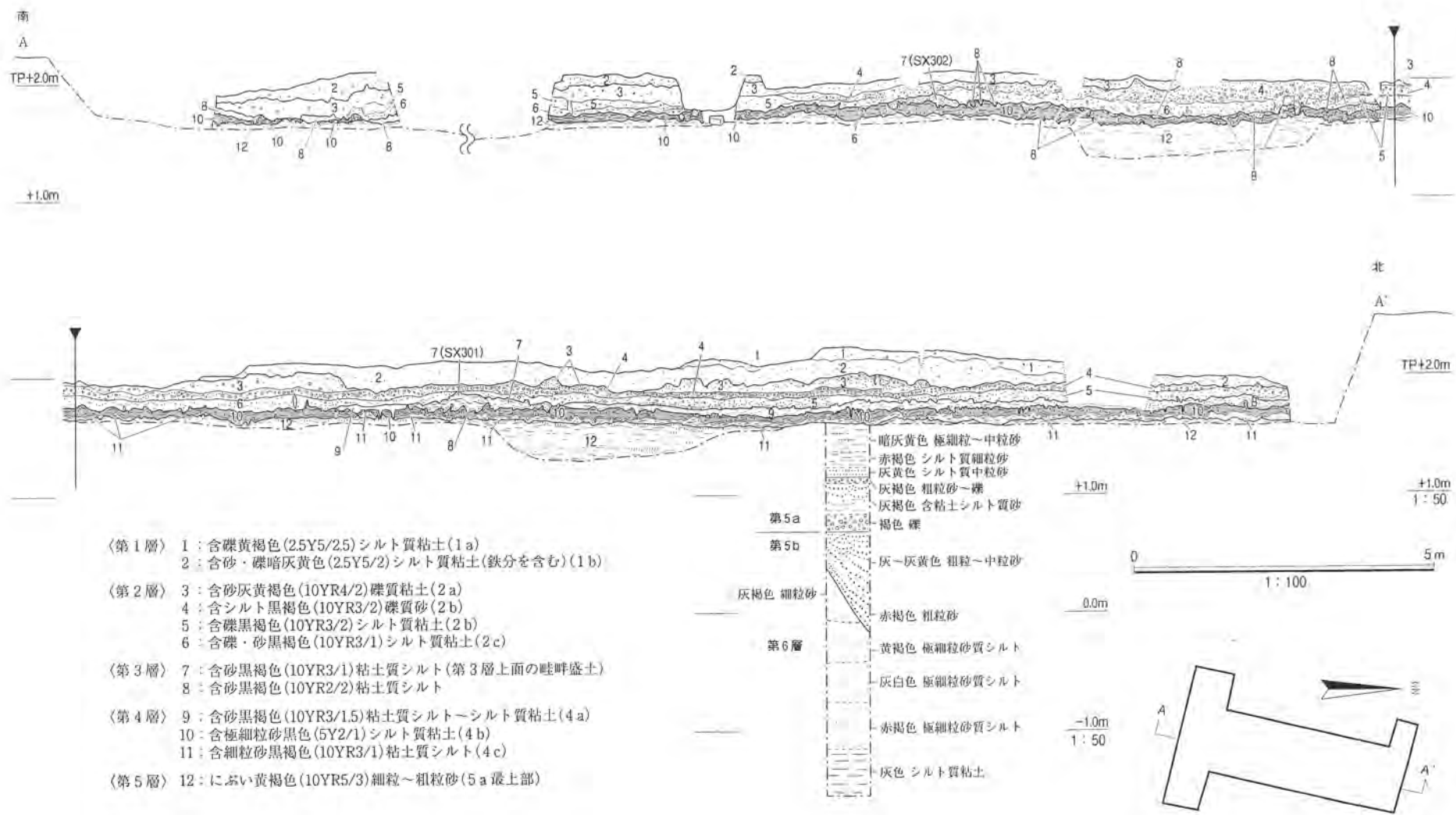
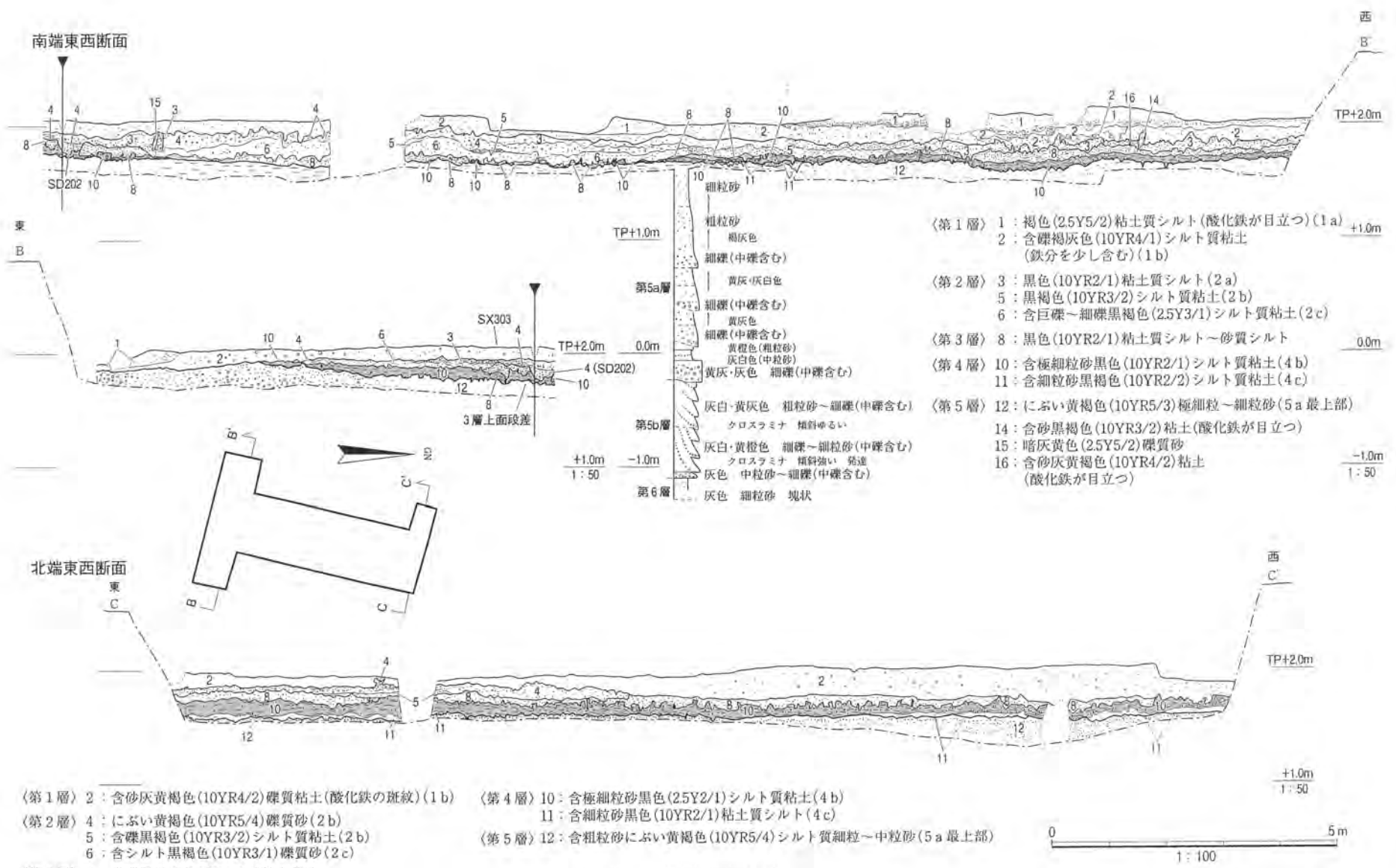


図4 地層断面図(1)



- 〈第1層〉 2: 含砂灰黄褐色(10YR4/2)礫質粘土(酸化鉄の斑紋)(1b)
- 〈第2層〉 4: におい黄褐色(10YR5/4)礫質砂(2b)
5: 含礫黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土(2b)
6: 含シルト黒褐色(10YR3/1)礫質砂(2c)
- 〈第3層〉 8: 含礫黒褐色(10YR3/1.5)粘土質砂

- 〈第4層〉 10: 含極細粒砂黒色(2.5Y2/1)シルト質粘土(4b)
11: 含細粒砂黒色(10YR2/1)粘土質シルト(4c)
- 〈第5層〉 12: 含粗粒砂におい黄褐色(10YR5/4)シルト質細粒~中粒砂(5a 最上部)

図5 地層断面図(2)

上方細粒化のサイクルが見られた。

第5b層は3層に細分でき、上部は中礫を含む灰白・黄灰色粗粒砂～細礫からなり、中部は中礫を含む灰白・黄橙色粗粒砂～細礫からなる。上・中部ともに層厚は40cm、クロスラミナが顕著であった。ラミナの傾斜は下部に比べて上部の方が緩かった。下部は中礫を含む灰色中粒砂～細礫からなり、層厚は5cmである。

第6層は海成層である。北トレンチでは、上部から下部にかけて、灰褐色の細粒砂～灰色のシルト質粘土からなる。層厚は190cm以上あり、上面の標高はTP+0.4m付近にある。湧水のため、崩落がひどく、これより下位は確認できなかった。南半のトレンチでは、最上部の灰色細粒砂を約20cm確認したのみである。上位層との境界の標高はTP-1.1m付近であった。

ii) 遺構と遺物(図6～18、図版2・4)

a. 第4層上面の遺構と第4層出土遺物

第4層の上面では、多数の足跡と畦畔の痕跡を検出した(図6)。

足跡や根の痕跡の分布には粗密があり、人のものと偶蹄目のものが見られた(図版2-下段、4-上・中段)。偶蹄目の足跡は踵から爪先までが8cmほどの大きさであった。また、足跡に混って平面が円形の窪みが多数見つかった。植物の根の跡の可能性もある。

畦畔の痕跡は高さ数cmの帯状の高まりで残っていたもので、この部分だけは足跡がほとんど見られず、上面を水成の第4a層が覆い、窪みや足跡は第4a層で埋まっていた。上面にあった盛土はすでに大半が失われていたが、後述の第3層上面の畦畔のように本来は盛土されていたものと考えられる。調査区中央部で東西方向のSX401・402の2条と、調査区南東部で南北方向のSX403が見つかった。SX401は調査区中央部北寄りの幅0.6mほど、高さ2～3cmほどの帯状の高まりで、調査区中央で見つかったSX401とほぼ並行するSX402は、幅2.0m、高さが最大7cmの帯状の高まりで、もっとも幅が広い。調査区南東部で見つかったSX403は幅0.5m、高さが最大6cmの南北方向の高まりである。

同様の足跡や畦畔の痕跡は近接するRJ08-4・08-5次調査でも見つかっており(図8)、RJ08-5次調査西調査区のSX401は本調査地SX402のほぼ延長線上の位置にあって、規模もよく似ている。一連のもの可能性がある。本調査地も含め、このあたり一帯には水田が広がっていたものと考えられる。

第4a層からの出土遺物はないが、第4b層から土師器や須恵器、瓦器などが出土した。図化しえないほどの破片が多いが、このうち土師器の杯1～4・甕5～7・甑8・9、須恵器の杯身10・甕11、瓦器皿12・椀13を図7の上段に示した。飛鳥時代～12世紀頃までのものである。

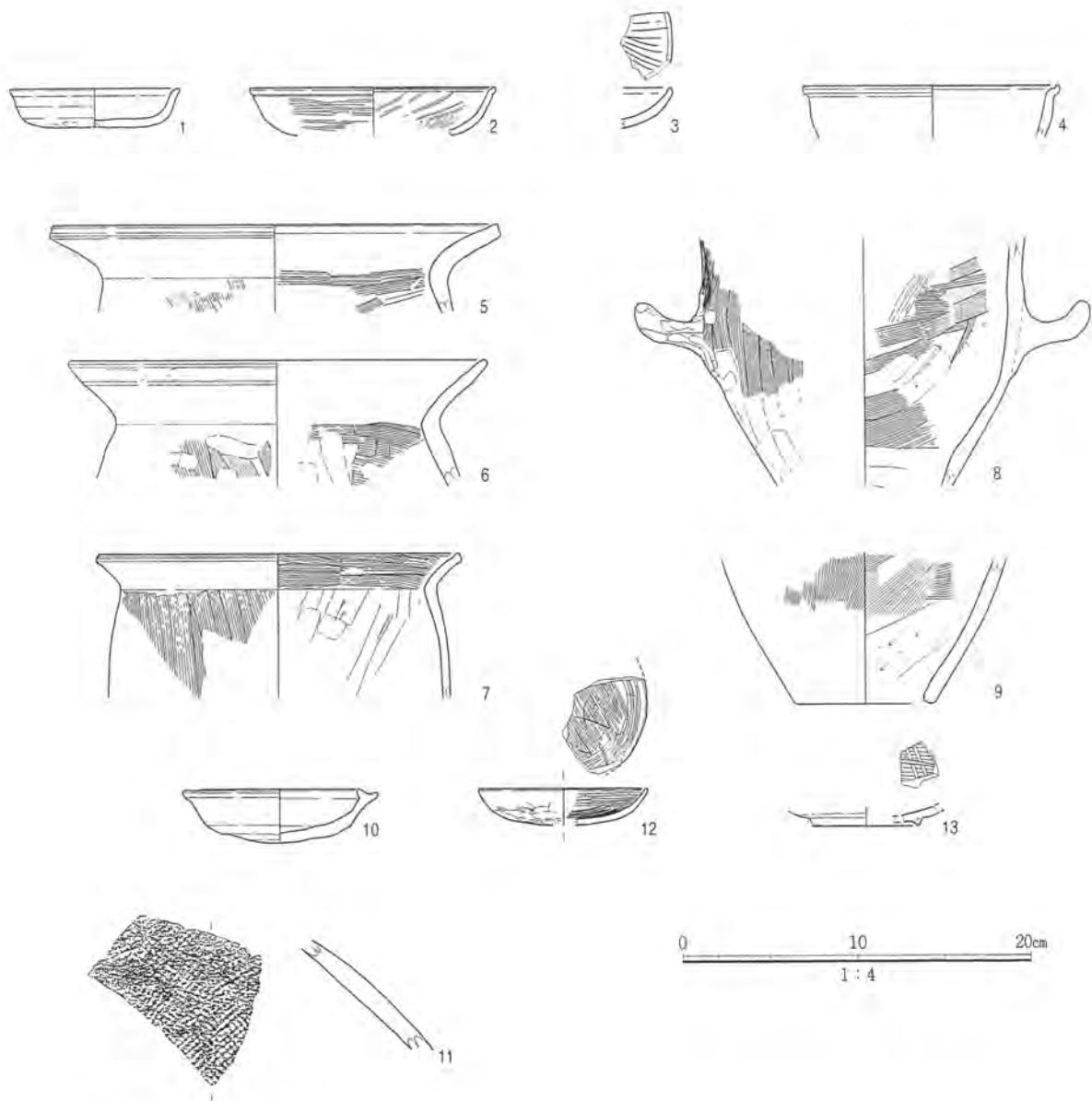
また、第4a層で埋まる第4b層上面の窪みから出土した遺物のうち、土師器甕14・18・19、須恵器捏ね鉢15、瓦器椀16・17を図7下段に示した。12世紀頃までのものである。

RJ08-4・08-5次調査においても第4層から12世紀代の遺物が出土していて、これらより新しい時期のものは出土していないので、本調査区も含め、第4層の堆積した時期は12世紀頃ではないかと考えられる。

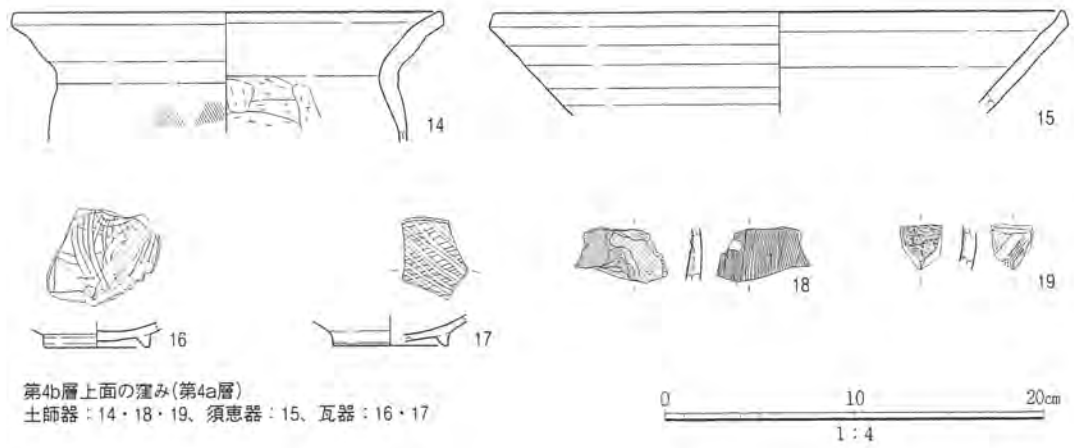
b. 第3層上面の状況と第3層出土遺物



図6 第4層上面の遺構平面



第4b層
土師器：1～9、須恵器：10・11、瓦器：12・13



第4b層上面の窪み(第4a層)
土師器：14・18・19、須恵器：15、瓦器：16・17

図7 出土遺物実測図(1)
第4b層(1～13)、第4b層上面の窪み(14～19)

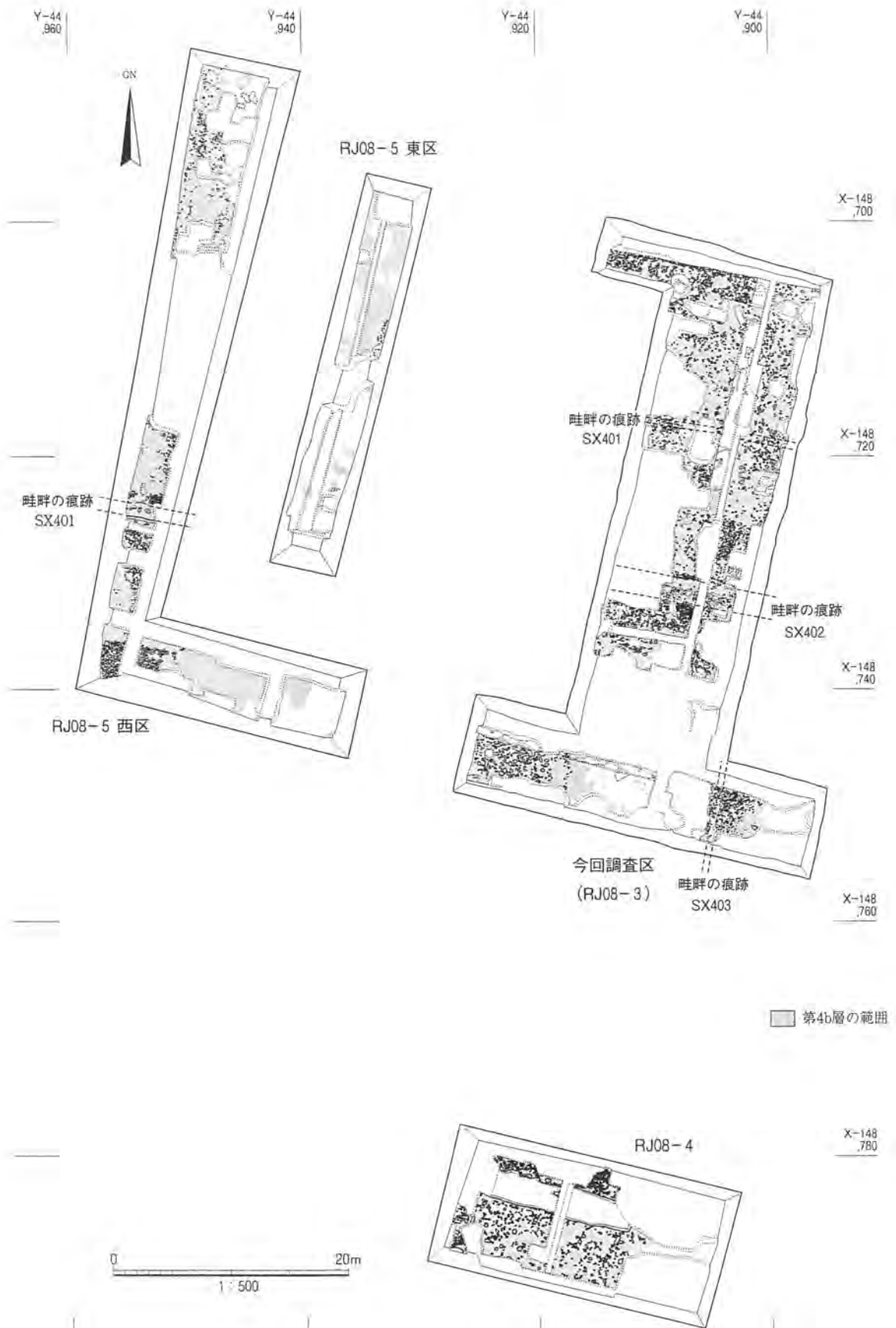


図8 周辺の調査地との関係(第4b層上面)

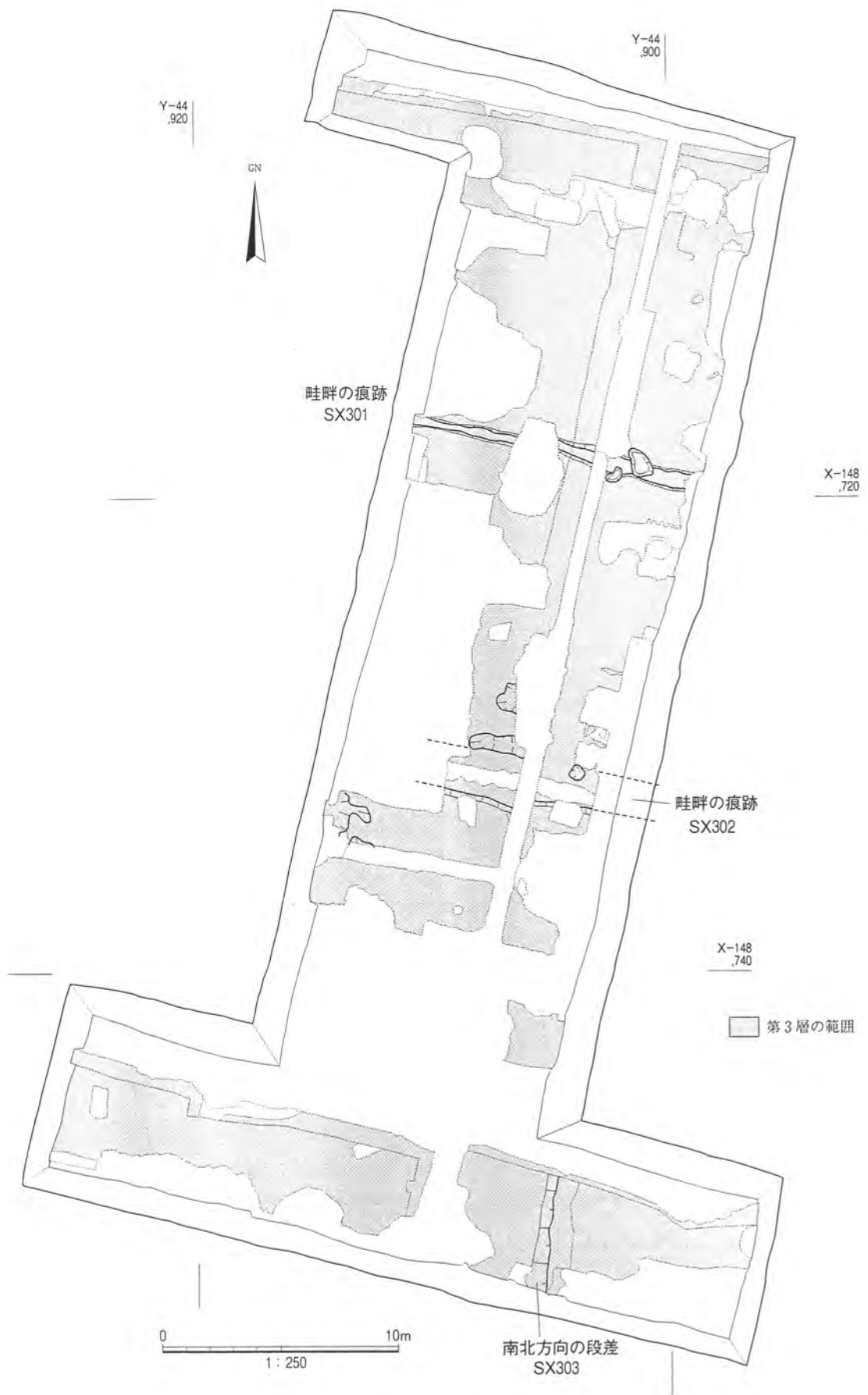


図9 第3層上面の遺構平面

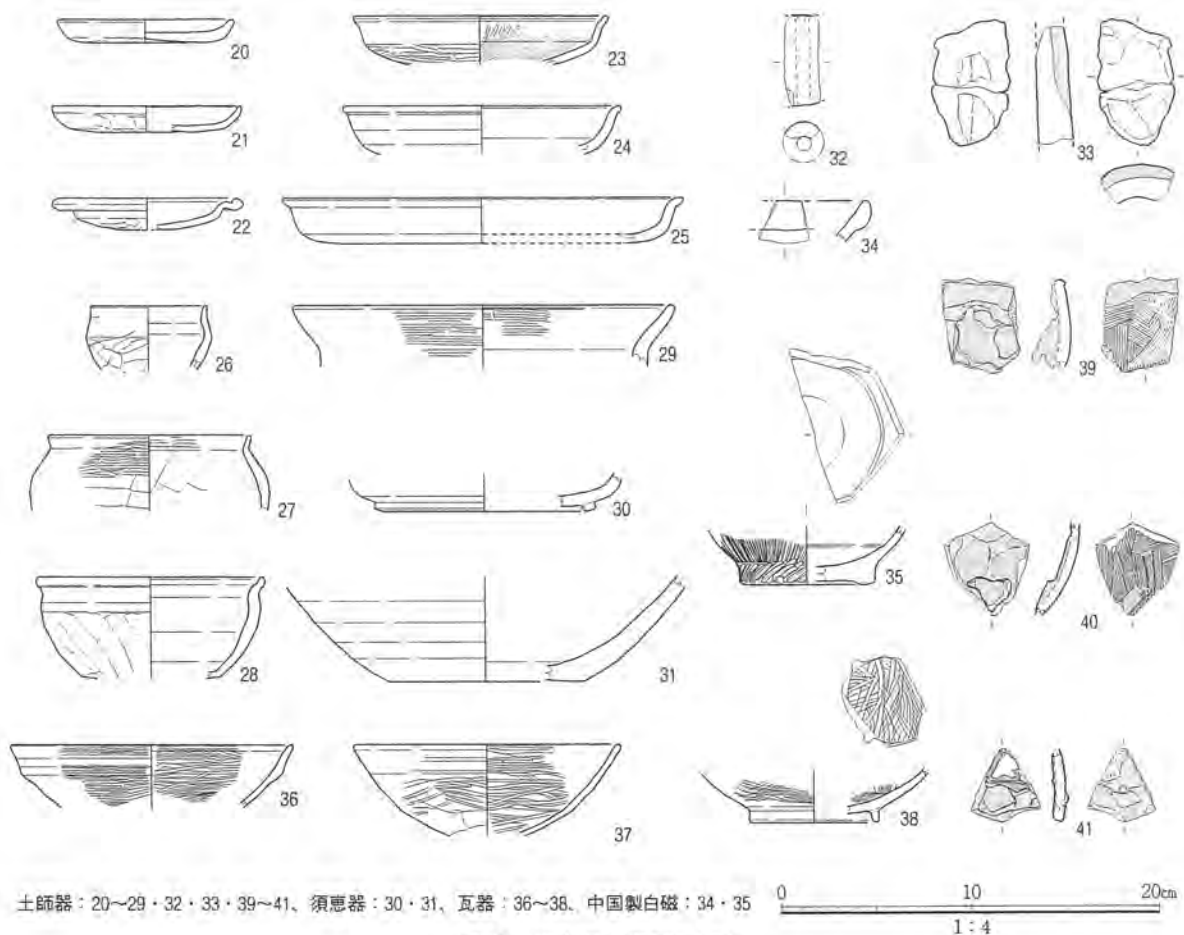


図10 出土遺物実測図(2)

第3層(20～41)

本層上面で畦畔の痕跡SX301・301と段差SX303が見られた(図9)。

SX301は調査区北部にあって、幅は上端で0.5～0.7m、下端で約0.8mの東西方向の高まりで、最大5cmの厚さの盛土が残っており、この盛土が北側に押し流されて堆積している状況が一部で観察された(図4)。

SX302は調査区中央部で見つかったSX301とほぼ並行する東西に延びる帯状の高まりで、幅が約2.0m、高さは最大12cmである。

本調査区南東部のSX303は、本層上面が10～12cmほど西側に向かって落ちる南北方向の段差で、上記のSX301・302とほぼ直交方向の位置にある。約5m分検出した。

近接するRJ08-4・08-5次調査でも、第3層上面で畦畔の痕跡や南北に延びる段差などが検出されており(図11)、本調査地SX302の延長線上にRJ08-5次調査西調査区のSX301があり、規模もよく似ている。また、範囲は狭いがRJ08-4でみられた段差は、ほぼSX303の延長線上に当る位置にある。これらは一連のものの可能性がある。第4層上面のような足跡や木の根などは見られなかったが、本層上面にも水田が作られていたものと推定される。

第3層の出土遺物のうち、土師器の皿20～22・25・杯23・24・小壺26・壺27・28・甕29・39～41、土師質の土錘32・鞆の羽口33、須恵器の杯底部30・鉢底部31、瓦器碗36～38と、中国製白磁玉縁碗34・35を図10に掲載した。このほか図化できなかったが13世紀頃の瓦器の破片があり、本層の出土遺

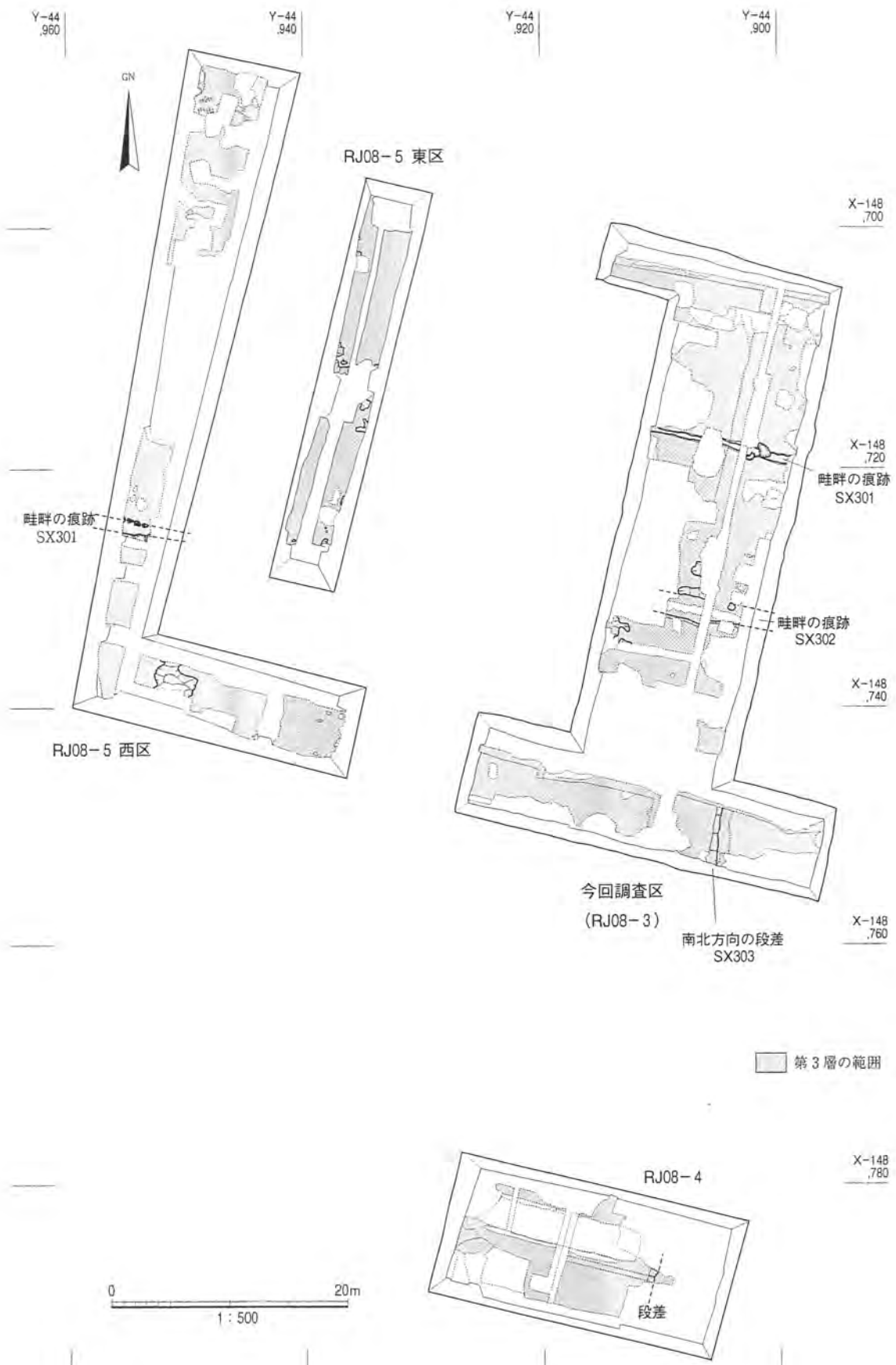


図11 周辺の調査地との関係(第3層上面)



図12 第2c層上面の遺構平面

物の中ではこれがもっとも新しい遺物である。これは近接のRJ08-4・08-5次調査結果とも符合し、本層が堆積したのは13世紀頃とみられる。

c. 第2層の遺構と第2層出土遺物

第2層はいずれも作土層である。

第2c層上面で見つかった遺構は、東西方向の畦畔の痕跡SX201である(図12)。SX201は幅約1.5m、高さ0.08mほどの東西方向の帯状の高まりで、上端には直径約0.8mの穴が一行に並んで掘られていた。この状況はSX201のほぼ延長線上にあるRJ08-5次西調査区と同様の高まりSX201でも観察され、一連の遺構と考えられるが、これらの穴の性格は不明である。

第2b層上面では調査区中央部で東西方向の畦畔の痕跡SX203と、その北側で人や偶蹄目の足跡が見つかった。

SX203は高くても0.03mほどの低い帯状の高まりで、幅は上端で約0.5m、下端で約0.7mである。偶蹄目の足跡は、爪先から踵までの長さが0.08mほどであった(図13)。水成層からは草食動物の歯も見つかった。こういった状況は西側のRJ08-5次調査でも見られ(図15)、SX203のほぼ延長線上にあるRJ08-5次調査の西調査区SX202は一連のものと考えられる。

また、第2b層下面で、溝SD202が見つかった。幅約1m、深さ0.12mほどの南北方向の溝である。

第2a層上面で溝SD204~206と小穴SP207が見つかった(図14)。SD204はやや蛇行するが、概ね東西方向の幅約1.2m、深さ0.03mほどの溝である。SD205は幅約1.0m、深さ0.03mほどの浅い溝で、SD204とほぼ並行している。SD206は幅約0.5m、深さ0.07mほどの溝で、SD204・205とほぼ並行している。これらの溝は礫を含む灰褐色シルト質粘土で埋まっていた。SP207は東西約0.8m、南北0.5m以上、深さ約10cmの小穴で、砂を含む灰黄褐色シルト質粘土で埋まっていた。

第2c層の出土遺物のうち、土師器の皿42~45・鉢46・杯47・甕48・羽釜49、須恵器の鉢52・平瓶口頸部53・杯高台54・捏ね鉢55~57・壺58、黒色土器A類皿50、瓦器碗60~64、中国製白磁59を図16上段に示した。

第2b層出土の遺物は、土師器の皿65~70・碗高台73、緑釉陶器碗75、内黒の黒色土器で10~11世紀頃の碗71・72、瓦器碗76・78・79・皿77、中国製劃花文青磁碗74を図16下段に示した。

第2a層出土の遺物は、土師器の皿80~83・85・86と杯84、須恵質の土錘87、須恵器捏ね鉢88、瓦器の碗89~92・瓦質土器鍋93を図17に示した。

これら第2層の出土遺物は14世紀までのものである。

d. 第1層出土遺物

第1層から近世初頭までの遺物が見つかった。このうち、土師器皿94~96、須恵器捏ね鉢97、瓦器碗98・99、巴文軒丸瓦100、肥前陶器の皿101と碗102、中国製青磁碗103・皿104を図18に示した。17世紀初頭頃の肥前陶器があり、これらが第1層の時期を示すものと考えられる。

iii) 遺構と遺物の検討

今回の調査結果から、本調査地は海から陸への変遷をたどっていたことが明らかとなった。海浜から湿地へ、そして離水した後に人が積極的に活動を始めた時期は12世紀ごろと考えられた。しかし、

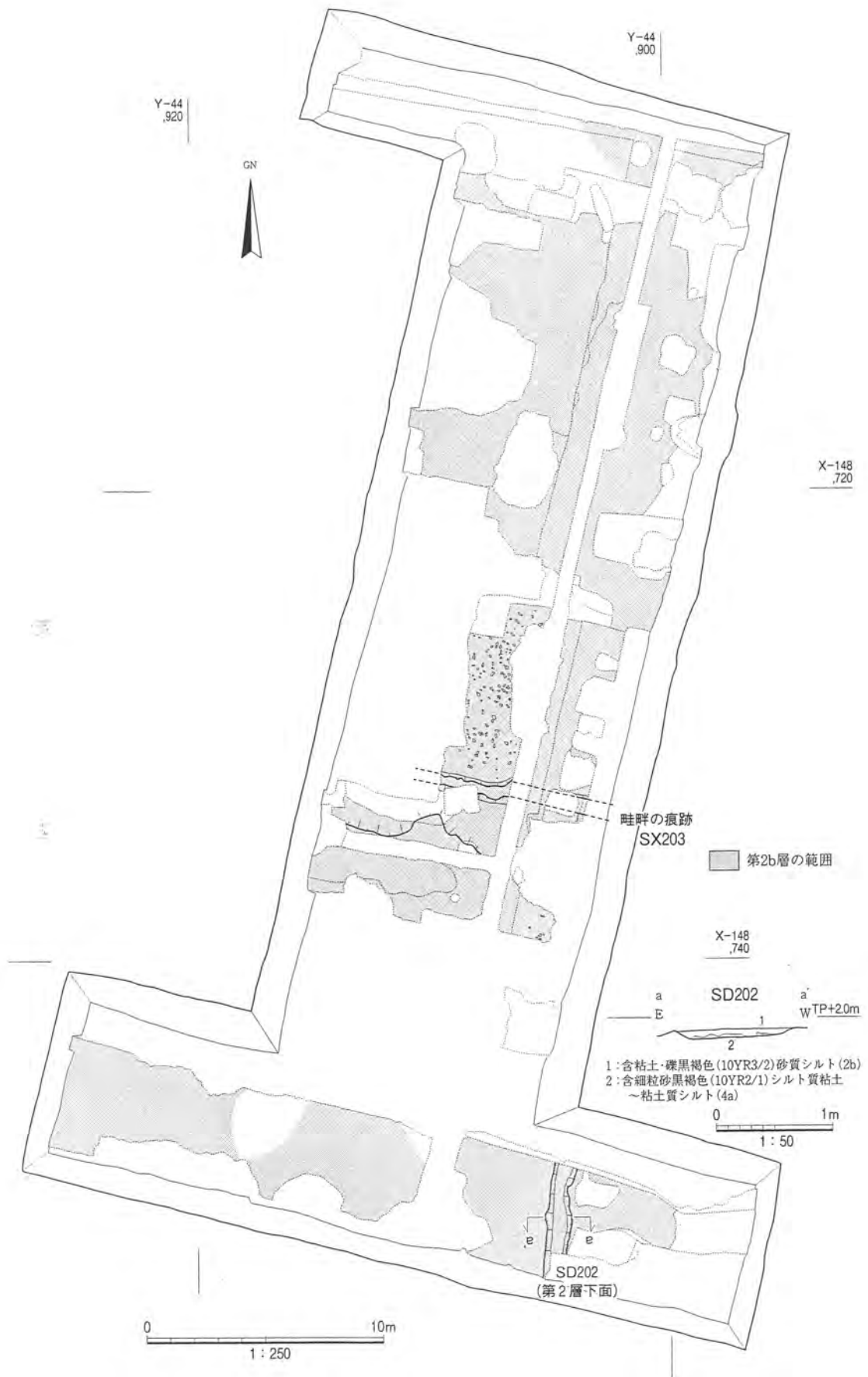


図13 第2b層上面と下面の遺構平面

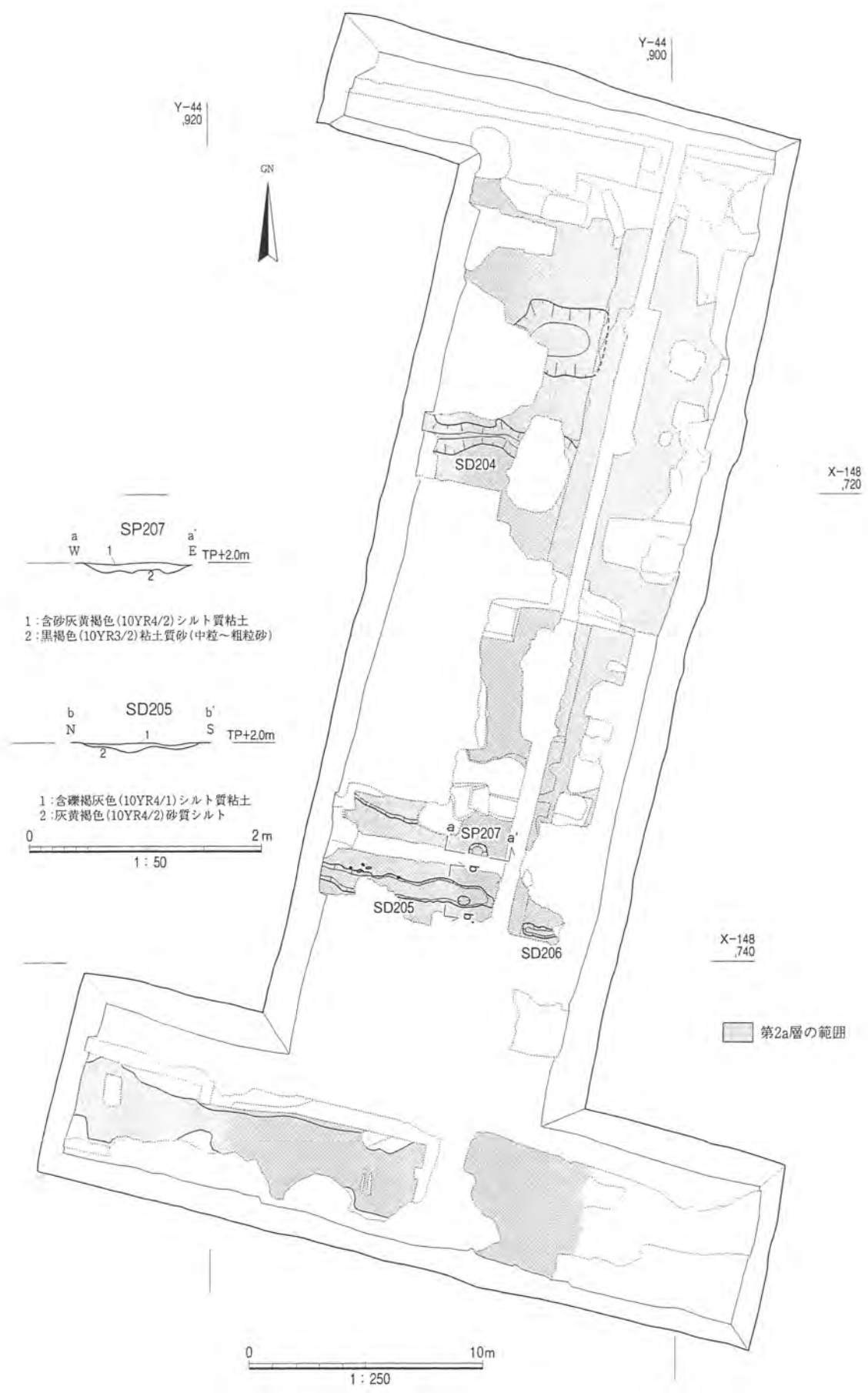


図14 第2a層上面の遺構平面

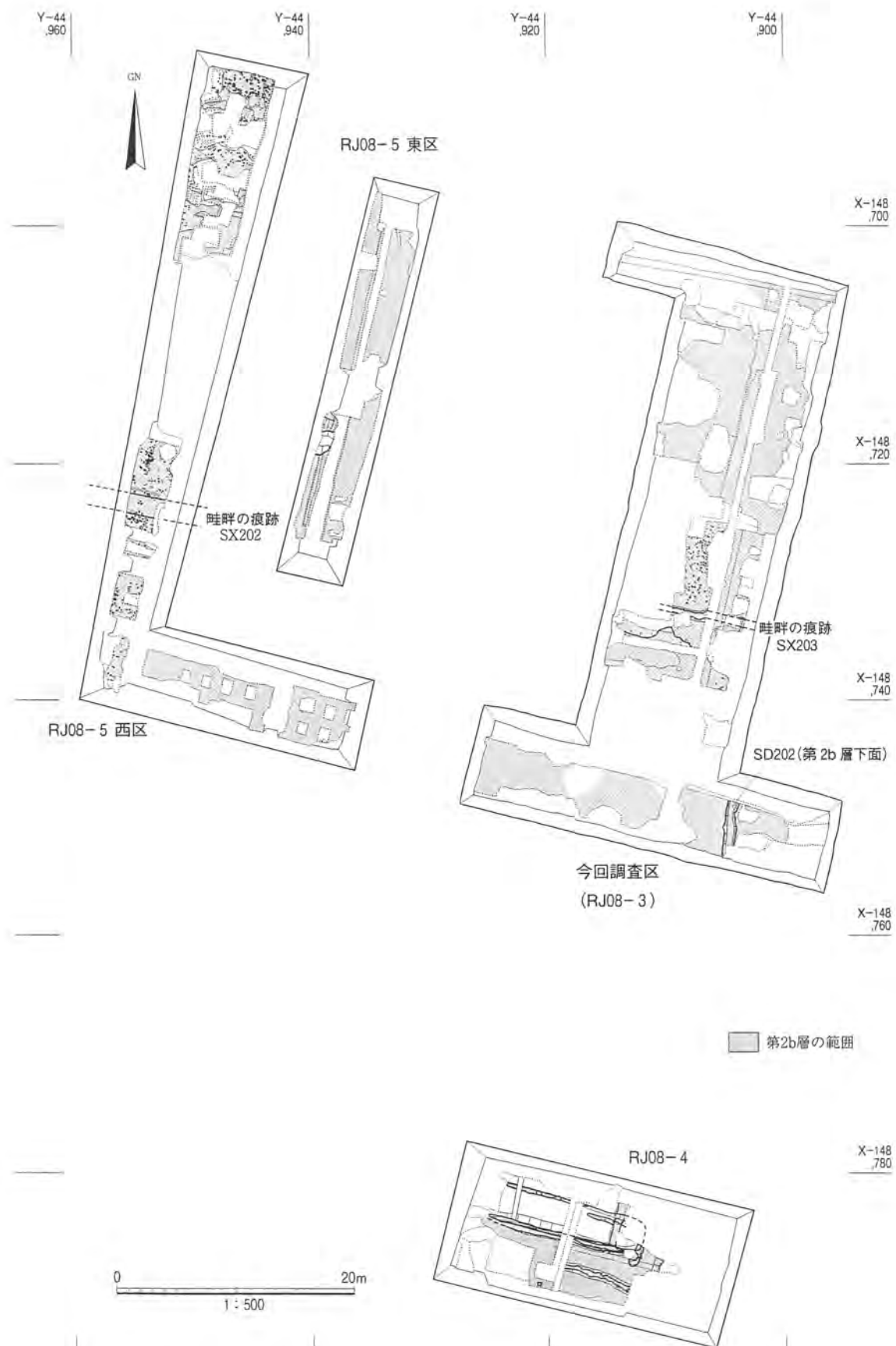


図15 周辺の調査地との関係(第2b層上面)

居住には適さない場所であったため、建物などは検出できなかった。

調査地東側には縄文海進時以降に形成された比高17mにもおよぶ海食崖がある。第5b層から第5a層下部にかけて観察されたラミナは東に傾斜しており、後背地からの碎屑物の供給のあったことが認められた。また、第5a層では4サイクルの上方細粒化が認められることから、4回以上の断続的な氾

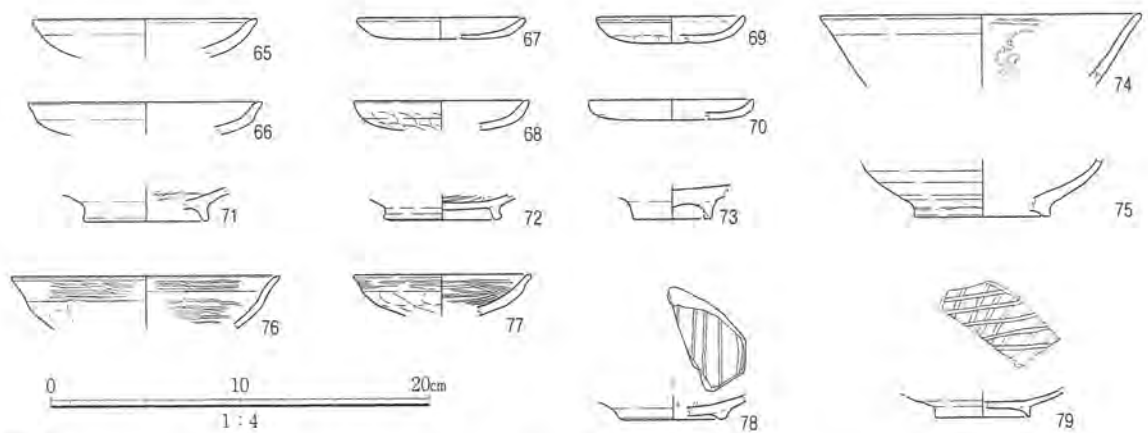
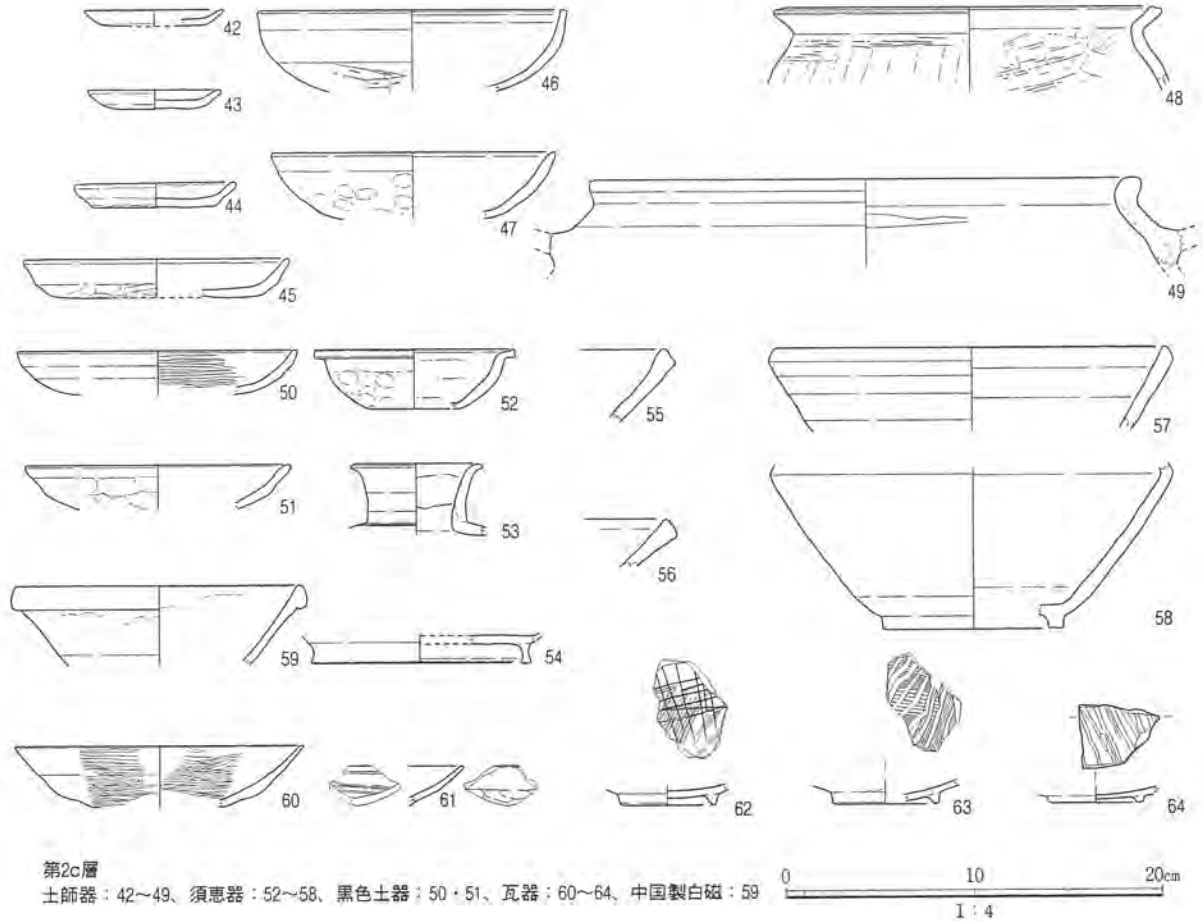


図16 出土遺物実測図(3)
第2c層(42～64)、第2b層(65～79)

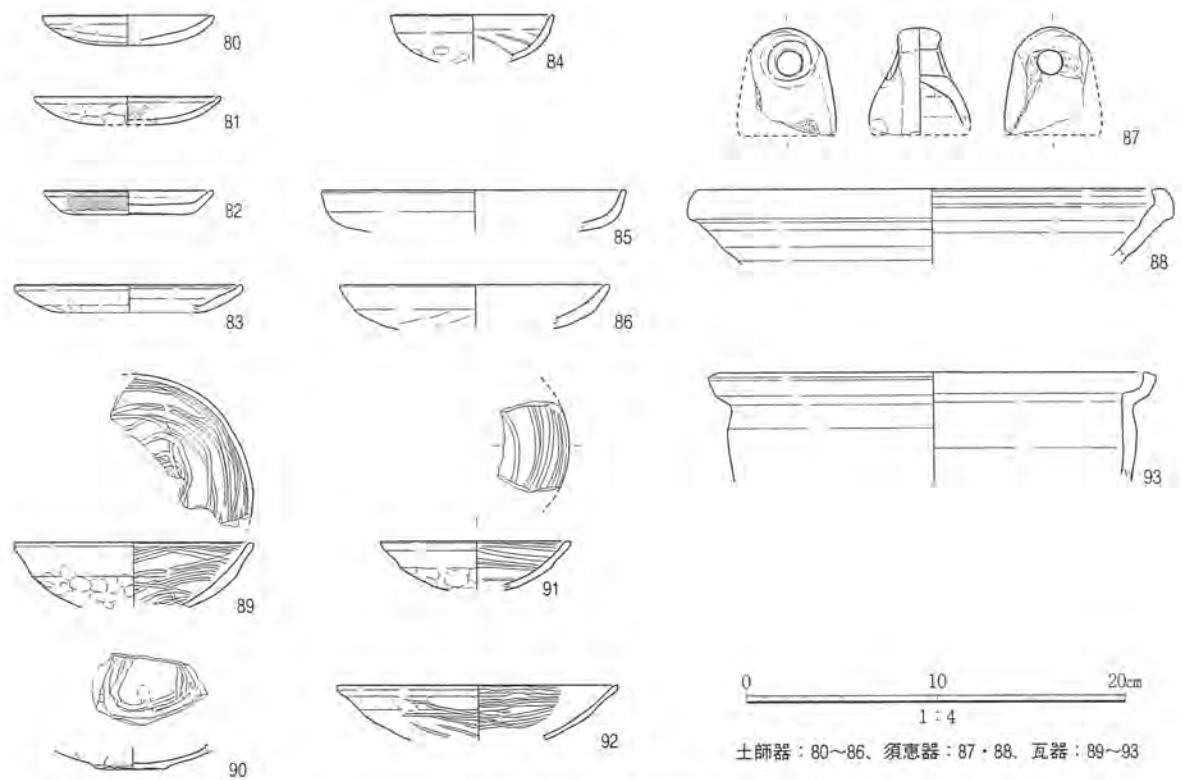


図17 出土遺物実測図(4)

第2a層(80~93)

濫があったことが推測される。図12に示すように、周辺の調査地(RJ08-3・08-5)の第5a層上面の地形を南北方向の断面図で見ると、南に向かってわずかに高くなっているが、おおよそはほぼ水平である。一方、東西方向では西側(RJ08-5次西調査区)が最も低く、東に向かって徐々に高くなり、RJ08-3次調査地でまた低くなっている。上位の第4b層の層厚もこれに調和的で、西側で厚く堆積しており、第5a層の高く残るところでは堆積しておらず、東側で薄くではあるが堆積している。この高まりが南北方向にどの程度連続するかは明らかではないが、連続すると仮定すると、高まりは浜堤とも考えられ、東側は浜堤後背の湿地であったと想定できる。第4層から出土した遺物の時期は12世紀頃、上位の第3層出土遺物は13世紀頃であることから、第4b層の堆積時間がおおよそ1世紀ほどであっ

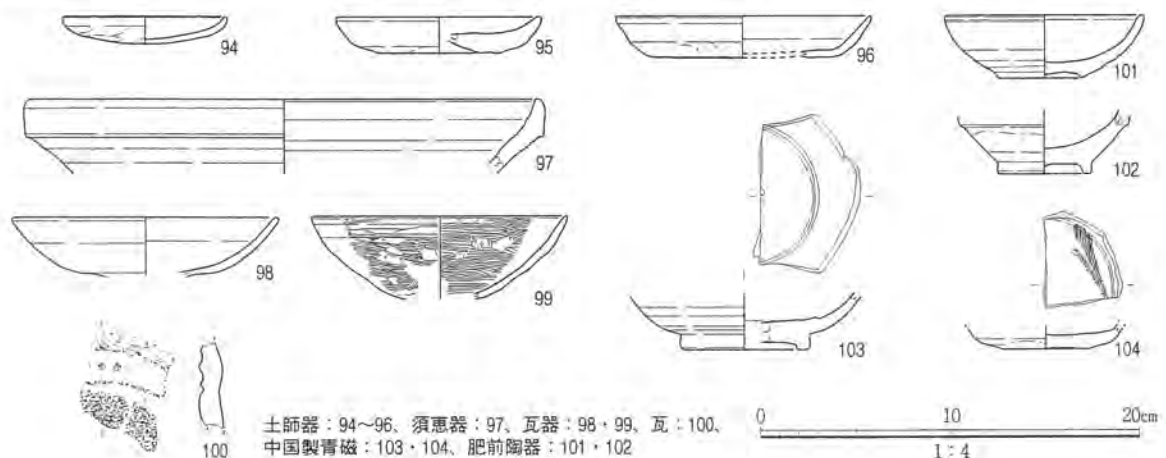
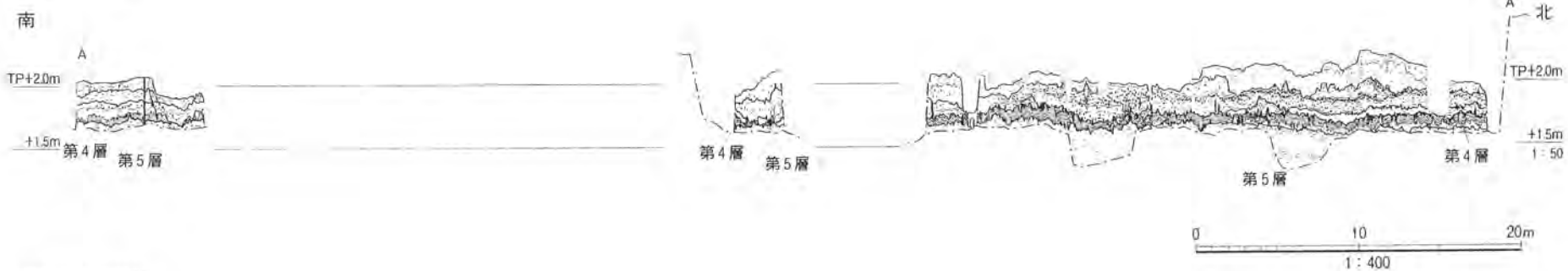


図18 出土遺物実測図(5)

第1層(94~104)

南北方向の起伏



東西方向の起伏

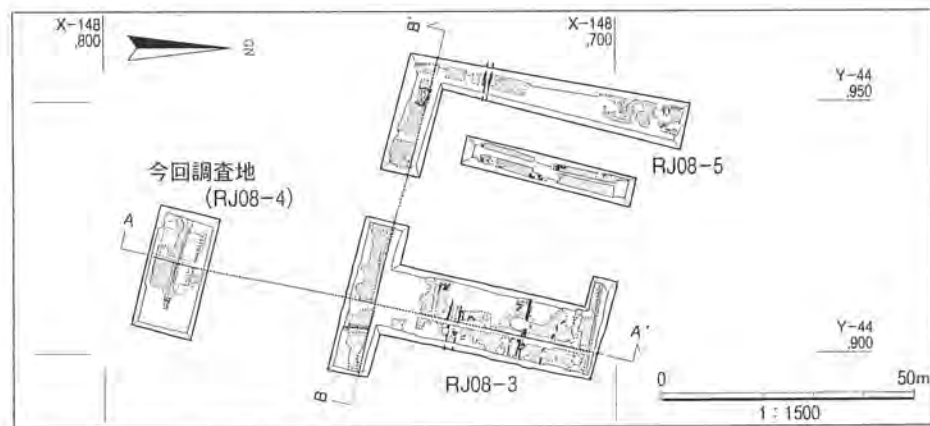
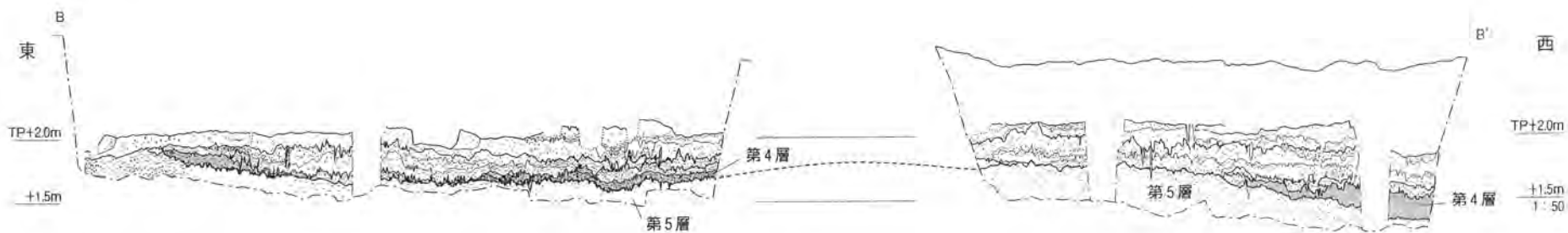


図19 調査地周辺の地山の起伏

たと見積もると、比較的長い間、湿地の環境が続いたものと推測され、このことから第4層堆積期は頻繁に(海)水の入り込む入江のような環境であったことが想像される。第4b層上面では畦畔が検出されており、湿地(入江)の環境から離水し、人が活動できる環境へと移り変わったことが窺える。

また、飛鳥時代や古代の遺物も出土遺物に含まれることから、周辺にはこういった古い時期の遺跡が存在したことが推測される。

3)まとめ

今回の調査により、12世紀から人が積極的にこの地を利用し始めたことがわかった。また、このあたりの陸地の成り立ちに関するてがかりを得ることができた。

引用参考文献

大阪市文化財協会2005、『株式会社ヤマダ電機による建設工事に伴う船出遺跡発掘調査(FD04-1)報告書』

大阪市文化財協会2006、『船出遺跡発掘調査(FD05-1)報告書』

大阪市文化財協会2007、『大阪木津市場株式会社による建設工事に伴う敷津遺跡発掘調査(SX06-1)報告書』

大阪市文化財協会2008、『下寺第1住宅用地における埋蔵文化財試掘調査(RJ07-1)報告書』

大阪市文化財協会2009a、『株式会社明来による建設工事に伴う敷津遺跡発掘調査(SX08-1)報告書』

大阪市文化財協会2009b、『大阪木津市場株式会社による建設工事に伴う敷津遺跡発掘調査(SX08-2)報告書』

大阪市文化財協会2009c、『浪速区下寺三丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(南区)(RJ08-4)報告書』

大阪市文化財協会2009d、『浪速区下寺二丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(西区)(RJ08-5)報告書』

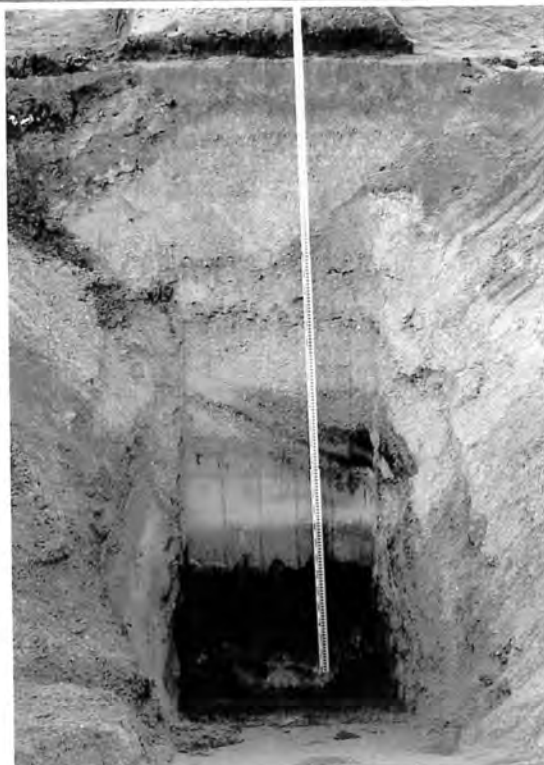
調査地より
東の崖を臨む
(南西から)



調査地北半部全景
(第5層、南から)



北半部の地層断面
(東から)



調査地北半部
第4b層上面全景
(南から)



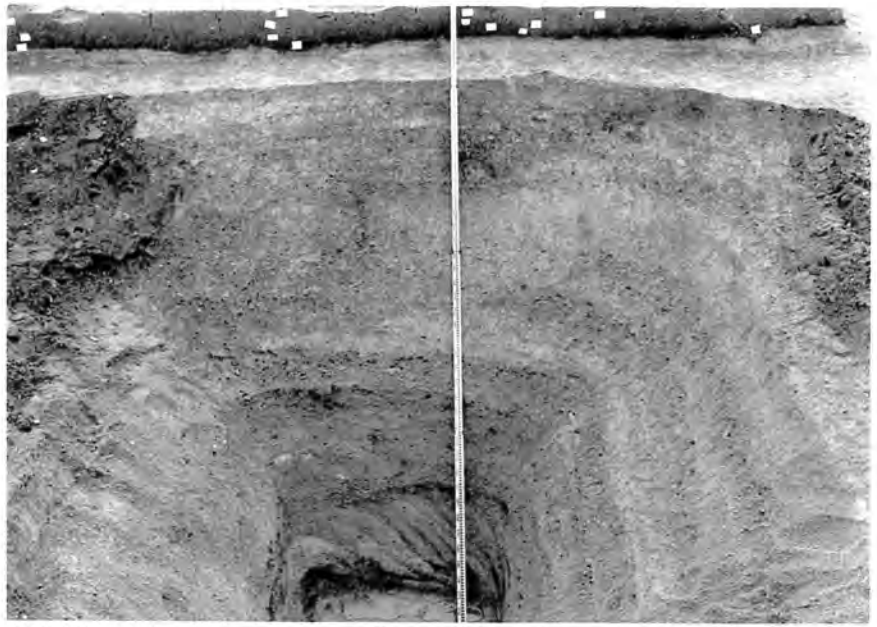
北半部
第4b層上面の畦畔
(西から)



北半部北端の足跡群
(東から)



調査地南半部の
地層断面
(北から)



南半部第5層
以下の地層
(北から)



調査地南半部
第4b層上面全景
(北から)



南半部
東西方向の畦畔
(第4b層上面、西から)



南半東張出部
南北方向の畦畔
(第4b層上面、西から)



浪速区下寺三丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(南区) (RJ08-4) 報告書

調査箇所	大阪市浪速区下寺3丁目
調査面積	300㎡
調査期間	平成20年12月6日～12月26日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	文化財研究部次長 南 秀雄、松本啓子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地西側の海蝕崖の名残とされる急な崖の裾部を崖に沿って南北に通る松屋町筋の西側に位置している(図1)。崖の上を通る谷町筋の標高は約21m、これと平行して崖の下を通る松屋町筋の標高が約4mで、高低差は約17mにもなる。本調査地の地表面は松屋町筋よりもさらに1mほど低い。崖の上、谷町筋の東側には飛鳥時代より連綿と続く古刹・四天王寺があって、これを中心とした古代からの門前町が一带に広がっている。発掘調査においても崖の上では古代～近世の遺構や遺物が多く見つかっているが、本調査地周辺の、崖より西側の低い場所では今までに発掘調査は行われていない。しかし、本調査地よりさらに西側の臨海部では、南海難波駅南の船出遺跡(FD04-1・05-1)や敷津遺跡(SX06-1・08-1・08-2)などの発掘調査があり、海浜部における古墳時代中期以降の陸化のようすや中世の開発状況などに関する資料が得られ始めている[大阪市文化財協会2005・2006・2007・2009a・2009b]。

平成19年8月9・10日に本調査地を含めた大阪市営下寺第1住宅用地において試掘調査を行ったところ、中世の遺物包含層が確認された[大阪市文化財協会2008]。そこで、関係諸機関と協議の上、本調査を行うことになった。

調査は平成20年12月6日より開始した。浪速区下寺二丁目と三丁目を分ける道路南側の敷地の東半部に、図2のように300m²の調査区を設定した。

試掘結果に基づき、地表下約0.7mまでの間の現代～近代の地層は重機によって除去し、以下、地表下約1.3mの自然堆積層までを、各地層毎に人力で掘下げて遺構・遺物を確認し、記録を取った。12月10日に基準点測量を、また12月20日に写真測量を行った。

12月25・26日には埋戻しを行い、現地における発掘調査を完了した。

なお、本報告で使用した方位は世界測地系による座標北で、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文図中ではTP+○mと記している。



図1 調査地位置図

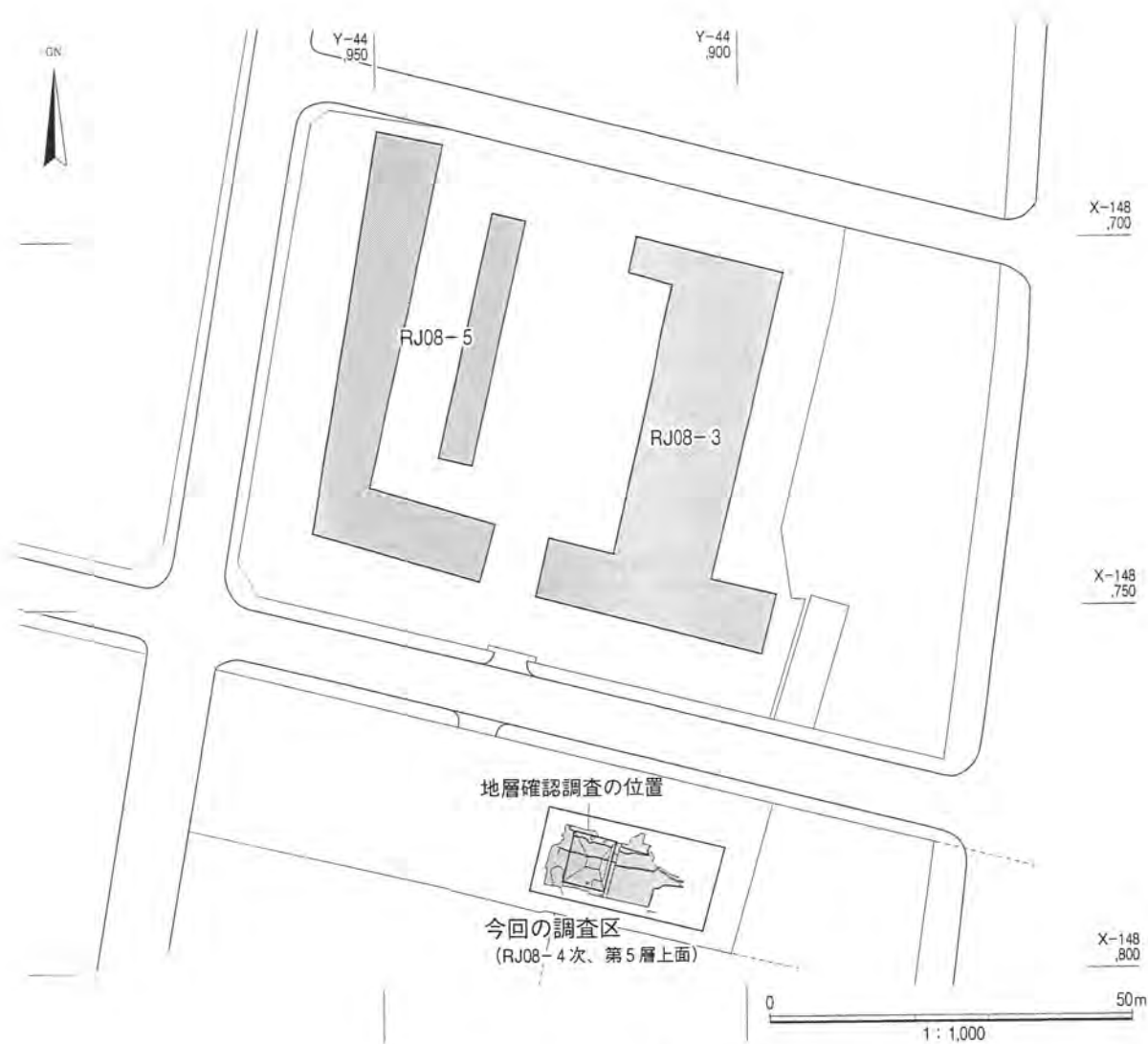
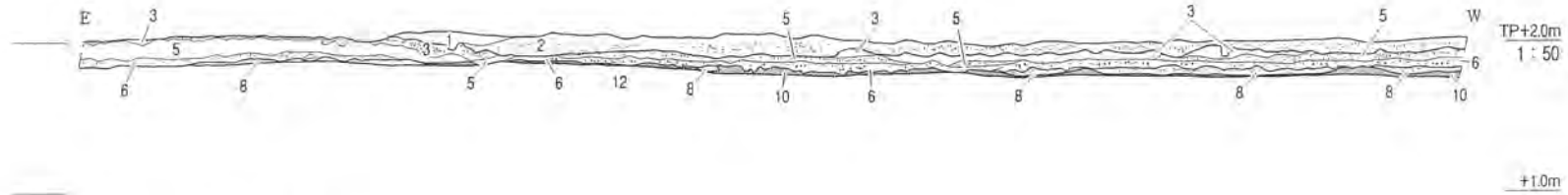


図2 調査区位置図

遺構と地層の関係	層序	岩相	遺物	時期
	1a	近世作土層	肥前陶器・土師器 ・須恵器・瓦器	16世紀末～ 17世紀初頭
	1b			
	2a	中世作土層	土師器・瓦器 ・中国製白磁	14世紀頃
	2b	暗灰黄色粘土質シルト		
	2c	灰黄褐色シルト質粗粒～中粒砂		
	第3層	中世水成層	土師器・須恵器 ・瓦器・中国製白磁	13世紀頃
	4b	古代湿地性堆積層	土師器 ・須恵器・瓦器	12世紀頃
	5a	更新世段丘構成層 (地山)	黄褐色極細粒砂質シルト ～灰褐色粗粒砂	
	5b			
	第6層	海成粘土層	灰色砂質シルト～粘土	

図3 地層と遺構の関係

東西(東半)断面図



南北断面図

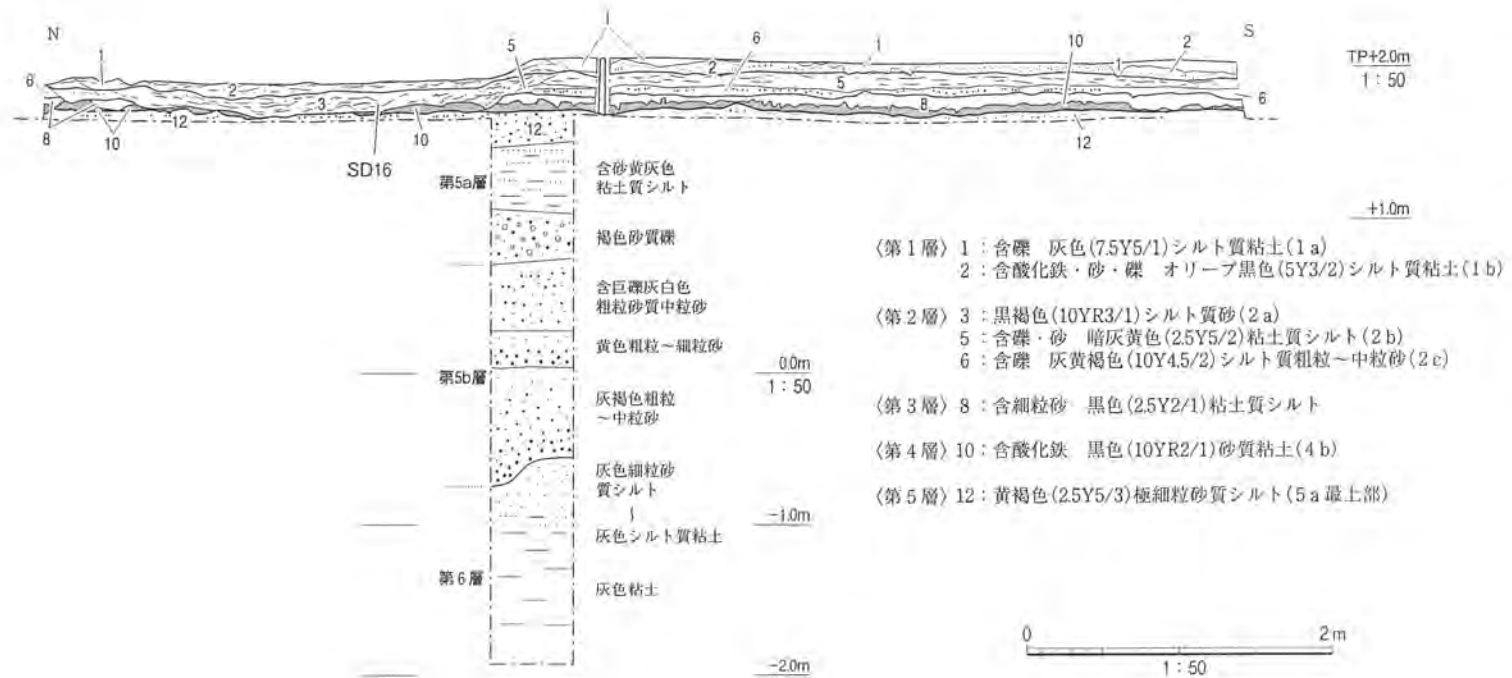


図4 地層断面図

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

周辺のRJ08-3・08-5次調査の結果を含めた本遺跡における基本層序は図3のとおりで、図4は本調査区の地層断面図である。

現代表土直下の第1層は、周辺の調査と同様に本調査区でも第1a・1b層の上下2層に区分できる近世初頭の作土層である。第1a層は礫を含む灰色シルト質粘土からなり、第1b層は砂・礫を含むオリブ黒色のシルト質粘土からなる。層厚はともに最大8cmである。第1a層は部分的に残存する程度であったが、第1b層は調査区全域に分布していた。第2b層は酸化鉄の斑文が目立ち、上面で検出した豊臣後期の溝SD16の埋土でもある。

第2層は中世の水田作土層で、第2a・2b・2c層の3層に区分できる。第2a層は黒褐色のシルト質砂、第2b層は礫や砂を含む暗灰黄色の粘土質シルト、第2c層は礫を含む灰黄褐色のシルト質粗粒～中粒砂からなる。それぞれの最大層厚は、第2a層が15cm、第2b層が13cm、第2c層が8cmである。本層からは14世紀頃までの遺物が出土した。

第3層は黒色粘土質シルトからなり、細粒砂を多含する。最大層厚は8cmで、8～13世紀までの遺物が出土した。

第4層は湿地の堆積層で、黒色シルト質粘土からなる。酸化鉄の斑文が目立ち、最大層厚は8cmである。東に向かって次第に層厚を減じ、調査区東端には分布しない。本層上面で人や偶蹄目の足跡、植物の根の痕跡が検出された。本層から12世紀ごろの遺物が出土した。

第5層以下の層準は調査区中央部で行った深掘りトレンチの、主として断面観察により、TP-1.9

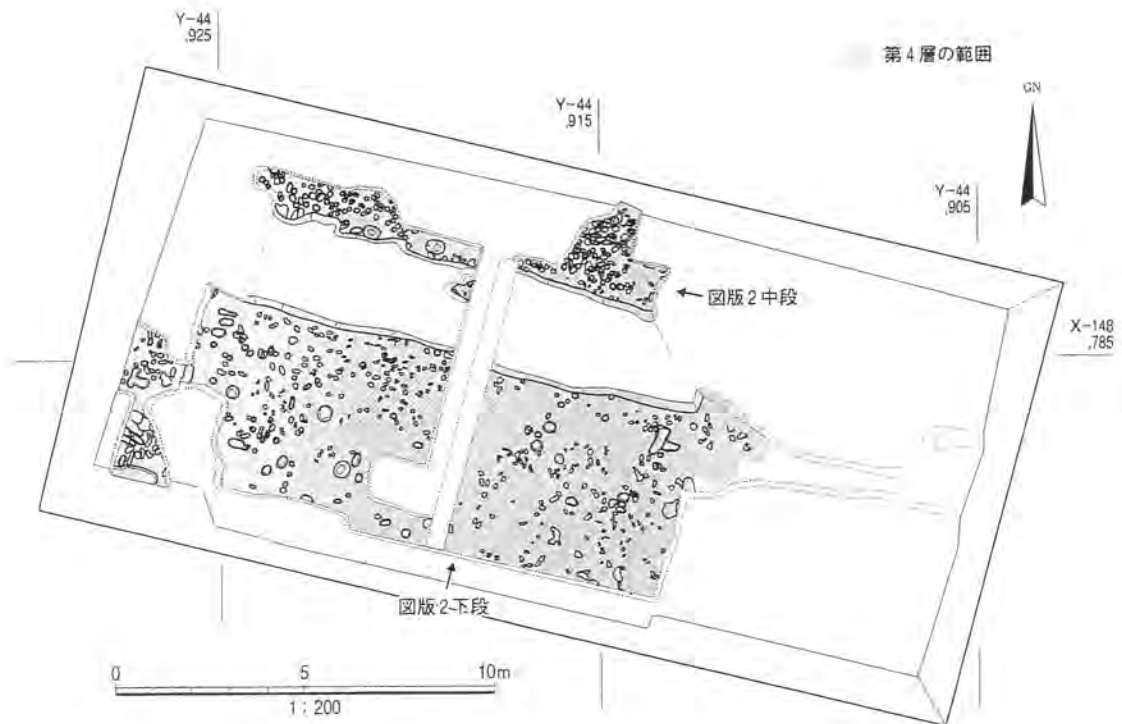


図5 第4層上面の遺構平面図

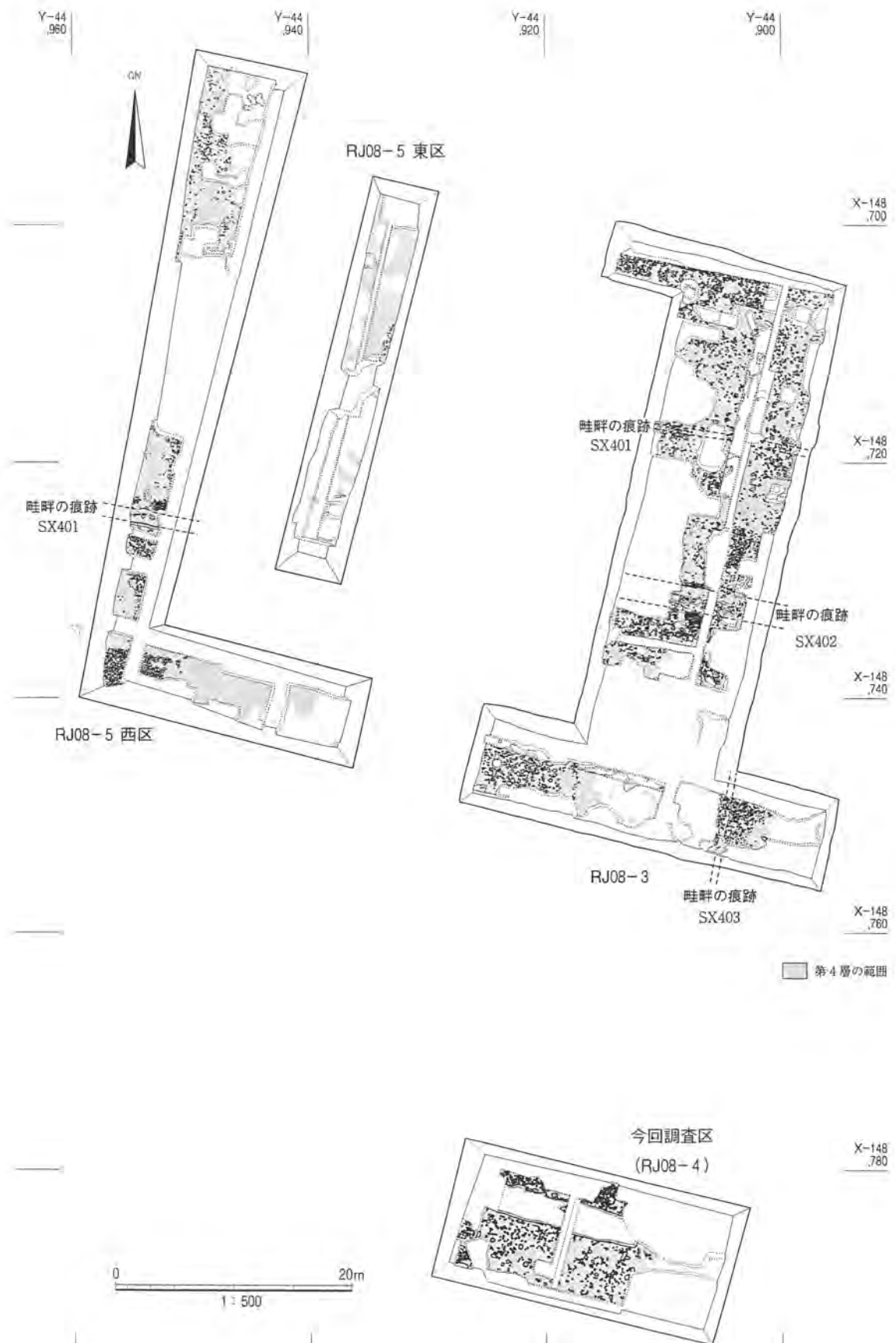


図6 周辺の調査との関係(第4層上面)

mまでの地層を観察した。

第5層は第5a・5b層の2層に区分できる海浜成層で、出土遺物はない。第5a層は上部が褐色極細粒砂質シルト、中部が砂を含む黄灰色粘土質シルト、下部が褐色砂質礫からなり、それぞれの最大層厚は約25cm、48cm、36cmであった。

第5b層は上部が礫を含む灰白色中粒砂質細粒砂、中部が黄色粗粒～細粒砂、下部が灰褐色粗粒～中粒砂からなり、それぞれの最大層厚は48cm、25cm、78cmであった。中部および下部では上方細粒化が見られた。本層上面は東側がやや高くなっており、これは第4層堆積前の旧地形を示すものと考えられた。

第6層は海成層である。灰色細粒砂質シルト～粘土からなり、上方粗粒化が見られた。層厚は140cm以上である。湧水によるトレンチ壁面の崩落がひどく、これより下位の層準は確認できなかった。なお、第5b層との境界の標高はTP-0.5～-0.7mであった。

ii) 遺構と遺物(図5～11、図版2)

a. 第4層上面の遺構と第4層出土遺物

第4層の上面では、多数の足跡を検出した(図5)。足跡や根の痕跡の分布には粗密がある。足跡は人のものと偶蹄目のものが見られた(図版2中・下段)。偶蹄目の足跡は踵から爪先までが8cmほどの大きさであった。同様の足跡は近接するRJ08-3・08-5次調査でも検出された(図6)。これらの調査では畦畔の痕跡も見つかっており、本調査地も含め、このあたり一帯には水田が広がっていて、本調査地は東南の端に近い位置にあるものと考えられる。

第4層からは土師器や須恵器、瓦器などが出土した。図化しえないほどの破片が多いが、このうち土師器の台付皿の脚部8を図11に示した。11～12世紀頃のものと思われる破片である。

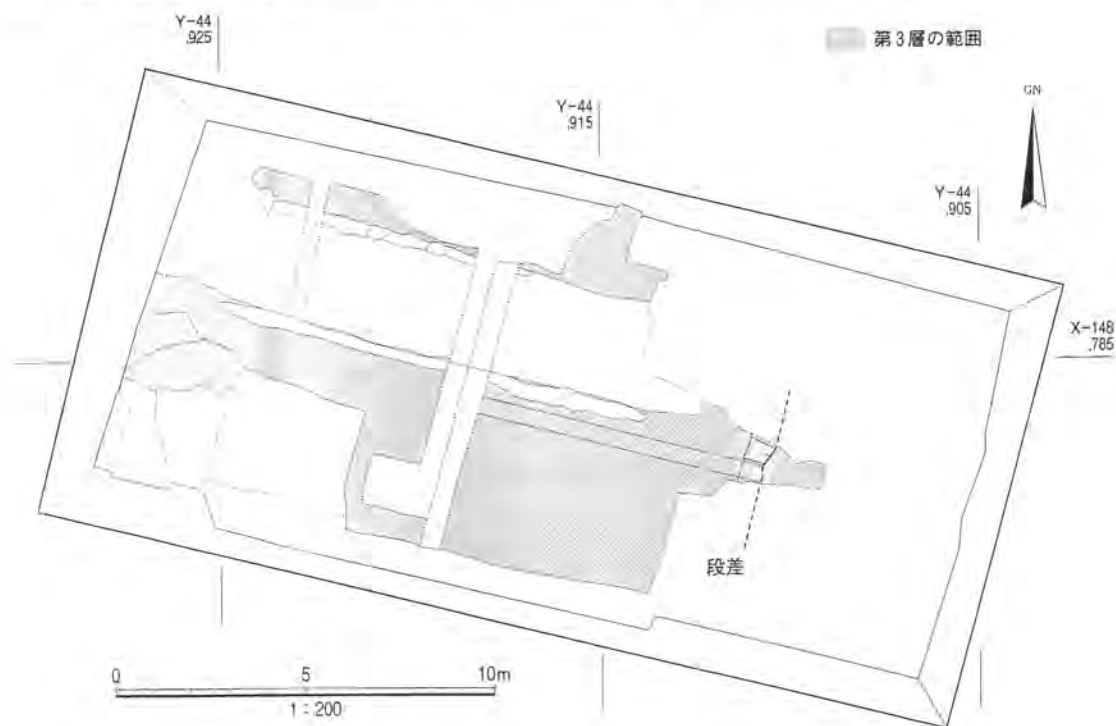


図7 第3層上面の遺構平面図

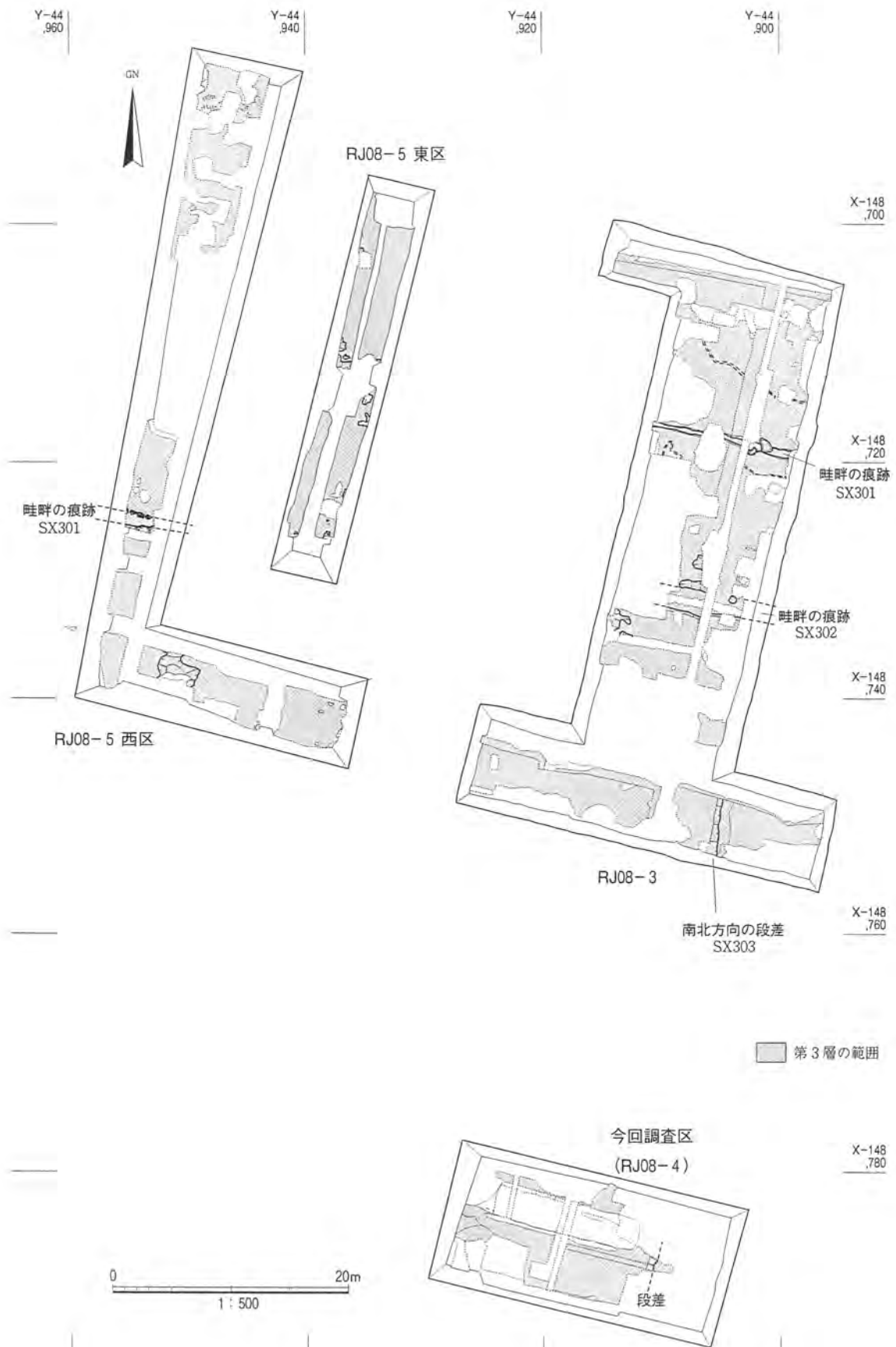


図8 周辺の調査との関係(第3層上面)

RJ08-3・08-5次調査においても第4層から12世紀代の遺物が出土していて、これらより新しい時期のものは出土していないので、本調査区も含め、第4層の堆積した時期は12世紀頃ではないかと考えられる。

b. 第3層上面の状況と第3層出土遺物

本層の上面に明確な遺構は見られなかった(図7)。近接するRJ08-3・08-5次調査では、第3層の上面で畦畔の痕跡や南北方向の段差などが検出されており(図8)、本層の上に水田が作られていたものと推定される。本調査区の東端で見られた第3層上面の0.1mほど西側が低くなる部分は、検出できた範囲が狭くて断定はできないが、あるいはRJ08-3次調査の段差SX303の続きであるのかも知れない。

第3層の出土遺物には土師器・須恵器・瓦器などがあるが、小破片ばかりで、図化できないものが多い。瓦器の破片は13世紀頃のものを含み、本層の出土遺物の中ではこれがもっとも新しい遺物である。これは近接のRJ08-3・08-5次調査結果とも符合する。したがって、本層が堆積したのは13世紀頃と考えられる。本層の出土遺物のうち、奈良時代の土師器杯1と、土師器の甕20・21を図11に図示した。これらは本調査地周辺の古代の遺跡から流されてこの地に留まったものと考えられる。

c. 第2層の遺構と第2層出土遺物

SD16は幅約0.8m、深さ約3.3mの東西方向の溝である。埋土は第2a層である。上面では畦畔の痕跡とみられる高さ0.05mほどの帯状の高まりが2条見られ、これらの上には小穴SP12・13や土坑SK10・11などが掘られていた。北側の帯状の高まりは調査区の中央部で北側にも延びていた。こういった畦畔の痕跡とみられる帯状の高まりは周辺の調査(RJ08-3・08-5)でも見つかっている(図10)。第2c層は第2b層の範囲と重なる位置で見られたが、上面はかなり失われていたため、主だった遺構は

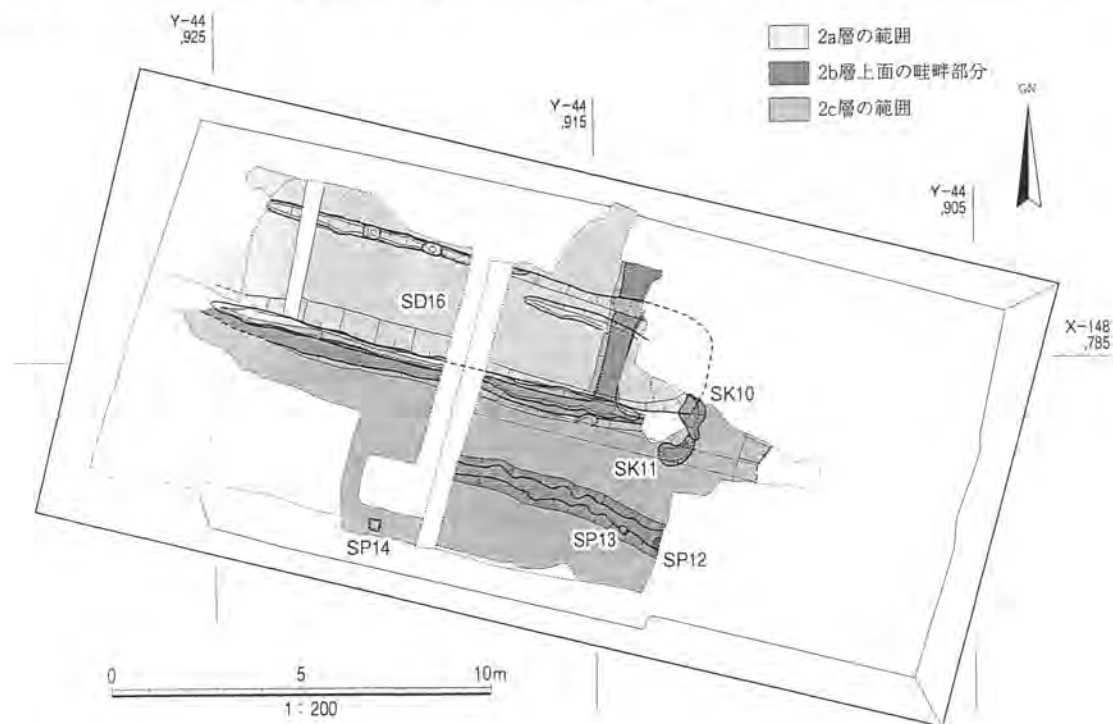


図9 第2層の遺構平面図

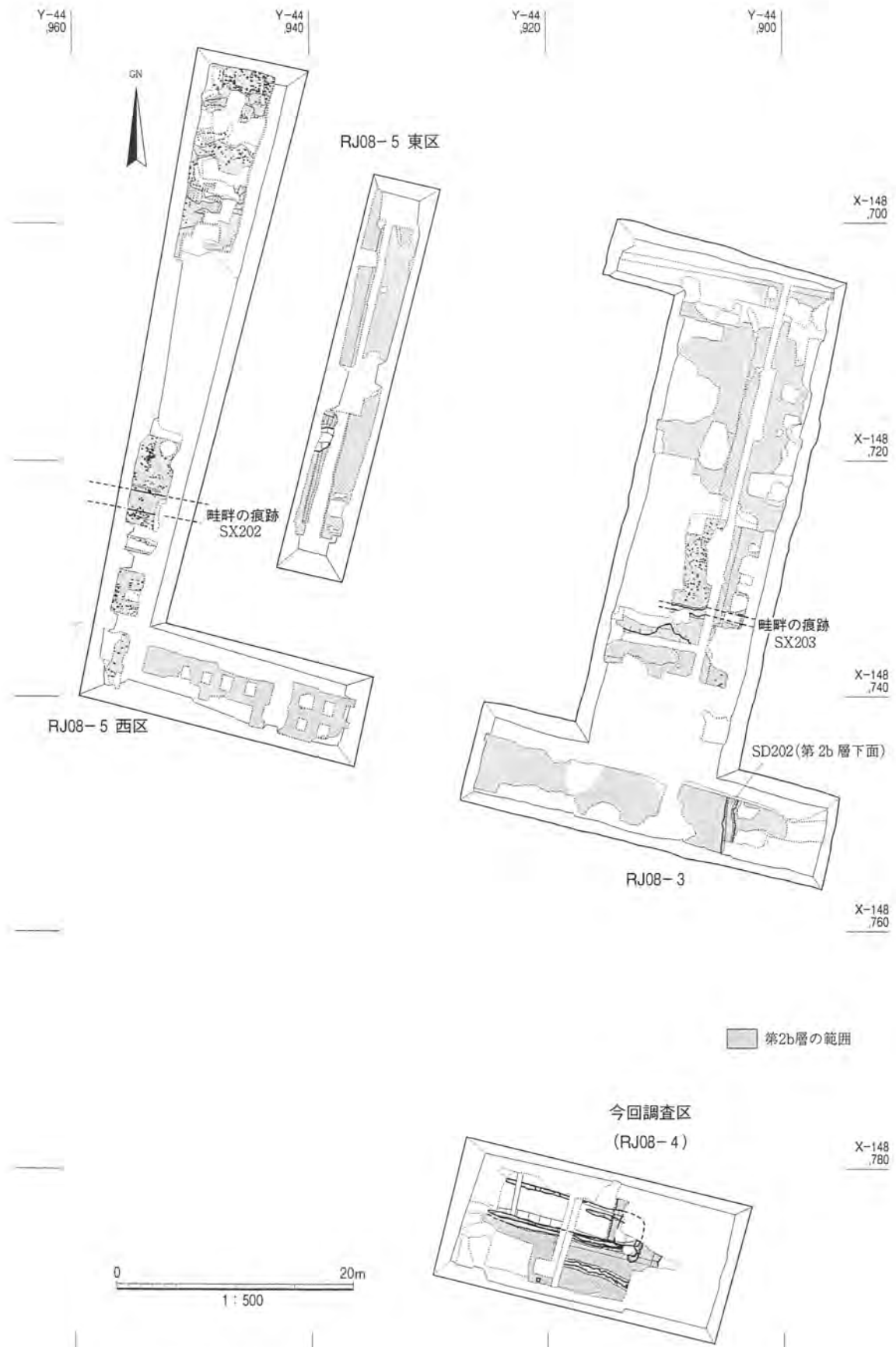


図10 周辺の調査との関係(第2b層)

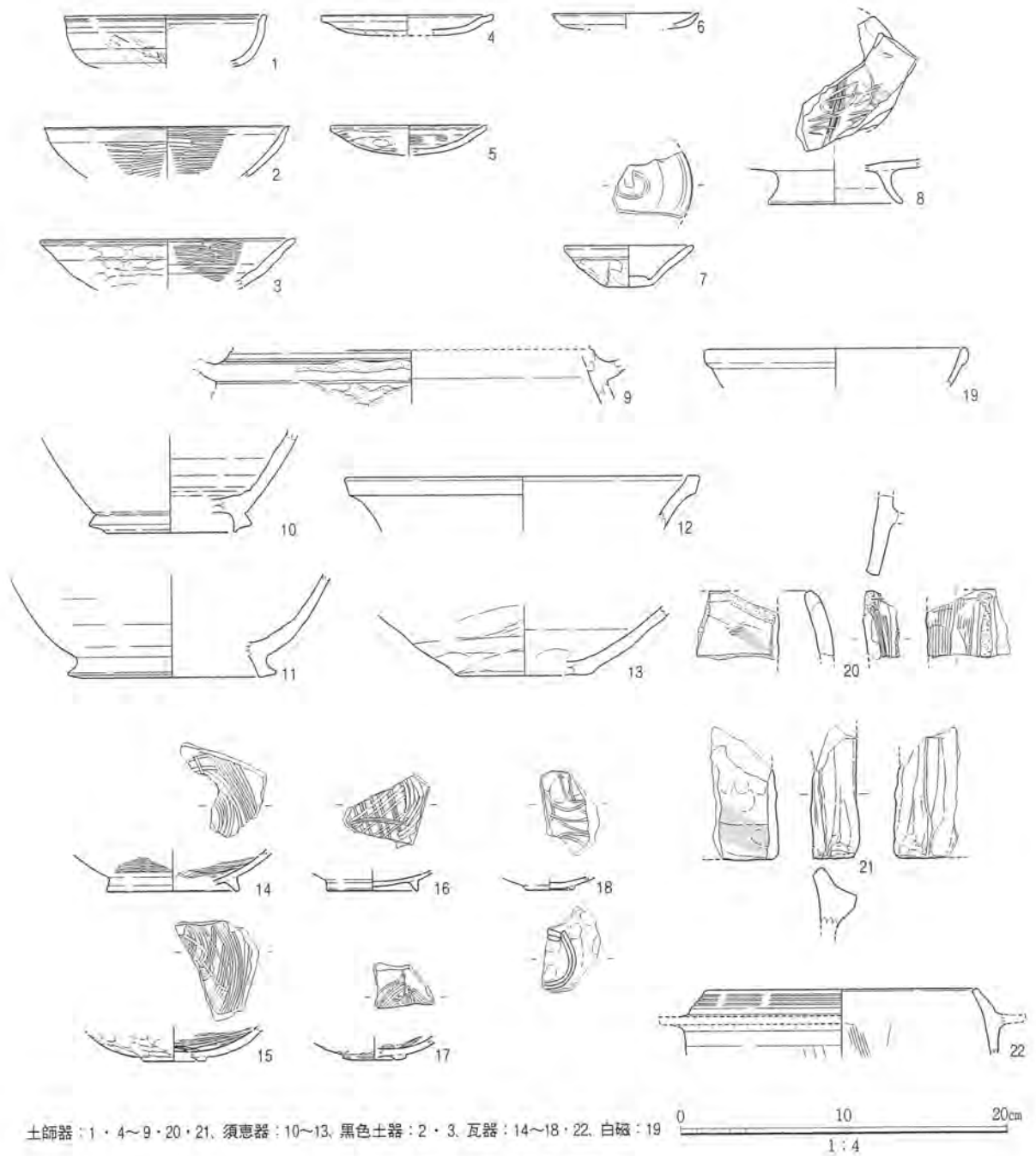


図11 出土遺物実測図

第4層(8)、第3層(1・20・21)、第2c層(2・4・6・14・16・18)、
第2b層(5・9・19)、第2a層(15)、第1b層(3・7・10～13・22)

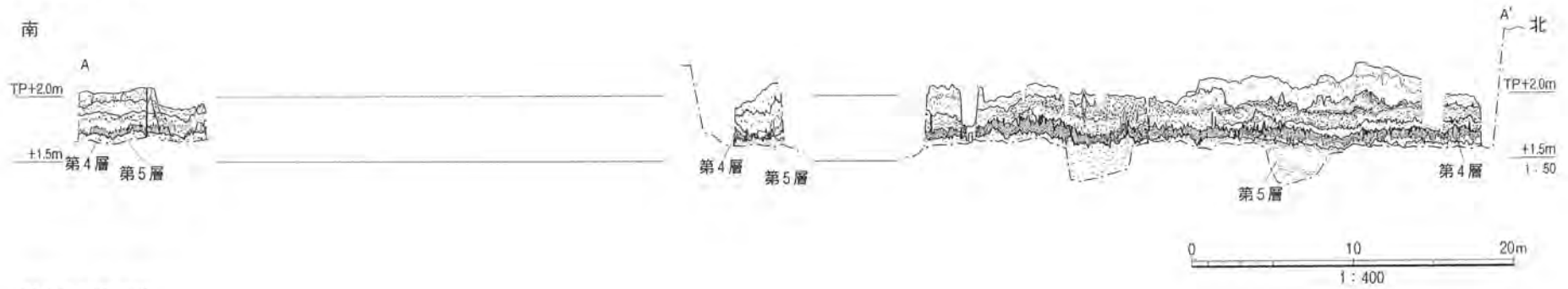
見られなかった。

図11に第2c層から出土した黒色土器A類の碗2、土師器の皿4・6、瓦器碗14・16・18と、第2b層から出土した土師器の皿5・羽釜9、中国製白磁玉縁碗19、また第2a層出土の瓦器碗15を、図示した。これらは14世紀までのものである。

d. 第1層出土遺物

第1層から近世初頭までの遺物が見つかった。このうち、第1b層出土の黒色土器A類の碗3と土師器の皿7、須恵器壺の底部10・11および口縁部12・捏ね鉢13、瓦質の羽釜22を図11に示した。3・10

南北方向の起伏



東西方向の起伏

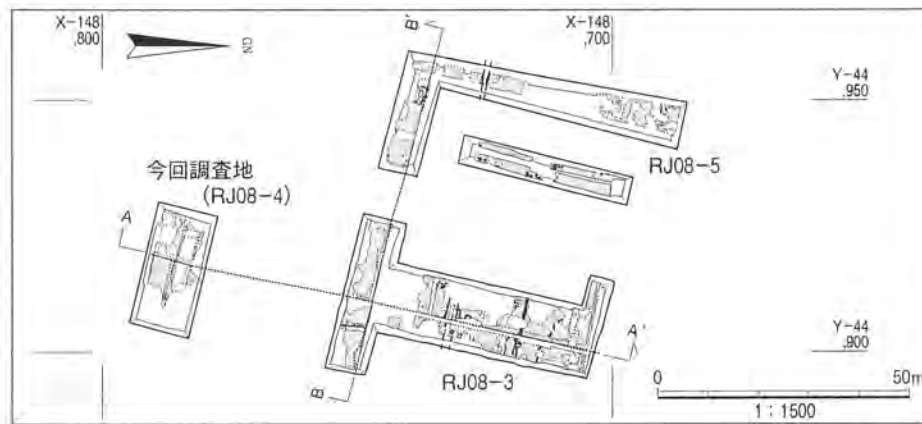
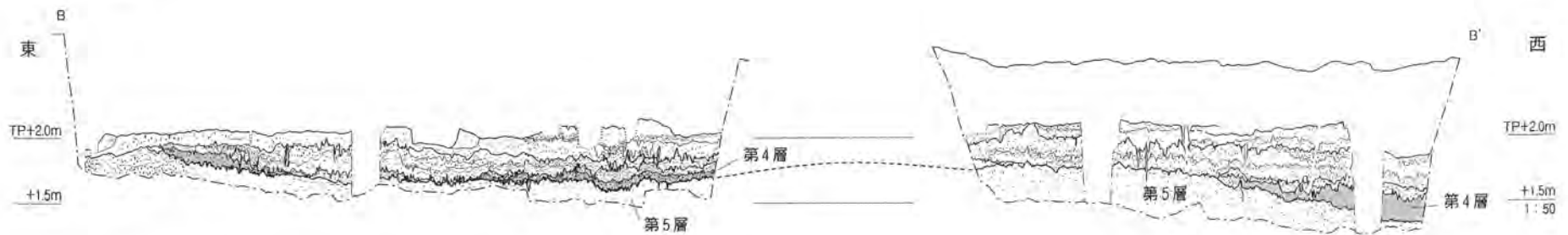


図12 調査地周辺の地山の起伏

～13など古代～中世前半のものも含まれるが、中世末の16世紀末のものがあり、これが第1層の時期を示すものと考えられる。

iii) 遺構と遺物の検討

今回の調査結果から、本調査地は海から陸への変遷をたどっていたことが明らかとなった。海浜から湿地へ、そして離水した後に人が積極的に活動を始めた時期は12世紀ごろと考えられた。しかし、居住には適さない場所であったため、建物などは検出できなかった。

調査地東側には縄文海進時以降に形成された比高17mにもおよぶ海食崖がある。第5b層から第5a層下部にかけて観察されたラミナは東に傾斜しており、後背地からの碎屑物の供給のあったことが認められた。また、第5a層では4サイクルの上方細粒化が認められることから、4回以上の断続的な氾濫があったことが推測される。図12に示すように、周辺の調査地(RJ08-3・08-5)の第5a層上面の地形を南北方向の断面図で見ると、南に向かってわずかに高くなっているが、おおよそはほぼ水平である。一方、東西方向では西側(RJ08-5次西調査区)が最も低く、東に向かって徐々に高くなり、RJ08-3次調査地でまた低くなっている。上位の第4b層の層厚もこれに調和的で、西側で厚く堆積しており、第5a層の高く残るところでは堆積しておらず、東側で薄くではあるが堆積している。この高まりが南北方向にどの程度連続するかは明らかではないが、連続すると仮定すると、高まりは浜堤とも考えられ、東側は浜堤後背の湿地であったと想定できる。第4層から出土した遺物の時期は12世紀頃、上位の第3層出土遺物は13世紀頃であることから、第4b層の堆積時間がおおよそ1世紀ほどであったと見積ると、比較的長い間、湿地の環境が続いたものと推測され、このことから第4層堆積期は頻繁に(海)水の入り込む入江のような環境であったことが想像される。第4b層上面では畦畔が検出されており、湿地(入江)の環境から離水し、人が活動できる環境へと移り変わったことが窺える。

また、飛鳥時代や古代の遺物も出土遺物に含まれることから、周辺にはこういった古い時期の遺跡が存在したことが推測される。

3) まとめ

今回の調査により、12世紀から人が積極的にこの地を利用し始めたことがわかった。また、このあたりの陸地の成り立ちに関するてがかりを得ることができた。

引用参考文献

大阪市文化財協会2005、『株式会社ヤマダ電機による建設工事に伴う船出遺跡発掘調査(FD04-1)報告書』

大阪市文化財協会2006、『船出遺跡発掘調査(FD05-1)報告書』

大阪市文化財協会2007、『大阪木津市場株式会社による建設工事に伴う敷津遺跡発掘調査(SX06-1)報告書』

大阪市文化財協会2008、『下寺第1住宅用地における埋蔵文化財試掘調査(RJ07-1)報告書』

大阪市文化財協会2009a、『株式会社明来による建設工事に伴う敷津遺跡発掘調査(SX08-1)報告書』

大阪市文化財協会2009b、『大阪木津市場株式会社による建設工事に伴う敷津遺跡発掘調査(SX08-2)報告書』

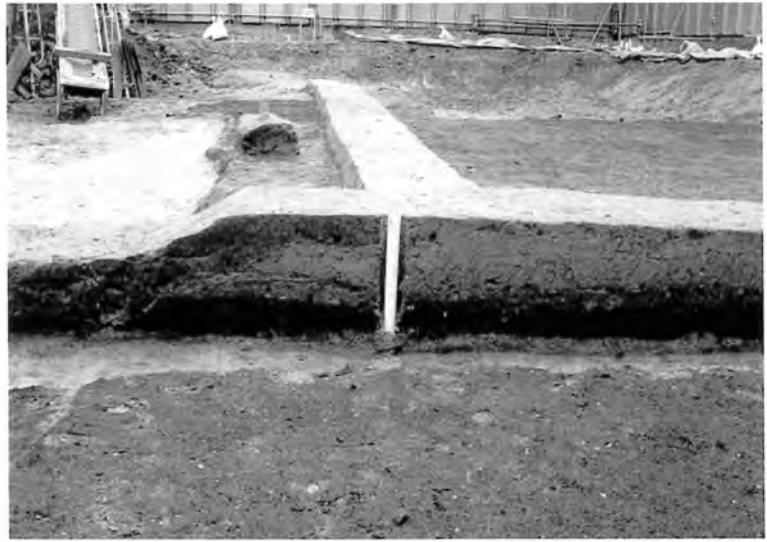
大阪市文化財協会2009c、『浪速区下寺二丁目における埋蔵文化財発掘調査(RJ08-3)報告書』

大阪市文化財協会2009d、『浪速区下寺二丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(RJ08-5)報告書』

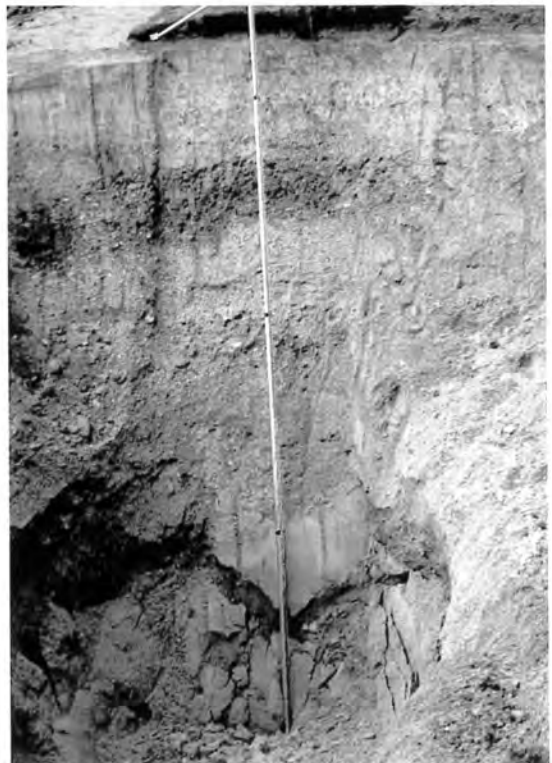
調査地から
東の崖を臨む



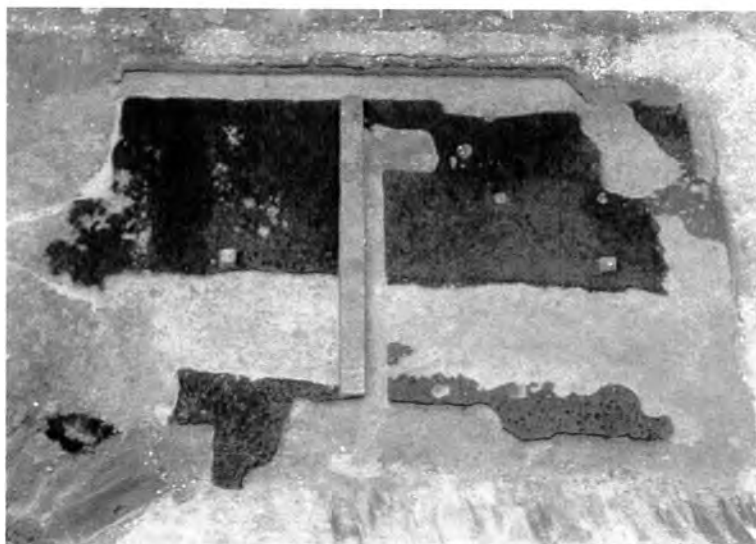
第1～5層、
南北地層断面
(西から)



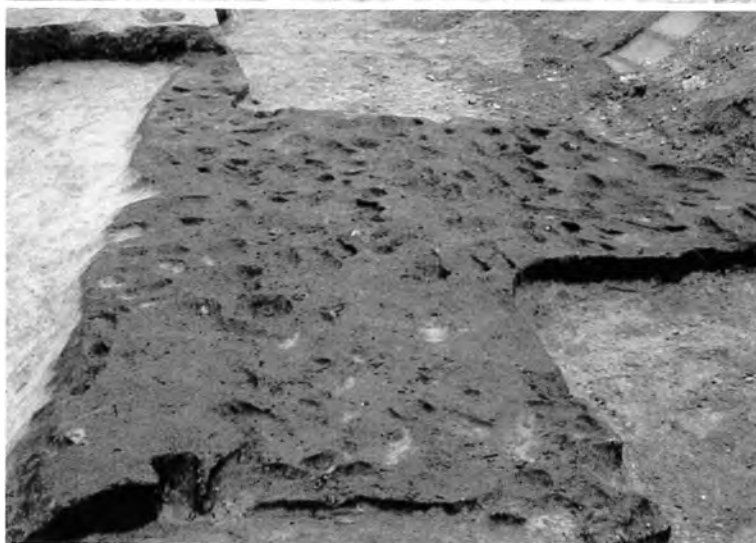
第5層以下地層断面
(西から)



第4b層上面全景
(北から)



第4b層上面の足跡群
(東から)



第4b層上面の
偶蹄目の足跡
(南から)



浪速区下寺二丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(西区) (RJ08-5) 報告書

調査個所 大阪市浪速区下寺2丁目
調査面積 879㎡
調査期間 平成20年12月12日～平成21年1月28日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、松本啓子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地西側の海蝕崖の名残とされる急な崖の裾部を崖に沿って南北に通る松屋町筋の西側に位置している(図1)。崖の上を通る谷町筋の標高は約21m、これと平行して崖の下を通る松屋町筋の標高が約4mで、高低差は約17mにもなる。本調査地の地表面は松屋町筋よりもさらに1mほど低い。崖の上、谷町筋の東側には飛鳥時代より連綿と続く古刹・四天王寺があって、これを中心とした古代からの門前町が一带に広がっている。発掘調査においても崖の上では古代～近世の遺構や遺物が多く見つかっているが、本調査地周辺の、崖より西側の低い場所では今までに発掘調査は行われていない。しかし、本調査地よりさらに西側の臨海部では、南海難波駅南の船出遺跡(FD04-1・05-1)や敷津遺跡(SX06-1・08-1・08-2)などの発掘調査があり、海浜部における古墳時代中期以降の陸化のようすや中世の開発状況などに関する資料が得られ始めている。

平成19年8月9・10日に本調査地を含めた大阪市営下寺第1住宅用地において試掘調査を行ったところ、中世の遺物包含層が確認された[大阪市文化財協会2008]。そこで、関係諸機関と協議の上、本調査を行うことになった。

調査は平成20年12月12日より開始した。浪速区下寺二丁目と三丁目を分ける道路北側の敷地の西半部に、図2のように879㎡の東・西2つの調査区を設定し、東調査区から調査を開始した。西調査区は残土置き場の用地確保のため調査区を北と南に分割し、北半部から調査を行うこととし、平成21年1月5日に重機掘削を開始した。北半部の調査終了後に埋戻しを行い、引き続き南半部の調査に取りかかった。

試掘結果に基づき、地表下約0.7mまでの間の現代～近代の地層は重機によって除去し、以下、地表下約1.3mの自然堆積層までを、各地層毎に人力で掘下げて遺構・遺物を確認し、記録を取った。基準点測量を12月26日に、また写真測量を平成21年1月13日と1月26日に行った。

平成21年1月28日に埋戻しを行い、現地における発掘調査を完了した。

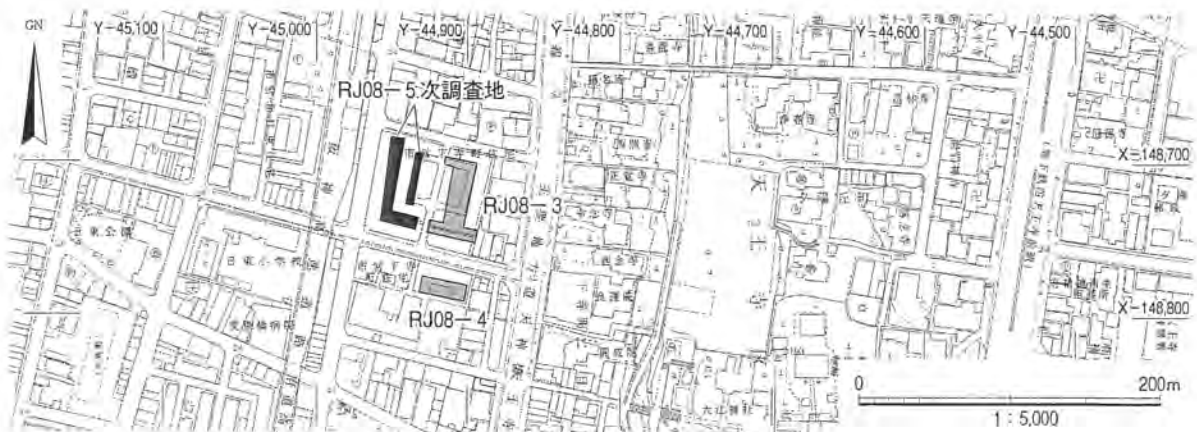


図1 調査地位置図

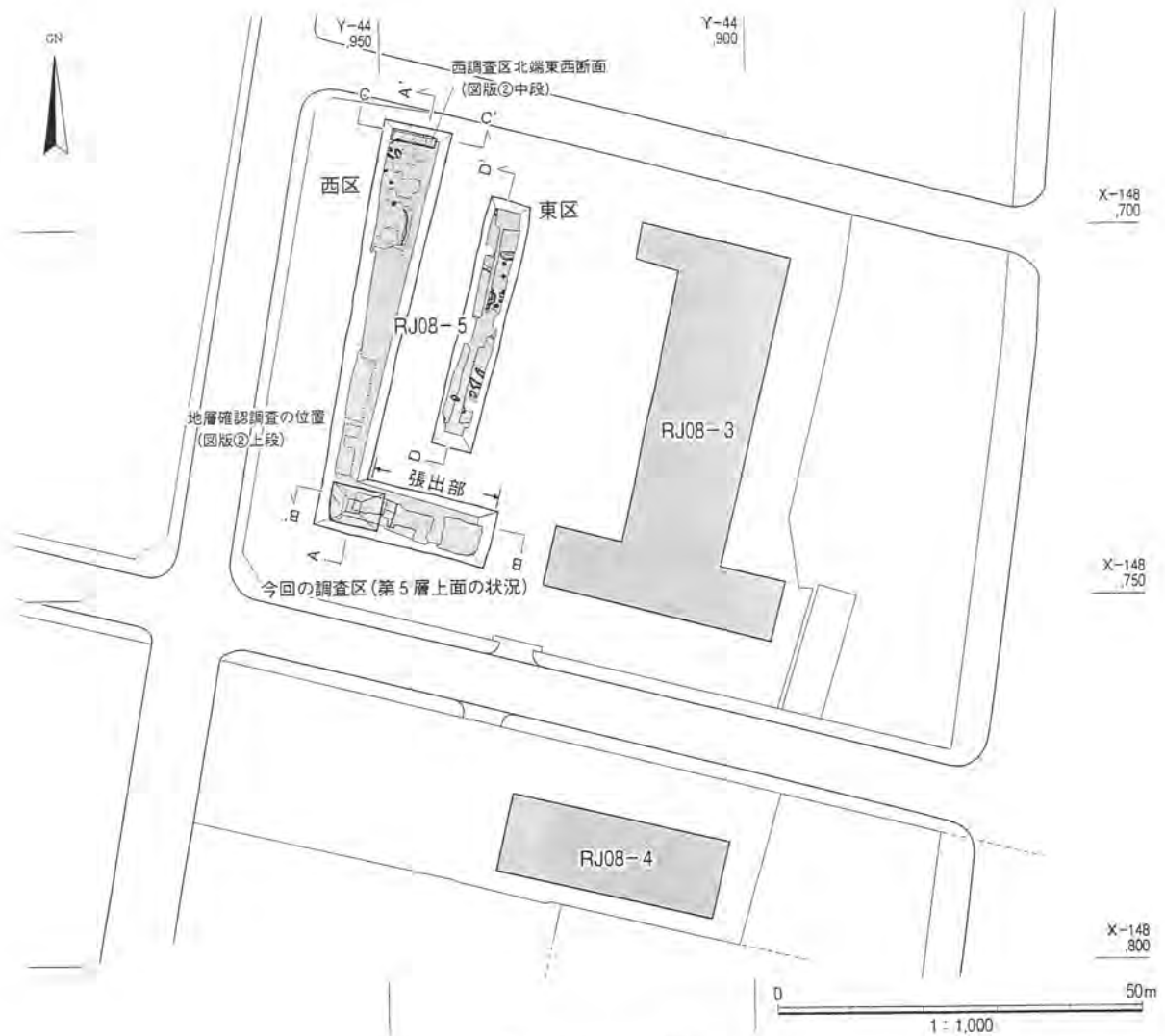


図2 調査区位置図

なお、本報告で使用した方位は世界測地系による座標北で、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文図中ではTP+〇mと記している。

2) 調査の結果

i) 層序(図3～6、図版2)

周辺のRJ08-4・08-5次調査の結果[大阪市文化財協会2009c・2009d]を含めた本調査区における基本層序は図3のとおりで、図4～6は本調査区の地層断面図である。

現代表土直下の第1層は、1a・1bの上下2層に分かれる近世初頭の作土層である。本調査地では第1a層は礫を含む灰黄褐色シルト質粘土層で、第1b層は砂・礫を含むにぶい黄褐色シルト質粘土層である。最大層厚は第1a層が34cm、第1b層が25cmである。

第2層は中世の水田作土層で、2a・2b・2cの3層に分かれる。

第2a層は礫を含む暗灰黄色の砂質シルト層で、最大層厚は15cmである。第2b層は上部が礫を含む灰黄褐色シルト質砂層で、下部が主として砂・礫を含む灰黄褐色粘土質シルト層である。最大層厚は

上部が16cm、下部が30cmである。第2c層は粘土を含む黒褐色の砂質シルトを主体とする地層で、最大層厚は20cmである。第2a・2b・2c層は各々厚い薄いはあるものの、第2層全体では東・西両調査区の全域に分布していた。西調査区の第2b層上面および第2c層上面で畦畔の痕跡と足跡が検出された。第2層から14世紀頃までの遺物が出土した。

第3層は黒褐色の粘土質シルト層で砂を多く含む。最大層厚は16cmである。東・西両調査区の全域に堆積していた。西調査区の本層上面で畦畔の痕跡が見つかった。本層からは13世紀頃までの遺物が出土した。

第4層は4a・4b・4cの3層に分かれる。4a層は細粒砂を含む黒色粘土質シルト層、4b層は極細粒砂を多く含む黒色シルト質粘土を主体とする湿地の堆積層で、4c層は黒褐色シルト質細粒砂層で下位の第5層を巻き上げていた。最大層厚は第4a層が22cmで、第4b層が28cm、第4c層は3cmである。第4a・4b層は本調査地の西調査区の南西隅でとくに厚く堆積していたが、西調査区の張出部では東に向かって薄くなり、東端では第4層は分布していない。一方東調査区ではほとんど見られず、北半部で第4b層がわずか5cmほどの厚さで見られたのみである。本層の上面で畦畔の痕跡と偶蹄目の足跡、植物の根の痕跡が検出された。遺物は12世紀頃のものが出土した。

第5層以下の層準は西調査区の西南隅で行った深掘りトレンチの、主として断面観察により、TP-2.5mまでの地層を観察した。

第5層は第5a・5b層の2層に区分できる海浜成層で、出土遺物はない。第5a層は上部が分級のいい灰黄褐色の細粒～中粒砂からなり、下部は黄灰色ないし灰白色のシルト質細粒砂～灰褐色中礫からなる。下部では2サイクルの上方細粒化が観察された。上・下部のそれぞれの最大層厚は25cm、126cmである。第5b層は上部が褐色粗粒砂からなり、下部が灰黄色の細粒砂～シルトからなる。上部はほぼ水平なラミナが見られ、下部は上方へ粗粒化していた。上・下部のそれぞれの最大層厚は80cm、120

遺構と地層の関係	層序	岩相	遺物	時期		
	1a	第1層 近世作土層	含礫灰黄褐色シルト質粘土	土師器・瓦器	16世紀末～ 17世紀初頭	
	1b		にぶい黄褐色シルト質粘土	肥前陶器		
	2a	第2層 中世作土層	含礫暗灰黄色砂質シルト	土師器・瓦器	14世紀頃	
	2b		含礫灰黄褐色シルト質砂 (水成層) 含砂・礫灰黄褐色粘土質シルト	土師器・須恵器 ・瓦器・中国製白磁		
	2c		含粘土黒褐色砂質シルト	土師器・瓦器 ・中国製白磁		
	4a	第4層 古代湿地性堆積層	第3層 中世水成層	含砂黒褐色粘土質シルト	須恵器・瓦器 ・中国製白磁 ・中国製青磁	13世紀頃
	4b		含極細粒砂黒色粘土質シルト (水成層)	土師器 ・須恵器・瓦器	12世紀頃	
	4c		含極細粒砂黒色シルト質粘土 黒褐色粘土質細粒砂			
	5a	第5層 更新世段丘構成層 (地山)	黄褐色細粒砂～礫			
	5b					
	第6層	海成シルト層	青灰色シルト層			

図3 地層と遺構の関係

西調査区南北断面

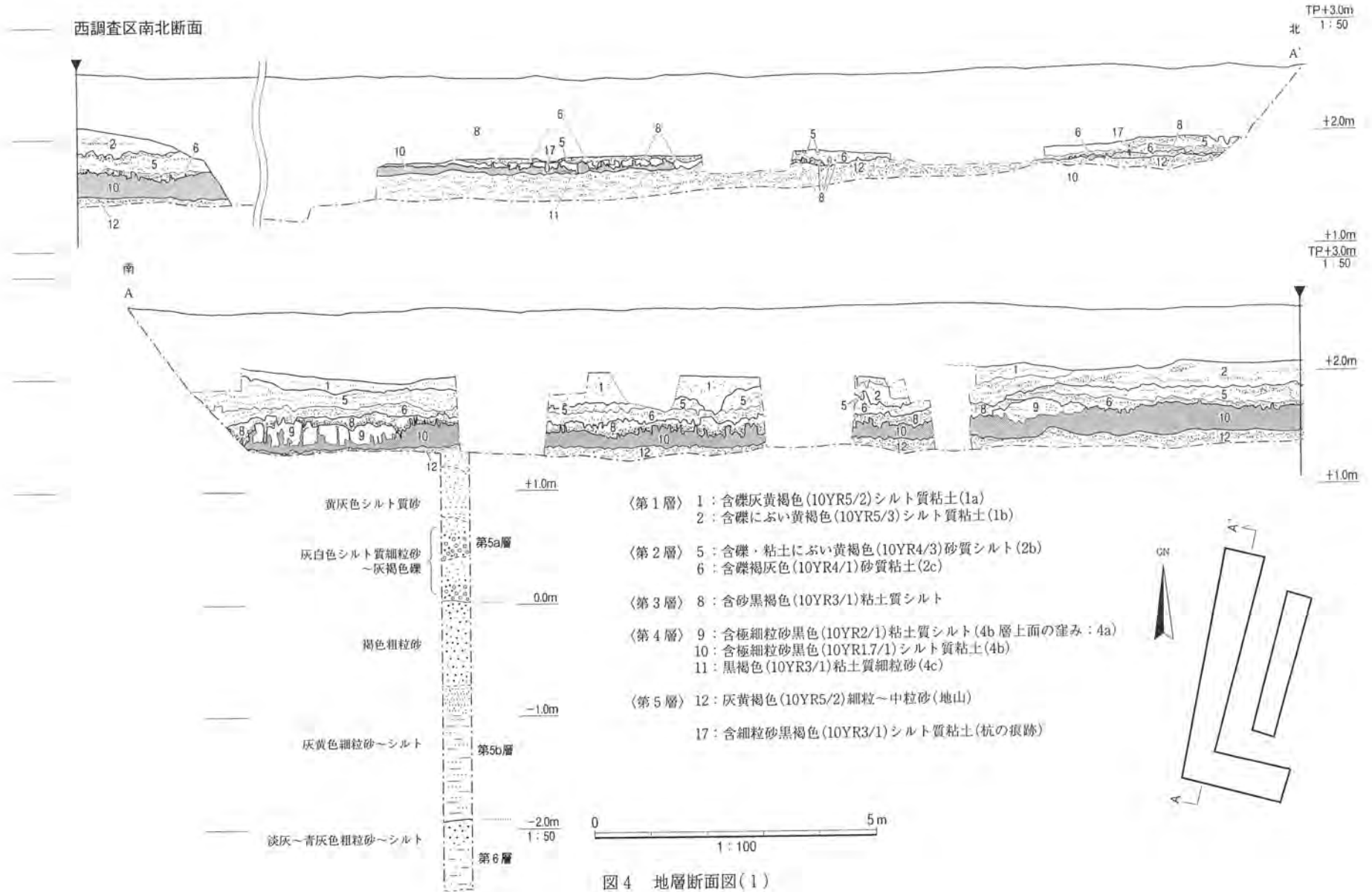
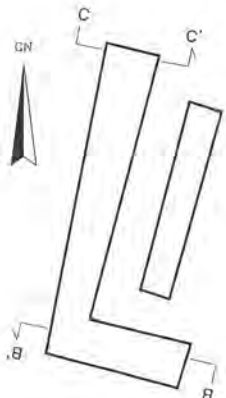
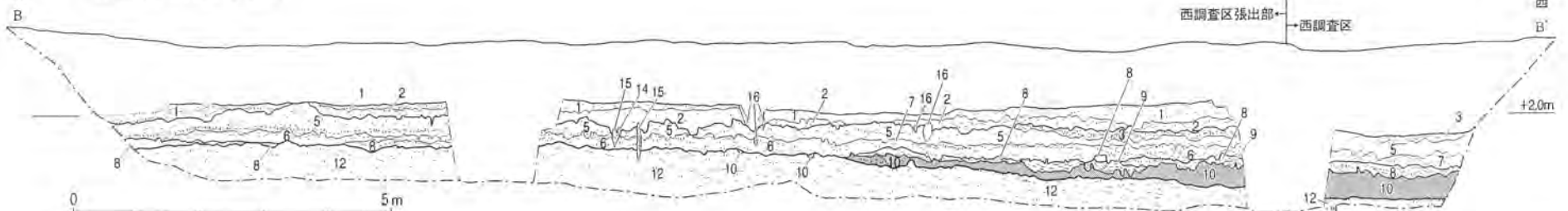
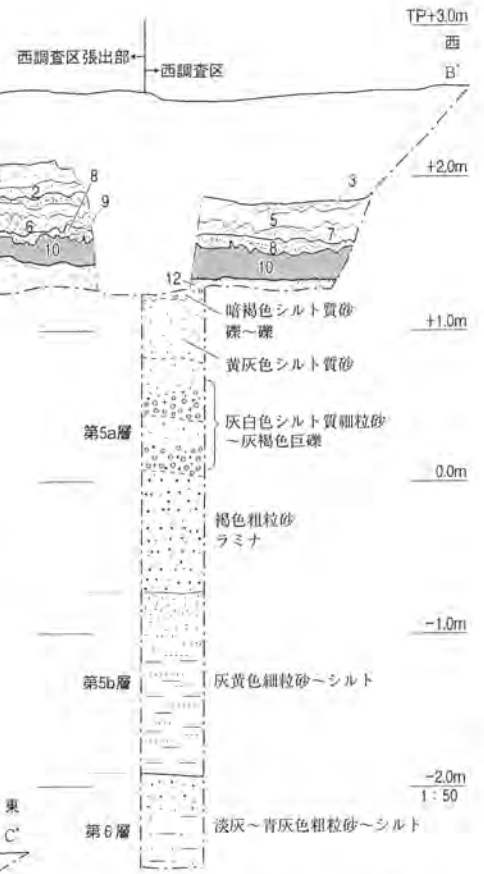


図4 地層断面図(1)

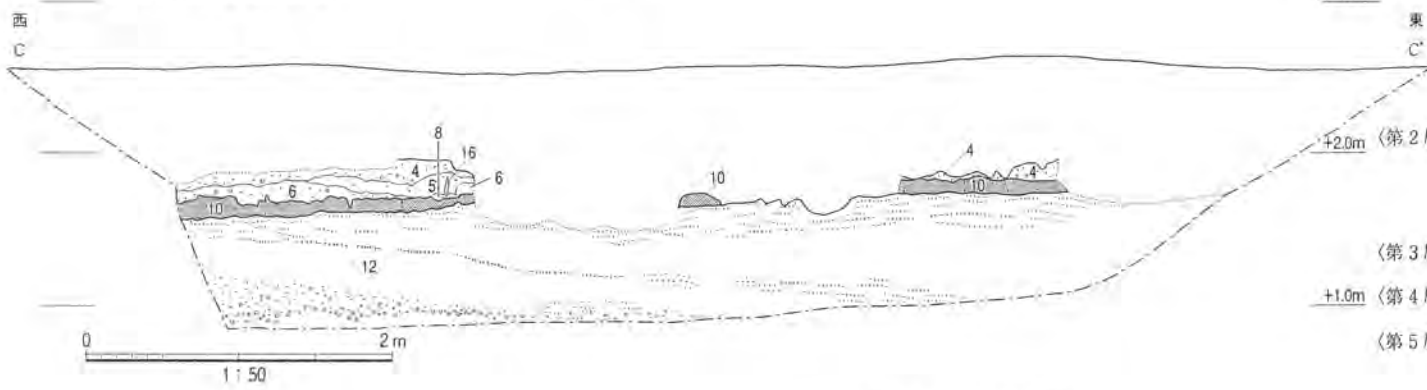
西調査区南端 東西断面



- 〈第1層〉 1 : 含礫灰黄褐色(10YR5/2)シルト質粘土(1a)
2 : 含砂・礫褐灰色(10YR5/1.5)粘土質シルト(1b)
- 〈第2層〉 3 : 含粘土・礫灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂(2a)
5 : 含砂・礫灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土(2b)
6 : 含砂黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土(2c)
- 〈第3層〉 8 : 黒褐色(10YR3/2)極細粒砂質シルト
- 〈第4層〉 9 : 黒色(10YR2/1)粘土質シルト(第4b層上面の窪み: 4a)
10 : 含極細粒砂黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト(4b)
11 : 含極細粒砂黒褐色(10YR3/2)シルト(4c)
- 〈第5層〉 12 : にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒~中粒砂(地山)
- 14 : 暗褐色(10YR3/3)砂質粘土(杭の痕跡)
15 : 含粘土暗褐色(10YR3/3)砂質礫
16 : 褐灰色(2.5Y4/1)砂質粘土



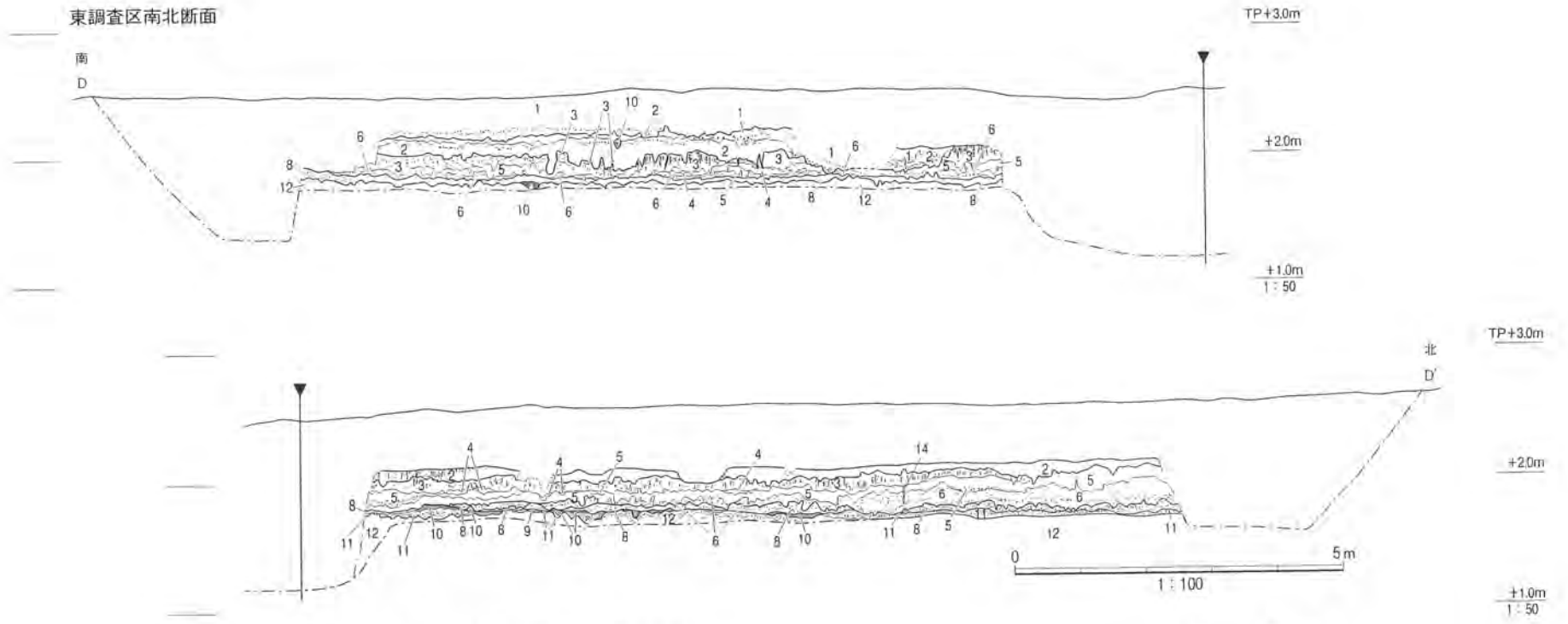
西調査区北端 東西断面



- 〈第2層〉 4 : 含礫灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂(2b)
5 : 含礫・粘土にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト(2b)
6 : 含礫・砂黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土(2c)
- 〈第3層〉 8 : 含細粒砂黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト
- +1.0m 〉第4層〉 10 : 含極細粒砂黒褐色(10YR2/2)シルト質粘土(4b)
- 〈第5層〉 12 : 黄褐色(10YR5/6)細粒砂~礫
16 : 含礫・砂褐灰色(10YR4/1)シルト

図5 地層断面図(2)

東調査区南北断面



- 〈第1層〉 1 : 含巨礫黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粘土(1a)
2 : 含礫暗灰黄色(2.5Y5/2)砂シルト質粘土(1b)
- 〈第2層〉 3 : 含礫暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト(2a)
4 : 含粘土黒褐色(10YR3/2)礫質砂(2b)
5 : 含砂灰黄褐色(10YR5/2)粘土質シルト(2b)
6 : 含粘土黒褐色(10YR3/1)砂質シルト(2c)
- 〈第3層〉 8 : 含砂黒褐色(7.5YR3/2)粘土質シルト
- 〈第4層〉 10 : 含砂黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土(4b)
11 : 黒色(10YR2/1)細粒砂(4c)
- 〈第5層〉 12 : におい黄褐色(10YR5/3)中粒～細粒砂(地山)
14 : 黒褐色(10YR3/2)極細粒砂質粘土(杭)

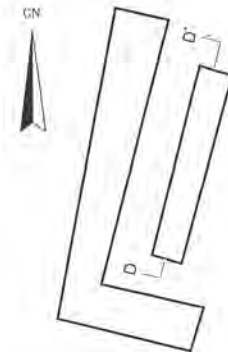


図6 地層断面図(3)

cmである。

第6層は海成層である。淡灰色ないし青灰色の粗粒砂～シルトからなる。上方へ粗粒化しており、層厚は60cm以上である。湧水によるトレンチ壁面の崩落がひどく、これより下位の層準は確認できなかった。なお、第5b層との境界の標高はTP-2.0m付近であった。

ii) 遺構と遺物(図7～16、図版1・3・4)

a. 第4層上面の遺構と第4層出土遺物

第4b層の上面で、多数の足跡や木の根の痕跡と、畦畔の痕跡を検出した(図6)。

足跡や根の痕跡の分布には粗密があり、西調査区では北半は比較的疎らであったが、西調査区南半部と張出部の西端で密に見られた。東調査区では中央部東端にわずかに見られた程度である。人のものと偶蹄目のものが見られた(図版3・4)。偶蹄目の足跡は踵から爪先までが8cmほどの大きさであった。また、足跡に混じって植物の根と思われる平面円形の窪みが多数見つかった。窪みは南半部が過密に分布する。これらの足跡や木の根による窪みは水成層(第4a層)で埋まっていた。

西調査区の南半部では東西方向の高まりSX401が見つかった。幅約1.2m、高さは最大0.11mの高まりが、東西方向の帯状に残っていたもので、この部分だけは足跡がほとんど見られず、上面を水成層が覆っていた。このため畦畔の痕跡と考えた。上面にあった盛土はすでに失われていたが、東隣のRJ08-3次調査の第3層上面の畦畔のように本来は盛土されていたものと考えられる。

同様の足跡や畦畔の痕跡は近接するRJ08-3・08-4次調査でも見つかっており(図8)、RJ08-3次調査のSX402は本調査地SX401の延長線上にあり、一連のもの可能性がある。本調査地も含め、このあたり一帯には水田が広がっていたものと考えられる。

第4b層から土師器や須恵器、瓦器などが出土した。破片が多く、図化しえなかった。

また、第4層上面の窪み(第4a層)から出土した遺物のうち、西調査区の土師器皿1・2、須恵器杯蓋6、瓦器の皿10・椀17を図14に示した。また、西調査区張出部の土師器皿19・21～23、白磁玉縁碗27、瓦器の椀25・26を図15に示した。これらの遺物は12世紀頃までのものである。

RJ08-4・08-5次調査においても第4層全体で12世紀代の遺物が出土していて、これらより新しい時期のものは出土していない。したがって本調査区も含め、第4層の堆積した時期は12世紀頃ではないかと考えられる。

b. 第3層上面の状況と第3層出土遺物

本層上面で見つかった遺構は、西調査区の畦畔痕跡SX301だけである(図9)。

SX301は西調査区の南半部にあって、第4b層上面のSX401のほぼ真上に位置している。幅は上端で約0.8m、下端で約1.5mの東西方向の高まりで、高さは最大0.06mである。

近接するRJ08-3次調査でも、第3層の上面で畦畔の痕跡とみられる東西方向の帯状の高まりが検出されており(図10)、このうちSX302は、本調査区SX301のほぼ延長線上の位置にある。第4b層上面のような足跡や木の根などは見られなかったが、本層の上にも水田が作られていたものと推定される。

第3層の出土遺物のうち、西調査区の土師器皿5、瓦器の皿9・11と椀14、西調査区張出部の中国

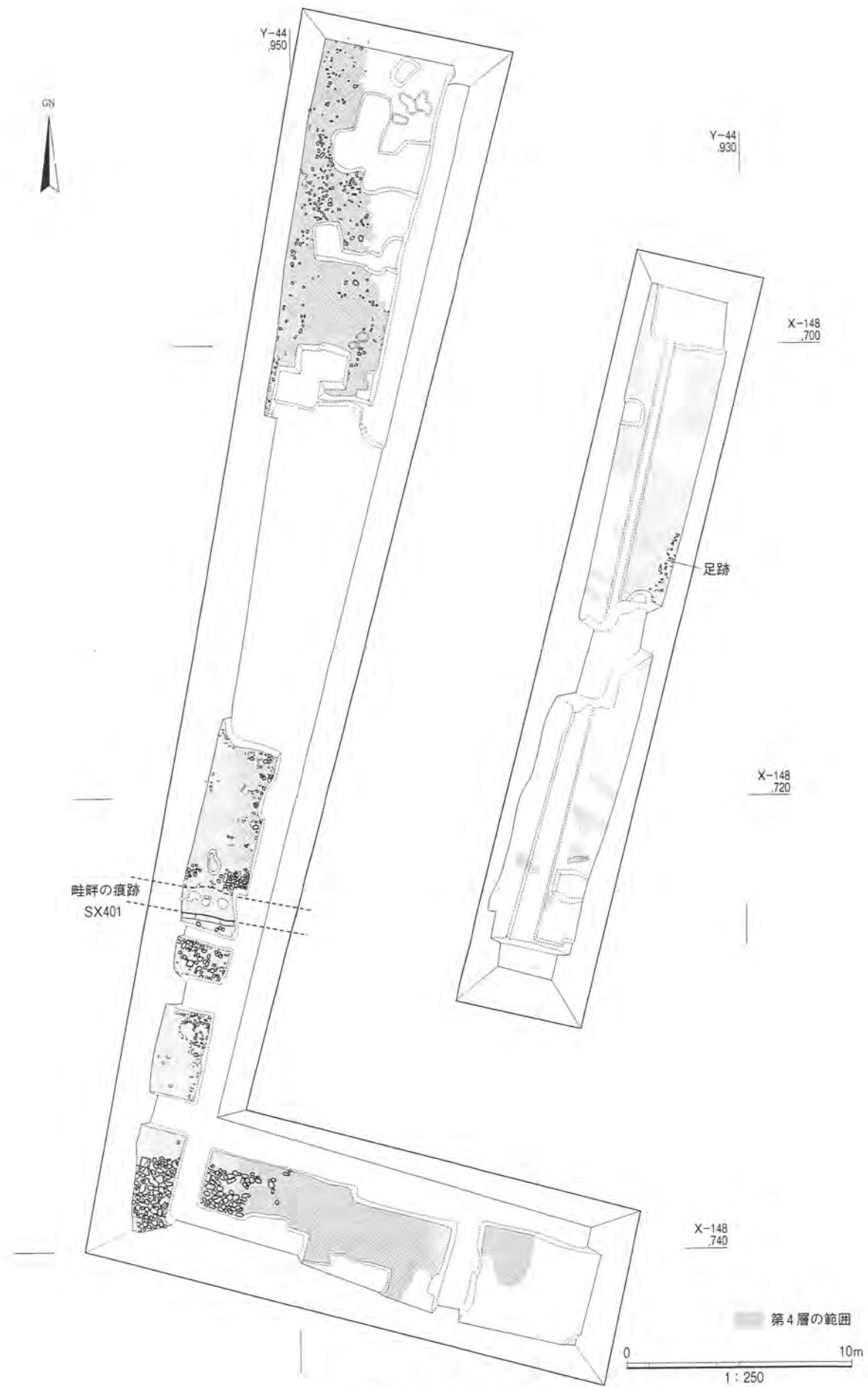


図7 第4層上面の遺構平面図

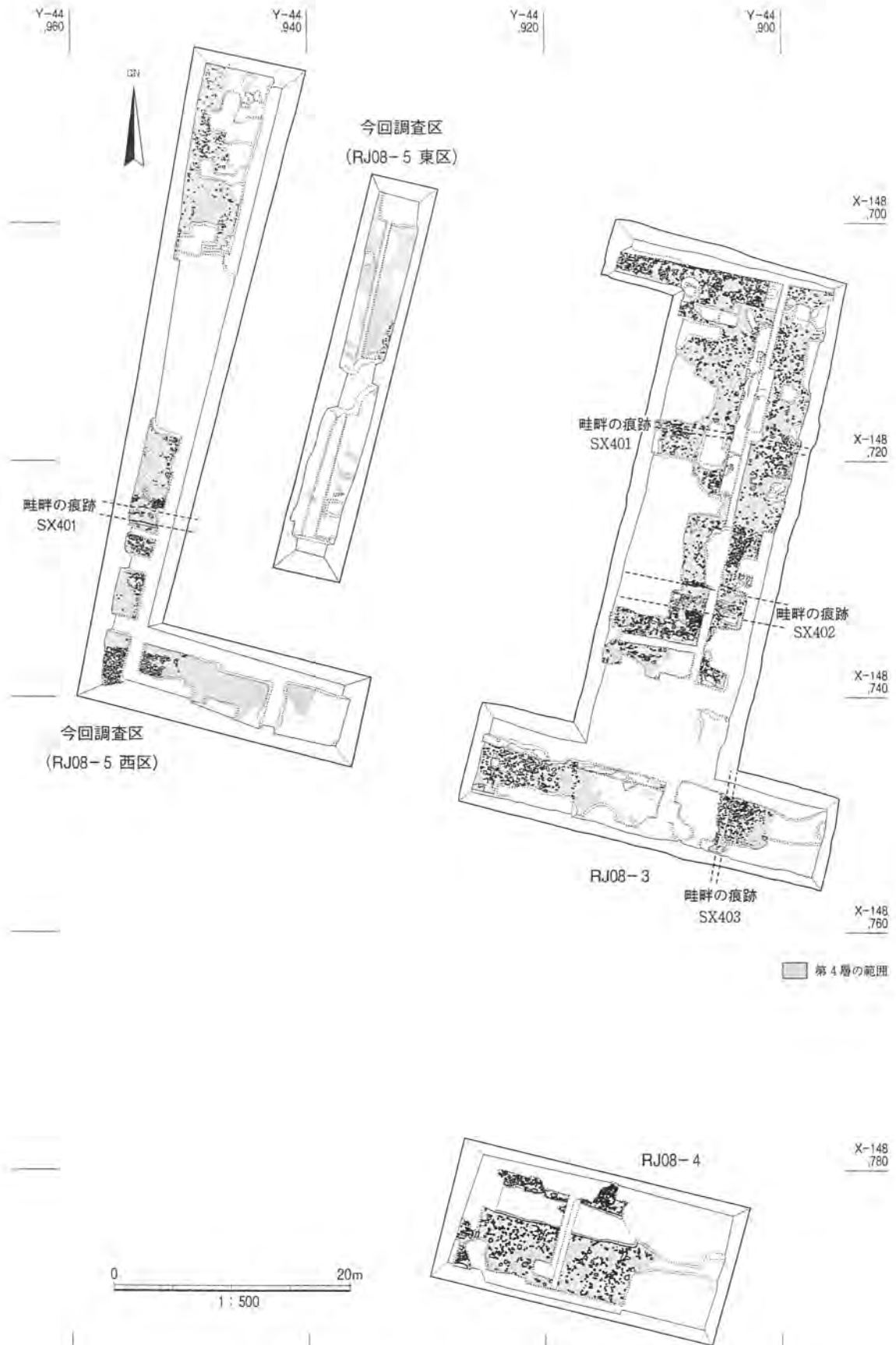


図8 周辺の調査地との関係(第4b層上面)

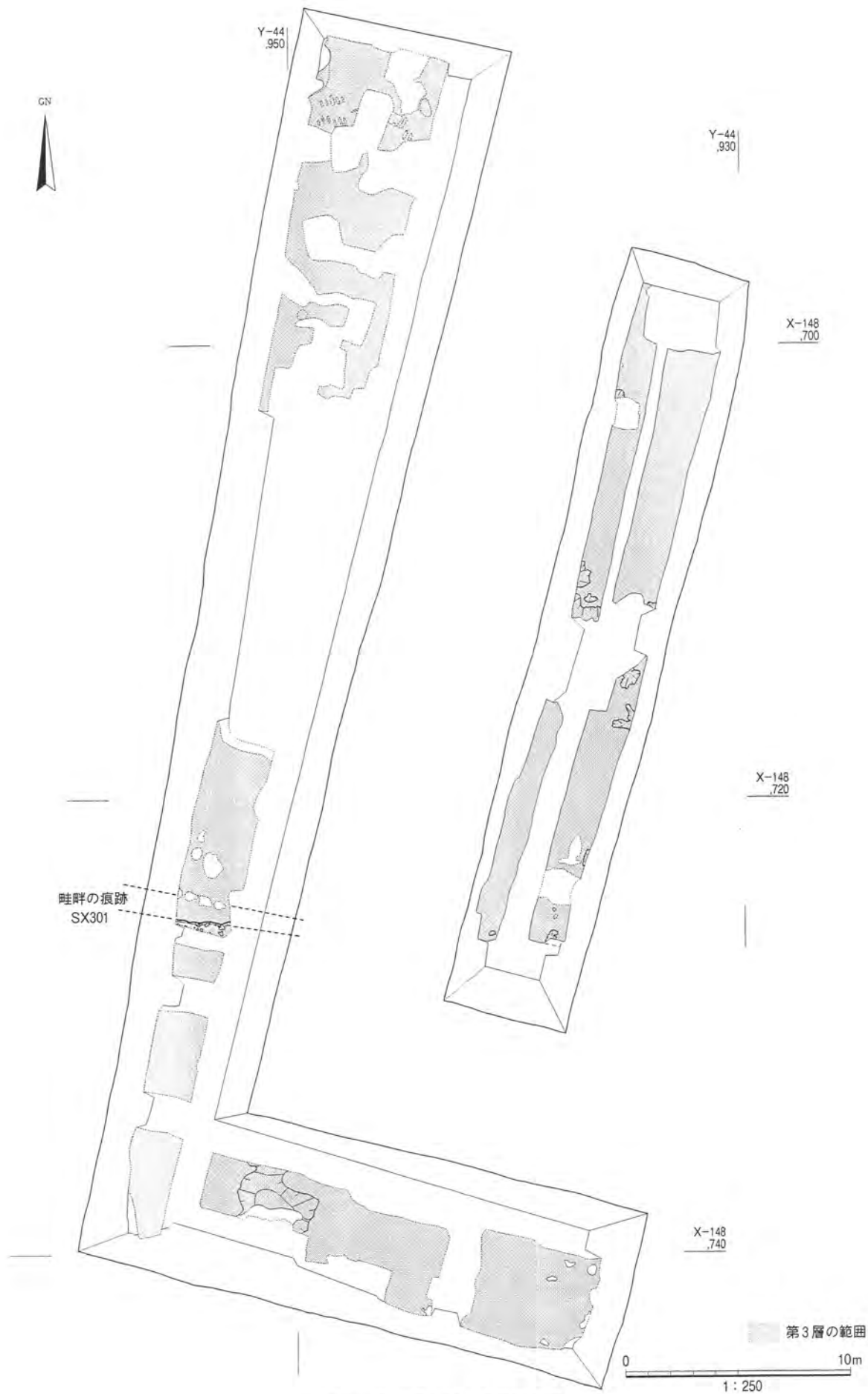


図9 第3層上面の遺構平面図

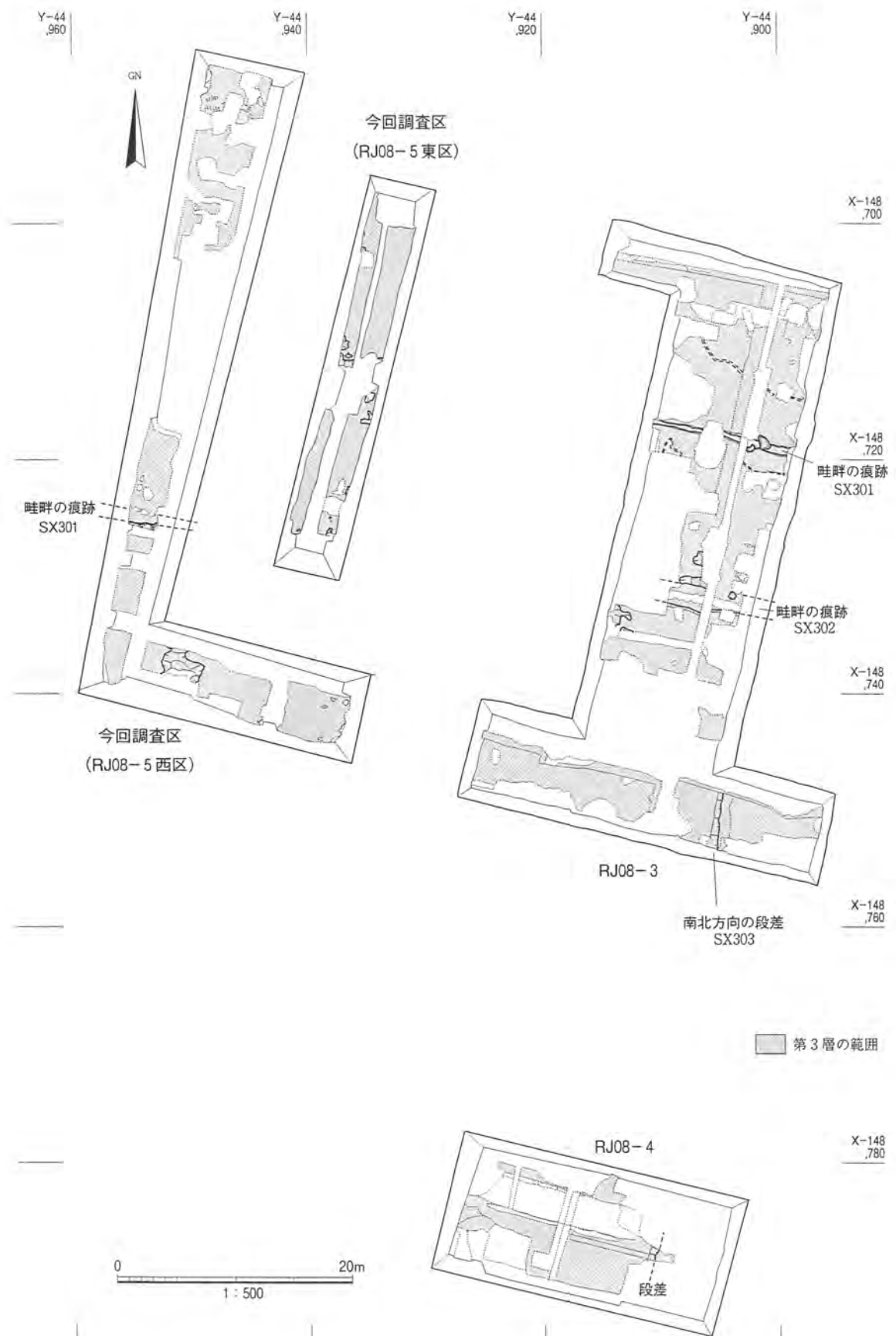


図10 周辺の調査地との関係(第3層上面)

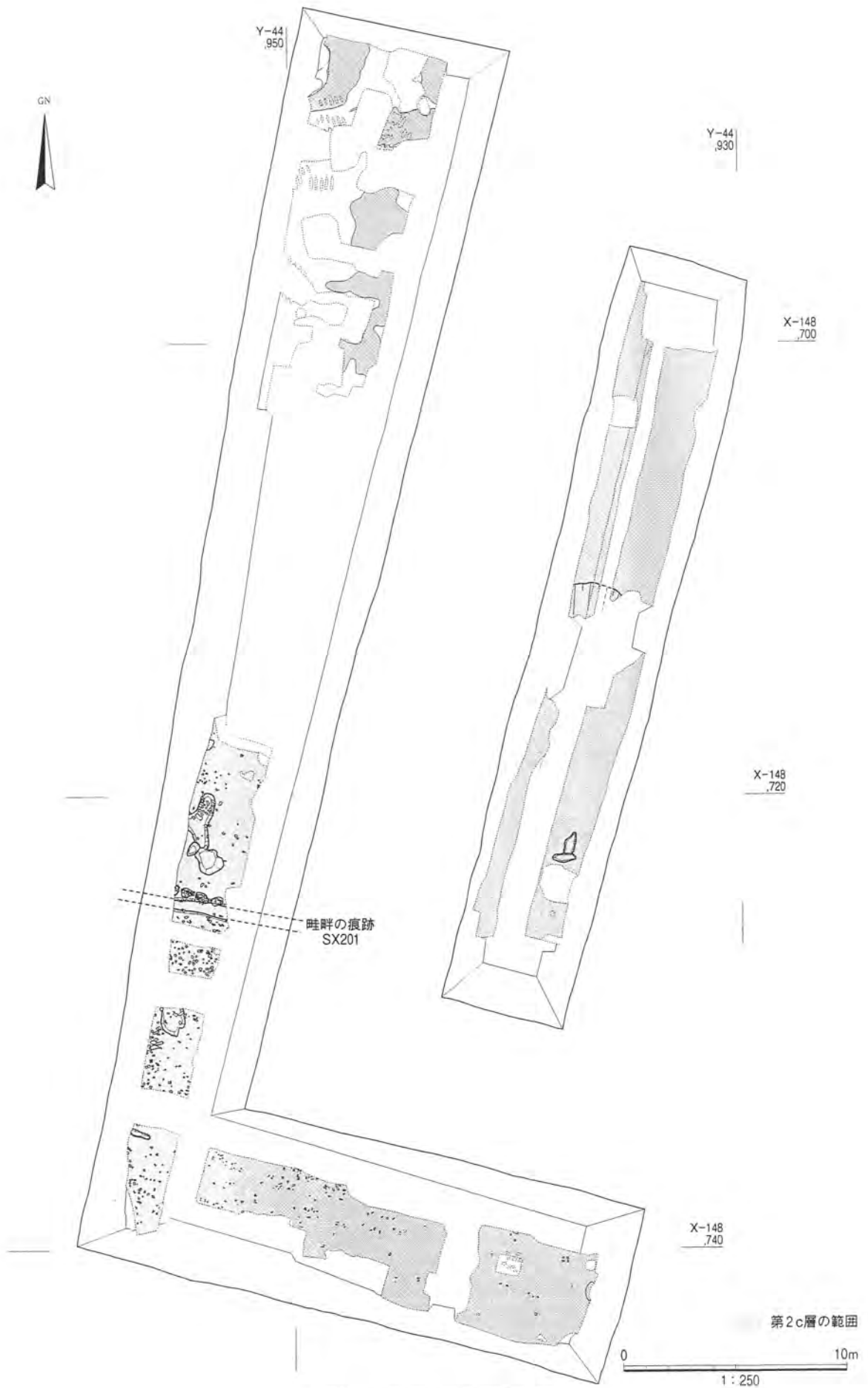


図11 第2c層上面の遺構平面図

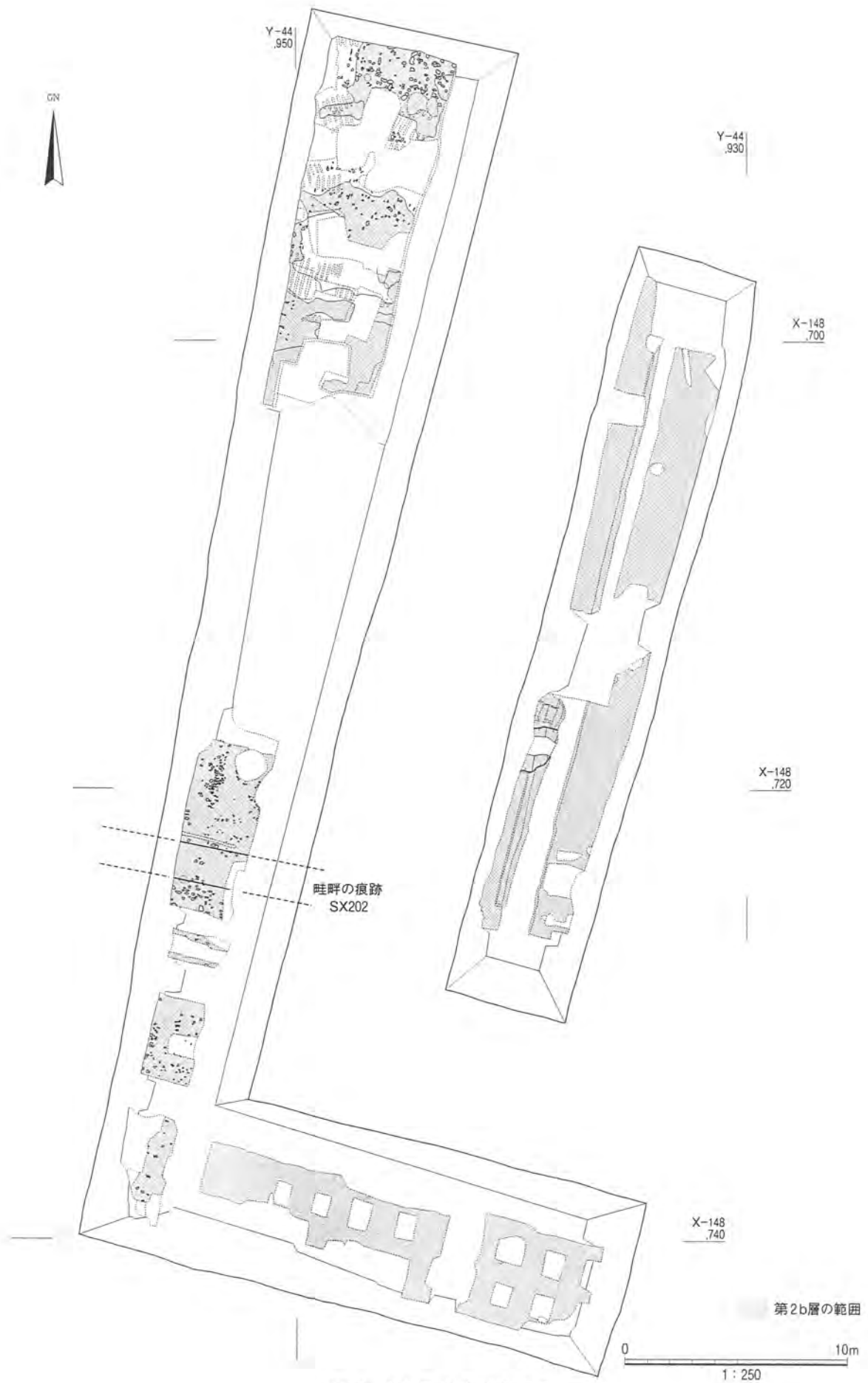


図12 第2b層上面の遺構平面

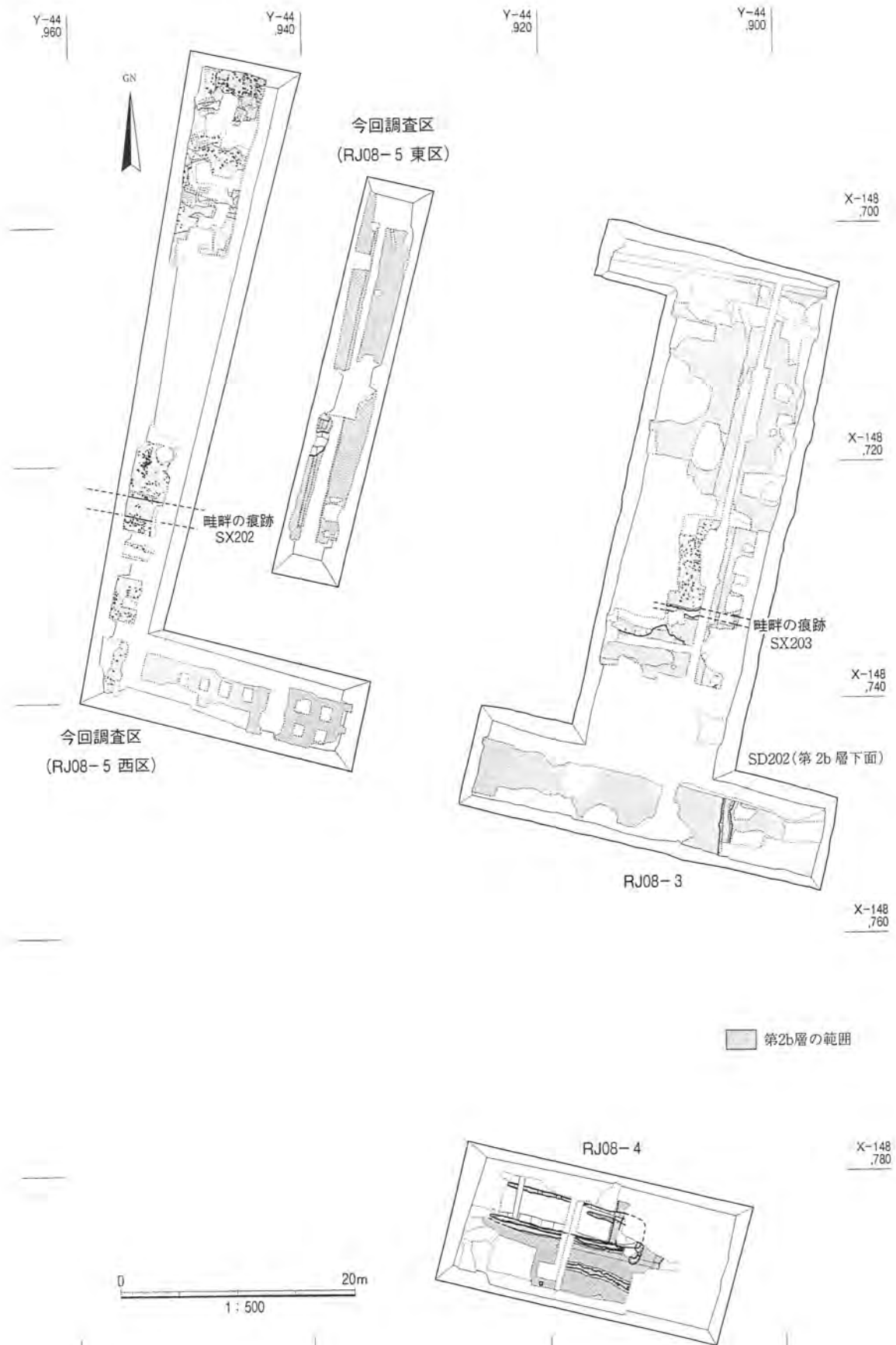


図13 周辺の調査値との関係(第2b層上面・下面)

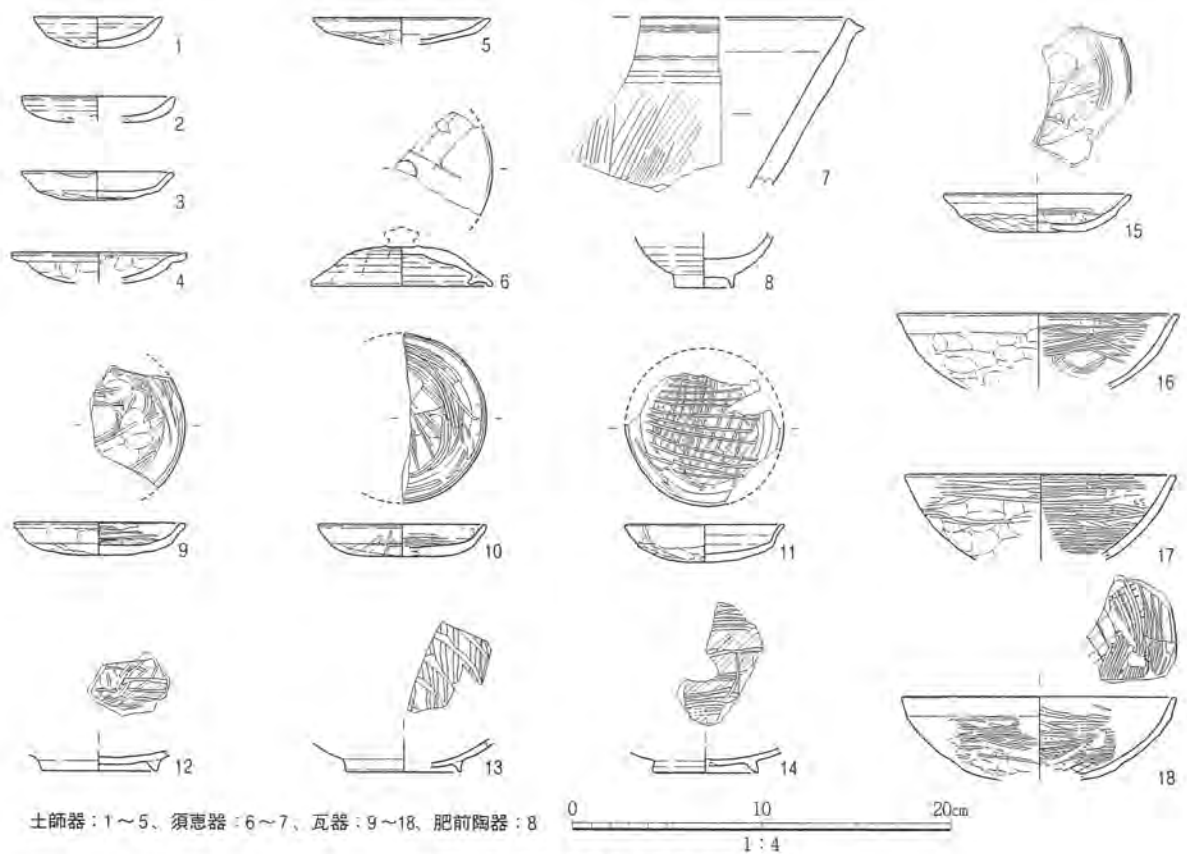


図14 西調査区出土遺物実測図

第4層上面の窪み(1・2・6・10・17)、第3層(5・9・11・14)、第2b層(3・4・7・13・15・16)、第1b層(8・12・18)

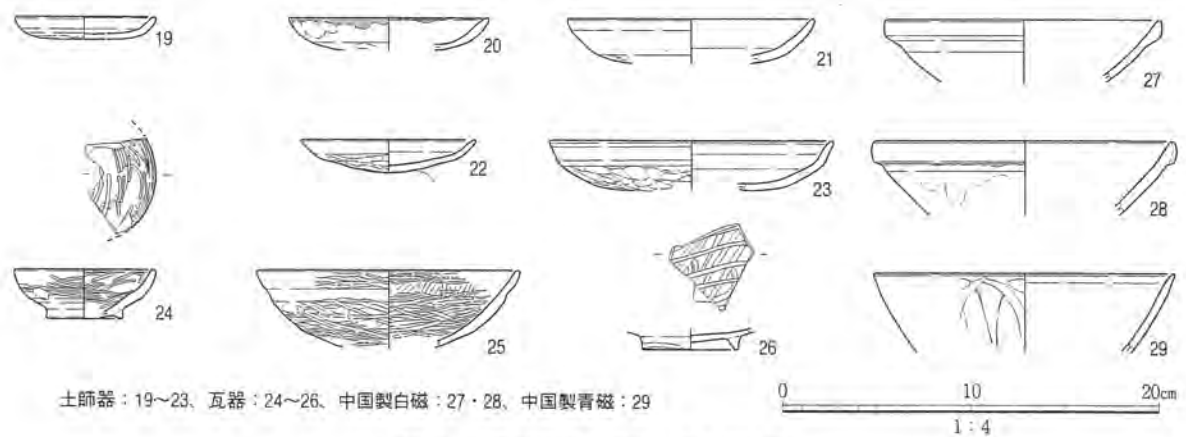


図15 西調査区張出部出土遺物実測図

第4層上面の窪み(19・21~23・25~27)、第3層(29)、第2b層(24・28)、第1a層(20)

製青磁鎚蓮弁文碗29を図14・15に掲載した。また、東調査区から出土した土師器皿30と須恵器捏ね鉢32を図16に掲載した。これらの遺物は13世紀頃のものである。これは近接のRJ08-3・08-4次調査結果とも符合し、本層が堆積したのは13世紀頃とみられる。

c. 第2層の遺構と第2層出土遺物

第2c層上面で見つかった遺構は、西調査区の南半部の東西方向の畦畔の痕跡SX201である(図11)。SX201の周辺と西調査区張出部には浅い足跡群が見つかったが、何の足跡かは不明である。

SX201は幅約0.6m、高さ最大0.04mの東西方向の帯状の高まりで、第3層上面のSX301のほぼ真

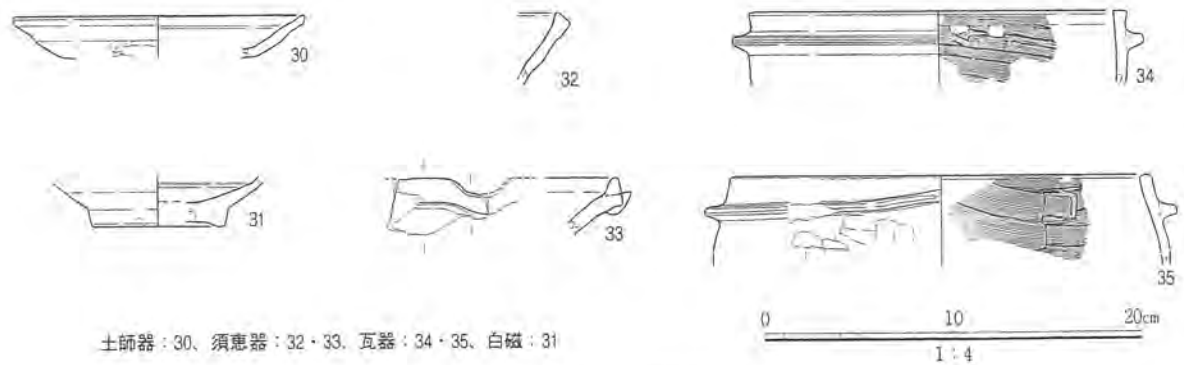


図16 東調査区出土遺物実測図

第3層(30・32)、第2c層(31・34・35)、第2b層(33)

上に近い位置にある。直径0.4m、深さ0.08mほどの円形の穴がSX201の北端に並んで掘られていた。近接するRJ08-3次調査でも、第2c層の上面で畦畔の痕跡とみられる東西方向の帯状の高まりが検出されており、このうちSX201は、本調査区SX201のほぼ延長線上の位置にある。同様の一列に並ぶ穴も掘られていて、これらは一連のものである可能性が高い。したがって、SX201も畦畔の痕跡と考えられる。

調査区中央部で東西方向の畦畔の痕跡SX202と、人や偶蹄目の足跡が見つかった。

SX202は、第2c層上面のSX201の真上に近い位置にある帯状の高まりで、幅は約1.6m、高さは最大0.07mである。偶蹄目の足跡は、西調査区には分布するが、水成層が薄いのか、見られなかった西調査区張出部や東調査区では、足跡は検出できなかった。爪先から踵までの長さが8cmほどであった(図13)。こういった畦畔の痕跡や足跡は周辺のRJ08-3・08-4次調査でも見られ、とくにRJ08-3次調査のSX203は、本調査区SX202のほぼ延長線上の位置にあって、一連のものである可能性が高い。このあたり一帯に水田が広がっていたものと考えられる(図13)。

第2層の出土遺物のうち、第2c層は東調査区の瓦器の鍋34・羽釜35、中国製白磁碗31を図16に示した。第2b層出土の遺物は、西調査区の土師器の皿3・4、須恵器の器台7、瓦器碗13・15・16を図14に、西調査区張出部の瓦器小碗24と中国製白磁玉縁碗28を図15に示した。また、東調査区の須恵器捏ね鉢の片口部33を図16に示した。これら第2層の出土遺物は14世紀までのものである。

d. 第1層出土遺物

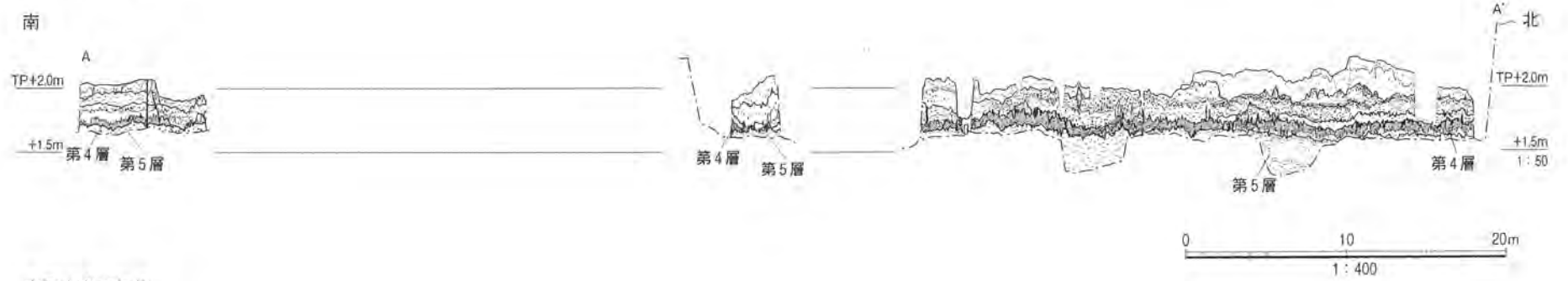
第1層から近世初頭までの遺物が見つかった。このうち、第1a層出土の土師器皿20を図15に示した。このほか、16世紀末の中世末の肥前陶器の破片があり、これが第1層の時期を示すものと考えられる。

iii) 遺構と遺物の検討

今回の調査結果から、本調査地は海から陸への変遷をたどっていたことが明らかとなった。海浜から湿地へ、そして雑水した後に人が積極的に活動を始めた時期は12世紀ごろと考えられた。しかし、居住には適さない場所であったため、建物などは検出できなかった。

調査地東側には縄文海進時以降に形成された比高17mにもおよぶ海食崖がある。第5b層から第5a層下部にかけて観察されたラミナは東に傾斜しており、後背地からの碎屑物の供給のあったことが認められた。また、第5a層では4サイクルの上方細粒化が認められることから、4回以上の断続的な氾

南北方向の起伏



東西方向の起伏

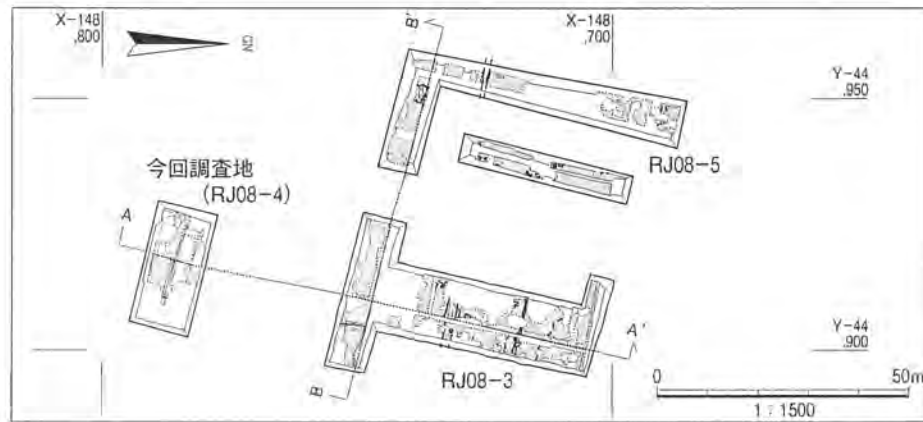
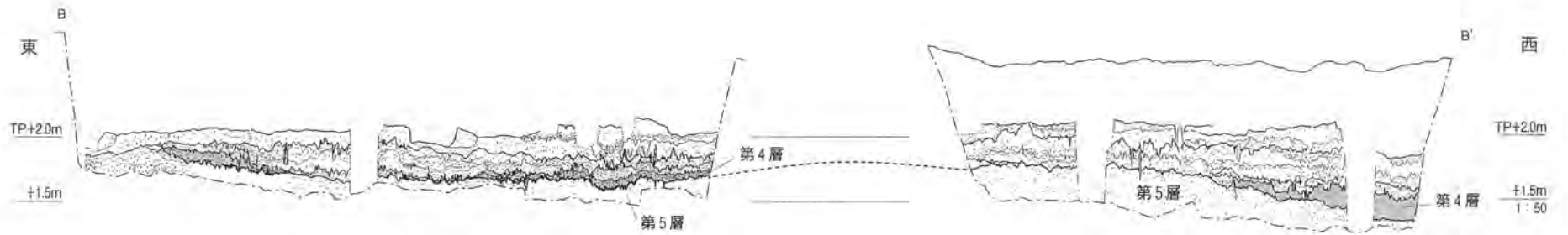


図17 調査地周辺の地山の起伏

濫があったことが推測される。図12に示すように、周辺の調査地(RJ08-3・08-5)の第5a層上面の地形を南北方向の断面図で見ると、南に向かってわずかに高くなっているが、おおよそはほぼ水平である。一方、東西方向では西側(RJ08-5次西調査区)が最も低く、東に向かって徐々に高くなり、RJ08-3次調査地でまた低くなっている。上位の第4b層の層厚もこれに調和的で、西側で厚く堆積しており、第5a層の高く残るところでは堆積しておらず、東側で薄くではあるが堆積している。この高まりが南北方向にどの程度連続するかは明らかではないが、連続すると仮定すると、高まりは浜堤とも考えられ、東側は浜堤後背の湿地であったと想定できる。第4層から出土した遺物の時期は12世紀頃、上位の第3層出土遺物は13世紀頃であることから、第4b層の堆積時間がおよそ1世紀ほどであったと見積ると、比較的長い間、湿地の環境が続いたものと推測され、このことから第4層堆積期は頻繁に(海)水の入り込む入江のような環境であったことが想像される。第4b層上面では畦畔が検出されており、湿地(入江)の環境から離水し、人が活動できる環境へと移り変わったことが窺える。

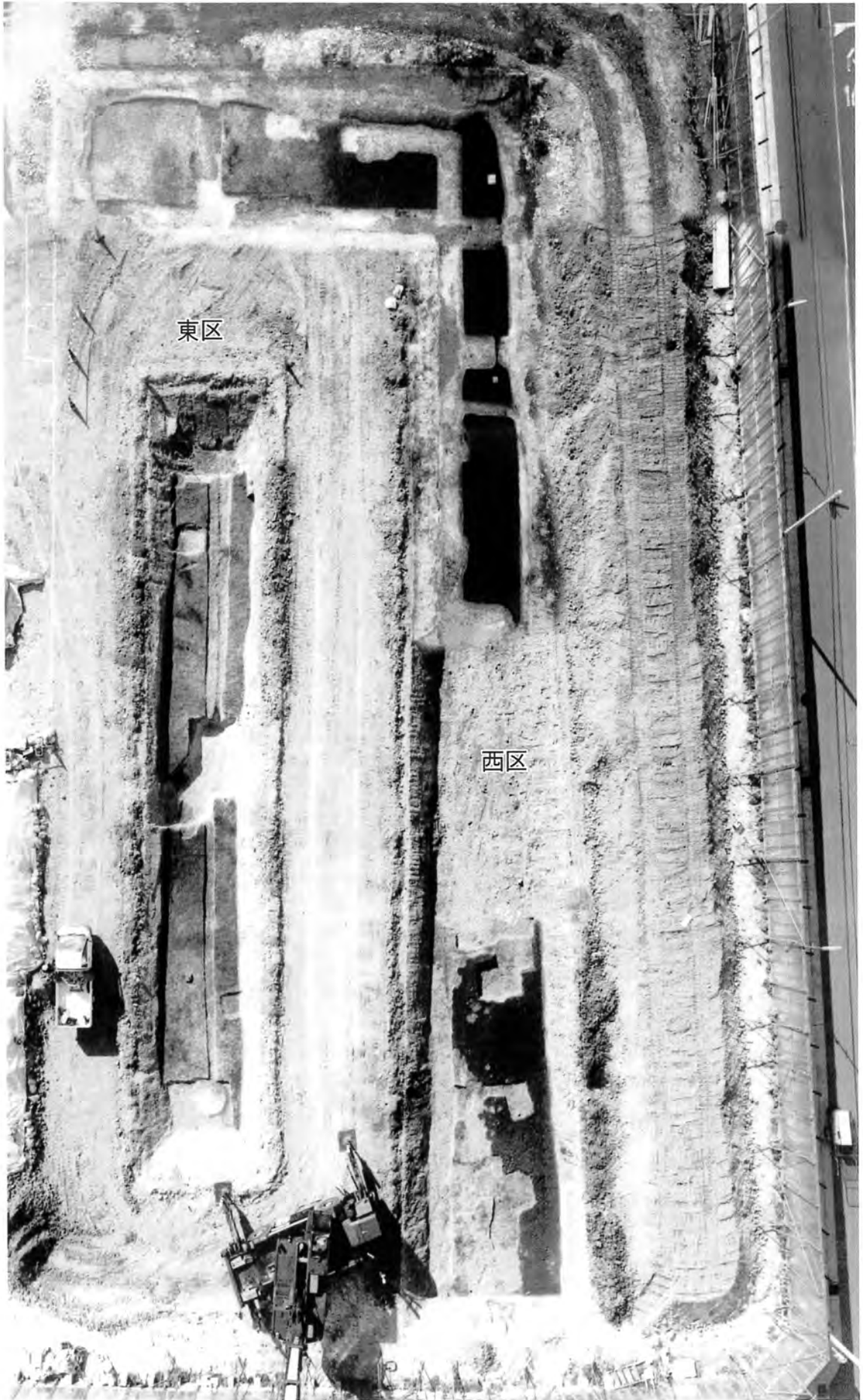
また、飛鳥時代や古代の遺物も出土遺物に含まれることから、周辺にはこういった古い時期の遺跡が存在したことが推測される。

3)まとめ

今回の調査により、12世紀から人が積極的にこの地を利用し始めたことがわかった。また、このあたりの陸地の成り立ちに関するてがかりを得ることができた。

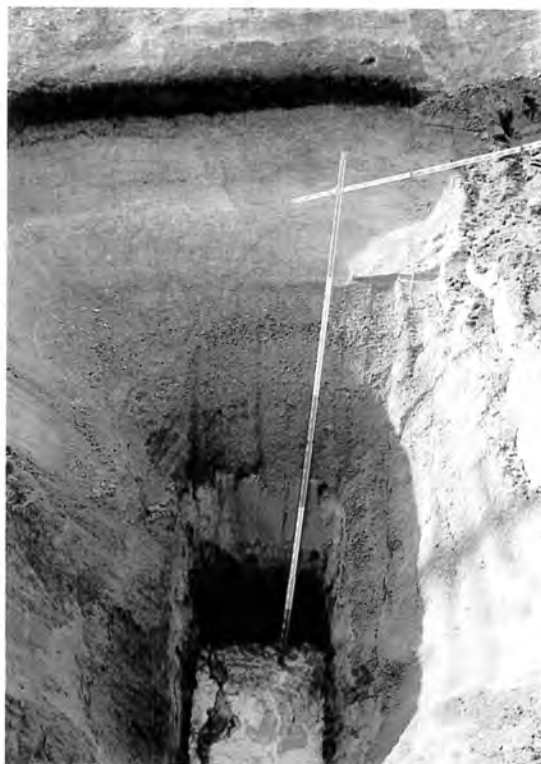
引用参考文献

- 大阪市文化財協会2005、『株式会社ヤマダ電機による建設工事に伴う船出遺跡発掘調査(FD04-1)報告書』
- 大阪市文化財協会2006、『船出遺跡発掘調査(FD05-1)報告書』
- 大阪市文化財協会2007、『大阪木津市場株式会社による建設工事に伴う敷津遺跡発掘調査(SX06-1)報告書』
- 大阪市文化財協会2008、『下寺第1住宅用地における埋蔵文化財試掘調査(RJ07-1)報告書』
- 大阪市文化財協会2009a、『株式会社明来による建設工事に伴う敷津遺跡発掘調査(SX08-1)報告書』
- 大阪市文化財協会2009b、『大阪木津市場株式会社による建設工事に伴う敷津遺跡発掘調査(SX08-2)報告書』
- 大阪市文化財協会2009c、『浪速区下寺二丁目における埋蔵文化財発掘調査(RJ08-3)報告書』
- 大阪市文化財協会2009d、『浪速区下寺三丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(南区)(RJ08-4)報告書』



RJ08-5次調査全景(北から、(株)島田組提供)

西調査区
第5層以下の地層
(東から)



西調査区
北半北壁断面
(南から)



西調査区
南半断面
(東から)



西調査区
南半および張出部全景
(第4b層上面、東から)



西調査区
中央部畦畔と踏込
(第4b層上面、西から)



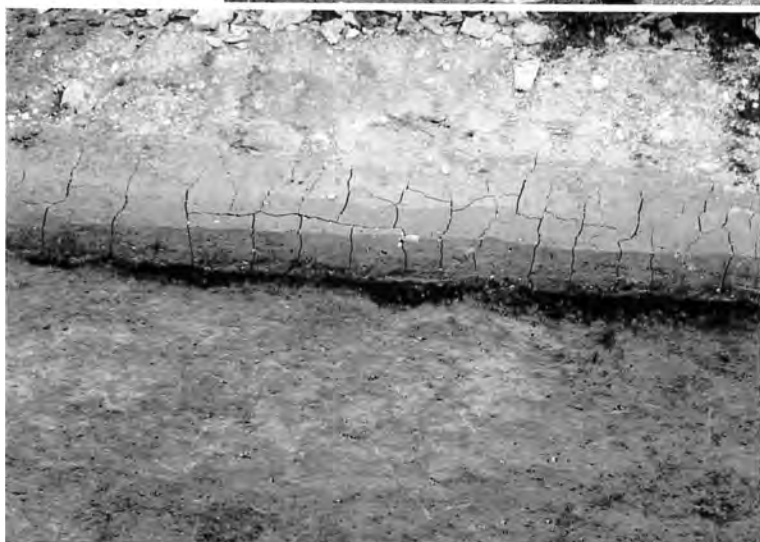
西調査区
中央部第2b層上面の足跡
(北西から)



東調査区
第5層上面全景
(北から)



東調査区
地層断面
(西から)



東調査区
第4b層上面
(南から)



敷津遺跡発掘調査(SX08-1)報告書

調査個所 大阪市浪速区敷津東三丁目10-2他18筆
調査面積 50m²
調査期間 平成20年4月22日～4月25日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、藤田幸夫

1) 調査に至る経緯と経過

敷津遺跡は、上町台地の西方、大阪湾岸沿いの砂堆上に位置する弥生時代から平安時代にかけての遺物散布地である。2006年度には、今回の調査地の東北に所在する大阪木津地方卸売市場内でSX06-1次発掘調査を実施した(図1)。その調査では地表下1.2mで水成の地山層(第4層)を検出し、その上層は古代から中世の遺物包含層であった。遺物包含層上面から13世紀前半の幅3m以上の溝を検出し、埋土からハマグリ・シオフキなどの貝類、フグ科やアジ科の魚骨が出土した。

当遺跡の西方には「蛤売り」として知られる中世の「今宮商人」の本拠地があったことが知られている。今宮商人は朝廷に日々の海産物を進上し、京都祇園社の駕輿丁を勤めるという負担をして、五畿七道で商売をする際に、自由に交易する特権を与えられてきた。したがって、今宮商人は中世を通じて「供御人」「神人」と称され、商売にさまざまな便宜を与えられていたのである。こうした背景から「今宮商人」とSX06-1次調査で出土した貝類との関係が注目されてきた。

今回の調査は、遺物包含層や遺構が比較的攪乱を受けていないと予測される敷地南端部付近に調査区を設定して実施した(図2)。掘削の方法は、近・現代の地層を機械で掘削し、それ以下については人力で行った。

なお、発掘調査によって発生した残土は敷地内に仮置きし、調査終了後に埋戻すこととした。

本報告で用いる水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP±〇m」と記す。方位記号に示す北は図1・2が座標北で、それ以外は磁北である。

2) 調査の結果



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

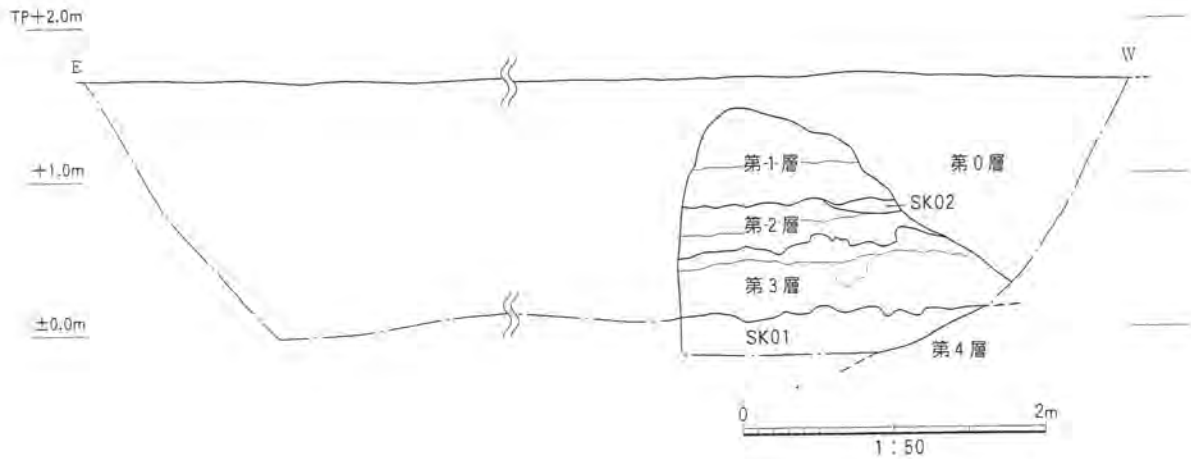


図3 南壁断面図

i) 層序(図3・4)

第0層：現代に攪乱された地層である。

第1層：黒褐色細粒砂質シルト層でレンガを含む近代の盛土層である。

第2層：黄褐色細粒砂質シルト層で、層厚は約30cmである。上面からSK02を検出した。江戸時代の整地層である。

第3層：黒褐色細粒砂質シルトの盛土層で、層厚は約30cmである。層内からは土師器・須恵器・瓦器・肥前陶器の細片が出土した。

第4層：黄灰色中粒砂の水成層である。この層の上面からSK01を検出した。

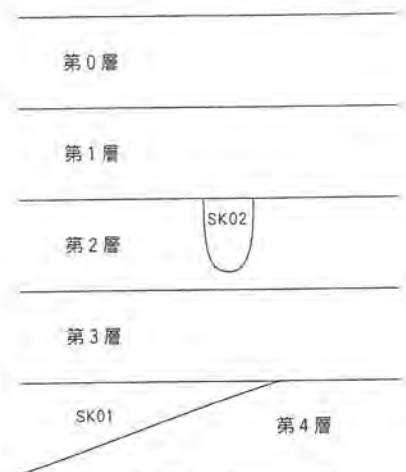


図4 地層と遺構の関係図

ii) 遺構と遺物

古代の遺構と遺物(図5・7)

SK01 西肩を検出した土壌で、南北2.4m以上である。東側は攪乱されている。埋土は黄灰色細粒砂で、深さは、0.3m以上である。なお、この遺構の北部については、残土置場を確保するために完

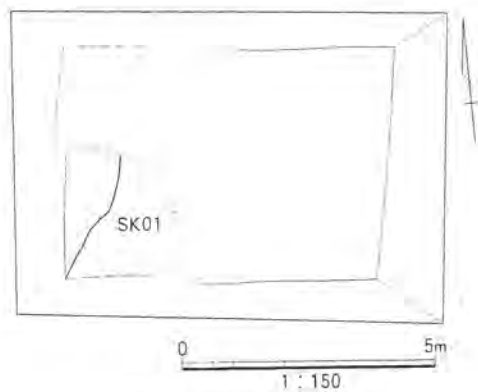


図5 古代の遺構平面図

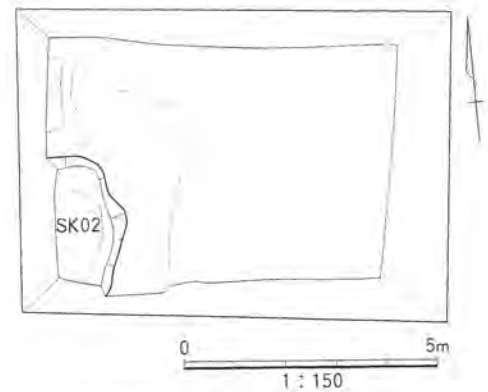


図6 江戸時代の遺構平面図

掘できなかつた。埋土から土師器1が出土した。1は皿で、口径12.6cm、器高2.5cmを測る。口縁部はやや外反し、底部は平坦で、内外面をヨコナデで調整している。



図7 SK01出土遺物

江戸時代の遺構(図6)

SK02 西部で東肩を検出した土壌である。規模は南北2.6m以上で東西は約0.4mを確認したが、西側の肩は現代に攪乱されている。深さは約0.2mである。埋土は暗褐色細粒砂質シルトで、遺物は出土しなかつた。構築された時代は、近代まで下がることはなく、おそらく江戸時代のものと考えられる。

3)まとめ

今回の調査では、古代に遡ると思われる土壌を検出した。

今回地表下約1.5mで検出した第4層はSX06-1次調査での第4層と同様で水成の地山層である。同調査で確認された中世の包含層や遺構は本調査では確認できなかったが、第3層から土師器・須恵器・瓦器片が出土しており、周辺に中世の遺構が存在することを想定できよう。

また今回の調査地で、地下基礎部分が浅い低層階建物が存在した箇所では古代や中世の遺構が遺存している可能性があることが判明した。このことは、周辺での発掘調査を実施する際の手がかりを得たといえる。今後当遺跡での発掘調査を重ねることによって、敷津遺跡の実態がさらに明らかになっていくものと思われる。

機械掘削状況
(南東から)



第4層上面の遺構
(南から)



第2層上面の遺構
(北から)



敷津遺跡発掘調査(SX08-2)報告書

調査個所 大阪市浪速区敷津東二丁目2-3・2-5・2-8
調査面積 150㎡
調査期間 平成20年7月28日～8月4日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、絹川一徳

1) 調査に至る経緯と経過

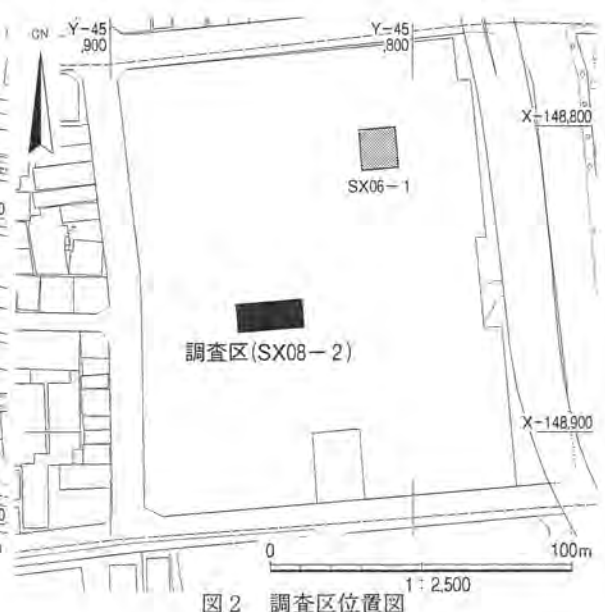
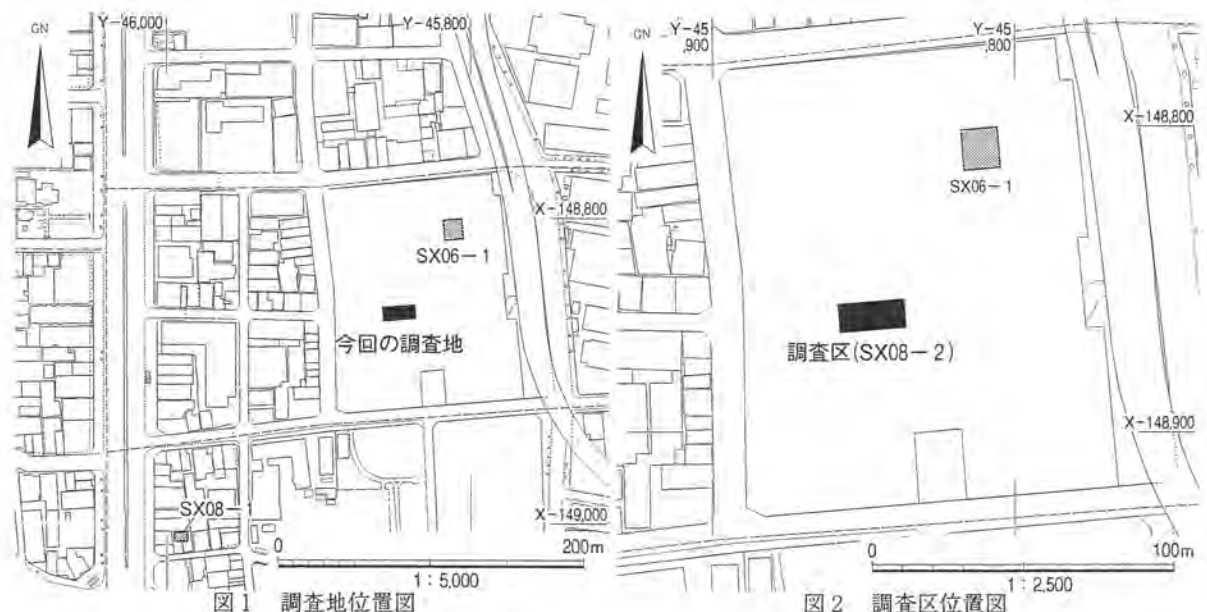
調査地は敷津松之宮神社から東へ200mほど離れた大阪木津地方卸売市場内に位置する。弥生時代～中世の遺物散布地として知られる敷津遺跡の東北一帯に当る。周辺は大阪湾岸沿いに発達した砂堆上にあり、臨海部という地の利によって古代・中世は海上交通の要衝となっていた。調査地のあたりは、供御人として朝廷に属し、中世には「蛤売」をはじめとして広く商業活動に従事した今宮商人の本拠地があったことも知られている。

既往の調査として、調査地の北東側で同じ市場の敷地内においてSX06-1次調査が、南西へ約200m離れた場所でSX08-1次調査がそれぞれ実施されている(図1)。前者の調査では中世前期の溝からハマグリを主体とする貝類、フグ科やアジ科などの魚骨といった自然遺物が出土しており、後者の調査では古代とみられる土壌が検出されている[大阪市文化財協会2007・2008]。

調査地はもともと東洋紡績今宮工場があった場所で、1890年代にその前身となる紡績工場が建設されている。その後、紡績工場が廃止され、1937(昭和12)年に市場が他所より移り、1950(昭和25)年に引き続きこの場所で市場が開場して今日に至っている。近年、市場施設の老朽化に伴い施設全体の再開発事業を行うこととなり、現在、3期にわたる工事が進められている。第1期工事に先行してSX06-1次調査が実施されており、今回は第2期工事に先行する発掘調査である。

発掘調査に先立って、7月14日・17日に大阪市教育委員会による試掘調査が実施された。調査地内において8箇所を試掘した結果、地層の遺存状態が比較的良好で遺物の包含も認められた南半部に南北7.5m、東西20m、面積150㎡の調査区を設定して発掘調査を行うこととなった。

調査は事前に重機による攪乱層の掘削と除去を行ったのち、7月28日より掘削面の精査を開始し、以下地層ごとに人力で掘削を行った。その間、遺構と遺物の検出と必要な実測・記録作業を行い、8



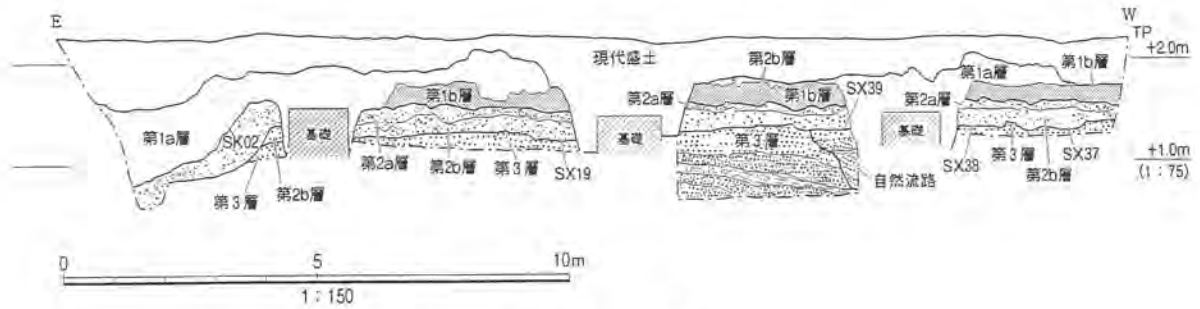


図3 南壁断面図

月4日に現地におけるすべての作業を完了した。

なお、本報告で用いる水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP+〇m」と記す。方位記号が示す北位は図1・2が世界測地系の座標北で、それ以外は磁北である。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・図4)

調査地の現高はTP+2.3m前後である。現代盛土以下で第1～第3層までの地層を確認したが、砂堆に立地する遺跡であることから、いずれも砂質が優勢な地層であった。

第1a層：明黄褐色粗粒砂層で、層厚は平均15cm程度、厚いところで50cm以上あった。19世紀末に建設された紡績工場の造成土である。

第1b層：オリーブ褐色シルト質細粒砂層で、層厚は約20cmである。作土層であるが、上記の紡績工場建設に伴う工事によって土壌の攪拌が著しく、都市部から持ち込まれたとみられる陶磁器片などの生活残滓が多数含まれていた。調査区の東側では本層を埋土とする生活残滓の廃棄土壌を検出した。本層に包含される遺物は江戸時代末から明治時代にかけての陶磁器類が大半であった。

第2a層：褐色シルト質細粒砂層で細礫・極細礫を含む。作土層で層厚は約10cmである。

第2b層：オリーブ褐色またはにぶい黄褐色のシルト質細粒砂層の作土で、層厚は10～20cmである。地層の基質が下位層と類似しており、その層界はやや不明瞭である。本層下面において調査区全域で本層を埋土とする畝跡とみられる遺構群を検出した。

第2層では遺物はおもに第2a層と遺構埋土から出土した。ただし、全体の遺物量は少なく、出土する遺物の内容も共通しており、土師器・須恵器・瓦・瓦器碗・瓦質土器羽釜などの細片が認められたのみである。地層と出土遺物の特徴からみて、本層(第2a・2b層とも)は隣接するSX06-1次調査地の第2層(中世前期に比定)に相当するが、瓦質土器も認められることから本調査地では第2層の形成は中世後期まで下るものと思われる。

第3層：上位の黄褐色中粒～粗粒砂層と下位の細礫を含んだにぶい黄褐色粗粒砂層からなる砂堆本体を構成する水成層である。TP+0.6m前後まで確認できたが、それ以下も同様の水成層が堆積して



図4 地層と遺構の関係図

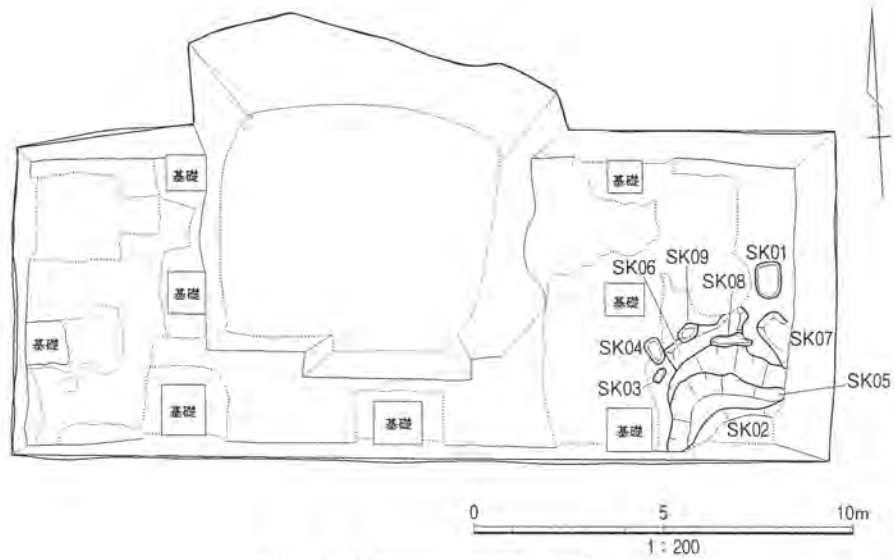


図5 第1b層下面検出遺構平面図

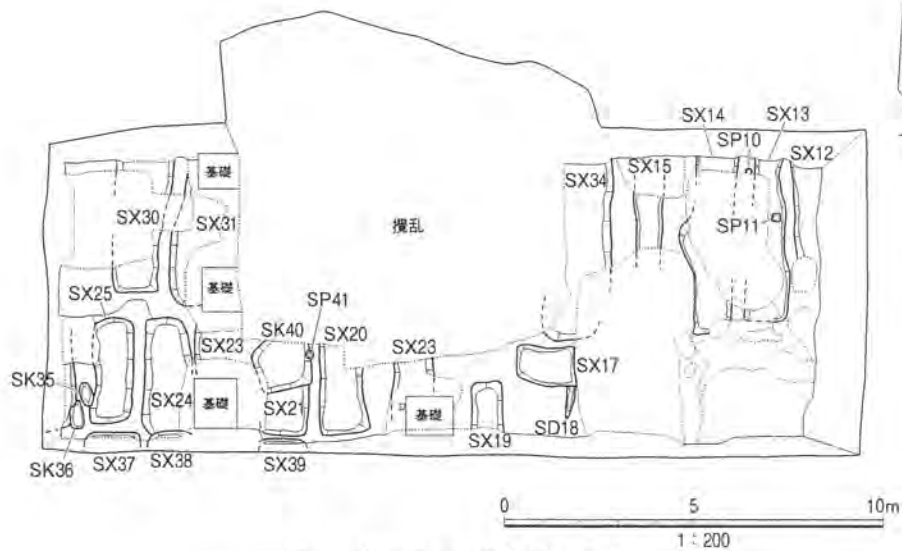


図6 第2b層下面検出遺構平面図

ているものと思われる。遺物は確認できなかった。

ii) 遺構と遺物

第1b層下面検出遺構(図5)：調査区の東側で第2a層上面において第1b層を埋土とする遺構群を検出した。SK01～09である。特にSK01・02・05には多量の陶磁器片が廃棄されていた。江戸時代末から明治時代にかけての肥前・瀬戸・美濃、在地系の陶磁器であり、工場造成工事に伴って都市部から持ち込まれた廃棄物とみられる。

第2b層下面検出遺構(図6)：調査区の全域において長さ3～5m、幅約1m、深さ約0.1mほどの長方形の土壇状の遺構が規則的に配置された状態で多数検出された。中世後期の畠作を示す遺構であり、本来は土壇状に残された部分が作付けのために深く耕起され、畝立てにより盛土されていたとみられる。そのほか鋤溝、土壇、小穴などの遺構がまばらに認められた。

3)まとめ

1886年に刊行された『内務省大阪実測図』によると調査地は今宮村の近傍に広がった畠作地であった。今回の調査でも第2b層下面検出遺構において畠作に係わる遺構が検出され、こうした景観が中世から存在していたことを窺わせる。中世の今宮には、天皇の供御(食事)を担う御厨子所に属し、諸役免除の特権を得て広く商業活動に従事した供御人が集住していた。隣接するSX06-1では13世紀前半の溝からハマグリなどを主とする貝類が多数出土しており、「蛤売」として従事していた今宮供御人との関係を示す可能性がある資料として注目されている。本調査地もまさに今宮供御人の本拠地に含まれる場所であり、見つかった畠作遺構も彼らの集落と関係する可能性がある。今後も周辺地の調査を進めて、今宮供御人に関する遺構・遺物の発見に努める必要がある。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2007、『大阪木津市場株式会社による建設工事に伴う敷津遺跡発掘調査(SX06-1)報告書』

2008、『株式会社明来による建設工事に伴う敷津遺跡発掘調査(SX08-1)報告書』

大阪府漁業史編さん協議会1997、『大阪府漁業史』

南壁中央部断面
(北から)



SK01・02完掘状況
(東から)



第2b層下面検出遺構
(東から)



VI 東 淀 川 区

三宝寺跡伝承地発掘調査(SP08-2)報告書

調査個所 大阪市東淀川区瑞光4丁目2
調査面積 74m²
調査期間 平成20年6月11日～6月25日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、池田研

1) 調査に至る経緯と経過

本調査地は三宝寺跡伝承地の東北部に位置する。調査地周辺は淀川低地と大阪湾岸低地に挟まれた淀川右岸の吹田砂堆上にあり、縄文海進以降、早くから陸化が進んだ微高地である。平安時代には味原牧が設置されるなど、古代には放牧地として利用されていたことが知られている。また、現在の大阪経済大学の辺りには12世紀後半に大日坊能忍により建立され、16世紀中葉には焼失したとされる三宝寺があったといわれており、遺跡名の由来となっている[西成郡役所1915、井上正雄1922]。

これまでの調査では、SP02-1次調査で縄文時代中期末から後期前半にかけての縄文土器が180点近く出土しており、調査地周辺の陸化が早くから進んでいたことが裏付けられた[大阪市文化財協会2003]。中世に入ると当地域における人々の活動が活発化したようで、SP96-1・01-1・02-1次調査やDT00-1次調査などで溝や土壇といった当該時期の遺構が検出されており、SP96-1次調査では14~15世紀代の輸入青磁や多量の瓦が出土している[大阪市教育委員会ほか1998、大阪市文化財協会2003]。また、近世の遺構としてはSP96-1・02-1次調査で溝や土壇が検出されている(図1)。

今回の調査地では建築工事に先立ち、大阪市教育委員会が試掘調査を実施したところ、現地表面下約50cmで瓦器などを伴う遺物包含層が確認されたことから、本調査を行うこととなった。調査を開始するに当たり、瑞光第2住宅敷地内の1・2号館東側にある各々2箇所(計4箇所)の調査区を設定し、1号館前の第1・2調査区は各々15m²、2号館前の第3調査区は20m²、第4調査区は24m²の調査面積を確保した(図2)。6月11日には第1調査区の調査を開始し、その後、第2、3、4調査区の順に調査を行った。調査では近現代の盛土・作土層と、近世の整地層を重機で掘削した後、

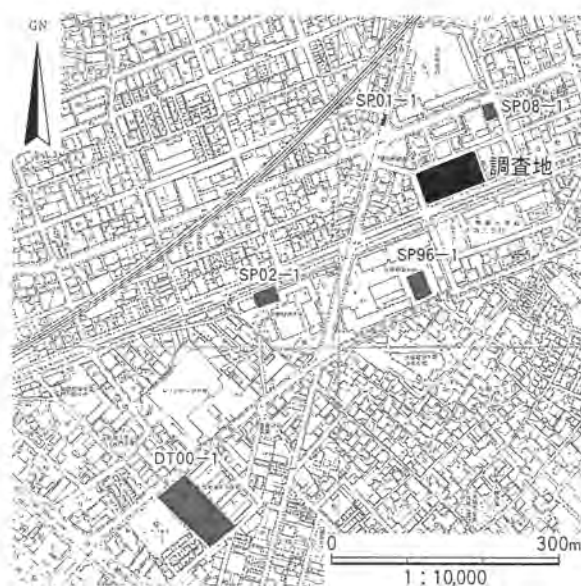


図1 調査地位置図

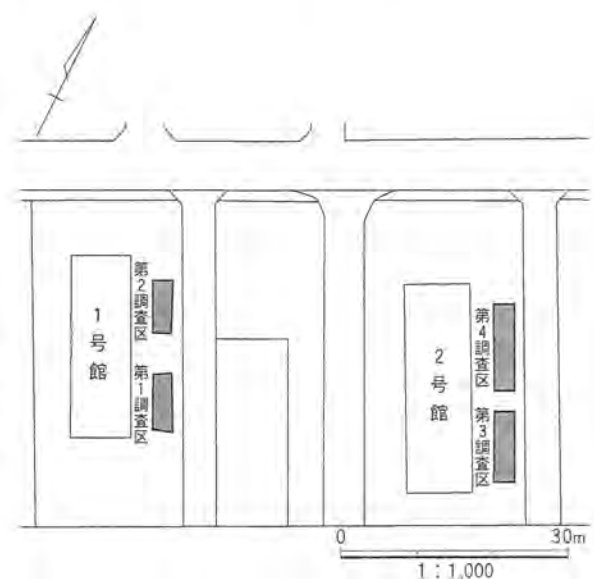


図2 調査区配置図

それ以下を人力で掘削した。また、砂堆を形成する水成砂層が南東方向に向って落込んでいた第3・4調査区では、調査区西半を掘下げて第2bii～3a層の平面調査を行い、それ以下については西側溝で断面調査を行った。調査の結果、中世から近世にかけての耕作に関わる溝群や流路などを検出し、6月25日には埋戻しを含むすべての作業を終了した。

なお、本調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中ではTP+〇mと記しており、示北記号は図1が座標北、図2・5・6は磁北である。

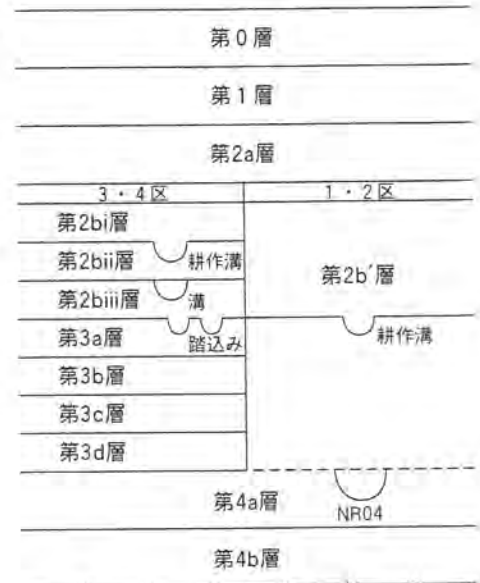


図3 地層と遺構の関係図

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第0層：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極細粒～極粗粒砂を主体とする現代盛土である。

第1層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質極細粒～中粒砂からなる現代作土である。

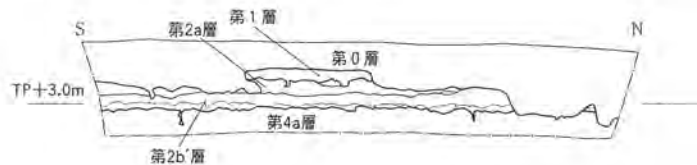
第2層：多くは豊臣期前後から徳川期にかけての整地層と作土層で、第2a・2b層に細分される。第2a層は黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極細粒～中粒砂を主体とする徳川期の整地層で、調査地全体に分布している。細分可能であり、層内では一時的に耕作されたとみられる痕跡も観察される。第2b層は第3・4調査区で確認された作土層で、第2bi～2biii層に細分される。第2bi層は灰黄褐色(10YR4/2)極細粒～中粒砂質シルトからなる徳川期の作土層である。下面では耕作溝群を検出した。第2bii層はにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質極細粒～中粒砂からなる徳川期の作土層である。層内では砂質の強い部分とシルト質の強い部分が互層をなしており、頻繁に水を被る環境下にあったと考えられる。第2biii層は暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒～中粒砂質シルトからなる豊臣期から徳川期にかけての作土層である。第3区では上面で耕作に伴う溝群を、第3・4調査区では下面で多数の踏みを検出した。

第2b'層：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細粒～粗粒砂からなる豊臣期から徳川期にかけての作土層である。上部はシルト質が強い。第1・2調査区に分布しており、第1調査区では下面で耕作溝群を検出した。

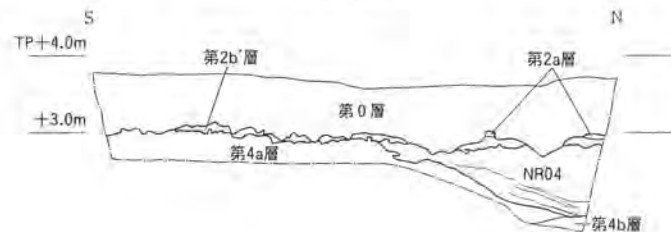
第3層：水浸きの環境で堆積した細粒の堆積物からなる。豊臣期以前に、長期間にわたって砂堆の窪地などに堆積したものとみられる。第3・4調査区に分布しており、第3a～3d層に細分される。第3a層は黒褐色(10YR3/1)シルトからなる。第3b層は黒色(2.5Y2/1)粘土からなる。第3c層は黒褐色(7.5YR3/2)泥炭からなり、南に向って層厚を増す。第3調査区西端の地層確認用のトレンチ内で確認した第3d層は暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土からなる。

第4層：砂堆を形成する砂層で、第4a・4b層に細分される。第4a層は黄色(2.5Y7/4)細粒～粗粒砂からなり、上方細粒化している。第2調査区では本層上面で流路NR04を検出した。第4b層は浅黄色(2.5Y7/3)中粒～極粗粒砂からなる。ラミナ構造が発達しており、その傾きを観察した結果、河

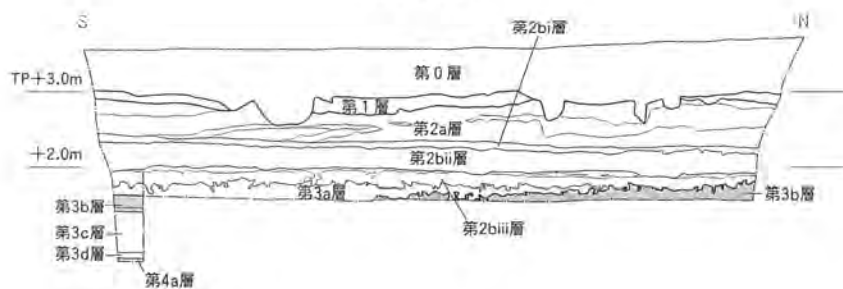
第1調査区



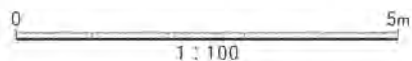
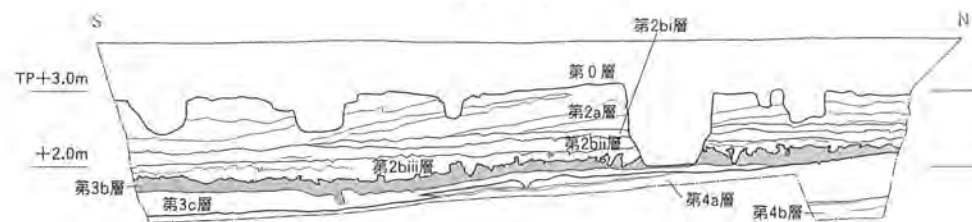
第2調査区



第3調査区



第4調査区



- 第0層 : 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト質極細粒~極粗粒砂
- 第1層 : 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質極細粒~中粒砂
- 第2a層 : 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト質極細粒~中粒砂
- 第2bi層 : 灰黄褐色 (10YR4/2) 極細粒~中粒砂質シルト
- 第2bii層 : におい黄褐色 (10YR5/3) シルト質極細粒~中粒砂。
層内では砂質の強い部分とシルト質の強い部分が互層をなす。
- 第2biii層 : 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 極細粒~中粒砂質シルト
- 第2b'層 : 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト質極細粒~粗粒砂。上部はシルト質が強い。
- 第3a層 : 黒褐色 (10YR3/1) シルト
- 第3b層 : 黒色 (2.5Y2/1) 粘土からなる暗色帯構成層
- 第3c層 : 黒褐色 (7.5YR3/2) 泥炭
- 第3d層 : 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘土
- 第4a層 : 黄色 (2.5Y7/4) 細粒~粗粒砂。上方細粒化。
- 第4b層 : 浅黄色 (2.5Y7/3) 中粒~極粗粒砂。ラミナ構造が発達。

図4 第1~4調査区西壁地層断面図

川の氾濫などによる北北東から南南西方向に向う流れの営力で堆積したと考えられる。

ii) 遺構とその遺物

a. 第4層上面(図3・5)

第2調査区では第4層上面で流路NR04を検出した。NR04は調査区の北西端で一部を検出したのみで、人工の溝である可能性もあるが、南東側の肩が不整形で蛇行しており、底面に加工痕が観察されないことなどから、自然流路と判断した。NR04は南西-北東方向に延びており、幅1.5m以上、深さ1.0m以上ある。埋土は2層に細分され、上層はにぶい黄褐色(10YR5/3)細粒~粗粒砂からなる。淘汰が悪く、シルト~砂の偽礫を少量含む。下層は灰黄褐色(10YR4/2)シルトと中粒~極粗粒砂の互層からなる。埋土からは土師器、瓦器、平瓦など中世の遺物が出土しており、埋没した時期を示していると考えられる。また、同一面で検出した浅い遺構であるNR05やSX06は、NR04の支流の可能性はある。

b. 第2・2b'層(図3・5・6)

第1調査区では第2b'層の下面で、豊臣期から徳川期にかけての耕作溝群を検出した。耕作溝群は南西-北東方向に延びており、幅0.2m、深さは0.03m前後である。第4調査区の第2biii層上面では、豊臣期から徳川期の耕作に伴うとみられる溝群を検出した。溝群は南東-北西方向に延びており、幅は0.1mと狭く、深さは0.03m前後である。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)極細粒~中粒砂質シルトからなる。また、第3・4調査区では同層の下面で多数の踏込みを検出した。第3・4調査区では第2bi層の下面で、徳川期の耕作溝群を検出した。溝群は南東-北西方向に延びており、幅は0.2~0.3m程度のものが多く、深さは0.03m前後である。

iii) 包含層出土の遺物(図7)

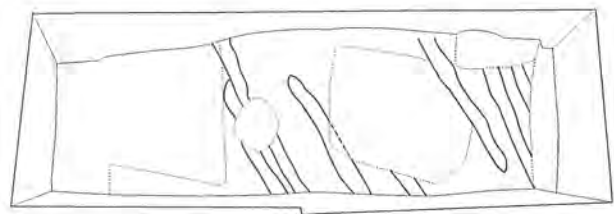
第2a層からは土師器焙烙、瓦器、瓦質土器、丹波焼、堺播鉢、肥前陶器、関西系陶器、肥前磁器染付・青磁染付・色絵、丸・平瓦、棧瓦、井戸瓦、家形のミニチュア土製品、動物骨、火打石、鉄製品など、18~19世紀を中心とする遺物が出土した。2は土師器のへそ皿である。

第2bi層からは土師器焙烙、須恵器、瓦質土器、肥前陶器、コンニャク印判を用いた肥前磁器染付や青磁染付・白磁、丸・平瓦、棧瓦、土製品など、18世紀代を中心とする遺物が出土している。写真1はいわゆる「ゆずでんぼ」とみられる土製品である。器壁の外面には一面に小さな窪みがあり、土人形などに多く見られる灰白色の精良な胎土を用いている。第2bii層からは土師器、備前焼、瀬戸美濃陶器、肥前磁器染付、鉄製品など17世紀代を中心とする遺物が出土した。第2biii層からは土師器、瓦器、常滑焼、平瓦などが出土した。4は瓦器椀である。

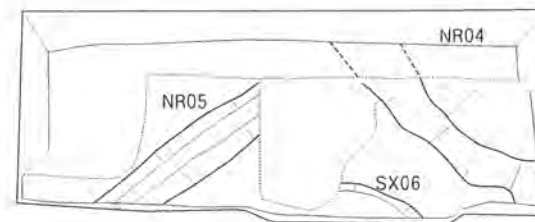
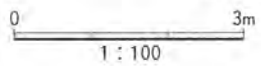


写真1 第2bi層出土の「ゆずでんぼ」

第2b'層からは縄文土器、土師器、瓦器、肥前陶器、平瓦

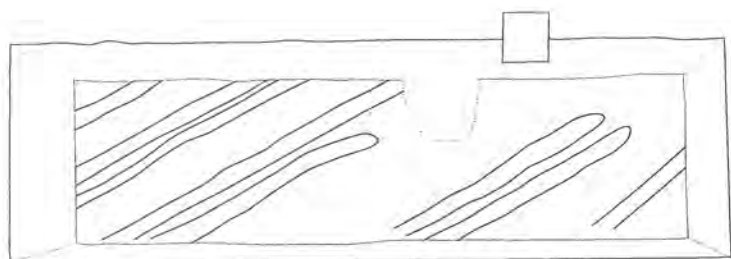


第1調査区 (第2b'層下面)

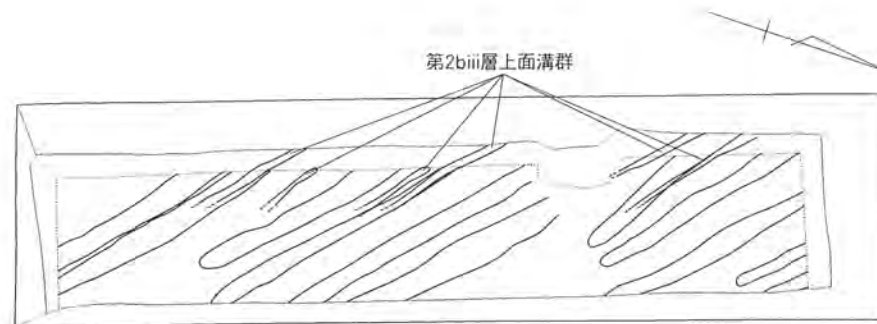
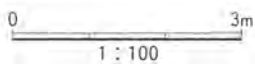


第2調査区 (第4層上面)

图5 第1・2調査区遺構平面图



第3調査区 (第2bi層下面)



第4調査区 (第2bi層下面・第2biii層上面)

图6 第3・4調査区遺構平面图

などが出土した。1は土師器皿で、豊臣期前後のものとみられる。6は本層最下部で出土した縄文土器である。破片であるが残りはよく、器表面は磨耗していない。縄文の施文帯が広く、SP02-1次調査出土資料と同様に、縄文時代中期末から後期前半にかけてのものとみられる。

第3a層からは土師器、瓦器、肥前陶器など、中世から豊臣期にかけての遺物が出土した。5は和泉型の瓦器椀である。13世紀前葉から中葉にかけてのものであろう。

第3b層からは土師器、木製杭、炭などが出土した。3は土師器皿である。細片であるため詳細な時期は不明であるが、鎌倉～室町時代にかけてのものとみられる。

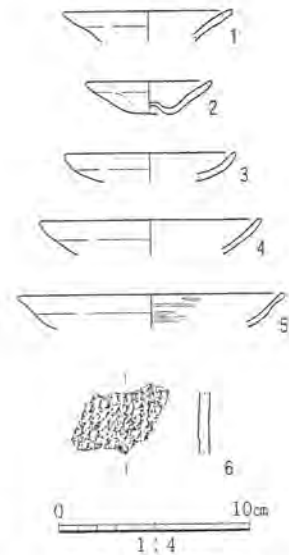


図7 遺物実測図
第2a層(2)、第2biii層(4)、第2b'層(1・6)、第3a層(5)、第3b層(3)

3)まとめ

今回の調査では、中世に埋没したとみられる流路や、豊臣期から徳川期にかけての耕作に伴う溝群を検出した。溝群は複数の遺構面で検出されたが、いずれも南東-北西方向か、あるいはそれに直交する方向に伸びていた。また、第3・4調査区では砂堆を構成する砂層の直上に、第1・2調査区では確認されなかった沼沢地性堆積層が分布しており、南東方向に向って層厚を増していた。本層は滞水の状態で堆積したとみられることから、第1・2調査区の南東には砂堆の間に形成された落込みが拡がっており、中世頃には湿地となっていたと考えられる。

一方、遺物に関してはSP02-1次調査と同様に、縄文時代中期末から後期前半のものとみられる縄文土器片が出土した。今後、周辺地域における調査の進展に伴い、当該時期の集落が発見されることが期待される。

引用・参考文献

井上正雄1922、『大阪府全志』巻三、p.399

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「大阪経済大学による建設工事に伴う発掘調査(SP96-1)：『平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3-9

大阪市文化財協会2003、「三宝寺跡伝承地の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-2001・2002年度-』、pp.127

-136

西成郡役所編1915、『西成郡史』、p.316

第1調査区西壁地層断面
(南東から)



第2調査区西壁地層断面
とNR04
(北東から)



第4調査区西壁地層断面
(北東から)



第2b' 層下面溝群
検出状況
(第1調査区 東から)



第2biii 層上面溝群
検出状況
(第4調査区 南東から)



第2bi 層下面溝群
検出状況
(第3調査区 西から)



VII 阿 倍 野 区

阿倍寺跡発掘調査(AB08-1)報告書

調査個所 大阪市阿倍野区松崎町2丁目46-1
調査面積 420㎡
調査期間 平成20年11月27日～12月27日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、京嶋 寛

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は白鳳期の瓦を出土する阿倍寺跡推定範囲の東南部に位置し、字地名が「東阿倍寺」の敷地に当る。西約30mの地点にはかつて塔心礎があり、戦前には「一本松礎石」として大阪府史蹟[大阪府学務部1931]であったが、現在、心礎は西成区天下茶屋公園に移設され、塔跡と思われる松長大明神の祠付近は大阪市顕彰史跡になっている(図1)。

これまでの阿部寺の調査では、AB98-6次調査[大阪市文化財協会2001]で古代から中世の瓦が出土し、白鳳期に創建された寺院が存在する可能性が高まったが、その後のAB06-1・AS06-3次調査では、調査区域の全域で19世紀前半頃の土採り穴が検出され、若干の古代・中世の遺構・遺物が認められるのみであった。今回の調査地点は、試掘調査によれば現地地表下1.2~1.5mで古代・中世の遺物を含む砂質シルト層があり、その直下で確認されている地山層上面で当該期の寺院関連の遺構が存在する可能性があった。

調査区は敷地のほぼ中央部の東西20m、南北21mの範囲である(図2)。発掘作業は11月27日から現代の盛土である表土層を重機により掘削し、攪乱の掘削を並行して行いつつ12月6日に同作業を完了した。調査区北半には旧建物のコンクリート基礎杭が多数検出され、掘削は難航した。地層の検討と遺構検出の結果、



図1 調査地位置図

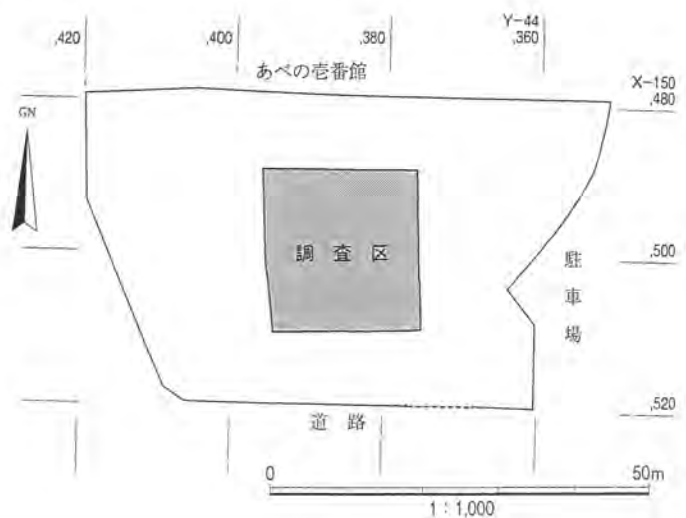


図2 調査区位置図

調査区全域に土採り穴が存在することが判明し、その後は、土採り穴の埋土の掘削を人力で行い、12月19日にその作業を完了した。掘削後の全景写真の撮影と記録作業を24日までに終え、埋戻し作業を行って27日にすべての現場作業を終了した。

なお、挿図の座標値は世界測地系、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+〇mと記している。

2) 調査の結果

i) 層序

調査地点で確認された地層を以下に記述する(図3・4)。

第1層：オリブ黒色(5Y3/1)～黒褐色(2.5Y3/1)シルト～砂質シルト層で、近現代の整地層および攪乱の埋土である。層厚は100～130cmである。

第2層：暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト層で層厚は10～15cm、調査区の北半部に分布する作土層である。

第3層：黄褐色(2.5Y3/4)～灰オリブ色(5Y5/2)細礫混り砂質シルト層で、層厚は15～20cmである。調査区のはほぼ全域に分布する作土層である。

第4層：暗灰黄色(2.5Y4/2)～灰色(5Y5/1)細礫混り砂質シルト層で、地山と思われる粘土質シルトの偽礫を含む。調査区全域で検出された土採り穴の埋土であり、穴によって偽礫の多いものと少ないものがある。また、複数の層に分かれ、間にごく薄く水つきの細粒砂層が介在するところもある。層厚10～60cmである。土採り穴は重複しつつ調査区の全域に及んでいるため、本層は調査区全域に分布する。

第5層：灰色(7.5Y6/1)～灰白色(7.5YR5/6)粗粒砂～細礫からなる地山層である。

ii) 遺構と遺物(図5・6)

土採り穴群

第4層を埋土とする土採り穴を調査区全域で検出した。土採りの掘削単位は不明瞭であり、土採り穴の形状は不整形である。規模は平面で長軸2～6m、深さ0.2～0.5mである。地山の砂礫層をも掘削しており、シルトや砂・礫を対象としている。調査区南半部では地山が東西に帯状にやや高く掘り残されている部分が6m間隔であり、それが示す方向は東で北に若干振る。土採りがある程度規則的に行われていたことを示す(図5)。

また、北端部と南東部に幅0.3～0.5mの溝状遺構SD01・02が、不連続であるが検出された。埋土は土採り穴と同様の細礫混り砂質シルトである。土採り作業に際して、排水のために仮設的に掘られたのではないかとと思われる。

土採り穴の埋土である第4層からの出土遺物は掘削面積に比して少なかった。

SK01

調査区の北西部の第5層上面で検出された直径3.5mの円形を呈する土壌である。埋土はオリブ褐

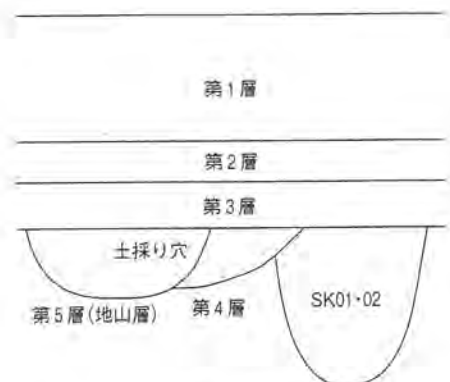


図3 地層と遺構の模式図

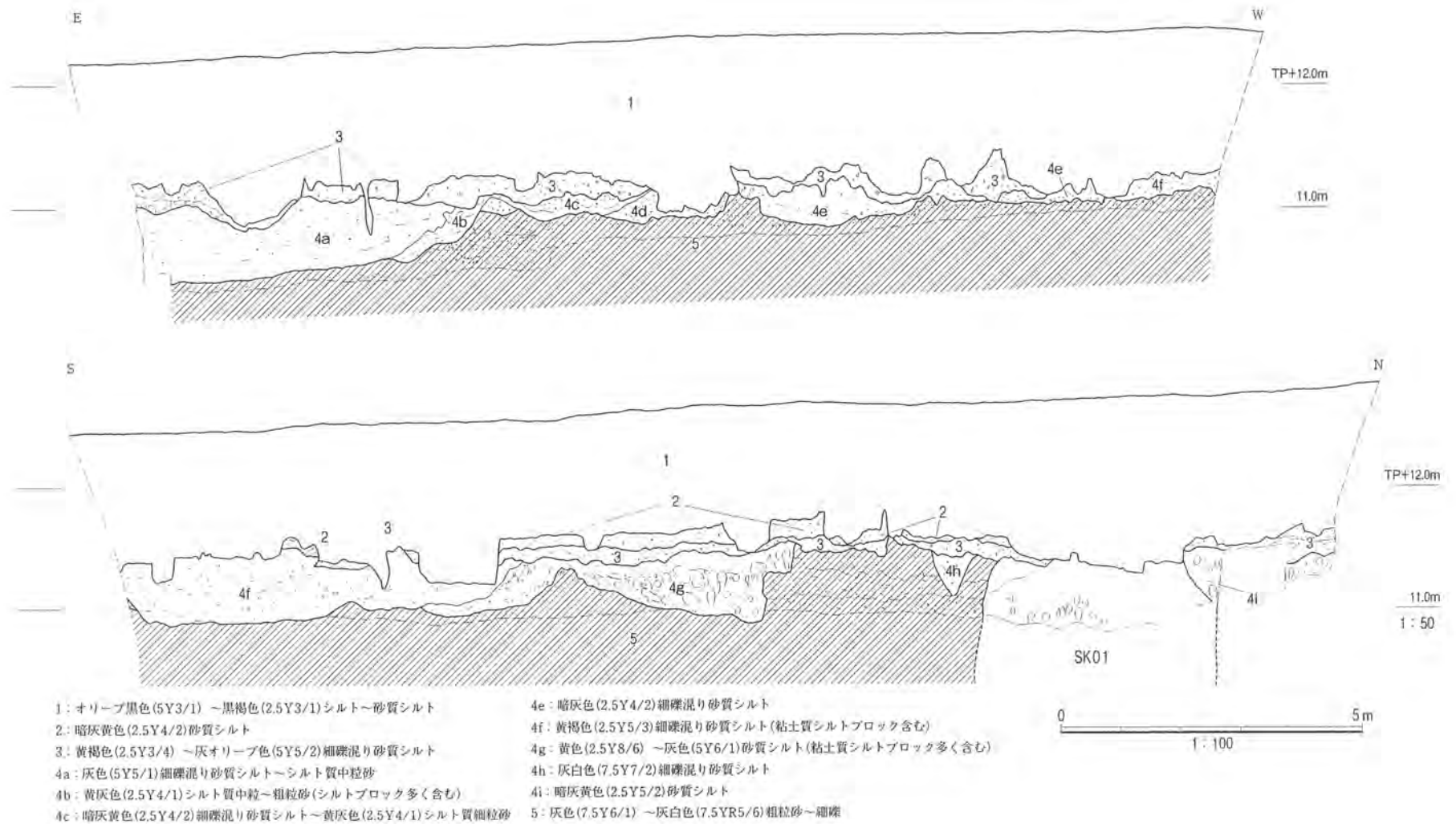


図4 南壁(上)、西壁(下)断面図

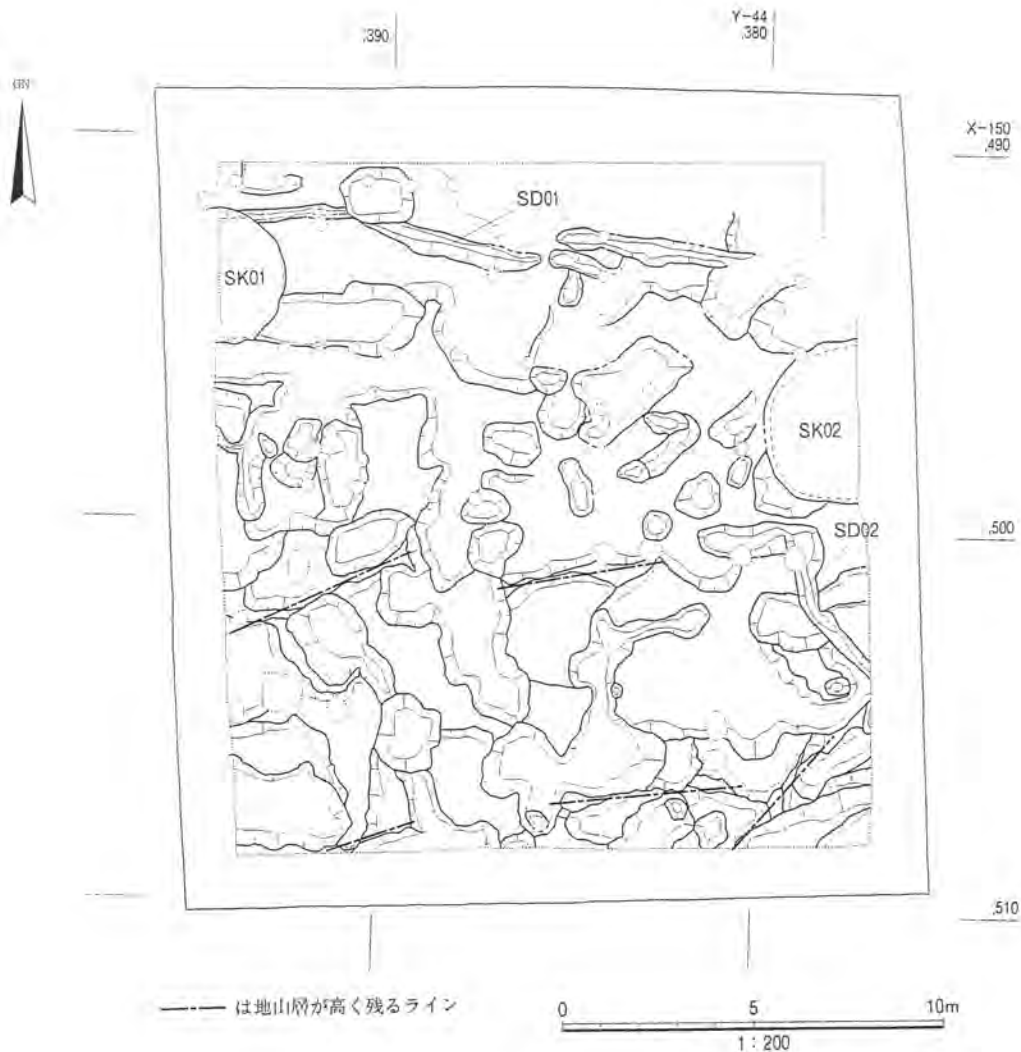


図5 第5層上面遺構平面図

色(2.5Y4/3)極細粒砂ないし細粒砂質シルトが1 m以上続く。均質で軟弱な埋土であり地山層も砂礫であるため、湧水による壁面の崩落が激しく、井戸の可能性もあったが、確認できなかった。

SK02

調査区の東端にも直径4 mほどの円形を呈すると思われる土壇が検出された。埋土は作土と思われるオリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルトであり、上面は中央が盛り上がるように山形をなしていた(写真下)。やはり湧水が激しいため深く掘削することができなかった。

いずれも遺物は少ないが、土採り穴に近い時期の遺構と思われる。

上記2基の土壇は、埋土が均質な極細粒砂と作土と思われる砂質シルトと、それぞれ異なっているが、いずれも他の土の混入が極めて少ない点で共通している。井戸の可能性もあるが、土採り作業に関連する採掘土の選別や、不要土の廃棄土壇である可能性も残されている。

今回の調査で出土した遺物は非常に少なかった。古代の遺物はほとんど見られず、唯一、緑釉陶器碗5が第3層から出土した。須恵質で外面には高台内を含めて薄緑色の釉が残るが、内面はかすかにしか残らない。

第3・4層から近世の遺物が、細片でごく少量出土している。1・2は飯事道具のミニチュア白磁碗である。1は口縁外面と花卉文の中を赤く彩色し、2は無文である。3は白磁の紅皿である。4は橙色を呈する軟質施釉陶器の灯明皿、6は関西系陶器の鍋で内外面鉄釉を施す。7～9は肥前磁器の碗である。9の内底面には五弁花が見られ、高台内には「春」と思われる銘の一部が確認できる。

これら近世の遺物は18世紀後半から19世紀前半の時期と思われる、これまでの阿倍寺跡周辺のAB06-1次、AS06-3次調査[大阪市文化財協会2006a・b]で発掘されている土採り穴群と同様の時期に土採りが行われたことを示している。

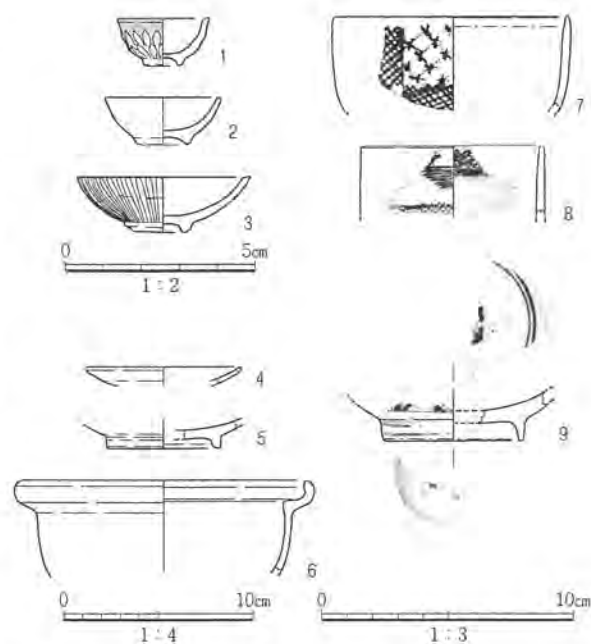


図6 遺物実測図
第3層(1～3・5・6・8・9)、第4層(4・7)

3)まとめ

今回の調査では、中世以前の遺構は徳川時代の土採り作業で破壊されたと思われる、期待された古代の阿倍寺に関連する遺構・遺物は出土しなかった。しかし、周辺でのこれまでの調査同様に、近世の土採り穴群がほぼ全域で検出された。調査地に隣接して「瓦釜」の字地名があり、付近に瓦生産の工房が存在したと推定されるが、今回の土採り穴は採掘土の質や、採掘規模からみて瓦生産のための粘土採り穴とは考えられず、従来指摘されてきたような壁土用の土採り穴と考えられる。これまで阿倍寺跡北西部のみで確認されていた土採りが東南部でも行われていたことが確認され、この時期の土採り作業が東西500m以上の範囲に及ぶことが新たに判明することになった。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2001、「阿倍寺跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財調査報告-1998年度-』pp.51-60

2006a、「株式会社近鉄百貨店による建設工事に伴う阿倍野筋北遺跡発掘調査(AS06-3)報告書」

2006b、「阿倍野筋2丁目における埋蔵文化財発掘調査(AB06-1)報告書」

大阪府学務部1931、「寺院、寺院址」：『大阪府史蹟名勝天然記念物』第5冊 p.80

第5層上面全景
(南から)



第5層上面
(南東から)



SK02(西から)



阿倍野筋北遺跡発掘調査(AS08-2)報告書

調査個所 大阪市阿倍野区松崎町二丁目9-9・278-2
調査面積 36㎡
調査期間 平成20年10月14日～10月17日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄

1) 調査に至る経緯と経過(図1・2)

調査地は、古墳時代から中世の集落遺跡である阿倍野筋北遺跡の東端に位置し、南にある阿倍寺跡の推定外郭から北約100mである。阿倍寺跡については、第二次世界大戦前に松長大明神境内から塔の心礎が見つかり、北には金堂跡と推定される方形の土壇があった。創建は、出土した軒瓦から7世紀後半と推定されている。最近、推定寺域の北西外であるAS06-3次調査地で阿倍寺に使用されたと推測される単弁蓮華文軒丸瓦が出土し、四天王寺第Ⅱ期の瓦と同範の可能性が指摘された[大阪市文化財協会2007]。調査地から南約200mのAB98-6次調査では14~16世紀前半の大溝が見つかり、阿倍寺の北辺を区画していたとも考えられた[大阪市文化財協会2001]。18世紀前半の橋守国筆「摂津国四天王寺図」(四天王寺蔵)にも「阿倍寺古址」が描かれており、阿倍寺は中世後期まで何らかの命脈を保っていた可能性が考えられる。

調査地のある街区の東には、四天王寺を発し田辺の法楽寺を経て南へ向かう庚申街道(下高野街道)が通る。また、上記のAS06-3次調査では、北で東へ45~50度振る豊臣後期から近代に至る溝が重複していた。この調査地の南南西には、溝群を延長すると合致する方向の道路が存在しており、溝群や道路は地割と関係すると考えられる。

本調査は、大阪市教育委員会の試掘調査の結果、中世の遺物包含層が発見されたことから実施した。事業者によるこの包含層(第3層)中途までの掘削後、10月14日に調査に着手し、中世の溝などを掘削・記録して17日に終了した。報告で使用した北方位は道路現況図より合成した座標北、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。

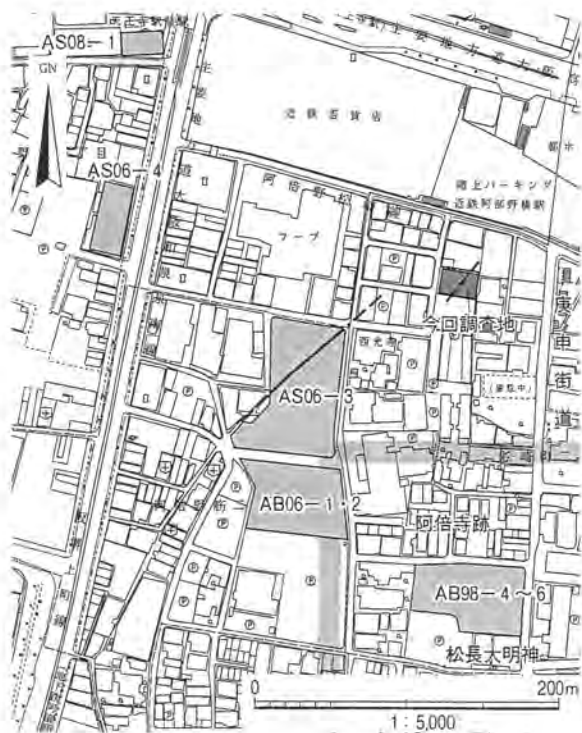


図1 調査地位置図

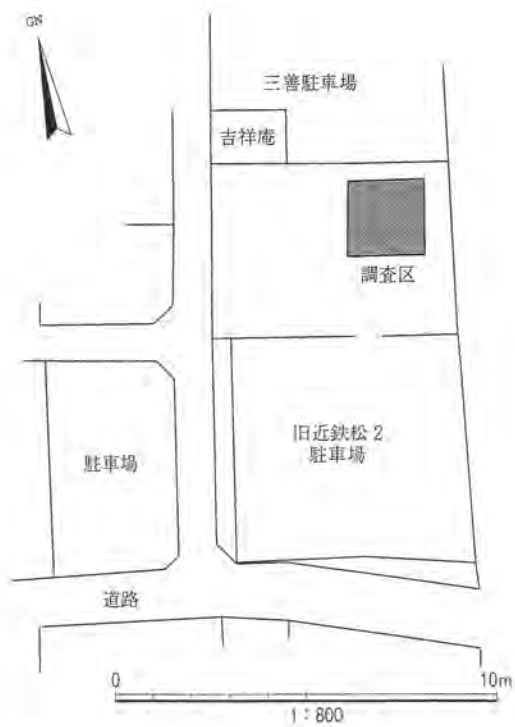


図2 調査区配置図

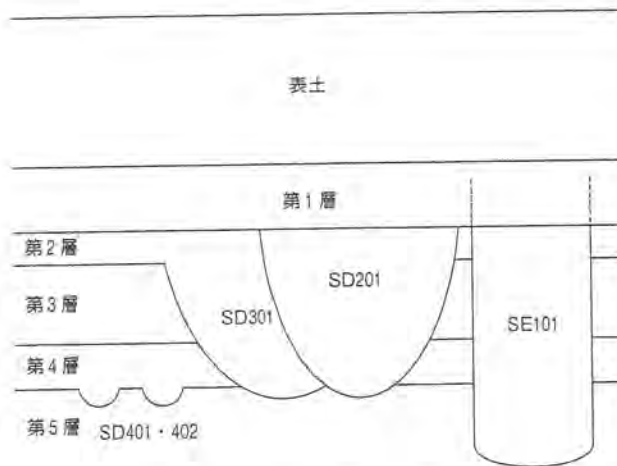


図3 地層と遺構の関係

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第1層：暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～中粒砂層で層厚は12～23cmである。近世以降の作土層である。

第2層：褐色(10YR4/4)シルト質細粒砂層で層厚は5cm以上である。SD301の埋土でもある。時期は13～14世紀頃と推定される。

第3層：黄褐色(2.5Y5/4)砂質シルト層で層厚は20cmである。作土で、時期は第2層と

近いと推測される。SD301は本層より掘られている。

第4層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質シルト～粘土層で層厚は12cmである。下部に第5層の小さな偽礫が混る作土である。下面で耕作溝SD401などを検出した。時期は不明だが、瓦器片が出土する。

第5層：黄褐色(10YR5/8)シルト層で層厚は20cm以上、更新統の地層である。

ii) 遺構と遺物(図4・5)

a. 第4層下面検出遺構

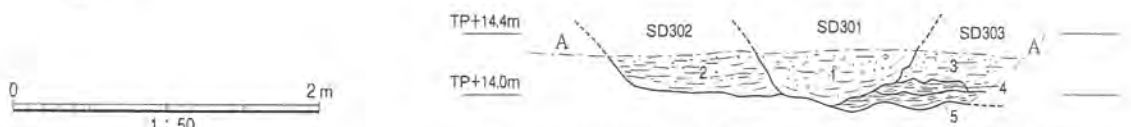
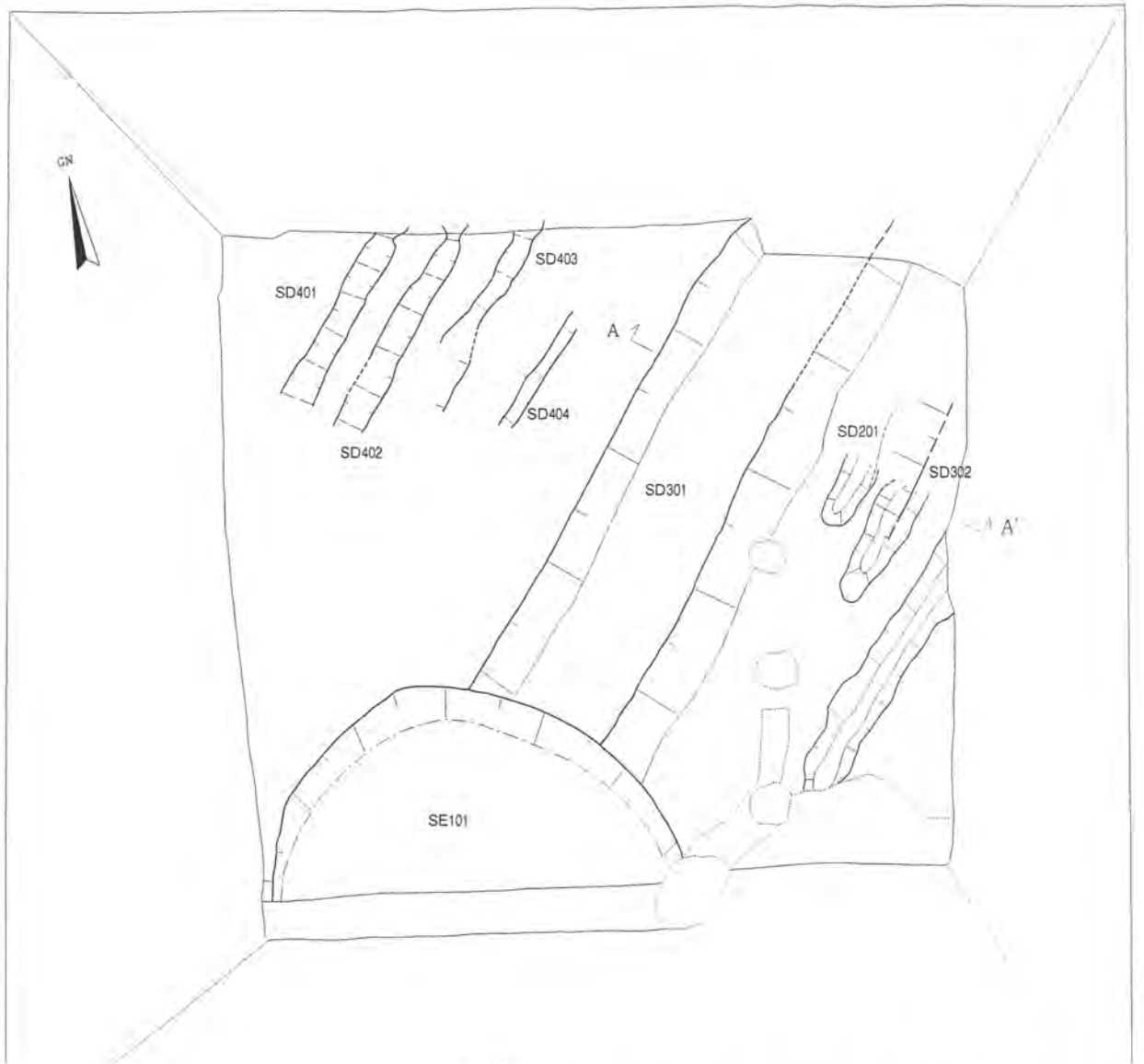
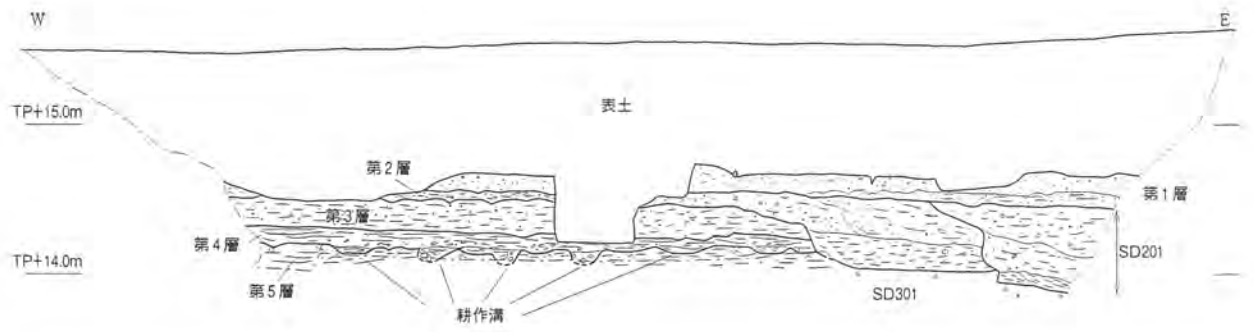
第4層の作土に伴う耕作溝SD401～404がある。これらは北で東へ約40度振り、幅は10～24cm、深さは4～10cmである。SD401～404は上層のSD301・302などと方向が同じで、この方向の地割が第4層を耕起していた時期まで遡ることを示す。

b. 第3・2層上面検出遺構

第3層上面検出遺構としてSD301・302があり、これらの溝を埋めた後に掘直された遺構としてSD201がある。SD301は北で東へ約40度振り、幅は約1.2m以上、深さ0.45mである。直線的に延び、底は平らである。埋土に水成層はない。SD302は幅1.25m以上、深さは検出面より0.40m以上で、肩はわからない。SD301と一連の溝である可能性もあるが、下部の埋土が異なることから別の溝とした。底の微かな窪みの向きからSD301とほとんど同じ方向であったと推定される。SD201は幅1.2m以上で、深さは0.58mである。西肩はSD301と掘分けることができたが、東肩は断面でのみ確認した。方向はSD301とほとんど同じである。

図5の1・3、5～7、10～12はSD201、2・4・8・13はSD201・301、9はSD301の出土である。1～4は中国製磁器であり、そのうち1は玉縁の白磁碗、2～4は青磁碗の口縁部と底部である。5は土師器碗の高台、6・7は瓦器の碗と皿、8は瓦質土器火鉢である。9・10は東播系須恵器の鉢である。11～13は須恵質の平瓦で、11は斜格子、13は縄目のタタキが外面に残る。以上では8の火鉢が14世紀まで下ると推定される。

3本の溝は出土遺物からは時期差が判別できず、一応、13～14世紀に機能していたと推定される。同方向の溝が同じ場所に何回も掘り直されるようすは、南西のAS06-3次調査地でも見られた(図



- 1: におい黄褐色 (10YR5/4) シルト質中粒砂
- 2: 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質シルト
- 3: 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質シルト
- 4: におい黄褐色 (10YR5/3) シルト質中粒砂
- 5: におい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト

図4 遺構平面図および北壁断面図、SD201・301・302断面図

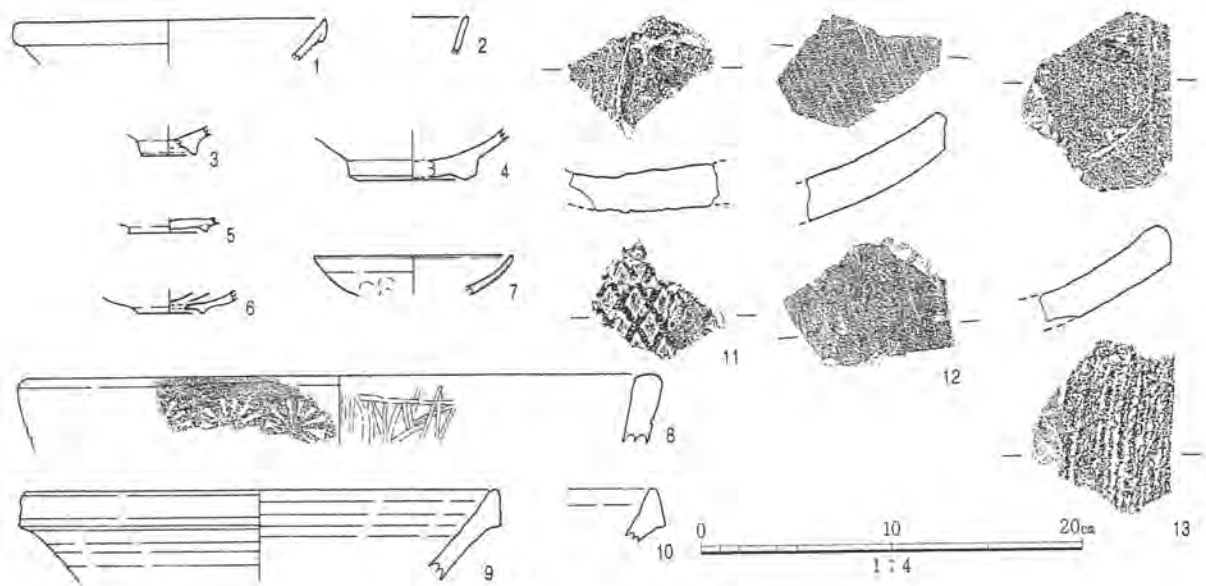


図5 出土遺物実測図

SD201(1・3、5～7、10～12)、SD201・301(2・4・8・13)、SD301(9)

1)。AS06-3次調査の溝は豊臣後期以降と推定され、SD301などより新しい。AS06-3次調査地の溝群とSD301などは方向が少し異なるが、上記の道路に残存する近世以前の地割の方向と類似し、それらを反映した区画や用排水の溝と考えられる。

この他、遺構面が第2～1層のSE101がある。SE101は直径2.9mの18世紀代の井戸である。

3)まとめ

今回の調査成果は、中世の溝群の検出である。AS06-3次調査の溝群と合わせて、周辺地域の地割や開発のようすを知る資料となる。また、一定量の輸入陶磁器や瓦が出土しており、中世の阿倍寺あるいは庚申街道沿いの集落との関係が推測される。最近の発掘調査により、阿倍野筋と庚申街道に挟まれた地域は、阿倍寺や南北の交通路と関係する古代から中世の集落などが存在した可能性が十分に考えられるようになってきており、今後は、地割や地形とも対比し、これらの実態を解明していくのが課題である。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2001、「阿倍寺跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1998年度-』、pp.51-60

2007、『株式会社近鉄百貨店による建設工事に伴う阿倍野筋北遺跡発掘調査(AS06-3)報告書』

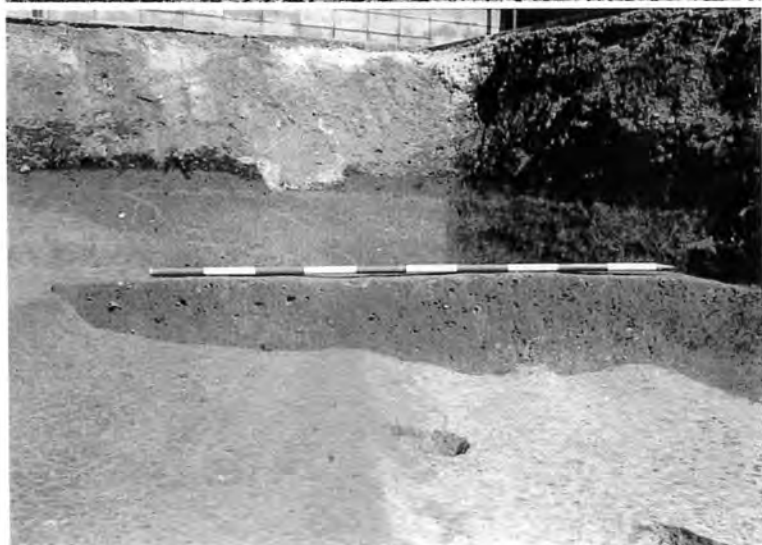
SD201・301・302と
AS06-3次調査地方向を望む
(北東より)



調査区全景
(東より)



SD201・301・302断面
(南西より)



阿倍野筋南遺跡発掘調査(AS08-3)報告書

調査個所	大阪市阿倍野区阿倍野筋5丁目9-23
調査面積	64㎡
調査期間	平成20年10月20日～10月23日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	文化財研究部次長 南 秀雄、京嶋 覚

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は阿倍野筋南遺跡の最南端に位置し、周辺の発掘調査では当遺跡で多く確認されている古墳時代前期の集落遺構は見られないものの、南隣りの敷地におけるAS02-1次調査地では、時期を特定できない古土壌や中世に下る遺物が確認されている(図1)。

事前の試掘調査では現地表下0.2mで土師器細片を含む中世の地層が認められたため、試掘地点周辺の8m×8mの範囲を発掘調査することになった(図2)。調査は10月20日に表土(第1層)を重機により掘削したが、西側1/3には大型の攪乱があり地山層が深く掘込まれていた。そこで、遺存していた東側2/3の地山上面を人力により慎重に精査し、遺構などの掘削・記録作業を行って23日に作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、図2・3の北方位は磁北、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記している。

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

調査地点では現代盛土の直下に、AS02-1次調査で確認されている古土壌および地山層が存在していた。AS02-1次調査で検出されている中世の作土層は削平されたと思われる、確認できなかった。

第1層：現代の盛土および攪乱層の埋土である。層厚は20～140cm以上である。

第2層：褐色(7.5YR4/4)～にぶい褐色(7.5YR5/4)シルト～粘土質シルトからなる暗色の古土壌である。層厚は20～40cmである。AS02-1次調査で土師器細片が出土したとされる第3層に相当するが、当調査地では遺物は含まれていなかった。東北部に倒木痕とみられる部分があり、下位層を掘

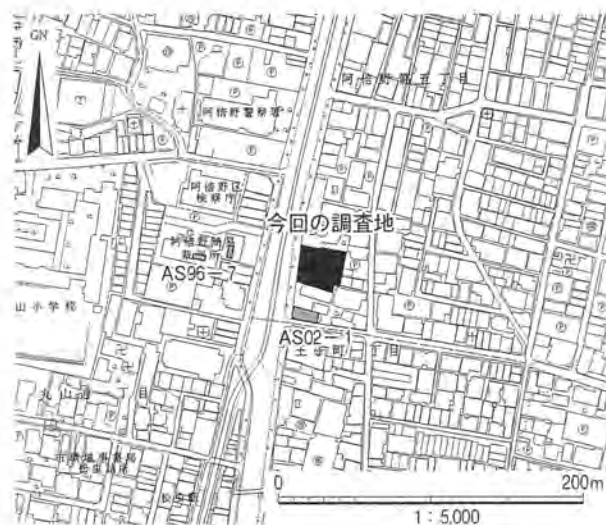


図1 調査地と周辺の調査地



図2 調査地位置図

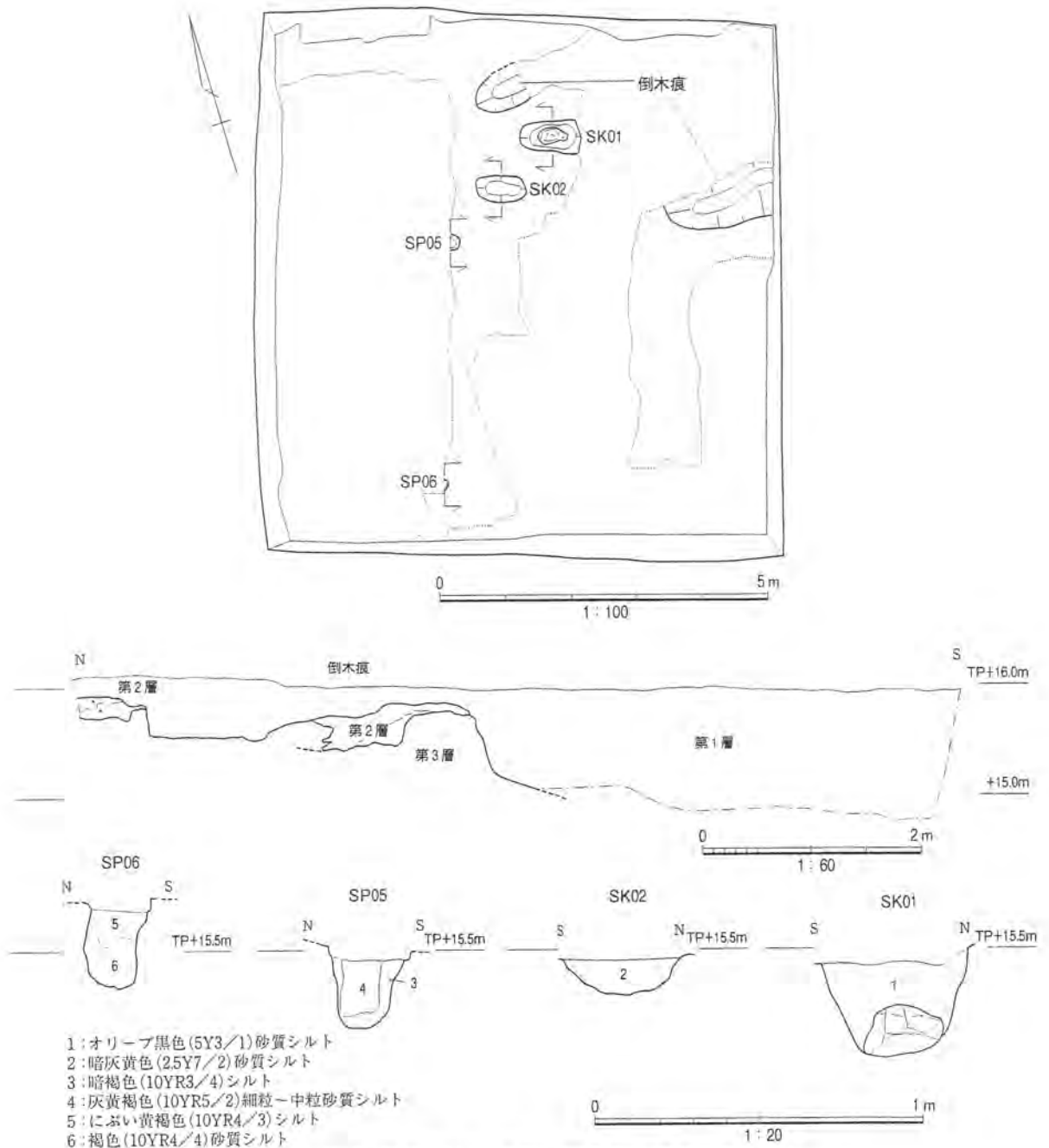


図3 調査地平面図(上)・東壁断面図(中)・遺構断面図(下)

込むように厚くなっている。

第3層：明褐色(7.5YR5/6)シルトからなる地山層で、上面からの乾痕がある。第2層における倒木痕部分では一連の擾乱が見られる。

ii) 遺構と遺物(図3)

第2層が削られ第1層基底面となる第3層上面で、土壙SK01・02、柱穴SP05・06を検出した。

土壙SK01は平面形が0.5m×1.0mの長楕円形で、深さ0.3mである。埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)中粒砂質シルトで地山層の小偽礫を少量含む。中央に長さ0.25m、厚さ0.15mの石が据えてあった。

土壙SK02は0.4m×0.8m、深さ0.1mで、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルトである。

SP05・06はいずれも直径0.20m、深さ0.25mのピットで、西側の大型攪乱で半分以上壊されている。

SP05は直径0.12mの柱痕跡があり、その部分から瓦器・陶器の細片が出土した。SP06は1/3程度しか残っておらず、本来はもっと深かったと思われる。2つのピットは南北に2間(約3.6m)間隔の位置にある。小規模な建物の柱穴であろう。

以上の第3層上面で検出された遺構は、出土遺物からみてすべて徳川期以降のものと思われる。

3)まとめ

今回の調査では、古墳時代前期や古代・中世の遺構・遺物を確認することはできなかった。しかし、時期は不明であるが古い時代の古土壌が遺存しており、周辺に古墳時代の遺構・遺物が存在する可能性は否定できない。また、わずかではあるが徳川期以降の土壙や柱穴が検出されたため、近世における当地周辺の状況を復元する資料を得ることができた。

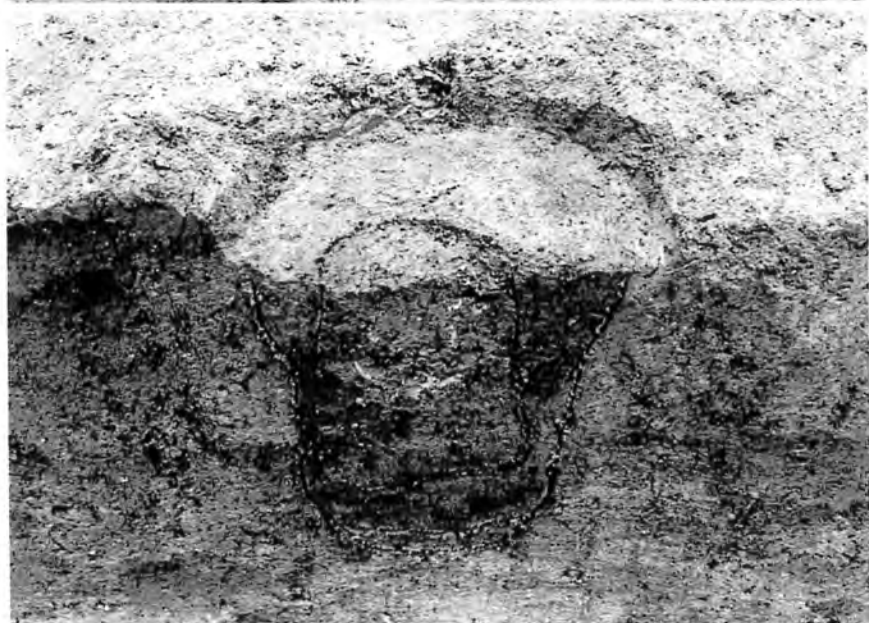
第3層(地山層)上面全景
(西から)



SK01(東から)



SP05(西から)



阿倍野区美章園二丁目における
埋蔵文化財発掘調査(BI08-1)報告書

調査個所 大阪市阿倍野区美章園2丁目51-2・53-1・53-2・54・
55-2・56-7・57・58・59

調査面積 70㎡

調査期間 平成21年1月8日～1月17日

調査主体 財団法人 大阪市文化財協会

調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、京嶋 覚

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は古代の宮殿遺跡である難波宮跡から南に延びる難波大道跡の東100mの地点に位置し、弥生時代の集落遺跡として有名な桑津遺跡は300mほど東に存在する。また、南東300mに白鳳時代の寺院跡である田辺廃寺、南西500mには中世の遺構などが発掘されている桃ヶ池遺跡がある(図7)。

今回の調査地にもっとも近い地点での発掘調査は、南西200mの地点で行われた難波大道跡(ND06-2)の発掘調査[大阪市文化財協会2007]であり(図1)、古代の道路跡は見つかっていないが、中世の遺構・遺物が出土している。事前の試掘調査では現地地表下1.3~1.5mで中世の遺物包含層が確認され、さらにそれ以下に遺構が存在する可能性が高いと判断されたため、発掘調査を実施することとなった。

調査対象は敷地南部の7m×10mの範囲であるが、掘削深度が大きくなることが見込まれたため、現地表面では10m×13mの大きさで掘削を開始し、十分な法面をつくりながら掘下げていった。上部1.5mは重機で、それ以下は人力で掘削した。掘削は1月15日に終了し、翌日記録作業を終えて、17日に埋戻しを行いすべての現場作業を終了した。

以下にその結果を報告する。なお、示北記号は図1が座標北、図2が磁北を示しており、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記している。



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

調査地点で確認された地層を以下に記述する。

第1層：黒褐色(10YR3/1)シルト～砂・礫からなる近現代の整地層および攪乱の埋土である。層厚は120cmである。

第2層：褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土層で、層厚は10～12cmである。近代の作土層である。

第3層：暗灰黄色(2.5Y4/2)～黄灰色(2.5Y4/1)粗粒砂混り粘土質シルト～シルト質粘土層で、層厚は30～40cmである。調査区の全域に分布する作土層で、東壁付近では最下部の10cmほどがより粘土質になる。

第4層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂混り粘土質シルト～シルト質細粒砂からなる作土層である。鉄酸化物の斑文が多く見られる。層厚40cmである。

第5層：上部が黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細粒砂、下部が黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粘土からなる作土層である。出土遺物のほとんどは第4・5層から出土したものである。

第6層：灰白色(10YR7/1)細粒砂、暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂～中粒砂質シルト、黒褐色(10YR3/1)中粒砂質シルト～粘土が互層となる水成層である。層中にはシルト～粘土の偽礫が多く含まれる。層厚は50～60cmである。遺物はほとんど出土していないが、縄文土器または弥生土器の可能性のある細片が1点出土した。

第7層：黒色(10YR1.7/1)細粒砂質粘土層で、層厚は10～20cmである。上面で踏込みと思われる小さな窪みが確認できた。

第8層：黒褐色(10YR2/2)～褐灰色(10YR5/1)シルト質細粒砂、黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂からなる水成層である。台地を構成する地山層とは断定できない地層である。

今回の調査地は、東側に存在する弥生時代中期を中心とする桑津遺跡の集落遺跡がTP+5～7mの台地上に立地しているのに対して、TP+3mでも地山層と思われる地層を確認できなかったことから、従来復元されている谷地形の中に位置していると考えられる。地層の堆積はほぼ水平であり、谷の中央付近にあたると推定される。

ii) 遺構と遺物(図5)

第5層および第7層上面で遺構検出を行った。第5層上面では明瞭な遺構は確認できなかったが、第7層上面では踏込みと思われる窪みが全面に検出された。

一方、出土遺物としては、第4・5層から瓦器椀6、瓦質土器羽釜、東播系須恵器鉢7・8など鎌倉～室町時代の土器が出土したが、これらに混って古墳時代に遡る須恵器甕や円筒埴輪1・2・4、朝顔形埴輪3などの細片が出土した。また、南側溝の掘削中に家形埴輪片5も出土している。



図3 地層と遺構の関係

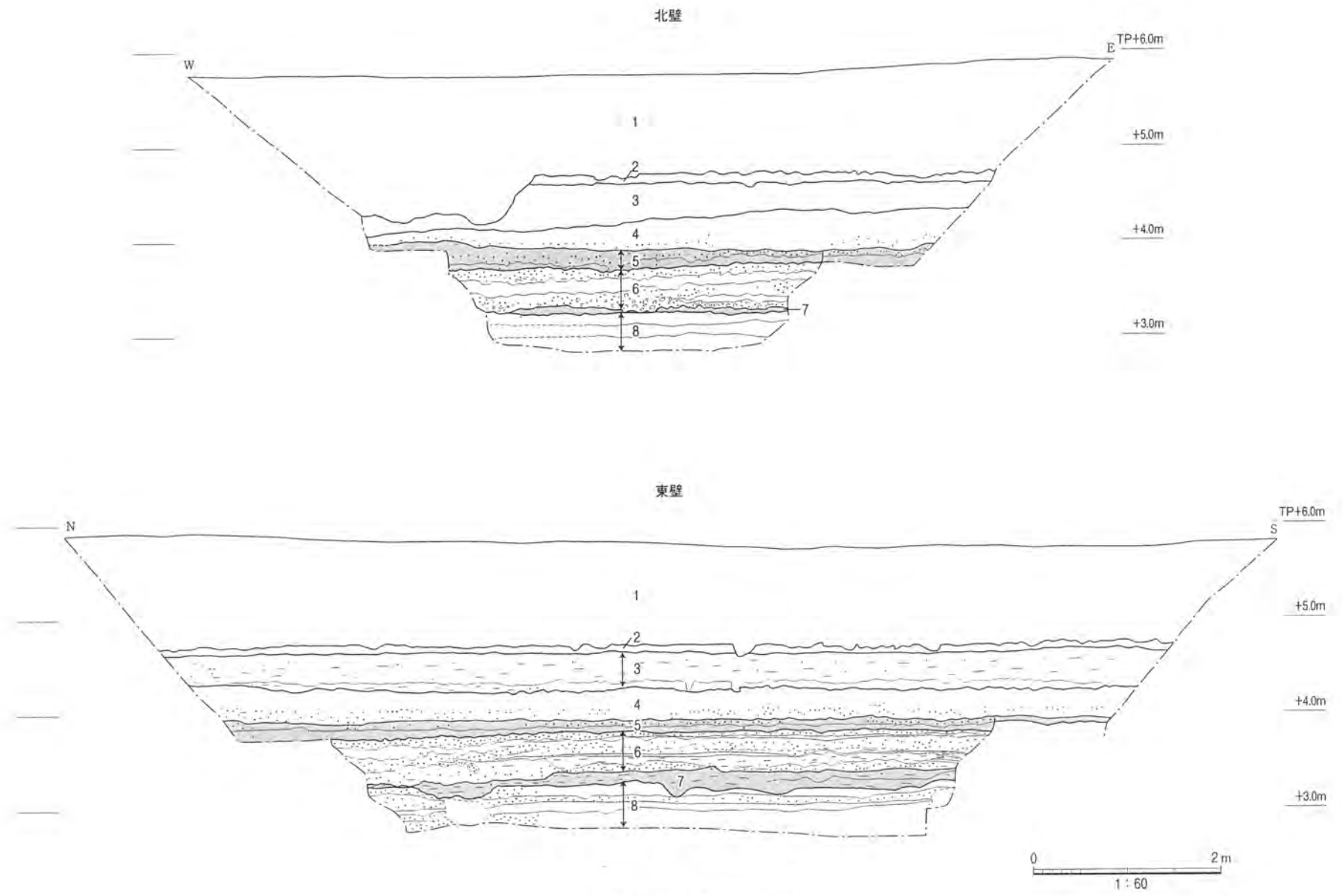


图4 北壁(上)東壁(下)断面图

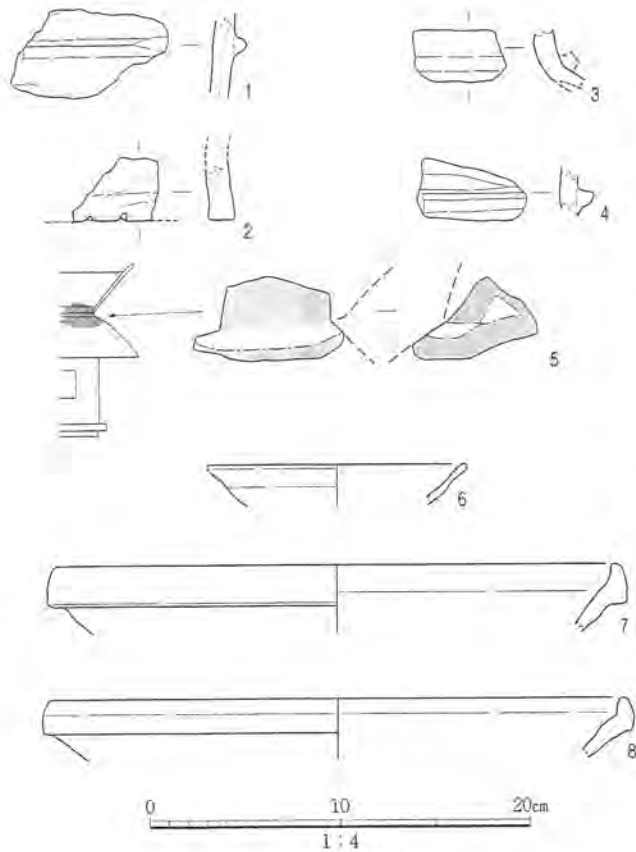


図5 遺物実測図

第4層(1・3・6・7)、第5層(4・8)、南側溝(5)

円筒・朝顔形埴輪はいずれも細片であり内外面の調整痕は観察できないが、1~2mmの粗い砂を含み、外面は灰黄色から橙色、断面が灰~黒色を呈する。軟質で、幅が狭く高いタガをもつことから川西編年[川西宏幸1988]のⅡ期ないしⅢ期に属するものと思われる。家形埴輪5は入母屋屋根の一部と推定され、胎土と焼成は円筒埴輪と同様である。第6層からは縄文土器または弥生土器と思われる細片が出土しており、この地層の年代を示している。

3)まとめ

今回の調査では第7層上面で踏込みが認められた以外に、各時代の遺構は検出されなかったものの、室町時代の遺物とともに少量ではあるが埴輪片が出土した。これらの埴輪は近接して存在していた未発見の古



図6 「摂津住吉郡桑津村古地図」(部分、一部改変)

墳に樹立されていた埴輪と推定でき、その時期は川西編年Ⅱ～Ⅲ期の4世紀末～5世紀初頭ごろと判明した。

調査地の東側にある桑津村にはかつて「大塚」「赤塚」「鐘子(かんす)塚」という古墳と思われる塚があったことが知られている。これらの位置が記載されている1762(宝暦12)年の「撰津住吉郡桑津村古地図」[桑津郷土史研究会1982]に基づき、現存する「桑津墓地」の位置を手掛かりに現在の地図と照合すると、今回の調査地点は「鐘(鐘)子塚」の西に隣接する位置に当る(図6)。「鐘(鐘)子塚」は大正時代に書かれた『東成郡誌』[東成郡役所1922]によれば、3つの塚のうち最大規模で、「略円形をなし」、「広さ五畝二十一歩(直径約27m)」の小高い丘をなしていたとされる。

これらのことから、今回の調査で出土した少量の埴輪片は、「鐘子塚」古墳の墳丘の盛土が鎌倉～室町時代ごろに西側の谷の斜面に崩れた際に、土砂とともに流れ落ちた埴輪の一部ではないかと推測される。

このように、桑津村に存在していた「桑津三塚」とも云われる3つの塚は、いずれも、これまでまったく資料が得られていなかったが、今回の調査成果はこれらのうちの「鐘子塚」についての初めての考古資料となった。古墳である可能性が高まった「鐘子塚」は、図7に示されるように遺跡の範囲外である調査地の道路を挟んだ東側街区内に推定されるため、今後の開発に際しての記録保存が望まれる。

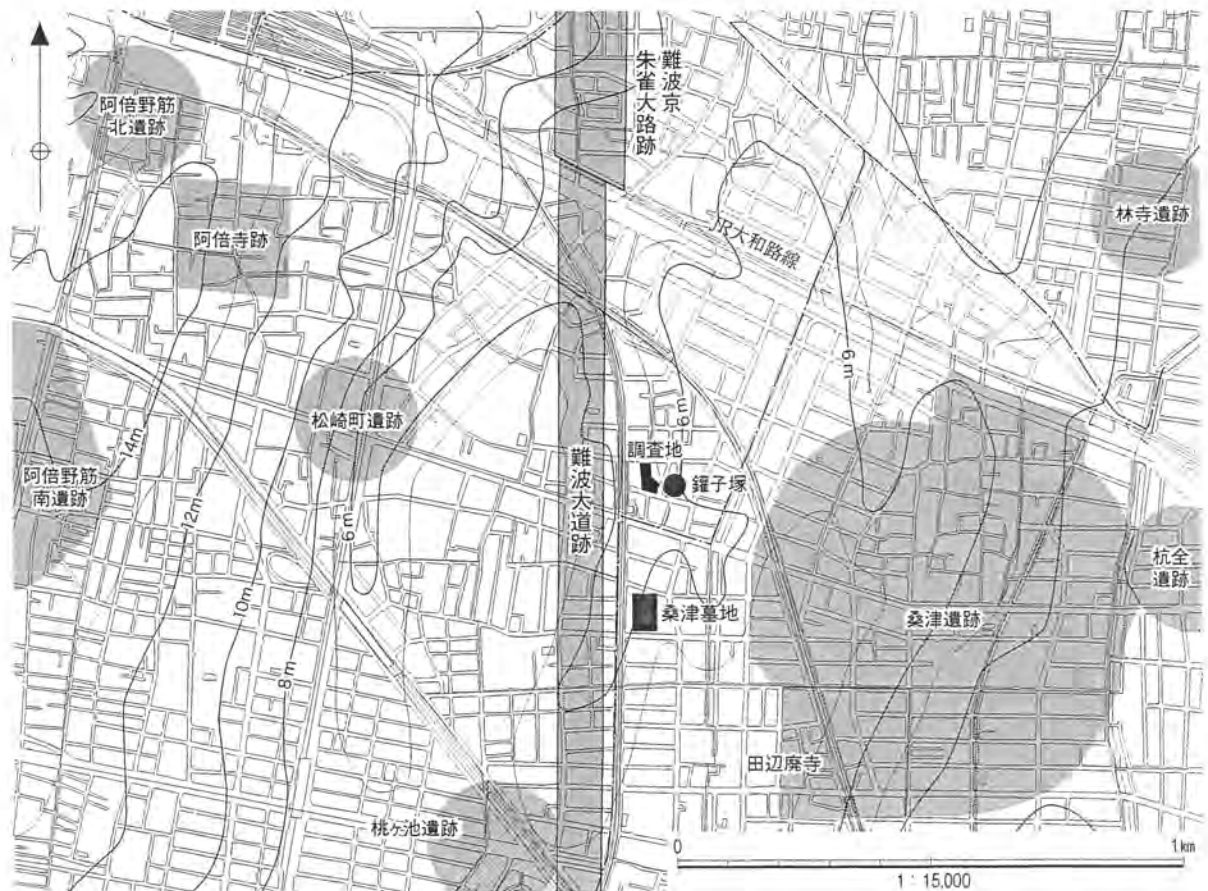
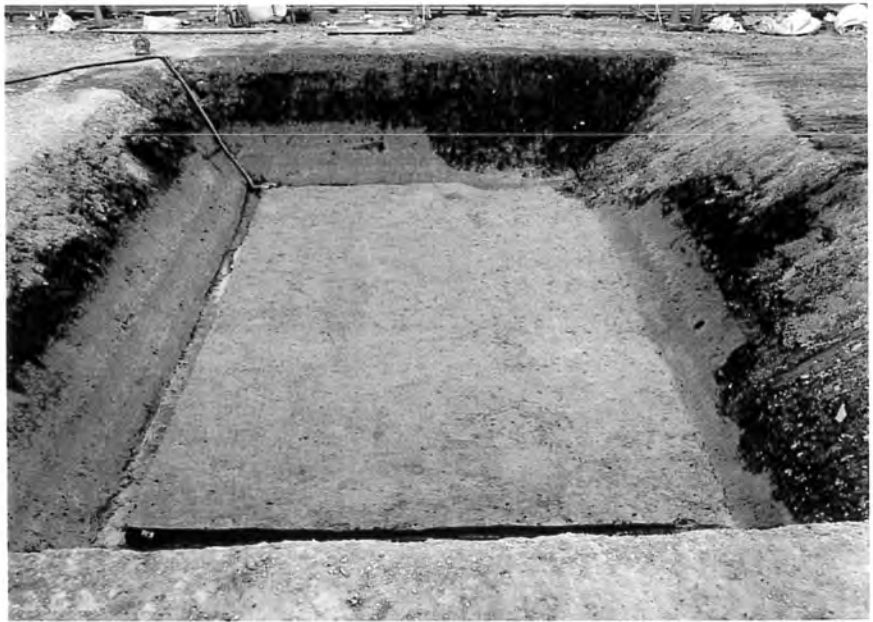


図7 調査地周辺の古地形と「鐘子塚」「桑津墓地」の位置

引用・参考文献

- 大阪市文化財協会2007、『難波大道跡発掘調査報告』
川西宏幸1988、「円筒埴輪総論」、『古墳時代政治史序説』 塙書房
桑津郷土史研究会1982、『桑津郷土史』
東成郡役所1922、『東成郡誌』

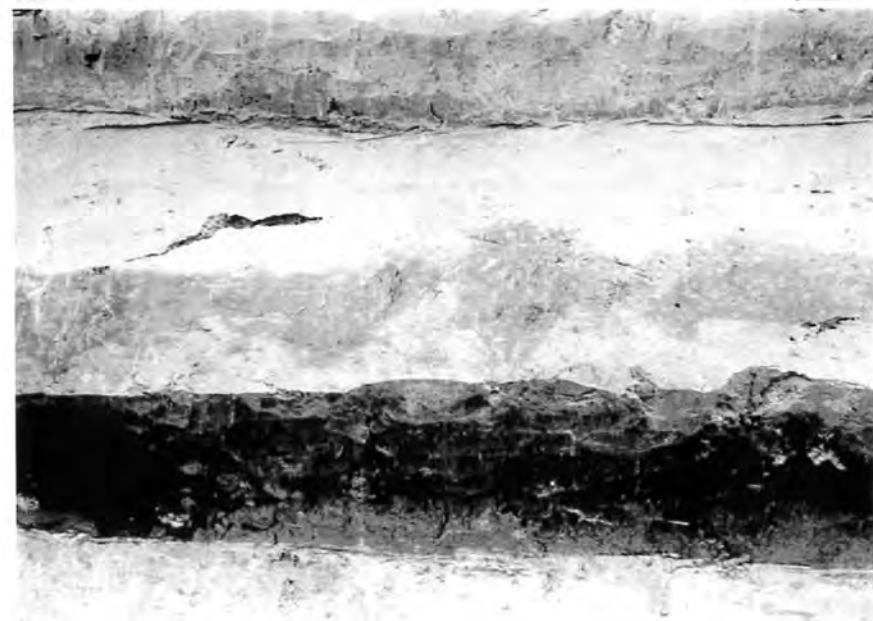
第5層上面全景
(北から)



第7層上面全景
(北から)



東壁断面
(西から)



阿倍野区文の里四丁目における建設工事に伴う
桃ヶ池遺跡発掘調査(MG08-1)報告書

調査個所 大阪市阿倍野区文の里4丁目183
調査面積 18㎡
調査期間 平成21年2月4日～2月5日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、京嶋 覚

1) 調査に至る経緯と経過

桃ヶ池遺跡は上町台地東斜面に位置する遺跡で、これまでに行われたND93-32・MG98-6・99-5次調査では、弥生時代から中世までの遺構・遺物が発見されている。今回の調査地はこれらの調査地の北に当る(図1)。事前の試掘調査では、現地表下0.8~0.9mで地山層が確認され、中世以前の遺構が存在する可能性があったため、発掘調査を実施することとなった。

調査対象は敷地東南部の4.0m×4.5mの範囲である(図2)。2月4日に重機による表土掘削を開始したが、試掘調査の所見と異なり、現地表下0.4~0.5mで地山層と思われる地層が確認された。地山層上面の遺構検出を行い、翌日、遺構の掘削と記録作業を行ったのち埋戻して現場作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、挿図の示北記号は図1が座標北、それ以外は磁北を示しており、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記している。

2) 調査の結果

i) 層序

調査地点で確認された地層を以下に記述する(図3・4)。

第1層：黒褐色(10YR3/1)シルトからなる近現代の整地層である。層厚は20~60cmである。

第2層：灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト層で、層厚は10~20cmである。整地以前の近代の

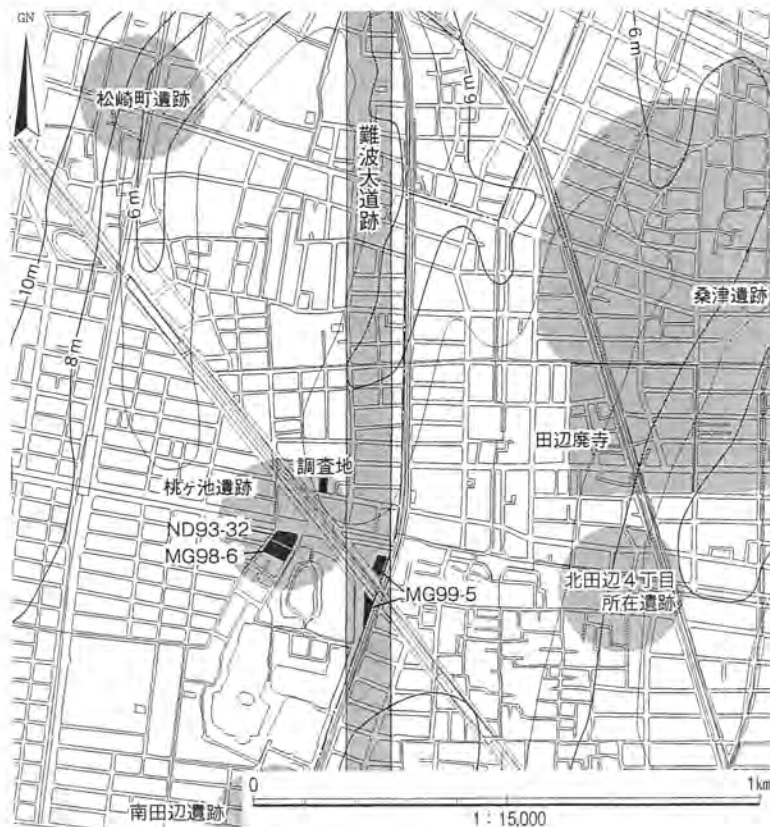


図1 調査地位置図

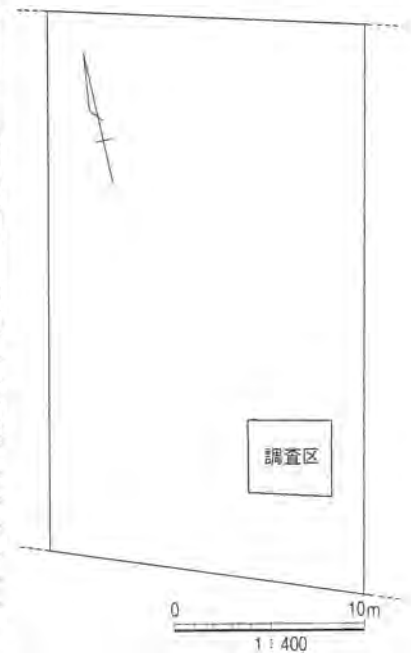


図2 調査区位置図

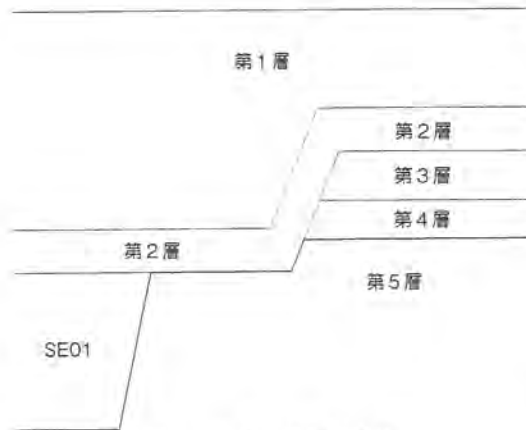


図3 地層と遺構の関係

作土層である。

第3層：黒褐色(2.5Y3/2)シルト層で、層厚は10～15cmである。地山層のシルトの細かい偽礫を含む整地層である。

第4層：にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト層である。地山層上部が植物により擾乱された部分である。

第5層：灰黄色(2.5Y6/2)粘土質シルト～シルトからなる地山層である。

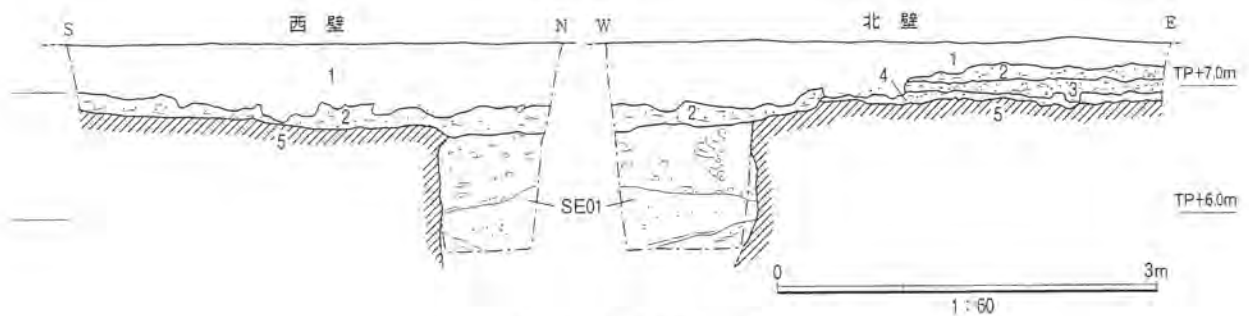


図4 西壁・北壁断面図
(図中の数字は地層番号に対応)

ii) 遺構と遺物

調査区東壁際の第5層上面で、黒色シルトと灰白色シルトからなる倒木痕が確認された(写真下)。遺物は出土しなかった。

第2層上面で、調査区西端が約0.3mの段差をもって低くなることが確認された。段は直線的で南西～北東方向である。低くなった部分は第5層の直上に第2層の作土があり、第2層の耕作に当り地下げされたと思われる。東側で確認されている第3層の整地層は、この地下げによって掘削された土(第4・5層)の可能性がある(図5)。

SE01

調査区西北角の第5層(地山層)上面で一部分を検出した。地下げした部分に当たるため、第2層の直下で確認された。東西1.0m以上、南北0.9m以上の規模で、平面形が円形だと考えれば、全体の1/4に相当し、直径約2mに復元できる。深さは1.1m以上で、それ以下は湧水のため掘削できなかった。埋土は黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト～シルト質粘土で、地山のシルトや古土壌の黒色シルトの偽礫を含む。井戸側やその痕跡は認められなかった。出土遺物は円窓のある立方体と推定される瓦質の行火または炬燵の一部と平瓦があるのみで、近世末期から近代のものと思われる。

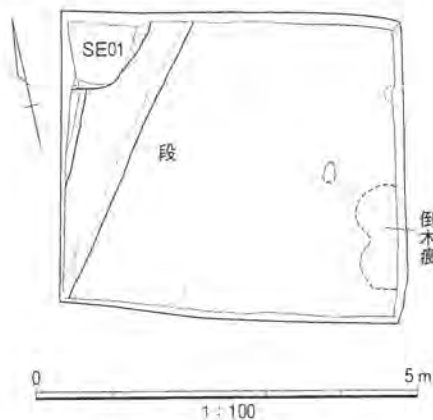


図5 第5層上面平面図

3) まとめ

今回の調査地は桃ヶ池から北東に延びる谷地形付近に位置しており(図1)、谷の中に立地しているMG99-5次調査地より地山層の標高が0.5m前後高く、MG98-6次調査地とほぼ同じであることから、東に低くなる地形環境にあると推定される。検出された地下げによる段の方向は、この谷地形の方向に近いものであるが、地下げは西側で行われており、周辺地形の傾きとは整合していない。

この段が土地境界を示しているとすれば、井戸SE01は西側の耕地のための灌漑用の野井戸と推定される。ND93-32次調査では12~13世紀の青白磁や軒丸瓦などが出土し、寺院や役所の存在が推測され、MG98-6次調査では同時期の耕作痕も確認されていたが、今回の調査では当該期の遺構・遺物は検出されず、この土地区画が中世から継承されてきたか否かは、今後の調査による資料の蓄積を待って判断すべきであろう。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1994、「伊藤忠商事(株)による建設工事に伴う桃ヶ池遺跡発掘調査(ND93-32)略報」

2001、「桃ヶ池遺跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1998年度-』、pp.39-42

2002、「桃ヶ池遺跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1999・2000年度-』、pp.27-30

第5層上面全景
(西から)



倒木痕(西から)



SE01(東から)



阿倍野区昭和町二丁目における建設工事に伴う
昭和町遺跡埋蔵文化財発掘調査(SW08-1)報告書

調査個所 大阪市阿倍野区昭和町2丁目12
調査面積 40㎡
調査期間 平成20年7月1日～7月4日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、松本啓子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地はJR天王寺駅から約1.8km南下した地点で、天王寺吾彦線(あびこ筋)と木津川平野線(松虫通)の交差点から3筋南のあびこ筋東側に位置する(図1・2)。現地表の標高は約8.4mで、南北に延びる上町台地の尾根上に当たる。

現在までに、本調査地を基点とする半径200mの範囲内での発掘調査はないが、同様の立地条件にある近隣の遺跡には、東方約400mの桃ヶ池遺跡や、東方約500mの難波宮からまっすぐ南へ延びる古代の幹線道路である難波大道跡、南西約700mの南田辺遺跡、またこの南田辺遺跡からさらに約300m南の山坂遺跡などがあり、すでにいくつかの発掘調査が行われている。その結果、11・12世紀を中心に遺構や遺物が見つかる[大阪市文化財協会2001、2002、2006、2007、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991、1995、1996、2003]。

このように周辺の調査成果から、本調査地付近は古代～中世の遺構・遺物が発見される可能

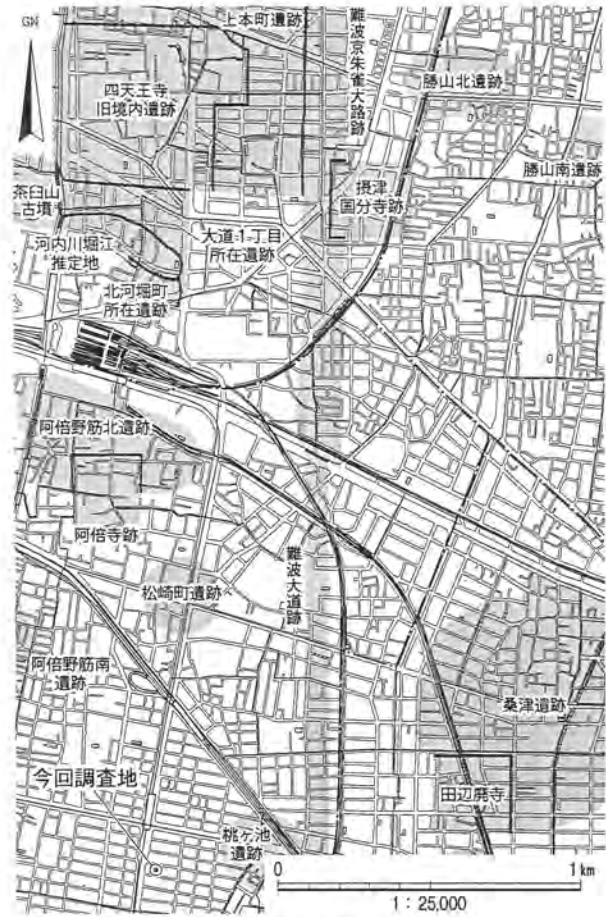


図1 調査地と周辺の遺跡

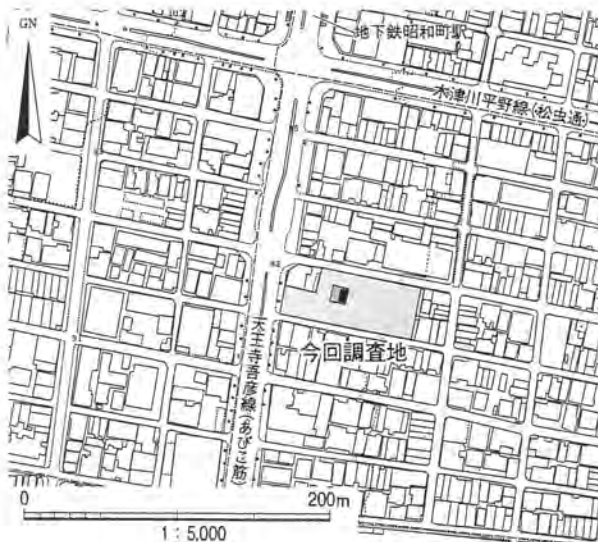


図2 調査地位置図

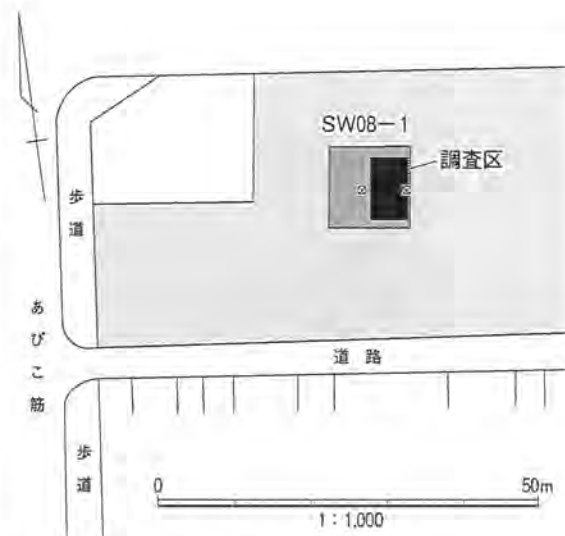


図3 調査区配置図

性の高い地点であるといえる。

平成20年6月9日に大阪市教育委員会が行った試掘調査で、地表下約0.4m以下に土師器を含む作土層と、地表下約0.6m以下に中世以前の遺物包含層の可能性のある暗色化した地層が確認されたため、本調査を実施することとなった。調査は東西5m、南北8mの調査区を設定し(図3)、重機によって地表から0.4mまでの土を除去した後、ここより下の地層を7月1日から人力によって掘削し、精査した。適宜、図面・写真等の記録をとりつつ、慎重に掘り下げ、7月4日に器材類の撤収を含め、調査にかかわるすべての作業を完了した。

なお、本報告で使用した示北記号は図3・6・7が磁北、図1・2は国土座標第VI系に基づく座標北である。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本報告ではTP+○mと記す。

2) 調査の結果

i) 層序(図4・5)

本調査地の基本的な層序は以下のとおりである。

第1層：重機で除去した近世後半～現代の地層である。断面の観察により3層に細分した。

第1a層は重機で大半を除去したため、現代盛土の最下部のみを記録した。層厚は30cm以上あって、黒褐色の砂質礫層である。第1b層は灰黄褐色の細粒砂混り礫質シルト層で、最大層厚は10cmある。何度も攪拌されたこなれた地層で、18世紀後半以降、近代までの間の作土層である。第1c層はにぶい黄褐色の炭を含む細粒砂混り礫質シルト層でマンガン斑紋が顕著である。最大層厚は20cmある。第1b層同様のこなれた地層で、18世紀後半の作土層である。

第2層：近世の作土層で、2層に分けられる。

第2a層は明黄褐色の細粒砂混り粘土質シルトの攪拌された地層で、酸化鉄の斑紋が観察された。最

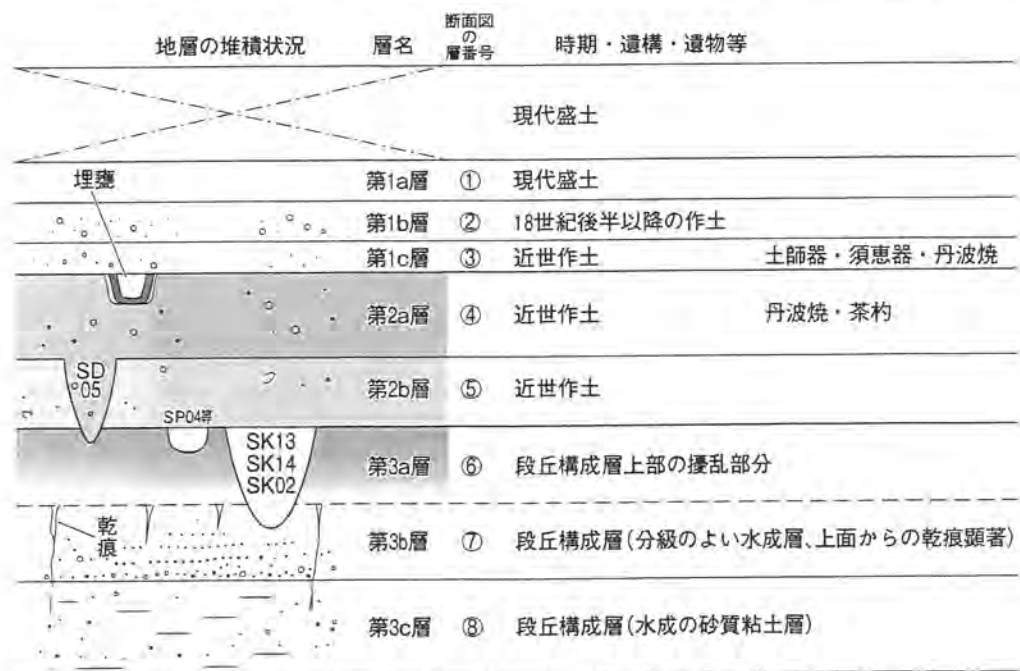
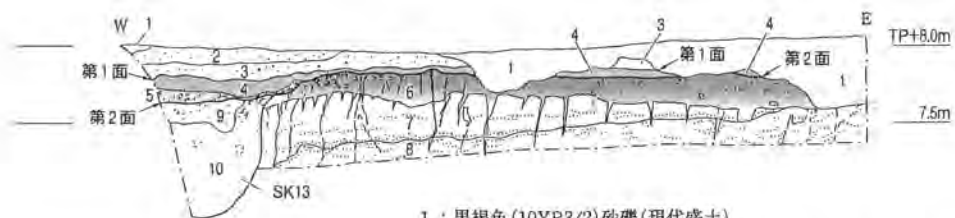


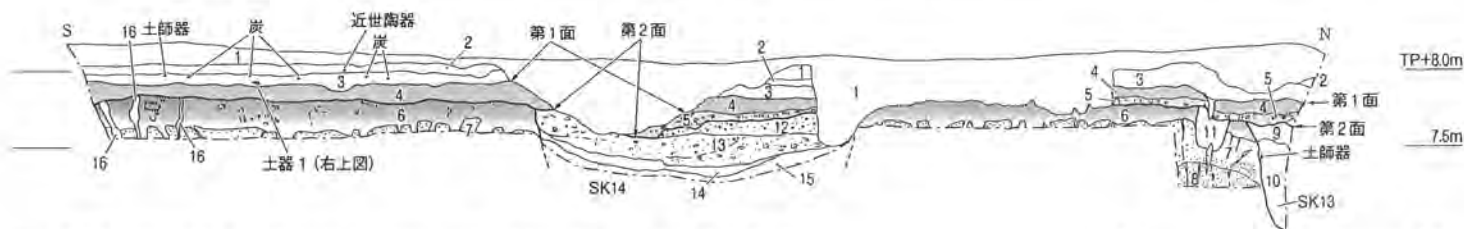
図4 地層と遺構の関係



- 1 : 黒褐色 (10YR3/2) 砂礫 (現代盛土)
- 2 : 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混り礫質シルト
- 3 : にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細粒砂混り礫質シルト (炭、マンガンを含む)
- 4 : 明黄褐色 (10YR6/6) 細粒砂混り粘土質シルト (酸化鉄を少し含む)
- 5 : にぶい黄橙色 (10YR6/4) 砂混り粘土質シルト (酸化鉄を含む)
- 6 : にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘土混り極細粒砂質シルト (酸化鉄を含む、地山上部のこなれた暗色土。乾痕顕著)
- 7 : にぶい黄橙色 (10YR6/3) 粘土質砂
- 8 : 浅黄色 (10YR7/4) 砂質粘土
- 9 : にぶい黄橙色 (10YR6/4) 砂混り粘土質シルト (鉄分を少し含む)
- 10 : にぶい黄橙色 (10YR6/3) シルト混り砂質粘土 (ゆるい、酸化鉄を含む)



出土遺物実測図 (西壁第1c層)



- 1 : 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂礫 (現代盛土) およびオリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂・シルト・粘土 (現代攪乱)
- 2 : 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) シルト混り粘土質砂礫 (炭を含む)
- 3 : にぶい黄褐色 (10YR4/3) ~ オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細粒砂混り礫質シルト (炭、マンガンを含む)
- 4 : 褐色 (10YR4/4) 細粒砂混り粘土質シルト (酸化鉄を少し含む)
- 5 : 明黄褐色 (10YR6/6) 砂混り粘土質シルト (酸化鉄を含む)
- 6 : にぶい黄橙色 (10YR6/3) 粘土混り極細粒砂質シルト ~ 極細粒砂混り粘土質シルト (酸化鉄を含む、地山上部のこなれた暗色土。乾痕顕著)
- 7 : にぶい黄橙色 (10YR7/4) ~ 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘土質砂
- 8 : 浅黄色 (2.5Y7/4) 砂質粘土
- 9 : 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土混り極細粒砂質シルト
- 10 : にぶい黄橙色 (10YR6/3) シルト混り砂質粘土 (ゆるい、酸化鉄を含む)
- 11 : オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂・礫混りシルト質粘土
- 12 : オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粘土混りシルト質砂礫
- 13 : 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂礫混り粘土質シルト (酸化鉄を含む。ゆるい)
- 14 : 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト質粘土 (鉄分を少し含む)
- 15 : にぶい黄色 (2.5Y6/3) 細粒砂質シルト (炭を含む)
- 16 : 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト質粘土

図5 北壁・西壁断面図および第1c層出土遺物実測図

大層厚は20cmで、調査区全域に分布する。本層上面で埋塞が設置されていた。また、本層で埋るSD09は、本層耕作時の鋤溝の痕跡である。

第2b層は明黄褐色の砂混り粘土質シルトで、酸化鉄の斑紋が顕著に見られた。最大層厚は10cmで、調査区の北西部にのみ分布する。

第3層：上町台地の段丘構成層で、出土遺物はない。岩相の違いにより、3つに分けられる。

本層の最上部の第3a層は、下位の第3b層の上面が植物の根などの影響で、長期間にわたって擾乱され暗色化したものである。試掘調査の際、遺物包含層の可能性があると記載された地層であるが、出土遺物はなく、いわゆる地山層である。層厚20cmほどのにぶい黄橙色の粘土混り極細粒砂質シルト層で、第3b層との境界ははっきりとはしていない。この第3a層の上面で、近世の土壌や小穴など、第2層基底面の遺構が見つかった。第3b層は最大層厚約40cmの、にぶい黄橙色の粘土質砂層で、下部に行くにつれて粗粒となる。ラミナがよく観察される比較的分級のよい水成層で、固く締まっている。本層の上面、つまり第3a層との境界あたりから乾痕が顕著に見られた。第3c層は浅黄色の砂質粘土層で、第3b層とは異なる方向のラミナが観察された。非常によく締まった地層である。層厚は30cm以上ある。試掘調査の記録によると、地表面から約200cmの深さまでは本層のような砂質粘土層が堆積し、その下は青灰色の粘土層となる。

ii) 遺構と遺物

a. 地山上面検出の遺構と遺物(図6)

地山上面では第2層基底面の土壌(SK02・05・08・13・14)や小穴(SP03・04・09・11)と、第2a層下面の鋤溝SD09が見つかった。

SK02は東西約0.6m、東西約0.3mの長楕円形をした土壌で、深さは約0.3mある。均質なオリーブ褐色砂混り粘土質シルトで埋っている。近世の土師質土器の破片1点が出土した。

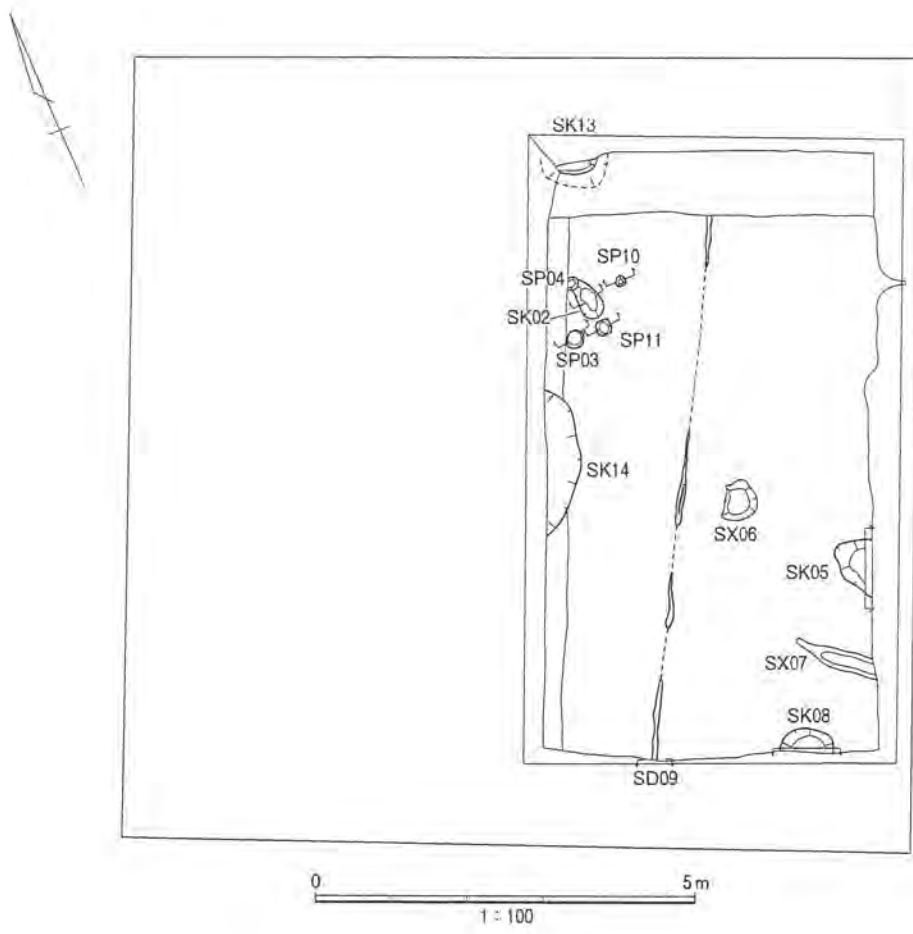
SK05は南北約0.8m、東西0.5m以上、深さ約0.2mの土壌で、東側の調査区外へと延びる。にぶい黄色粘土混り砂質シルトで埋る。出土遺物はない。

SK08は東西約0.7m、南北0.3m以上、底は凸凹しているが、最深部で0.08mの深さがある。南側は調査区外へと延びる。埋土は暗灰黄色シルト質粘土で、第3a層とよく似た質の土である。出土遺物はない。

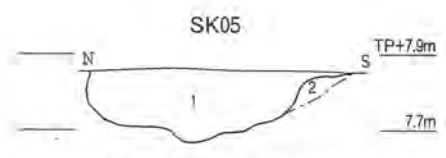
SK13は調査区北西隅で見つかった土壌で、大半は調査区外にある(図版2枚目上段)。東西0.7m以上、南北0.3m以上、深さは約0.8mある。二回に分けて埋められており、埋土はしまりがいい。埋土下部はにぶい黄橙色シルト混り砂質粘土、上部はにぶい黄橙色砂混り粘土質シルトで、どちらも酸化鉄の斑紋が顕著である。埋土下部から土師器のごく小さな破片が出土した。埋土のしまりが悪いことからみて、土師器が伴う古代の遺構とは考えにくく、他の遺構同様に近世の土壌と推定される。

SK14は西壁にかかる大きな土壌で、大半は調査区外で完掘していない。南北長は西壁で約2.0mあり、東西は0.4m以上、深さは0.4m以上ある。シルト、粘土、砂、礫などの土で埋められている。平面は円形であるとみられ、井戸の可能性はある。出土遺物はない。

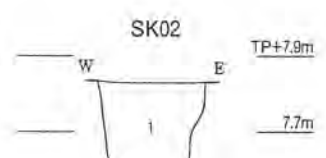
SP03・04・10・11は平面の径が0.12~0.25mの円形または隅丸方形の小穴で、調査区の北西部で



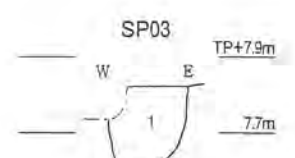
各遺構平面図



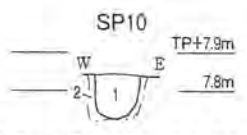
1 : におい黄色 (2.5Y6/3) 粘土混り砂質シルト
 2 : 灰黄色 (2.5Y6/2) 極細粒砂混り粘土質シルト



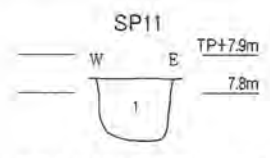
1 : オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂混り粘土質シルト



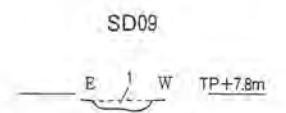
1 : オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂混り粘土質シルト



1 : オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂混り粘土質シルト
 2 : におい黄褐色 (10YR5/3) 極細粒砂混り粘土質シルト



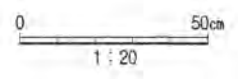
1 : 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂混り粘土質シルト



1 : 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト質粘土

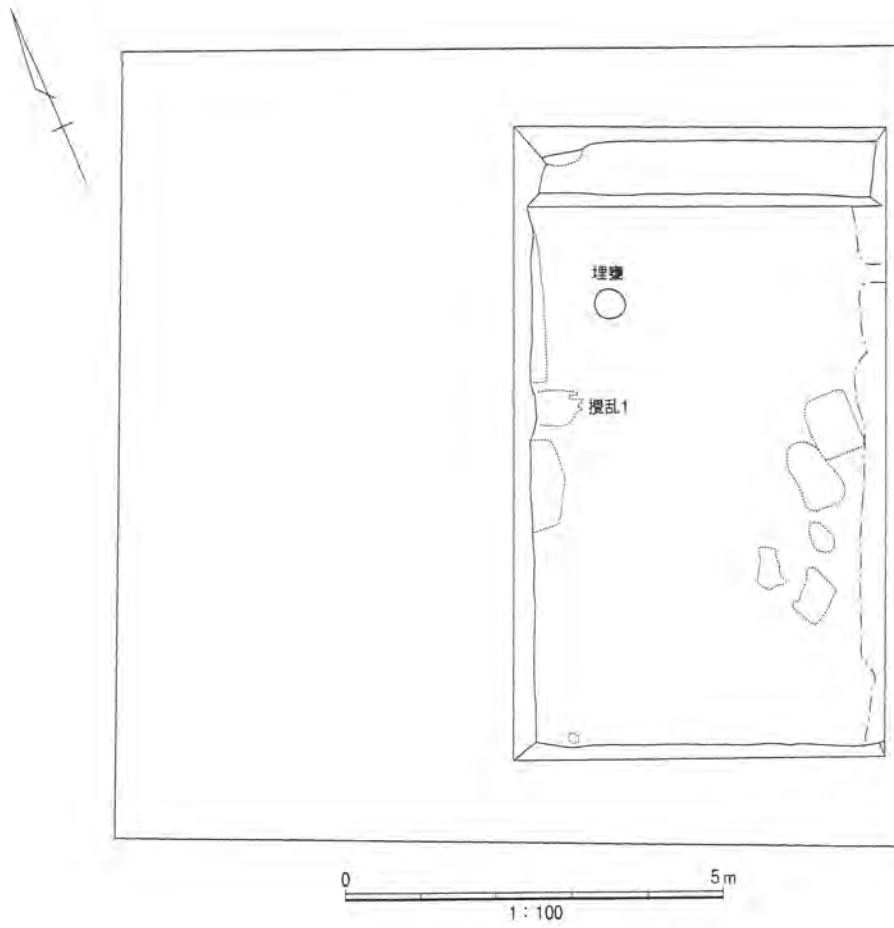


1 : 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト質粘土
 2 : 黄褐色 (2.5Y5/3) 極細粒砂混りシルト質粘土

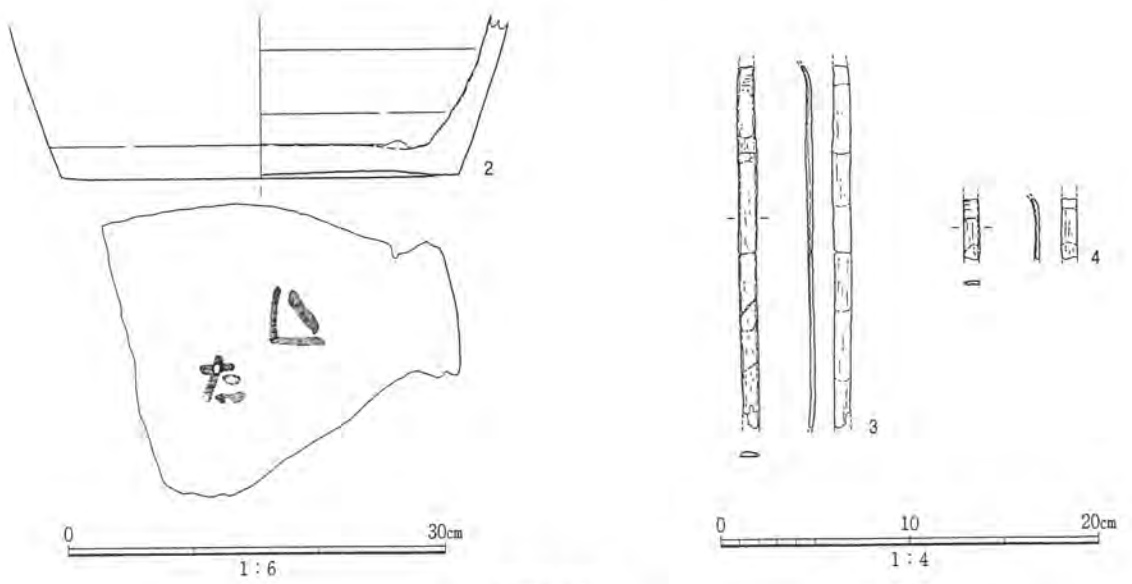


各遺構断面図

図6 第3a層上面の遺構平面・断面図



各遺構平面図



遺物実測図

2: 埋壙(丹波焼)
3・4: 埋壙内出土の竹製茶杓

図7 第2a層上面の遺構および出土遺物実測図

見つかった。深さは比較的径の小さいSP04・10が0.12m、径の大きいSP03・11がそれぞれ0.22mと0.16mである。いずれの小穴も、埋土は暗色化した均質な砂混り粘土質シルトで、出土遺物はない。図版2枚目下段は、SP11の検出状況の写真である。

SD09(写真図版2の中段)は、第3a層上面に途切れ途切れに残った南北方向の溝である。詳細に見ると、第3a層上面にはこの溝によく似た細かい凸凹が無数に観察された。これらは第2a層の鋤溝の痕跡と考えられるもので、全体が第2a層で埋まっている。状況のよくわかるSD09でみると、幅は広くても0.08m、深さも0.05m未満である。SD09の断面図(図6)で底がW字のような凸凹した形状となり、幅が広がっているのは鋤溝がいくつも重なっているためである。遺物はSD09からごく小さな土師器の破片1点が出土したが、第2a層と同じ近世の鋤溝である。

また図6でSX06・07としたものは、不整形で人工に掘られたのものとは考えにくく、樹根の痕跡の可能性はある。

b. 第2a層上面の遺構と遺物(図7)

調査区北西部で近世の埋甕が出土した。甕は丹波焼の大甕2で、胴部～口縁部を欠くため、18世紀後半より古いものであるとしかわからない。底部外面には墨書がある。「た」と「山笠に横一」であろうか、屋号の記号のようなものが書かれている。また、甕内部から竹製の茶杓3・4が出土した。

c. 各層の出土遺物(図4)

各層ともほとんど遺物がないが、わずかに第1層から18世紀後半の近世陶器や、古代の土師器・須恵器の破片が数片出土した。いずれも小破片であるため、図化しえないものがほとんどであるが、須恵器1は、第1c層出土の古墳時代の蓋とみられる破片である。このほか、攪乱1からも須恵器の破片が、また西壁側溝の掘削時に土師器の破片が出土するなど、古代の遺物が出土した。

3)まとめ

今回の調査では、18世紀後半以前の近世の作土を検出し、試掘時に遺物包含層の可能性が考えられた暗色化した地層が擾乱された地山の上部であることがわかった。今回の調査では中世やそれ以前に遡る遺構や遺物包含層は見つからなかったが、古代の土師器や須恵器などが後世の地層や遺構内に包含されていた。この場所か周辺には古代の遺構や遺物包含層があったものと推定される。古代の幹線道路である難波大道跡が本調査地の東約500mのところに通ることも考え合わせると、いずれこの周辺でも古代の遺構を確認することができるものと思われる。今後の調査成果も合わせて更なる検討を加えたい。

引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991、『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』pp.177-182
1995、『平成5年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』pp.143-149
1996、『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』pp.107-116
2003、『平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』pp.103-106

- 大阪市文化財協会2001、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1998年度-』 pp.39-42
- 2002、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1999年度-』 pp.21-30
- 2006、『株式会社奥村組による建設工事に伴う難波大道跡発掘調査(ND06-1次)報告書』
- 2007、『大阪市阿倍野区難波大道跡発掘調査報告』

調査地全景
(第3b層上面、
北から)



第3a層上面全景
(北から)



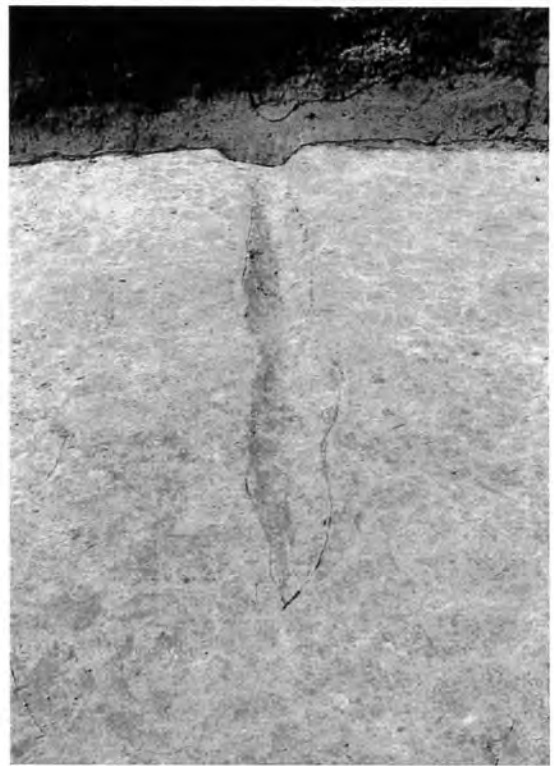
西壁地層断面
(東から)



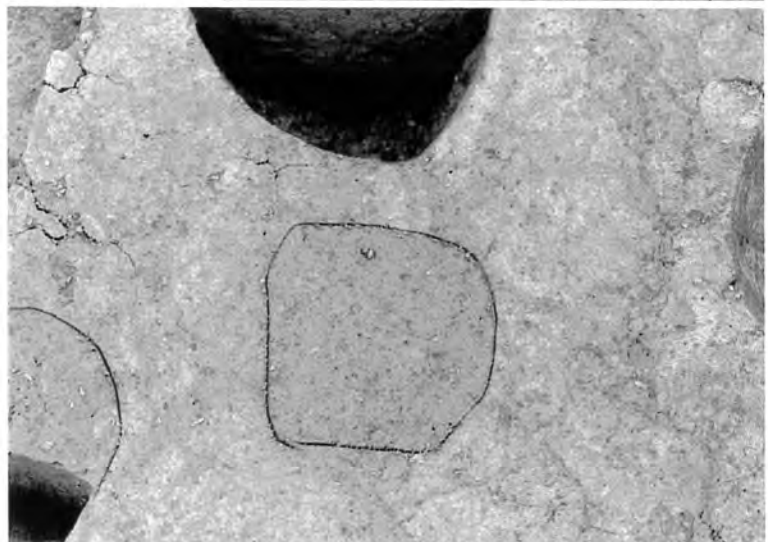
北壁・西壁にかかる
土壌SK13(南から)



溝SD09(北から)



小穴SP11(南から)



VIII 住 之 江 区

住之江区西住之江三丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(WE08-1)報告書

調査個所 大阪市住之江区西住之江3丁目11他6筆
調査面積 49㎡
調査期間 平成21年2月2日～2月6日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、池田研

1) 調査に至る経緯と経過

本調査地は上町台地の西方、大阪湾岸沿いの砂堆上に位置し、住吉浜の松原の景勝地として万葉集に歌われた「叢松原」の顕彰碑が北東約550mの叢松原公園内にある。砂洲が広がっていた調査地一帯は「築島」、後に略して「島」と称され、古くより住吉社領であったと伝えられている。近世には調査地周辺は「墨江村大字島」と呼ばれ、その250mほど東を紀州街道が南北に延びていたが、1723(享保8)年に開発の始まった「北島新田」をはじめ、本格的な開発が当地域に及ぶのは18世紀代に入ってからと考えられてきた[直木孝次郎他監修1986]。

一方、周辺の遺跡を見ると、弥生時代から中世にかけての集落遺跡である遠里小野遺跡が東約500mにあり、北東約1kmには住吉行宮跡など古代～中世を中心とする遺跡が数箇所点に点在している(図1)。

今回の調査地では建設工事に先立ち、大阪市教育委員会が試掘調査を実施したところ、現地表面下150cm前後で、溝とみられる遺構や中世の遺物包含層が確認されたことから、本調査を行うこととなった。

調査区を図2のとおり設定し、2月2日には近世の作土層とみられる第3層までの地層を重機で掘削した後、人力掘削を開始した。地山である第5層の上面まで、各面の平面調査を行い、第3層上面では近世の耕作に係わる遺構を、第4b層上面では中世の溝を検出した。第5層以下については調査区西端を一部深掘りして断面調査を行い、2月6日にはすべての作業を終了した。

なお、本調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中ではTP±〇mと記しており、示北記号は図1が真北、図2・5は磁北である。



図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

ここでは北壁地層断面を中心に観察した調査地の層序について報告する。

第0層：暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒～極粗粒砂質シルトを主体とする現代盛土層である。

第1層：黒褐色(2.5Y3/2)極細粒～極粗粒砂質シルトからなる現代作土層で、炭化物を含む。

第2層：浅黄色(2.5Y7/3)極細粒～極粗粒砂を主体とする近代の盛土層で、シルト偽礫を含む。

第3層：暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒～極粗粒砂質シルトからなる近世の作土層で、炭化物を含む。第4層との層理面は不明瞭である。本層上面では畦畔SR01～04を検出した。

第4層：中・近世の作土層で、第4a層と第4b層に細分されるが、両層の層理面は不明瞭である。第4a層は黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極細粒～中粒砂からなる。第4b層は黄褐色(2.5Y5/4)シルト質極細粒～中粒砂からなり、下部には細礫を含む。第4b層上面では溝SD05を、下面ではSD06を検出した。

第5層：黄褐色(10YR5/6)シルト～細礫からなる水成層で、上方細粒化している。

ii) 遺構と遺物

a. 第4b層下面(図3～5)

調査区中央部では第4b層を埋土とする南北方向の溝SD06を検出した。幅0.9m、深さ0.1m程度で、耕作に係わる溝と考えられる。埋土からは土師器皿が出土した。

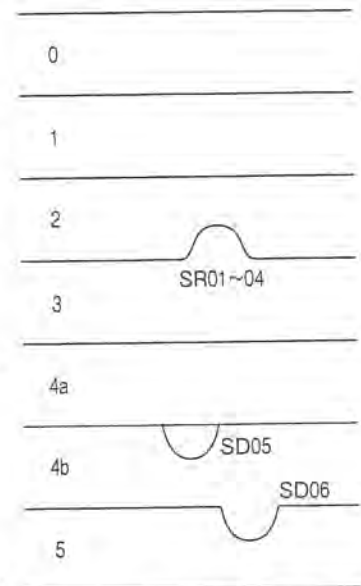
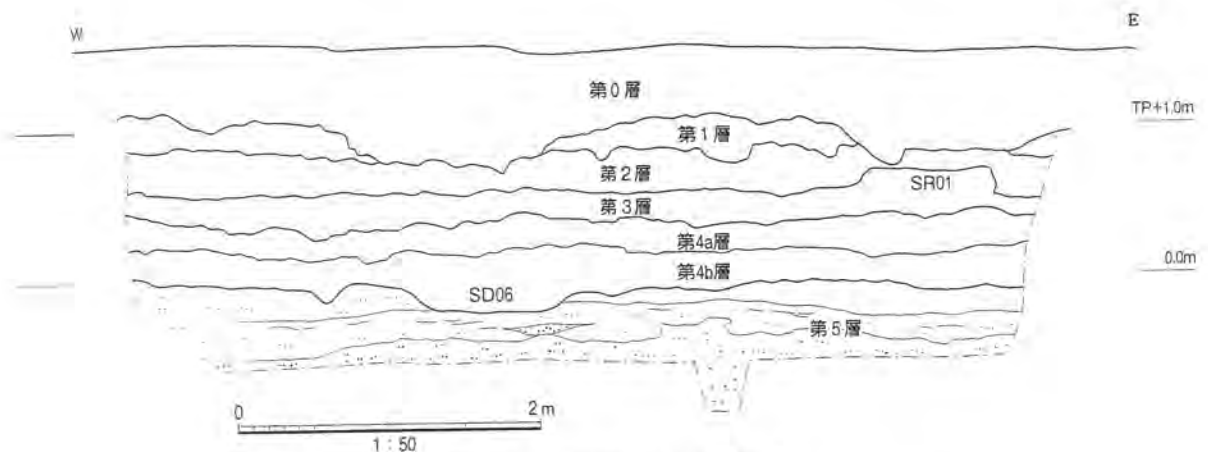


図3 地層と遺構の関係図



- 第0層：暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒～極粗粒砂質シルト(現代盛土層)
- 第1層：黒褐色(2.5Y3/2)極細粒～極粗粒砂質シルト(炭化物を含む。現代作土層。)
- 第2層：浅黄色(2.5Y7/3)極細粒～極粗粒砂(シルト偽礫を含む。近代盛土層。)
- 第3層：暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒～極粗粒砂質シルト(炭化物を含む近世作土層。)
- 第4a層：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極細粒～中粒砂(近世作土層)
- 第4b層：黄褐色(2.5Y5/4)シルト質極細粒～中粒砂(下部には細礫を含む。中・近世作土層。)
- 第5層：黄褐色(10YR5/6)シルト～細礫(水成層。上方細粒化している。)

図4 北壁地層断面図

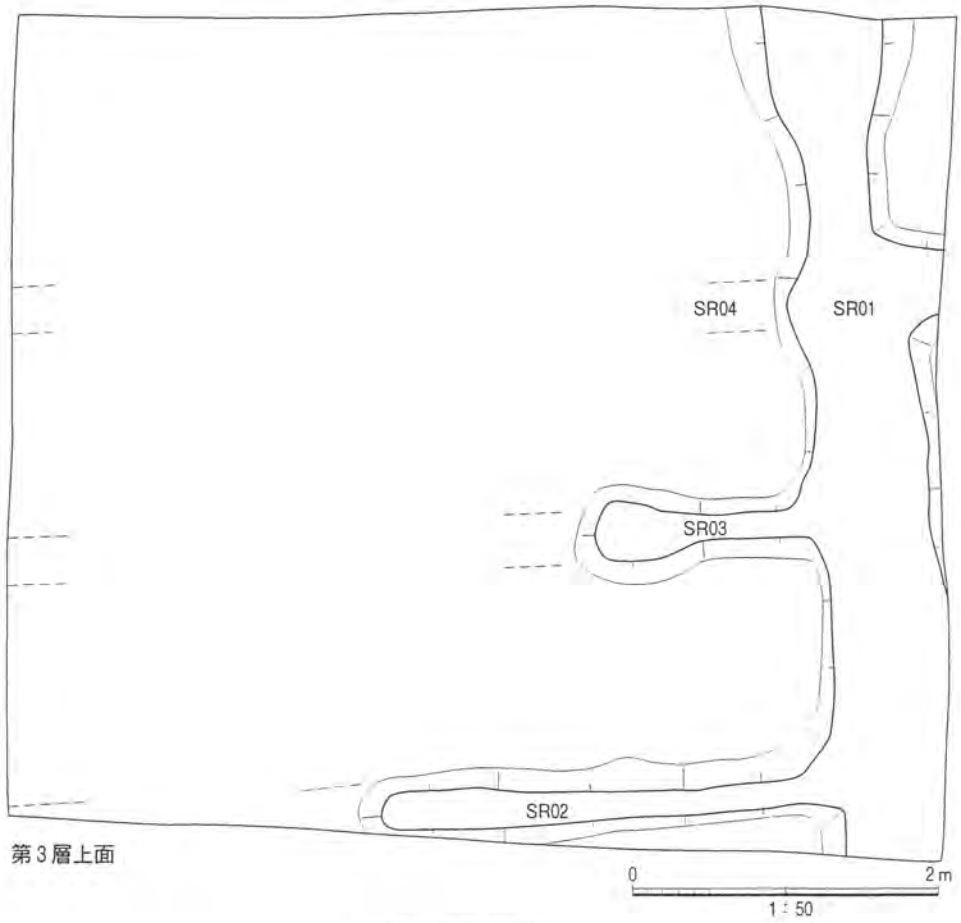
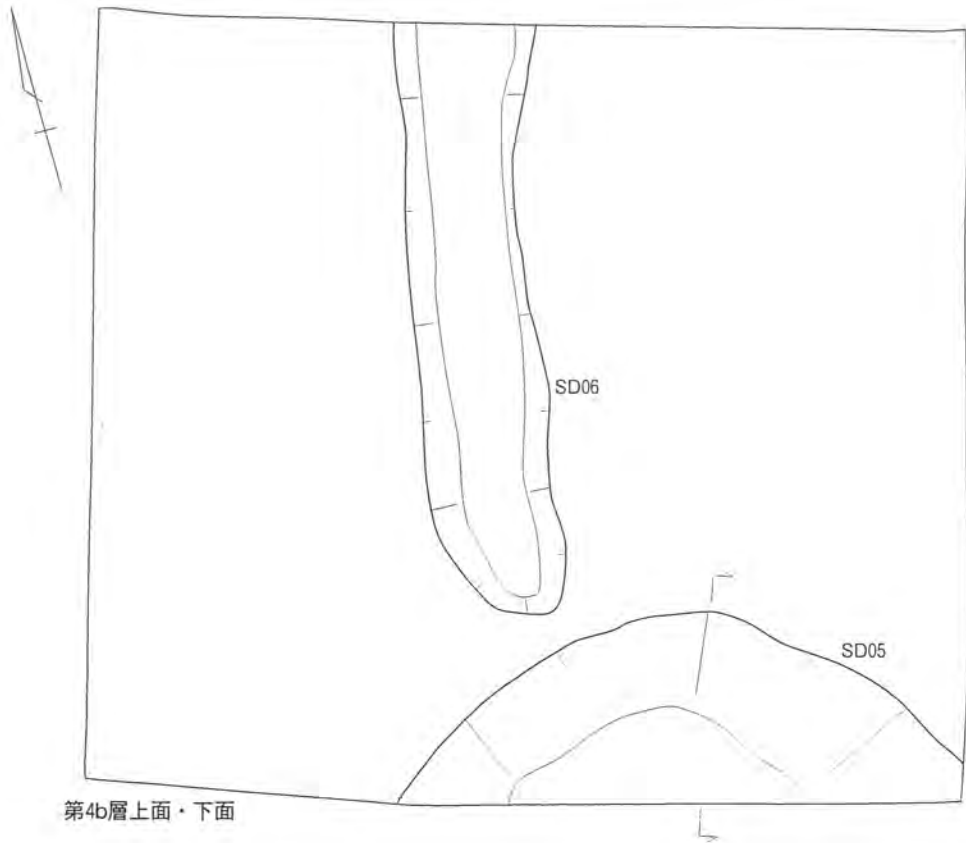
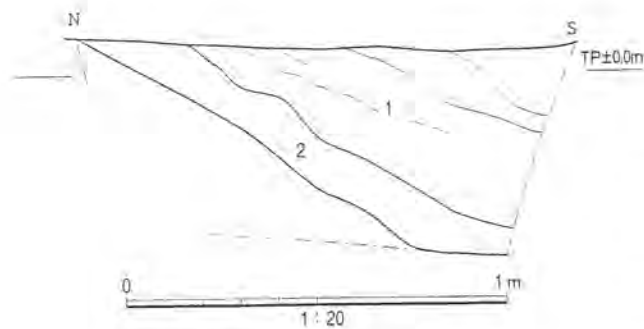


図5 遺構平面図



1: 黄褐色(10YR5/6)細粒～極粗粒砂
2: 黄褐色(2.5Y5/4)極細粒～中粒砂

図6 SD05断面図

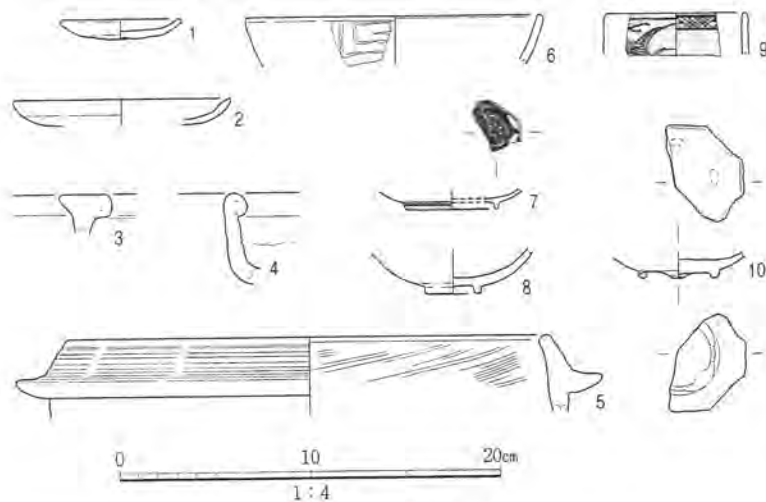


図7 遺物実測図

SD05(6)、第2層(3)、第3層(2・8・9)、第3層以下(7)、第4a層(5)、第4b層(1・10)、第5層(4)

は東西方向に延びている。SR01は幅0.9m、高さ0.15m程度で、SR02～04は幅0.4m、高さ0.13m程度である。

iii) 包含層出土の遺物(図7)

第2層からは土師器、丹波焼、中国製青磁、肥前陶器、肥前磁器染付、軟質施釉陶器、京・信楽系陶器、平瓦など18世紀後半～19世紀にかけての遺物が出土している。3は丹波焼甕である。

第3層からは土師器、須恵器、丹波焼、肥前陶器、肥前磁器染付・陶胎染付・青磁、軟質施釉陶器、京・信楽系陶器など、17世紀～18世紀後半を中心とする遺物が出土している。2は土師器皿、8は京・信楽系陶器碗、9は肥前磁器染付碗である。7は第3層以下で出土した中国製青花皿である。

第4a層からは土師器皿・灯明皿、須恵器、瓦質土器、中国製青花・白磁、肥前陶器、肥前磁器染付、平瓦などが出土している。5は第4a層下面で出土した土師器羽釜で、15世紀前後のものと思われる。第4b層からは土師器、須恵器、備前焼播鉢、瓦質土器、中国製白磁、平瓦など14～16世紀代を中心とする遺物が出土した。1は土師器皿である。10は高台に挟りがある中国製白磁皿である。

第5層からは備前焼壺4が出土している。

b. 第4b層上面(図3・5～7)

SD05 調査区南端で一部を検出した遺構で、幅1.3m以上、深さ0.6m以上ある。大規模な土塿である可能性もあるが、調査区東側で行われた試掘でも同様の埋土をもつ遺構が検出されており、連続する溝と判断した。埋土は水成で、2層に細分される。埋土の第1層は黄褐色(10YR5/6)細粒～極粗

粒砂、第2層は黄褐色(2.5Y5/4)極細粒～中粒砂からなり、ともに淘汰が悪い。埋土からは土師器、須恵器、瓦質土器羽釜、備前焼播鉢、中国製青磁、丸・平瓦などが出土した。6は中国製青磁碗で、口縁部外面には雷文帯があり、15～16世紀代のものとみられる。

c. 第3層上面(図3～5)

近世の畦畔SR01～04を検出した。大畦畔SR01は南北方向、それに取付く小畦畔SR02～04

3)まとめ

今回の調査では中世から近世にかけての畦畔や溝など、耕作に係わるとみられる遺構を検出した。前述のとおり、当地域において新田の開発が本格化するのは江戸時代中期以降であるが、それ以前の状況については考古学上だけでなく、文献上でも不明な部分が少なくない。今回の調査により、耕作に係わる遺構や作土層から中国製の白磁・青磁をはじめとする中世の遺物が複数出土していることから、調査地周辺では耕作地としての土地利用が中世まで遡り、当該時期の集落が近隣に存在した可能性が強いことなどが判明した。今後、当地域における調査が進展すれば、より詳細な開発の過程や、その主体となった集落の位置などが明らかになるものと期待される。

引用・参考文献

直木孝次郎・森杉夫監修1986、『大阪府の地名』平凡社、pp.733-737

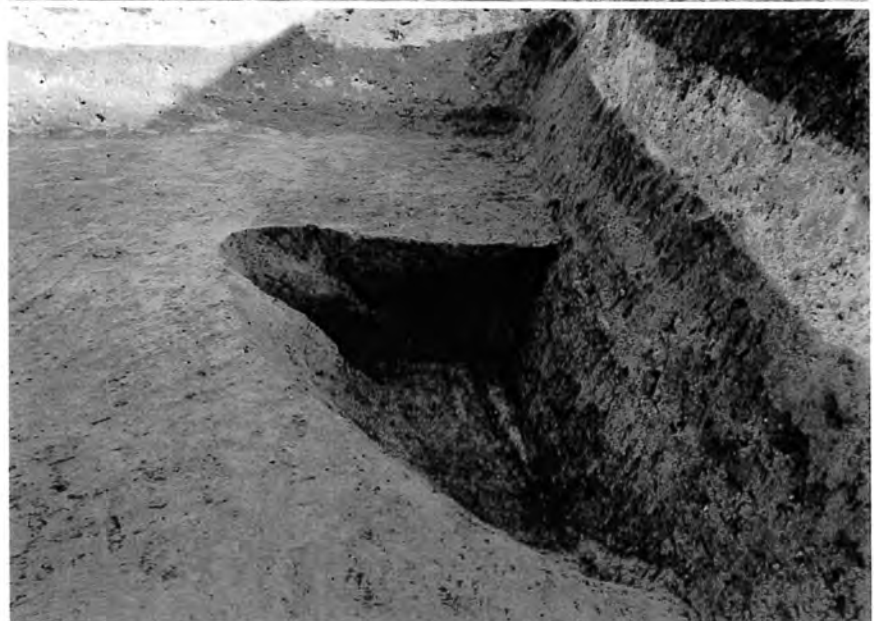
北壁地層断面
(南から)



SD06(南から)



SD05(西から)



吉 区 住 区

住吉区我孫子四丁目における建設工事に伴う
我孫子城跡伝承地発掘調査(AJ08-1)報告書

調査個所 大阪市住吉区我孫子四丁目110-2の一部
調査面積 32㎡
調査期間 平成21年2月12日～2月17日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、田中清美

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、中世の遺跡である我孫子城跡伝承地の南端部近くに位置しており、南側には旧石器～江戸時代の複合遺跡である山之内遺跡がある(図1)。

大阪市教育委員会が当該地で行った試掘調査では、現地表面下約0.6mで当地域の地山層に至り、江戸時代以前と推定される遺構が確認された。本調査は比較的浅い位置で確認された地山面の状況や遺構の実態を明らかにして、我孫子城跡伝承地の基礎的な資料を得ることを目的に実施した。

調査は2月12日に敷地の西部に調査区を設定した後、第0層の現代整地層ならびに第1層の現代作土層を重機で除去した(図2)。その結果、第7層の上面で、堀跡の可能性のあるSX11をはじめ、近代の土採り穴群SK01～07・09を検出した。各遺構の検出状況の写真を撮影した後、土採り穴の埋土の掘下げ、断面図ならびに平面図を作成したほか、SX11の調査を実施した。最後に調査区の西南部にトレンチを入れて、SX11の東西幅の確認および北・西壁の写真撮影と断面実測を行い、2月17日には機材の撤収を含めすべての調査を終えた。本報告で使用した指北記号は、座標北である図1以外はすべて磁北である。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中ではTP+○mとした。

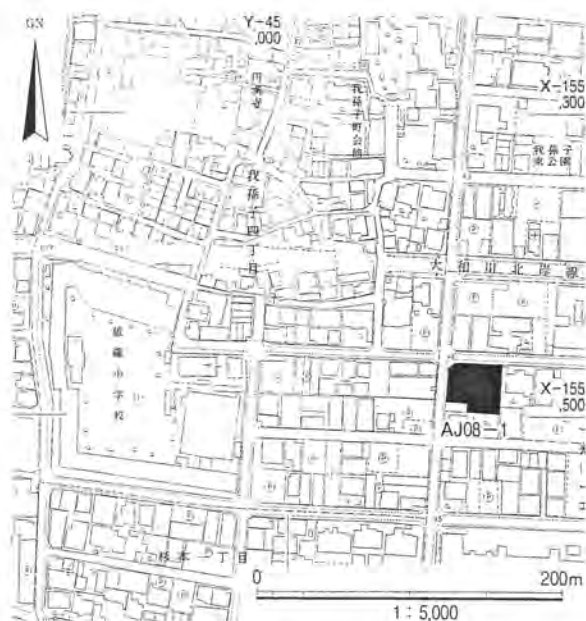


図1 調査地位置図

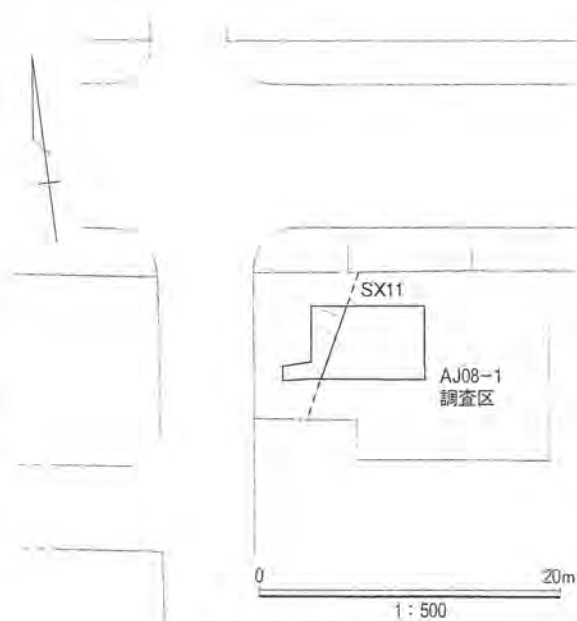


図2 調査区配置図

2) 調査の結果

i) 層序

本調査では第0層の現代整地層以下約1.5mまでの各層を第1～8層に区分した(図3・4)。

第1層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒砂層で、層厚は4～14cmある。本層は淘汰の悪い作

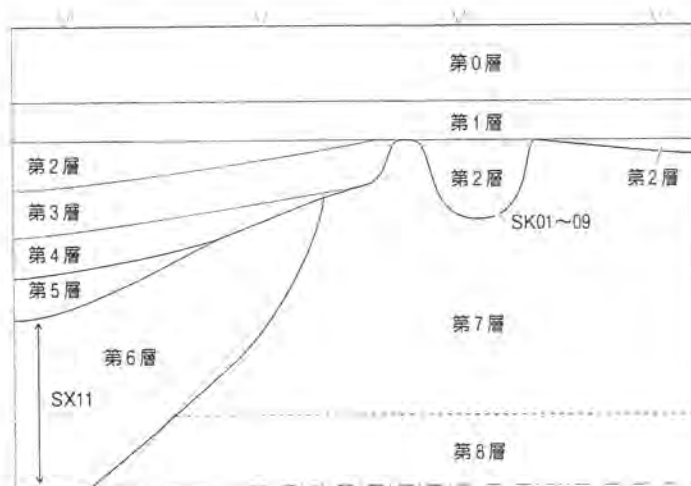


図3 層序模式図

土層で、現代の陶磁器・ガラスの細片のほか、スラグ片を含む。本層の基底面から土採り穴群を検出した。

第2層:にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質細粒砂～黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト(第7層の偽礫を多く含む)層で、層厚は4～6cmある。第1層の基底面から検出された土採り穴群の埋土は本層準に相当する。

第3層:本層は第7層の偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂質シルト層からなる層厚10～25cmの客土層である。調査区の西部で確認した。遺物は出土しなかった。

第4層:にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質シルト層で、層厚は5～20cmある。本層も調査区の西部で確認した地層で、第3層と同様の客土層である。遺物は出土しなかった。

第5層:灰褐色(7.5YR4/2)極細粒砂質シルト～にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質細粒砂層で暗色化している。本層の基底面には上部からの踏込みによって凹凸が見られる。遺物は出土しなかった。

第6層:にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト・灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土・灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂質シルトからなる上部層と、第7層の偽礫を多く含む灰黄褐色(10YR6/2)粘土質細粒砂の下部層に区分される。層厚は上部層が40cm前後、下部層は10～20cmある。本層はSX11内に堆積した地層であり、上部層は水つきの機能時堆積層で、下部層は加工時形成層である。上部層で草本科植物の遺体が見られたのみである。層準からみて近世以前の地層であろう。

第7層:極細粒砂を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルト層からなる段丘構成層である。上面の標高はTP+9.5m前後を測る。本層は粘土質シルトからシルト質細粒～粗粒砂に岩相が変化している。

第8層:にぶい黄橙色(10YR7/2)シルト質中粒～粗粒砂からなる段丘構成層である。本層はSX11の底および側面で確認した。

ii) 遺構と遺物

a: 中世の遺構(図5)

SX11 調査区の西部に位置する東西2m以上、南北4m以上を測る堀状の遺構で、深さは検出面から0.8m前後ある。埋土は第6層の上層および下層とした地層に相当し、前者は水つきで、後者は加工時形成層である。遺構の時期は、遺物が出土しなかったことから断定しがたいが、層準を考慮すると近世以前と推定される。なお、調査区の西南部に遺構の幅を確認するための東西方向のトレンチを入れたが、トレンチ内では遺構の幅に関する資料は得られなかった。また、遺構の方向は埋土の堆積状況などからみて南北方向である可能性が強い。

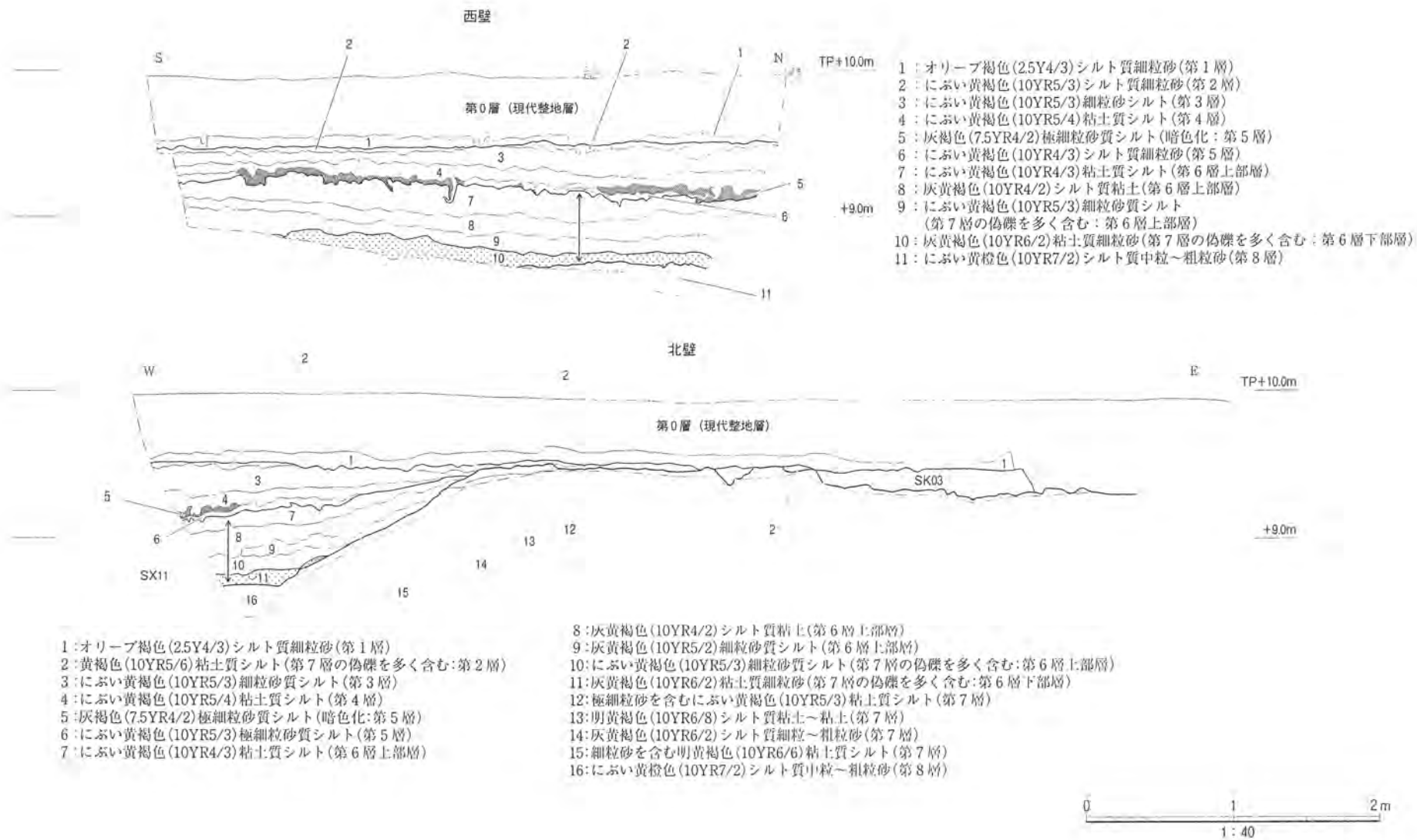


図4 西壁・北壁断面図

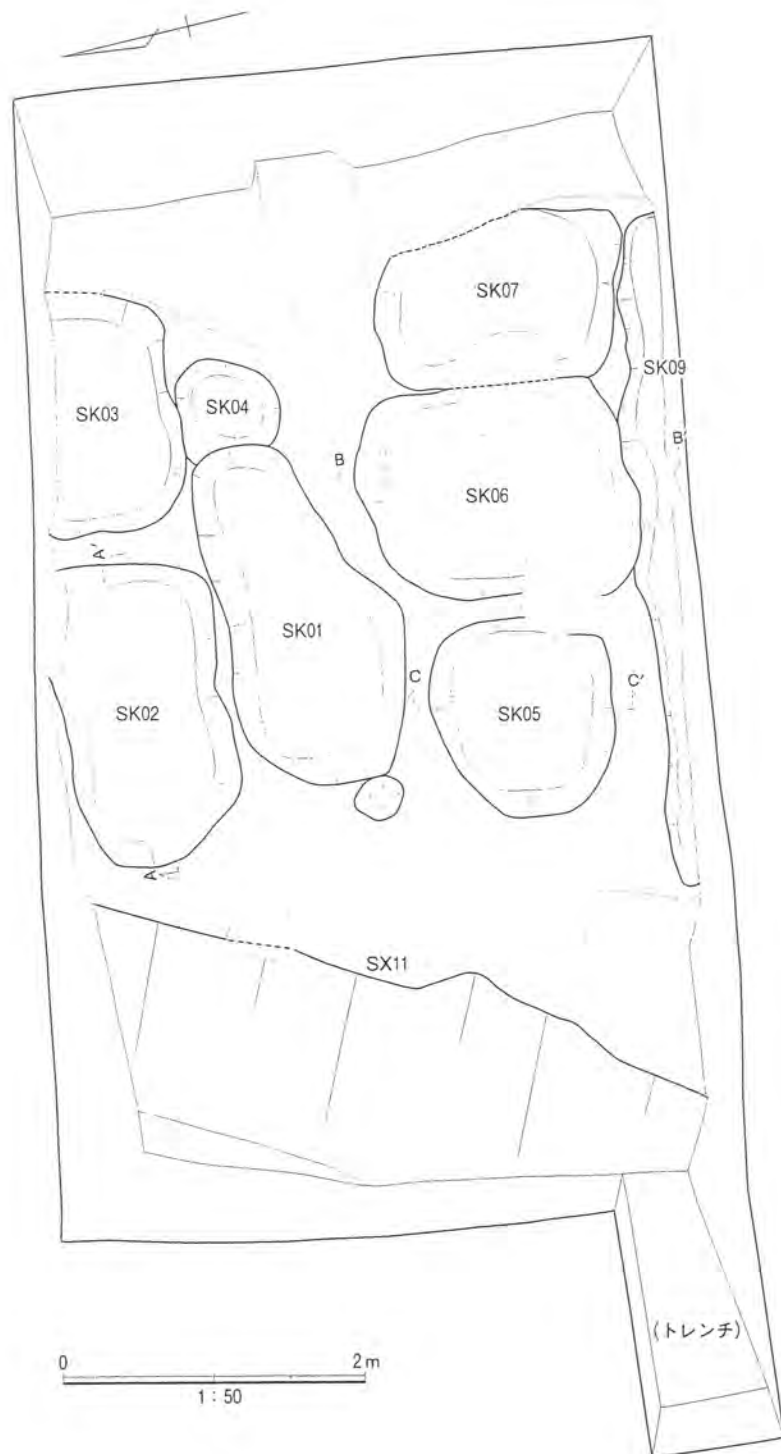


図5 遺構平面図

b: 近代の遺構(図5・6)

第1層の基底面では近代の土採り穴SK01~07・09を検出した。土採り穴の平面形は、一部の不整形なものを除き隅丸方形であった。深さは検出面から0.2~0.3m前後を測る。土採り穴間には幅0.1~0.4mの畔があり、写真図版の中程に示したように整然と並んでいた。土採り穴は中世の堀状の落込みSX11の東側に集中して検出されたが、土採り穴群は近代に浅い池になっていたSX11を避けたものとみられる。以下、おもな土採り穴について報告する。

SK02 調査個所のほぼ中央北部に位置する南北1.4m、東西2.0mで、平面形がやや不整形な土採り穴である。埋土は第1層の作土層および第7層の偽磔を多く含む黄褐色(10YR5/6)粘土質シルトである。遺物は中世の瓦器・土師器片をはじめ、内面に縦方向の粗いハケメ、器表面に粗い平行タタキが施された瓦質土器甕の体部片などが出土した。

SK03 SK02の東側に位置する平面形が隅丸方形で、東西約1.6mの土採り穴であるが、遺構の北側は調査範囲外である。深さは検出面から約0.3mある。埋土は第1層の作土層の偽磔や小磔を含むにぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂質シルトで、瓦器・土師器の細片が出土した。

SK05 SK01の南側に位置する平面形がやや不整形な土採り穴で、東西1.6m、南北1.4m、深さは検出面から約0.4mある。埋土は粗粒砂を含む黄橙色(2.5Y7/4)粘土質シルトおよび黄褐色(10YR5/6)粘土質シルトの偽磔を多く含むにぶい黄褐色(10YR6/3)粘土質シルトで、土師器の細片が出土した。

SK06 SK05の東側に位置する平面形が隅丸方形の土採り穴で、東西1.4m、南北1.8m、深さは検出面から約0.2mある。埋土は小磔を含む灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂質シルト・第7層の偽磔を含むにぶい黄橙色(10YR6/4)粘土質シルトで、土師器・瓦器の細片やスラグ片が出土した。

以上の土採り穴の時期は、埋土中に中世の土器片を含むものの、第1層の作土の偽磔を含むことや第1層の基底面の検出遺構であることなどから近代とみてよいであろう。

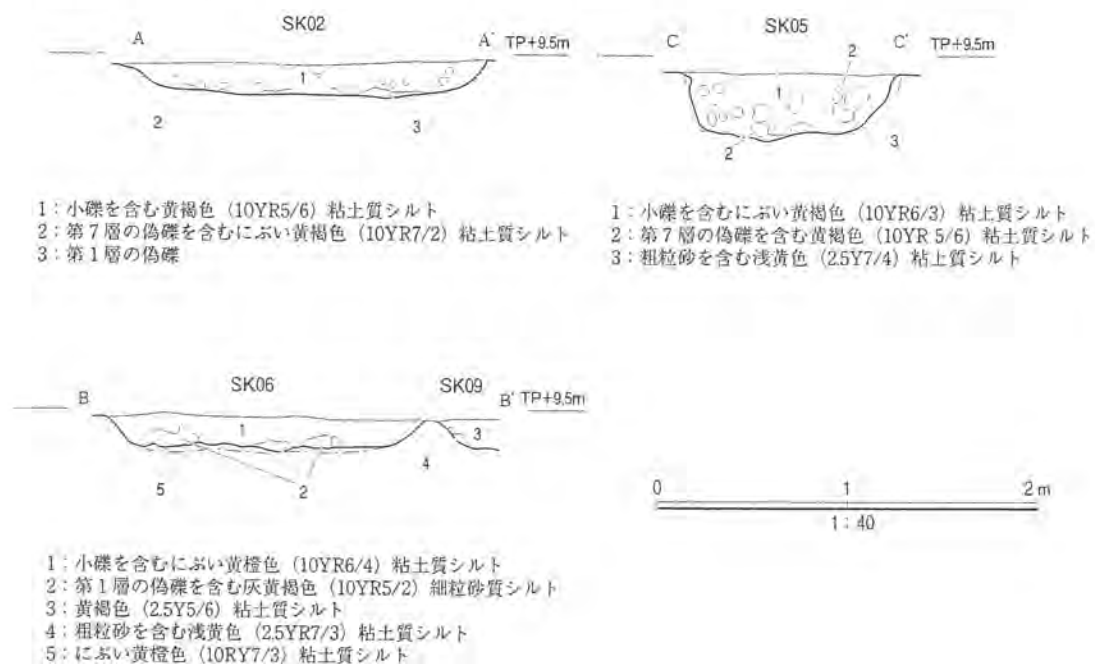


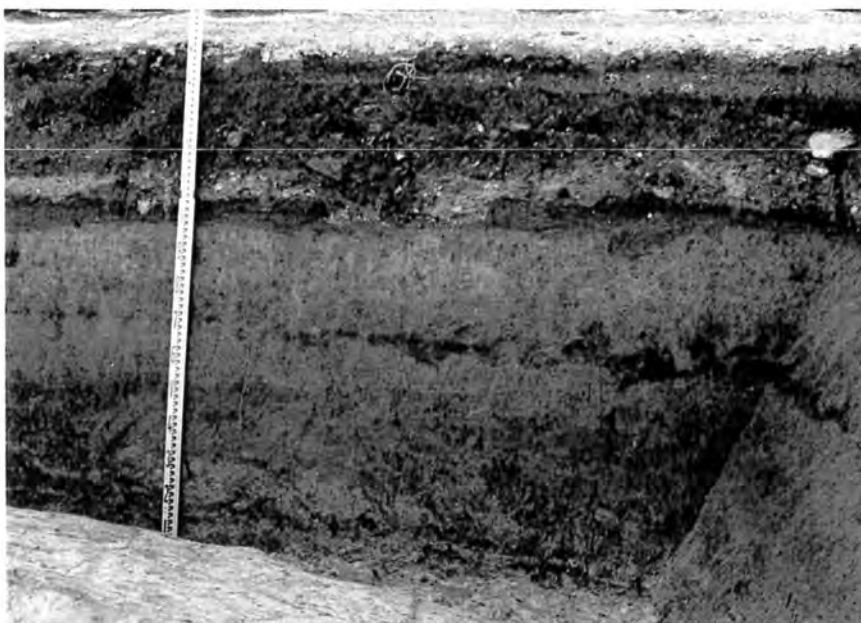
図6 土採り穴SK02・05・06・09断面図

3)まとめ

本調査は狭小な調査ではあったが、文献などから当地域に推定されている中世の我孫子城跡の堀の一部とみられる落込みSX11が検出された。当地域の住民の話では、今回検出した落込みSX11の周辺は、戦前は浅い池であったようであり、これは今回の調査結果とも基本的には矛盾しない。我孫子城跡の中心は、落込みSX11の位置や現在の道路現況図などを考慮すると調査区の西側の可能性が高くなったといえる。我孫子城跡伝承地の調査は途についたばかりであり、その実態については今後の調査資料の蓄積をまって再検討すべきであろう。

一方、近代の土採り穴群であるが、住民の方から戦前の土採りについて聞き取りを行ったところ、その光景を記憶している方もおられたが、これも調査の結果を補強することになった。近代の住吉地域には衛生陶器やレンガ・土管などを生産した窯業所があり、土採り穴群は我孫子地域も採土地の1つであったことを裏付けている。

落込みSX11
西壁断面
(東から)



土採り穴SK01~07・09、
落込みSX11検出状況
(東から)



土採り穴SK01~07・09、
落込みSX11全景
(東から)



山之内遺跡発掘調査(YM08-1)報告書

調査個所 大阪市住吉区山之内 4 丁目89、79-1外10筆
調査面積 50㎡
調査期間 平成20年7月23日～8月4日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、京嶋 覚、清水 和明

1) 調査に至る経緯と経過

山之内遺跡は上町台地南端にあって、旧石器時代から鎌倉・室町時代にわたる複合遺跡である。遺跡を東西2区に大別すると、東区では弥生時代の墓域、奈良時代の建物・井戸・溝などが見ついている。ほか、東北部の山之内元町を中心とする一帯で、鑄造に関する遺物が多量に出土し、中世鑄物師の集落として注目される。また、東南部の浅香周辺では後期旧石器～縄文時代の火山灰層準が複数検出され、少量ながら出土した石器遺物との対応関係が確認されている。

一方、西区の山之内三・四丁目一帯は、弥生時代の居住地・墓地であり、また古墳～奈良時代の居住地が広がっている。この付近では、大阪市営住宅の建替え工事に伴って1980年代初頭から調査が進展し、旧市営住宅の敷地に対してほぼ全面的な発掘調査が繰返されてきた(図1)。その結果、弥生時代では前期(畿内I様式新段階)以降の竪穴建物を推定も含めて50棟弱、方形周溝墓20基以上、古墳～奈良時代では古墳時代中・後期の竪穴建物8棟、古墳～奈良時代の掘立柱建物100棟弱などをはじめとする数多くの遺構が確認され、大阪市内でも有数の成果が特筆される遺跡である[大阪市文化財協会1998・1999]。

今回、市営住宅7・8号棟にエレベーターを新設するに当り、7号棟ではかつて当該地内の調査が実施されていないこと、また8号棟ではかつての調査区(YM86-42次)の外に設置されることから、従前の成果に鑑みて、付近に遺構の存在が予測されるため調査を実施することになった。

調査は7月23日から開始し、8号棟は南北2箇所(1・2区)を、7号棟では東西3箇所(3～5区)を設定した(図2)。1・2区から調査を進め、現代整地層および攪乱を重機にて除去した後に、1区では現代整地層直下の地山層上面で古墳時代の溝を確認し、記録を作成した後の7月25日に両区を埋戻した。

戻した。

4・5区は7月28日から調査を開始し、進入路に当たる3区のみ7月31日から重機にて現代の整地層を掘削し、古代以降の遺構・遺物の検出と記録作成を行った。8月4日にすべての調査を終了し、撤収した。

なお、本報告に掲載した図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP+〇mと表記した。本文で用いた示北記号は図1が座標北、その他は磁北である。図2は、大阪市道路現況図(1/2,500)を基礎として、これまでの調査成果と、本調査で作成した現状の街区図を合成して作図した。

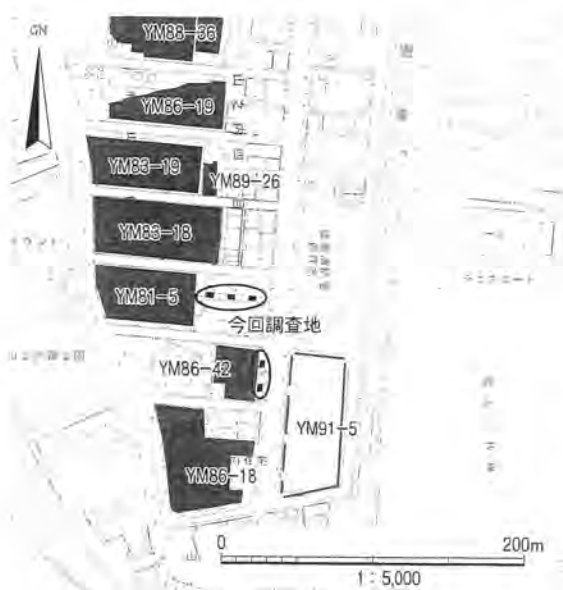


図1 調査地位置図



図2 調査区の位置と周辺での調査結果

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

1～5区のうち、2・5区で古代または弥生時代に遡る可能性のある遺物包含層が部分的に残っていたほか、3・4区で近現代の作土および近世に遡るとみられる土採穴の埋土を確認した。

第1層：高層型の市営住宅建設に伴う現代の整地層および旧市営住宅期の表土である。

第2層：炭化物を含む暗褐色(10YR3/3)砂質シルト層で、近現代作土である。

第3層：褐色(10YR4/4)中粒～粗粒砂質シルト層でマンガン斑が顕著に認められる。近世の土採穴の埋土である。

第4層：地山層の偽礫を含む灰褐色(7.5YR4/2)細粒砂質シルト層で、1区SD01の埋土である。

第5層：暗褐色(10YR3/4)礫混り粗粒砂質シルト層で、5区のSD02は本層内から掘りこまれた遺構である。

第6層：黄褐色(10YR5/8)礫混り細粒砂質シルト層で、2区の一部にしか残っていない。層中からは時期不詳の弥生土器細片のみが少量出土したため、当該期の遺物包含層の可能性はある。

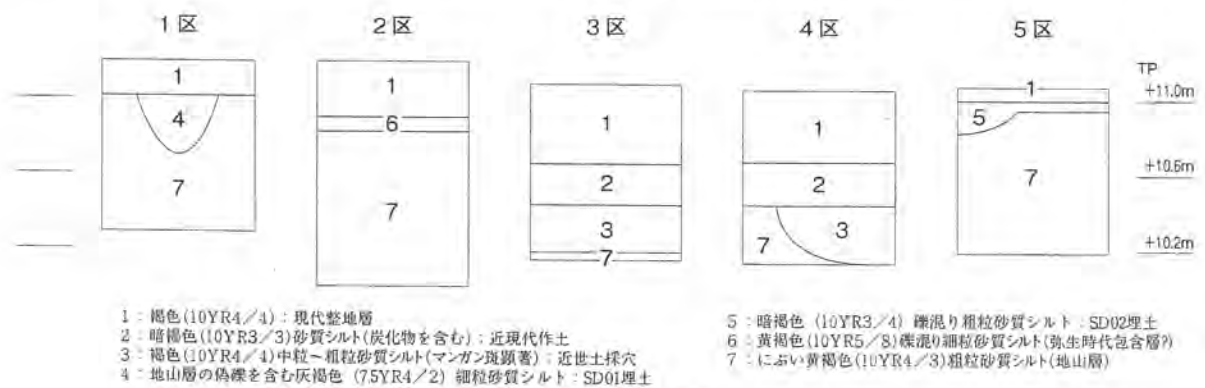


図3 調査区層序模式図

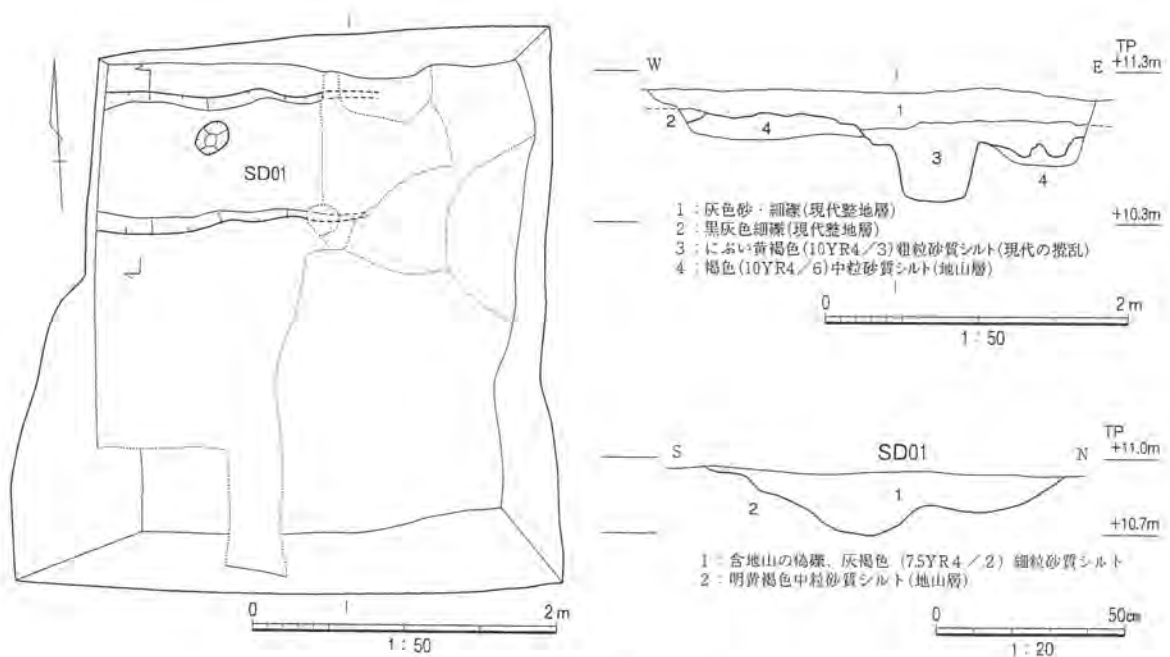


図4 1区平面・断面図

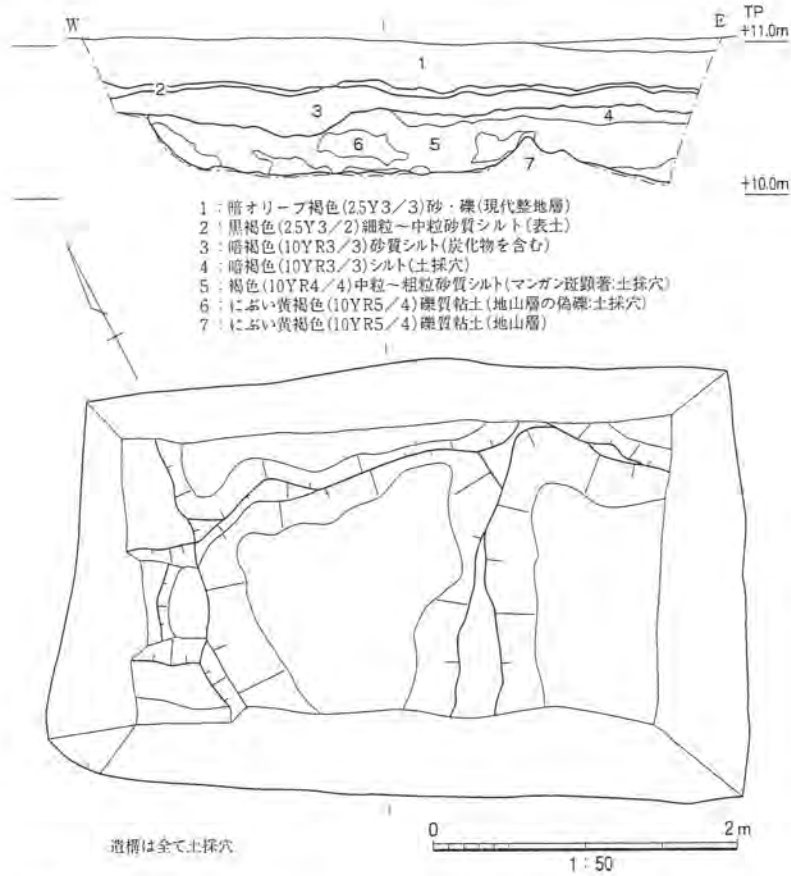


図5 4区平面・断面図

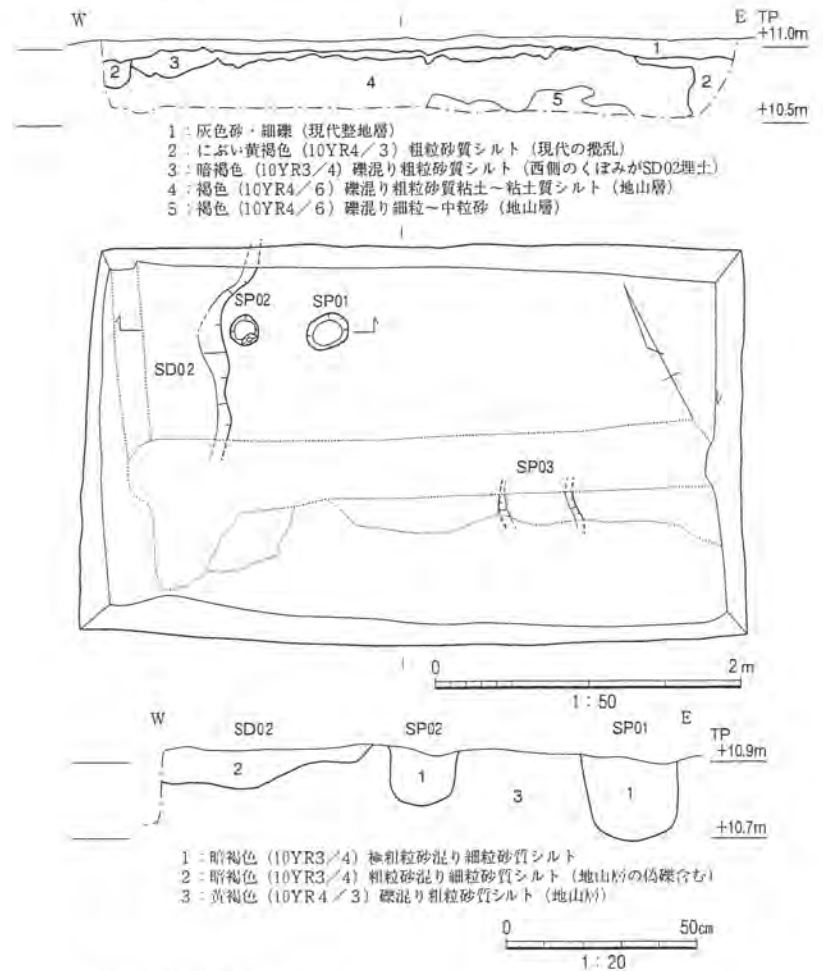


図6 5区平面・断面図

第7層：にぶい黄褐色(10YR 4/3)粗粒砂質シルト層で中位段丘構成層に当る地山層である。3・4区では粘土～粘土質シルトになり、近世に土採りの対象になっている。

ii) 遺構と遺物(図4～6)

古代以前に遡る遺構は1区のSD01と5区のSD02であり、ほかに5区のSP01～03がその可能性がある。

SD01は1区の西北部で見つかったほぼ東西方向の溝である(図4)。幅は0.95m、深さは0.15mで、東側は攪乱によって壊されている。古墳時代後期の土師器・須恵器杯身の細片が少量出土した。西に接するYM86-42次のSD04と位置が一致するためその東側延長部分と考えられ、出土遺物の時期も整合する。

SD02は5区の西北部で見つかった(図6)。遺構の東側肩のみが検出されたものであり、溝ではない可能性も考えられる。埋土から古代の須恵器杯B底部細片が出土している。

SP01～03は5区で見つかった。SP03は攪乱によって南北を壊され、全体の形状や大きさは不明であるため、小穴ではない可能性もある。SP01・02は直径0.15mおよび0.25m、深さ0.15m、0.20mの小穴で、どちらも埋土は暗褐色極粗粒砂混り細粒砂質シルトである。柱痕跡は認められなかった。出土遺物はなく時期は不詳であるが、西に近接するYM86-42次で検出されたSA01と埋土の特徴が一致することから、近い時期の建物や柵列を構成した柱の可能性も考えられる。SA01は柱穴の掘形が0.12m～0.18mで、ほかの古墳～奈良時代の掘立柱建物に比べ細いため建物を囲む柵列とされたが、同様の方位を示す建物群の時期から7世紀中～後葉の時期が推測されている。SP01・02の時期を考える材料として呈示しておく。

また、詳細な時期は不明であるが、3・4区からは粘土を採掘したと推定される土採穴が見つかった(図5)。4区の西端で土採穴の肩が検出され、西側の5区や、南側のYM81-5次では土採穴が存在しなかったことから、採掘された場所は4区から東側に広がっていると考えられよう。土採穴からは時期を判別可能な遺物が出土していないが、上位が近現代の作土であるため、概ね近世の時期を想定しておく。

3) まとめ

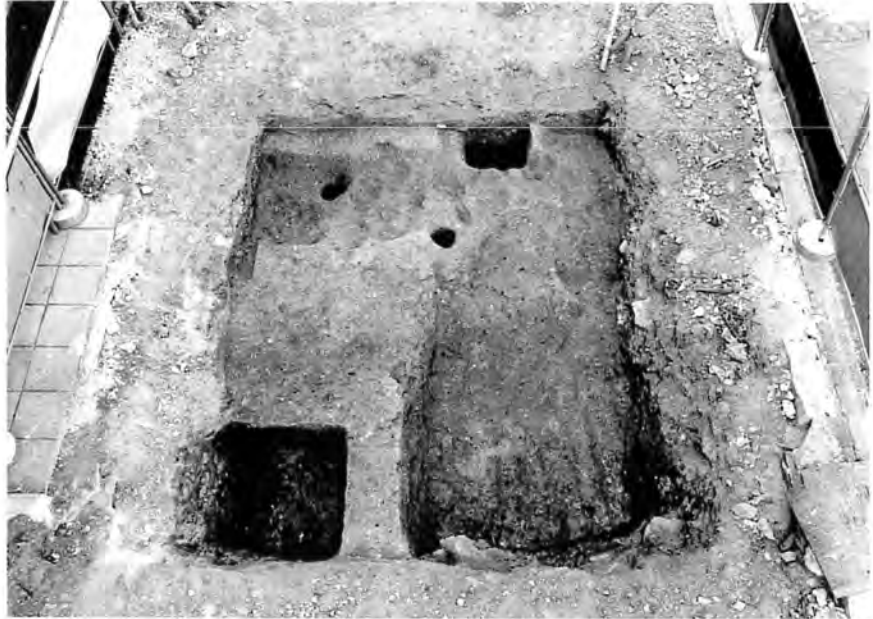
小規模な面積の調査であったが、5箇所にわたる調査区から古墳時代や古代の溝・小穴を新たに確認することができた。かつて、高層型市営住宅建設に先立って大規模な調査が行われたものの、建物範囲以外などに未調査部分は残されており、新たな遺構が発見されることが明らかとなった。また、従来明らかにされていなかった粘土採掘が近世に一带で行われていたと考えられることなど、新たな知見も加えることができた。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1998、『山之内遺跡発掘調査報告』I

大阪市文化財協会1999、『山之内遺跡発掘調査報告』II

第1区完掘状況
(南から)



第5区完掘状況
(東から)



第4区完掘状況
(東から)



有限会社ムカイによる建設工事に伴う
山之内遺跡発掘調査(YM08-5)報告書

調査箇所	大阪市住吉区山之内3丁目103-4
調査面積	42㎡
調査期間	平成20年11月28日～12月1日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	文化財研究部次長 南 秀雄、岡村勝行

1) 調査に至る経緯と経過

山之内遺跡は、旧石器時代から近世にかけての集落遺跡である。調査地はJR阪和線杉本町駅の北約120mにあり、遺跡の中央部に位置する(図1)。東方の山之内元町・杉本2丁目では、14~17世紀にかけての鑄造関連の遺構や遺物が見つかっており(YM87-31・90-27・91-8次調査)、この時代に活躍した「河内鑄物師」の本拠地のひとつである可能性が指摘されている[大阪市文化財協会1998、2004]。また、南西約180mのYM91-11次調査では中世の遺物とともに7世紀代の遺物、YM81-3次調査では6世紀後半~7世紀前半の集落跡が発見されている。

調査に先立ち行われた試掘調査で、敷地西側の現地表下約0.9mに中世以前と考えられる遺物包含層が確認された。このため、大阪市教育委員会と事業者との協議の結果、本調査を行うことになった。調査区は東西6.0m、南北7.0mに設定した(図2)。地表下約0.8mの現代盛土層および近世作土層までを予め業者に重機で掘下げてもらい、11月28日に調査に入った。包含層や遺構を人力で掘進め、随時、図面・写真による記録に努めた。12月1日に器材撤収を含むすべての作業を終了した。

なお、本報告で示す水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP+○m」と記した。方位の座標北は、現地で作成した調査区平面図を、「大阪市道路現況平面図」(1:500)に重ね合わせ、設定したものである。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

以下のとおり、現代盛土層以下、現地表下1.3mまでを第1~7層に区分した(図3・4)。

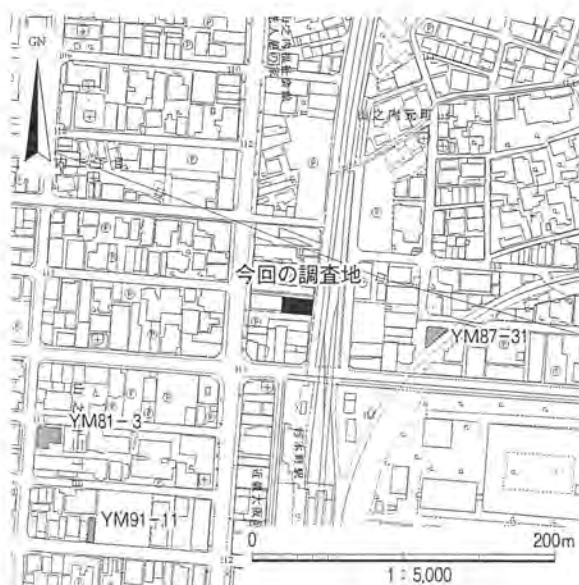


図1 調査地の位置

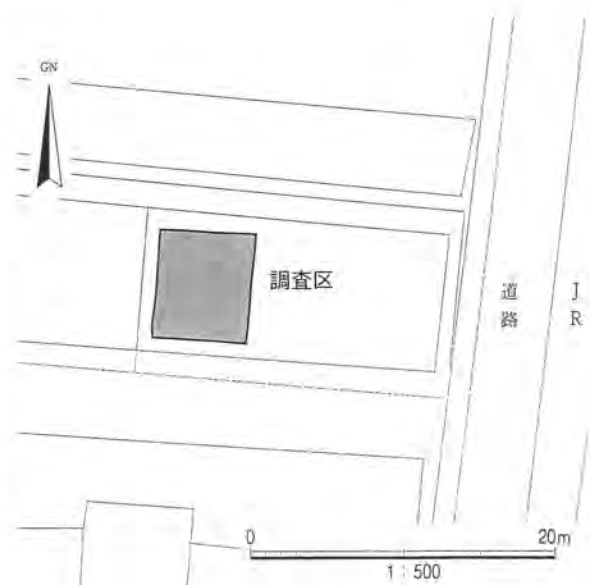


図2 調査区配置図

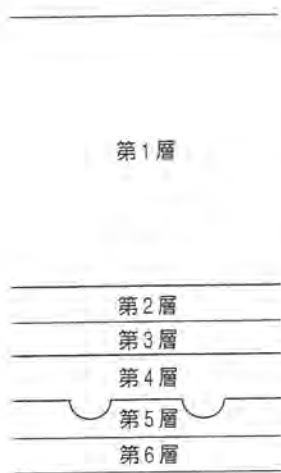


図3 地層と遺構の関係図

第1層：現代盛土層である。層厚は約70cmである。

第2層：オリーブ黒色(5Y3/2)粘土質シルト層である。層厚は約10cmである。近世以降の耕作土層である。

第3層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒砂質シルト層である。層厚は約10cmである。第2層同様、近世以降の耕作土層である。

第4層：黒褐色(2.5Y3/1)中粒砂質シルト層である。層厚は約10cmで、青磁、瓦質土器を含み、中世後期の遺物包含層である。下面で検出される鋤溝の埋土でもある。

第5層：にぶい黄橙色(10YR6/3)粗粒砂質粘土層である。層厚は約20cmで、地山層である。

第6層：灰褐色(10YR5/2)礫質極粗粒砂層である。層厚は20cm以上で、地山層である。

地山層である。

ii) 遺構と遺物(図4・5)

遺構は鋤溝と杭跡であり、すべて第5層上で検出した。地山層上面は調査区南西から北東へ緩やかに下がっており、鋤溝はその傾斜に並行する東西方向の一群と、直交する南北方向の一群がある。溝の幅は、5~40cm、深さは1~10cm、溝間の幅は10~20cmであった。南北方向の鋤溝群の中央西寄りには、大型動物の足跡と想定される、径5~15cmの小穴が集中して検出された。杭跡は3箇所を確認できた。いずれも径約5cm、深さ約10cmであった。

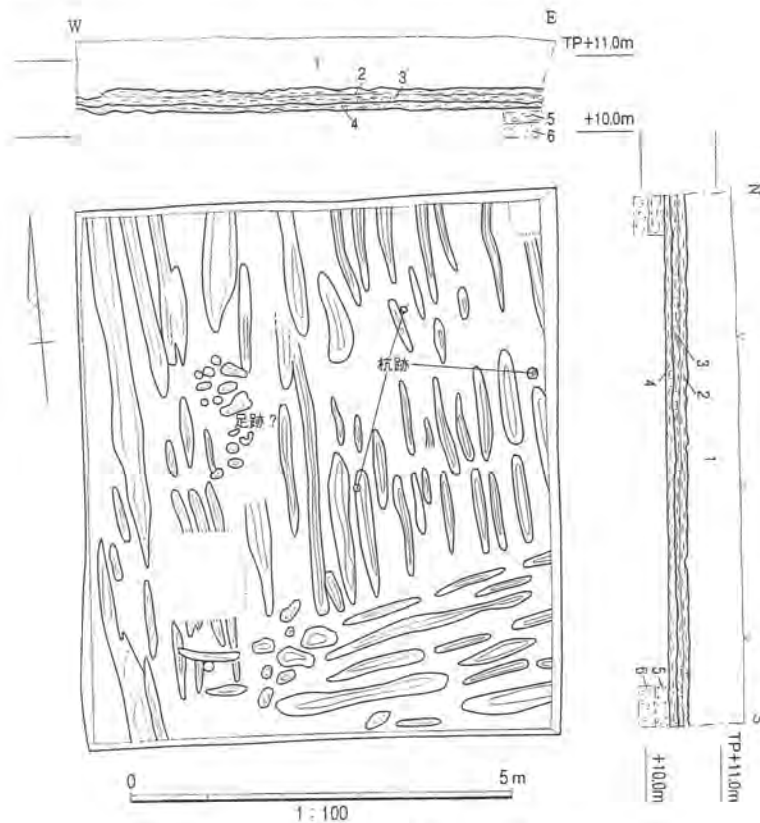


図4 調査区平面・断面図

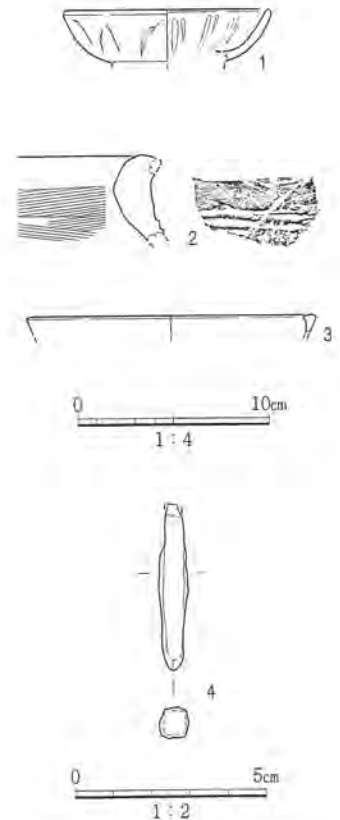


図5 第4層出土遺物実測図

遺物は第4層、鋤溝から中世土器(青磁皿1点、瓦質土器約50点)と金属製品2点、鉾滓数点が出土した。土器は小さな破片が多く、図示できたのは2点のみである。1は龍泉窯系青磁皿である。内外面に蓮弁文を描き、口径は10.6cmに復元できる。13世紀代に属するものと思われる。2は瓦質土器甕の口縁部で、端部を短く外反させ、外面はタタキメが残る。14～15世紀代に属するものだろう。3は鉄製で、椀の端部と思われる。端部を肥厚させ内側に曲げる。口径は14.7cmに復元できる。4は鉄製の釘である。上部を欠失し、残存長4.4cm、幅0.8cmである。

3)まとめ

今回の調査では中世後期のこの地に耕作地が広がっていたことが判明した。また、少量であるが鉾滓が出土し、東方に広がる鑄造に関わる活動との連続性も窺われ、当該期の空間利用に重要なてがかりを与えてくれた。今後さらに周辺の調査成果を蓄積することにより、この地域の実態がより詳細に解明されるであろう。

引用・参考文献

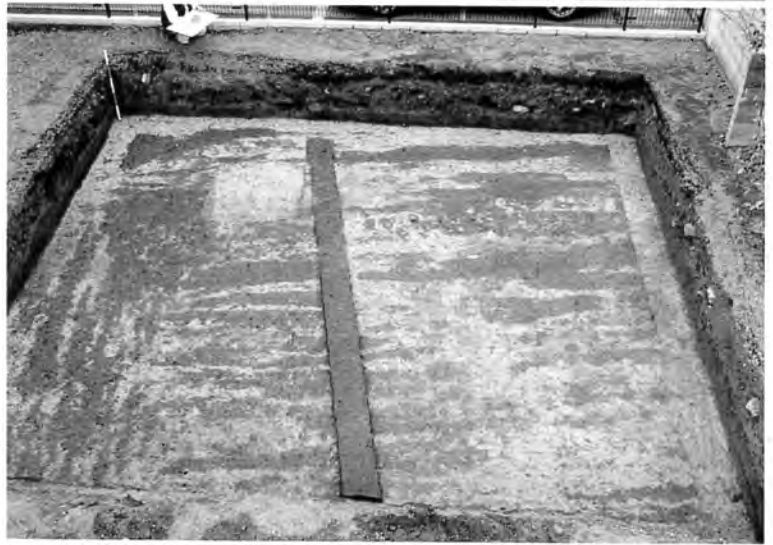
大阪市文化財協会1998、『山之内遺跡発掘調査報告』、pp.2 - 4

2004、『苅田4丁目所在遺跡発掘調査報告』、p.6

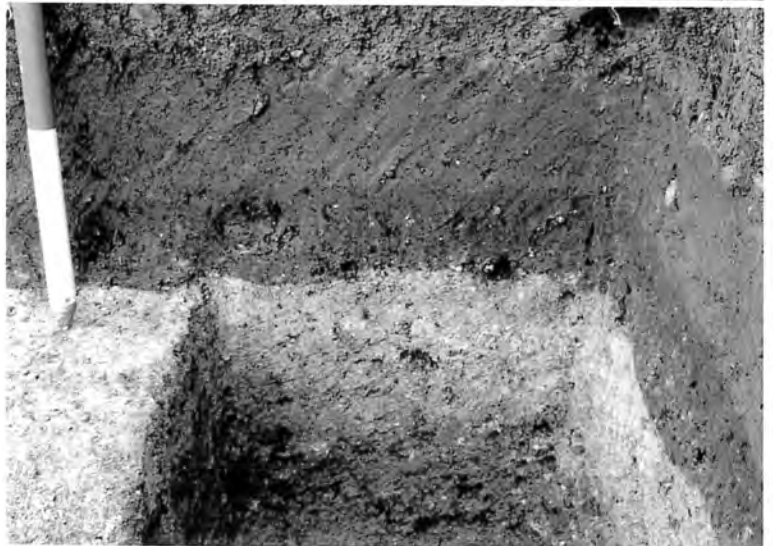
調査地周辺(南から)



鋤溝(東から)



東壁断面(西から)



X 東 住 吉 区

埋蔵文化財発掘調査(IM08-1)完了報告書

調査個所 大阪市東住吉区今林1丁目2-68
調査面積 160㎡
調査期間 平成20年12月22日～平成21年1月16日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、清水 和明

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は東住吉区今林にある大阪中央卸売市場東部市場構内の西南隅付近に位置する。一帯は、平野川が大阪平野を北西方向へ流れて形成した自然堤防上に位置し、現在でも国道25号線から北側には、その方位に平行した町割が残っている(図1)。

近隣では北西500m付近に林寺遺跡があって古代の建物跡が見つかったほか、南西500mには杭全遺跡、その西に接して桑津遺跡が位置しているものの、従来、調査地一帯では考古学的な情報に乏しく、埋蔵文化財包蔵地として認識されていなかった。

しかしながら、本件の建設工事に先立つ大阪市教育委員会の試掘調査の結果、現代の整地層以下に近世や中世の地層が良好に堆積していることが確認された。そこで、一帯における中世以前の実態を明らかにすることをおもな目的として調査を実施した。

調査は平成20年12月22日に開始した。重機掘削は後述する第3B層すなわち中世の作土直上まで行い、以下を人力で掘削して遺構検出と遺物の確認に努めた。場内に残土を仮置きする関係で、調査は敷地の西側から開始して平成21年1月10日に埋戻した後に、続けてその東側を重機掘削した。それぞれを西区、東区とした(図2)。

第3B層の上面および下面で遺構精査を行い、以下は重機および人力による深掘りトレンチ内で、地層断面の観察を主体とする調査を行った。

1月16日に基準点測量を行った後に東区を埋戻し、同日に機材類の撤収を含め現地におけるすべての作業を完了した。



図1 調査地位置図

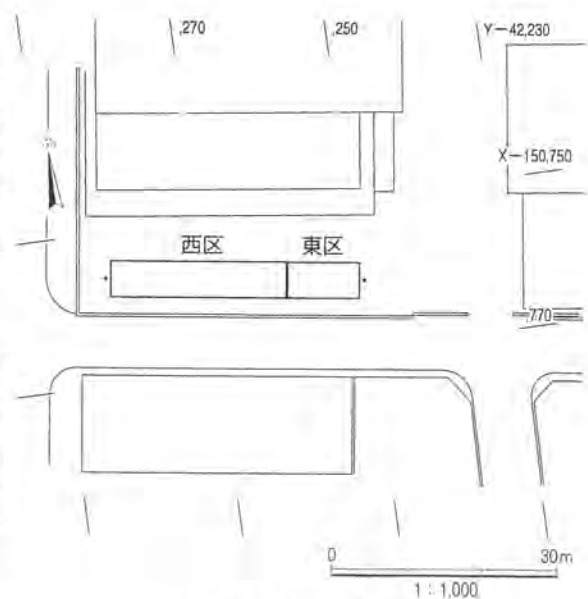


図2 調査区位置図

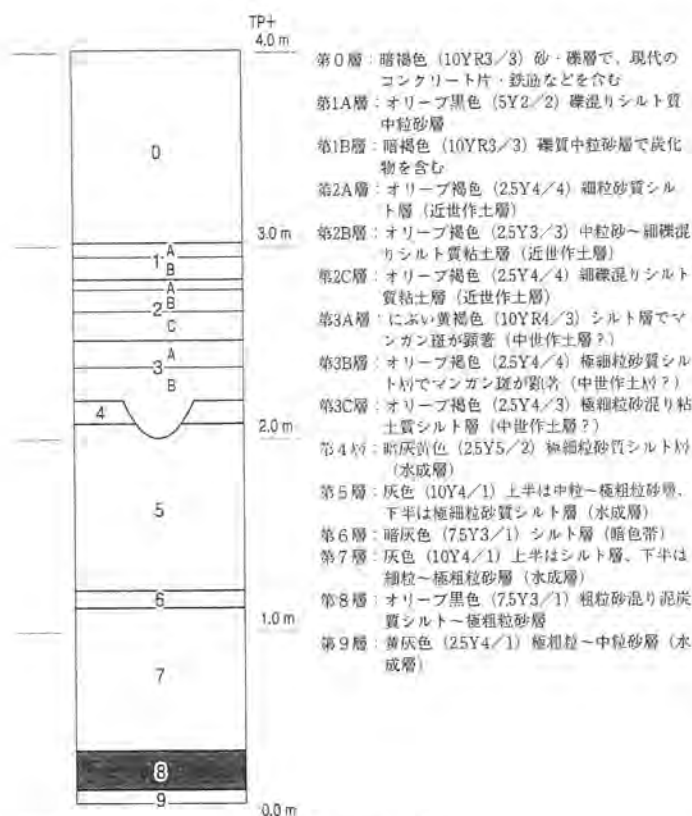


図3 層序模式図

2) 調査の結果

i) 層序(図2)

湧水の影響で西区では第7層までしか確認することができなかった。そのため、東区の地層で確認した結果を記す。

第0層：暗褐色(10YR3/3)砂・礫層で、現代のコンクリート片・鉄筋などを含む。

第1A層：オリーブ黒色(5Y2/2)礫混りシルト質中粒砂層

第1B層：暗褐色(10YR3/3)礫質中粒砂層(炭化物を含む)

第2層は出土遺物から近世の作土層である。

第2A層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルト層

第2B層：オリーブ褐色(2.5Y3/3)中

粒砂～細礫混りシルト質粘土層

第2C層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細礫混りシルト質粘土層

第3層は中世の作土層と考えられる。

第3A層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト層(マンガン斑が顕著)

第3B層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)極細粒砂質シルト層(マンガン斑が顕著)

第3C層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒砂混り粘土質シルト層

第4層：暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒砂質シルト層(水成層)

第5層：灰色(10Y4/1)上半はトラフ型ラミナが顕著な中粒砂～極粗粒砂層で、水成層である。水流は調査区の東南から西北へ進んでいる。下半は極細粒砂質シルト層である。断面観察によって、層中の複数の葉理面から踏込みが多数確認される。

第6層：暗灰色(7.5Y3/1)シルト層で、ラミナは確認でき、水つきで形成された地層である。暗色化しているが、土壌化は進んでいない。

第7層：灰色(10Y4/1)上半はシルト層を主体とし、炭化物ラミナが連続して確認できる。下半は細粒～極粗粒砂層である。水成層である。

第8層：オリーブ黒色(7.5Y3/1)粗粒砂混り泥炭質シルト～極粗粒砂層で、東区でのみ確認できた。東壁付近では泥炭質が強い。西側へ向うにつれて、第9層起源の極粗粒砂や中粒砂が偽礫状に混入し、また泥炭質が弱まる。古式土師器細片が出土し、古墳時代の遺物包含層と考えられる。

第9層：黄灰色(2.5Y4/1)極粗粒～中粒砂層(水成層)

ii) 遺構と遺物

a. 古墳時代

今回の調査で最も古い遺物は、古墳時代の古式土師器およびそれと共伴する遺物である。東区第8層内から、内面をケズリで整形した甕を含む土師器の細片が出土している。土器の表面はさほど摩耗しておらず、あまり遠くない場所に当該時期の集落が存在することを示唆している。そのほか同層準からは、杭などの加工した材が出土している。

b. 古代

第4～7層は水つきないし水成の堆積物を主体とする。第6層が暗色化していることや、地層断面の観察であるが、第5層内で複数の葉理面に踏込み痕を認めため、植物が繁茂したり陸地に近く動物が行動したりできる場所であったものが、たびたび河川氾濫で水没していた環境が想定される。第8層が古墳時代であるため、これらの層準は古代を中心とする時期に想定される。

c. 中世

西区では、第3B層の下面で小穴が見つかった。遺物は出土していないが、上層の第2層から近世の遺物が出土していることから、第3層は中世の作土層と想定される。

d. 近世

西区南壁の第2層から江戸時代の陶磁器が出土している。

3) まとめ

当該地域における初めての発掘調査であったが、古墳時代から近世に至る地層が良好に遺存していることが明らかとなった。特に古墳時代では、近隣にこれまで存在を知られていない集落が存在する可能性を示しており、今後の周辺地域での発掘調査に期待が寄せられる。また、平野川流域における地理的な環境変化と開発の歴史を明らかにする上でも、当該地域は重要な位置をしめることが明らかとなった。

西区第3b層下面
の状況
(西から)



西区SP301
検出状況
(北西から)



東区北・東壁地層
堆積状況
(南西から)



XI 平 野 区

埋蔵文化財発掘調査(NG08-5)報告書

調査箇所	大阪市平野区長吉長原東2丁目地内
調査面積	50㎡
調査期間	平成21年2月25日～3月6日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	文化財研究部次長 南 秀雄、松本啓子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大阪市南部の平野区に所在し、瓜破台地の東側に広がる長原遺跡のほぼ中央に位置している(図1)。周辺では多くの調査が行われており、おもな調査としては、図2に示したように北西約200mのNG87-35次調査とその北隣のNG86-109次調査、南東約50mの地下鉄谷町線長原駅32工区の調査、本調査地の北側に隣接する近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う城山遺跡の調査などがある[大阪市文化財協会1982・1991・1992・2005a・b、大阪文化財センター1986]。これらの調査では、後期旧石器時代や縄文時代の遺物をはじめ、弥生時代～中世の遺構や遺物が多数見つかっている。なかでも、NG87-35次調査で見つかった古墳時代中期の2基の古墳のうち、高廻り2号墳は、周濠から準構造船を精巧に象った船形埴輪(重要文化財)が出土し、国内外に知られている。

このように、このあたりは各時代に注目すべきものが多く残っている地域であり、本地点においても各時代の遺構・遺物の出土が見込まれたことから、工事に先立ち、平成21年2月25日から本調査

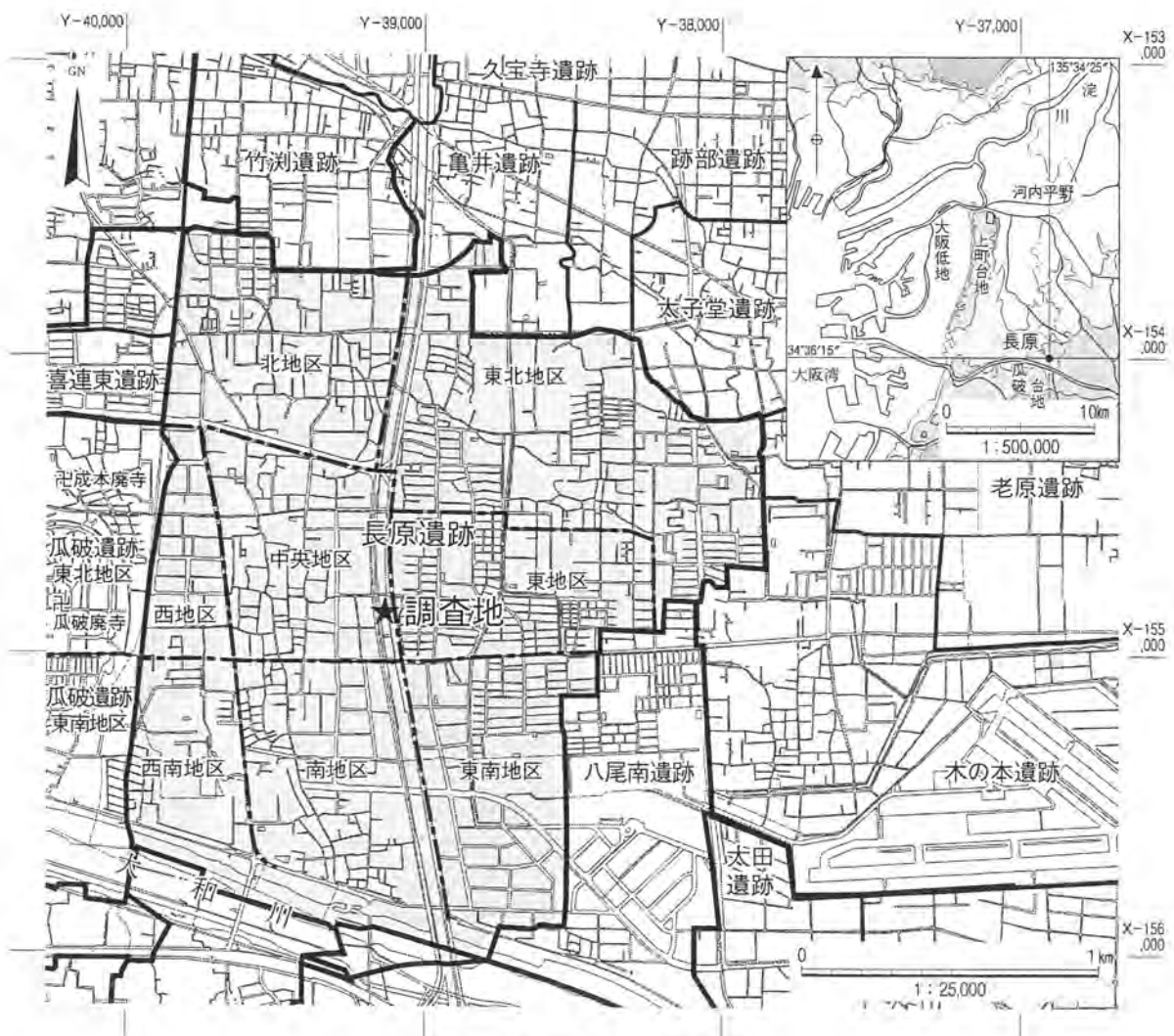


図1 長原遺跡における調査地

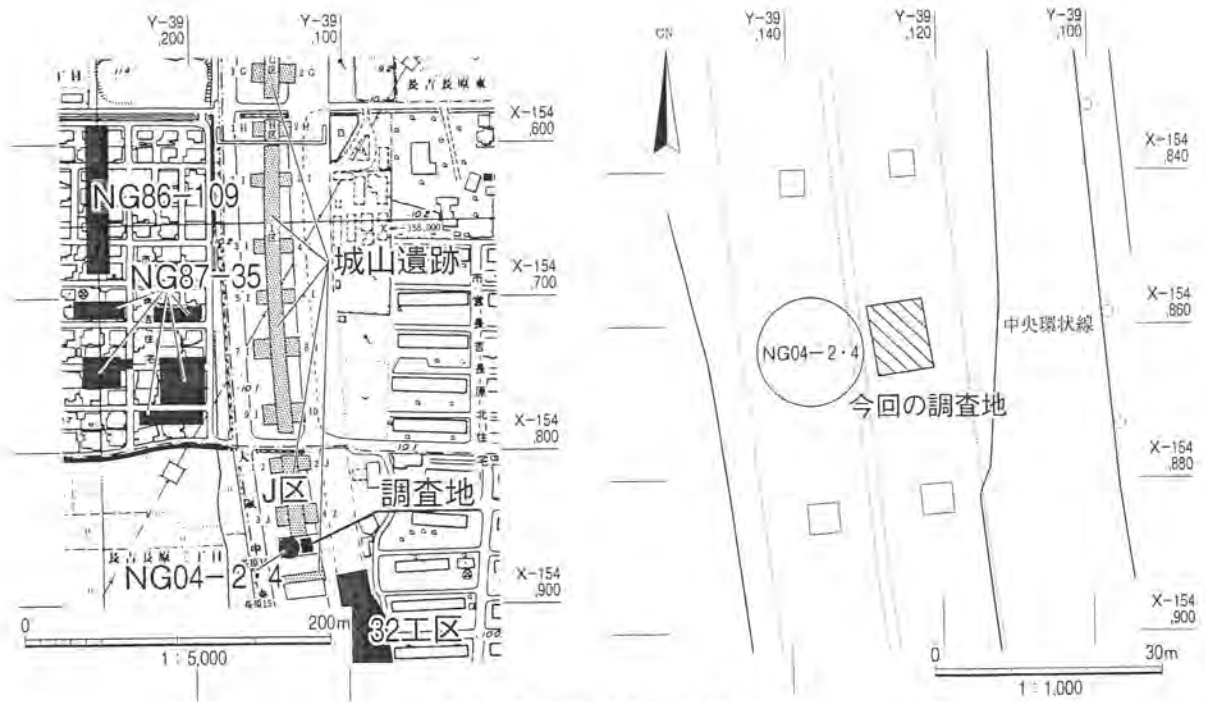


図2 周辺の調査と調査区の位置

左図は『城山(その3)』の図1[大阪文化財センター1986]に加筆

を行った。調査は西隣のNG04-4次調査を参考に、地表下0.8mまでを重機で除去し、以下2.5mまでを人力によって地層ごとに掘り下げながら、遺構と遺物の検出に努め、写真・図面などの記録をとった。3月6日に現地での調査を終え、機材類の撤収を含めたすべての作業を完了した。

なお、本調査で使用した示北記号は座標北、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+○mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4、写真1・2、図版1)

第1層はオリーブ灰色の粘土とオリーブ黒色の砂が不均衡に混った現代の客土層である。地盤改良剤が入っていて固く締まっている。調査区の南半分は現地表から1.8m、北半分は2.2mの深さまでが本層で充填されていた。

地層の堆積状況	層名	時期・遺構・遺物等
	第1層	現代客土層 オリーブ灰色粘土・オリーブ黒色砂の混合土 プラスチック・ビニール 20世紀後半以降
	第2層	古代作土層 オリーブ黄色砂混りシルト質粘土 土師器 飛鳥時代以降
	第3層	古代作土層 灰色粘土 土師器 飛鳥時代以降
畦畔 足跡や乾痕など	第4層	段丘構成層 浅黄色粘土質シルト～シルト質粘土 後期旧石器時代以前
	第5層	段丘構成層 灰オリーブ色粘土質シルト
乾痕顕著	第6層	段丘構成層 明オリーブ灰色シルト質粘土～中粒砂
	第7層	段丘構成層 灰色粘土・シルト混り砂質礫

図3 地層と遺構の関係

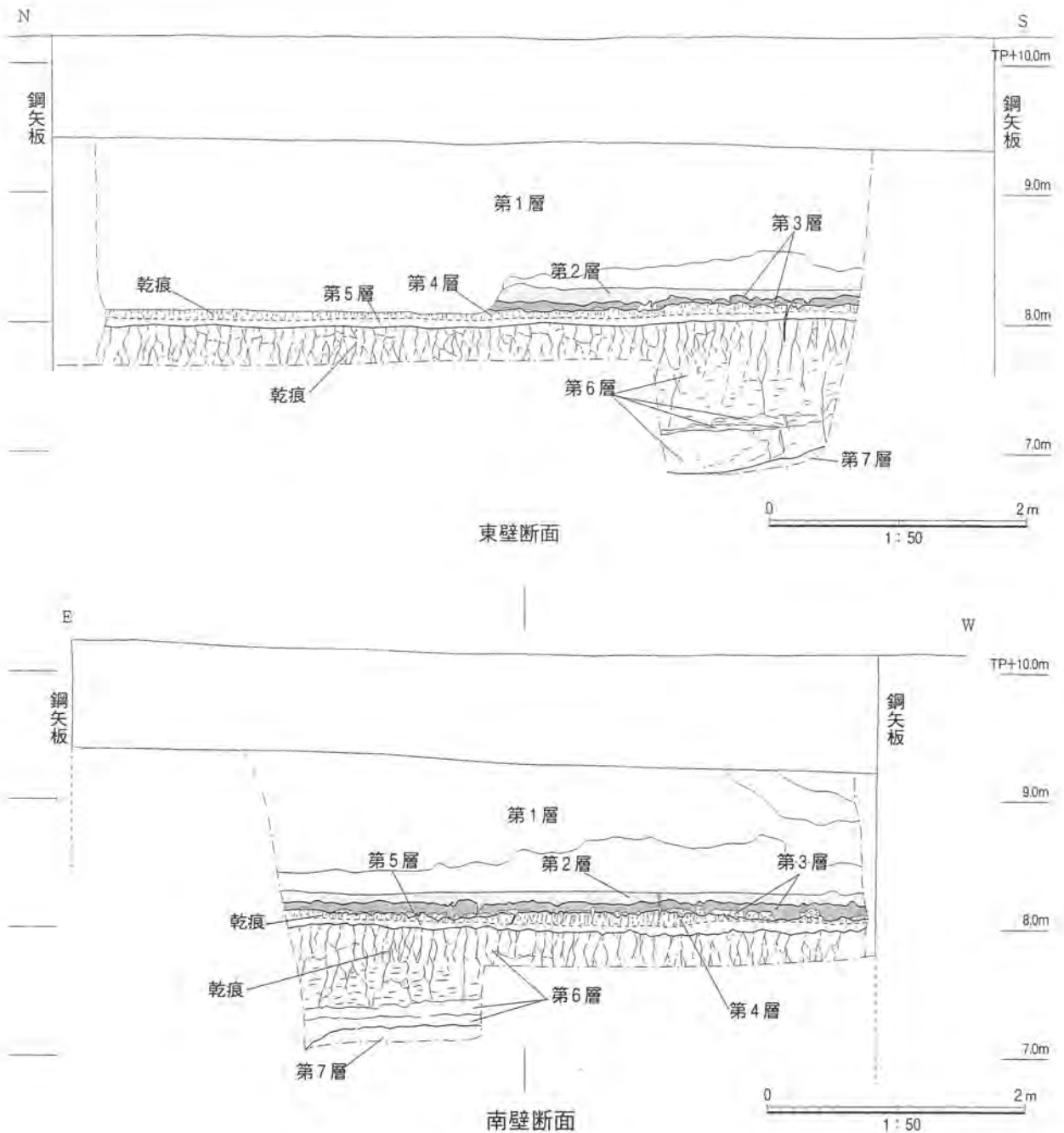


図4 地層断面図

第2層はオリーブ黄色砂混りシルト質粘土層で、全体的に見れば水平に堆積しているが、底面は細かい凹凸がある。最大層厚は15cmである。土師器の皿や羽釜の図化できないほどの小さな破片数個が出土した。飛鳥時代以降の水田の作土層である。

第3層は灰色粘土層で、水田の作土層である。最大層厚は18cmである。本層下半部はもともこの地にあった古い地層を巻き上げたとみられる暗灰黄色のシルト質粘土の偽礫が部分的に混り、第2層同様に底面に凹凸がある。出土遺物はわずかであるが、暗灰黄色のシルト質粘土の偽礫部分に比較的多く混る。飛鳥時代以降の水田の床土である。

第4層は浅黄色粘土質シルト～シルト質粘土層で、本層以下が段丘構成層である。下位の第5層と

の境界は明瞭ではないが、層厚は2～10cmである。本調査では出土遺物はないが、長原標準層序[趙哲済2001]のNG13B層に対比できる地層とみられる。これは周辺の調査では後期旧石器時代の石器が出土する地層である。本層上面から細かい乾痕が無数に入り、その割れ目の中には灰白色の極細粒砂混り粘土質シルトが詰まっていた(写真1)。本層上面で、上記第3層の水田が営まれていたときの足跡や本層を削って盛られた畦畔の基部を検出した。

第5層は6～12cmの厚さの灰オリーブ粘土質シルト層で、出土遺物はない。長原標準層序のNG13B～13C層に対比できる地層とみられ、火山灰降灰層準(NG13Bii層)に似た質感の地層である。

第6層は明オリーブ灰色シルト質粘土～中粒砂層で、上方細粒化する。本層の上端はほぼ水平で、調査区の南東隅で確認した限りで最大層厚は120cmあるが、層中のラミナから北に向かって本層の下端が深くなる。本層上面から第4層上面よりも大きな網目状の乾痕が観察された(写真2)。この乾痕は割れ目に暗灰黄色シルト質粘土が詰まっており、先端が下位にある第7層まで及ぶものもある。長原標準層序のNG14層に対比できる地層とみられる。本層からの出土遺物はないが、周辺調査では後期旧石器時代の石器が出土する層準である。

第7層は灰色粘土・シルト混りの砂質礫で、層厚は10cm以上ある。長原標準層序のNG15層に対比できる地層とみられる。本層からの出土遺物はなく、周辺の調査でもNG15層からの遺物は見つかっていない。

ii) 遺構と遺物(図5・6、図版1・2)

本調査では第4層上面で第3層下面の水田の畦畔と水田の底面に残る足跡を検出した。

畦畔は下位の地層を削って盛土するが、本調査ではすでに盛土部分が失われ、畦畔基部の第4層のみが削り残された帯状の高まりで検出された。この高まりの幅は40～70cm、高さはもっとも高い西端でも12cm(図版2下段)で、東端では削られて高さは耕作面とほとんど変わらない。調査区西半を西北から東南に配置された畦畔は調査区中央部で直角に曲がる。この曲がり角の手前で水口と考えられる50cmほど切れ目がある。また曲がり角から80cmほど南の地点から別の畦畔が南東方向へ延びている。第1層の段階で調査区北部は第4層までの地層が失われているため(図版1上段)、手がかりはないが、水口の北側にも水田があり、都合3～4枚の水田が配置されていたと推測される。

底面の足跡は偶蹄目とヒトのものが観察された。偶蹄目の足跡は長さ約7cm、幅約8cmで、牛の足



写真1 第4層上面の乾痕

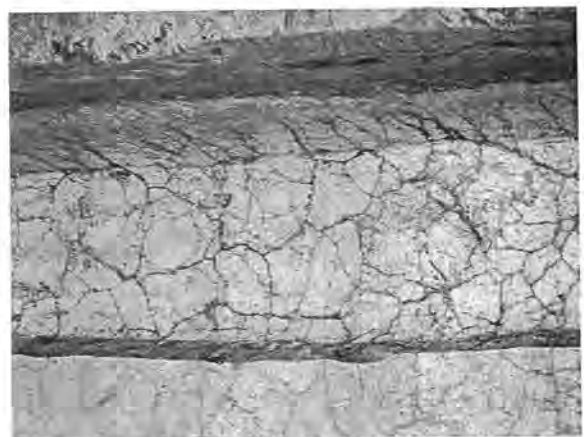


写真2 第6層上面の乾痕

跡とみられる(図版1下段・図版2中段)。

畦畔上端より低い部分は第3層の粘土で埋まり、第3層上面を検出時は畦畔の上端が顔を出していた(図版2上段)。

出土遺物は図化できないほどの小破片が多いが、図6に土師器の杯1・2を示した。1は第3層の灰色粘土、2は第3層中の暗黄灰色シルト質粘土の偽磔部分から出土した。いずれも7世紀代のもの

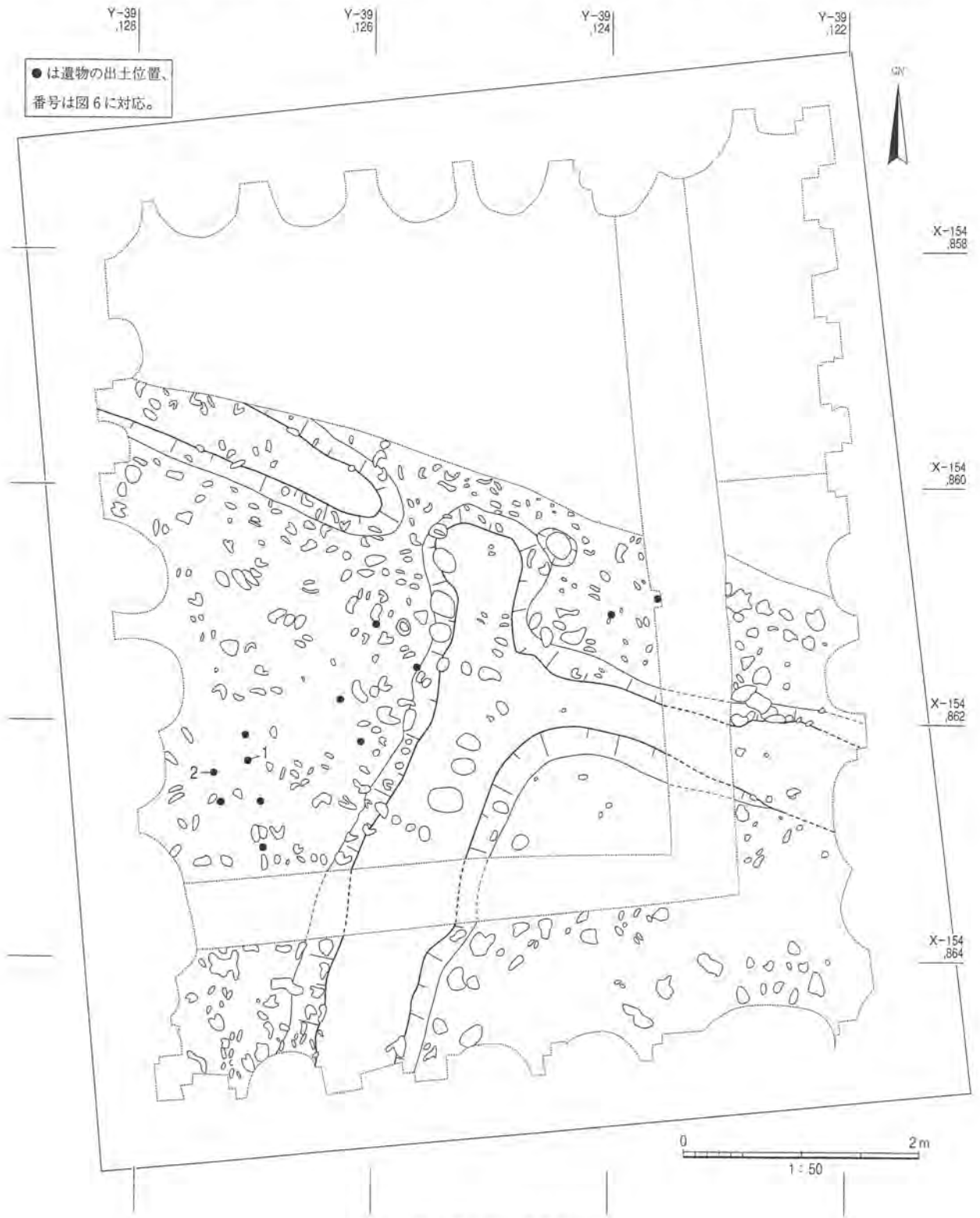


図5 第3層下面の遺構実測図

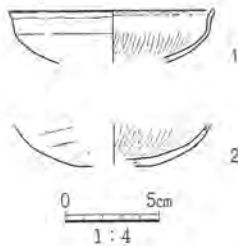


図6 出土遺物実測図

とみられる。第3層の遺物の中で時期の判別できるものは飛鳥時代のものが大半を占めるが、偽礫部分が飛鳥時代の地層を削って再堆積したものであるなら、第3層の水田は飛鳥時代が上限で、これより下る可能性もある。

第2層も水田の作土と考えられるが、本調査区内ではこれに伴う畦畔や足跡などは検出できなかった。第2層の出土遺物も第3層と同じく飛鳥時代までの土師器の破片が数片出土しているので、第3層同様に飛鳥時代以降の水田であることは間違いのないのだが、詳細な時期はわからない。

iii) 周辺調査との関係

本調査地の北に隣接する城山遺跡J区では段丘構成層が南に向かって高くなるため、本調査地に接する南端では段丘構成層の上の30cmほどの厚さに平安時代までの地層が収束して堆積し、各地層の岩相も、本調査地の第3・4層に対比できそうな地層も複数候補がある(図7)。したがって、時期の判別は慎重にならざるを得ない。



図7 城山遺跡J区の地層

[大阪文化財センター1986]より図・表を抜粋

3) まとめ

今回の調査では、飛鳥時代を上限とする水田2面を検出し、この地域の歴史の変遷を復元する手がかりを得ることができた。本調査地の周辺で検出されている飛鳥~奈良時代にかけての水田は、各面ともに水成層に覆われているため保存状態が良く、府下でも屈指の水田遺跡といえる。今後周辺部の調査が進めば長原遺跡の条里水田の成立時期の問題を含めて古代の水田の実態が明らかになるであろう。

[引用参考文献]

大阪市文化財協会1982、『長原遺跡発掘調査報告』

1991、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ

1992、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ

2005a、『寝屋川流域下水道 飛行場南増補幹線(第1工区)下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(第1期 NG04-2)報告書』

2005b、『寝屋川流域下水道 飛行場南増補幹線(第1工区)下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(第1期 NG04-4)報告書』

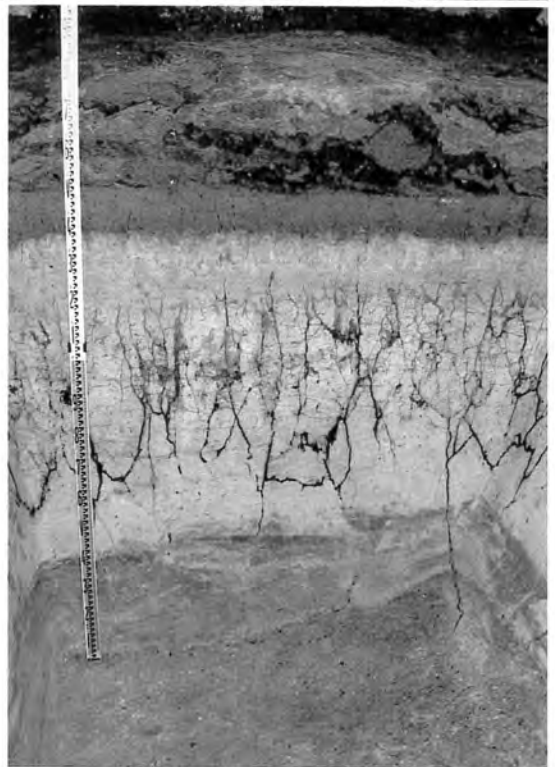
大阪文化財センター1986、『城山(その3)』

趙哲済2001、『長原遺跡の地層』: 大阪市文化財協会『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅥ, pp. 7-28

調査地全景
(第2層上面、東から)



東壁地層断面(西から)



第3層下面の偶蹄目足跡
(北から)



第3層下面の水田の
検出状況(北から)



第3層下面の水田に残る
足跡(北から)



第3層下面の水田の
畦畔(南東から)



大 阪 市 内 埋 蔵 文 化 財
包 蔵 地 発 掘 調 査 報 告 書

発行日 平成22年3月31日
発行 大 阪 市 教 育 委 員 会
(財)大 阪 市 文 化 財 協 会
編 集 大 阪 市 教 育 委 員 会 文 化 財 保 護 担 当
(大 阪 市 北 区 中 之 島 1 - 3 - 20)
印 刷 株 式 会 社 京 阪 工 技 社
